
クレヨンしんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ綱玉の示す路(ロード)

パタ百ハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンしんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ
綱玉の示す路^{ローテ}

【Nコード】

N1245L

【作者名】

パタ百ハイ

【あらすじ】

時は2003年、突然スタンド能力を身に付けた春日部の嵐を呼ぶ園児、野原しんのすけが、春日部の高校に通うスタンド使い、瀨^せがみ^{がみ}上^{がみ}除^{じよ}夜^やと出会い、仲間達と共に、時として仲間をも巻き込むハリケーンを吹き荒れさせる！
かも知れない

遅くなりましたが、現在、前半の話を修正しております

prologue

埼玉県春日部市

そこに建つ新築の二階建ての一軒家

その家の居間には、坊主頭の幼稚園児程の少年と、古い弓を持つ男

そして、ベビーベットの所で横たわる赤ん坊がいた

その赤ん坊は、胸元に『矢』が突き刺さっていたが、何事も無いようにすやすやと眠っている

男は赤ん坊に刺さっている『矢』を引き抜いた

「お……お前！」

「何だい？」

少年の言葉に反応する

「何でひまを殺した！」

「ひま？」

「オラの妹だぞ！」

「ああ……安心して、生きてるよ」

何を言っているんだこの男は、という感じの表情をする

当然だ。胸元を打ち抜かれているのだ。即死でなくとも致命傷でない訳ではない

男は少年のその疑問に、優しげな声で答える

「死んでいない理由はある、彼女には『素質』があつたからだ……『素質』の無い者はたとえ掠った程度でも死んでしまう……」

「そしつって……裸子植物の一種？」

「それはソテツ、僕の言ってるのは素質」

「閉め切った部屋」

「それは密室……本題に戻るが……この『矢』に射抜かれ生きている、それは眠っていた特別な才能が目覚めたという事……」

「特別な才能？」

「それは後に分かると思うよ……才能と言っても何か人がより出るとかそんなレベルじゃない……」常人では幾ら修業しても会得出来ない事が出来るようになる『……』というレベルの才能だ」

「オラの妹を……何故それで攻撃した？」

「本来は君を選んだ。まあついでだな……確認にもなったし」

「確認？」

「そう、確認……この才能は遺伝する……その素質の持つ者が血縁者にいれば高確率でその者にも素質がある……直系の者だと尚更だ……」

間髪を入れずに『矢』を少年に射る

少年は喉に『矢』が貫いた

少年は……戸惑っているが問題無く生きていた

男は少年を押さえ、『矢』を引き抜く

「おめでとう、君達は選ばれた……君達は今日から変わった自分に戸惑うだろう……けど安心しなさい、決して悪い変化ではない……近々また来る……それまでに自分達に身に付いた新しい能力がどんな物なのかを把握しておいてね、その能力で何しようが自由だけだ……」

「待て！こんな事をした理由を教える！」

「後できちんと教えるよ……その時は頼みを一つ聞いて貰うけど」

「頼み？」

「僕も君と同じ才能を持っている……それじゃまたね……」

窓を開け、どこかに消えた。少年はすぐに追いかけるが、既にいなかった

これが、少年、野原しんのすけと、春日部に潜む悪のスタンド使いとの戦いの幕開けだった

prologue (後書き)

取り敢えずしんちゃんをスタンド能力に目覚めさせました
この話の事実上の主人公は次の話に登場させます
お楽しみに？

瀬上除夜は普通の人？（前書き）

宣言通り、本作の事実上の主人公が登場します

瀬上除夜は普通の人の人？

夕方、放課後に当たる時間

埼玉県春日部市にある県立高校、その校門から、部活動や補習等の用の無い生徒が帰宅の為に出て行く

ある者は自転車に乗って、ある者は友達と喋りながら

何処にでも見られる、実にありきたりな光景

そのありきたりな光景を、金髪の180はありそうな身長少年は、校門に背もたれた

初めまして、俺の名前は瀬上除夜せがみじょや、今年度この学校に入学して間もない、成り立ての高校生です

こんな外見だから誤解されがちだが、俺は至つてごく普通の高校生だ
この金髪は染めているのでなく生まれつき。身長は成長期に入ってから伸びた。顔付きも日本人と違う事から、外国人の血が混じっているかも知れないが俺自身それは分からない

何故なら俺は物心ついた時から孤児院にいたからだ。院長である義

母の話だと、海外旅行に行った時死んでいた母親の乳房を吸っていたのを拾ったらしい

正直信じなかった。これは何処の本に記されている作り話だと思った
だから本当の事を知ろうと過去に何度か尋ねたが、全てはぐらかされた

勉強はそれなりに出来る方だと自負している。中学の頃は学年で二十番内には食い込んでいた。俺の頃は学年が大体百人くらいいたから強ち間違いで無いと思う。十番内に食い入る事はあんまりなかったけど

運動は球技は苦手で中学時代は陸上部に入っていたから、陸上競技は自信がある

後自信があるのは家事、特に料理

掛け持ちで調理部にも所属していたし、施設では最年長だからよく手伝っていたから自信はある。特に中華料理には友人の間には定評がある

後はキノコや山菜の類にも人よりかは詳しい方と思う

人付き合いは悪い方では無いが決して良い方でも無く、親友と呼べる存在は幼い頃からの付き合いの一人だけ。後は中学時代に複数、高校に入ってから数人程仲の良い友達が出来た

補導歴は無い

なりたい事は普通に就職して普通に家庭を持ちたい、その程度

以上、容姿と出自不明という点を除けば、性格的にも能力的にも良
くも悪くも目立たないごく普通の人間であると自分でも思う

閑話休題

放課後に入ってから十分経過し、校門から出て来る生徒も疎らにな
ってきた

何故俺がここに立っているのかというと、先程述べた親友を待つ為
である

流石に退屈になってきたので今日図書室から借りてきた手塚治虫の
『火の鳥』を鞆から取り出して読もうとしたら……

「とりゃー!」

「痛っ」

額に軽いチョップが叩き込まれた。反射的に掛け声のした方へと向
くと、学校指定の女子の制服を着た、色の薄いブラウンのショート
カットの、ルックスがそれなりに良い女が（当たり前だが）いた

その女は腕を下ろすと俺に指を差した

「瀬上君！外で立ったまま本を読んじゃ駄目でしょ！」

「最初に口でそう言え宝来！」

「大体この程度で痛いつて何？」

「口に出ただけで実際は何ともねえよ」

こいつの名前は宝来瑪瑙たからまめのう、俺のクラスメイトで中学時代からの腐れ縁、そして一年ながら生徒会の会計という肩書きを持つてる強者だ
お節介焼きと評していい程面倒見のいい奴で、中学時代から俺達を、特に俺を気にかけてくれるいい奴だ

「邪魔にならないよう場所を選んだとはいえ通学路の出入口にあたる場所で本を読もうとしたのは悪かった、だがまず口で言え、暴力は理解とは程遠いぞ」

「確かに先に手を出すのは良くない事だったけど暴力って程のもんでもないでしょーが……」

「はいはいすいませんね表現がオーバーで……それよりお前生徒会の仕事いいのかよ。仮にも役員なんだから？」

「新学期始めの暫くは仕事少ないから昼休みを返上すれば消化しきれよ」

「あっそ……ま、忙しくなった途端辞退するのは止めとけよ」

「要らん心配ありがとう……話は変わるけど瀬上君、また待つてるの？」

「まあな、もう日常に組み込まれていると言ってもいいから苦にはならない」

「おーい、除夜」

「よ」

短い茶髪（地毛）に中性的な顔立ちをした俺の頭二つ分背の低い（俺の背が日本人の平均を上回っているから低く感じるだけ）俺と同じデザインの学生服を着込んだ男が俺と宝来に声をかけた

コイツが俺の待っていた相手、沢登さわと優太ゆうた。同じく俺のクラスメイトで俺の保育園時代からの親友。何処か間が抜けていて目が離せない所はあるが、成績は学年首席で気配りが出来るので教師やクラスメイトの信頼も厚い。家は相当裕福だが、それを鼻にかけない奴でもある

「ごめん、日直の仕事手間取っちゃって」

「日直？お前昨日が当番じゃなかったか？」

「どっせ押し付けられたんでしょ？」

「えへへへ」

この様に、少し気弱で自己主張が苦手な一面もある。ほっとけない一番の理由がこれだ

「えへへじゃない！少しは自分の意思をきちんと主張しなさい！」

「そういうの何か苦手なんだよね」

「まあいい、帰るぞ」

「うん」

「ねえ、ちょっと待って瀬上君」

「何だ？」

「久し振りにウチに来て一緒に宿題やらない？」

「悪い、俺義母さんと帰ったらすぐに一緒に買い物行く約束してるんだわ。だからまた今度にしてくれ」

「それじゃ仕方無いね」

「そんじゃな」

除夜は優太を連れて早々に帰り、一人残された宝来は、カバンを持って帰宅する事にした

「はあ……」

鞆を脇に抱え、宝来は右腕の袖を捲る

二の腕の、手首と肘の中間の位置に、何かに射抜かれたような貫通している穴があった

すぐに戻して、少しばかり浮かない顔でとぼとぼ歩いた

瀬上除夜は普通の人？（後書き）

まあ少しばかり伏線みたいなの引いてみました
解消出来ればいいなと思ってます
では！

瀬上除夜は普通の人？（前書き）

除夜君のスタンドが登場します

瀬上除夜は普通の人の人？

俺は優太と別れた後、ジュースを購入する

俺の家である孤児院と俺の通っている学校は徒歩通学には少しキツいと思う程度に離れている為、すぐ帰らないといけない用事が無い限り、優太と別れた後公園で一休みするのがお約束となっている

疲れが取れたりジュースを飲み終えたらすぐに帰るが、たまに公園で遊ぶ子供にせがまれる時があり、その時は余程で無い限りは一緒に遊んでやっている

今日は公園で遊んでいる子供はいない

ジュースを飲み干すと、ベンチの裏に設置されたゴミ箱に捨てた

「じゃ帰るか……」

ベンチから腰を上げて公園から出ると、何人もの園児が通路を歩いていた。今日は集団で帰る日なのか

「あ、お兄ちゃん」

「お、お」

集団の最後尾にいた園児が俺が世話になっている施設の子なので挨拶を返し……

「ちょっと待て！」

「どうしたの？みんな注目してるよ！」

「何でお前がこの方面に歩いてる？違うだろ！全然！」

「グループが分かれる途中で飛んでいた蝶々に気を取られて声を掛けられて急いで戻ったらこのグループと間違えたんだ！分かったか！」

「貴様の注意力不足が招いた事態だというのはよく分かったよ！」

引率の眼鏡を掛けた女の先生に説明して連れて帰る事にした。先生は気弱そうな見掛け通り過ぎて、俺が説明しようとしているだけでビクビクしていた。大丈夫かよこの先生……

「大丈夫だよお兄ちゃん、上尾先生は眼鏡を外すと性格変わるから」

「有り得ねーよ」

「それが事実なんだよね。何だったら証明しようか？」

「結構です」

「じゃお先に」

「あ、待て……！」

俺は、一瞬自分の目を疑った。駆け出した弟に向かって、十トンのトラックが突っ込んできた

運転席を見ると、昨日寝るのが遅かったのか徹夜したのか、はたまた仕事が忙しくて疲れが蓄積していたのか、運転手は気持ちよさそうに眠っていた

急いで駆け出すが、とても間に合いそうに無い

だから俺は

(仕方無い……使つか……)

自分に秘められた『力』を使う事にした

強く念じて、背後から首にマフラーをした全身が紅く、首から下にウンピョウの毛皮のような模様のある人型の像レジョンを出した

俺はごく普通の人間と言ったが、それには少しばかり語弊がある

それは、俺には世間一般に言う『超能力』とやらを使える事だ

この力が何時身に付いたのか分からないが、物心ついた時から使う

事の出来たので生まれた時に俺の身に何かあったのかも知れない
能力は、俺を主軸として半径八メートル内にある物体を半径八メー
トル以内になら好きに瞬間移動させるという物だ

但し自由に移動させられるという訳ではなく、コンパスで円を画く
ような移動、つまり俺から離れていればいる程、瞬間移動出来る距
離は大きいという事

俺はこの能力を『惑星の綱玉“プラネット・ルビー”』と名付け呼
んでいる

実は他にも能力はあるが、今は必要が無いので別の機会に話す

閑話休題

『プラネット・ルビー』の能力を使い、間一髪で瞬間移動させた

「大丈夫か？」

「うん……」

先生は慌てて園児達の無事を確認する……先生、慌て過ぎです。事
故があったのかなり前方ですよ……

後は警察とかの仕事なので帰宅しようとする

いきなりベルトが後ろから掴まれた。振り向くと、坊主頭に下膨れ

の、太い眉毛をした園児の腕が俺のベルトを掴んでいた

「離してくれない？」

「何……あれ……」

「何が？」

「何だったの？あんたの後ろに現れた真っ赤な人は何なの？」

俺は、生まれて初めて心の底から本当に驚いた

『プラネット・ルビー』は、今まで俺以外で見た人間は皆無だったからだ

この少年、野原しんのすけのこの出会いが、今までの俺の生活を一転させた

そう、俺と同じ能力を持つ者達との戦いが、幕を開けたのだった

瀬上除夜は普通の人の？（後書き）

瀬上除夜のスタンドの能力はサポート向きでしたかね

ウンピョウというのは東南アジアに生息するピョウに似た肉食獣です
毛皮の模様はピョウとは若干違います

瀬上除夜は普通の人？（前書き）

しんのすけと除夜の出会いは両者に何をもたらすのか？

瀬上除夜は普通の人？

「お前……見えたのか？さっきの……」

俺の目の前の園児は、頷く

前にも説明したが、俺は『プラネット・ルビー』を物心ついた時から使えた。そして、俺以外にこれが見える奴はいなかった

そうでなくとも『プラネット・ルビー』の能力自体極力使わない事にしていたので俺のこの秘密が周りにバレる事は無かった

俺達の様子を（当然だが）訳の分からなさうに見ている周囲を見て、詳しい話を聞く為後でここで落ち合う約束をした

一度帰宅した後、義母さんとの約束を断って許可を取って再度公園に行った

多少時間が経った為事故直後と比べて疎らにはなっているが、まだ野次馬がいた。この光景をテレビとかで見ると時折思うが、他にやる事が無いのだろうかと思う

それも珍しい事や大事件なら兎も角、車の走れる所なら日常的に起こっている交通事故で

そう思える俺は、何処か冷めているのだろうか

野次馬と警察の様子を観察が飽きてきた時、タイミング良く園児、野原しんのすけが人混みを分けながら入口から来た

その後ろから、買い物袋を両手に持った二十代後半から三十代前半程の歳の、しんのすけの母と思わしき女性が来た。前髪がカールしたしんのすけと同じく下膨れの、女の子の赤ん坊を背負っている

出来れば二人きりの方が好ましかったが、日も大分沈んでおり、若干暗くなっているこの時間で幼児を一人で外に出す親は普通なら考えられない。そうでなくともここ最近は何騒なのだから、日中であっても幼い子供を必要以上に外に出すのを良しとしない風潮もある

「ほっほーいお兄さんまた会ったね」

「偶然会ったような言い方するな」

「しんちゃん、会う約束をしたっていうこの人？」

「うん、死海で心中して箱根で駆け落ちする約束をしたの」

「何処の世界に会ったばかりの人間、それも幼稚園児と駆け落ちや心中の約束を交わす高校生がいるんだ？」

し・か・も・だ

心中して駆け落ちって順序違っじゃねーか、どうやってやるんだよそれ。駆け落ちして心中なら分かるけどよ

心中先が海外なのに駆け落ち先は何で国内なんだよ、統一しろ

何で箱根なんだよ、何時の新婚旅行だ

大体死海に身を投げた所でどう死ぬんだよ。死海の水は塩分濃度が高いから水を沢山飲むのか？それともへりか何かから飛び込むのか？それなら納得するけどよ

「すみません、この子しょっちゅう今のようなバカな事を言うんです。気になさらないで下さい」

「いえ、別に……しょっちゅう？」

「所で心中って何？模型とかに使われる？」

「意味知らないなら使つな！」

てかそれ真鍮だし

！

「じゃあ行くぞ」

「行ってらっしゃい」

「そういうボケは要らん」

俺は『プラネット・ルビー』を出し、人差し指を差した

「もう一度確認するけど……これが見える？因みにポケは要らんかな、首を動かして答えてくれ、一応言っとくがYESなら首を縦に、NOなら横に振るだけでいい」

自分でも何を言っているんだろうと思いつつ、念を押して注意する

しんのすけはやはり首を縦に振った

みさえさん（あのやり取りの後で自己紹介した）は俺達が何をやっているのか分からず、俺達を見ている。無理はない。俺があの場合なら俺も同じリアクションを取る

但ししんのすけは母のリアクションが理解出来ないようだった

「母ちゃん、どうしたの？」

「こつちが聞きたいわよ、あんた達何やってるの？」

「へ？母ちゃんこそ何言ってるの？ここにあのお兄さんの出した人がいるじゃない」

「何処にいるのよ？」

「母ちゃんの目は抜け穴か！」

「……『節穴』って言いたいのか？」

反射的に突っ込んだ俺

「もう、ひまー」

「たや？」

「あれ見えるよね？」

『プラネット・ルビー』に指差すしんのすけ

ひまわりは、首を一回縦に振った。みさえさんは俺やしんのすけ達のやり取りの意味が分からないようで、ややパニックに陥っている。俺も驚いていた。今までいなかった自分以外で『プラネット・ルビー』が見える人間が突然二人も出会えた事に

「すみませんみさえさん」

「何？」

「俺今夜貴方達の家泊まっても宜しいでしょうか？」

「それってオラが欲しいって事？」

「違うわー！」

「じゃあひまを毒牙に？うわっ最悪って感じい」

「何故そうなる？」

怒っていいよねこれ？てか一発くらい殴っていいよね？

そう思っていると、みさえさんがしんのすけの頭に拳骨を振り下ろした

そのお陰で怒りはどうにか冷め、今日一日野原家に泊まる事となった

ほんの一時間後、『明日にまた会っ』という選択肢があつた事を俺は気づき、少し興奮していたら冷静に考えれば分かる事も分からなくなるんだなあとしみじみと実感した

瀬上除夜は普通の人？（前書き）

タイトルの綱玉…調べてみたら意味はルビーではなく、コランダム
でした

ルビーもコランダムなので、一応間違っていないけど……

瀬上除夜は普通の人？

しんのすけ達の住む家は、二階建ての新居で意外と広かった

しんのすけは自分の父は安月給とか言っているが、駅とかに近いこの物件に、借家ではなく自分の家を持っているあたり、少なくとも同年代の一般的なサラリーマンの平均年収よりは稼いでると思う

庭には、白い綿飴みたいな小犬がいた。あの犬見覚えがある。時折肉屋で客の呼び込みをしていたり、捨てられた子犬や子猫の世話をしているのを見た事があった。首輪が着いているから飼い犬である事は知っていたが、この犬だったとは

台所についた時、俺は買い物袋の中身について質問した

「すみません……何でこんなに冷凍食品を詰めてるんですか？」

そう、俺が袋の中身を見た時から気になっていた事。半額のシールの貼られた冷凍食品が、ギッチリと詰まっている事

確か今日はサトーココノカドーで冷凍食品は全品半額と新聞の折込チラシであったが……それだけが理由じゃないよな？きつと近い内に何かイベントがあるんだ。きつとそうだ

「オラの母ちゃん趣味は衝動買いだから、安売りの情報を見付けたら必要以上に買うの」

「……安物買いの銭失いって言葉がしっくり合うね……」

呆れながらも、冷凍庫に入れないと悪くなるので開くと

冷凍庫の中身が降り注いできた。『プラネット・ルビー』で全部キヤッチして足元に置いた

それはみさえさんを上手く誤魔化し、購入した冷凍食品+落ちた冷凍庫の中身を詰める。時折賞味期限の過ぎた物があり（しかも一ヶ月以上過ぎているのもあった）、それは当然捨てた。入っていた物の内の半分以上が賞味期限が切れていた物だったという結果には、どうコメントしてよいか分からなかった

不安になって冷蔵庫の方も開けてみたが、同じ様な有り様だった。なので同じ様な処置をした

「いめんね色々と」

「よ……冷蔵庫の中は時々チェックした方がいい、電気代の無駄ですよ」

……もしかしてこの家の家計の苦しい理由の大きな原因の一つにこれにあるのではないのだろうか

その後も色々バタバタはあったが、どうにかそれ全てを片付ける事が出来た

水を飲んでいいる時、みさえさんが『お風呂沸いているからしんちゃんと一緒に入りなさい』と言った。普通仮にも客に息子と一緒に風呂入れと言うかと思っただが、話をするのに都合がいいと考え、承諾しんのすけもそれを快諾してくれた

ひまわりちゃんも一緒だと尚良かったが、帰宅してすぐにベビーベッドで雑誌から切り取ったと思われる美少年、美青年の写真を見てうっとりとしていた。端から見ると異様な光景で、少し引いた

「お兄さん、背中流しっこしよう」

「そうだな。どっちからやる？」

「ジャンケンで決めよう、十万回勝負ね」

「決着つく前に逆上せてるよ、てか偶数じゃキリが悪いって」

当たり前だが一回勝負になった

結果、俺がグーでしんのすけがパー。よって、まずはしんのすけが俺の背中を擦る事となった。意外と上手だった

「お前背中洗うの上手いな」

「お義父様にテクを教えて貰ったので？」

「お父様？何でみさえさんの事は『母ちゃん』って呼ぶのにお父さんの事は様付けなんだ？」

「そうか、説明が必要か……」

話を聞くと、つい笑いが込み上げてきた。話が可笑しかったのではなく、随分可愛かったからだ

こいつには女子大生の好きな人がいて（まあ相手は弟か何かという認識だろうが）、その人の父親は、結構売れている作家さんで、娘を非常に可愛がっており、娘の事となるといってもたつてもいられないくなるらしい

余談であるがその作家さんが、俺も大ファンである豪快シリーズの作家、大原四十郎だとはこの時夢にも思わず、この事実を知って驚くのは、暫く後の話

途中でしんのすけの手が止まった。視線が俺の左肩に向けられる

「どっした？」

「変わった痣があるなあって思って……それと首の所に何か傷跡が……」

ああそれが

俺には左肩に星みたいな痣が一つある。知らない人が初めて見たらこれを入れ墨か何かと勘違いする人もいる

確かに小さい頃は気にしたが、体に害はないみたいだし今は別に気にしてない。こんな痣をしているのは俺しかいないから珍しいのは確かだし

傷跡というのは、背中の中首元の右肩寄りにある刺し傷の事だろう

どちらも義母によれば、俺を拾った時には既にあっただらしい

お湯をかけて泡を洗い落として貰うと、今度は俺がしんのすけの背中を洗う。途中途中喘ぎ声を出すのでその度に止めさせた

「しんのすけ」

「どうしたの？」

「質問がある、俺の『プラネット・ルビー』を何故見る事が出来るんだ？何かあったのか？」

何の根拠もない、勘から来る質問だった

しんのすけは唸った後

「風間君に怒られた」

「……それは何時？」

「今日」

「他に？」

「ネネちゃんにリアルおままごとを強制的に参加させられた」

「他に？」

「マサオ君とシーソーで遊んだ」

「他に？」

「ボーちゃんとモズの早贄ごっこやった」

「他に？」

何だその遊びは。いや、大体想像つくけど

「あいちゃんが風邪をこじらせて休んでいた」

「……すまん、質問の仕方が悪かった。今日俺と会うまでに何かおかしい事が起きたか？何でもいいんだ」

しんのすけが首を捻る。疲れた……頼む、もうボケないでくれ……

「昨日風間君ちに行つた時……風間君のママが、すっぴんで出て来た……痛い痛い痛い痛い痛い！爪！爪立ってる爪立ってる！」

「俺の質問の仕方に問題があるの？君の解釈の仕方に問題があるの？」

「痛かつたぞ」

「すまん」

「後……三日前変な男の人に『弓と矢』でオラは喉を、ひまは胸元を射抜かれた事かな？」

「その話詳しく聞かせてくれ」

「いいよー」

話を聞くとやはり何処かとんでもない話だった

総合すると、どうやらその男の『矢』には、俺と同じ様な能力を精神から引き出す力を持っているらしい

因みに野原兄妹は射抜かれて生きていたにも関わらず、何か特別な事が出来るようになった訳ではなく、傷跡もない為今では夢だったのでは無いのかと、俺に会うまで思っていたという

「信じてくれる?」

「信じるよ……そしてその話で一番の問題点がある」

「何?」

「その男はその『弓と矢』で能力者を捜しているみたいだ……それも現在進行形で……何でなんだ?」

「後でまた来ると言ってた」

「つまりそいつは、何等かの明白な目的があつてその『矢』で人を射抜いていると……なあしんのすけ」

「何?」

「そいつがお前の前に再び姿を現した時、お前はそいつに手を貸すつもりか?」

「何言つてんの?そんなの決まつてんじゃない。手伝わない。そいつはオラの妹を衝動的な理由で傷付けた……それに」

「それに?」

「オラとひまは生きていたけど、誰かがまた射られたら今度は死ぬかも知れない。そしてその死ぬかも知れない人はオラの身近な人も知れない。そんな可能性があつてそいつをほっとける訳ないぞ!」

しんのすけの顔と目が変わった。勿論本当に変わった訳ではない。冗談ばかり言っていたさつきまでと違って、真剣な顔付きとなっていた

「そつだな……どうする？そいつの事を知ってるのは俺達だけだぜ？」

「そいつを見つけて『弓と矢』を破壊するんだぞ！オラ一人じゃそれは出来ない。協力して！」

言葉で答えを返す必要はなく、代わりに右手を差し出した。しんのすけは右手を伸ばす

俺達は堅い握手をした

だが俺達は知らなかった。俺と同じ能力を持つ者達同士の運命的な引力を

そして、その男の発見という目的の困難さを

しんのすけが除夜と出会ったのと同時刻

路地裏で、一人の気弱そうな小柄な青年が、見るからにガラの悪そうな二人組の男に絡まれていた。それも堅気では無い二人に

「だからこれ買えつつつてんだよ！」

男の一人は青年の顔に白い粉の詰まった袋を押し付ける。中身は麻薬だ

二人は麻薬の売人。気弱そうな奴を選び、人気の無い所に引き込んだ後恐喝して、時として暴力を振るって買わせるといふ手段で麻薬を売り込んでいた

大抵の人間は暴力に弱い。それをちらつかせるだけで簡単に折れる。だからこの青年を選んで誘った時も、そうなると思っていた

「買いませんよ、お金無いんですから」

青年は、そうハッキリと言う。それに腹を立てた男の一人は、その青年の胸倉を掴み上げた

青年は、その表情を一切崩さなかった

「んだとおらあ！格安の栄養剤も買えんたあお前どんな暮らしをしたらんじゃあ！」

「こんな小さな袋に詰められた栄養剤を一袋五十万で格安という貴方達の金銭感覚が正直信じられませんよ……」

「うるせえ！てめえは黙って栄養剤を買えばいいんだよ！」

胸倉を掴み上げた男は、もう片方の手で思いつ切り殴りつける

その攻撃は、青年に届く事はなかった。何故なら、殴りかかった男の腕は、『その付け根から消えていたからだ』

青年が指をパチンと鳴らすと、消えた腕が何事も無いかのように『戻った』。代わりに青年を掴み上げていた手が消え、青年の体は解放された

「な……何者だてめえはよお！」

「うるさいな」

面倒そうにその場に座り込む青年。同時に、もう一人の男は目を丸くする

相棒の胴体部分の右サイドが、青年は右足が付け根から、消えていた

「ぐああ！」

相棒の男は悲鳴を上げた後、苦しそうに呻き出す。苦しそうにもがいた後、気を失った

その様子を青年が見ると、相棒の男と青年は元に戻る。いや、相棒

の男に限って言えば、戻っているのは『持っていった部分だけだ』
た』

消えていた部分は蹴ったり踏みつけたりした跡があり、肋骨も粉砕
されていたからだ

「もう帰って宜しいですか？」

「なめやがって！」

もう一人の男はバタフライナイフを出した

路地裏から出た青年は、公衆電話でボタンを押して警察に掛けた

「もしもし、麻薬の売人が今から言う場所にいますんで、来てくれ
ませんか？あ、後……」

言葉を区切って路地裏の方に視線を向けた

「大怪我をしているので救急車も呼んどいて下さい……出来るだけ
早くね……」

そこには、ボロボロにされた二人の売人がゴミのように転がっていた
伝えた後、青年は受話器を置いてその場を去っていった

瀬上除夜は普通の人？（後書き）

漸く説明まで漕ぎ着けた……

これから本格的に動き出すので楽しみに

しんちゃんとはひまわりのスタンドはまだ発現していません。どんな能力なのか想像力を膨らませてくれたら嬉しいです

では

SHUFFLE? (前書き)

スタンド使い同士は引かれ合う

それを除夜君は深く理解していきます

これから数話は除夜君と『矢』によって覚醒したスタンド使いの戦闘です

SHUFFLE?

しんのすけと会ってから早一週間近くが経った

あれから何か変わったかと言うと、全く変わっていない。しんのすけとひまわりちゃんは俺のように能力を発動させてないし、能力を持つ者とも遭遇していない。『弓と矢』とそれの所持者の手がかりも当然無い

俺の周りにも変わった事は無い。せいぜい俺のクラスの委員長が風邪をこじらせ、昨日休んだくらいだ

それで、俺は今何をしているのかというと、学校へ登校途中。幾ら普通じゃない事に、もしかしたら大事件にまで発展しかねないような事に関わり、探っているとんでも身分は学生だ。健康とかに異常が無い限りは出来る限り行かないといけない

「『早く終わらせる』と『焦る』は違うからな、慎重に探さないといけ……」

曲がり角の所で、人にぶつかってしまった。考え過ぎて他の事が頭に入らなかった

見下ろすと、黒い裾の長い服に黒い長ズボンは黒い帽子に指に黒い指輪を嵌めた、全身黒づくめの、気弱そうな、童顔の子供が尻餅を ついていた。中学生かそれより下くらいだ

それと服にこの子が持っていたソフトクリームがついてしまった

その子は立ち上がり、俺の顔を見上げると、頭を下げた

「ごめんなさい、ぶつかって服を汚してしまつて」

「いいよ別に、怪我なんかしてないし洗えば落ちるし……」

その子はティッシュをポケットから出して何枚か取り、俺の服についたソフトクリームを拭き取ってくれた

「ごめん、俺の不注意が原因なのに……」

「いえ、アイスをぶつけたのは僕ですし……クリーニング代出させて下さい」

「もういいよ」

自分の不注意でぶつかつた上、ここまでしてくれたのだ。これ以上気を遣われるとこちらが困る

大体子供から理由をつけて金を取るなんてみつともない真似はしたくない。自分に非があるのなら尚更だ

「お金はありますよ、働いているから」

「あるないが問題じゃなく……へ？」

「この子……今何と言った？」

『働いている』？こんな子供を雇うって何処だよ？違う大問題が発生したよ

「僕……こつ見えても18歳なんですけど……」

「え？」

嘘？マジ？

小物入れのジッパーを開けてそこから定期入れみたいな物を取り出す。それを出す時に、一枚の写真が彼の足元に落ちた

渡された物を確認すると、本物の運転免許があった。普通自動車の所に1とついている所から、確かに18歳以上だ

「すみませんでした」

深々と頭を下げる俺

笑いながら、須藤琢磨すぜん たくまさんは気にしないでと言った

免許証を取り出す時に落ちた写真を拾おうと、俺は腰を曲げる

その写真は妙だった

写真自体は何処にでもあるような普通の写真だ。写真に写っているものに、俺は目を疑った

俺が写っているのだ。それも中学生の頃の写真を

「あんだ……何で俺の写真を……」

須藤琢磨は、引ったくるように俺から写真を取り上げた。そして写真と俺を何度も見比べていた

「申し訳ありませんが一つお尋ねして宜しいでしょうか？」

「（雰囲気……変わった？）ええ、いいですよ」

「君のフルネームは……『瀬上除夜』で間違いありませんか？」

「はい……えっと……何で御存知なので「残念です……君が僕達の敵だなんて……」

「敵？」

「そう、敵……」

俺に向けられた目は、一転して敵意が満ちたものとなった

射程距離ギリギリまで距離を取り、『プラネット・ルビー』を出した

次の瞬間、俺は何が起きたか分からなかった

須藤の右手首から先が消えており、俺は首を絞められたかのように
息苦しくなった

いや、実際に首は絞められている。喉に感触がある

喉を触っている何かを払おうと手を伸ばす。だが、何にも触れず空
振りした

ガラスで確認してみると、首の前半分が、須藤の右手首と同じ様に
『消えていた』

「恐ろしいでしょ？」

苦しんでいる俺をその身長差から見上げ、須藤は言う

「僕が今君にしている行為は、『右手で君の首を絞めている』……
ただそれだけ……ただそれだけの行為でも、それが『見えていない』
だけで感じる恐怖は大きくなるものです……」

須藤は続ける。その口角は段々釣り上がっていった

「僕を中心とした半径百メートルにある物体の一部を別の次元に『
持つていく』。これが僕のスタンド『SHUFFLE^{シヤッフル}』の能力です」

解説を終えると、俺の喉と須藤の右手首から先は元に戻った

「安心して下さい。僕の能力は『持つていく』だけなので人を傷付けたりとかそんな物騒な事は出来ませんよ。感覚も正常に働きますし僕が何かしない限りは何ともありませんしね……」

SHUFFLE? (後書き)

初めてのスタンド使い同士の戦いが始まりました

余談ですが『SHUFFLE』には『クレイジー・ダイヤモンド』の能力は効きません

それと『ゴールド・エクスペリエンス』の治療もです

琢磨も言った通り別空間に『持っていく』だけなので、そこに無いだけで正常に存在してますので

考えようによってはおぞましい能力です

彼が中学生時代の除夜君の写真を持っていたのには様々な意味で訳があります

お楽しみに

SHUFFLE? (前書き)

今日は、一日空いちゃいました

昨日はスタンドの名前に使えそうなミュージシャンの名前やバンド名、アルバム、楽曲を探していたので
それらを使うのは次のスタンドからになるでしょう

S H U F F L E ?

呼吸のペースが戻ると、俺は『プラネット・ルビー』を出して殴る顔を狙ったが、須藤は首から上を持っていく事で『プラネット・ルビー』の攻撃をやり過ごした

須藤はすぐに首を戻す。更に殴りかかろうとする俺に対し、須藤は手を出した。止めるという事だろうか？

「ちょっと待って下さい」

「どうした？降参か？別に構わないけど……」

早く学校に行きたいし

「いえ……場所を変えましょう……ここでは目立ち過ぎる……」

最初は何のつもりかは分からなかったが、すぐにその意図を理解出来た

俺の能力も須藤の能力も使えば嫌でも人目を引く。しかもここは通学路真っ只中だし、もう少し時間が経てば通勤の為に通る人も出て来る。つまり人目に付いてしまう。人目に付くのは、『目立つ』という事だ

目立つという事は活動が難しくなるという事にも繋がる。この提案を承って得があるかどうかは今分らないが、断って戦いを継続したらその代償は確実にある

それにコイツには幾つか聞きたい事もある

「分かった。場所を変えよう。だけど俺は登校中なんだ。なるだけ通学路から離れていない所で頼む」

「承知致しました」

場所を変え、通学路から離れた『犬の尻公園』に入る。このような変な名前の公園が、ここでは結構頻繁に見掛けるが、誰が決めてるんだろうか

遅れるかも知れない事を学校に伝え、公園に人がいない事を確認し、『プラネット・ルビー』を出す

「では再開しましょうか……」

「待ってくれ。その前に質問がある。答えはすぐに用意が出来るものだから……」

「それはどうしても今聞いておきたい事でしょうか？」

「どうしてもって訳じゃないが……今聞いておきたい事でもあるな。どうしても気になるから」

「……何なりと」

「ありがとう……まず……『スタンド』って何だ？」

この質問をすると、奴は信じられない事を聞いたみたいな表情となった。俺の質問、そんなに信じられなかったのかな？

「えっと……知らないんですか？自分の操る能力の総称すらも？」

「いや、だって『自分と同じ能力を持っていてそれを自分同様使う事の出来る奴』には今まで会った事なかったから」

「そついう事でしたら……」

コホンと咳払いをする

「『スタンド』とは、その能力者の『生命エネルギー』を形としたもの……それを使う事の出来る者は『スタンド使い』、または『スタンド能力者』、スタンドを主とするなら『本体』と呼ばれています。最もポピュラーなのが『スタンド使い』です。『スタンド』はその形、その能力は正に千差万別、十人十色……能力者一人一人異なる……そして、最大の特徴として『スタンド』は『スタンド使い』にしか見る事が出来ない」

「あー」

その説明で納得出来た事があった

そうかそうだったのか、『プラネット・ルビー』がしんのすけに会うまで他の奴に見えなかったのは、俺の周りに『スタンド使い』がいなかったからなのか

「次の質問、お前は何時から『スタンド』を扱えるようになった？俺みたいに物心ついた時からか？それとも……」

「察しはついているみたいですね……五ヶ月前にある『男』に『矢』で射抜かれてからこの能力が使えるようになりました……僕の『スタンドの知識』の基本的な部分はその時に『彼』から教えてもらったもので、そしてさっき落とした写真はその時に貰ったんですよ……」

その『矢』は野原兄妹を射抜いた『矢』で、射抜いた人間も同一人物と見て間違いないだろう

で、一番気になった点。それを聞いた

「何故ソイツは俺の『写真』を持っていたんだ？何でお前がソイツに荷担しているんだ？」

「二週間程前でしようか……僕は彼に君が『スタンド能力を悪用する悪党だから見掛けたら再起不能にしてくれ。生死は問わない』と頼まれたから引き受けたまです。お金を貰った以上責任もありますしね」

「お金？」

「その翌日に僕の預金通帳に20万振り込まれていましたよ。当然何かの間違いだと思ひ尋ねました。銀行員に尋ねた所この件で僕が尋ねてこられたらお金を振り込んだ男から僕にこれを渡すよう頼まれていた様なんです」

須藤はズボンのポケットから一枚の紙を取り出した。裏に文字の書かれている、折込チラシだった

これには、『依頼料は振り込んでおいた。瀬上除夜に会ったら頼んだ事を行ってね。成功したら更に一千万円あげる』と書かれてあった

つまり、詳しい理由は不明だが俺の事を知っている奴が俺を痛めつける為に『スタンド使い』を生み出しているというのは分かった……いや、『生死を問わない』という事は、『殺しても構わない』……いや、もつと突き詰めれば『殺す為』にだろう

少なくともソイツは俺が『スタンド使い』だというのは知っている奴という事だろう。そして十中八九ソイツも『スタンド使い』なのだろう

悪党に仕立て上げられているのは心外だが、逆にそんな嘘についてそんな大金を払ってまで俺を殺したい相手というのがどうしても気

になった

「そして前者の質問ですが……僕も知りません。彼はその事に関して何も喋らなかつた……気になつて尋ねましたがはぐらかされてその真意を知る事は出来ませんでしたよ……」

「そうか……ありがとよ説明してくれて……つまり、お前は『俺が悪党だから』という事と、『お金目的』で俺を倒そうとしているという事が……」

「僕は仙人じゃないから霞を食べて生きている訳じゃないんですよ。それに一旦引き受けて貰っている物を貰っている以上は頼まれた事はしないとね」

「同感だ……それを聞いて心から安心したよ」

「安心？」

「ああ、安心……お前が明確な悪意とか殺意とか持つて俺に襲い掛かるってんなら……何の気兼ねや遠慮もせずに貴様をブチのめす事が出来るからな……」

「クククククク……」

俺の台詞に、須藤は笑い出した

「何を言い出すのかと思えば……ブチのめす？貴方が僕を？やつて

みて下さいよ」

須藤の背後から、スタンドが出て来た。濃い灰色を基調とした体色で、目は丸く黄色く、小型のアンモナイトの化石のようなものが耳の代わりと言わんばかりに付いていて、肘や膝には緑色のテープがテーピングされた、人型のスタンドだ

俺はスタンドで本体の腹をぶん殴るが、別空間に持っていく能力でいなされる。須藤は元に戻った後、距離を取った

『プラネット・ルビー』で掴まえようとしたが、『SHUFFLE』に手首を掴まれた後、空いている手で胸を殴られた

「？」

どういう事だろう？

『プラネット・ルビー』が殴られた胸から、ダメージが伝わったかのように同じ箇所痛みを感じた

「何が起きたか分からないような顔してますね先輩」

「何かしたのか……」

「『何かした』……か……本当に自分の能力の事を知らないんですね。確かに僕は自分のスタンドで君のスタンドを殴った……それを

指すとするなら何かしていますね」

やれやれと言い、首を振った

「能力は使ってませんよ、スタンドの特性です。先程も仰った通り、『スタンド』とはスタンド使いの『生命エネルギー』を形にしたもの、よってスタンドはスタンドでしか攻撃出来ず、スタンドが受けたダメージは本体にフィードバックするんです。つまりスタンドの死は本体の死を意味するのです。その逆、つまり本体の死もスタンドの死を意味します」

分かった事がある。俺がどれだけ自分の持つ能力を知らなかった事を
そして、今対峙しているこいつは、凄く親切な奴だという事を

(聞いてもないのに教えてくれるもんな……ありがたい事に)

SHUFFLE? (後書き)

須藤が除夜君の事を『先輩』と呼んだのはスタンドを発現させたのが除夜君の方が前だからです

今回は『SHUFFLE』との激闘を書いていきます。宜しく願います

SHUFFLE?

『プラネット・ルビー』は『SHUFFLE』の右手首を掴む。『SHUFFLE』は右腕の肘から先を持っていく。掴んでいた物がなくなった為、急いで引つ込めようとしたが、その前に『SHUFFLE』は、俺の顔へと拳を放っていた

俺は数歩下がって『プラネット・ルビー』の攻撃を回避する。『SHUFFLE』の攻撃の空振りの確認した瞬間『SHUFFLE』を元の位置に戻し、首と手首を掴む

『SHUFFLE』はその能力で掴まれた手首を、『プラネット・ルビー』の首を掴んでいる手を持っていった。それにより『SHUFFLE』は自由となり、『プラネット・ルビー』に連続で殴りかかる

腕で防御をしてもあまり意味の無いと判断した俺は、食らいながら両腕と右膝を同時に突き出した。狙いは頭と腹部だ。俺の考えが正しいければ、これが攻略手段だ

『SHUFFLE』の頭と俺の膝から下が持つていかれる。残った腹部狙いの拳は、的確に『SHUFFLE』の腹部を捉えた。そのダメージから、奴が持つていっていた奴の頭部と俺の右膝から下が戻ってきた

「う……」

「まだまだあ！」

『SHUFFLE』は『プラネット・ルビー』の拳が振り上げられる前にその拳を掴んだが、止める事は出来なかった

『プラネット・ルビー』が拳を振り上げると、『SHUFFLE』は空高く吹っ飛び、連動するかのように須藤も同じ様に吹っ飛んだ
あれ？おかしいぞ

奴の攻撃を受けた俺のダメージはせいぜい『少し鍛えたチンピラに殴られたらこのくらい痛いんじゃないのかなあ』というくらいにしかダメージが無くて大した怪我じゃない。奴の方は俺より深いダメージを受けている

『SHUFFLE』は『プラネット・ルビー』より本体から遠くへ行けるから、その分パワーは俺の方が上だという事か

スタンドのパワーは本体との距離と反比例するという事。小さい頃は能力の研究をしていて、それには気付いていたが、比較があるとそれがよりよく分かる

「何時……気付いたんですか？」

俺に息絶え絶えに訊く須藤。『何を』と訊き返すつもりはない、『SHUFFLE』の能力の制限の事だ

射程に入っている物を別空間に持っていける。但し、『同じ物体の

一部を同時に複数持っていく事は出来ない』。現に今まで俺は一度に一部分しか持っていかれていない。奴自体も同じだ

「降伏しろ……殺したりとか、再起不能にしたりはしない。これ以上はより痛い目を見る事になるぞ」

「降伏？何故？」

「何故って……お前の能力は攻略して……」

「『攻略』……それを言うのはまだ早いのでは？だって……『SHUFFLE』でやれる事はまだあるのに……」

『SHUFFLE』が『プラネット・ルビー』の前から消えたと思うと、背後に出現し、殴られた

「え？」

後ろに向けて拳を振るうと、『SHUFFLE』は消えており、横から蹴りを入れられた

「何だ……？隠していた能力か？」

「違いますよ……スタンドの大原則は……一人につき一能力です……使ったのはスタンドの特性……スタンドは出したり消したりは基

本的に自在に出来ます。それに射程距離の長いスタンドは射程内から把握していれば何処でも出現させる事が可能なのです……」

成程、これがやれる事か。随分厄介だ

そして、やる事は決まった

「スタンドがスタンドに与えるダメージは無視して本体を直接叩く！」

それは『特攻』

奴のスタンドの破壊力は耐えられない物ではない。多少の負傷は俺はすぐに治る

数歩走った後に、右足が踏まれて押さえつけられたような感覚がして、転んだ

案の定俺の右足は無いが、奴の左足も膝から下が無かった

「僕のスタンドの能力は持っていく『だけ』……だから持っていかけた部分の感覚は普通に伝わるし『SHUFFLE』の本体である僕はこうやって別空間に持っていった相手の部分を別空間に持っていった自分の部分で攻撃も出来るしこういう風に押さえ込む事も出来るんですよ……本体の僕は『SHUFFLE』の空間を把握してますしね……」

る彼がいたのです

「一体……何をしたんですか？」

「俺のスタンドには自分を軸として射程内にある地面に引っ付いている物以外の物をコンパスで円を画くような軌道で瞬間移動させる以外にもう一つあってね……いや、こっちのが『プラネット・ルビ』の真の能力といおうか……その能力は、逆に射程内の物を『軸』として『自分を瞬間移動する事』なんだよ……で、それを使ってお前を軸にしてお前の背後に瞬間移動した後思いつ切りジャンプしてきたって訳だ」

「そ……そんな能力……有りですか……？」

「存在するんだからありなんですよ？」

確かにその通りだ……

僕は視界が暗転し、意識が途絶えました

SHUFFLE? (後書き)

スタンドの特性を活かした瞬間移動は『ハイウェイ・スター』が元です

この日の話はまだ続きますよ

では、ご期待いただけたらなと思っています

委員長と遊ぼう！？（前書き）

ご意見、感想あったらお願いします

委員長と遊ぼう!?

二限目の半分に差し掛かる辺りで、俺は滑り込むように教室に入った。今の授業は日本史だ

「すみません、遅れました!」

教師や級友達の視線が、一様に俺に向けられる。俺は先生に言われるまま、自分の机へと向かった

事前に連絡は入れておいたので怒られたりする事は無かったが、日本史は新しい所に入っていて少しいて行けなかった。帰ったら復習やらないとな……一限の授業の方は後で優太か宝来にノート見せて貰おう

あ、そうだった。あれからどうなったか簡単に説明しないといけないな

琢磨の事だが、このままほっとくのも何だったんで、結局目が覚めるまで付き添ってた

俺が悪人で無いのは分かってくれ、騙されたとはいえ襲った事への詫びも兼ねて『弓と矢』探しの協力をしたいと申し出た。仲間が増えるのは嬉しかったので勿論俺は了承した

(だが……思ったより事態は深刻なようだ)

「み」

その後その男に対しての琢磨の考えでは、『弓と矢』でこの春日部にスタンド使いを作っている男は、『不自然に騒ぎを起こさない者』を中心に『矢』を射抜く対象にしている可能性があるという

これには理由があり、スタンド使いや『矢』の存在を知っているS^{スビ} P W財団という世界的に活動している組織があつて、下手に動いて噂になればその財団に関係しているスタンド使いが調査に来る可能性があるのでか

しかもその中には、時を感覚で数秒止められるといったふざけた能力を持つ、かなり名の知れた人もいるだとか何だとか

「上」

別にそんな事は俺にとって何の問題も無い。この春日部に『スタンド使い』がいて、しかもその数は日を追う毎に増えているという事実は変わらないのだ。しかもその全員が俺を悪人と思つて、いや、単純に金目当てで狙っていると思つて何もおかしくない

そしてその内の何人かは、俺の身近にいる人間である可能性も十分あるのだ

（あーもう、何でこんな厄介な事に巻き込まれないといけないんだ

よ。てか何でそいつは俺の事狙ってんだよ。俺に何か恨みでもあるのかよ)

「 瀬上」

「うるせえな今重要な考え事してるんだよ！後にしろ後に！」

しつこく何度も俺に声をかけてくる奴に、俺は声を荒げて怒鳴りつけた

「今授業中なんだが……その授業を後回しにしての考え事なのだから余程重要な事なのだろうな……」

「すみません……」

俺を呼んでいた、つまり俺がたった今怒鳴りつけたのは、先生だった

俺にとってかなり重要な事ではあるが、授業内容とは関係無い事を考えていたのは事実な為、俺の分は悪いので謝った

二限目の授業が終わり、三限目との合間の休み時間。ノートを写させて貰おうと思ったが、生憎優太は一限目から頭痛で保健室で休んでいるらしい。宝来も一限目からいないらしい。どうやら生徒会都合らしかった

仕方無い。時間を無駄に潰すのも何だし、次の授業に向けて予習してよう。そう思って教科書を開いた時だった

「おい瀬上君」

「ん？」

「だーれだ？」

後ろから女の声が聞こえたので振り返ろうとすると、視界が遮られた

『誰』かはすぐに分かる。俺にこんな事をしてくる奴は、現在俺の知る限り一人しかいない

「……………何の用だ？稲庭」

「よく当てたね、声色変えたのに」

「分からない方が変だと思う……………」

朗らかな笑顔を俺に向ける、腰までの綺麗な髪を肩の所でリボンで結った女に、俺は溜息混じりに軽い突っ込みを入れる

コイツの名前は稲庭早良^{いなにわは}。一応このクラスの委員長だ。委員長になったのは入学した時の時、クラスで一番元気だったからという、小学校低学年レベルの理由で担任から選ばれた為

反応が楽しいのか理由は分からないが、時々俺にこの様な事をしてくる。勿論こんな事をしてくるのはこの学校でこいつだけだ。それで分からない方がどうかしてると思う

まあだからこそ、コイツが他の奴と組んだら確実に間違いそうだが

「風邪で寝込んでたんじゃ無かったのか？」

「昨日の内に治って今は元気モリモリだよ」

「あっそ……それは良かったな……何の用だ？」

「いや、ちょっと気になってさ……何なの？服についたそのシミ」

今朝琢磨とぶつかった時についたソフトクリームのシミを指差した

「それか？俺の不注意で人とぶつかってその人の持っていたアイスがかかつちゃってさ……拭いたんだけど染み着いちゃったんだよ」

「災難だったね」

「さいなんです」

教室全体が白けた。うん、ごめんね。下らない事口にしてごめんね

「それじゃあ、俺これから予習するから」

「予習なんかより一、二限目の復習やった方がいいんじゃないの？」

「休み時間をどう使おうがいいだろ？お喋りがしたいだけなら他に当たってくれ他に」

「他の人じゃ駄目なの！瀬上君じゃないと言えないの！」

下手したらこの階全体に響くんじゃないのかと思える程の音量でそんな事を言い放つ。俺は溜息を吐き、うんざりした表情を向けた

「で？」

「はにゃ？」

「俺にしか言えない事って何だ？聞くからさっさと話せ」

稲庭が顔を満天の笑顔にする。元々顔の作りはいい方だが、この笑顔は特に可愛いと思う

「昼休み屋上に来てくれない？誰にも聞かれない話があるの」

「……その程度かよ。何かと思えば……」

「ありがとうー！」

朗らかな笑顔のまま、ギョツと俺の手を握って自分の席に帰る稲庭。何か俺に向けられる視線が生暖かく感じたり痛く感じたりするのは気のせいだろうか？

気のせいでないのなら俺は何かしたのだろうか？まあ誤解なのは確かだろうけど

チャイムが鳴り、教科担が教室の引き戸を開ける。机の上に教科書しか置いてないのを見ると、急いでノートと筆記用具を中から出した

「あれ？」

取り出している最中に、シミがついている所が必然的に目に入った。俺はおかしいなと思った

何故なら、シミはまるで最初から無かったかのように消えていたからだ。最初は見落としただけだと思っただが、授業が終わった休み時間に改めて確認すると、確かにシミはおろか一切の汚れがついていなかった

余談ではあるが、俺は三限目と四限目の合間の休み時間と教科担が急に休み、自習となった四限目は、その視線をクラス中から向けら

れ、戻ってきた優太や宝来には茶化された

委員長と遊ぼう!?(前書き)

委員長、稲庭早良に呼び出された除夜君
果たしてどんな事が起きるのでしょうか？

委員長と遊ぼう!?

四限目も終わり、昼休みに入った

それと同時に稲庭は弁当を包んだ風呂敷を持って教室の外に出た。かなりの大荷物だが、何時もの事なので驚きはない

俺はというと、今日は弁当を用意していなかったで近くのパン屋からの、賞味期限ギリギリで一個50円のパンを七個程購入すると自分の机に戻って袋から魚肉ソーセージのパンを取り出して口に運ぶ前に消えた。正面の席にはニコニコした顔の優太がきんぴらごぼろを食べて指定席でないのに座っていて、俺の右には俺から奪ったと思われるソーセージパンを持っている友人の宝来が立っていた

「お前等何の用だ？」

「何の用って……稲庭さんとの約束はどうしたと聞きに来たの」

「僕はただ何となく」

「すぐに来いって言われてないしな。昼休みは45分もあるし、俺は早食い得意だし」

あいつ常軌を逸した大食らいの上信じられない程の早食い、そして昼休みは始まったばかりだから十分時間はあるだろ

「重要な話かも知れないよ?」

「昼飯代を建て替えてとかだったらお前等の内どっちかに回す」

「こつちだつて嫌だよ。高一で破産申告なんかしたくない!」

「僕も……お金はあるけど大切に使いたいし……」

「だろ?」

「それはいいとして……早く行ってきなさい。女の子を待たしたら駄目だよ?」

「へーへー」

ソーセイジパンを返してもらってそれを啜えながら屋上に向かった。教室のドアを開いた時、はまってたガラスが落ちて頭にぶつかり、割れて怪我するというアクシデントに見舞われたが、額に傷が出来た程度でそれも大した傷じゃないので放置して向かった。

「よ、稲庭、待たせたな」

「うづん、あたしも今来たばかりだよ」

「……何でデートの定番のやり取りしてるんだ俺達」

「額切ってるね。大丈夫？」

「気にするな、放課後までには完治するだろうから、それより呼び出した要件は何だ？」

「いや、ある事なんだけど……取り敢えず額の傷手当てしておくね……君は平気かも知れないけど見ていて痛々しいから」

「それならいいよ」

自分は気にしなくとも相手はどうしても気にしてしまう物つてあるもんだな……気をつけなきゃ

「けどどう治すんだ？絆創膏とか消毒液とか持ってるのか？」

「大丈夫！いらなからそんなもん！」

「それでどう治すんだよ委員長さんよ、まさか超能力で治すだなんて馬鹿な事言わないよな？」

「それはお楽しみという事で」

「いや、方法くらい教えてよ。手当て受けるの俺なんだからさ」

「じゃあ座って、君背が高いから届かない」

「そこまで身長差ねーだろ！てか人の話を聞け！」

「いいから座って、でないと手当て出来ない」

話を聞こうとしない委員長に対して嘆息をつきながら、その場に座り込み、足を崩した

稲庭の手が俺の額に触れると、稲庭の腕から『大きな両生類の腕らしきもの』が出て来て、俺の傷の部分にその手を押し付ける。少し力を込めて傷口に沿って手を動かした

その手が俺の額から離れると俺は稲庭から離れる為、後ろに飛び跳ねた。額の出血は治まっており、ガラスで自分の顔を見ると、その傷は最初から無かったかのように消えていた

「何？傷を治してあげたのに何で後ろに跳ねて、しかも敵を見るかのような目であたしを見るの？」

「な……何だ？」

「何が？」

「何だ？さっきの……お前の腕から出て来た両生類の物のような手は……」

「へー……『あの人』が言った通りだ……瀬上君、『イザベラ』が見えるんだね……」

稲庭は『スタンド』を出した。『スタンド』は全長一メートル程の、背中に銀色の線が縦に三本入っていて、棘の生えたヘルメットを被ったオオサンショウウオのような外見だった

『イザベラ』と呼んだそのスタンドに向けて稲庭は指を差す

「これ……何だか分かる？」

「充分過ぎる程な……」

身近な奴が『スタンド使い』として俺を狙っていると先程考えてみたが、こんなに早く仮定が事実になるとは思ってもいなかった

俺はショックを受けながらも、『プラネット・ルビー』を出す

どんな能力かは知らないが、あのスタンドに何発か拳を叩き込んで戦闘不能に追いやる事にした

『プラネット・ルビー』の拳が、オオサンショウウオに叩き込まれる直前

「待ってよ、あたしは別に瀬上君をブチのめそうとかそういうの考えて呼んだんじゃないよ」

『プラネット・ルビー』の拳は、オオサンショウウオに叩き込まれる寸前で止まった

委員長と遊ぼう！？（後書き）

委員長はスタンド使いでした

スタンドのビジョンがオオサンショウウオなのは少しギャップを意識してみたんです

名前はジミ・ヘンドリックスの楽曲から

しんちゃん達の出番はもう暫くお待ち下さい

委員長と遊ぼう！？（前書き）

委員長が除夜君を呼び出した理由とは？

委員長と遊ぼう!？」

「俺を襲うつつもりで呼び出したんじゃない……だと?」

「うん」

「じゃあ何のつもりで呼んだんだ?」

最も気になる質問を稲庭にぶつける俺。今朝出会い自体は偶然として、スタンド使いが『弓と矢』の所有者に頼まれて俺に襲いかかって来たのだ

他にもいるかも知れないとそいつに聞いたので、稲庭もスタンド使いだと分かった時そうだと思った。だからついさっき稲庭が言ったこの言葉は、俺に軽い混乱を引き起こした

しかし危害を加えるつもりで呼んだのではないと言われて、ホッとしたというのは事実である。理由が何であれ、仲良くしている人と戦うのもブチのめすのも気が引けるからだ

「稲庭、お前何時から『スタンド』を使えるようになったんだ?」

まず一番知りたい事を最初に聞いた。俺の知る稲庭は一昨日までこんな事が出来なかったし、今のように『スタンド』を出した事も無かった

対し稲庭は、少し自信の持てない表情で話し始めた

「昨日風邪で熱を出して休んだのは知ってるでしょ？」

「ああ知ってる」

それを朝に聞いた時、『絶対』に何かの間違いだと思った。いつも元氣一杯のこいつが風邪をひいて休むというのは実感が全然無かったからだ

「それで夜の六時頃、二十杯目のお粥を食べている途中……」

「……本当に風邪で熱出して寝込んだのか？」

コイツが大食いなのは俺は（と言うかクラスメイト全員）知ってる。だが風邪ひいている時は食欲は落ちる筈だ

いや、多分少し底の深い小鉢によそって食べたんだ。何故そんな事をしたのかは分からないが、そうに決まってる。いや、そう言ってくれ

「土鍋で」

「ただでさえ脆い土台の上に耐久性の低い材料で作られていて倒壊寸前の常識が更に崩れてしまった……」

「お代わりしようと台所へ……」

「すまん、粥の話がまだ続くなら端折ってくれないか？」

多少は慣れたとはいえまだついていけないから

「土鍋を持って行って途中で便意を催したから台所に鍋を置いてトイレに行つて……」

「うんうん」

「用を足した後台所に戻ると誰かいて、いきなりその人が持っていた『弓矢』に射抜かれたの……その時気を失つたみたいでその後の事は覚えてないんだ……射抜かれた傷も治つてたし……だから最初は夢かと思つたけど、目が覚めてから『イザベラ』を出せるようになったから……多分現実に起こつた事だと……」

「そうだよ。お前は間違つてない。『それ』は実際に起こつた事だ」

つまりなりたての『スタンド使い』という事が

それなら突然能力が使えるようになったのも説明がつく

「質問その二、まあ二つの内容になるけど……呼び出した理由がそのサンショウオオ才だとするなら、何で俺を呼んだんだ？」

「教室で直接呼び出して」

「んな事あ訊いてねえんだよ、訊きたいのは呼んだ理由。俺がお前と同じ能力を持っているというのをお前は知っていたのか？」

「ううん、今日この目で見るまで知らなかった」

「じゃあ何で俺を呼んだ？同じ能力を持っているのを解っている人間に聞けばいいだろ」

「そんな人知らないけど」

「まあ……そだよね……」

得たのが昨日の今日だしね

「君を呼んだのはこの紙に書かれていた事を真に受けて」

稲庭はポケットから折り畳まれたクシャクシャになっている紙を広げた

「何でこんなクシャクシャなんだ？」

「いや、ゴミ袋の中を漁ったら出てきたから……」

「まず何故漁った？」

「それはね、何か引き寄せられるように……」

「やっぱいい、こんな不毛なやり取りしてると時間がただ過ぎていくだけというのはよく分かった」

何々

『拝啓 稲庭早良様 暑中お見舞い申し上げます』

まだ春だ

『貴女様がこれを手に取り、読んだという事は、貴女はある素質があり、それが精神から引き出されたという事となります。さて、その素質の事を詳しく知る者が貴女様の近くにいます。それは、貴女様と同じクラスに在籍している瀬上除夜です、彼ならば貴女様がたった今身に付けた能力の全容を教えてくれるでしょう』

と書かれてあった

「だから呼んだの？」

「だから呼んだの」

「そんな所にあつた紙に書かれた内容を信じるのかお前は！」

「信じないの？」

「俺だつたら信じねーよ！……てかさ……何でそいつお前のクラスメートの名前把握してるのか気にならなかったのか？」

「全然」

「気にしろよ！おかしいだろ！」

「まあそれは置いといて……この能力がどんな能力なのか教えて」

「分かつたよ、その程度なら教えるよ、だが俺だつてよくは知らねーからな」

何せこの能力の通称とか詳細とは今日の朝初めて知つたんだし

俺は稲庭に、『スタンド能力』とはどういった物か、琢磨から教わつた事をそのまま教えた

「ふーん……」

「分からないからって詳しい説明を俺に求めるのは止めてくれ、前置きで言ったが俺の知識は朝に知り合つた『スタンド使い』からの受け売りでしか無いからな」

「それと一つお願いがあるんだけどね」

「何だよ……」

「あたしと戦って」

「何でだよ」

いきなり何言い出すんだこの女は

「いや、さ、どんな使い方が……… 実戦で確認しておこうかなと思って……」

「却下、悪いが俺はお前と戦う理由は……」

『イザベラ』は俺の『プラネット・ルビー』にしがみつくと、速いスピードで首まで登り、『プラネット・ルビー』の右頬をぶん殴った

そのダメージが、俺の右頬に返ってきた

「何の真似だ？」

「危害を加えたよ。これで戦う理由になる筈だよ」

「俺はとっとと教室に帰りたいんだが………と言ったら？」

「もっと叩く」

「言っても無駄ならしょうがない……なるだけ早く終わらせるぞ……
…五限目まで時間が無いからな」

「勿論、どっちが勝っても負けても恨みっこ無しだよ？」

愛らしい笑顔で、そんな事を平然と言った

委員長と遊ぼう！？（後書き）

稲庭はスタンド使いになりたてのスタンド使いでした

彼女との戦いの結末は、少し意外なつもりです

ご期待してくれましたら嬉しい限りです

委員長と遊ぼう！？（前書き）

委員長に喧嘩をふっかけられた除夜は……？

委員長と遊ぼう!?

『プラネット・ルビー』にしがみついている『イザベラ』が、腕を振りかぶる。また殴るつもりだろうが、それより早く『プラネット・ルビー』の左手は『イザベラ』の首を掴んだ。『イザベラ』は、自身の首を掴んでいる俺のスタンドの手首を掴む

空いている右手で、拳を握り締め……俺は動きを止めた

(あれ……俺……何をしようとしていたんだっけ?)

何がやりたかったのかを、忘れてしまったからだ。必死に思い出そうとしても、思い出せない。まるでその部分の記憶が取られたようだ

俺が戸惑っている様子を見て、稲庭の奴は可笑しそうに笑っている

何かしたんだ。それは確かだ……何かしたから、俺は『何をやりたいたのか』が忘れてしまい、思い出す事も出来なくなってしまっているのだ

この首を掴み上げているサンショウウオのスタンドが何かしている。俺は掴んでいる首を離そうと……

あれ……?何をしようとしていたんだっけ?

いや、考えてみよう。確か俺の傷を治す時、『イザベラ』の手は俺の傷口を拭くようにして動き、汚れを拭き取るようにして消した……

琢磨とぶつかった時についたアイスクリームのシミも、多分こっや
って消したんだ

「そうか……」

「？」

「何でこのスタンドに何かしようとするとかをしようとしていたの
かを忘れ、そのまま思い出せない理由が分かったよ……」『拭き取っ
たんだな』……『汚れだろうと傷だろうと、思考だろうと拭き取る能
力……』と言った所か？」

それなら服のシミが消えている理由も納得いく。傷は深いのは無理
かもしれないが、皮膚を少し切ったくらいの切り傷とかは問題無く
拭き取れるのだろう

「御名答。『イザベラ』の手は汚れや傷もだけど、思考も拭き取れ
ちゃうのだ！当然やり遂げちゃったら意味はないけどその前なら体
験した通り……ね」

つまり攻撃しようとしたりこいつを振り払おうとするとその前にそ
う思っていた事を頭から消してしまうって事か。腕ずくではどうす
る事も出来ない

ワイシャツの一番上のボタンを千切って、背後に投げ込んだ

「……………何するの？」

「『押して駄目なら引いてみる』……………だ」

後ろに投げ込んだそのボタンを『軸』とし、瞬間移動した

掴んでいた『イザベラ』は、射程距離外へ離れた為消えてなくなり、本体の稲庭の元へと戻った

「……………何したの？」

「俺の能力で後ろに瞬間移動しただけだ。どうやらその『スタンド』……………お前とそこまで距離を取る事は出来ないみたいだな……………俺の『プラネット・ルビー』はどうにか届く……………スピードには自信あるからやろうとすればここから一方的に攻撃する事も出来るぞ？」

「えっと……………つまり瀬上君は……………『お前にはもう何もする事は出来ないからもう終わりにしよう』……………とでも言いたいの？」

「ああ……………もう充分だろ？さっさと教室戻ろうぜ、後五分で予鈴が鳴っちまう」

「何を勘違いしてるのかな君は……………あたしはまだ手段があるのに……………」

『イザベラ』が、自分の右腕に噛み付き、引きちぎった

「何してるんだ？正気か？『スタンド』のダメージは本体にそのまま返って……」

「ダメージ？負ってる？」

いない。稲庭の右腕は、千切れているどころか傷一つ付いていなかった

『イザベラ』は噛み千切った自分の右腕を吐き出す。すると、断面からサンシヨウウオの頭が生えてきた

『イザベラ』のような大型のものではなく、もっと小型で、背中の線が一本でそれ以外は何の変哲も無い（右腕がアンバランスに大きい事を除いて）サンシヨウウオが生まれた

「『プラナリア』みたいだな……」

『スタンド』には体を分割出来るのもいると聞いた。目の前にあるそれが、そうなのだろう

サンシヨウウオは俺を見ると、俊敏な動作で俺に接近する。もししがみつかれてしまったら、動きが著しく制限されてしまう

『軸』にして移動するが、その時にはかなり距離を縮めていた為、

大して動く事が出来なかった

一メートル近くまで近付くと、俺に飛び付いてきた

「『プラネット・ルビー』！」

サンショウウオを拳で潰そうとするが、拳に当たった瞬間張り付き、そのまま首の後ろまで駆け上った

こうなった以上はどうする事も出来ない。先程と同じく射程距離外へ逃げるといふ手しかない。だが、今自分の首に引っ付いているこのスタンドの射程距離が分からない。稲庭が動いていないという事は、右腕を失ったあのスタンドより長いのは確かだ

「こんな事も出来たんだ……それと、返すね」

首に引っ付いているスタンドは、手を首に押し付ける。その力は、先程までのより力強かった。その手はその込められた力のまま、動かされた

すると、喉の頸動脈の部分に切り傷が出来て、そこから血が溢れ出てきた

流れる血が制服を染める。俺はハンカチを取り出して傷口を押さえ込んだ

「拭き取った」って事は消えたんじゃないで、『イザベラ』に移したって事だよ？床の汚れを移した雑巾は洗えば汚れは水に『移る』でしょ？」

ニコニコしながら説明する稲庭

油断したつもりは無いが……恐ろしい『スタンド』だ……

傷を押さえている間に、稲庭は自分の『スタンド』の射程内まで近づいて来た

何か行動を起こそうとしてもその考えを拭き取られてしまうから、防御も回避も反撃もする事が出来ない

やられると思い、目を瞑った

「わー！」

「へ？」

何か珍しい物を目にした子供のような声のしたので、確認の為恐る恐る目を開ける

手摺に止まっている蝶々を見て、稲庭は『スタンド』を引っ込めて目を輝かせていた

「ねえ瀬上君、見てよこの蝶！アサギマダラだよ！あたし実物初めて見たよ！」

「ああ……そうだな……」

助かったと、心の底から思った。稲庭が蝶へと近付くと、蝶は手摺から飛んでいった

同時、チャイムが鳴った。予鈴かと思つたら、時計を見るとその針は、五限目の開始時間を指していた

これの示す事實は、俺達は確実に五限目は遅刻だという事だけだった

瀬上除夜 傷と服に付いた血を『イザベラ』で拭き取って貰い、急いで残りのパンを食べた。次の休み時間に優太や宝来達からしつこく追求されたが、『昨日のノートを写させて欲しい』と頼まれただけと誤魔化した。

稲庭早良 『矢』の所持者の目的とスタンド使いが増えている事を除夜から説明され、所持者捜しを手伝う事に。昼御飯は六段のお重に詰めてある為、次の休み時間と放課後に分けて食べる事となった。

TO BE CONTINUED…

委員長と遊ぼう！？（後書き）

対委員長戦、とうにか終わりました

終わり方は、吉良対猫草をイメージしてみました

語り部の除夜君はこの日もう少し活躍します

追跡するはマイ・フレンド？（前書き）

学校が終わっても、『スタンド使い』の来襲は終わらない

追跡するはマイ・フレンド？

六限目の授業が終わった後、俺は優太と共に老化を歩いていた。この時間に廊下を歩いているのは、単純に六限目が移動教室だったからだ

因みに他のクラスメイト達は既に教室に戻っている。俺達が最後だ

「ねえ除夜」

「どうした優太？」

「あれ……何かな？」

そう言って優太は、非常口に敷かれてある緑色のマットに指を差した

正確には『マットの上に落ちてある一冊のノート』に指差した

「普通にノートだろ」

「うん、ノートだね。どうしようか？」

「拾おう、このままほっといても何にもならないしな」

「そつだよね、でも誰のかわからないノートを拾って大丈夫なの？」

「落とし物を拾うのは普通の事だ。それにノートとかは大抵名前が書いてあるだろ、授業で使うんなら科目や所属しているクラスもだ。落とし主が誰かくらいすぐに分かるって」

そう思っただけで拾った。しかし、予想は何時でも裏切られるもので、このノートには使う教科も名前も書かれてなかった

「何も書かれてないね」

「見れば分かる。致し方ないが、中も確認させて貰おう」

そうして俺は悪いと分かりながら、ノートを捲った

「何してるの？」

「うわっ！」

突然後ろから女の声があった

俺達の後ろには、前髪を胸につくくらい伸ばし、顔全体がすっぱりと隠れるように止めてある女子生徒がいた

「これあたしのなんだけど……返してくれる？」

俺は女子生徒に素直に返却した。女子生徒は引いたくるように受け取った

俺はその女子生徒をまじまじと見る。何故彼女は顔を髪で覆っているのだろう。しかも髪留めで留めてある。これで前が見えるのだろうか

「悪いけどそうじろじろ見ないでくれる？私どんな理由でも人に注目されるの嫌いな」

ならそんな髪型にしなければいいのに・・・と思ったが、それは口に出さなかった。きっと何か理由があるのだ

「拾ってくれたのはありがとう、だけどそう簡単に他人のこういったのを見ようとしなない方がいいわよ」

「肝に命じておきます」

「て除夜！HR始まつちゃうよ！」

「ああ！それじゃ落とさないように気を付けて下さいよ！」

俺は優太の後を追った

後ろから何か突き刺すような視線を感じたが、気にしない事にした

「あいつ……あの……いや……それよりあいつ……見た……あたしのノートの中を……」

HRが終わり、放課後

この日は優太はどうしても外せない用があつて遅くなるというので、一緒に帰るのを断念した

「帰つたらまず琢磨と稲庭の事をしんのすけに知らせなきゃな……」

通勤通学路の路の途中にある歩道橋を渡って降りる際に、妙な事が起こった

階段を一步降りようとすると、片足が地面に着く前に『その段から俺の足に向かつて紫色の細い腕』が伸び、足を掴んで下へ引っ張った

バランスを崩した俺は頭から転倒するが、『スタンド』を出して寸前の所で手摺を掴んだ

身体を引き上げようとした所で、手摺を掴んでいる手の下から、緑色を基調とした体色、両腕が紫色で、ガスマスクを被り、腹部には青い布が強く巻き付けられており、喉にバイクのランプのような飾りがある女性のような体の形をしている『スタンド』が現れた

「何だったんだ？アイツは……新手的スタンドには違いないが……」
何が目的だったのかは分からないが、『矢』でスタンド能力を発現し、『矢』の所持者の命令で俺を狙ってきた奴でまず間違い無いだろう

まああれだけコテンパンにのしたんだから本体も相当のダメージがあつた筈だ

再起不能とはいかなくともあれだけ痛めつければ俺を襲おうとはもう考えない筈だ

「まあ……捕まえて『矢』に関して聞いとけば良かったかな……？」

と、俺はこの時その程度にしか今襲ってきた『スタンド』の事を考えていなかった

俺は後になって、『遠隔自動操縦型』のスタンドの恐怖を、深く実感する事となつた

追跡するはマイ・フレンド？（後書き）

除夜君、この日三人目の『スタンド』と遭遇しました

ラッシュの時の掛け声は、結構悩みました

しかし、後から被っているのが分かって変えました

追跡するのはマイ・フレンド？（前書き）

遠隔自動操縦型のスタンドって、原作でも少ないですよね

恐ろしいスタンドばかりですけど

追跡するはマイ・フレンド？

「何というか……今日は色々と『新鮮』な一日だったな……」

この表現は強ち間違いでないと思う。何せ今まで会った事のない『自分と同じ能力を持つ者達』が、今日二人も連続で戦ったし、下校中に歩道橋を渡っている時は謎のスタンドに殺されかけた

それにしても、何で最近になって『スタンド能力』を持つ人間と次々と出会すようになったんだろう？不思議だ

「もしかしたら『スタンド使い』は『スタンド使い』と引かれ合うのかな……」

俺はふと、突拍子のない事を思い立ち、口にした

「まあ俺はまだスタンド能力の事をあんまり知らないんだ。今度琢磨に聞いてみよう……」

そう考えていると、俺の眼前で植木鉢が地面と激突して粉々となる。危なかった。もし後一步進んでいたら頭に直撃していたぞ……

見上げると、横に聳え立つ十階建てのマンションの七階のベランダに、先程ボコボコにした筈のスタンドが『無傷』で立っていた。間

違い無い、あいつが植木鉢を落としたんだ

「てか……何で無傷なんだ？あれだけ殴ったのに……」

あいつは、部屋の中に入って俺の視界から消えた

今すぐに向かいたいが、植木鉢が置いてあるという事は、あの部屋には当然誰かが住んでいるという事だ。そんな所に飛び込んだら、確実に面倒な事態に発展してしまうのは目に見えてる

「少なくとも今日は何時も以上に『事故』に気を付けながら帰らな
いといけないって訳か……」

まだ続く帰路を見て、俺はそう呟いた。心を読める人や機械があれば、心の中も同じ事を思っていたと、この時は自信を持って言える

「た……ただ……今……」

「お帰り、どうしたの？そんな疲弊しきった顔しちゃって、何かあったの？」

若々しい外見の女の人が、俺を出迎えてくれた。俺の義母にしてこの孤児院の院長だ

因みに、『若々しい外見』と特徴で言ったのは、外見こそは二十代前半どころか俺の妹でも通るのだが、俺の幼少期からその若さをどうやってかは分からないが保っているのだ

その後、細心の注意を払って帰宅したが、その過程で何度も死にかけた

ビルの前を歩けば看板が落ちてきて、遮断機の降りた踏切の前で電車が過ぎるのを待っている最中に線路へ突き飛ばされたり、切れた電線に触りかけたりした

その全てに、あのスタンドの姿を見掛けた

自分が普段から通っている路に、これだけ危険が潜んでいたのは驚きだが、何より驚いたのはあのスタンドの俺を殺そうと追ってくる執念深さだ

あのスタンドは何者なんだろう？何故俺を『事故』に見せかけて殺そうとする事に固執するんだ？『スタンド』なんだから生身の人間を殺すのにそんな手間暇をかけないで一気に殺そうとすればいいのに

「お風呂入る？沸かしてあるから……」

「他の……子供達は？」

「まだいいって」

「じゃあ……お言葉に甘える事にする……ここまで精神的に参った下校は初めてだ……」

「何があつたの？」

「事故が連続で俺に起こった。俺はどうか怪我せずに済んだけど」

「じゃあ明日はいい事ばかりが起きるよ」

お気楽な事を言うなこの妖怪はおばさん

確かに、それが人為的？な物でなければ気休めにくらいはなるよ

俺は箆笥から着替えを取って、脱衣場に向かう

「あー……生き返るー……」

体を洗った後、俺は湯船に浸かって足を伸ばす。ここの浴槽は複数の人間が一度に入れるようにしている為かなり広い。一人で入ると銭湯を貸切にしている気分になる

流石に家の中まであいつは来ないだろう。明日奴をどうにかする為に琢磨や稲庭に話そう。野原兄妹はスタンド能力が発現していないから巻き込む訳にはいかない

少し逆上せた所で、浴槽から出ようとタイルに足を乗せる。直後、引き戸の開いた音がした

浴室には引き戸はここと脱衣所を繋ぐそこしかない。多分ここにいる小学生程の歳の誰かが風呂に入りに来たのだらうと思ひ、首を動かすと

――俺は自分の目を疑った

「え?」

『石鹼』を持ったあのスタンドが、棧を越えて浴室に入ってきた。そして、浴槽から出したもう片方の足元を狙って石鹼を投げた。転ばせるつもりか

『プラネット・ルビー』で石鹼を移動させる。『スタンド』は、Uターンして風呂場から出て行った。丁寧に扉を閉める

ここにじっとしているのは危険だ。早く出ないと今度は何をするのか分からない

急いで浴室から出ようと引き戸の取っ手に指先が触れると、勢い良く開いた。そこには、『スタンド』が立っていた

「『プラネット……!」

能力を発現する前に、首を掴んでそのまま俺の体を浴槽に突っ込んだ溺死させるつもりかと思っただが、奴は右手を掲げている。何か持っているようなので、何だろうかと目を凝らす。持っている『何か』を、理解した

それは、髪を洗った後、髪を乾かす為に使う電化製品、そう、『ドライヤー』だった

どうやら俺を感電死させるつもりだろう

それ、事故にしては不自然だぞ！と言いたかったが、水中なのでその声は泡にしかかなかつた

ドライヤーは浴槽へと放り込まれる。『プラネット・ルビー』で水面スレスレでドライヤーを掴み、スイッチを切った

スタンドは風呂場から去っていった。俺は浴槽から出ると急いで体を拭いて服を着た

「上がったよ……いい湯加減だった……」

「の、割には……」

「その先は言わんでいい。何なのかは分かる……それより今日の夕食は鶏の唐揚げだったよね……」

「うん」

「俺が作るよ……」

「今日除夜君は担当じゃないよ」

「今日は疲れていて時間まで起きている自信が無いんだ……だから今すぐにでも何か食べたい……」

「それで大丈夫なの？」

「まだ体力も心も余裕はあるから……」

「……じゃあお願いね……」

俺は必要な用意をした後台所に立つと、まず胸肉を一口サイズに切り、塩を振り掛け、衣を付けて、温めた油にそれを入れる

半分程揚げ終わると、便意が催してきた。我慢するには結構キツイ仕方無い、トイレに行こう

ウチのガスコンロは結構古いタイプの奴なので、火を止めないと危ない

キッチンと火を止め、ガス栓を閉め、トイレに向かった

「スツキリした……」

トイレから出て手を洗った後、続きをする為調理場へ向かう

台所に入ると、俺はギョツとした

何故ならガスコンロには消した筈の火が着いていて、かけていた鍋は無かった

すぐに火を止める為にガスコンロに向かった。だが、俺は「何故かかけていた鍋が無くなったのか」という疑問点が、頭から抜けていた火を止めると同時、後ろから何やら音がした為振り向くと、そこには「まだ十分熱を持った油が入っている鍋を持った」あのスタンドがいた

右足が前へと踏み込まれている。先程の音はこれだったのか

自分のスタンドで、油の入った鍋を破壊した。「スタンド」は何処かに逃げていった

俺は念の为零れた油を消火器で吹きかけ、電話の横にあるチラシを切ったメモ用紙とボールペンを取り、少しの間出掛ける事を殴り書きで書いてテーブルに置いた

「俺は奴の事を甘く考え過ぎていた……よく考えれば『人間が死ぬ程度の事故』が起こり得る場所なんざ何処にだってあるんだ……早い所琢磨に連絡して奴のタイプとかを聞かないとマズい！」

素足のまま急いで外に出て、鍵を壊して自転車に乗った

追跡するのはマイ・フレンド？（後書き）

感想、ご意見等お待ちしております！

追跡するはマイ・フレンド？（前書き）

今回は『遠隔自動操縦型』の説明が主になります

追跡するはマイ・フレンド？

自転車で孤児院から離れ、比較的広く、住宅や電線が敷地内に無い広場の芝生の中心に、直接座り込んで携帯を開き、琢磨へと電話を掛ける

途中、敵スタンドの攻撃は無かった。動いている車を動かして轢殺しようとするかも知れないと歩道の外側を走りながら車道の車にも気を払っていたが、それは無いようだ。まあそんな事が出来たならこんなまどろっこしい事を繰り返す必要は無い、一気に決めればいいのだ

『もしもし須藤です。除夜君に間違いないでしょうか』

「俺に間違いないよ」

『除夜君ですか、どうなさったのですか？』

俺は琢磨に、俺を襲う『スタンド』の事を、なるだけ正確に話した

「という訳なんだよ！何なのか分からないんだよ！幾らダメージ与えてもすぐに直るし、執念深さが半端じゃないんだ！まるで『俺を殺害する事だけ』に重点を置いているみたいなんだ！お前『矢』の持ち主からスタンドに関しての知識を与えられているんだよな！そいつは一体どんな『スタンド』なんだ？」

『待つて下さい……今君を狙っているスタンドの特徴は、『どんなにダメージを与えてもすぐさま回復し』『執念深く君を追い、どうあっても追跡を緩めない』……ですよね？』

「ああそう言ったよ！で、どんな型のスタンドなんだ？遠隔操作にしてはパワーが強いし行動が何処か大雑把だし！」

『……厄介なスタンドに襲われてますね』

「ああそうだよ……で、どんなスタンドが分かるか？」

『そのスタンドは『遠隔自動操縦』 - 『自動追跡型』のスタンドで間違いないでしょう……』

「『遠隔自動操縦』？『遠隔操作型』とどう違うんだ？」

『『遠隔操作』のスタンドは御存知の通り、君の『プラネット・ルビー』をはじめとする『近距離パワー型』のスタンドより『本体』から離れる事が出来る代わりにパワー、スピードが低いです。スタンドのパワーは本体との距離と反比例しますからね』

「ああ知ってる」

『『遠隔自動操縦』、『自動追跡』のスタンドは、これが当てはまらないタイプなんです』

「つまり、本体からかなり離れた場所にいけて、それでいてパワフルな動きの出来るスタンドって事？」

『そうですね。一回放ったら何処までも追っかけて目的……君を追

いにかけているスタンドなら君を事故に見せかけて殺すまで追跡は止めません。どれだけダメージを与えたとしても本体にダメージが来ない、来たとしても大してない為問題無くパワフルに追跡してきます。しかも厄介な事に本体はスタンドが現在どうなっているのかわからないんです』

説得力はある。今までの攻撃だって計画性とかが感じられなかった。本体が操作していないから、あんな強引で無計画な攻撃しか出来ないのか

『無敵にも思えるこのタイプのスタンドには、その性質、性能から来る最大の弱点があります。それは「スタンドを操作する事が出来ない」という事です』

そつだよな。スタンドは追跡と攻撃しか出来ないし、スタンドがどんな状況に陥ろうとそれを本体は知る事は無いんだ。操作出来ない
と……

「……………」

『察したみたいですね。『自動追跡』のスタンド使いの最大の弱点を』

「『身を守る事には向いていない』、本体を逆探されたら」

『その通り』

「そこまでは分かったがどうやって逆探知すればいいんだ？」

『このタイプのスタンドに狙われるという事は、その前に本体と大なり小なり何等かの接触を持ったという事です。今日何かありましたか？』

「スタンド使いになった俺のクラスの委員長が俺に喧嘩ふっかけられたお陰で五限目の授業に遅刻した。朝お前に喧嘩売られたお陰で大遅刻したみたいに」

『まだ怒っているんですか……それじゃ何時から襲われているんですか？』

「下校途中から」

『それなら少なくとも放課後からでしょうね……心当たりはありますか？』

「心当たり……心当たりね……」

『どんな小さい事でもいい……放課後かそれに近い時間、何か何時もと違う出来事が起きましたか？』

「えっと……何時もと違……！」

ある。あのスタンドに最初に襲われる前に、何時もと違う出来事が一つ起きている！

あの女が「本体」に違いない。早くあの女の所に行つて、解除させないといけない

「あるよ……それじゃ今から『本体』を捜しに行く！」

一旦電話を切り、別の場所の電話番号をプッシュする

ボタンを押している時、何かが後ろから飛んできて、俺の右頬を掠つた。恐る恐る芝生を見下ろすと、『野球ボール』が転がっていた

「一体何なんだよさっきの！」

「知らねーよ！」

二人のグローブを持っていた子供が、俺の元へ寄つてきた。このボールで遊んでいたんだろう

二人が俺の前まで来ると、俺はボールを二人に帰した

「はい、ボール。君達のだろ？」

「すみませんでした」

「いや、いいよ。それにしても結構な肩してるんだね」

俺の周り、つまりこの広場にはこの二人はいなかった。ここいらで他にキャッチボールが出来るくらい広いスペースがあつて誰でも使う事の出来る場所は隣の公園しか無い。そしてこの二人は、案の定隣の公園でキャッチボールをしていた

俺は芝生の中心にいた。隣の公園から

「いえ……そうじゃないんです」

「へ？」

「信じてくれないだろうけど……投げた直後に『ボールが宙に止まつてそつちに飛んでいった』んです……まるで幽霊がキャッチして投げたように……」

「信じられないようですけど事実なんです」

「信じるよ……そして君達には一切の非はないから気にするな……いいか？この事は忘れろ、いいな！」

俺はまだまだ奴の事を甘くみていたようだ

充分過ぎる程用心したつもりだったが、奴に対してはどれだけ用心してもし足りないらしい

『ロボット』みたいに目的を達成するまで何処までも追い掛ける……それを相手にするのがこれ程疲弊する事だとはな

「せめて電話番号を押せる場所を探さないと……」

歩道に出て少し走ると、消防署から消防車が歩道を塞ぐ

妙だ。サイレンが鳴っていないし、エンジンの音が聞こえない

その答えは、すぐに判明した。『スタンド』が後ろから消防車を押ししていたのだ。確かにこれならエンジンをかけなくていい

奴は消防車を使って、通路を塞いだ。スピードは出してないが、この距離ではブレーキをかけたとしても間に合わない

「ならこうだ！」

体を傾けて曲がる

だが、奴が消防車を動かしたのは、歩道だけでなく、『左側の車線』を塞ぐ事が目的である事を、車道に出たのに尚も押されている消防車を見て悟った

だが、時は遅く、俺は右側の車線、つまり『対向車線』に入ってしまったのだった

対向車線に入った俺は、そこに走っている『大型トラック』が目に見え飛び込んだ。つまり、俺は自分からトラックに突っ込んでいった、

いや、そう仕組みれた通りに動いた

「この程度なら……俺にとって何の問題もないんだよ」

ペダルを力強く漕ぎ、トラックに向けて進む。見る余裕は無かったが、このトラックの運転手はさぞ驚いたろうな。自転車が対向車線に乱入してきて、更に突っ込んでくるのだからな

だが心配はいらない。何も問題はない

何故なら、接触する前に横の消防車を『軸』とし、消防車のお陰で
がら空きになっている車線の方へと移動したから

まあだが、心臓にかなり悪かったからこれっきりにしよう。そう強
く思いながら、ペダルを漕いで再び歩道に入った

追跡するはマイ・フレンド？（後書き）

自分で書いてて思うんですが、『事故』の可能性って何処にでも転がっている物なんですね

皆さんも事故には気を付けて下さいね

追跡するはマイ・フレンド？（前書き）

『本体』 捜しに疾走する除夜は『本体』に辿り着けるか？

追跡するはマイ・フレンド？

「こ……ここのら少しは時間が取れるかな……？」

サトーココノカ堂の屋上で、息を切らしながら俺は、携帯で学校の番号をプッシュする

あれからも『スタンド』は俺に執拗に襲ってきた。店やビルの前を進めばガラスが割れて破片が降り注ぎ、電線の下を通れば電線が切れてその断面に触りかけたりと大変だった

一番凄かったのは、このデパートの前の交差点で、俺が渡っている最中に奴が停まっている車を動かして追突事故を起こしたという事だろう。お陰で自転車が再起不能になってしまった

それに巻き込まれた俺自身も当然無傷という訳にはいかず、幾つか裂傷を負い、骨折とかにはいかないまでも骨や筋肉にダメージを負った

閑話休題

電話をかけた先は、俺が息が整った直後、出てくれた

『もしもし……』

「本校の生徒で瀬上除夜といいます……すみません。大至急前髪を顔が隠れるように下ろして留めている髪型をした女子生徒の名前と

住所を教えてくださいませんか？」

『その生徒に何か』

「時間が無いんです！知っているのなら早急に教えてください！」

数分後、『彼女』に関しての情報が来た

「名前は『御厨山女^{みくじやまめ}』、二年生で在籍しているクラスは四組、誕生日は2月23日で血液型はB型、長野出身で現在は通学の為、マンションに一人暮らしをしている……この情報で間違いないですよね？」

『間違いは……』

彼女の住んでいるマンションが何処にあるかは知っている。問題は、そこまでの『距離』だ

別に遠い訳ではない。ここから一キロも無いのだから、近いと言えば近いだろう

そう、『近くて遠い』一キロも無いが、そのくらいはあるという事なのだ

現在の時刻は七時二十分を少し過ぎた所で、時間的に薄暗くなっている。遠方に通勤通学する人達は、帰宅している最中の人も多いだろう

「……もういい、ウダウダ考えるのは時間の無駄だ……」

向かう為に階段へ向かう。エレベーターはワイヤーが千切られたら洒落じゃ済まないし、エスカレーターも危険だ

階段が安全な訳ではないが、他と比べれば『一番危険が少ない』。だから階段で降りる

但し普通に降りるのではなく、手摺をしっかりと掴み、屈んだ上でだ

少し恥ずかしいが、これで一步一步ゆっくり下りていくのが、一番無難な方法なのだ

何度も足を掴まれて引っ張られたり、背後から押されたりしたが、お陰で少しバランスを崩すだけで『事故』には至っていない。時々階段を利用する人を突き飛ばして巻き添えを食らわせようとはするが、それは『スタンド』でどうにかした

三十分近くかかったが、どうにかデパート内での最大の難解はクリアした。後は多少のダメージは覚悟の上で出口までまっすぐ突っ切る。・・という事はしない。辺りを見ながら一步一步慎重に歩き、危険を感じたらそこから少しだけ走る

周りからの視線を感じるが、そんな事気にしてられない。確かに拳動不審だが、こっちは命が掛かっているのだ

時間をかなり掛けてデパートから出た時、時間は既に八時を回って

いた。生きている事に感謝しつつ、『本体』のいるマンションへと
駆け出す

—LDKのマンションの623号室。そこが、御厨山女が賃貸して
いる部屋だ

その部屋のリビングで、パジャマ姿の御厨が、髪を後ろに縛った状
態で一枚の『写真』を見ながらCDラジカセで再生された音楽を聴
いていた。その写真には、瀬上除夜が写っていた

「……それにしても、こういう偶然ってある物なのね」

カップに淹れたミルクティーを飲みながら、そう呟いた

私は二ヶ月前、『謎の男』に『矢』で射抜かれ、それから暫くして
自分の中に眠る能力、名付けて『マイ・フレンド』に初めて気付いた

最初の発現は一ヶ月前前で、以降特に『条件』を満たすまでの事を
した人物がいなかったので発動はなかったが、今日それを偶々満た
した奴が、『奴』が殺して欲しい相手だという事実を知った時は、
実に驚いたものだ

さて、この写真の彼、確か『瀬上除夜』がここまで来た時の事を想
定して、やっておいた『準備』をもう一度確認しておこう

『ポリタンク』も、『絞った布』もある。窓は全部『閉まっ
ていて、玄関へ通じるドアは『半開き』だ

何もかも、『良し』

さて、お茶とお茶請けを準備はしといておいてやるか……事故でく
たばったかも知れないが万が一でも来るとしたら客として迎えない
といけないからな

キッチンからクッキーを持ってくると、半開きにしておいたドアの
向こうから足音が聞こえてきた

「思った以上に早いな……」

足音の間隔からして走っているのだろう

こんな時間に走る人を私は知らないし、音は大きくなっている事か
ら、『彼が来たと見て間違い無かるう』

「よくここまで来たね……ゆっくりしていきなよ、粗茶とそのお茶
請けしか出せないけどね……」

お茶を淹れに台所へ向かうと、ドアを力強く開ける音が聞こえた

追跡するのはマイ・フレンド？（後書き）

次回で『マイ・フレンド』戦は終わらせるつもりです

スタンドの名前は『イザベラ』同様、ジミソンの楽曲から

追跡するのはマイ・フレンド？（前書き）

『マイ・フレンド』戦決着です！

追跡するはマイ・フレンド？

玄関のドアは半開きにされている部屋がある。管理人から聞いた御厨の部屋の所だ

「『罨が張ってますよ』って事か……いいだろうよ、思惑にまんまとハマってやりますよ!」

そう意気込んで俺は半開きのドアに手をかけて勢い良く開き、玄関に足を踏み入れる。一人の女が、笑顔で俺を出迎えてくれた

「あら今晚は……こんなに息を荒げて何の用かしら？瀬上除夜君？」

「髪を上げてはいるが……御厨山女先輩で間違いないな？」

「そつよ……こんな所で立ちっぱなしも何だし、上がらない？」

「こつやって顔を合わせるという意味では初めまして。改めて自己紹介させて頂きます。私の名前は御厨山女、『スタンド』の名は『マイ・フレンド』」

ここまで来るまでの『マイ・フレンド』の一方的な攻撃によりボロボロになった靴を脱ぎ捨て、用意されていたおろしたての来客用の

スリッパに履き替え、言われるがままにリビングまで来た

その途中、幾つかの『ポリタンク』とその上に被さるようにかけてある『何処か結構臭いだ事のあるような臭いのついたクシャクシャの長い布』が目に入った

現在俺は、用意された茶を啜りながら相對している御厨の顔を見る
じっくりと見てみると、今までに会った事のある女性の誰よりもと
いうのはオーバーだが、上位三位には食い込むだろうと考える程、
顔立ちは整っている

俺の視線に対して、彼女は不機嫌そうに顔をしかめた

「何ジロジロ見てるの？私の顔に何かついてる？」

「いや……綺麗な顔してるなあって……」

「見世物じゃないの。だから必要以上に見ないでくれない」

「すみません……」

綺麗なんでつい見とれてしまった……

気を取り直して御厨に質問をする

「「どうやって『スタンド使い』になった？」」

「『矢』で射抜かれて」

「やっぱりか……次の質問、何で俺にスタンドを放ったんだ？」

「君が私のノートを勝手に見たから……私の『マイ・フレンド』は誰かが私の秘密にしたい情報を勝手に詮索しようとした事を私が知る事で発動するからね」

詮索しようとかそんな気持ちは特に無いんだが……確かに見たけどほんのちよっとだし……

そう思われなかったと言われたらそれまでだけど……

茶を一口口に含むと、俺個人が気になってしょうがない事を聞いた

「違う質問、これは個人的な好奇心から来る質問なんだけど……何で顔を見られるのがそんなに嫌がるんだ？そんな綺麗な顔してるのに……」

「ありがとう、自分のルックスに関して誉められるのは初めてだから素直に嬉しいわ」

にっこりと笑顔を作る

可愛すぎていて少しドキッとしたが、気を落ち着かせ、平常心を保つ

「話したくなければ話さなくていい……誰だって秘密にしたい事、話したくない事はあるから。俺にそれを話すよう強要する権利は無い」

「いいわよ……喋ってあげる」

その笑顔のまま、彼女は自分の過去を話してくれた。その内容は、途中で聞いた事を後悔する程のものだった

彼女は中学の頃、自分の所有物を盗まれたり、着替えや入浴、就寝中の姿を毎日のように覗かれたり盗撮されたり、時として人前でそれをやる事を強要されたり、肉体的や性的な暴行を受けたり……何かもう嫌になってきたのでここで止める

このような事を、卒業するまで全校生徒から、時として教師からも受けていたらしい

「毎日が苦しかった……両親は仕事人間で私の事なんか全然構ってくれなかったし相談所に話そうにもいじめの主要人物の一人が政財界の大物の娘さんで予め手を回していたみたいで全然相手してくれなかったし……プライバシーとか無いに等しかった。オーバーだろうけど生きる事自体が苦しかった……死んだらどれだけ楽だろう……その事ばかり考えていた……どうしたの？もうお茶飲まないの？」

「いえ……食欲が落ちて……」

こんな重い話聞かされて食事が出来る程俺の神経は図太くない

「まあ充分食べなさいって……何せ『最期』の食事になるんだから……」

「『最期』？」

「忘れたの？私の『マイ・フレンド』の事を……私が『マイ・フレンド』を何時解除したのかしらね……」

布が被つてあつた『ポリタンク』を持って、『マイ・フレンド』が、この部屋にやってきた

持っているポリタンクには、小さい『穴』が空いているのか、底から中身がちろちろと流れている

「『マイ・フレンド』！」

「終わるまで待っていてくれたのかしら？気が利くわね……」

「『プラネット・ルビー』！」

マンションの室内。充分射程距離内だ

『プラネット・ルビー』で『マイ・フレンド』をブチのめす。その際ポリタンクの蓋が外れ、その中身がぶちまけられ、俺と御厨はそ

れを全身に浴びた

「おい……この液体の臭い……まさか……」

「そう……何処にでもある普通の『灯油』よ」

『マイ・フレンド』は消えている。台所の方から『布』を裂く音が聞こえた

「おい！お前の『スタンド』は『これから何する気だ』！まさか……」

「私には分からないわよ。『マイ・フレンド』は私が操作している訳じゃないからね……多分この部屋に火を点けるつもりで動いているんじゃない？」

「解除しろ！今すぐに！」

「もう手遅れなんじゃないの？」

ガスコンロに火を着ける音がし、火が燃え広がる音が後で耳に入った。何が起きたのか、何が起ころうとしているのかは想像を巡らす必要もない

ガソリンをかなり効率良く撒いていたらしく、あっと言う間にこの部屋全体に火が回った

「お前の『スタンド』はどうなってるんだ！本体のお前も巻き添えで殺すつもりなのか？」

「私の『スタンドの能力』は、『対象を事故に見せ掛ける、または事故を起こさせて殺す』だけ……つまり無関係な人を巻き込むような無差別的な『攻撃』もするの……それは今までで骨身に染みてるでしょ？」

「『スタンド』を解除しろ！今すぐにだ！」

「既に解除してるわよ……もう『無意味』だしね……」

警報ベルが鳴り響く中、平然とした顔で言い放つ。恐れとか、そう言った感情はその顔からは微塵も感じ取れなかった

ここから逃げなければ

玄関には行けない。とっくに火が回っている。力づくで突破しようとすればまだ出来るかも知れないが、今俺達はガソリンを浴びている。実行したら火だるまだ。瞬間移動も上手く出来るかどうかは微妙だ

逃げるとしたら一ヶ所しか無い！

俺は御厨を引っ張って、ベランダに通じる窓のある部屋まで行った。幸いまだ火は回っていない

俺は『スタンド』で窓を破壊し、御厨を抱え、ベランダに乗り出す
そして御厨を窓から放り投げ、俺もベランダから飛び降りた

「『プラネット・ルビー』！」

御厨を『軸』にして円を画くように瞬間移動をする

俺の『プラネット・ルビー』の瞬間移動は、『軸』となる物さえあれば、上空や真下にも移動出来る。それを使い、地面に着地し、落ちてくる御厨をスタンドでキャッチした

「痛たた……」

フィードバックで両腕が痛む。何メートル上から落ちてくる人間キヤッチするというのは、スタンドでも結構キツかった

「怪我はないか？」

「な………何で？」

「？」

「何で………助けてくれたの？」

「近くにいたから、それだけ」

「は？」

怪訝な表情で俺を見る

「そんな気にするなよ先輩。お互い助かって何よりじゃないですか」

「……貴方バカって言われない？」

「時たま……じゃあ俺帰るから……これ以上ここにいたら警察にうるさく聞こえるだろうし……それじゃあまた」

俺は歩いて帰った

「あーあ、完全に……私の敗北だ……でも何でだろう？結構気分がいいな……」

瀬上除夜 帰宅した直後熟睡。自転車は結局買い換える事となり、除夜が半分出した

御厨山女 家財道具の一切が燃え、後日、またずれ荘に引っ越した。除夜達に男や『矢』に関しての話をするが、琢磨や稲庭同様殆ど何も知らず、進展は無かった

この火災による死者はなく、怪我をした者も後遺症が遺ったりする程の物ではなかった

T O B E C O N T I N U E D

追跡するはマイ・フレンド？（後書き）

どーにか終わりました

うん、どーにか

次当たりからしんのすけが出てきます

しんのすけの日曜参観？（前書き）

久々にしんちゃんも出て来ます！

しんのすけの日曜参観？

俺が琢磨、稲庭、御厨先輩と一日に三人ものスタンド使いと出会い、戦った日から、早一週間が経とうとしていた

御厨先輩は微妙だが、琢磨と稲庭は俺に明確な協力の意思を示している

以上が、『スタンド使いを増やしている者の存在を知った』あの日から変わった事だ

逆に言えばその他の事 『弓と矢』を持つ男に関しては未だ手詰まり状態、つまり進展はなし

野原兄妹のスタンド能力も未だ発現していない

『スタンド』に関して一番知識のある琢磨でも、これに関しては

『恐らくですがスタンドを発現させるだけの『きっかけ』に遭っていないからだと思います』

と、曖昧な回答をするだけだった

きっかけというのは琢磨によると、『人それぞれだけど主に「自分の身を守る」「相手に怒りをぶつける」という気持ちが高ぶる』機会があれば精神力独特のスタンドが発現するという

実際に俺も今までこうした感情でスタンドを発現した事があるので
説得力は充分過ぎる程あった

閑話休題

俺は今、何をしているかと言つと……

しんのすけの通う、『アクション幼稚園』にて、父兄代理として日
曜参観に来ていた

その理由は昨日に遡る

その日、俺と琢磨、稲庭が野原家に集まって定時報告会みたいな事
をしていた。御厨先輩も誘ったが、先輩は友達とシヨッピングに行
く約束をしていて、断られた

因みに御厨先輩は、あれから髪型を変え、雰囲気も暗い感じが無く
なった。

話を戻しその集まりだが、前述した通り大した進展はなかった事か
ら当然報告会自体はすぐに終わり、後は一緒に公園まで行って缶蹴
りしたり、鬼ごっこしたり、家に帰って「アクション仮面」や「カ
ンタムロボ」、「不思議魔女っ娘マリーちゃん」や「魔法少女もえ
P」のビデオを見たりと、完全にお遊びだった

余談ではあるが「魔法少女もえP」のビデオは、魔法を使わず30
分間算数の宿題をやるだけの、つまらない内容だった。よくあんな

内容だけで30分も持たせる事が出来たな。と、この話の脚本と演出を考えた人間を尊敬した

見終わった後で、しんのすけの親父さん　ひろしさんが帰ってきた。何やら気まずそうな顔をしていたと思えば、急にしんのすけに對して頭を下げた

その理由は、今日ある日曜参観に行く約束していたのに、急に接待ゴルフを命じられたからだ。しかも相手は勤めている会社の長年のお得意様で、断ろうにも断れなかつたらしい

みさえさんは、明日は自称弟子の若い主婦に洗濯のやり方を教えに行くという約束を取り付けた為、同じく行けない（本当に余談だがその時しんのすけが『人様に教えられるような腕じゃないから逆に教えて貰った方がいいんじゃない？』と言ったらグリグリ攻撃を喰らわされた。しんのすけ、思った事を素直に言うのは構わないが、ちゃんと言葉は選ばないと敵を不用意に作るだけだよ）

しんのすけは少しだけ寂しそうだったのと、俺自身は今日は特に予定はないので、代理を名乗り出た

以上が俺がアクション幼稚園にいる経緯である

暫く立ちっぱなしでキツかったが、漸く終了の鐘がなった

「あ」

立ちっぱなしだったので気分転換で窓越しに外を見ると、ガラスに

水滴が次々つついた。時間の経過と共に激しくなる

今日の天気予報は確か「八時から時々雨を降る」と言っていたので、一応傘は持ってきている。だがここまで激しい雨の降る中帰るのは嫌だから終わるまでに止んでほしいと思った

「除夜のお兄さん」

しんのすけに呼ばれた為、声の掛けられた向きに顔を向ける。すると、しんのすけが友達を五人連れていた。五人共俺を興味深そうに見ている

まあ当然か。参観日に得体の知れない男が親の代わりに来たんだから

159

「ねえしんちゃん、そのカッコいい人誰？」

坊主頭で気弱そうな顔をした子供、佐藤マサオ君が、しんのすけに訊く

「えっとね、オラと母親違いのお兄……」

何処ぞの昼ドラみたいな事を言い出そうとした為、しんのすけの頭に手刀を叩き込んだ

「嘘だ、俺は最近コイツと仲良くなった瀬上除夜って言うんだ。宜しくな」

「宜しくお願いします」

「宜しく」

「宜しく……お願いします……」

簡単な自己紹介をして（しんのすけから多少は聞いていたが）彼等は俺に質問を次々とした

高校生が幼稚園児とどの様な経緯で仲良くなったのか訊かれるかと思っただが、それは数多くの質問の中に無かったので逆にそれを質問したが、しんのすけには高校生や大学生の友達が何人もいて、彼等もその人達と会った事があるからだと言う

鐘が鳴り、よしながという女の先生が来て、しんのすけ達は自分の椅子に座った

ここまででは、俺も昔体験した通りの幼稚園（俺が通ってたのは保育園だが）の日曜参観だった

「雨雨降れ降れ母さんが、蛇の目でお迎え嬉しいなあ、ぴっちぴっ

ちジャブジャブランラン……」

日本人なら誰でも子供の頃聴いた歌を口ずさみながら、履いた長靴で水たまりを踏みつけて水飛沫を上げながら

茶色いレインコートを着込み、半透明の傘を差した男が幼稚園の敷地内に入って来た

「『あの男』の話によると……ここにいるみたいだな……『彼』は……」

男の右手には、瀬上除夜の写った写真が握られていた

しんのすけの日曜参観？（前書き）

アクション幼稚園に現れた男が、しんのすけと除夜に牙を剥く！

しんのすけの日曜参観？

結構激しい雨で、降り始めて数十分で既に地面は水浸しだ。これならいける

「僕のスタンド、『ストウーピッド・ライク・デイス』の能力を、存分に発揮出来る……」

男の背後から、緑色を基調とし、バッファローの角の生え、機械のような関節が剥き出しとなっている人型のスタンドが出現した

日曜参観は大抵午前中までに終え、そして大抵翌日の月曜日が代休となる。この幼稚園の日曜参観も例外でなく、正午になる前に終わった

俺の希望を裏切って、雨はまだ降っている

「帰るのに一苦労しそうだな……」

「傘とか持ってきてないの？」

「持ってきてるよ、俺は毎朝天気予報だけは確認する事にしている

んだから」

「オラは、毎朝美人のニュースキャスターのおねいさんの顔をチエツクは、する事にしてるんだから」

「……本当に女好きなんだねお前は」

幼児とは言え異性に興味を持つのはごく普通の事だからそれに関しては何も思わないが、だったらもう少し早く起きれないのだろうか
みさえさんから聞いたが、こいつは毎日のように寝坊しては幼稚園バスに乗り遅れてしまう為、先生の間でそれで賭けをされている事もあったとか……まあその先生達は友人同士だと聞いたしその程度なら何ともないだろう、多分

「まあいい、帰るぞ。早く帰ってテレビを見るんだろ？」

「おう！『アクション仮面VSハイグレ魔王』がテレビであるんだぞ！早く早くう〜」

「はいはい」

外へ出ようと、ガラス戸の取っ手に手をかける。ふとガラス越しに外を見ると、レインコートを着込んだ男がいた

最初この園に通う園児の家族の誰かかと思ったが、後ろに立つスタンドを見て、すぐにその考えを打ち消した。そしてガラス戸を開く

為に指に力を込める……が……

「あれ？」

「どうしたの？」

「開かない……」

「鍵は掛かってないよ？」

「マジで開かないんだよ……？……?!」

足元が『冷氣』と言っていい程冷えた空気に触れたので、下を見
みる

ガラス戸の棧は、『凍り付いていた』。これじゃ戸が動く訳がない。
雨も『ガラスに当たる度に凍り付いて』、屋根からは『氷柱』
が垂れ下がっている

（この時期に、関東で氷柱が下りる訳がない、大体部屋は『普通に
暖かい』んだぞ！）

この異常事態の答えは一つしかない。『スタンド使い』の仕業だ

奴が『スタンド能力』を使って、この幼稚園を氷漬けにするつもり
なんだ

この異常事態に、他の園児達も恐怖していた

「仕方無い……『プラネット・ルビー』！」

俺はスタンドでガラス戸をぶち破った

「しんのすけ！来い！止めに行くぞ！」

「お……おお！」

「しんのすけ、お前一体……」

「風間君今は何も聞かないでオラを信じて！」

「この現象が何なのか大体察しています！ガラス代は弁償するから今は外に出ないで机か何かで入口を閉じて下さい！」

俺は急いで外に出て、レインコートを着ている男のもとへ向かう

今の内に仕留める！

そう力強く思い、五メートルくらいまで距離を縮めると……

「！」

足がいきなり『動かなくなつた』。妙に足下が痛い。まるで足下が霜焼けになつたみたいだ

見下ろすと、両足が霜焼けどころではない状態になっていた。何故なら両足の足下が『凍結』していたからだ

「危なかつた……園からあんたが出た時『靴』にかかつた水が凍るようにしたんだけど時間がかかる物だね……まあ雨が降つてて傘がなくて近くに雨宿りできそうな所も無いんじゃないや走るのが普通だし、それだとあまり水は足にかからないし……」

「あんた何言つてるの？」

傘を差しているしんのすけが言う

「僕の名は塩屋常陸^{しおや ひたち}14歳……スタンドは」

後ろの、角の生えた人型ロボットのようなスタンド像を前に出した

「『ストウーピッド・ライク・デイス』……半月前に『矢』で射抜かれた事で引き出されたこのスタンドだよ、瀬上除夜さん」

「俺の名前知ってるって事は……お前『矢』の所持者からの刺客か」

「そうなるね、まあ金で雇われただけだけ……」

「俺を殺すように？」

「そっだよ？再起不能でもオーケーだけど……引き受けただけで50万貰ったからね」

琢磨の話では引き受けただけでは20万だった

恐らくスタンド使いを三人一日で倒した（と言えないのが一人か二人いるが）のが一因しているのだろう

「成功報酬は？」

「一千五百万……いいの？じつとしていればじつとしている程身動きが取れなくなるよ？分かってると思うけど持続性のあるスタンド能力から逃れるには『本体』を叩くのが一番手っ取り早い方法だ……けれど、それは時間が経てば経つ程難しくなるよ……」

確かに……既に全身を濡らす雨は凍っている……まだほんの少し動けば振り払える程度だがそれが続けられる物ではないのは分かる。雨が止まない限りは本当にこの攻撃は振り払う事が出来ない

そしてそれを待つ程俺はお人好しじゃない。倒される前に倒す！俺は動く事は出来ないが、俺のスタンドの射程内にお前は十分入っている！

「ゴラア！」

『プラネット・ルビー』で殴りかかる。それを、『ストウーピッド・ライク・デイス』はいなした。パワーではなく、技術でいなしたという感じだ

「精密動作性なら結構自信があるんだよ……僕のスタンド……パワーやスピードは全然負けているけどね……」

『能力』で塩屋を自分の右横に『瞬間移動』させ、足に凍り付いた雨を砕き、俺は右に数歩寄った。この距離ならラッシュを叩き込む事が出来る

拳を強く握って、ラッシュを叩き込もうとしたその瞬間

踵に何かぶつかって、それによってバランスを崩した俺は後ろに倒れた

俺の横には、『ストウーピッド・ライク・デイス』がいた。何が起きたのかは想像を巡らす必要は無い。問題は後ろに『水たまり』があるという事だった

ただの水たまりではなく、水面から『湯気』が立っており、ブクブクと泡が出ている

この『水たまり』が何であるのかを理解した。が、何かしようとする前に、俺は水たまりに背中から突っ込んでしまった

そう、『沸き立つ熱湯』の中に

(これで……これでこいつの『スタンド能力』が分かったぞ……)

しんのすけの日曜参観？（後書き）

さて、どんな能力なのでしょう？

ヒントは、『氷』と『熱湯』から。この二つ、実はある共通点があります

次の話の始めあたりで明かしたいのでお楽しみ？に

スタンド名はダニエル・パウターの楽曲から

しんのすけの日曜参観？（前書き）

『ストウーピッド・ライク・デイス』の能力とは？

そして、しんのすけに変化が？

しんのすけの日曜参観？

ただの水たまりで浅かったとは言え、背中から沸騰した湯に飛び込んでしまったダメージは結構キツかった

歯を食いしばって痛みを堪えて立ち上がり、塩屋を真っ向から見

「お前のスタンドの能力……水の『融点』と『沸点』を自在に変える能力だろ？自由度がどれだけあるのかは分からないが、少なくとも『常温』で水を凍らせたり沸騰させたりする程度は出来る……違つか？」

塩屋はニコリと笑った

「ハイ、その通りだよ、全然正解……異なるとしたら『水』じゃなくて『大気中に触れている液体全て』で『その液体の本来の融点と沸点の間』……てところだよ……」

「ねえ除夜のお兄ちゃん、『ゆーてん』と『ふつてん』って……何？」

「簡単に言うと融点は液体が固まったり固体が溶け出す温度の事。沸点は液体が蒸発したり気体が液体になる温度の事、物質ごとにその温度は異なり水は摂氏0 が融点、100 が沸点」

「何か……大した事無い能力って感じだぞ」

しんのすけのその発言に、塩屋は笑った

「『大した事のない能力』……ね、確かにそうかもね……僕の能力は射程距離に一定量の液体がないと無力だからね……だからこそ雨の日を狙って来たんだよ……その大した事のない能力を發揮させる為にね……」

塩屋は自信たっぷりに言い放った。確かに、『雨』の日なら止まない限りは『水』は絶えないし、止んだとしても『水たまり』として場に残る

俺の能力はこういった広範囲に影響を及ぼす能力とは相性が悪いみたいだ

「さて……そろそろ再起不能になって貰おうか、全身火傷と全身凍傷のどっちがいい？」

「どっちも……お断りだ！」

「じゃあ僕が決めるね。まず、全身火傷にする」

指をパチンと鳴らした

すると、俺の体を濡らす雨が、湯気を立て始め、熱くなった

それだけでなく、降り注いでくる雨も、一滴一滴が凄く熱かった。雨を沸騰させて、『熱湯のシャワー』にしているんだ

「悲鳴を上げないんだ……やせ我慢？」

「……………」

「じゃあ……その状態で押されたら、あなたは上手くバランスを取る事が出来るかな？」

奴のスタンド、『ストウ・ピッド・ライク・デイス』が迫ってくる
攻撃するより逃げた方が賢明だ。射程距離外に逃げるしかない

「あんたは今射程距離外に逃げる事を考えている……でもそう簡単に行くかな？僕のスタンドの射程距離は一キロメートル……それは『僕から離れていられる距離』であり、『能力の有効範囲』でもある……逃れようとしている内に全身火傷は確実だろうね……」

一キロ……能力使っても絶対にダメージから逃れる事は出来ない……
つまり前進して奴を叩くしか道は無いのか……

この時俺は、焦ってしまい、注意点を忘れてしまい、ミスを犯した

突っ走る為に右足を『ぬかるんでいる地面』に踏み込んでしまった

「……………な？」

地面はぬかるんでいた為、『靴底が凍結してしまう』。俺は靴を脱ぐが、奴はそのタイミングを見計らって前方に『ストウーピッド・ライク・デイス』を発現させ、俺を突き飛ばした

後ろに転ぶ俺を、『ストウーピッド・ライク・デイス』が襲い掛かる。俺は『プラネット・ルビー』で攻撃するも、簡単にいなされてしまい、逆に腹部に拳を打ち込まれてしまう。遠隔操作故パワー自体は弱かったが、一瞬の隙を作るには奴にとって充分だった

『ストウーピッド・ライク・デイス』はその一瞬の隙について俺の喉を掴み、水たまりに叩き付けた。水たまりは熱湯になっている。しかも声を出さないように、口も押さえられた

動こうにも巧みに押さえつけられていて、体を起こす事も出来ない

「気を失うまで押さえている……………後は手足の骨を砕けば再起不能は
確実だな……………」

背中からボールを取り出した。そうか、スタンドにパワーが無いのならそつちのが確実だよな

「オイ！止める！」

「？」

しんのすけが塩屋に向かって叫ぶ

「もうこれ以上は止める！『スタンド』を解除してここから出てけ
！」

「何？君、スタンドの事が見えてるみたいだけど興味ないから園内に戻りなよ。流石に小さい子供の前でこんなトラウマになりそうな事をしたくないし……」

「何やってんだ……逃げろよ……アドバンテージは奴にあるんだぞ、お前スタンドを扱えないんだぞ……」

そんな俺の切実な想いを無視するかのように、しんのすけは塩屋に啖呵を切るのを止めなかった

「じゃあオラからやれ！今オラを見逃してみろ！何時かお前の木の根を止めるぞ！」

「……『息の根』ね」

「おおそれぞれ……だから最初にオラを倒せ！そうしたら戻ってやる！」

「……こんなバカに構ってる場合じゃない！『ストウ・ピッド・ライク・デイス』！除夜の口を開けて熱湯を注ぎ込め！」

「させるかあ！」

しんのすけは塩屋へと体当たりした

「……除夜が終えたら君も……」

「やらせない……除夜のお兄さんはオラの友達だ……だからオラがオタスケするんだ！」

しんのすけの背後から、『透き通った人型の何か』が出現した

「11……11ねは……」

しんのすけの日曜参観？（後書き）

しんちゃんのスタンドの姿と能力は、次の話にて

しんのすけの日曜参観？（前書き）

友が窮地に立たされ、発現したしんのすけのスタンド！

果たして、この窮地を脱する事が出来るのか？

しんのすけの日曜参観？

俺と塩屋は、しんのすけの後ろに出現した『スタンド』に注目する。その姿は、後ろの歯の左右三本ずつが上顎を突き破って空に向かつて伸びており、口から覗かせる歯は、鋭く研がれた刃物を連想させる。そんな立派な歯を持った全身に濃い緑色の体毛の生えた、上半身裸で、下半身に甲冑が纏われている、腰に一本の日本刀を差した人型のイノシシだった。

スタンドの姿を見て、塩屋はしんのすけから数歩距離を取った

「な……何だその『スタンド』は！ど……どんな能力なんだ！」

「おいしんのすけ、そのスタンド動かしてみろよ……」

「スタンドを……動かす？動かせるもんなの？」

「お前……ついさっきまで何を見てたんだ？」

「『ストウーピッド・ライク・デイス』！除夜の動きを止める！」

奴のスタンドは、俺の両腕の肘を踏みつけて押さえ込み、水たまりの水を掬って二の腕にかける

かけられた水は凍り付き、俺を拘束する拘束具となった。腕に力を込めて破壊しようとするも、何度もかけられた事でより強固な物と

なる

足にも同じ様に枷で封じようとするが、させるつもりはない。右膝に水をかけている隙について、『プラネット・ルビー』で蹴りを入れようとする。そうする事は読まれていたようで、寸前でいなされ、逆に攻撃された

「僕のスタンドを甘く見るなよ……不意打ちを食らわせようなんて考えないと思った？」

「しんのすけ！早くやれ！スタンドの動かし方は基本的に普通の道具を使うのと同じだ！どう動かすかをイメージすれば大抵動く！」

「よし！」

「させるか！」

俺の足に水をかける作業を中断し、『ストウ・ピッド・ライク・デイス』は両手で水を掬ってしんのすけのスタンドへと向かう。『ストウ・ピッド・ライク・デイス』が両手の水をスタンドにかけようと腕を動かす

同時に、しんのすけのスタンドが、『ストウ・ピッド・ライク・デイス』の胴体に拳を何発も叩き込んでいた。スタンドと共に、フィードバックにより塩屋が吹っ飛ぶ

「近距離パワー型……それもかなりパワフルだ……スピードも凄い

し」

「おお……凄いでオラのこれ！よし！一気に畳み掛ける！」

しんのすけのスタンドは、一步も動かない。そして、後ろを向いた

『恐いからヤダ』

スタンドが喋った？

いや、本体と独立した意志を持ったスタンドがある事は琢磨から聞いている

それより、このスタンド本体に露骨に逆らったよな？

「おい！お前はオラのスタンドなんだろ！」

『そうだ、私はお前が「矢」に刺された事で生まれたお前のスタンドだ、だが私は自我を持って生まれたスタンドだ、「恐い」と思っ
て何が悪い！』

すんげーハッキリと情けない事言い切りやがったよあの豚、『自我のあるスタンド』は必ずしも思ったように動く事はないのは聞いているけど限度があるだろ

笑い声が聞こえる。塩屋はしんのすけのスタンドを指差しながら爆笑していた

「何それえ……凄いやスタンドだな色んな意味で、自我が強過ぎて制御しきれないの？」

『ストウ・ピッド・ライク・デイス』をしんのすけから引かせる塩屋判断は正しい。パワー型のスタンドは強大な破壊力を持つがその破壊力故に本体から遠くへ離れる事が出来ない

塩屋は俺達から十メートル程離れた。俺のスタンドの射程距離も計算してそこまで離れたんだろう

「さて……この距離を保ちながら一方的に君達に攻撃させて貰おうか」

『しんのすけ』

「何？ぶりぶりざえもん」

『ぶりぶりざえもん？』

「オラの考えた救いのヒーローの名前」

『そんなカッコ悪い名前は嫌だ！もっとカッコいい名前を付ける！』

「えー、ワガママだなあ」

『まあそれは置いて、お前は奴を倒したいのか？』

「うん！」

『分かった、協力してやろう、「この形態」ではせいぜい二メートルちょっとしかお前から離れる事は出来ないが「別の形態」であればこの距離からでも奴に攻撃を与える事が可能だ』

「ホントに？」

『私は嘘はつかん』

「じゃあさっさとやって！」

『「お願いします」は？』

「えーっと……言わないと駄目？」

『人に何かを頼む時は「お願いします」と言うのが礼儀だろうが！』

「……お願いします」

『それと忘れるんじゃないぞ、お助け料一億万円、一回の分割払いも可』

それじゃ『分割』払いにならねえよ。どこまでふざけた『スタンド』なんだよ

「本体にこんな口を聞くとは……随分とユーモラスなスタンドだね」

「いやーそれ程でもお」

いや、誉められてねーから

「それじゃあまずそのふざけた『スタンド』から……へ？」

僕の目は、一瞬どうにかなったのかと思った

何故なら、しんのすけのスタンドが、五センチ程の大きさとなって、沢山増えて僕と『ストウーピッド・ライク・デイス』に向かってきたからだ

向かってくる百匹以上のスタンドを『ストウーピッド・ライク・デイス』で四、五匹潰すが、本体には何のダメージにもなっておらず、大半が僕の『スタンド』をしがみついて押さえつける

残りのスタンドが一丸となって僕の額に触れてそこから押し倒した僕が倒れる直前、スタンドが僕から離れる。僕はそのまま後ろから倒れた

「『群生型』の一面を持つスタンドね……確かに驚いたけど……そのままトドメを刺さずに退いたってのは……」

しんのすけを見てみると、今度は緑色の体毛の生えて膝当てと肘当てのついたスーツを身に纏っていた

頭にはイノシシの頭部を象った、水色のバイザーのついた帽子を被っている

「オラ、参上！」

僕に向かってポーズを決めた。どういう事だ？何なんだこのスタンドの『能力』は？

しんのすけの日曜参観？（後書き）

しんのすけのスタンドの像はこんなです

『エコーズACT3』や『チープ・トリック』、『セックス・ピストルズ』等と同様に自我を持っており、ある程度自分で考えて動きます。性格は殆どぶりぶりざえもんになってしまいました（笑）

対『ストウーピッド・ライク・デイス』戦、決着間近！

しんのすけの日曜参観？（前書き）

『ストウ・ピッド・ライク・デイス』 戦決着！

しんのすけの日曜参観？

一体何なんだしんのすけのあの『スタンド』は

『スタンド』は一人一能力の筈だ。それなのに次々と姿を変え……

(姿を変える……そうか、あの豚のスタンドは『色んな姿に変わる事が出来る能力』なんだ)

「スゴいぞぶりぶりざえもん！オラヒーローに変身出来た！」

『私の事を今後『ぶりぶりざえもん』等というふざけた名前で呼ぶな』

「ほい……で、どうすればいいの？」

『奴に向かって兎も角突っ走れ、それで勝てると……どうした？』

しんのすけは息苦しそうに悶える。奴が何かしたのか？

「『ストウーピッド・ライク・デイス』の能力は大気に触れている『液体』の融点と沸点を操る……今そいつの『唾液と鼻の粘膜』の融点を上げて凍らせて塞いだ……僕のスタンドはパワーこそは無いが人間を殺すなんて能力をちよいと工夫すれば簡単なんだよ……正直この手段は相手を苦しませる事になって僕の美意識に反するからやりたくなかったんだが仕方無い……」

あいつ……まだそんな手を隠し持っていたのか

「スタンドを引っ込める！そうしたらこっちも解除してやる！」

しんのすけは首を横に振り、鼻と口に指を突っ込んだ

口から指を抜くと、荒々しく呼吸した

「うー……苦しかったぞ……」

「塞いでる物を『破った』のか……単純だけど一番効果的で一番簡単な方法だな……」

「よくも好き勝手やってくれたな！今度はこっちの番だぞ！」

後ろへ跳んで距離をおき、そのまましゃがんでクラウチングスタートのポーズを取る

「行くぞお！」

一気に駆け出し、半分程で跳躍する

そのまま右足を塩屋に伸ばし、左足を曲げた

「『ワールドボアライダーキック』！」

防御や回避をする間もなく、塩屋の腹部にしんのすけのキックが命中、塩屋は吹き飛んで塀に激突した

俺の手足を封じていた氷の枷が溶けて無くなる。本体である奴が死んだかスタンド能力の持続が出来ない状態になったという事だ

しんのすけの体を纏っていた『スタンド』は消えた。消え際に『今回は初めてだからサービスで一億万円にまけてやる』と言い残した。鏢びた一文まけてねーなオイ

「お兄さん平気？救急車呼ぼうか？」

「そんな必要は無いけどよ……凄く痛い」

それも当然だ。膝から下と肘は凍傷だし、背中は大傷を負ってる

「軟膏……持ってきてくれない？」

「ブ、ラジャー」

手当てが終わった後、俺達は一緒に帰った

あの後俺達はどうかか誤魔化す事に成功し、追及は免れた。塩屋は意識を失っていたので病院に運ばれた。大怪我ではあるが一週間安静にしていれば大丈夫らしい

「それにしても、色々あったなあ……こんなにハーブな参観日は初めてだぞ」

「『ハード』ね、ハーブじゃ薬草だから」

「鳥を英語で」

「『バード』ね」

「あら、しんちゃんじゃない」

「ななこおねいさん！」

向かいから、綺麗な女子大生と思われる女性が、しんのすけに手を振っていた。しんのすけは嬉しそうに手を振って駆け寄る

聞いた事のある名前だと思ったが思い出した。しんのすけが時々話す、大好きな女の人の名前だ

「何でななこおねいさんがここに？」

「ちょっとお買い物してたの。あら？そちらの方はしんちゃんのお友達？」

「初めまして、瀬上除夜と言います」

「初めまして、大原ななこです。しんちゃんは どうして？」

「オラはね、今日参観日だったの、でも父ちゃんも母ちゃんも急用でいけなくて……」

「そこで暇だった俺が保護者役を引き受けたんです。因みにこいつと同じ幼稚園に通っている奴は一人いますがそいつは今日熱を出して寝ちゃって……院長が付きっきりで看病してます」

「……聞いてないのに何で言うの？」

「何となく」

「楽しかった？」

「ううん、災難だった。せつかくの日曜なんだから家でゴロゴロしていたかったのに幼稚園にいかないといけないなんて……」

「お前はお父さんか」

「クス……それは災難だったわね……しんちゃん、来週の土曜日にね、ウチの学校で学園祭があるの、よかったら来ない？」

「はい、来ます！たとえ父ちゃんのお葬式があっても来ます！」

「いや、もしそうならそっちを優先しろ」

テンパっておかしい事を言っているしんのすけに、やんわりと突っ込みを入れた

T O B E C O N T I N U E D

ミスター・ブライドサイド？（前書き）

強敵、塩屋を撃破したしんのすけと除夜

しかし、春日部に蠢くスタンド使い達は彼等を安心させる事は無く
……

ミスター・ブライドサイド？

しんのすけ達が大原なこと出会ったのと、時間的に少し前

アクション幼稚園の門の前の建物の屋上に、一人の雨合羽を着た男が、先程まで首に掛けていた双眼鏡で幼稚園を覗いていた

右手には缶ジュースが、左手には古めかしい『弓』と、古めかしい石で出来た鏃の『矢』が握られていた

「まさか……まさか野原しんのすけが瀬上除夜の仲間となるとは……
… 奴が出て来なければ確実に『ストウーピッド・ライク・デイス』
は除夜を仕留めていたのに……」

右手の缶ジュースの中身を飲みほどした後に落ちないように慎重に降り、自販機近くの缶入れに捨てた

「……だが、奴の人間関係は調べていて全て知っている……となれば、今遭遇する確率が高いスタンドは『マッドキャット』だろう！
そして僕がやる事は、その間にも除夜を仕留める確率を上げる為にこの『矢』を用い『スタンド使い』を一人でも多く増やす事！」

笑いながら『弓と矢』を懐に入れ、何処かへと去った

「月曜か……何かダルいなもう……」

翌日、つまり月曜日

俺は何時も通り朝早くに家を出て、途中優太と合流して一緒に登校した

正直かつたるかった。俺は週初めの登校は嫌いだし、昨日はスタンド使いとの戦闘で疲弊したからだ

重傷だったら休めたかも知れないが、昨日負った怪我は全て朝起きたら完治していたから休めなかった。こういった時は自分の傷の治りの早い体を恨めしく思う

余談ではあるが院の新入りが俺の怪我の治りの早さには驚いていた
午前中の授業はまだ取れぬ疲れから来る眠気から、自分の意識を保つのが精一杯で授業内容もロクに頭に入らなかったし、その状態でどうにか取っていたノートはぐちゃぐちゃで役に立たず、昼休みに優太や宝来にノートを見せて貰った。昼休みは昼食取っていて、五限目が移動教室だったのも関係し、全部書き写す事が出来ず、結局放課後までその作業時間は食い込んでしまった

そして、その作業がラストスパートにかかった時、突然目の前が真っ暗になった

「だーれだ？」

「稻庭」

「正解」

「邪魔しないでくれよ、今俺ノート書き写している所なんだから…」

「あー何かブーツとしていたもんね。そうだ瀬上君、帰り一緒にマクドナルド行こ」

「却下」

「どして?」

「悪いが今日は部活動の見学に行く予定なんだ。本来ならもっと早めに決めないといけなかったんだがバタバタしていて忘れてたんだよ。近々入らんと俺はバイトしながら学校通わんといけなくなる」

「じゃあ瀬上君が帰るまで待つ」

「俺以外を誘えよ。優太とか宝来とか」

「宝来さんは生徒会、沢登君は用事があるからって帰ったよ。ノートは明日返してくれればいいって」

「その伝言確かに承りました」

ノートを写し終えた後、俺は無記入の入部届の用紙を持って、まずは美術室へと訪ねる事にした

俺の通う学校は運動部、文化部問わず部活動が盛んで、部活や同好会の数だけなら統計を取れば県内、いや、全国でも上位に入るだろう。そう確信が取れるくらいその数が非常に多い。全ての部活に挨拶をするとしたら、一日二日ではきかないだろう

異常なのは数だけではない。部活の内容も、どの学校でもあるようなメジャーな物からこの学校にしか無いようなマイナー過ぎる物まで実に多種多様

『アイロン掛け部』とか『凧上げ部』とか『窓拭き部』とか『レジ打ち部』とかが学校側に正式に認められて活動している学校は、日本中探してもここだけだろう

因みにこの学校は部活に入るか入らないは任意である

俺が部活に入る理由は、義母が『色んな人との接し方を知るには部活動も一つの手段だよ』と言われ、更に『入らないと学費差し止めるぜ』と言われた為だ。普通なら止めない（てかさんな事自体言わない）が、あのおばはんならやりかねん

閑話休題

美術室の引き戸の前に立った俺は、ノックをして許可を貰った後、美術室に入った

「失礼します」

「失礼するなら帰って下さい」

「すみません、俺はこんな使い古されたやり取りをしにここに来たんじゃないんです」

疲れている時に疲れさせないで欲しかった

それはさて置き、美術室には、木を彫刻刀で彫っている群青色のラインの入った、工場の作業員が着ているようななぎを着ている茶髪の人がいた

近くにあった広げられている資料集の写真には、二ページに渡って観音像が載っている、それを彫るのだろう

他の人はいない。今日は本来美術部の活動が休みの日なのだろうか

「こんにちは、君一年生？僕は三年生だよ、逢坂氷雨おしかひこって言うんだ……君の名前は？」

「はあ……瀬上除夜って言います」

椅子を準備してくれたので、一礼した後座った

「瀬上君か……うん、知ってるよ、聞いてあるしね……」『ジヨジヨ』
「って呼んでいい?」

「出来れば勘弁して下さい」

「で、何の用?」

「いえ、見学しに来たんですけど……」

「いいよ」

嫌な顔せずあっさりと了承してくれた

「と言っても今この美術室には俺一人しかいないけどね。まあ気になる事があつたら何でも聞いて。分かる範囲で答えるから」

「それじゃ一つ……活動とは関係ないんですけど気になった点があったんでそつちを質問してからでいいですか?」

「いいよ。何?」

「俺の事を誰から聞いたんですか?」

聞きたいのはそれだけだった

俺は今の今まで良い意味でも悪い意味でも目立つような事は特にし

ていない

そんな俺の事を、それも接点の無い人物が『話を聞いていた』というのはどうも引っ掛かった。心当たりが一つある。だから尋ねた

逢坂さんは少しだけ黙った後、口を開いた。その表情は変わらず笑顔だが、今の笑顔は先程までのとは何処か違っていた

「そりゃ当然だよ、だって俺に『能力』を与えてくれた人が『殺して欲しい』って頼んだから」

俺は身を翻そうとしたが、足が床から離れなかった。いや、正確には、履いているスリッパが動かなかった

しゃがんで足元を見てみると、俺のスリッパの底と床が、『粘土を混ぜ合わせてこねた』かのように一体化していた

「気付くのが遅かったね……瀬上除夜君」

「あんたも『スタンド使い』なのかよ……」

幸い一体化されたのはスリッパだけなので、脱いで絵の具を洗い落としたりする為に設置されている水道まで寄った

逢坂は彫刻刀を置いて、立ち上った

ミスター・ブライドサイド？（後書き）

部活動探しの初っ端からそれ所では無くなってしまいました

美術部は、部員は総勢26人

逢坂は部長とかではなく、ただの一部員です

ミスター・ブライドサイド？

俺に近付いて来る

俺は『プラネット・ルビー』を背後に出した

「それが君の『スタンド』か……随分カッコいいフォームをしてるな……」

「……誉めたって何も出ませんよ先輩」

「そんなの全然期待していない……こっちのスタンドも御披露目してあげる」

逢坂の後ろに、形は人型の鮫のようで、喉に顔がついていて、膝に鱗が生えており、人間の倍以上ある長さの指に、指と指の間に第二関節までの水掻きがついていているスタンドが出現した

「これは『ミスター・ブライドサイド』と俺は名付けている……今朝早くに来て彫刻を彫っている途中何者かに『矢』で喉を射抜かれてこいつを出せるようになった……何が何だか分からないが、少なくとも『お前を殺したい』という目的は聞いた……そいつの言葉からは『強い負の感情』が感じ取れた」

「『負の感情』？」

『嫉妬』とか『怨恨』とか、『憎悪』とか、そんな感情の事か？

「知らないってそんなの、知らない内にそう言った事したんじゃない？人間はどんな事で恨まれるか分からないんだからさ」

面倒そうに言う逢坂

確かに、何をやるうとしようにも誰からも恨みを買わずに生きていくのは難しいだろう

ピアノを弾いていてうるさいとかという動機で人を殺したという事件を聞いた事があるし、極端な話では逆恨みや八つ当たりで殺人を犯す人間だっている

『人間同士の共存』という物の難しさがこついったニューズを聞く度によく分かる

閑話休題

『ミスター・ブライドサイド』は手近にあつた椅子を持ち上げ、指を動かした

椅子はグニャグニャと『粘土』のように形を変え、それを棘だらけのボールのように形を整え、俺に向けて放り投げた

こんな攻撃能力を使うまでもない。体を屈めて避ける。ボールは黒板に当たり、壁にめり込む

「やれ……『ミスター・ブライドサイド』」

『ミスター・ブライドサイド』は俺に接近しようとするも、途中で止まった

「あれ？」

逢坂はこれがどういった訳か分からず、首を傾げる

俺はすぐに『射程距離』という単語が頭に浮かんだ。あのスタンドは破壊力が高い分射程距離が短い……目測からして2〜3メートルと言ったところだろう

しんのすけの『ぶりぶりざえもん(仮)』近距離モードも射程距離は大体このくらいだから、それと同じくらいのパワーなのかも知れない

それならパワー合戦になればこっちが負ける。昨日しんのすけを家に送り届けた後、性能較べの為にスタンドで腕相撲を試みたが、歯が立たなかった

出来うる限り近くに接近して直接ラッシュをぶち込むのが一番だな。攻撃されても間近なら狭くて物が溢れているこの美術室でも回避する分の瞬間移動は出来るだろう

射程距離を悟ったのか、逢坂は『スタンド』を傍に戻す。『スタンド』はしゃがんで何かをしだした

何をしているのか覗き込もうとするが、間に逢坂が入ってきた

一瞬で決めるべく、拳を打ち出した

拳が当たる寸前、奴の体が宙に浮かび、後ろへと飛んだ。『ミスター・ブライドサイド』が逢坂を持ち上げ、引つ張った為だ。そのまま下がる奴を追い掛ける

「いつ……!!」

途中、右足に何かが刺さったかのような痛みを感じた

「足元はちゃんと見ないと駄目だよお？」

逢坂は笑みを浮かべながら言う

右足を見下ろすと、床から伸びている『太い棘』が右足を貫通していた。そうか、さっきは床を寄せてこれを造っていたのか

「今思い出したんだが……」

「あ？」

「さっきの黒板が破壊された音を聞いてそろそろ誰かが来てもおかしくないと思うんだわ……逃げさせて貰う、一応大きな騒ぎは起こすなど言われてあったんでね……」

『ミスター・ブライドサイド』は床や机、椅子等を寄せ集めてそれで簡単な梯子を手早く造る

逢坂はその梯子に登る。天井近くまで届くと、『スタンド』で天井に穴を開けてそこから這い上がった。俺も梯子に足を乗せるが、登りきる前に防がれた

「逃がしてたまるか……てめえには聞かないといけない事があるんだよ！」

『矢』の持ち主に関しての情報は、何も知らないだろうからいい

『矢』に刺された経緯を話された時感じた『おかしな事』は詳しく聞かないといけない

奴を追わなければならないが、確実に捕まえる必要があるから『追いつける』より『奴が何処に向かうかを予想してそこに先回り』した方がいい

「『上の階』に逃げた以上、降りてくるとは思えないな……という

事は……」

「ゼーゼー……ハーハー……」

屋上で、逢坂は息絶え絶えに肩を上下していた

二階に上り穴を塞いだ後、屋上まで突っ走った

「まだ瀬上はいない……今度は壁を伝って逃げてやる……」

「スパイダーマンかあんたは？そんな芸当どうやってやるの？」

「能力を使う……『ミスター・ブライドサイド』で壁に出っ張りやらを作り、それを……」

そこまで言った後、逢坂は声の聞こえた、自分に質問してきた存在のいる方向へと顔を向けた

視線の先には半開きとなったドア、そしてその奥から瀬上除夜が屋上へと足を踏み入れた

「よう逢坂の先輩……あんたにや聞きたい事が幾つかあんだから……」

…それ聞くまで帰らないでくれませんか？」

「随分としつこいね……しつこいと女の子に嫌われるよ！」

接近して『ミスター・ブライドサイド』の拳を振り下ろす

除夜は瞬間移動で回避、スタンドの拳は軌道上にあったドアとその蝶番がついている壁を破壊した

ミスター・ブライドサイド？（後書き）

後半の方は誰の視点でも無くなりました

除夜君が感じた『おかしな事』とは？

ミスター・ブライドサイド？（前書き）

ミスター・ブライドサイド戦決着！

ミスター・ブライドサイド？

『ミスター・ブライドサイド』が粉碎した壁を見る。力任せの一撃でこれだ

取り敢えず今分かった限りの奴の能力を纏めてみよう

奴のスタンドは指で触れた物を粘土みたいに形を変える能力

そして混ぜ合わせる事は出来るが千切って分ける事はまず出来ない。出来ているのならとつくにやっている筈だ

まあ、する必要は無いんだろうな。複数の物を作りたいのなら材料を砕いてから作ればいいんだし

『ミスター・ブライドサイド』は破壊した壁の破片の幾つかを一つに纏め、伸ばして『棒』のような物を作り出した。その先端には、尖っていて平べったい物が造形されている。あれは見たまんま『刃物』だ

そう、これは

「『槍』か……」

「そう、材料さえあればこういった単純な武器を調達する事は簡単なんだよ！」

突きを放つ。俺はしゃがんで避ける。頭上に穂先が通る

引くと同時、『プラネット・ルビー』は槍を掴み、逢坂から取り上げる。持っているのが生身の人間であれば、こうするくらい簡単だ

「予想通りだ……」

逢坂はそう言った。俺は殺気を感じ、横に転がる。その手にデカいナイフを持った『ミスター・ブライドサイド』が、その手を振り下ろしており、たった今俺のいた所に、刃先が刺さっていた

『ミスター・ブライドサイド』はナイフを持って突き出す。俺は『槍』をへし折って穂先の付いている方を捨て、残りの柄で刃を思いっ切り叩き、折った

柄を捨てる。今度は小太刀程の長さの刀を持って振り回してきた

「ゴラア！」

『プラネット・ルビー』で小太刀を蹴り上げる。何等かのモーションを起こす前に能力で『軸』の逢坂の後ろに瞬間移動し、拳を打ち出した

振り向く動作を始めた直後だった為、後頭部にヒットした

「ああ痛え……一応俺先輩なんだから少しは敬えよ……」

「相手が誰であろうと命取りに襲ってきた奴を敬う程俺は出来た精神をしてませんよ」

「確かに……それが普通だと思う……」

『ミスター・ブライドサイド』は小石程の大きさの瓦礫を幾つか拾い、何度も叩いて粉々に砕きだした。何をするつもりなのかを理解し、俺は動くが、その前に逢坂は俺が蹴り上げた小太刀を拾って、俺の首を狙い振るった

後ろに瞬間移動して避けると同時、目を強く瞑った。次の瞬間、顔に細かい粒をぶつけられた痛みがした。やはり『攻撃を何等かの方法で避ける事を前もって算段した上での』目潰しとして用意した物だったんだ

顔にかかった粉を払い落とし、目を開けると

「が……」

振り上げられる拳が腹部に突き刺さる。腹部に強烈な痛みが走り、後ろに吹き飛んだ

柵にぶつかった為背中では痛みが落ちずに済んだ。俺はこういった柵やガードレールの存在の意味を心から理解した

粉を投げつけた意味を理解した。視界を塞ぐ為に何かする事が分かっていたら普通目を守る為に瞼を閉じる。そう、『目を通じて入ってくる情報を一時的にシャットアウトしてしまう』。開けたままでも目に入ったら閉じるから、どちらにしても同じか

そう言えば琢磨は言ったな、『たとえ人間を直接殺す程の破壊力や能力の無いスタンドでも、脅威になるかならないかはスタンドを扱う本体次第』と。俺は昨日の塩屋戦を思い出す

逢坂は俺に一步も近寄らず、破片をこねて『手裏剣』やら『チャクラム』やらを沢山作り出した。大きさも片手で持てる範囲で大きいから小さいのまである

ある程度纏まった数が出来上がると、次々と投げつけてきた

「『プラネット・ルビー』！」

スタンドで飛んでくる刃物類を弾くが、休みなく、それも細かい物を飛ばす為、四肢に七個、腹部に五個刺さってしまった

全部投げ終えたのを確認すると、刺さった飛び道具を抜く。その間にも逢坂は、瓦礫を集めて作り出した

「ちょ……何だあれ……」

最後の一個、左腕に刺さった手裏剣を抜こうとして、逢坂が作って

いる物を目の当たりにし、驚きのあまり腕の動きを止めた

作り出したのは、直径五メートルはありそうな巨大チャクラムだった。それを『ミスター・ブライドサイド』は持ち上げる

あんなもんに直撃したら真つ二つに……なるけど、俺だったら『瞬間移動』すれば避けられるな

そう考え、一気に蹴りをつける為に奴に向かって突っ走った

「『ミスター・ブライドサイド』！」

逢坂のスタンドは持っていた巨大チャクラムを前へ放り投げる。だがそこから、俺の予想を越えた行動に出た

チャクラムに向けて連打を打ち出し、砕いたのだ。破片は、俺に向かって飛んでくる

細かい物が大量に飛んでくるのなら、俺の能力では避けきれない。考えたものだ

「お前を殺す事で貰える二千万の使い道はお前の葬式の読経あたりで考えさせて貰うぞ」

降り注ぐ無数の破片の内、特に大きいのを弾き、他の細かい破片は刺さってくるのを無視して突破、そのまま右腕を水平に伸ばし首に

向けて振るった。『リアット』という攻撃だ

「うっ……！」

リアットが当たる前に、逢坂は『ミスター・ブライドサイド』で俺の首と右腕を掴んだ

「これでてめーの『瞬間移動』は意味が無くなった……だよな？」

万力のようにギリギリと首と右腕を握る力を強めるスタンド

俺の『瞬間移動』はその性質上、攻撃の回避の為の能力

『だからこそ』いい

能力が使えなくなる事、それが『目的』だったからだ

「貴様の死因は『窒息死』で決定……いや、その前に首の骨を折って……ゴガア！」

逢坂は腕を首に叩き付けられ、吹き飛ぶ。俺の首と右腕を掴んでいた『ミスター・ブライドサイド』は消えた

逢坂のいた地点の真後ろには、俺のスタンド、『プラネット・ルビ

」が発現していた

「ハア……ハア……ハア……ハア……命狙われてるってのに何も考えずにブラブラ過ごすアホに見えましたか？この前から色々訓練をしていたんですよ……その色々の中には、『スタンドを射程内に出現させるようにする』というのも入っていたんで……」

それで不意打ちを食らわそうと考えた。だが、それはタイミングを見計らって使わないといけない。無闇に使って失敗したら対策を練られてしまうから……と、息を整えながら続ける

落ち着いてきた所で、一息に言った

「だから『敢えて能力を使えない状況となる必要があった』……念を入れて油断を強くする為に首を絞められてから少し時間を置いたのは良かった……」

そう、良かった

この目論見は、成功した。だけど

「もう出来ればやりたくねーな……」

心の底からそう思えた

ミスター・ブライドサイド？（後書き）

決着つきました！

次号は『弓と矢』の所有者探しが少しばかり前進する？

スタンド名はザ・キラーズの楽曲からです

瀬上除夜の推測（前書き）

逢坂の撃破後、除夜達は集まる……焼鳥屋に

瀬上除夜の推測

時刻は午後六時

焼き鳥デスペラード

ここのテーブルに、俺としんのすけ、琢磨と稲庭の四人が座って大皿に乗った焼き鳥や並べられた料理を頬張っていた

何故ここに集まったのかと言うと、一時間前に俺が三人に『出来るだけ人が集まらなくて尚且つこの時間帯でもどんな人が集まったとしても不自然では無い場所を知らないか』と聞いた事から始まる

琢磨と稲庭は即座に心当たりがないと言った。まあ当然だろう。尋ねた自分が言うのもなんだが、そんな場所そうそうある筈がない

二人がそう応えた後しんのすけが、『何時もガラガラだけど美味しい焼き鳥屋さんを知ってる』と言ったので、その焼き鳥屋に案内してもらった

店内に入っただの第一印象は、『確かにあんま客いねーな』だった

その後店長（マスターとしんのすけは呼んでいた）に焼き鳥を幾つかと料理を幾つか、それとジュースを頼んで奥のテーブルに座り、今に至る

「いきなりですけど本題に入らせて貰いますよ除夜君、何故急に僕達を呼んだんですか？」

「話すけどまず串置けよ……」

すみませんと言いつつ、半分食べた砂肝の串を置いた。稲庭は……
ほっとこ

「まず、俺は放課後、部活探しの出鼻に『矢』でスタンド使いになつたばかりの男と遭遇し、そして戦った」

「え？怪我は無い瀬上君！」

「俺、手当てされてるよね？」

食べながら話すな飛び散る

「お兄さん生きてる？」

「じゃあ今お前等と一緒にテーブルに座っている俺は何だ？」

「何故『スタンド使いと戦った』と言わず、『スタンド使いになつたばかり』と言ったのですか？」

「……琢磨、話を進めてくれるのは有り難いけどお前のは急過ぎ……」

「こんな重要な話ですからね……要点だけでも早く話して欲しいん

です」

「まあ、ありがとう……俺はあの後、そいつを叩き起こして聞いた事、『矢』を刺してからその所持者はその後どうしたか』を訊ねた」

「どして？」

「そいつは「朝」に射られたと言った。朝という時間帯は何をする？連想してみてください」

「母ちゃんがオラを起こす。急いでご飯食べさせる。トイレに長い時間入って母ちゃんに催促される。その間バスが来て間に合わずに結局行っちゃって、母ちゃんがオラをチャリンコで送る」

「それが思い浮かぶ事ですか？」

「うん。バスに乗れた事なんて、自慢じゃないけど月に数える程しかないもんね」

「本当に自慢になんねーな」

ていうかみさえさんも毎朝大変な思いしてんのね……

「無駄な所省くと思えば浮かぶの全部あるね……ムグムグ……」

「喋るんならせめて手を休めて口の中のもん飲み込んでからにしろ

よ……ああそうだな。最初に『起床』その後『朝食』、そして『通勤通学』……職業によつては夜勤明けで家に帰る時間だな……その時間帯に何かした所を見たとしたら、『矢』の所持者がどんな人物なのか特定出来るかも知れないと思つたから」

「結果は？」

「当たりだつた……逢坂からの話によると、『そいつ』は逢坂を『矢』で射抜きそれを回収し、俺の事を説明した後用が済んだとばかりに美術室から出て行つた……当然といえば当然だが……逢坂はそいつの正体が気になつて、美術室のドアの窓越しに見ていた。で……そいつは、来客用の玄関を『使わず』に階段へ一度上り、そのまま現れなかつたみたいなんだ」

「つまり、そいつは学校に住んでるって事？」

何時ものようにポケを真顔でかますしんのすけ

「いる訳ねーだろそんな奴！いいか、学校の校舎内にいるという事は、当然家から外履きを履いて来て、どこかでそれを脱いだつて事だよ！……で、逢坂はHRが始まる直前までそのまま廊下を見ていたが、入ってくる人はいても出て行く人はいなかったらしい」

「つまり、『矢』の所持者は学校にずっといたつて事？」

稲庭がつくねの串を両手に持ちながら、真剣な表情で訊く。俺は首を横に振つた

「『あれからずっといた』とは考え辛い、何故ならそれは第三者に発見される可能性が高くなるからな、覗かれている事を感じてか予想してかは分からないが、奴は遠回りして別の出入口で外に出たんだと思う」

「つまり一度家に『矢』を置いて改めて学校に来た……という事ですか？」

「その可能性が高いと俺は踏んでいる、少なくとも『春日部市で生活を行っている学校関係者で』『日常的に登校、または勤務している』人間である事は間違い無いだろうな」

「ほうほう……」

「ねえ、何で学校関係者と限定するの？」

「いい質問だな稲庭……それはお前にある」

首を傾げる三人

俺は説明を続ける

「お前は風邪で休んだ日の夜に『矢』で射られた……だったな？」

「うん」

「その日にお前が学校を休んだっていう事を家族以外の部外者がどうやって知る事が出来るんだ？」

「あ」

「勿論『最初からその日の夜にお前を射抜く予定だった』という可能性もある……だがそれなら何で夜なんだ？それが俺が後者に行き着いた『答え』でもある……分かるか？」

「成程……欠席を知っていたのは学校でそれを目の当たりにしたか他の関係者から聞いたから、そして昼に行けなかったのは授業時間、若しくは勤務時間だったから！」

「そう……そしてまだこの考えに行き着いた根拠はある……琢磨、お前が『矢』に射られたのは何曜日だ？」

「土曜日の……朝……散歩中にいきなり……」

「やっぱりな……」

『何がやっぱりなのだ？一人で納得してないでさっさと教えんか！』

「ああ……御厨先輩と塩屋にもその事は聞いた……御厨先輩が射抜かれたのは金曜の深夜……塩屋は日曜の昼過ぎ……分かるか？今の所だがそいつの生み出した『スタンド使い』で学校がある平日の昼にそいつに射抜かれた形で接触した奴はいないんだよ」

「それが答え？」

「あくまでも『今の時点で分かった事』で推測しただけだ……所で

……何で貴様がいる？」

俺はしんのすけの傍で立ちながら焼き鳥を頬張る緑色の体毛をした人型の猪に視線を向けた

猪は手に持つ焼き鳥を全て口に放り込んで飲み込んだ後、俺と向き合う

『私がしんのすけのスタンドだからだ』

「んな事あ聞いてねえんだよ！しんのすけ、まさかお前出したのか？」

「出していないぞ、こいつ勝手に出て来て勝手にご飯を食べたり新聞読んだりしてるの」

『何だその目は！言いたい事があるのならハッキリと言え！』

「すげールール無用なスタンドだな……お前」

こいつにピッタリの名前を思い浮かんだ

「しんのすけ、この『スタンド』の名前決めたか？」

「ううん、まだ」

「なら俺が命名してやるわ、気に入ったらそれを名乗れ」

『どんな名前だ？』

「『ハリケーン』だ」

シーンとなった

その沈黙を、猪は高笑いという形で破る

『ハツハツハツハツハツハ』

「どうしたの？」

『いや……気に入ったぞ！「ハリケーン」か……除夜よ、お前は中々のセンスをしているな、私の手にキスしてもいいぞ』

「ぶざけんなよこの豚、鋭いの一発その鼻に叩き込むぞ？」

「良かったなぶりぶりざえもん、名前決まって！」

『私をその名で呼ぶなと言った筈だ！』

「えっと……もう用件は済みましたか？」

「ああ……悪いな急に呼び出して」

しんのすけのスタンドの名前が決まった所で、今回の集会はお開きとなった

TO BE CONTINUED...

瀬上除夜が逢坂氷雨と屋上で戦闘を開始したのとほぼ同時刻

若い女性が、一軒家の庭の金柑の余分な枝を剪定していた

「よし、今年も美味しい金柑が食べられるぞ………?」

ポケットから着信音が流れ、中の携帯を取った

「もしもし………」

『四ヶ月振りだな………』

「アンタか………どういった用件なの?まさかあの………」

『いや、別の用事だ………』

「別の用事?」

『そう……それは』

「ちょっと待って……」

相手に話す事を止める

女性の視点の先には、アゲハチヨウが卵を産みつけていた

『どんな能力なのかは詳しくは分からないので……依頼料込みで報酬の五百万は貴女の口座に既に振り込んでおいた……』

「拒否権はありませんって事ね……」

『物分かりのいい人は好きだ……』

電話を続ける女性の足下には、金柑の葉っぱや枝ごと二つに斬られたアゲハチヨウの死骸が落ちていた

電話を切ると、ポケットにそれをしまい剪定作業を再開した。振り返る時、アゲハチヨウの死骸を踏みつけた

瀬上除夜の推測（後書き）

しんのすけのスタンドの名前が決定しました

名前はボブ・ディランの楽曲から

因みに逢坂が変形させた美術室の机や作品は元に戻しました（屋上は放置）

歓迎準備の後片付けで（前書き）

今回は少し謎が浮上します

歓迎準備の後片付けで

「ここはこつちでいいんだよな？」

「うん、それとこの玩具箱奥の部屋に置いていてくれない？」

「はい」

『焼き鳥デスペラード』での集会の翌日の放課後、俺は義母さんと共に院内の片付け及び広間の飾り付けを行っていた

理由は、明後日に来る事になっている院の新しい仲間を歓迎する為だ
経歴を簡単に教えて貰ったが、何でもそいつの親が一酸化炭素で一家心中を計り、発見されて病院に搬送されるもそいつ以外は助からなかった

そいつの母方の祖母が義母さんと友人で、他に身寄りもない事で義母さんが身元引受人になったという

必然的に一人分生活費は上がる事となるが、構いやしないだろう。
運営者の義母さんは労働とか株か何かを運営しているとかそいつの様子は無いにも関わらず、どういう訳か個人資産でかなり金持っている。幾ら持っているかは分からないが、その気になれば院をマシヨンみたいに増改築する事も可能だと思う

何故そんなに金を持っているのかと訊ねた事はあるが、昔少しゃつていたと応えた

何をやっていたのかは、どんな答えが返ってくるか分からない為追求しなかった。世の中には知らない方がいい真実もある

「あれ？」

玩具箱を奥の部屋に置いて戻ろうとした時、筆筒の奥から、偶然結構厚いアルバムが目に入った。取り出そうと手を伸ばすが、つかえて手首まで入らない。だから『スタンド』を使って取り出したそのアルバムは全体が薄汚れており、こうして触っただけで手が汚れた

「懐かしい！こんな所にあっただ」

突然前から義母さんの声がした

「………何でここに？」

「いや、時間経ってるのに君が一向に戻って来ないから」

「そりゃ悪かったな………で、このアルバムどうするんだ？」

「おいおい除夜君、こういう時は、まず『どんなアルバムなんですか？』って訊ねるのが礼儀だぞお？」

『何処の礼儀だよ』と聞きそうになったが、この場合大抵

『私への礼儀』

と応えやがるので必死に堪えた

「『どんなアルバムなんですか?』」

「よくぞ聞いてくれました!」

「あなたが聞けつつつたからね」

「これはね、君とあたしが運命の出会いをする前、つまり17年前から中学時代までのあたしの若かりし頃の写真である!」

「あつそ」

「何その淡白な応えは! 義理の母の全盛期で黄金期だった頃の姿をじっくりとその目で見なさい!」

「『全盛期』で『黄金期』……ねえ……」

俺は色々言いたくなつたが、堪える事にしてアルバムを開いた

厚さの割に写真があるのは三分の二までだったが、アルバムの写真は、全然予想通りの物だった

何が予想通りかというと、この人の写っている写真と、目の前にいる今の本人をどう何度も見比べても変化がない。せいぜい服装と髪の長さ、ああ後ネックレスとかブローチとかの装飾品があるかないかだ

「やだなあそう写真《過去》と今を見比べないでよ、落ち込むじゃん」

「………すみません、貴女過去を振り返る『アルバム』は必要なんですか？」

「あるよ当然、若かりし頃の自分を見て『ああ自分もこんな時があったなあ』と思いつたのに必要なの、時の流れは残酷なんだから」

「あんたはその『時の流れ』って奴から取り残されてるけどな」

「それどういう意味かな？」

「今の自分を鏡で見てこのアルバムの写真とよく見比べてみて下さい、そうしたら分かると思いますよ？」

義母さんは手鏡を取り出し、自分の顔と写真を見比べる

「大違いじゃん。除夜君は一度眼科行って精密検査受けた方がいいよ」

「その台詞そっくりそのままあなたに返してあげますよ」

俺は改めて、『この人は地球人じゃない』と強く認識した

この義理の母に古いアルバムを手渡す。だが、受け渡す時手が滑って、落としてしまった

落ちた時開いたページは最後の方だったが、写真が数枚張ってあった。但し、今まで張ってあった写真とは写っている物が別物であった

俺は『それ等』を、この時はあまり気に止めなかった

写真に写っている、『金髪の男』と『両右手の老婆』、そして、『石の鏝のついた古めかしい「矢」』の事は、あまり気にしなかった

「もう行き先についたのか……電車つてのはガタゴト揺れて眠気を誘うが事故とか無い限りは時間通りにきちんと着けるってのはいいな……」

眠そうに目を擦りながら停車した駅に降りた、下ろした銀髪にピア

スをつけた、白いワイシャツの上に鱗模様の長袖を羽織った外国人の少年は、駅員に切符を渡した

「さて……まず泊まれる宿を探すとするか」

トランクから地図を取り出し、ホテルを探す

彼の名はロンディネ。国籍はイタリアで年齢は14歳。とある仕事で今日日本へと足を踏み入れた

近い内に彼が除夜やしんのすけ達が関わっている件に関わるようになるというのは、この時誰も考えてもいなかった

歓迎準備の後片付けで（後書き）

写っている写真は彼等です

ロンディネはイタリア語で「燕」、彼が来日した理由は次の話で

イタリアからの来訪者（前書き）

イタリアの少年、ロンディネが来日した理由が明らかに

イタリアからの来訪者

「もう朝か……随分早いもんだな……日本の朝ってのは……」

とあるビジネスホテルの一室で、一人のイタリア人の少年がベッドから起きて顔を洗う

彼の名はロンディネ

国籍はイタリア。来日して春日部に来たその目的は、『ある仕事』の為である

ロンディネについてだが、彼の年齢は14歳、つまり中学生だが、学校には行っていない。彼は、ある成り行きから自分の祖国イタリアのある組織のギャングの一員である

何故彼がギャングの一員となったのか、それは今から二年半前に、突然『能力』を発現した事から始まる。単体ではかなり弱小の部類で、破壊も何も行う事は出来ないが、同じ能力を持つ者が組む事でその真価を発揮する。彼が発現したのは、そんな能力だった

9ヶ月後、彼を見つけた『組織』のボスが、悪しき能力者に能力を悪用される前に彼を保護という題目で合意の上で組織に入団させた。彼はその後、ネアポリスの地区を任されるチームの一員となり、ひたむきな仕事態度と真面目な性格で、チームの仲間や縄張りの住民達からの信頼を積み重ねていった

そんな折、突然彼にある任務を言い渡された

『麻薬密売人を捜し出せ』という任務だった

四ヶ月前から誰彼問わず麻薬を組織の縄張りで売っている密売人が現れた。麻薬を敵視するボスは当然怒り、全力でその売人を捕らえようとするも、相当頭が切れるのか、それで判明したのはその売人が日本人だという事と、名前だけだった

しかもその四ヶ月の間にそいつの扱う麻薬はイタリア全土に広がり、殆どの地域でその麻薬の常用者が確認された。しかもその中には年端もいかない子供もいるというので大変だった

自分の目の届く範囲で麻薬を売っていた事でただでさえその売人に怒りを燃やしていたボスは、その事を聞き更に激昂し、部下に捜査の指示を出す一方で、自分も売人の調査をしていた

それにより売人の経歴や現在の大まかな拠点等は判明したが、そこから問題が発生した

まず、麻薬常用者の症状が、普通の麻薬では考えられない症状ばかりだという事、更に、麻薬の成分になりうるような成分が回収された麻薬からは一切出て来なかった事だった

調べてみると、回収されたそいつの売る麻薬からは、『能力のエネルギー』が確認され、この事から売人が能力者である、または能力者と手を組んでいる事が判明した

そこで彼が指名された

因みに、彼の任務はあくまで『売人の拠点を調べる』だけで調べ終えたら直後に帰国するよう言われている

単独で来たのは、先程も言ったように『あくまで調査』であるのと、複数派遣されると早く調べられ、下手したらそれによって逃げられる可能性があるからだ

「日本食つてのは美味しいな……特にこの『浅漬け』って奴は何度食べても……」

昨日ホテルにチェックインする前に近くのスーパーで購入したキウウリの浅漬けを摘みながら、密売人の経歴を目に通す

名前は西高須章雄にしたかす あきお、通称『ヘロイン西高須』

少し前に壊滅した日本の麻薬密売組織『モルヒネ・ファミリー』の下っ端を纏める売人の一人で、組織の壊滅と同時に一度捕まるが輸送中に脱走し、行方知れずとなる

その後何の音沙汰も無く、手掛かりが掴めない為死亡説も流れ出し、警察も捜すのを諦めだしていた

詳しく聞いた話だと、『モルヒネ・ファミリー』所属時彼は能力を持っていないただの売人だったらしく、仮に彼が能力者とした場合、脱走からイタリアで活動するようになる時期の間に能力者になったと考えられている

「よし、これくらいにして調査に出掛けようか……」

浅漬けを食べた後に服を着替え、任務の為にホテルの外へと出た

「おや？」

道を歩くロンディネの横に、一台のバスが通った

ロンディネが目を引いたのは、そのバスのデザインだった

天井には猫耳が付けられていて前はデフォルメされたネコの顔が書かれており、全体的にピンクだが、虎縞がペイントされている

最初はこれが日本で普通に走ってるのかと思ったが、園児しか乗っていないので、幼稚園の送迎バスだと思った

だが、運転手の顔を見た瞬間、その思考は撤回された

運転手は、強面に色付き眼鏡を掛けた、どう見てもヤクザの組長か強盗団のボスか、兎に角とてもじゃないがカタギでは無い人相だった

そうか分かったぞ、あいつは言葉巧みに子供を拐かし、集めた子供達を外国に売り飛ばすつもりなんだ！

急いで公衆電話に駆け出し、ボタンを押して110番通報する

十数分後

アクション幼稚園

「すみません！本当にすみません！変な早とちりのせいでこんな騒ぎ起こして！」

ロンディネが強面の男、アクション幼稚園園長、高倉文太にこれで何回目か知れない土下座をしていた

「いえ、いいんですよ、早とちりは誰にでもある事ですし、もう慣れていきますし……」

「全く人騒がせな」

「お前だつて何度も似たような早とちりした事あるだろ」

その後、午前中は園児達にイタリアでの話（ギャングの事は一言も喋らない）をしてあげた。今日は午前中で終わりだったらしく、昼食に入る前に園児達は帰宅を始めていた

「（自分が原因とはいえ）無駄な時間を使っちゃまったな……さて……まず」

「卵を割って卵黄と卵白に分けてかき混ぜて」

「小麦粉を篩って……て何で君がいるの？」

後ろに、坊主頭に太眉の少年、野原しんのすけがいた

「いや、そのまま家に帰るのもオーソドックスだし、お兄さんを尾行した後帰ろうかと……」

「そんな理由で犯罪行為をするなよ……」

「日本じゃそれが普通です！」

「一応言っとく、何処の国でも普通じゃない……仕方無い、家まで送ってくから案内して」

「家来ても何も出来ないよ、オラんちローン32年あるから」

「何処の世界に園児を家に送る程度で何か期待する人間がいる？」

「え？違う……」

「どっした？」

言葉を突然止めるしんのすけに何なのか疑問符を浮かべるが、すぐにしんのすけの瞳から写された女と、背後からの殺意を感じ取った事により、理解し、振り向いた

その時には、女は目一杯開いた自分の持つ刃渡り一メートルはあるであろう巨大な『鋏』を閉じようとしている最中だった

「ぶりぶりざえ……」『ハリケーン』！

しんのすけの背後からスタンド『ハリケーン』が現れる。ハリケーンはロンディネの頭を押さえつけた後、両手で鋏を掴んだ。女は鋏を無理矢理閉じようとするも、ハリケーンのパワーには敵わず、鋏を消した

「あれだけ大きなハサミが消えちゃったぞ……という事は……」

『うむ、奴は「道具型」のスタンド使いだな』

「へ……へえ……」

「どうしたのお兄さん……ここは危ないから早く帰った方がいいよ」

「いや……まさか日本に着いていきなり『スタンド使い』に二人同時に遭遇するなんて思いも寄らなかった……」

ロンディネのこの言葉に、しんのすけは目を丸くした

「え？ちよっと待って……見えてるの……『ハリケーン』が……」

「うんはつきりと……」

女はロンディネに向かってスタンドの鉄を振るう。ロンディネはしやがんでそれを避けた

「悪いけど……あんたを痛めつけるよう頼まれているんでね……手元が狂うから変に動かない方がいいわよ。私だって人殺しとかしたくないし……」

女のその言葉により、目的が自分である事は分かった。誰の差し金かは今はどうでもいい。分かったのは、そして一番の問題は、この女が自分に危害を加えるつもり満々だという事だ

自分の『能力』では何も出来ない。対処するには、身にかかる火の粉を払うには、『仲間』が必要だ

そう、『仲間』が……

「お兄さん」

「何？」

「お困りのようだし、手を貸してあげる」

「……へ？」

「だーからー、オラがオタスケしてあげるって言ってるの!」

ロンディネはしんのすけの言った事を整理する

つまりしんのすけは、自分を奴から助けしてくれると言っているのだ
ろっか？

「ちょっと待って、確認させて」

「手っ取り早くね」

「分かった。君は……君は一緒にあいつと戦ってくれるの？」

「それ以外の意味でオラのさっきの言葉をどう取るの？」

「取れないな……」

『言っておくがお助け料は十億万円分割払いも可だ。必ず払えよ』

「そのイタリア人の子供を少し痛めつけるだけのつもりだったの
に……いいわよ。あんた等二人、この『アイアン・バタフライ』の
錆にしてあげる……」

イタリアからの来訪者（後書き）

園長先生が悪人と勘違いされて警察沙汰という話は原作でもあったんでやってみました

『アイアン・バタフライ』は道具型のスタンドです。名前はアメリカのサイケデリック・ロックグループから

次回、ロンディネがスタンド使いになった経緯やロンディネのスタンド能力が判明します

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？（前書き）

イタリア人の少年、ロンディネに襲い掛かるスタンド使い！

巻き込まれたしんのすけは、この危機をどう突破するのか？

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？

本体：野原しんのすけ・スタンド名『ハリケーン』

本体：杉江美鈴^{すぎえ みすず}24歳・スタンド名『アイアン・バタフライ』

巨大鋏、『アイアン・バタフライ』の切っ先を、『ハリケーン』に向ける

「あー！ハサミは切る方を人に向けちゃいけないんだぞ！」

「五月蠅い。言っとくけど退くなら今の内よ坊や、四ヶ月と二週間前に『矢』で射抜かれ会得した私のこの『アイアン・バタフライ』はそんな豚にやられる程ヤワなスタンドじゃないから」

「おねいさんこそ退くのは今の内だぞ、オラの『ハリケーン』……ぶりぶりざえもんはそんな大きいだけのハサミなんかより何十倍も強いんだからな！」

『待てコラ！何故わざわざ間違える！』

「『負けやしない』……ね……坊や、そんな大口は、気安く口にするもんじゃないよ！」

『アイアン・バタフライ』を開き、そのままジャンプして間合いを詰め、閉じようとした

「バラける！」

缺む前に、『ハリケーン』は『群生型』となり、『アイアン・バタフライ』の支点の部分を押さえ込んだ

『群生型』状態では一体一体のパワーこそは落ちる。だが、支点の部分を巣を襲ってきたスズメバチを蒸し殺す為に密集するミツバチのように纏わりついた為、缺の開閉が出来なくなった

振り払おうと缺をブンブン振るが、纏わりつく『ハリケーン』を払う事は出来なかった

「止むを得ない……」

スタンドを解除する。纏わりついていた『ハリケーン』は地面に落ちてコロコロと転がった

「よし、『ハリケーン』！そのまま……」

「今すぐそこから離れろ！」

「え？」

「いいから……」

「ほ、ほい……」

突然ロンドンエネが叫びだした。その気迫に圧倒され、しんのすけは今いる位置から後退る

彼の右目には、中央に顕微鏡の対物レンズが三つ、正三角形を画くように配置されている黒いアイパッチのような物が付いていた

しんのすけが足を止めてそれを見ていると、杉江はしんのすけへと接近してきた

杉江の左手はしんのすけの肩にガッチリと掴まれ、右手は振りかざされていた

「イタズラばかりする悪ガキにはそれ相応の体罰が必要よね？」

「オラに拳骨をする気か……来い！オラ自慢じゃないけど毎日のようにイタズラしては母ちゃんに拳骨されているからな！拳骨に対してのていさいはあるぞ！」

「それを言うなら『耐性』よ。そして全然自慢にならないわ」

拳を振り下ろす杉江

「スタンドを元に戻してその女の手首を封じろ！でないか……」

杉江の強く握られている拳から、四分の一程の長さにした『アイアン・バタフライ』が姿を覗かせた

ロンディネはスライディングでしんのすけの元まで行って抱え込んで走り出した

しんのすけを助ける事は出来たがロンディネ自身は肩を浅く斬ってしまった

「大丈夫お兄さん！」

「大丈夫……今の内にスタンドを……」

「その『アイパッチ』……さっきまで付けてなかったよね？」

『アイアン・バタフライ』を先程の大きさに戻した杉江は、ロンディネのアイパッチに指を差していた

「答えなくていいよ、自分の手の内を自分からバラす奴はただのバカでしかないから……最初は『未来予知』とかの類かと思ったけど……どちらかというと『私やスタンドのエネルギーを感知して』とそれでどうすればいいのかを考えて最良の行動を選んでいる……と考えた方が自然かな？」

「……まあそれだけだとまだ70点かな……『サード・アイ・ブラ

インド』の解説にはまだなっていない」

「最初から正解とか求めてないよ、『パツシヨ―ネ』の下っ端さん？」

「あら？僕の所属している組織の名前まで筒抜けなんだ……じゃあ教えてくれない？何で僕を狙ってんの？」

「それはね、『ある人』に頼まれたから、私にこの能力を与えてくれた人があんたの事を邪魔だと判断してあんたを痛めつけてイタリアに帰せって……お金は貰った事だし引き受ける事にした」

「『パツシヨ―ネ』？確か情熱って意味だね。何でそれがここで出て来るの？」

「僕の所属している組織の名前。因みにギャング団」

「ギャング？お兄さん悪い人なの？」

「ウチは比較的健全です。僕のこの能力は大体二年くらい前に発現出来るようになった……ボスが言うには、『ポルポ』って幹部が生きていた頃『試験』に巻き込まれて得たらしいんだ……」

「ほうほう……で、何でイタリアのギャングのスタンド使いのお兄さんが日本の埼玉の春日部に来たの？大学へ留学しに？」

「一応突っ込んで、何で外国の14歳の子供が極東の島国にわざわざ苦手の勉強をしに大学まで留学しに来にやなんのだ」

「それもそうだね」

『それで何しに来たのだ』

「ある『任務』の為だよ……まあ何で君と出会いここで自分に敵意を向けるスタンド使いと遭遇しているのかは分からないが……」

しんのすけと『ハリケーン』の方へ体を向ける

「もう一度聞くけど……本当に僕と一緒に彼女と戦ってくれるの？」

「当然だぞ！目の前の困っている人をオタスケする。それがオラ達春日部防衛隊だから！」

『私はそんなガキ共のお遊びグループなんぞに入っていないが……』

「お前とオラはセキレイカツコウなんだからお前も入ってるの！」

「それを言うなら一蓮托生」

「だから安心して！オラとオラのぶりぶりケーンがいれば……」

『間違えるんなら堂々と最後まで言い切れ！中途半端に間違えてるとかえってムカつくわ！』

「よし、ぶりぶりハリケーン、何かいい手ある？」

『だからちゃんと名前で呼べ！私の名前は『ハリケーン』だ！』

「ごめん、だから何か無い『ハリケーン』！」

『私は災害では……』

「いや正しいよ」

「やったー勝った！」

ガッツポーズをとるしんのすけと落ち込んでいる『ハリケーン』を見て、ロンディネと杉江は呆れ顔をした

「ねえ、楽しんでる所悪いけど今スタンドとコントやってる暇無いんだよ……それ分かってる？」

「おうごめんごめん」

『フン、相手の武器は刃物か……ならば、「目には目を、歯には歯を、埴輪は古墳の埋葬品、埋葬するなら愛想を振りまけ、振り掛けご飯はのりたまに……』

「何時まで続けるんだよ」

『こちらも刀を用意すればいいだけだ！』

『ハリケーン』が消えたと同時に、しんのすけの右手に、刃渡り50センチ程の、鏢の無い日本刀が出現した

しんのすけはそれを強く握る

「『道具型』にもなるのかよ……」

『他にもなれるかな……奴相手にはこれの方がいいだろ？』

「行くぞ、お兄さん、『ぶりぶりざえもん丸』！」

『勝手な銘を付けるな！』

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？（後書き）

何か掛け合いが多くなってしまいました（笑）

ロンディネはポルポの『矢の試験』に巻き込まれてスタンド能力を得たスタンド使いです。『ブラック・サバス』の能力だと、こうしてスタンド使いになった人がいてもおかしくないなあって思ったので

ロンディネのスタンド名はアメリカのオルタナティブ・ロックバンドから

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？（前書き）

刀+アイパッチVS 鉄戦本格開始！

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？

「いいかい？確認しておくけど僕は君がピンチになったとしても助ける事は出来ない……僕のスタンドは完全に後方支援向けで戦う事は出来ない……だけど全力でやれる事はやる……君を信頼した上でね……それは分かってほしい」

「おお！」

「ふーん……つまり……私が戦うのはその坊や一人って訳か……」

『アイアン・バタフライ』の刃の向きが内側から外側に回った

「そっちが『刀』なら……こっちも『刀』といきましょうかね」

「あんなのあり？」

「スタンドは一人一能力、その能力を如何に上手く使えるか、それがスタンド使いの強い弱いを決定する要素だ」

「その通り」

杉江は『アイアン・バタフライ』を、しんのすけの頭上へと振り下ろす

しんのすけは刀に姿を変えた『ハリケーン』で防いだ

「うぐぐぐぐぐ……」

「はい」

杉江は更に力を込める

更に加えられた力に、しんのすけは対抗しようとするも、まだ五歳の園児が大人の腕力に敵う筈もなく、『ハリケーン』の峰は、しんのすけの額に迫る

『何してるんだしんのすけ！さっさと押し返せ！』

「無理このおねいさん力強い……」

「これでも鍛えてるからね。さて……ちょっと手の力を加えたら君はその刀を外しそうでそうなたら私の勝ちだけど……それじゃ面白くないから……」

その瞬間、ロンディネが叫んだ

「そのままですら左右どちらかに移動しろ！」

『何だと？』

杉江は『アイアン・バタフライ』を消し、直後、必然的に生じた先端を握って引つ張っている手が放された竹のように勢いづけられスピードが乗った斬撃をかわして突きの構えを取る

そして、突き出した瞬間にスタンドを出した

しんのすけは地面を蹴って横に転がって逃げたが、避けきれず右腕を少し切ってしまった

「惜しい……もう少しで心臓か片方の肺に大きな穴を空ける事が出来たのに……」

『くそ……まさか自在に引つ込めたり出したり出来るとは……』

「いや、大抵のスタンドは出したり消したりは自在に出来るよ。と
いうか君等も同じ様にすれば、今奴のやったような不意打ちが……」

「それが出来ないの」

「は？」

『いや、正確には『出し入れ自体は出来るのだが、私がしんのすけに引つ込んだりしんのすけが私を引つ込めたりすると改めて出す時は引つ込む前にどんな形態をとっていたとしても必ず「近距離パワー型」の形態で出てしまうのだ』

「成程……つまり『近距離パワー型』以外の形態は、一度引つ込めた場合また出してその形態に変身する手間……『タイムラグ』があ

るっていう事が

「うんそうなの、その『タイムレンジャー』があるの」

『何を聞いていたんだお前は、「タンブラー」だ』

「『タイムラグ』だ」

「へー……それはいい事聞いちゃった」

横から『アイアン・バタフライ』の切っ先を天に向けた杉江が笑顔で言う。そして、切っ先をロンディネに向けた

「どうやらイタリアの少年の……」

「『ロンディネ』っていう名前があるんだからそれで呼んでくれない？」

「失敬……ロンディネ君の能力は『無力』故に侮れない能力みたいだし、しんのすけ君のスタンドは中々面白い能力みたいだし……少し変則的な攻撃をこれから繰り出すから……」

『アイアン・バタフライ』を元の普通の鋏の形に戻し、支点を取り外して二つに分け、それを両手に一つずつ持った

刃は、回って内側から外側へと向ける向きを変える

「『アイアン・バタフライ』 両刀形態……行くよ」

しんのすけに飛びかかり鉄を振るう。しんのすけは二本の刀からの斬撃を『ハリケーン』で受け止めたり受け流したりするも、相手が連続で素早く振るう為、少しばかり食らってしまった

数分ばかり続いた後、杉江の右手に握られた刀をしんのすけが防いだ事で終わった。杉江は無傷で、しんのすけはあちこちに傷をこさえていた

「このおねいさん……無茶苦茶に振り回してるだけだからこそ軌道が読み辛いぞ……」

「察しの通り……私は剣道とか未経験者だから切れるか切れないかは切れ味頼みで闇雲に振り回すだけ……もしかして君何かやってたの？」

「少し前に剣道をほんの少しの間だけ……」

「ふーん……だから『道具型』の形態が「刀」なのか……大会出た事ある？戦績は？」

「準決勝までで……決勝戦には出なかったから……」

「「出てたら優勝出来たかもしれない」……このまま君と続けていたら何時逆転されるか分からない……」ここは「

ロンディネへと体を向け、そのまま、地面を蹴って接近、充分に近付くと右手に握られている鉄の片割れを振り下ろした

ロンディネは紙一重で回避する。道路の舗装が熱したバターナイフで切ったバターのようにスパツと切れていた

「どんな切れ味だよ」

「『アイアン・バタフライ』はその気になれば厚さ50ミリの鉄板でもこんな風に斬る事が出来る……さっきまでセーブしていたのは早く終わるのがつまらないから……それよりさ……うん、大体分かったよ、『サード・アイ・ブラインド』だっけ？その名称……」

ロンディネの左目を覆うアイパッチに指差す

「そだけど……」

「『熱』を感知するスタンド……かなり小さな『温度差』までも捉えられる……さっきの突き……構える、いや、スタンドを一度『引つ込める前に』指示をしていたのも、スタンド能力を解除したり引つ込めたりする時、その瞬間もしかして使用を継続している時とはどれ程かは分からないけど『温度差』が生じるのかな？」

少し間を空け、ロンディネは口を開く

「正解……スタンドを出した時は少し温まっていた、引っ込む時は少し冷えてるんだ……まあそう口で言ってもその『温度差』は『ソード・アイ・ブラインド』が拾えるギリギリだけだね」

能力を発動した時や持続している時も上昇してるよ、と付け加える

「つまりその『ソード・アイ・ブラインド』は……『スタンド力を熱エネルギーとして捉える能力』……という訳か」

ロンディネは手を叩き出した

「全然正解」

「『無力』故にとんでもない能力だ……君はちゃんと潰さないといけないってのが……」

右手の『アイアン？バタフライ』の片割れを振りかぶる

「よく分かったよ！」

ロンディネは屈むも、前髪と額が切れてしまった。杉江は左手の片割れを、腰を上げるロンディネへと振り下ろす

「ていやあー！」

しんのすけが横から体当たりを繰り出す。ぶつかった事で軌道が逸れた刃は、道路に易々とめり込んだ

「お前の相手はまだオラだぞ！かかってこい！」

「あーそうだった……ね！」

右手に握られた片割れを投げつける。空いていた左手に握られていた方を、引き抜くという作業も同時に行う

しんのすけは飛んできた鋏の片割れを『ハリケーン』で弾く。それは地面に突き刺さった

しんのすけはそれを飛び越えて杉江の前へ立ち、刀を構える

『よくやったしんのすけ！これで奴の戦力は半減……いや、三分の一には落ち込んだだろう！』

「おうー！」

「フフフフフフ……」

顔を俯け、小声で笑い出した

「確かにね……私は剣術は会得していない……私のスタンドの本来の形が「鋏」である以上、これは確かに私の戦力は大幅に減ってしまった事を意味している……このままではやられてしまうだろう……そう、『このまま』ではね！」

しんのすけの後ろに刺さっている『アイアン・バタフライ』が杉江に向かってゆっくりと『傾いていた』。それは微々たる動きだが、『サード・アイ・ブラインド』が感知するには充分だった

ロンディネはしんのすけへと向き、叫ぶ

「そこから逃げろ！」

しんのすけは伏せる。同時に鋏の片割れはすっぽ抜け、杉江に、正確には杉江の左手に握られた片割れへと向かって飛ぶ

片割れはしんのすけの背中を少し斬って杉江の持つもう片割れと合体し、元の形に戻った

「ごめん言っとくべきだったかなあ？鋏って二つあって一つだよね？『アイアン・バタフライ』は片方が離れたら一定の時間が経過するか射程距離から出ようとしたら自動的にもう片方の元へ戻って

くるようになってるんだよ……」

面白いでしょ？つと続ける杉江。勿論しんのすけもロンディネも全然面白くなかった

意に介する様子もなく、杉江は鋏を再び二本の刃物にし、両手で取っ手を握った

「こつした方が雰囲気出るかな？」

フフフと微笑みながら、刃同時をぶつけ、音を鳴らした

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？（後書き）

切り離して二つの刃物にする、外した片方が戻ってくるというのは、『鉄』というシンプルな構造だから出来る事を考えてみました

『サード・アイ・ブラインド』はスタンドのサーモグラフィーと思っ
つてくれればいいです

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？（前書き）

『アイアン・バタフライ』 戦決着！

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？

「また二本になっちゃったぞ……」

「見れば分かるって」

『どうする？ 奴のあの鉄の切れ味は驚異だぞ』

「何でこんな時に胸のお話なんてするの？ もっと状況読んでよね」
ハリケーン』」

即座にロンディネはしんのすけの頭にチョップをした

「確かに……何としても早く決着をつけないとダメだな……君のスタンドに何か『特殊能力』は無い？」

「特殊能力って……火を噴いたりビームを出したりとか？」

「うん、そんな感じ……ある？」

「無い。オラの『ハリケーン』は普通に殴ったり蹴ったりするのが主体だから」

「だよな、スタンドは原則的に『一人一能力』だもんね」

「だけどあいつに勝てる方法ならあるぞ」

「本当か？」

「嘘言つてどうするの？じゃ、あいつを倒すからお兄さんは引っ込んで。怪我するよ？」

「……信じていいんだね？」

「うん。というよりも信じてくれてたんじゃなかったの？」

「そう言つたな……」

ふーっと息を吐き、下がった

瞬間、杉江は左手に握られた『アイアン・バタフライ』の片割れをしんのすけ目掛けて投げる。しんのすけはしゃがむ

「避けた所で『アイアン・バタフライ』は……」

「ほっ！」

針の穴に糸を通すかのように、『アイアン・バタフライ』の取っ手に『ハリケーン』の刀身を通した

「よし、これで後一本！」

「あんたバカ？こんなもん」

接近して刀に通された片割れの取っ手を握り、そのまま抜いた

「こうすればはい元通り」

「あっさり破られた……」

「いや考え付くだろ」

戦いを観ているロンディネが突っ込む。『アイアン・バタフライ』は元の袂にその形を戻し、杉江はそれを大きく開き、しんのすけの首を鋏もつとする

閉じる直前に『ハリケーン』を振り上げて大鋏を持ち上げる。鋏は何も切る事なく閉じる。そしてしんのすけはがら空きになった胴体を狙って刀を振るった

杉江はギリギリで『アイアン・バタフライ』を一旦消し、しんのすけの攻撃の軌道上に出現させ、斬撃を防ぐ。そして、しんのすけの腹部に蹴りを放ち、吹っ飛ばした

「スタンド能力は身に付けた時から使いこなす為の訓練は怠ってないからね……出し入れと形態変化とスタンド力のエネルギーを調節した上での大きさの操作位は朝飯前よ……」

「オラだって、ボタン付けとネクタイでまわしを巻く事は朝飯前だ

ぞ！」

『私だって顔を洗う位朝飯の前にちゃんとやってるぞ！』

「『それがホントの朝飯前』……と言いたいの？」

『その通り』

刀の状態で自信たっぷりな様子で『ハリケーン』は言う

『おい待て！誰か何か言えよこんちくしょー！』

「……………」

杉江は無言で再度『アイアン・バタフライ』を二つに分け、両手に握る

「また二刀流？芸が無いね」

「有効手段だから繰り返し使っていると取って貰いたいな……はあ！」

杉江は両手の刃を振り回す。しんのすけはそれを上手く弾く

「中々やるね……『アイアン・バタフライ』の抜群の切れ味を知って真正面から……」

「こつ何度もやってたら嫌でも慣れるぞ！」

右手の刃が頭上を通った直後、しんのすけは取っ手に刀を通し、力づくで飛ばした

「よし！これでオラの勝利だぞ！」

『バカ油断するな！忘れたのか！あの鉄は……』

「分かってるよ？だから……」

左手に握られた方の取っ手にも刀を通し、無理矢理飛ばそうとする

「このままもう片方も……」

「させないよ？」

握られていた『アイアン・バタフライ』が消えた

「忘れたの？スタンドの出し入れ位は……」

「そう来ると思ってたぞ……両手の鉄が飛ばされようとした時、引
つ込めると思ってたぞ！」

台詞の途中でしんのすけが言う。しんのすけは、杉江の正面を向い
て刀を振りかぶっていた

ジャンプして刀を振り下ろすしんのすけ。杉江は『アイアン・バタ
フライ』を出すが……

「広東めーん！」

防御に間に合わず、直撃した。峰打ちの為、杉江はショックで脳震
盪を起こし、倒れた

「楽勝！」

『嘘を付くな、私がこの形態になれなかったらまず確実に負けてた
ぞ』

「うん、ありがとね『ぶりケーン』」

『私は「ハリケーン」だっつもの！ちゃんと呼べー！じゃ』

『ハリケーン』の刀は消える。ロンディネの方向に体を向ける

「お兄さん、携帯電話持ってる？」

「持ってるよ、けどどうして？」

「このおねいさん病院に連れて行った方がいいんじゃないかと思っ
て……」

「え？でもこいつ……」

「戦いはオラ達の勝ちで終わったでしょ？だから救急車呼ぶ位して
もいいじゃない。それともイタリアのギャングの人達は怪我した人
をほっとくのが当たり前なの？」

「分かった……貸すよ……はい」

ポケットから携帯電話を取り出し、渡した

杉江美鈴 軽い脳震盪で病院で検査を受ける（再起可能）

野原しんのすけ この後、ロンディネに家まで送られた

ロンディネ しんのすけを家まで送り届けた後、調査を再開、続
行した

TO BE CONTINUED…

午後八時

ウマレ荘

そのの一室に、アクション幼稚園ばら組担当、まつぎか梅が住んでいる

彼女は、今日も愚痴をこぼしながら酒を飲んでいる

「今日も疲れたわ……たく、ガキ共ときたら今日は寝不足気味だったってのに……」

ドッジボールでぶつけられた箇所を手を当て、もう片手でビールを一気飲みにする

もう一缶開けようとしたが、机の上に飾ってある、若い男の写真が収められている写真立てを見て、止めた

「分かったわよ徳郎さん……今日はここまで」

写真に笑いかけながら、飲んだ缶を片付ける

写真に写された男の名は行田徳郎^{ぎよしたとくろう}。まつぎか梅との関係は、元恋人

この二人の出会いは、『医師と患者』だった。彼女が酔って階段から滑り落ち、当時彼が勤めていた接骨院に行ったのが出会いだっただ。彼女の一目惚れだった

当初は片想いだったが、時期を同じくして同じ接骨院に通院していた野原一家（正確にはしんのすけ）と帰る途中、結果的に告白する事で両想いとなり、付き合う事となるが、直後複雑骨折で彼の病院に入院する事となる。退院して少しして彼は化石発掘チームの一員として南米へ旅立った

暫くして、彼は帰国するが、その後のデートで徳郎は彼女を怒らせてしまい、その後続けざまに起きた様々な災難もあって意地の張り合いが続き、誤解は誤解を呼んだ。そんな半ば、彼に恩師から発掘チームへの誘いが来る

徳郎が日本を離れる日、しんのすけを初めとする春日部防衛隊の活躍もあり、彼が日本を離れる前に仲直りし、帰国したら……と約束するが、彼は異国の地でテロに巻き込まれ、帰らぬ人となってしまい、永劫に叶わぬ約束となってしまうた

彼女は自暴自棄となり、酒を飲み、体を酷使する事によって後を追おうとする。園内でも酒を飲んでいた為、当然その事で謹慎処分を言い渡される。その夜、ヤンキーグループに絡まれたがそれを撃退、その始終を見ていたボクシングのトレーナーに勧誘され、それを受けた

死ぬ為に

トレーニング中ヤンキーグループのリーダーに試合を申し込まれ、

そのリングを死に場所とする決意で臨んだが、途中しんのすけが徳郎の母が持ってきた、彼女宛の彼の最期の手紙を持ってきて、それにより生きる意志を取り戻し、その試合に勝利、見事に立ち直る。勤務中に飲酒をした事で解雇の危機にも陥るも、無事、それを脱した彼女はあれから今まで以上に一日に飲む酒の量を気を付け、制限している

「さて……明日園児達を目一杯相手にする為に眠りますか」

玄関のチャイムが、突然鳴った

まつざかは、玄関のドアを開ける。次の瞬間、彼女は目を見開いた玄関に立っていたのは

「嘘……徳郎……さん……？」

死んだ筈の彼女の恋人、だったからだった

見間違いでも、他人の空似でもない。彼女の目に写っているのは、正真正銘、行田徳郎その人だった

「久しぶり、梅さん」

変わらぬ声で、
変わらぬ仕事で、
彼はまっすぐかへと挨拶をした

アイアン・バタフライとサード・アイ・ブラインド？（後書き）

一番大幅に修正した感があります。最初は風車だったけど、やっぱり風車は無理あるかなと思って変えました（裏話）

生きていた？徳郎……その謎は……？

死者の狂想曲？（前書き）

まつざかの前に現れた徳郎……

死者の狂想曲？

焼き鳥デスペラード

ここで、俺、しんのすけ、琢磨、稲庭が隅のテーブルに集合していたしんのすけから『紹介したい人がいるから焼き鳥屋さんまで来て』と、電話で呼び出されたからだ

親しい友人ではなく俺達に掛けてきた事から、新卒のスタンド使いと友達になってそいつの紹介をするのだろうと思った。しかし、来た時にはこの店には、店長の他に、お座敷に座って焼き鳥を頼張っているしんのすけと勝手に出て来たと思われる『ハリケーン』がいなかった。本当に客来ないのねこの店……

靴を脱いだ後で二人も来て、二人も一緒になって焼き鳥をもしかもしや食べている

「で、しんのすけ君。早速ですが本題に入ります。僕達に紹介したい人とやらは何処に？」

「いや、今その人少し手間かかってるみたいで……もう少し時間かかるかも……」

「後20分で来ないんなら俺は帰らせて貰うからな。俺来週模試があるんだよ。俺の学校一応進学校だから……」

「大変だね瀬上君は」

「何他人事みたいに言ってるの？同じ学校で同じクラスでしょ？」

「手間がかかっていると仰りましたが……その人は今何をしているんですか？」

「あーちよつと『演出』の……」

「『演出』？」

言葉自体はよく聞く、だが人の紹介をするには妙な単語が出て来た事に、俺は一瞬理解出来なかった。俺だけでなく琢磨もみたいだ

稲庭は……焼き鳥をパクパク食べている。まあいいや……

『終わったよ』

御手洗いの方から、若い男の子の声が出た

「じゃあ入ってきて」

『ああ分かった』

「はいみんな、注目してえ！」

俺と琢磨はそのまま、稲庭はトマトジュースが入ったコップを口に運びながら、御手洗いの方へ顔を向ける

御手洗いから、一人の少年が出て来た。俺と同じか少し下くらいの年齢みたいだ。顔付きから日本人じゃないのは分かる

彼の恰好に俺と琢磨は呆れ、稲庭は口に含んでいたトマトジュースを吹き出し、俺にぶっかけた

何故ならその少年は、麦藁帽子に牛乳瓶の底のような眼鏡（伊達）をかけ、ローマ字の刺繍のしてある花柄のアロハシャツに、張り子のラクダに乗っているからだ

気を取り直してしんのすけに質問する

「お前何をしてるんだ？」

「オラと『ハリケーン』で日本の挨拶の正装を少し」

『因みに私がデザインを考案した』

「どの辺が『正装』なんだ？ここはいつから奇天烈ファッションショーの会場になったんだ？」

「へ？日本ではこういった服装で挨拶するんじゃない……」

「君も少しは疑いなさいよ……」

「この人はロンディネって言ってイタリアのギャングなの。日本に

は

「紹介は俺がお前等への説教が終えてからで構わないか？」

話を聞いてみると（勿論服は着替えさせた後で）彼の住んでいるイタリヤで日本から麻薬が入ってきており、その麻薬密売人がこの春日部に隠れているらしい。しかもその密売人は、『スタンド使い』と組んでいるか、密売人自体が『スタンド使い』だという

「で、俺達にそれをどうしろと？」

「ロンディネのお兄さんのお手伝いをしようよ！」

「……あのなしんのすけ、俺達はスタンドを引き出す『矢』とその持ち主を捜しているんだぞ、しかも手掛かりといえる手掛かりはまだハッキリと掴んでないんだぞ、自分達でそれなのに他人の捜し物を手伝える事が出来るのか？」

冷たいのは百も承知だ。確かに麻薬を売っている奴が俺の育ったこの春日部にいて、しかもそいつがスタンド使いならばどうにかしてあげたい。それが本心だ

しかし、俺の中の優先順位は『弓と矢』だ。それも自分が言ったが、持ち主を特定出来る程進んでいない。しかも『俺を殺す』為にこうしている今も『矢』で誰かを射ているのかも知れない

一方ロンディネのは相手の顔も名前も素性も判明していて、任務は『居所を捜し出す』までだ

俺の平穏な生活の為に周りも不用意にスタンド使用による騒ぎに巻き込ませない為にもその優先順位は変えるつもりは無い

「除夜君……言っている事は分かりますが少し薄情過ぎなんじゃないですか？」

「だから、お前も『矢』を探すのを手伝ってくれ」

「へ？」

四人（＋ハリケーン）は俺の言った事が何だかよく分からないといった反応をする

「つまりこういう事だ、俺はこの春日部で『矢』を用いてスタンド使用を増やしている奴を探している、お前は春日部の何処かにいる麻薬密売人の隠れ家を探している……対象は違えど互いの目的が『人捜し』である事に変わりはない。そして互いの探し人がいるのはこの春日部だ」

「つまり『探している物を探すのに協力するからこっちもそっちの探し物探しに協力しろ』……と、取っても？」

「そう言っている……この程度ならいいだろ？お互い物のついでで事で」

「まあ確かに……その位ならいいですよ、ボスから言われたのは『密売人の居場所の特定』だけで方法は言われてませんから」

「じゃあ交渉成立という事で」

俺とロンディネは互いの右手を掴んだ

その後はお互いの情報交換をして帰宅した（代金はロンディネがカードで払った）

余談だがロンディネの情報の中にあつた麻薬密売人の嘗て所属していた『モルヒーネ・ファミリー』という組織の壊滅は、現在御厨先輩が住んでいる『またずれ荘』というアパートに当時家がぶつ壊れた為再建まで住んでいた野原家もその決定的なきっかけとなった事件に野原家も巻き込まれたという事実を後にしんのすけから聞いた時は驚いた。しんのすけは色んな騒ぎに巻き込まれているんだな。本当どんな星の下に生まれてきたんだろうか……

「いや、それより今は早く帰って復習しないと……」

翌朝、アクション幼稚園

この日珍しく早起きし、バスに乗る事の出来たしんのすけは、バスから一番に降りた

「おっ？」

バスから降りて最初に目に入ったのは、複雑そうな顔をして佇んでいるまつぎか梅だった

「どうしたの？そんなしがない顔して」

「……『浮かない顔』って言いたいの？」

「そうともいう」

「そうとしか言わないわよ……そうね、みどりとあんたになら話せるかも知れないわね……昼休みに職員室に来てくれない？そこで話すから」

「ほほーい」

いつものように朗らかに返事をし、ひまわり組へと向かった

その時、しんのすけは、彼女は男絡みで悩んでいるのかと思った

恋人が亡くなったあの日から、彼女はずっと落ち込んでいた。生きる希望や意思さえ見失っていた

立ち直ってからも、時折寂しそうにしているのを見た事も度々ある

恋人の件に関して、最初から最後まで関わっていた彼は彼なりに彼女の事を心配していた

「昨日、徳郎さんが家に訪ねてきたの」

昼休み、しんのすけと石坂みどりにとって、開口一番に彼女が口にした事は、とても以上に信じられない事だった

死者の狂想曲？（前書き）

まつざかの発言の真意とは？

死者の狂想曲？

タウン署、麻薬取締課

「どうしました京さん？そんな気難しい顔をして」

「汚田……いや、ここ半年妙な事件が次々と発生しているだろ？その内の一つの窃盗事件なんだが……」

「ああ、二ヶ月前から発生している一人暮らしの人の留守を狙って貴重品を数日かけて盗む手口の……」

「ああ、知ってるだろ？被害者が口を揃えて妙な事を言ってるのを」

「ええ、確か『被害が出る数日前から死んだり行方不明になった親しかった身内や恋人が家に訪ねてきた』と……」

「かなりの被害が出ているにも関わらず証言にあまりにも現実感が無い為上の連中は特に何も思っていないみたいだが……俺にはこの春日部には『とんでもない奴等』が潜んでいると思ってるんだ……」

「『とんでもない奴等』って……どんな奴等ですか？」

「そこまでは分からねえ……だけどよ、そいつ等はよ、理屈じゃ言えない『何か』を持っていると思うんだ……」

「京さん……」

「多分『そいつ等』の事に気付いてるのは……俺だけじゃねえ筈だ
……事件を担当している奴等の内の何人かは感じているだろうよ」
「……………」

「お、そろそろ昼休み終わるな。汚田、飯食い終わってないならさ
つさと食え」

「もう食べ終えてますよ」

「徳郎さんが……まつざか先生の家には？」

「夢じゃないの？だって……」

「そうよね……信じられないわよね……」

信じる事が出来ないのは当然だ。彼はアフリカでテロに巻き込まれ、
死んだのだ。葬式もやったし、その葬式に彼女も参列した

まつざか本人も、自分の言っている事が信じ切れていないようだ。
いや、彼女が一番信じられないのだろう

「えっと……その人が本物の徳郎さんっていう証拠は？誰かの変装とか……」

「私がそう思わなかったと思う？だから何度も二人しか知らない事を訊いたわ、でも、その答え全てが『合っていたのよ』……」

「もしかして……幽霊？」

「触れたわ……そして……『明日また来る』って……」

シーンとなっている中、昼休み終了を告げる予鈴がなった

「という訳なんだけど……どう思っ？」

放課後、春日部にある公園に、春日部防衛隊が集合していた

話題は昼休みのまつざかの話についてである。これを切り出したのは、桜田ネネだ

「ねえ、何でネネちゃんがこの話知ってるの？」

しんのすけがネネに疑問を投げ掛ける。この話は石坂（旧姓よしなが）みどりから『他言無用』と言われていた。しんのすけは昼休みから今に至るまで誰にも如何なる手段でも伝えていない。本人やみどりが喋るとも思えない

その答えはマサオが教えてくれた

「立ち聞きしてたんだよ、職員室のドアの所から」

「ああやっぱり」

「うるさいそこ！で、その徳郎さんが何者なのか調べてみたいと思うのー！」

「ちょっと待ってよネネちゃん、確かに僕も興味はあるけど……」

「何よ！もしかしたらまつざか先生誰かに騙されているかも知れないじゃない！」

「でも本人しか知らない事を知っていたって……」

「個人の秘密なんてね、知ろうと思えば幾らでも知る事が出来るわよー！」

ハッキリと断言する。しんのすけを含む四人はそんなネネに難色を示した。言っている事は一理ある。どんなに上手く隠してもその秘密は何時どの様に暴かれるかは分からないものだ

「という訳で、今日の夜からまつざか先生のアパートを見張るわよ！」

「ネネちゃん……待って……」

「何？まだ反対なの？」

「違う……僕達だけで、行くの？」

「う……」

ネネは言葉に詰まる

ポーチちゃんの言い分は正しい。園児だけの夜の外出を認める認める親はいない。その理由が『人の家を見張る』となると尚更だ

ネネが考え込んでいる時、しんのすけが手を挙げた

「最近知り合ったお友達に、そういうののってくれそうな人がいるからその人に頼んでくる」

「そんな人いるのか？」

「本当は乗り気じゃ無いんだけどね……」

誰にも喋らなかったが、まつざかの話聞いていてしんのすけには

ある推測が浮かんでいた。『スタンド使い』の仕業なのでは無いのかという、限りなく確信に近い推測が

午後六時

既に薄暗くなつた時間帯で、公園に集まったのは最近知り合った男の子、野原しんのすけ君とその友達である男の子三人と女の子二人、そして僕、須藤琢磨の六人でした

仕事の帰り道、いきなりしんのすけ君から電話が来て、『夜先生の家を見張るから付き合つて』といきなり言われました

それを聞いた時断ろうかと思いましたが、その直後の話の内容で、付き合う事にしました

除夜君と稲庭さんにも連絡をかけましたが、(当然と言えば当然かも知れませんが)親からの外出の許可が下りず、ロンディネ君にはそこまで付き合つて貰う義理は無いと思い、連絡自体しませんでした、僕達七人が集まつて最初にやった事は、しんのすけ君を除く五人と僕は初対面だったので常識的にお互いの自己紹介、その後女の子二人の喧嘩でした

「ちょっと！何であんたがいるのよ！」

「御心配なく、しん様に許可は貰いました。よってあいがここに
いる事に関して何もおかしくありませんわ」

このお嬢様言葉を喋る少女の名前は酔乙女あいちゃん。風間君に聞
いた所、かなりのお嬢様で、「庶民の暮らしを見たかったから」と
いう理由でしんのすけ君達の通う幼稚園に転校し、色々あってしん
のすけ君にベタ惚れだとか（確かに運転手が乗っている外車で来た
からお金持ちなのは分かっていただけ）。ついでに言うとマサオ君
は彼女にぞっこんみたいなのですが、何時も適当にあしらわれてい
るか遊ばれているかのどちらかのようなようです。かなり不憫に思えまし
た……

それと、彼女がついてきた経緯というのは、しんのすけ君が帰って
きてすぐに休みの日にしんのすけ君を遊びに誘おうとしんのすけ君
の家に電話を掛け、その時うっかり今晚何をする予定なのかを喋っ
てしまい、あいちゃんは一方的に自分もついて行く事を了解させ、
今に至るみたいです。余談ですが運転手でSPの人（黒磯さんとい
うらしい）は、何処か弱味を握られていたかのような態度（何やら
皿とかどうとか言っていた）でした

兎も角僕達は喧嘩を仲裁して、僕が引率する形でそのまつざか先生
のアパートへ向かいました

「しんのすけ君、まつざか先生ってどんな人なんですか？」

「んーとね、見栄っ張りで虚飾が激しくてつまらない事で対抗心を
燃やすおまたげない人」

『大人気ない』と言いたいのでしょうか

「……しんのすけ、本人が聞いていたら、殴られるぞ……」

「でも他人の事を本気で心配出来て他人の喜びや悲しみを自分の事のように感じる事が出来るいい先生でもある」

「ふーん……その先生、いい先生なんですな」

ちゃんとこうやって子供達が言うって事は、素晴らしい先生だという事でしょう

子供は大人の思うより遥かに周りの大人の事を観察し、評価をしているものですからね

「まっざか先生のアパートが見えてきた」

アパートに来た僕等は、バレる可能性を低める為に僕、マサオ君、ポーチちゃん、ネネちゃん、そしてしんのすけ君、風間君、あいちゃん、の二つのグループに分かれ、僕達は階段近くに、しんのすけ君達は廊下の奥で何処で用意したのかベニヤ板を立てかけて（どう考えても余計不自然です）隠れました

不審な人物は僕達が隠れてから約40分後に現れました。濃い紫色

に染めた髪に鼻にピアスをし、緑色にアルファベットの入ったＴシャツを着て、オレンジ色のスニーカーを履き、非常用のリュックを背負った二十代後半程の男がアパートの敷地に入ってきました

その男は階段を半分くらい上ると、リュックを下ろして、木で出来たパーツを出して、組み立て始めたのです

出来たそれは、小さな子供程の大きさの人形でした

その人形が、いきなり動き出し、階段を上って行って部屋に向かっていったのです

「え……な……何……むぐっ」

（間違い無い！あの男はスタンド使いだ！）

驚きのあまり声を上げようとしたマサオ君の口を塞ぎ、僕は下から人形を目で追う事にしました

飛び出そうとしたネネちゃんとボーちゃんの肩をしっかりと掴み、引き寄せて耳打ちします

「無闇に行動してはいけません。考えなしの行動は危険です。何かあつてからでは遅いんです」

納得してくれたようで、二人は動くのを止めました

人形はある部屋のドアの前に立つと、ノックをしました。ドアはすぐに開き、そこから女の人が出て来ました。タイミング的にあの人は玄関先で待っていたのでしょうか

「あの人が『まつざか先生』ですか？」

「うん……」

「徳郎さん、また来てくれたの？」

彼女のこの台詞に、僕も驚きましたが、マサオ君達はもっと驚いていました

多分、いや、絶対にしんのすけ君達も同様の反応をしていたでしょう

僕達は出ていきたい気持ちを抑え、もう少し成り行きを見守る事にしました

死者の狂想曲？（後書き）

結構長くなってしまいました

麻薬取締課の二人は、ちょっと出したくて出してみました

除夜君がいないので後半から琢磨が狂言回しの役です。因みに夜中
出歩いて平気なのは年齢的に彼しかいないのでしんのすけは彼に連
絡しました

男のスタンドの秘密は、次辺りで明かしたいと思います。多分判明
したら『ああそんな事か』と思うと思います

死者の狂想曲？

「え……ええ、分かったわ。今日、昨日あなたが尋ねてきたのをよしなが先生としんのすけ君に話したの……」

まつぎか先生は、相対する人形に戸惑いながら喋り出しました。いや、あの様子から見て、まるで人形が何か尋ねてきたからそれに答えているという感じです

勿論これはどう考えてもおかしいです。先生と相対しているのはどこからどう見ても『人形』、喋る筈がありません。なのに先生は、戸惑ってこそはいるものの、相手と本当に対話しているかのような口振りで喋っています

人形はいきなり先生の腕を取り、突然部屋の外へと引っ張り出しました

「えっちよっ……徳郎さん。今から散歩に行くって……駄目じゃないけどまだ私聞きたい事が……！」

人形はその両腕を先生の腕に回し、強引に引っ張り始めたのです

その時、僕以外のみんなが、隠れるのを止め、先生の元へ飛び出しました。僕が止める間も無く

「あんだ達何でこの時間にここに？連絡してあげるから……」

「そんなの……どうでもいい……この人形は、先生を何処に連れて行くつもりなの？」

「に……人形？」

「ええそうよ！」

「これは徳郎さんじゃありません！ただの人形です！ちゃんと見て下さい！」

「人形？私も徳郎さんじゃないのは分かっていたけど……でも確かに温もりは……」

「でもこれはただの木で出来た人形なんだ！目を醒ましー」

階段に隠れていた男が、マサオ君の首に手刀を当てて気絶させました。しんのすけ君達は突然その男に対し、当然警戒心を剥き出しにします。

「駄目じゃないの子供達い……折角久し振りに再会した恋人同士の逢引に茶々を入れるのはさあ……」

男は、自身の背後に濃い灰色の体に左手が懐中電灯、腹部にスポットライトのような装置が取り付けられていて、一つ目で目の所に自転車のライトのような物が嵌められている『スタンド』を発現させ

たのです

突然の乱入者に、先生はしんのすけ君達を自分の後ろへとやりました

「何なのアンタ！」

「『何なの』……ねえ、確かにい、俺自身は初対面だよなあ……俺とあんた達はあ……」

その男とスタンドは動き出しました。そして、スタンドは腹部のライトを先生達に向けて光らせたのです

しんのすけ君は『ハリケーン』を出し、スタンドを殴りました。フイードバックで本体である男もダメージを受けます

男は殴られた部分をさすりながら、今度は頭部のライトを光らせました

直に浴びたらマズいと直感的に感じ、『SHUFFLE』でしんのすけ君の前半身を『持っていきました』

直撃したしんのすけ君以外の六人は、数秒浴びるとバタリと倒れてしまったのです。人形も、同じ様に倒れてしまいました

僕も隠れるのを止め、出て来ました。その際にしんのすけ君を戻して

「ああ……他にもスタンド使いがいたのかよお……まあ別におかし

くないかあ……『スタンド使いはスタンド使いと引かれ合う』んだからあ……それに俺が二ヶ月前に発現したスタンド『ビウエア・オブ・ダークネス』はそう易々と倒されるようなスタンドじゃないしい……」

「しんのすけ君、全員生きています。気を失っているだけで脈も呼吸も正常です」

「良かった……でもあのスタンドの能力何？特殊な光を発射する能力か何か？」

「多分ですが光自体は普通の物だと思います。奴のスタンドの電灯には恐らく一定の間隔で点滅するとかそう言った要素が施されてあつてそれにより人間を強い催眠術にかけるんだと思っんです」

『催眠術とはそんな簡単にかけられる物なのか？』

「催眠術つてそんなに強力なの？」

「サブリミナル効果といって映画のフィルムの中に映画の内容と全然関係の無い……例えば焼き芋の映像を一定間隔で一コマずつ挟みます。その焼き芋の映像を挟まれたフィルムを見た人間は意識的には映画しか見ていなくとも焼き芋が食べたくなる……実際昔映画館の売店の回転率を上げる為に使われていた手法なんです。今は禁止されているけど……これもある意味催眠術の一種と言えるでしょうね」

「オラの質問にも答えて」

「何でもない木の棒とかでも催眠状態に高熱を持った何かと思っ込込

ませれば火傷を負うんです。人間の精神はそれだけ簡単に術中に陥らせる事が出来て、それだけ強力なんです」

「その通りい、解説ありがとう、この柿枝辰男の『ビウエア・オブ・ダークネス』は思い込ませるスタンドお、光はスタンド使いでない一般人にも本能的な感覚で存在を理解出来い、定期的に見せ続ければあ、廃人にする事も意思のない奴隷にする事も可能お」

普通に喋ってくれませんか？意外と苛立つんですよその口癖

「更にい、このスタンドの真骨頂はあ、腕のライトを当てるとお、その人が会う事のない心の底から会いたいと思っっている人物にい、同じく光を照らした物がそう見える事だあ……頭でどれ程否定しようとお、本人はそれを本物と『思い込まれる』う……」

「本人の思い込みによる産物だから『本人同士しか知らない事を知っている』ように思い込んで……という訳ですね？しかし……それではこの人形が動ける理由は？流石にそれは『思い込み』だけでは説明がつかないのでは……」

「さあねえ……何故動くかとかは俺自身にも分からないんだあ……もしかしたら俺達の理解を越えた人間の秘めた力が働いているのかも知れない……」

「それは分かった……一つお前に聞きたい事があるんだけど……お前は何でまつざか先生を選んだんだ？何の為に？」

しんのすけ君が、普段の彼では考えられない程真剣な表情で柿枝に訊きました。その言葉には、その表情には、怒りが込められてました
柿枝は、鼻でふつと笑って応えました

「何故え？誰でも良かったんだよお！俺は折角『スタンド能力』なんてのを手に入れたんだあ、この能力を使って自由に楽しく愉快に生きたいだけだあ……その為には金が必要でなあ、能力を使ってえ……」

言葉は途中でしんのすけ君の『ハリケーン』が柿枝を殴る事で途切れました

「あつそ……よく分かった……今ここでお前を倒すしかお前が昨日から見せてきた『悪夢』を醒ます手段が無い事をね……琢磨お兄さん！」

「分かっていますよ……でも気をつけて下さいね」

怒りを込めた眼差しを、倒れている柿枝へと向けるしんのすけ君

柿枝は口からダラダラと血を流しながら立ち上がりました

死者の狂想曲？（後書き）

何か丁寧口調の地の文って難しいですね

今回のスタンドは『思い込ませる』能力のスタンドでした。因みにヘビー・ウェザーみたいな事は出来ません。琢磨がサブリミナル効果を出したのは、催眠術の一例としてです

スタンドの名前はジョージ・ハリスの楽曲から

死者の狂想曲？（前書き）

『ピウエア・オブ・ダークネス』 戦決着！

死者の狂想曲？

しんのすけ君は『ハリケーン』を出して、口から出る血を拭き取った柿枝へと殴りかかりました

柿枝の手前に立つ『ビウエア・オブ・ダークネス』は、腰を屈めて頭部のライトをしんのすけ君へと向けました。僕が『SHUFFLE』の能力を発動させてしんのすけ君の前半身を持っていったのと、頭部のライトが光ったのは同時でした

ライトの光が消えると同時に、僕は能力を解除してしんのすけ君を引き寄せました

「しんのすけ君、奴は無策に突っ込んだ所で勝てる相手ではありません。今みたいにただ殴りかかってもらっては自分から術中にはめて下さいと乞うのと同じです」

「何言ってるの？あいつがライトを光らせる度に今みたいに……」

「さっき成功したのはまぐれと言ってもいい。まぐれは何度も起きません」

「じゃあお兄さんがオラの目を持って行って、それでお兄さんがあいつのいる方向行って、オラはその通りに進むから」

「小さな頃友達と海水浴でやったスイカ割りを思い出しましたよ」

大体教える僕が術中にはまったらどうするんですか……

奴の暗示は奴のスタンドから発せられる『光』を浴びて見る事で始まる。つまり、『光』さえ食らわなければ暗示には掛からないという事。しかし、『どうやって音より速い「光」から逃れる事が出来るのだろうか』。これが一番問題です

僕のスタンドは『持っていく』だけでしんのすけ君はタイプを変化させるという能力ですし

そうこうしている間にも『ビウエア・オブ・ダークネス』は、柵の上から僕達を見下ろしました

ライトから光が出て来る前に、目を堅く瞑ってしんのすけ君を右手首を残して『SHUFFLE』の空間に持っていき、右手首を抱えて先生の部屋の玄関まで滑り込みます。この時点でしんのすけ君は元に戻しておきました

(あのライトの光がせめて普通の懐中電灯とかみたい……現実逃避しても始まらない。ちゃんとあの光の対処方法……あれ?)

そーだーあいつの能力は『光』なんですよね……『光』なら……

「しんのすけ君、『ハリケーン』、少しの間玄関の前に立っていて下をい」

『どっつしたのだ?』

「『勝てるかも知れない方法』を、思い付きました……説明している暇はないんでそれじゃ！」

僕はしんのすけ君を外に出してドアを閉め、鍵を掛けました

「見捨てられたみたいだな君い……まあ正しい判断だと思っけどお……勿論あのチビ男のがねえ……」

「そうだぞ……正しい判断をしたぞ……」

「やっぱりそう思うかあ……気の毒だねえ、俺から逃げる為に置き去りにされてさあ……」

「オラ達がお前に勝つ為の、正しい判断をしたぞ！バラける……『ハリケーン』！」

『ハリケーン』は群生型となり『ビウエア・オブ・ダークネス』の体に引っ付いた。九割が頭部と腹部のライトに覆い被さり、残る一割が、左手のライトに拳を振るう。十回近く叩いた所で割れた

フィードバックが柿枝の左手に来て、左手首が砕けた

「ぐああ……何て事だあ……全治何ヶ月だこれはあ……」

「オラ医者じゃないから分からない！やれ、『ハリケーン』！」

頭部と腹部のライトに覆い被さるハリケーンは、拳を振りかぶり、同じ様に叩き割る為に振り下ろそうとする

「させるかあ……」

六度目に拳を振り下ろし、罅が入り出した所で『ビウエア・オブ・ダークネス』は両手を用いて群がったハリケーンを払い、それをプチプチと潰す

急いで残りを戻すも、潰された数が多過ぎたのか、しんのすけは全身のあちこちに裂傷を負った

「タイプが変わったのには正直驚いたが……群生型の最大の欠点は遠隔操作型故のパワーの無さに加え、スタンドパワーを分散させている故に一体一体の耐久性は無いに等しい事だ……よって破壊力に自信のない我が『ビウエア・オブ・ダークネス』でも一発で潰す事が出来たあ」

『ビウエア・オブ・ダークネス』はしゃがんでしんのすけの顔を自分の方へ向けた

「左手の礼だあ……苦しんで死ぬよう暗示をかけるぞあ……頭部の

ライトは脳に直接作用する……こいつ等にやったのは気を失わせる程度だったが……お前には『生きていて意識ははっきりしているが他はからきし動かせない』状態に……いや、腹部のライトで家族を皆殺しにして自分も自殺う、但し無意識に僅かに躊躇い命に別状は無かったが障害に残る怪我を負ったっていうのも面白そうだなあ……どっちも捨て難いなあ……どうしようかなあ……」

「悪趣味……今の言葉を聞いてどう思ったか一言で表せと言われたら、即答でこの単語が言えますよ」

ドアが勢い良く開き、スタンドの拳が『ビウエア・オブ・ダークネス』の顔面に入った。その衝撃で頭部のライトに大きな亀裂が走り、フィードバックで柿枝の額が切れた

「戻ってきましたよ……変質者さん」

後ろに『SHUFFLE』を出した琢磨が、右手に『縁のような物』を持ってしんのすけの前に現れた

「貴様……」

「今の内に言っておきますけれど、あなたの能力の『対処法』は既に用意しています、しんのすけ君が時間を稼いでくれましたからね」

柿枝は腹を抱えて笑い出しました。僕の言った事がよっぽど滑稽な内容と取れたのでしょようね

そして『確信』しました。こいつは自分の能力を理解しきれていない事を

「何を言い出すのかと思えばあ……俺のスタンドの能力は決して防ぐ手段は無い、今まで『ビウエア・オブ・ダークネス』の催眠暗示を逃れた奴はいなかったあ」

「それなら嬉しいな……だってあんたの能力を破ったのは僕が初めてという事になるでしょ？」

柿枝は震えています。僕は今の内に左手に持っている物を自分の顔の前に持っていきました

腹部のライトが光り出した

「どうだあ！俺のスタンドの光は対象が例え瞼を閉じても手で目を覆ったとしても……」

柿枝の台詞が止まりました。僕の持っている物が理解したのでしょよう

僕が持っている物、それは先生の部屋から拝借してきた『鏡』。言

わずと知れた、光を『反射』する道具

『SHUFFLE』の能力で縁の一部を残して後は別空間に持っていき、奴が能力が発動する寸前に僕は能力を解除した。これが鏡がいきなり出現した『理由』……

自分の能力を食らった柿枝は、手摺に手を掛け足を上げています。どうやら僕に『飛び降りる』よう暗示をかけたかったのでしょう。止めようとしても、それに抗える術が無い自分の能力の恐ろしさを、今奴はよく実感しているでしょうね

「畜生……俺の能力があ……こんな形でえ……」

「あんたの催眠能力はかなり強力ですけど……あなたは自分の能力の過信し過ぎた……あんたの敗因を上げるとしたらそれですよ……じゃあ後は任せましたよ、しんのすけ君」

「おう！」

体を手摺に乗り上げようとする柿枝の体を、ボロボロになった『八リケン』が掴んで上に放り投げました。そして、転がっている『人形』を奴へと投げつけたのです

「覚悟……決まった？」

「あ……ああああああ……」

『ハリケーン』は柿枝に拳の連打を喰らわせました。人形は修復不能なまでに砕け、柿枝は吹っ飛び、下の駐車場の普通自動車のフロントガラスを突き破り、後部座席に突っ込みました

本体 柿枝辰男（スタンド名：ビウエア・オブ・ダークネス）
再起不能

T O B E C O N T I N U E D …

その後、僕達は救急車と警察を呼んで柿枝を引き渡し、帰宅しました
僕の家はまつざか先生のアパートからそう離れていない為早々に帰宅し、春日部防衛隊のみんなはあいちゃんの車で送って貰う事になりました

佐藤家

「それじゃまたねマサオ君」

「またねしんちゃん」

おにぎりを連想させるような頭をした少年、佐藤マサオが自分を送ってくれた車の中に乗っている友達に手を振る

チャイムを鳴らし、帰宅した事を伝えて家の中に入り、コレクションの整理の為自分の部屋に入った

ドアを閉めると同時、部屋の異変に気付いた

荒らされているとか、そういったものではなく、ただ『自分の部屋に人がいた』だけだ。但し、身内とかではなく、『知らない人』である

部屋は薄暗く、顔も俯けていた為顔はよく分からないが、体型や男用の学生服を着ている事から、十中八九男の筈だ。その右手には、『弓と矢』が握られていた

「待っていたよ……佐藤マサオ君……」

『男』は優しく声をかける。「ヒイツ！」と悲鳴を上げ、逃げようとするが、その前に男は足でマサオの体を踏みつけ、動きを封じた
叫ぼうとするも、男によってガムテープで口を塞がれる

「君の友達のせいでせっかく生み出したスタンド使い達が六人もやられたんでね……まあ沢山創っているから六人位痛くも痒くも無い

けど、やはり除夜を倒す可能性は僅かでも上げておきたいのですね…」

男は右手の『弓と矢』を、マサオに向かって引いた

「安心して……すぐに終わるから……注射と同じでほんの一瞬で済むから……気を抜いて」

あくまでも優しく言う

そして、弦を引っ張っている手を、離した

死者の狂想曲？（後書き）

柿枝は脱落、何気に初めての『再起不能』です

能力はかなり凄かったんだけど……

スタンド紹介（前書き）

今回は小休止の意味合いと（自分の）おさらいの意味で、今まで確認したスタンドを纏めてみました

前半はパラメーターの簡単な見方の説明です

スタンド紹介

破壊力 - 人間でいう腕力等の事を差す。純粹な意味での破壊力の為、たとえ凄まじい破壊力を持つスタンドでも、それが能力による破壊の場合低評価を受ける場合がある。近距離パワー型、遠隔自動操縦型が高い傾向にある

スピード - 動作をどれだけ機敏に行えるかを差す

射程距離 - 『スタンド能力の効果範囲』 『本体からスタンドがどれだけ離れる事が出来るか』の二つを差す。遠隔操作型や遠隔自動操縦型は後者の意味で評価の高い

持続力 - スタンドをどれだけ出す事が出来るか、またはスタンド能力をどれだけ長く持続する事の出来るかを差す

精密動作性 - 動作をどれだけ精密に行えるかを差す

成長性 - スタンドがこれから先成長する可能性を差す。生まれたてのスタンドや向上心の強い本体から生まれたスタンドはこの評価が高い

A...超スゴい

B...スゴい

C...普通、人間並

D...二ガテ

E...超二ガテ

スタンド名 - 『プラネット・ルビー』

本体 - 瀬上除夜

破壊力 - B スピード - A 射程距離 - C

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - A

能力 - ? 自分を『軸』にして射程距離内の物体を円を画くように瞬間移動が出来る

? 射程距離内の物体を『軸』にして自分を円を画くように瞬間移動が出来る

スタンド名 - 『ハリケーン』

本体 - 野原しんのすけ

破壊力 - タイプ次第 スピード - タイプ次第 射程距離 - タイプ次第

持続力 - A 精密動作性 - タイプ次第 成長性 - A

能力 - 『近距離パワー型』を基本として、スタンドの型を変化させる事が出来る

スタンド名 - 『SHUFFLE』
シャッフル

本体 - 須藤琢磨

破壊力 - C スピード - C 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - A 成長性 - B

能力 - 射程距離内にいる物体の一部を、または一部を除いて『SHUFFLE』の空間に『持っていく』事が出来る

? 持っていった部分は残った部分と問題無くリンクしている

? 但し持っていった部分は物理的に切り離されている

? 持っていった部分を繋ぐ断面は何者も干渉する事は出来ない

？持っていた部分が空間の何処にあるのかを把握しているのはスタンドの本体のみ

スタンド名 - 『イザベラ』

本体 - 稲庭早良

(通常体)

破壊力 - B スピード - D 射程距離 - E

持続力 - B 精密動作性 - C 成長性 - A

(分裂体)

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - D 成長性 - C

能力 - 浅い傷や思考等を拭き取る事の出来る

？拭き取った物は任意でどんな物体にも絞り出す事が出来る

？複数のスタンドに分裂する事が出来る

スタンド名 - 『マイ・フレンド』

本体 - 御厨山女

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - D 成長性 - E

能力 - 本体の秘密を知った人間を自動的に事故に見せかけ、または事故を誘発させて殺そうとする

スタンド名 - 『ストウピッド・ライク・デイス』

本体 - 塩屋常陸

破壊力 - E スピード - D 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - A 成長性 - A

能力 - 液体の融点と沸点をその間で自在に変える事が出来る

スタンド名 - 『ミスター・ブライドサイド』

本体 - 逢坂氷雨

破壊力 - A スピード - A 射程距離 - E

持続力 - B 精密動作性 - B 成長性 - C

能力 - スタンドの手に触れた物を、粘土のように形を変える事が出来る

? 別の物体同士を混ぜ合わせる事は出来るが一つの物体を引きちぎって複数の物にする事は出来ない

スタンド名 - 『アイアン・バタフライ』

本体 - 杉江美鈴

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - C

持続力 - A 精密動作性 - D 成長性 - A

能力 - ? 物体を平等に切る事が出来る

(スタンドの像は物体ではないので、純粋な切れ味で切る事になる)
? ある程度変形させる事が出来る

(時間が経ったり射程距離外に出ようとすると自動的に元に戻る)

スタンド名 - 『サード・アイ・ブラインド』

本体 - ロンディネ

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - なし

持続力 - A 精密動作性 - なし 成長性 - A

能力 - ? 通常のサーモグラフィーとして熱を感知する

? スタンドを実体に置き換えた場合の熱を感知する
? どちらか一方しか使用出来ない

(切換は可能)

スタンド名 - 『ビウエア・オブ・ダークネス』

本体 - 柿枝辰男

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - E

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - E

能力 - スタンドから放たれる光を浴びた者に瞬間的に強い催眠状態に陥らせる

? 頭部のライトの光を浴びると、脳に強い刺激を与える

? 腹部のライトの光を浴びると、本体の指示に従ってしまう

? 左手のライトの光を浴びると、光を浴びせた別の物体（生物以外）が対象が最も会いたい人物として認識してしまう

（稼働部分のある人型の物体であれば、原理は不明だが動く）

（対象の記憶が反映されている為、本人同士しか知らない事を当然知っている）

スタンド紹介（後書き）

以上です

これからも一定間隔で新しいスタンドをこの様に紹介していきたい
と思います

藤方蓐花（スイートハット）？（前書き）

ようやく土曜日まで漕ぎ着けました

藤方蓼花（スウィートハット）？

しんのすけが須藤琢磨と共にまつぎか梅を惑わしていたスタンド使い、柿枝辰男を再起不能にした日の翌日の深夜

ある家の部屋で、男が子機で通話していた。その男が座っている椅子の脚には、『弓と矢』が立て掛けられていた

「承諾金五十万……成功報酬は取り巻き一人につき百万、瀬上除夜は生死問わず再起不能にすれば二千五百万……ここまではいいか？」

『うん、けれどいいの？そんなにお金をくれるなんて……』

「金なら幾らでもある、どれだけの大金でも除夜を仕留めてくれるとしたら安いものだ……」

『分かってるわよ、あんたがあたしを射抜いた「矢」で生み出したスタンド使いを四人倒しているんだよね……最大限注意するわよ……』

「それと、念には念を入れてあんたとは別に『スタンド使い』を『四人』送り込む……あんたも弟を連れてきてくれ」

『成功報酬の割合は？』

「取り巻きは最初にやったもん勝ち、瀬上除夜は六等分だ……」

『オーケー、そいつ等の顔と名前は？仲間である以上顔と名前は知

「つておかないと後でマズいでしょ？」

「明日までに教えるよ、成功を心から祈ってるよ……それと僕もスタンド使い探しを兼ねて見に行くから……」

『そう……それじゃまた』

いきなり電話を切られた

「……こっちが最後まで言っただけで挨拶させてから切れよ……」
『マッドキヤット』
「……」

「えつとさ琢磨……」

「何か？」

「何でこいつ等がここにいるんだ？」

俺の住んでいる院の近くの公園で、俺達が来た時ベンチには琢磨が座っていて、呼んでない筈の優太や宝来、稲庭が公園で適当に遊んでいた

「何故貴様等がここにいる？俺の記憶違いで無ければお前等三人は呼んでなかった筈だが？」

「琢磨さんから聞いたんだよ、今日しんちゃんのお友達の女子大生の通う大学で学園祭があるって」

稲庭が答えになっていない回答をしたが、俺はこれでこいつ等がここにいる理由を察した

「で、委員長からその事を聞いた僕達は」

「稲庭の許しを得てここに集まったと？」

「凄いよ瀬上君！もしかしてエスパー？」

「そこまで聞けば大体想像がつくわ！」

『スタンド』は世間一般でいう『超能力』であるから間違いはないが今日俺と琢磨がこの公園に集まった理由は、おまけ共が言った通りしんのすけの憧れの人の大原ななさんの大学で、学園祭があり、しんのすけに大学まで案内して貰う為だ

琢磨がいるのは、一応何者かに命を狙われている俺の心配をしてである

「本当はロンディネ君とか御厨先輩とか塩屋君とかも誘いたかったんだけどみんな忙しいらしくて丁重に断られた」

「断ってくれて良かったと思ってるよ」

「それより瀬上君、この子誰？」

宝来は俺の横にいる白髪に黒髪が所々混じった短い髪を下ろした中学生の子供を指差した

「ああこいつ？こいつは俺の院の新入りで俺の一つ下、つまり中学一年で来週頭から俺達が通っていた中学校に通う事になっている白^{あひ}帯^{おび}咲良だ」

「何気に説明口調ですね」

「右から、友達の須藤琢磨、クラス委員長の稲庭早良、幼馴染みで親友の沢登優太に、生徒会会計の宝来瑪瑙、因みに琢磨以外は全員俺のクラスメイト」

「白帯咲良です。宜しくお願いします」

「御丁寧な御挨拶有難うございます。こちらこそ宜しくお願いします」

「宜しくね咲良君」

「宜しく」

「「じちら」そ宜しく」

「ところで何で咲良君を連れてきたの？」

「下らない理由だよ」

本当は今日は義母が咲良に春日部を案内する予定だったが、昨夜義母の友人が事故にあったという連絡を受け、見舞いに行く為出掛ける事となった

「その友人の住所は埼玉県外で往復まで当然時間がかかるという事で……」

「それで院で最年長の除夜にそのお鉢が回ってきたと……」

「まあそつだな……俺に拒否権は無かった」

「それはさて置いて……しんのすけ君はまだなのでしょうか？そろそろ待ち合わせ時間ですよ？」

「まあ大丈夫だろ？あいつが俺達の事忘れて学園祭をエンジョイしていない限りは」

一方その頃……

「あれー？何処だろ？」

除夜達と待ち合わせをした公園とは別の公園で、しんのすけは遊具の隅等を確認していた

彼は今、かれこれ一時間近くこうしている

その訳は、除夜達の待っている公園に向かう途中、親から貰ったお小遣いの内の一部を使ってアクション仮面のカードが付録としてついているお菓子を買って、この公園で食べていた

半分程食べ終わった後カードの封を開け、取り出すが途端に強い風が吹いて吹き飛んでしまい、何処にあるか分からなくなってしまった

そしてかれこれ一時間ずっと、カードを探していた

「どうしよう……カード早く見つけないと遅れちゃうし……」

「どないしたんそんな焦って……」

カードを探すしんのすけに、セミロングの長さの髪を正三角形を点で画くように三つの束として縛った、小学校低学年程の少女が話し掛けてきた

「何の用お姉さん？」

「いや、何かお困りのようやからな、ウチで助けられるん？」

「お姉さんこの辺じゃ見ない顔だけど……」

「まあな、四日前に親の仕事の都合で越してきたばっかなんよ、藤^{ふじ}方^{かた}莓^{まい}花^か言うねん。小学一年生。あんたの名前は？」

「野原しんのすけだぞ……」

「よろしゅうなしんのすけ君、ウチの事は気さくに『莓ちゃん』でええで」

「じゃオラの事も気さくにしんちゃんって呼んでよ」

「了解、で、しんちゃんは何探しとったん？」

「カードを探してた……」

「カード？どんな？」

「この中にオマケとして入ってる……」

中身の入った開封したお菓子の袋を見せるしんのすけ。藤方は袋の中に手を伸ばし、堂々とつまみ食いする

「あーん、勝手に食べちゃダメエ！」

「すまんすまん。つい手が動いたんよ。それより、ウチも探すの手伝ったるわ」

「え？でも見ず知らずの人に迷惑をかける訳には……」

「ウチが勝手に探すのを手伝っただけだから気にする事あらへんよ、それに困った時はお互い様やしな」

「莓ちゃんが後十年早く生まれていてオラがななこおねいさんに運命の出会いをしてなかったら惚れてたかも」

「こらこら、人をからかうんやないって……それより早く見付けたいんやろ？ウチ物探しにはかなりいい『手段』持つとるんや、それ使えばすぐ見つかるから安心せいや」

「かなりいい手段？」

「まあ君には分からん思うけどな……ほんなら……始めるで」

藤方の背後から、『蝙蝠』が出現した。体毛の色は茶色でロボットのような翼、蛾のような頭部をした、明らかに普通の蝙蝠とは異なる姿をしている

更に、驚くのは、その『数』だ。明らかに数百、もしかしたら千匹にいくかも知れない数の蝙蝠がホバリングをしていた

『キキツキキツキキキキキツ』

『キキキツキキツキキキツキキツ』

「莓ちゃん、何？その蛾のようなコウモリのようなの……」

「あんだ……見えるんか？ウチの『スウィートハット』が……」

「莓ちゃん……『スタンド使い』なの？」

「『スタンド』？何やそれ？」

藤方はしんのすけの言っている事が分からず、首を傾げた

「まあ話は後や、『スウィートハット』、アクション仮面のカードを探してやれや」

藤方の命令と同時に、蛾のような蝙蝠『スウィートハット』はバラけた

「ちょっと待って、アクション仮面がどういうのか知ってるの？」

「ウチファンやしな」

藤方蓼花（スイートハット）？（後書き）

色々ありましたが、ようやく『マッドキャット』が出せそうです

新スタンド使い、藤方蓼花ですが、彼女は『矢』の所持者が送り込んだスタンド使いではありません。会ったのは偶然であり運命です

スタンド名はボブ・ディランの楽曲から

『ハーヴェスト』みたいですがかちゃんと能力は持っています

藤方蓼花（スウィートハット）？（前書き）

スタンド使い、藤方蓼花は何を考えているのか？

藤方蓐花（スウィートハット）？

蝙蝠のスタンド群『スウィートハット』は、公園とその近辺を飛び回る。その内一匹が、ジャングルジムの下で何かを発見し、大急ぎで本体の元へ飛んできた

『キキツキキキツキキツキキキツ』

「おっもう見付かったみたいやな」

「え？もう？」

『キキツ』

その蝙蝠は付いて来いと言わんばかりに飛んできた方向へと飛ぶ。しんのすけと藤方はそれを追う

ジャングルジムに到着し、蝙蝠が飛び回っている所を見下ろす。そこには、五百円玉が落ちてあつた

「これ……何？」

「コインやな……一枚が五百円分の価値のある……」

「オラが探しているのはカードなんだけど」

「これもカードやで、店で出せばその分の商品と交換してくれる…」

「上手い事言ってるようだけど全然上手くないからね」

『キキツ』

「おつ別の『スウィートハット』が見つけたみたいやな」

そのスウィートハットが見つけた物は、使用済みのテレホンカードだった

その後スウィートハット達は次々に藤方の元へと飛んできたが、見つけた物といえば玩具のお金、レシート、ハンカチ、期限切れのドリンク券等だった

ゴミばかり見つかり、一向に探している物が見付からない

「莓ちゃんのスタンドどうなってんの？」

「うちの『スウィートハット』は細かい動きが少し苦手なんよ……あ」

また新たに発見した事を伝えられ、そこへ出向く

「しんちゃん、もしかしてこれかあ？」

アクション仮面のカードが、藤方の手に握られていた

「おおそれぞれ」

「良かったな見つかって、ほんでウチから質問があるんやけど……
『スタンド』って何や？もしかしてウチと同じ様な能力を持つとる
奴がおるんか？」

「えつとねえ……」

しんのすけは後ろに自分のスタンドを出して藤方にスタンドに関して分かつている事とスタンドを得た経緯を説明した

「何かえらい時期に引越してきたみたいやな……」

「でさ、莓ちゃんは どうしてスタンド使いになつたの？生まれつき
？」

「いや、しんちゃんと同じでな、一昨日の夜に『矢』に刺されてな、
間違い無くお腹を貫いたのに朝目え醒ますと傷が治つとって……
…『スウィートハット』の能力が手に入ったんよ……しんちゃんに
説明されるまで変な夢見たばかり思つたけど、マジやったんやな」

「うん、マジやったの……莓ちゃんは その『能力』を悪い事に使つ
たりとかしてないの？」

「しとらんよ、この『スウィートハット』は普通のコウモリみたいに超音波を出してそれが物に当たって返ってくるのをキャッチして……というシヨボいもんやし、一匹一匹のパワーは弱くて単体やとボールペンを啜えて動かす事も出来へんからな」

「おいしんのすけえ、お前何やってるんだよ、みんな待ちくたびれてるぞ」

「おー除夜のお兄さん、アイムソーリーヒゲソーリーカミソーリーオブチソーリーモリソーリーコイズミソーリー」

「この人がしんちゃんの言ったたスタンド使いのお兄ちゃんか？」

「スタンド使い？大体察しはつくけど直接聞いておきたい……お前何者だ？」

「藤方蓼花、ピチピチの小学生や」

「あー自己紹介ね……俺は瀬上除夜……で、お前は何者だ？」

しんのすけより少しばかり年上の少女、藤方蓼花は意外と素直に自己紹介や自分が『スタンド能力』を得た経緯を話してくれた

「どつやら俺がこの前言った仮説はほぼ確信となったな……でない

と引越してきたばかりの人間をすぐ選ぶ事は出来ないからな」

『「矢」の所有者が春日部に住んでいるというやつか?』

「まあな……藤方、そいつはお前に何と言った? 臆気でいいぞ、話の内容からロクな内容は期待していない」

「んーと……」数日後また来るからそれまで自分の能力を把握しときなさい』と……」

「今回も進展は無いに等しいか……悪いなしんのすけの探し物探すの手伝ってくれてさ」

「いやそんな大層な事やつとらへん、困ってる人がいたら助けようとするんは人として当然の事やからな」

「じゃあお礼として苺ちゃんにはオラのななこを紹介してあげる」

「『オラの』ななこって……お前は彼女の何なんだよ!」

「何や彼女か?」

「将来を約束した仲……としか言えない」

「それだけだと一つの発想にしか行き着かないよ少なくとも俺は!」

「もしそうだったらオラはもう今ここで死んでもいいかもお……」

「今ここで死んだら、その約束遂げられなくなるぞ」

「あんさん中々ええツツ」ミしとるなあ。もしかして芸人志望？」

「ちげーよ。周りのアホ共との日常生活で自然とそうなったんだよ……それよりしんのすけ、早く来い。さっきも言ったがみんな待ちくたびれてるからな……」

「莓ちゃんも連れて行ってあげて。御礼参りがしたいから」

「「参り」は要らんからな。そして駄目だ、彼女にも予定があるだろうが」

それにこれ以上は面倒見切れん

「えー助けて貰ったんだしさあ……」

「相手の都合を無視して自分の意見だけを貫こうとするな！さあ行くぞー！」

「まあ待ってくれへんか二人共」

公園から出ようとした俺達に声をかける藤方。彼女のスタンド『スウィートハット』が俺達の周りを囲い、俺達の周囲約10メートルの空を覆う

「……これは何の真似だ？」

「いや……せつかくやしスタンドと一緒に遊ぼう思ってた……もし礼に思っんなら付き合ってくれへんか？」

俺は『プラネット・ルビー』を、しんのすけは『ハリケーン』を発現させる

「うわっお兄さんの『スタンド』も随分カッコええデザインやなあ」

「一応言っとく。俺達はお前の遊び相手をする為にここに来た訳じゃない。何も言わずスタンドを引っ込めれば何も……」

「せつかくやけど……ウチ、「悪ふざけ」と「遊び」には精を出すで」

退く気なし……か

藤方は指を鳴らす。俺達を囲い込んでいた蝙蝠群が俺達に襲ってきた。俺としんのすけは互いのスタンドで蝙蝠を次々に潰す。三分の一減ると、俺達を囲い込んでいた蝙蝠は本体の元へ戻った

「五十近く潰したが本体に全然ダメージは無えぞ！」

『公園の空を覆う程の数だ、五十匹なんて大した事のない数なんだろ』

「まだ沢山出せるでイノシシさん、こんな風になあ！」

藤方蓐花（スイートハット）？（後書き）

群生型スタンド『スイートハット』の能力はエコーローケーションだけです。群生型スタンドは弱い能力しか持ってなかったり能力と呼べる能力を持ってなかったりするから

藤方蓼花（スイートハット）？（前書き）

『スイートハット』の隠された能力

後半では、除夜の気苦労が増える予感……

藤方蓼花（スウィートハット）？

『キキキツキキツキキツ』

俺達の周りをバサバサと飛び回るスタンド達。そのスタンド達の本
体である少女は、俺達と距離をおいて決して近付こうとしなかった
正しい判断だと思った。群生型は遠くから数で攻められるという利
点はあるも、逆に一体一体の攻撃力はとても低く、殴り合いには向
いていないと琢磨から聞いた

実際、かなりの数を叩き潰しているが、彼女にダメージがあるよう
に思えない。もつと潰せばダメージは出て来るかも知れないが、必
然的にその分時間をかけなければならぬ。すぐに決着を着けるに
は、やはり本体である彼女に接近し、早々にスタンドを解除させた
方が話が早い

そう結論付け、俺は駆け出して藤方に接近する

「おつとお兄さんちよい待ちい」

突然ストップがかけられる。俺はその場で止まる

「？殴られるのが嫌なのか？スタンドを引つ込めて悪用しないと約
束するんなら何もしないよ。俺だって小さい子を殴るとかしたくな

いし」

「違うわ。お兄さん、あんたウチのスタンドの総数何匹と思うん？」
いきなりこんな事を訪ねられた。どれだけ沢山いようと決めて無限ではない。それは言える

さつき公園の上空を覆った所を見ると、三桁の後半かそれ以上と言った所かな。よし、少し多めに答えよう

「八百〇九百匹？」

「ブツブー！」

腕でx印を作る

「大外れやでお兄さん！ウチの『スイートハット』の総数は、『二千匹以上』や！まあそないな数制御しきれんから普段は小出しして動かしとるんやけどな」

二千？全然ピンと来ないが、それだけの数ならあれだけ叩き潰したのに本体の一切のダメージが無いのは納得はいく。潰した数を数えているという訳ではないが、俺としんのすけを合わせても二百もいってないだろう

確かに、そんな数を一度に操れと言った所で出来る訳がない。俺には絶対無理だ

「二千も数えたの？」

「千五百越えた所でギブアップしたわ」

それでも俺からしたら充分凄いぞ

「なあ……」

「？」

「何でウチが大凡とは言え、自分のスタンドの総数を素直に教えただか分かるん？ウチにはあんた等をやっつけられる手段があるからや！そしてそれは既にあんた等に教えとるで……さて何なんやろなあ……」

人を小馬鹿にするような口調で言う。自信満々に言っているのどつうやら嘘ではないようだ。考えてみよう

藤方の言ったのは、『総数約二千』『けれど一度にその数は操作しきれない』『だから普段は小出しして』……普段？

『普段』って事はつまり……

「気付いたみたいやな……せや！あんた等はずい今までウチの能力のほんの一部しか見とらんかったという事や！」

一匹の『スウィートハット』が藤方の前に来て滞空飛行を行う。飛んでいたスタンドや本体から流れ出すように出現するスタンド達は、その一匹へと寄り集まる

本体からスタンドが出現しなくなると、宙に浮かぶ蝙蝠の塊は、蛾の頭部と蝙蝠のを機械化したような羽が背中に生えた、肩幅の広い屈強そうな人型のスタンドに姿を変えた

「どうや！全ての『スウィートハット』のエネルギーを一匹に集結させたこの姿は！こうするとウチから遠くまで行けへんようになるけどその分破壊力やスピードは比較にならへん程上昇するんや！」

まさかこんな事が出来るとは……琢磨から『スタンド』の知識を与えられていて良かったよ

スタンドには『ハリケーン』のように幾つかの形態を使い分ける事の出来るのがあるという。『スウィートハット』もその一体なのだろう

だが怖じ気づくな。今まで『群生型』としてバラしていたのを『近距離パワー型』として一ヶ所に纏めただけだ。つまりぶん殴ればそのダメージがそのままフィードバックするようになったと考えれば
いい

『プラネット・ルビー』は『スウィートハット』に接近し、思いっ切りぶん殴ろうとした

だが、途中で『何か見えない物』に阻まれてしまい、その拳は届かなかった。逆に俺の手に強い痛みが来た

「隙有りやでお兄さん」

その一瞬の隙を突き、『スウィートハット』は俺の『プラネット・ルビー』の胸部を殴りつけた

その拳は、かなり重かった。何発も喰らってしまったら死んでしまおうだろう

「ワイルドボアライダーキック！」

藤方の後方から、『ハリケーン』を身に纏ったしんのすけが必殺技を繰り出した

『スウィートハット』はしんのすけの方向に体を向ける。しんのすけの蹴りは、途中で『何か』に阻まれてしまった

考えなくてはならない。彼女のスタンドの能力は普通の蝙蝠と同じくエコーローケーション……姿形や数が変わったと言っても、能力が完全に変貌するとは考え辛い

それにしんのすけの攻撃を防ぐ為にしんのすけの『正面』に……

「ああそうか……」

意外と呆気なく分かった。それなら俺の『プラネット・ルビー』なら充分倒す事が出来る

「なあ藤方、言っておくが……痛い目に遭いたくなかったら今すぐ投降しろ、俺はお前に勝てる策を今思い付いた」

「そんなハツタリ今頃流行らへんよ」

「ハツタリかどうかは試しに俺を一発殴りかかってみたら分かる、俺はこの場から『一歩たりとも動かないであげる』からさ……」

「……死んだとしても恨まんといてな。『スタンド能力』得たばかりもあつて加減よう掴めんから」

「やってみるよ」

「やってやるわ、行け『スウィートハット』！このお兄さんの顔面に思いつ切りキツイの食らわせるんや！」

『スウィートハット』は俺に殴りかかる。強く握られた拳が迫り、俺の顔を捉え――

「はい？」

る事なく、拳は空を切った

俺の能力を用いて、俺を『軸』として藤方を瞬間移動させた

俺は藤方の後ろに『プラネット・ルビー』を出現させ、藤方をぶん殴った。手加減はしておいたので死んではないが、スタンドは消滅した

「『スウィートハット』の防壁の能力は群生型の時の約二千匹分の超音波による防壁だろ、基本的に群生型と同じ能力だから防壁は正面にしか展開できず、当然攻撃される方向へスタンドを向ける必要があつた……」

「莓ちゃん大丈夫なの？」

「気を失わせたただけだ、すぐに息を吹き返すよ。ベンチ辺りに寝かしておくか……野ざらしも可哀想だし……」

「意外と紳士やなお兄さん」

抱きかかえた途端、彼女は目を開いて声を掛けてきた

「安心してええよ、ウチはもうあんた等に危害を加えよう思とらんから。というか最初からそんな事思つとらんし」

「あつそ、無事なら下ろすぞ、それで帰れ、俺達は人を待たせてるんでな」

「ウチも連れてって、今日何もする事無くて暇なんや」

「友達と遊べばいいだろ！」

「引つ越してきたばかりの右も左も分からん土地に友達がおる思つとんのか？」

「そうだな、正論だ」

「まあいいんじゃない？一人や二人や百人や千人増えてもさ」

「百人や千人は大きく違うからね」

結局口論してもただ無駄に時間が過ぎていくだけと思つた俺は、しんのすけと更に一人増えたおまけと共に待ち合わせ場所へ向かった

宝来と稲庭は俺達に文句を言ってきたが、その文句は無視した

という訳でいきなり色々あったが、俺達はななこさんの大学へと向かった

藤方蓼花（スイートハット）？（後書き）

更に増えた一行

次回から学園祭が始まります

そこで待ち構えている『スタンド使い』とのバトルに幕が開けます

学園祭サバイバル？（前書き）

今日誕生日を迎えました

今日から二十歳です（何と）

学園祭サバイバル？

「ここが大学か……私達と通う学校とは何かが違うね？」

「そりゃそうだろ。俺達の在籍しているのは『高校』だからな」

「ねえ瀬上君、あっちで餡蜜売ってたから買ってきていい？」

「買ったきゃ買えよ。但しあんまし買うなよ」

「はいはい」

軽快な返事をした後、稲庭は立ち上がって餡蜜を買いに行った

俺達八人（稲庭が餡蜜を買いに行ったから今は七人）は、ななこさんの通う大学の入口から入ってすぐのベンチに座り込み、適当に飲み食いしていた

理由は、ななこさんがこの学園祭のメインイベントである女子プロレス部の交流試合へ案内してくれる事になっていたからだ。席は取ってあげると言ってくれていたが、事前に報せていた人数は三人。ここにはそれに+五人もいる。全員が座るのは無理そうだし、オーバーしたら何人が自由行動をして貰おう

そう考えている内に、買い物を終えた稲庭が戻ってきた。……案の定、かなりの量の詰まった袋を両手に引っ提げて

俺はその袋に指を差して、それを持つ我がクラスの委員長さんに質

問をした

「稲庭さん。その袋に詰まっている物は何ですか？」

「餡蜜だけど」

「全部？」

「全部」

「何人前？」

「加減して30人前」

「もう突っ込まん」

深々と嘆息をつく俺を後目に、稲庭は買い込んだ大量の餡蜜を美味しくそくに食べ始めた

「お待たせ、しんのすけに除夜君」

「お待たせしんちゃん、あたしの勇姿を見に来てくれてありがとう、期待に添える活躍をしてあげるから応援宜しくね」

ななこさんと、女性にしてはかなりマッチョな体つきをした人が来た。しんのすけに聞いたのだが、この人は神田鳥忍かんだとりしのぶさんと言って、

ななこさんの親友らしい。女子プロレスラーになるという夢を持ち、その夢をとても大切にしているという（因みにしんのすけのフアー・ストキスを奪ったのは彼女らしい。どんな経緯なのかは、しんのすけの様子から聞かない事にした）

その忍さんを見て、琢磨とおまけ共は物陰に隠れてひそひそと小声で話していた

「ねえ……あの人、本当に人間？ゴリラと人間のハーフなんじゃ……」

稲庭、それは失礼過ぎるだろ

「見掛けでそんな事言っちゃ駄目だよ、もしかしたらこの大学、学校というのは表向きで人間兵器の開発、実験施設できつと本人の了承を得ずにヒトゲノムに異常を来す薬品を投与され……」

優太、お前はSF映画の見過ぎだ

「うんうん」

咲良、納得したように相槌を打つんじゃない

「二人共違うに決まってるでしょ。彼女は不治の病に冒されて脳をゴリラに移植されたのよ」

「いや、それはないでしょ？それこそSFの極みですよ」

「そんな事本気で思っではいません。ちょっとノツただけ」

「いや、ちゃうねん。あの人は……ええネタ浮かばへんのやけど……何かええのあるか？」

ねえのかよ……

とまあこの様にほぼ全員が好き勝手話していた所、忍さんがこいつ等の顔を覗き込んだ

「どんなお話しているの？良かったら教えてくれない？」

一分後

「腕硬いなあさん」

「日々鍛えているからね」

「重くないんですか？」

「大丈夫大丈夫」

「次あたしね」

話を聞かれていますいて変な雰囲気になっていたのも嘘のように、仲良くなっていた

現在咲良と稲庭が忍さんの肩に乗ってそこから望む景色を楽しんでいる

「こいつ等って順応早いですね……忍さんも凄いな。十代半ばの二人を肩に乗せて……」

「忍は毎日頑張っているからね……みんな、そろそろ時間だから……」

「みんなずるーい、オラも乗りたいオラも乗りたい」

「また今度ね」

「そんじゃ行くぞ……あれ？」

俺は、正面に見えるクレープ屋の人だかりの中で、確かにそれを見た伸ばした前髪を立てた茶髪をして、棚引く程の長さの白いリボンを開節部に一本ずつ縫い付けた紫色の長袖を着た男が、客の財布をス

ツているのを

スリや痴漢は現行犯でないと捕まえる事は出来ないと聞いてる。目撃したのは俺だけみたいだし、こういったのは時間が経てばそれだけ立証が難しくなる

(目撃しておいて知らぬ顔をするのも何だし、捕まえとくか……)

「どうしたの?」

「あ……いや、すみません、俺ちょっとトイレ行ってきて宜しいでしょうか?」

「え?我慢しなよ。会場着いてから行けばいいじゃん」

「構わないわよ、自然現象なら仕方無いわよね。でも……」

「案内はある筈だし、それで分からなくとも最悪人に聞けばいいし……急いでいるんでそれじゃ!」

そう言っつて俺はみんなと別れてスリを追った

「トイレにしては何か真に迫ってましたね」

「きつと我慢の限界だったんですよ」

「でもさ、除夜兄さんはこの学校のトイレが何処にあるのかとか分

かってるの？」

「まあ大丈夫じゃない？トイレって色んな所に設置されてある物なんだし……」

「そうよそんな心配する事でもないわよ。早く行くわよ」

「ほっほーい」

会場の最前列から二番目の席に、ななこさんと僕達七人は座りました

「結構熱気あるね」

「そろそろ始まるで、それにしても生のプロレスなんて初めて見るわ」

「僕ですよ、プロレスなんて幼少期親父と一緒にテレビで見て以来ですよ」

「父ちゃんと母ちゃんは時折夜にプロレスごっこをやってるぞ」

しんのすけ君、どんな意味で言ったのかは分かりませんが人前でそれを言っちゃいけませんよ

時間になると『ビー』と音がして、マントに身をくるんだ忍さんと、

フード付きマントで全身を隠した人が出て来ました

『さあさあ始まりました！』

実況のテンションの高い声が広い会場に響きます。てかこの人の声
凄いですね、拡声器を使っている事を抜いても観客の歓声を見事に
打ち消しましたよ

『それでは選手の紹介をします！赤コーナー、神田鳥忍！青コーナ
ー、『ブラックタイガー丹マシヒ！』

紹介され、両者はマントを取りました。同時に稲庭さんと莓花ちゃ
んが吹き出しました

相手側は、覆面をつけていました。別にそれは不自然ではありません
問題は『覆面自体』でした。何故なら彼女の覆面は、エビのブラッ
クタイガーを象った覆面だったからです。何処で売ってあるのだし
ょうか

『尚、実況はこの私、自称リポーターチャンピオンこと、高橋一葉たかはしいちよう
がお送りします！』

実況って、テンションが高ければ高い程良いのでしょうか？

ニユースのリポーターはあんましテンション高くないけど……あれ？
演出なのか、床の方に白い煙のような物が溜まってきた。しかし、
この煙らしき物は何処かおかしい。足をバタバタ動かしても、拡散
する様子が無い

「相当比重が重い煙なのでしょう……」

実況席

そこには、マイクを握っている金髪の露出の多い服を着た女性、高
橋一葉と、同じく金髪の黒の布地に正面は虎、背には竜が刺繍され
てあるTシャツを来て、蜥蜴皮の模様のネクタイをした高橋より何
歳か年下の少年がいた

少年の足下には、茶色いゾウガメ程の大きさの『亀』がいる。その
亀は、甲羅の頂に穴が開いており、その周りを囲むようにスイッチ
が付いている

その穴からは、『煙』みたいな物が排出されていた

「まあ一番の大台はいないみたいだけど……私達だけで三百万を独
占出来るというのは確かだね……」

会話を拾われないよう、小声で男に耳打ちする

『亀』の穴から出る煙が薄くなる。少年はペットボトルに詰められた茶色い液体を亀に飲ませた。亀から出る煙は先程と同じ様に出て来る

「夏帆^{なつほ}、あなたは『トータス』の煙を絶えず見ていなさい……」

右手から、ネックの部分が動物の背骨で、緑色のボディをした全長約70センチ程の『ギター』が飛び出してきた

「さて……始めますか……私のスタンド『マッドキャット』と夏帆の『トータス』の二重奏をね！」

スピーカーのスイッチを再度入れ、弾き始めた

高橋一葉「スタンド名『マッドキャット』」

高橋夏帆「スタンド名『トータス』」

大学の隅。人影は無く、当然店はない

そんな場所に、俺はスリを追い詰めた

「さて……スツた物を返しなよ」

「何の事だ？」

「とぼけんな、あんた、財布スツただろ？俺はちゃんと見ていたんだからな」

「その財布って……これの事？」

ポケットから財布を取り出した

あれ？渋るのかと思えば意外に聞き分けがいいな……

「それでどうする？俺を通報するかい？」

「俺は警察じゃないからな。落とし物という題目で届ける所に届ければ何も言わない。但し謝礼の請求はするな」

「分かったよ。但しそれは……『ある用』が済んだ後で構わないかい？なあ瀬上除夜」

何で俺の名前を知って……まさかこいつ！

この男はどこかから『自動小銃』なんていう町中で持ち歩いていた

ら確実に銃刀法違反で逮捕される代物を出現させた。モデルガンとかではない。明らかに本物のそれだ

男は出現させたマシンガンを、腕だけ出した『スタンド』に持たせ、俺へと発砲した

学園祭サバイバル？（後書き）

『マッドキャット』ようやく出せました

スタンド名は姉の方はプリンスの使用ギターの一つから、弟の方はアメリカのポスト・ロックバンドから

学園祭サバイバル？（前書き）

安息は許してくれない

学園祭サバイバル？

忍さんの試合が盛り上がってきた時、咲良君がお腹を手で押さえ、俯きました

「うっ……」

「どうしました咲良君？お腹が痛いんですか？」

「ちょっと便意が……」

「トイレに行きたいの？」

「まあ……」

「じゃあ僕と一緒に行くよ」

沢登君が立ち上がり、咲良君の手を取りました

「いえ、いいですよ、プロレス観戦を楽しんでいるのに……自分で行きますよ……」

「心配しないで、僕もトイレに行きたかったから。けど白熱した試合なもんでタイミングが掴めなくて」

「笑いも込み上げてきますね……」

僕はリングで戦っている二人を見ました。先鋒は忍さんの勝利で、対戦相手のブラックタイガー丹さんはルールに従い覆面を脱ぎました。彼女の素顔はかなり美人で、しんのすけ君はななこさんが傍にいるからか表立って騒ぎはしなかったけど興奮はしていました。

次鋒の相手は『ミートボール秋野』という相手で、彼女も覆面を被っており、それは何故かユニコーンを象った覆面でした。ちゃんと角も生えています。

試合が始まると同時、ギターの音が聞こえ始めました。実況がBG Mとして流しているのでしょうか。

「ねえ、このバター上手いね」

「ギターです。バターは乳製品ですよ。確かに上手ですね」

「せやな、プロ級や」

「ななこおねいさんもそう思うでしょ?」

「ギター? そんな音が何処から流れているの?」

僕達五人は、ななこさんの発言に目を丸くしました。

「これってもしかして……」

「その『もしかして』である可能性が高いでしょうね……見て下さい」

他の観客達は、殆どが気を抜かれたかのようにうなだれていました。ほんの数人が隣にいる人を揺さぶっていました。が反応はなく、その人達も次第に同じ様に力無く倒れました。観客だけでなく、リングに立っている選手もぐったりと倒れており、全く無事なのは僕達だけでした

「しんちゃん、須藤さん、これって……」

「ええ、『スタンド使い』の仕業と見ていいでしょうね。スタンド使いになりたての人間が自分の得た能力を使って楽しんで……という訳では無さそうですね」

「どうしてそう言えるの？」

「多分ギターの音は人の意識を奪う力があるんですよ、この型のスタンドは無差別攻撃が可能な筈です。だから悪意無く面白半分に使っているとしたら、僕達も同じ様になっていないとおかしいんです」

「つまり、敵はあたし達を意図的に避けさせているの？」

「『スタンド使いとそうでない人物を分けて攻撃している』なら、僕達にだけ影響が無いのは納得出来ませんがスタンド使いでない筈の

宝来さんやななこさんが正気を保っているあたりそう考えるのが自然でしょうね……」

「どうする？」

「この敵の狙いが僕達なら、これ以上ここにいるのは危険だ。外に出ましょう」

僕達四人は座っている席から立ち上がりました

「どうしたのみんな？」

「ここから出て救急車を呼びましょう。このままじゃ僕達も同じ様になるかも知れない」

「え？」

「早く！時間がない！除夜君や沢登君達には後からちゃんと伝えればいい！さあ、早く！」

歩こうと足を上げたのですが、妙な感触がしました

それは、中学生の頃田植えの為水の張った田んぼに入れた足を、動かした時のような感触です。原因はどうかやら、床を覆う『妙に比重の重い煙らしき物』にあるようです

(ギターの音と重い煙……つまり、『今ここにいる敵スタンド使用は二人以上』……)

すぐさま除夜君に知らせようと携帯で除夜君の番号にプッシュをする途中、横から手が伸びて僕の携帯を握り潰しました

周りを見ると、ついさっきまで生気を無くしてうなだれていた方々が、僕達に虚ろな目を向けていました

「……やはりこの程度では死なんか……」

男はマシンガンを何処かに『消した』

俺は今どうなっているのかというと、放たれた弾丸の内の大部分は『プラネット・ルビー』で弾く事は出来たものの、右足と脇腹に一発ずつ被弾してしまった

右足は筋肉を軽く抉った程度で、脇腹の方も、弾丸が貫通していたのがせめてもの幸いという所か、まだ体を動かせる事は出来る

「流石倒せば二千五百万貰えるだけはある、一筋縄にはいかないという事か」

『前は二千万じゃなかったっけ?』と、今はどうだっかっていい事を考えてしまった

取り敢えず俺は先程弾いた弾丸を何発か持って、男に向けて指で弾き飛ばす

男はスタンドを出してその全てを弾いた。男のスタンドの全体像は銀色の肌に黒い縞模様の入っていて、肩と胸を鎧の覆った、馬のような顔に頭頂部に捻れた角が一本生えている。そんな姿だった

「弾丸で逆に攻撃するとはな、だがこの白倉昌博しろくらまさひろのスタンド『ゼブラヘッド』はこの程度の攻撃弾くのはわけない」

『ゼブラヘッド』は白倉の両肩を掴んだ

『ゼブラヘッド』の指の先端に位置する所に『取っ手』のような物が出現し、指はそこに掛けられた

それが引つ張られると、引き出しが出現した。その中に入れてある『大口径の拳銃』……昔義母と一緒に見た事のあるアクションB級映画で見た事のある、そしてそれ以外では見た事のない物が取り出された

『ゼブラヘッド』はそれを俺に向け、発砲

直前に、俺はスタンドに体を抱えさせ、射程距離内にある木を『軸』として自らを瞬間移動させて避けた

「話には聞いていたが……随分と面白い能力だな……」

「あんたのスタンドにや負けると自負はある」

『ゼブラヘッド』は白倉の背中から幾つもの引き出しを開き、そこからダイナマイト十数個とライターを取り出す。何処から入手したんだこんな火器の数々

『ゼブラヘッド』はライターを点火し、ダイナマイトの導火線に次々に火を付け、辺りにバラまいた

「お前の瞬間移動はかなり限定されている……こうすれば爆発その物に巻き込まれるのは逃れても、爆風はモロに喰らうだろ？」

『そんな事したらお前も巻き添えだぞ』と口にしたくなつたが、それは無用だったようだ

奴のスタンドは地面から人間一人入れる程の引き出しを作り、奴が入ると引き出しを閉めた。『地下シエルター』

俺は周りを見回すが、俺の周り、『プラネット・ルビー』の射程内には導火線に火の着いたダイナマイトが所狭しと散らばっている

「仕方無い！このままじゃ死ぬだけだ！」

俺は『スタンド』でダイナマイトを拾う

導火線に着けられた火は本体に到達し、爆発した

学園祭サバイバル？（後書き）

引き出しを開けるスタンド、ゼブラヘッド

スタンド名はアメリカのミクスチャー・ロックバンドから

しんのすけ達はどう切り抜けられるのか？

学園祭サバイバル？（前書き）

果たして除夜の安否は？

学園祭サバイバル？

大学の校舎内のトイレ

「すっきりした……」

個室から出て来た咲良は、手を洗ってハンカチで拭く。隣の個室の鍵が下りているのを、つまりそこに入った同伴者がまだ出ていない事を確認する

「優太さん、後どれくらい掛かります？」

『んー？もう少し掛かりそうかな？待ってる必要なんか無いから先に戻っててよ』

「はい」

優太にそう言われ、咲良は校舎に入る際に靴を脱いだ来客用の玄関へ向かう

自分の靴を履いて立ち上がり、玄関を出ようとする。すると……

「え……？」

咲良の首に、古めかしい『矢』が貫いた

白倉がバラまいたダイナマイトが爆発した後、俺の体は地面に叩き付けられた

ダイナマイトが爆発する直前、俺は『スタンド』で手近にあったダイナマイト一本を上空に投げ、それを『軸』として自身を上へと瞬間移動させ、爆発に巻き込まれるのは防いだ。そして自分を『軸』としてダイナマイトを上に移動させた

「痛え……流石に無茶もいい所だったな……」

体の前半分から伝わってくる激痛と、背中に負った爆風の余波によるダメージを感じ、立ち上がりながら、そうばやいた

十メートルを越える高さからの落下、更に背後からの爆風のオマケ付き。幾ら俺の体が丈夫で回復が早いと言っても、結構キツイ。こんな事態でなければ一生出来ない体験だろう

そついう意味では貴重な体験をさせて貰ったが、出来ればこれっきりにしてほしい体験だ

閑話休題

巨大引き出しが開き、それに隠れていた白倉が出て来た

俺が無事な事に少し驚いてはいたが、周りを見回して察したらしく、感心の声を上げ、拍手をした

「随分と無茶をするねお前……若者の特権かな？後先を考えないつて」

「そんな年変わらないと思うんだけど……」

「俺お前より三つ程年上なんだけど……」

「それよりいいのかそんな悠長にしてて。こんな事をしでかしたんだ、すぐに人が集まってくる」

ここは学校で今学園祭が開催されている。そこで爆発物を爆発させたのだ。すぐにも野次馬が押し寄せてくるだろうし、警察だつて通報を受けて来る

警察だつてバカじゃない。どうやって持ち込めたのかとかは『スタンド使い』にしか分からないとはいえ、爆発物が何なのかとか、それを爆発させたのは誰か位は簡単に分かるぞ

それなのに、何でこいつは笑みを浮かべながら二の腕から引き出しを開けてそこからサイバルナイフを出してるんだ？捕まるのを恐れていないのか？

「お前……今の俺の様子を見て何か思ったか？『何でそんな余裕なんだ』とか……」

その辺は看破されてるか……

「その理由は、早急にお前を倒せば俺はやり過ぎす事が出来るからだよ……」

「俺を倒するのが前提なのはひとまずおいておこう。『やり過ぎす』事の出来る自信とかがあるからそう発言しているのか？」

「『仲間』がどうにかしてくれるさ」

何人かここに送り込まれているのか……面倒なこつた

まあこんな人が沢山集まる場所で更に沢山集まる祭りで送り込まれたのがこいつ一人だけとは思ってはいなかったが、悪い予想するのは大抵当たるか斜め上の方向で裏切ってくれるもんだよな

どちらにせよ奴を早く倒さねばならない状況というのは変わりはない。人が集まったら戦い辛い

白倉は接近し、『ゼブラヘッド』はナイフを振るう。俺は『プラネット・ルビー』で受け流すも、刃先が僅かに袖を掠ってしまった。掠った部分とその周りが、黒く変色してボロボロに崩れ落ちる

「毒が塗ってあるのか……」

「卑怯とは言わせないよ」

元より言うつもりは無い。昔戦争映画を義母と共に観た帰りに義母に教えて貰った事だが、ベトナム戦争ではゲリラは罠に糞尿を塗り付けて膿むようにしていたというからな。それに比べたら手に持ったナイフ位は生温いもんだろう

何せ

「スタンドでナイフの側面を叩いて……」

「ナイフも塗り付けた毒も普通の物でしょ？じゃあスタンドで充分対処は出来るな」

「面白い……だが、『ゼブラヘッド』が引き出しに物を入れるだけの能力と思ったら大間違いだ……射程距離に充分入っているんだから教えてやるよ！」

『ゼブラヘッド』は俺の右足の膝から足首の所までの深さの引き出しを作り、引き抜いた

引き出しとして抜かれた膝から足首までは、力が込められなくなり、ぐにやりと曲がる。というより、体重を支える事が出来ず、潰れたという感じだ。当然俺の体はバランスを崩し、倒れる。白倉は俺の頭を踏みつけた

「『ゼブラヘッド』で引き出しとして引き抜かれた部分は強度を失いゼリーのようになってしまう!」

説明している間も『ゼブラヘッド』は左足の同じ箇所を引き出しにして引っこ抜く

そして、本体の喉元から腹部にかけての引き出しを開き、そこからハンマーを取り出した。白倉は俺の頭の上に乗せた足をどかし、代わりに『ゼブラヘッド』の右足が俺の胴体へ食い込んだ

『ゼブラヘッド』はそのまま俺の頭を狙ってハンマーを振りかざす。冗談じゃない。そんなもんぶち当たったら、俺の頭部は粉々になって内容物を辺りに散りばめるはめになる

「どうした？動いてみるよ？あ、無理かごめんね、歩けなくしたばっかだっけ？」

これじゃスタンド出してもロクに動かす事が出来ないなあ

白倉は勝利を確信した表情で、勝利宣言とも取れる嫌みを口にする
正直ピンチだ。足は動かないし、踏みつけられてるお陰で体は起かせない。唯一使える腕も、ハンマーにもそれを握る手にも……

そうだった……まだ『腕は動くんだっただ……

「やれ『ゼブラヘッド』！除夜の頭を叩き潰せ！」

『ゼブラヘッド』はハンマーを振り下ろした。俺はロクに動く事が出来ない。これで決まったと奴は思っただろう

同時、俺はスタンドで奴のスタンドの、『俺を踏んづけている右足の臍』を叩く。この時、ハンマーは俺の目と鼻の先まで接近していた

『ゼブラヘッド』がハンマーを振るいきった時、奴は目を見開いた。当然かも知れない。『俺がつい今までの地点に俺がおらず、何時の間にかほんの少し移動していたのだから』

俺の能力である『瞬間移動』のその定義は、『一瞬で物を別の位置まで何も使わずに移す』事である。重要なのは、これの何処にも『どれだけの距離を移動出来たら』とかは書かれていない。つまり、極端な話動かせるのが一ミリ以下でも条件が揃えば充分『瞬間移動』という事になる

つまり俺は、臍を叩いて怯んだ瞬間、ほんの僅かだけ瞬間移動を行ったのだ

「貴様……悪あがきばかりしやがって……大人しくミンチになれやあああ！」

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
...

学園祭サバイバル？（後書き）

瞬間移動の定義には覚えている限りどの作品にも『何処まで移動させれば瞬間移動となる』という事は記載されてなかったので書いてみました

紛れ込んだスタンド使いは後五人、しんのすけ達は残りを撃破出来るのか？

次回もスタンド使いとの激闘は続きます。お楽しみに！

学園祭サバイバル？（前書き）

除夜君が『ゼブラヘッド』の白倉と対戦を始めたのと同時刻、しんのすけ達も……

学園祭サバイバル？

僕（須藤琢磨）は現在、共に来た人達と共に、ここにいた人達に囲まれていきます

先程まで生気なくうなだれていた人達が、とても友好的な物とは思えない目つきで僕達を睨み、囲んでいるのです。どう考えてもこの人達は正気を失っているようで、立ち振る舞いには知性も理性も感じ取る事が出来ません。もしサファリパークで外に出て、肉食獣に囲まれたとしたらこんな感じなのでしょう。と思うのが、僕達の現状です

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア……」

突然、一人の男が雄叫びを上げました。宝来さんは肩を上げ、震え出しました

その男は僕達のもとへ走って向かってきます。彼等の足元にも『泥のような煙』が広がっているにも関わらずです

その男は僕の目前に立つと、手刀を振り下ろしました

『危ない！』

『ハリケーン』は僕を引っ張ってくれました。手刀は僕が先程まで

いた場所の足元に命中し、そこには亀裂が入りました

「こんなの直撃したら頭にたんこぶが出来るくらいじゃ済まないね
……多分」

多分ではなく絶対に済みませんよ、常人なら即死してもちっともおかしくないですよ

「でも何でいきなりこんななつたんや？」

「僕も話に聞いた限りの事で詳しくは知らないんですが、人間は本来普段出しているパワーとは比較にならない程のパワーを発揮出来るんだそうです。けれどその剩りにも強過ぎるそのパワーに体がついて行く事が出来ない為、本能的に抑えていると……」

「よう分からんけど……つまり何や？このギターの音は人間の正気を奪って操るだけと違う言う事か？」

「そうです。しんのすけ君、稲庭さん、莓花ちゃん、スタンドを出して進みましょう、本当はしたくありませんが仕方ありません」

「せやな」

「おお！」

「今は全員が無事に脱出するのが先だもんね」

僕達はスタンドを出して、襲ってくる人達を気絶させながら『煙』をゆっくりとかき分け、勝手口へと進みました

「このままじゃ逃げられちゃうわね……」

ガラス越しにここから出ようと勝手口へと進んでいくしんのすけ達を見て、高橋はこう呟いた

「外に

「『マッドキャット』はスピーカーがあれば外でも使う事は出来るけど室内よりかは効果薄いもんね……」

「あんたの『トータス』もでしょ？ 幾ら空気より比重が重いと言っても強風で簡単に拡散されるじゃない……仕方無い！ 夏帆、あんたはここで待機していなさい！ あたしの『マッドキャット』の真骨頂で……」

実況室から出ようとした姉の肩を、夏帆は無言で掴んだ

「何すんの！」

「落ち着いて姉さん。単体で向かった所で姉さんの能力じゃやられ

るだけだ。彼等は泳がせておこう」

「は？」

「姉さん、この学校には現在僕達を含めた六人の『スタンド使い』がいる。僕達以外は外だ。彼等に任せよう。念の為事前に連絡はしておいた」

「言ってる事は分かるけどそれじゃお金……」

「気持ちは分かるけど『急ぐ』のと『焦る』のは別の事だよ、よく考えるんだ。彼等は外に出たとしてもそれで安全という訳じゃない。四人のスタンド使いと戦う事になる。どちらに転んだとしてもその分の時間は稼ぐ事が、つまり少しでも僕達に有利に進められるよう準備が出来るし彼等は戦う事で体力が消費し、ダメージは負うだろう」

「あたし達が勝てる可能性が、外で戦えば戦う程高くなるって事ね……でも四人に全員倒された場合は？」

「その場合は仕方無いと思って諦めよう。あくまで僕は彼等がここへ戻ってきた場合を想定しているだけに過ぎないんだからさ」

「つまり戻るか戻らないかは『賭け』ね……」

「そうだね」

「仕方無い……あんたの言う通り、考えもなく突っ込んでもただ失敗するだけだしね、少し我慢するわ」

「どつやら全員無事に脱出出来たようだね」

「うん」

勝手口から脱出が成功した僕達は、取り敢えず誰も出入りが出来ないよう出入口全てを封鎖しました

「これからどうしようか？」

「取り敢えず除夜君に中の現状を教えましょう。この中にいる敵はこれで外に出る事は出来なくなりました。ななさんと宝来さんは今は何処か離れた所へ……」

「須藤さん、どうしても聞きたい事があるんだけど……」

そう言つて宝来さんは、一時の方向へ指を差しました

「おーいるいる、雁首揃えて外にいるな……こいつ等が外にいるという事は……高橋姉弟は……やられたのか？」

「そんな事は無いと思いますよ宮嶋さん……あの二人をこいつた空間で相手をするとなるとどんなスタンド使いでも無傷じゃ済まないと思いますから……出入口を封鎖している様子から見てどうにか出れてこれたつて所ですかね」

「お前はどっと思っ？」

「ニヤー」

宮嶋と呼ばれた迷彩柄の長袖を着てサングラスを掛けた強面で短い黒髪に背の高い壮年の男と、除夜君達と同世代か少し年上程の栗色の髪を両サイドにシニヨンにしてその上に包帯のような布を巻いた少女、そして男の肩に乗っている豹のような模様の猫が、指の先にいました

「どうします？瀬上除夜はいないみたいだけどそれでも三人を相手にするのはキツイですよ？」

「いや、あのガキはスタンド使いと見ていいな……」

『スタンド使い』……この単語が出て来たという事は、先程のやり取りから察してこの人達はスタンド使い、しかもスタジアムの中でギターを弾いていた奴とは仲間という事になりますね

「でもどうします？私達のスタンドはみんな共闘しようとしたらお互いの足を引っ張った挙げ句無駄に場を引っ掻き回すだけですからね」

「だったらバラけさせるまでだ……オイ」

「ニャ？」

「お前の『能力』であいつ等を分散させる」

「ニャー」

子猫は宮嶋の肩から降り、スタンドを発現させました

「猫が……スタンドを？」

「スタンド能力は人間だけが持つものとは限りません。『矢』に射抜かれた者でスタンド使いとしての素質のある者はスタンド能力に目覚めます。それは動物もなんです」

猫の全身にスタンドが纏うように発現。スタンドはコックピットが強化ガラスで覆われたような一昔前のロケットを彷彿とさせるデザインで、鳥の翼を機械化させたような羽が着いていて、その下にもジェット機の噴射口のような穴が幾つもついています

「身に纏うタイプのスタンドですか……」

「ニャーオ」

翼の下の噴射口から空気が噴射し、ロケットは垂直に上昇しました

一定の高さまで上昇すると、後ろの噴射口から空気が噴射して僕達に向かつてきました

それだけではなく、下のが開き、そこからライフルのような銃が姿を見せ、その銃口からエネルギー弾を発射したのです

発射されたエネルギー弾は僕達の足元に着弾し、爆発しました

「一ヶ所じゃヤバい！みんな、バラバラになるんだ！」

僕はみんなに指示を出しました。宝来さん達は何が起きてるのかも分かっていないようでしたが、僕の指示に従い、宝来さんは僕の方に、ななこさんはしんのすけ君と母花ちゃんの元へと駆け出しました

413

「逃げますよ宝来さん！」

「さっきから何が起きてるの？ねえ？」

「申し訳ありませんが今は答えられる場合じゃないので黙って従って！」

「やっぱりバラけましたね……」

「計画通りじゃねえか……しかもご丁寧に三つに分かれてよ……ど

いつをやる？」

「そうですねえ……………」

それじゃ、と言ってしんのすけ達の逃げた方向へと指を差した

「そうか…………じゃあ成功を祈るぜ……………」

「そちらこそ」

「ニヤー」

二人と一匹は、三つのグループに分かれて逃げたしんのすけ達を、それぞれ追った

学園祭サバイバル？（後書き）

高橋姉弟は今の所動きません。（てか動けません）二人の能力は説明した通り屋外で使うには向いてないので

残り三人は一気に出しました。猫も刺客の一人？です。吉良のおやじは猫草も数に含んでいたようなので。因みに初期案はライオンでしたが止めました。危ないもん

二人の能力も結構強いのを考えてます

それでは、次回も宜しく願います

学園祭サバイバル？（前書き）

サバイバル本格化

果たして、生き残る事の出来るのは誰か？

学園祭サバイバル？

「何やねん次から次へと！あいつ等も会場にいた連中の仲間なんか？」

「うん、多分……取り敢えず、ななこおねいさんをどっかに避難させて……」

「『避難させて』……の続きは？お姉さん実に興味あるなあ……」

先回りをしていたのか、建物の陰から壮年の男と猫と一緒にいた女性が姿を現した

「なあに？教えてよ。教えてくれたって減るもんじゃないでしょ？」

「教えてくれたら逃がしてくれるの？」

「それは出来ないかな？君を倒すのが私に与えられた役割なんだから……」

そう言つて女は己の『スタンド』を発現させる。土色の、女性的な姿形をした耳が無く、代わりにそこから伸びた二センチ程の角が真っ直ぐに生えていて、胴体に二つ宙に浮いた輪を嵌めたスタンドだった

「君をズタボロにした後で聞き出す事にするね」

「『ハリケーン』!」

発現された『ハリケーン』は、即座に女のスタンドの顔面目掛けてパンチを放つ。しかし、ヒットする直前、『ハリケーン』は自分の判断でパンチを止めた

「どうしたの『ハリケーン』」

『悪い、こいつを殴るのは「ヤバい」と私の第六感が訴えた』

「……スタンドのお前に第六感なんて大層なもんがあるの?」

『まずいのは確かなんだ!おいお前!』

『ハリケーン』は声を荒立てながら藤方へと指さす

「ウチ?」

『お前の『スウィートハット』……だったか?それで奴を攻撃してみろ!言っている事が分かるだろうっからな!』

「何でウチが……」

『このバカに私の言ってる意味を分からせる為だよ!どうせ一匹や

「二匹潰されてもダメージにならないんだからさっさとやれ！」

「分かったわ……」

スタンドに上から命令されているのは気に食わなかったが、恐怖の感じ取り方が尋常で無かった為言う通りに『スウィートハット』を一匹発現させ、『敵スタンド』に突っ込ませた

スタンドに当たった『スウィートハット』は、接触部位からスタンドに『沈んでいった』

「『群生型』か……でもどんな武器だろうがスタンドだろうが私の『ルージング・エンド』にかかれば無力で非力となる……」

「あなたの第六感……どうやら正常みたいやな……あのスタンド……触れたらやばいで」

「うん、ごめん。お前は正しかった」

『分かればいいのだ』

「うーん……中々厄介なスタンドみたいだけど……遠くにはいけないっばいから距離を取って戦えば……」

「分かってないなあ……」

彼女は数歩進んで自分のスタンド『ルージング・エンド』を『ハリ

ケーン』へ接近させた

「なっ……………」

『速い!』

しんのすけは『ハリケーン』を引っ込ませようとするが、その前に右肘に『ルージング・エンド』の手が触れてしまった。『ハリケーン』は『ルージング・エンド』に手からゆっくりと引きずり込まれていく

「しんちゃん何やっとなねん!早ようスタンドを引っ込めい!」

「そうしたいけど出来ない!引きずり込まれるパワーが凄まじ過ぎて戻そうとしてもロクに動く事が……………」

「あーもー!」

人型の『スウィートハット』を発現させ、『ハリケーン』の辛うじて沈んでいない右手を掴み、引き上げた。その際のダメージで右腕にダメージを負ってしまう

「痛い……………もつと優しく助けてよ……………」

「文句は言わせへんで、助かっただけ良しとせえや。ウチはレスキ

ユ一隊やあらへんからな」

「しんのすけ……何が起こってるの？何でいきなり怪我をしたの？」

「オラを信じて……今は何も聞かないで、オラが勝つ事を信じて、何処か安全な所へ逃げてて」

藤方はしんのすけの頭を軽く小突く

「『オラ達が』……やる？」

「そうだね……」

「うん、私の『ルージング・エンド』を君達はとう倒そうとするの
か見せてよ。無駄ながらも足掻く人ってのは結構好きだし」

しんのすけと藤方は少しばかり彼女と距離をおく。その距離は今の
『スイートハット』では通常では攻撃が届かず、『ハリケーン』
でギリギリといった距離だ。勿論女は接近してくるが、同じだけ離
れる事で距離を保つ

「どうしたの？逃げてるだけじゃ私は倒せないよ？」

『直接殴るのがNGなら……小道具を使ってならだとどうだ！』

『ハリケーン』は手近の木の枝を折り、細い枝先を握り締め、手早く女へ接近し、『ルージング・エンド』のいない方向から殴りつける

「だから……そんな意味が無いんだってば」

ぶつかる前に『ルージング・エンド』が素早く前に出て来て体でガードする。『ルージング・エンド』に接触した為、木はスタンドに引き込まれ始めた。『ハリケーン』は枝を手放し、しんのすけの元に戻る

「あのさ……そんなの自分が沈む可能性が下がっただけで何も解決してないよ。もう少し考えようよ……」

あっ、と声を上げる

「ごめんごめん、そう言えば自己紹介がまだだったね……私の名は杵島彩美、二ヶ月程前に『矢』で射抜かれてこの能力を身に付けたスタンド使い……宜しくね」

「どつやらまいたみたい……お腹空いたな……焼きそばの匂いだ」

稲庭は、敵がいらないのを確認すると、所持金を確認し、焼きそばの屋台へ足を進めた

「すみません、焼きそば80人前ください」

「は……80人前って……どうしてですか？」

「やだなあ、あたしが食べるに決まってるじゃないですか、何言ってるんですかもう」

にこやかに言う稲庭に、とても信じられない事を聞いたかのように目を見開く店員だった

前払いでお金は出したのできちんと作ったが、80人前の焼きそばを持っていける筈もなく落ちるかも知れないという理由でこの場で食べきった稲庭に、店員は驚きを隠せなかった

「満足満足……あ、フライドポテト屋がある、少しお腹たまってきたし20人前で我慢しよ」

「お前の胃袋は異次元空間かどっかに繋がっているのか？」

宮嶋の声が聞こえる。振り返ろうとするも、その前に背中に熱を感じ、しゃがんだ

焼きそば屋が炎上する

「な……何だ？何でこんなに熱いんだ！」

全身が火に覆われた焼きそば屋の店員が炎上した焼きそば屋から飛び出した

「熱い！助けてくれ！頼む……たの……」

助けを懇願しながら自分に何が起こったのかすら理解する間も無く黒焦げとなる

「のほほんとした雰囲気にならず中々いい動きするじゃねえかお前……まあこうでないと面白くないけどな……」

宮嶋の後ろには、スフィックスとグリフォンを掛け合わせたようなデザインの動物を象った炎が飛び回っていた

「早めに降参した方が利口だぜ？こいつにゃ誰にも勝つ事が出来ないからな……」

スタンドは口を開き、火炎放射をする

稲庭は避けるが、今度はスタンドが稲庭目掛けて突進してきた

「『イザベラ』！」

自身のスタンドを発現し、殴りつけるが、通過した。逆に『イザベラ』の拳が燃えた

「残念、俺のスタンドは炎なんだよ。つまり同じスタンドでだって殴れないし蹴れないんだよ……」

学園祭サバイバル？（後書き）

宮嶋と杵島のスタンドが発現されました

杵島のスタンドはかなり恐ろしい能力にしているつもりです。スタンド名はニール・ヤングの楽曲から

宮嶋のスタンドは『愚者』や『正義』と同じタイプのスタンドです

学園祭サバイバル？（前書き）

追ってくる刺客達

琢磨と宝来は……

学園祭サバイバル？

一ヶ月ばかり前、埼玉県にある動物園

閉園時間が過ぎてとつぷりと日が暮れたその時間、そこにある一つの檻に、母親の母乳を吸っている五匹の子猫がいた

この猫達は、『オセロット』という、主に南アメリカに生息する山猫の仲間だ

今日も動物園に訪れた客の見世物となるという仕事を遂げた彼等は、後は何時も通り寝るだけだった

そう、それで自分達の一日が、終わる筈だった……

『ガチャガチャ』という音が耳に入り、薄目を開ける。鍵の掛かっている筈の檻の扉を開けて、何者かが入ってきた。その手には『弓と矢』が握られていた

その何者かは、母猫を除けて子猫達を品物を選ぶかのように吟味する。そして、内一匹に向けて突然『弓と矢』を引き、射抜いた

この子猫に起こった真の異常は、これからだった。『矢』に刺され、貫通もしているのが感覚で分かった。それなのに、問題無く生きていた。それだけではない。『眠っていた力が目覚めたような感じ』がする

何者かは子猫に刺さった『矢』を引き抜いてしゃがんで頭を撫でた。

射抜かれた筈の傷は、どういった訳か消えていた

「おめでとう、君は『選ばれた』……近い内に君はこの『矢』に選ばれた事による福音を味わう事となるだろう……だが、この檻の中にいては君はそれを存分に味わう事は出来ない……なあ、せつかく『選ばれし者』となれたんだ。檻の中という限られた世界で飼い殺しにされたまま一生を終えるより、外の世界で思う存分自由に生きてみないかい？」

彼には、そいつの言っている事がよく理解出来なかった

だが、その言葉が魅力的な物だというのは、直感で理解出来た

「どうだい？一緒に来るか？ちょっとの間なら面倒見てやる。自力で獲物が狩れるようになったら一つ言う事を聞いてくれた後に自由にしてやるさ」

彼は『何者か』へとたどたどしい足取りで近寄っていった。『何者か』は彼を抱き上げた

「いい子だ……名前が必要だね……君の目覚めた才能、『トランキライズ』と名付けよう」

『何者か』は子猫と共に檻から出て、鍵をかけた後、人に気付かれ

る前に動物園から立ち去った

僕、須藤琢磨は、今現在危機という物に陥っています

現在どの様な状況かというと、一般人である宝来さんと共に、脱出した直後に遭遇した二人と一匹のスタンド使いの内の一匹である子猫に追い込まれているといった物です

「須藤さん……本当に何が起きてるの？今、この大学の学園祭で何が起こってるの？それに……」

「ストップ！これ以上は聞かないで！今僕達がどうにかすべき事はあの猫を含めたこの学園祭に紛れ込んだ僕達の敵を倒す事で、貴女はただ巻き込まれただけだから何も言わず何も聞かず何処かに隠れて下さい！」

彼女には、あの猫が何故かは分からないけど宙に浮いているとしか認識していないでしょう

そして、奴の攻撃をした結果も何故かいきなり爆発したとしか思わないでしょう。『スタンド』は通常一般人には視認が出来ない物なのだから

「ウニャー」

両翼の端から、パラボラアンテナのような物が出現し、それを僕に照準を合わせ、ビームを放つ

寸前まで引き寄せ、着弾する前に自分の右足首以外を「持っていく」事で攻撃を避ける事に成功しました。後ろの地面に着弾すると同時に戻ったので、その際の爆破衝撃は背後からモロに受けてしまいました

「ニヤー」

パラボラアンテナを機関銃のような形に変え、銃口から視認するのがやっとの大きさのエネルギー弾が照射されました

『SHUFFLE』を出してエネルギー弾を弾こうとしましたが、如何せん細か過ぎる上に数が多くてかなり被弾してしまいました。フィードバックで僕も同じ箇所に損傷してしまいました

（大体理解出来てきた……あのスタンドから発射されるエネルギー弾は、全体的に威力は高いけど攻撃手段によって差が大きいしスピードも脅威に思っ程でもない……威力が特別高い攻撃を直撃さえしなければ……）

「ウニヤオー」

上昇して前が開き、そこから砲身が顔を見せました

パラボラアンテナが照準を下に向け、まず左翼からビームが照射されました

それを左に数歩動く事で避けましたが、右足に機関銃から放たれる細かいエネルギー弾が直撃してしまい、ダメージを受けてしまいました。奴のスタンドを確認してみると、右翼はパラボラアンテナから機関銃に戻していました

一発一発は大した事が無くとも何発も同じ箇所食らったのですからただでは済みません。まともに歩く事が難しくなっていました

「ウニャー」

前から現れた砲口から、先程までのより大きなエネルギー弾が発射されました

スピードが大した事無いと言っても威力は相当、しかも右足のダメージが深刻で避ける事もままなりません

『SHUFFLE』の能力は必ず一部は残さないといけないのでその部分はただでは済まないでしょうがやられるよりかはマシと判断し、能力を使おうとした瞬間

「！」

突然左手を掴まれ、引つ張られました。僕が先程までいた場所にエ
ネルギー弾が着弾し、その余波で僕達は吹き飛びました

「ウニヤア？」

掴まれている左手の方を見ると、爆破衝撃で傷を負っている宝来さ
んがいました。服も少しボロボロになっていて、特に僕を引つ張っ
た右腕の袖の部分は肘まで無くなっていました

「須藤さん大丈夫？」

「まあ辛うじて……右足は大ダメージですが」

「良かった……」

「助けてくれた事は感謝しますが危ないので……！」

僕は見落としてしまいそうな『事実』に気がきました

「ちょっと待って下さい……どうして助けたんですか？」

「ヤバそうだったから……」

「そんな事を言っているんじゃない！何で『ヤバそうだった』
と思ったのですか？」

「だって足を怪我している時にあんな攻撃を……」

「！もしかして貴女何が起こっているのかが『見えてるんですか？』」

「えっと……」

間違い無い。見えてる。だからあれだけの確に動く事が出来たんだ。と、僕は確信しました

しかし、何故でしょうか？彼女が『スタンド使い』じゃない事は、彼女と三年の付き合いのある除夜君から聞いていますし……

(これは……)

僕の質問に対して戸惑っている宝来さんの袖が消失して露出した右腕に、妙な物を発見した僕は宝来さんの手首を掴んで引っ張りました

「え？ちよつと……」

「何ですか？この『穴』……」

彼女の右腕の手首から肘の間辺りに、貫通して向こう側が覗く事が出来る『穴』が開いていたのです。これを見て見えている理由が

理解出来ました

「宝来さん……貴女、この『穴』をどんなきっかけで？」

「今そんな事聞いてる場合じゃないでしょ？訳分らないし……早く逃げないと！」

「そうですね……そして今奴を倒せる可能性が出て来ました……宝来さん、貴女の『スタンド』を発現させて下さい」

困惑している彼女へ、僕はそう言いました

学園祭サバイバル？（後書き）

前半少し猫の過去話になってしまいました。スタンド名はザ・キラ
ーズの楽曲から

果たして二人は猫を撃退出来るのでしょうか

宝来のスタンドも次回辺りに出て来る予定です

それでは、また次回！

学園祭サバイバル？（前書き）

果たして、宝来のスタンド能力とは？

二人は『トランキライズ』を打破出来るか？

学園祭サバイバル？

「『スタンド』の……発現？」

「短い間に同じ事を何度も言ったり答えたりするのは好きじゃありませんけど……確認の為もう一度聞きますよ？」

僕の後ろに自分のスタンドを出して指を差しました

「宝来さん……これ……見えますか？」

首を縦に振りました

もう少し聞いておきたい事があったのですが、猫がビームを照射したので、それを回避して手短に言いました

「見えているのなら……スタンドを出せる筈です……出して！早く！」

「スタンドって？」

「さっき僕が出したのやあの猫が身に纏っている飛行機みたいな物です……まあ、『超能力』の類ですね」

簡単に説明している間にも、猫のスタンドは宝来さんに向けてパラボラアンテナでビームを照射しようとしています

猫はパラボラアンテナからビームを照射しました。僕は宝来さんを掴んで引っ張りました

「早く！」

「だからその『スタンド』って何なの？何言ってるのか分からないよ！」

「ちゃんと説明するのが筋だと言うのは分かります！でも今はその説明をしている余裕は無いんです！」

「大体私に「能力」があるのを前提に言ってるみたいだけど私に「能力」なんてないよ！どうする事も出来ないよ！」

「僕の『SHUFFLE』が見えているんでしょう？今まで無自覚だっただけで出来るんです！」

そうしている間も、猫は僕と宝来さんへ攻撃をして来ました

「ひっ！」

「おっと……」

僕はその攻撃を体を反らして避け、宝来さんは恐怖で体を屈めた事で結果的に避ける事が出来ました

「何でこんな目に……ただ学園祭に来ただけなのに……」

『ビー……』

『何か』の鳴き声が、突然聞こえました

音源は、宝来さんのいる方向で、『それ』は震えている宝来さんの足元へ蠢いていました

全長80センチ程の、腕二本分の太さのある紫色の体色に玩具の蛇のような節が幾つもある、頭にアルファベットのTを画くように銀色の角の生えた『芋虫』でした

こんなフォームをし、こんなにも大きな芋虫がいる筈がありません。宝来さんの足元にいる事を考えて、これが宝来さんのスタンドだというのは間違い無いでしょう

うねうねと地を這うその姿は、言うては何ですが弱そうで、とても頼りない。それが僕の第一印象ですが、口には出しませんでした。見る限りその動作は緩慢な様です

「い……芋虫？」

「ええ……芋虫ですね……」

「何で……こんな所にこんな芋虫が？」

「貴女が出したからですよ宝来さん。これは僕の『SHUFFLE』やあの猫の飛行機と同じものです」

「何なの？この大きな芋虫？あたしが出したの？」

『ビー……』

「ニャー……」

猫が再度ビームを放ってきました。『SHUFFLE』に芋虫のスタンドを持たせ、宝来さんと共に回避しました

ビームが地面に当たった後、芋虫のスタンドは『SHUFFLE』の腕を伝って肩まで登り、頭を上げて顔を猫のスタンドに向けました

そして、口から『白い液体』を勢い良く吐き出しました

「ニャ？」

猫のスタンドは旋回して避けようとしたましたが、左翼に付け根から掛かってしまいました

「何を……したんです？あれは……」

「さあ……ヤバいと思っただけで……何も分からないよ……」

つまり無意識に動かして無意識で能力を使ったという訳ですか

左翼に掛かった液体は翼の端から糸を引くように落ちています。翼の下側も、ポタポタ滴り落ちていきます

しかし、それ以外どうにかなっている様子はありません。それも猫も気付いたようで、ジェット噴射して接近しようとしています

異変に気付いたのは、その時でした

「へ？」

「あれ？」

「ニヤ？」

左翼に掛かった液体が、鍾乳石のように『固まっていた』のです。猫のスタンドも全然動く気配がありません。宝来さんのスタンド能力を、僕は大体ながら理解が出来ました

「（だけど『確信』はしたい……）宝来さん！スタンドを動かしてあの液体をあの手スタンドに掛けて！」

「えっと……どう動かすの？」

「自分の体を動かすように連想して！」

『ビー……』

芋虫は猫のスタンドの前方に向かって、白い液体を吐き出しました。吐き出された液体は前方を覆い、滴り落ちる分は先程同様鍾乳石のように固まったのです

これで確信出来ました。彼女のスタンドは、石膏のような液体を吐き出すスタンドだと

それも凝固までにかかった時間や、破壊力の高いスタンドがどうあっても動かない事から、様々な意味でかなり強力な液体のようですね

「ブニャー！」

しかし、敵も去るもの。スタンドを解除して脱出しました

確かに『スタンドを纏った状態』で『前方と左翼』のみに掛かってそれが固まったのなら、解除して後ろに動けば逃れられるのは自明の理です

逃れた猫は、再度スタンドを発現させました

「逃れたのは純粹に尊敬してあげますよ……しかし残念でしたね……
…もう君は僕達に勝つ事は出来ませんよ！」

「ウニャーオ……？」

コックピットを覆う強化ガラスの前面が突然消えた事に、猫は戸惑いを隠せないようです

但しすぐに冷静となり、僕の傍に立っている『SHUFFLE』を見て僕の仕業と理解したようです。この辺は、子供と言えど生まれついでハンターとしての洞察力が伺えます

猫は前方の砲口を両翼のパラボラアンテナを僕のスタンドへと照準を合わせます

見事に計算通りに動いてくれました

「ギニャ？」

『SHUFFLE』の背中をよじ登ってきた宝来さんのスタンドが、僕のスタンドの左肩から顔を出し、猫に向けて液体を吐き出しました
先程はガラスがあつたから直撃はしませんでした、現在はそれは僕のスタンドが『持っていった』ありません。つまり、身を守る手段は無いという事です

攻撃を止めて回避しようとしたましたが、間に合わず、直撃しました

スタンド全体にもかけさせ、今猫は顔以外凝固した液体に埋まりました

「見た限り生後一年も経っていないさそうですし……殺処分したり再起不能にしたりするのは勘弁してあげますよ」

「でもどうするの？こんな危険な猫を野放しにするの？」

「当然そんな事もするつもりはありませんよ。僕達の保護下に置くんですよ。今僕丁度『都合のいい物』を持っているので」

「『都合のいい物』？」

僕は動けなくなった猫に近付いてポケットに入れておいた布袋を嗅がせ、穏やかになった所で頭を撫でました

子猫はすぐにスヤスヤと気持ちよさそうに眠りにつきました

「何？その袋」

「匂いからマタタビが入っているみたいなんですよ。会場に入る前に落ちてたのを見つけたので拾ったんです」

「……誰が何の為にそんなのを大学の学園祭に持ってきてたの？」

「知りませんよそんな事……もし持ってきた人に会えたら聞いて下

さい」

「そうだね……」

「それじゃ行きますよ、早く除夜君達と合流したいですから」

須藤琢磨 足に負った負傷は取り敢えず止血し、終わった後で病院に行く事にした

宝来瑪瑙 道中、琢磨から具体的なスタンドの説明を聞いた

子猫 道中、小物店で籠を購入し、マタタビの袋と一緒にその中に入れられた

TO BE CONTIUED…

学園祭サバイバル？（後書き）

何とか二人目を撃破しました

宝来は琢磨に何か話そうとしましたが、タイミングが掴めず話す事が出来ませんでした

それでは、また次回

学園祭サバイバル？（前書き）

学園祭で繰り広げられる戦闘は、続く限りはただ激化の一途を辿る

学園祭サバイバル？

自分のスタンドが燃える事によるフィードバックによって、拳が焼けていく稲庭。仕方無く、一旦『イザベラ』を引っ込める

「スタンドを引っ込めたか……確かにこうすればスタンドに移った我が『バーニング・スカイ』の炎は消える……『火』には『燃える物』が必要だからな……」

「じゃあスタンドを操る『本体』に燃え移った場合は？」

「自分で考える……実体験の上でな！」

スタンド『バーニング・スカイ』から炎を触手のように伸ばしてそれが稲庭に迫る。稲庭は避けるが自力で避けきる事が出来ず、服や肌を掠ってしまう。そこについた火が、どんどん燃え広がっていった

「『イザベラ』！」

肌の燃えている部分を『拭き取る』事で消す。服は燃えている表面を拭き取って炭化した部分を払い落とし

（『拭き取る』……随分と手強い能力だな……こういったタイプは杵島の方が相性良いんだが……）

「あの……一緒にいた女の人から『宮嶋』って呼ばれてたけど……
貴方、『宮嶋 門責』だよな？」

「そうだけど……俺の事知ってるの？」

「1994年から2000年までに立証出来る物だけで三百件以上の放火を犯した伝説級の放火魔……2000年の初冬に逮捕され、死刑判決が受けるが翌年2001年に脱獄し以降行方不明となる……まさかこんな所で直に出会えるとは思わなかった……」

「ほう……今の若い奴はニュースとか新聞とかから離れている傾向にあると聞いた事があるが……ここまで詳しく知っているとはね、お見それいったよ……」

「何故こんな所にスタンド使いとなってあたし達に襲い掛かってきているのかは分からないけどね……」

宮嶋は口元を歪ませ、笑い出した

「どれだけ優れた捜査も『人間』がやる以上完璧なもんはない。『穴』ってもんがあるんだよ……それが入念な物なら特にデカイ穴が何処かにな。じゃないと六年以上も放火を犯しながら警察から逃げている訳ねーだろ……脱獄した後も同じ要領で身を隠していたんだよ……で、五ヶ月とちょっと前春日部に寄った時、お前等の捜しているというこの春日部でスタンド使いを増やしている奴に出会ってこの『バーニング・スカイ』の能力を得た……詳しくは知らないが『スタンド能力』ってのは自分で言うのも何だが俺みたい

な凶悪な罪人程発現の可能性が高いらしい……全く、奴には感謝を
幾らしてもし足りないな……こんなに素敵な能力を、普通なら一生
手に入れる筈の無かったこの能力をくれたのだからな！」

『バーニング・スカイ』は口から火炎弾を稲庭の足元目掛けて数発
発射する。稲庭はそれを後退して避けるが、『バーニング・スカイ』
はそれを見越していたように火炎放射を稲庭に放った

左足の臍に命中し、少しずつ燃え広がっていく

「前から避けられるスピードで何かが自分に向かってきたとすれば、
普通なら後ろに下がるか横に移動して避けようと動く……まあ今言
ったけどそれは普通の反応だよ。だから予測は簡単だ……さて、再
起不能になって貰おうか……安心しろ、体の皮膚をちよいとばかり
黒焦げにするだけだ。こんな騒ぎだし、救急車も来るだろうし死ぬ
事は無いだろうよ」

稲庭は今自分の足が燃えているこの現状を、『ピンチ』だと感じて
いたが、逆に『チャンス』だと考えていた

奴は強く、その能力は圧倒的。それは紛れようもない事実

自分の力、『イザベラ』の特性を練り込んだ策を用いるしか勝ち目
は無い。そしてそれを実行するのは今しかない

「何だその表情……？『諦めない』のは立派だがもう分かってるだ

る？圧倒的な『差』を……大人しくしてねえと」

「『大人しくしてねえと』……何？」

甲高い音が響く

稲庭は宮嶋の顔に、『燃えている右手』で平手打ちを繰り返した。燃えている右手から移った火が、触れた宮嶋の顔を燃やし始める

（おかしい……俺が燃やしたのは奴の左足……確かに手は燃えていたが……）

更に叩こうとした右手首を握って押さえた

「お前正気か？」

「何が？」

「お前……自分の足に引火した火を自分の手に移したのか？」

「『ごうでもしないと勝てないのならごうでもするしかない』でしよ？」

合掌する事により左手にも火を移した。そして、それでひっぱいた。この際宮嶋は、顔に何か小さな動物が這ったような触感を覚える

宮嶋は顔についた火を消して急いで稲庭から離れる

「？」

そして稲庭は気付いた。両手と左足の火の燃える勢いが、先程より激しくなっていた

「さっきまで自信満々だったくせに……少し不利になったから逃げるの？」

「もう手を下す必要が無いからだよ！分からないのか？俺のスタンドは『火を繰り出す』んじゃない、『スタンド自体が火』なんだ！そんなスタンドが普通の火だと思っているのか？」

（何言ってるの分からないけど……早く倒さないと黒焦げになる！）

宮嶋に攻撃する為に走り出す稲庭

だが、火が付いている両手と左足が突然『爆発した』

「な……？といっても原則自体は普通の炎と変わりないんだが……知ってる？火の付く三つの要素ってやつ……『点火源』と『燃やす物』と『酸素』だ。消火活動はこの三つの内の一つの繋がりを絶

つ事なんだぜ。山火事なら周りの木を切り倒すとかよ……分かるか？『バーニング・スカイ』の『点火源』は本体である俺、『燃やす物』はそのまま、じゃあ『酸素』に当たる物は？まあこれは動物を燃やす場合に限定されてはいるが……何だと思う？」

聞こえてはいるだろうが、答えられそうにない。そう判断した宮嶋は、高らかに喋る

「『感情』だよ」

笑顔を顔に貼り付けたまま、喋り続ける

「何もおかしい事は無いだろ？「火に油を注ぐ」とか、感情表現を火に置き換えた言葉は結構ある……俺のスタンドはそういった言葉が具象化した物だと考えてくれればいい……理科の実験で酸素の入った試験管の中で火をつけた線香入れたら勢い良く燃えただろ？酸素の濃度が高まると火は爆発だってするんだよ……」

倒れた稲庭に、『バーニング・スカイ』を出して迫る。爆発で拡散したのか、彼女についていた火は消えていた

稲庭は痛みを堪えながらポロポロの『イザベラ』を出し、ゆっくりと立ち上がった

「火がそこまで燃え広がらない内に爆発したからまだ動かせる程度は出来るって事か……だが深刻なダメージってのには変わりなさそうだな。ガタガタ震えていて生まれたての仔牛や仔馬みたいで実に弱々しいわ」

「ねえ、一つ忠告しといてあげる……もうこれ以上近付くな、そして今すぐにここから立ち去りなさい……でないと『死ぬ』羽目になると思うから……」

「……てめえは何を言ってるんだ？」

「あたしの『イザベラ』の特性は……体の一部を切り離す事で分身体を作る事……」

言われて気が付いた。発現させた『イザベラ』には、『左手首が無い』事に

それに気付いた瞬間、宮嶋の背中は炎にくるまれた。背中から飛び出た『イザベラ』の分身体は、左手首に戻った

「さつき……殴ったのはこれが目的……一回目は……火を移すのが狙いだと……錯覚させる為の罠……火は、爆発したと同時に『イザベラ』で拭き取った物を……分身体に送った……」

宮嶋はあつと言う間に上半身が火だるまとなった

(火を消す様子がない……多分……一度奴の意識の認識から……外れたからだろう……ね)

「くそがあ！殺してやる！殺してやる！」

感情が高ぶった声で叫ぶ。『バーニング・スカイ』の炎は感情を酸素としている。つまり、その炎がついた者が感情が高ぶるという事は、火に酸素を急激に送るのと同じ事態になるという事だ

先程稲庭に起こったと同様、それより更に大きな爆発が、宮嶋に起こった

学園祭サバイバル？（後書き）

『バーニング・スカイ』はある意味感情のスタンドです

スタンド名はバッド・カンパニーのスタジオ・アルバムから

稲庭の起死回生の策の行方は？

学園祭サバイバル？（前書き）

少し間が空いてしまいました

ごめんなさい！

学園祭サバイバル？

「これは……あたしが勝ったって事で……いいのかな？」

うつ伏せに倒れた男を見下ろし、警戒しながら言った

自分の能力で自爆したこの男をよく見る。シャツは原型を留めておらず、最早再生不能。体の火傷や裂傷も、一目見ただけで立ち上がるのが困難と判断出来る程酷いものだった

「これはもう気絶してるよね……」

そう思って会場に戻る為に回れ右して駆け出した

「おい小娘……何処へ行くんだ？」

その途端、男の声がして振り返る。一番に目に入ったのは、再生不能なまでにボロボロになったシャツと変形したフレームだけとなったサングラス、あちこち火傷をしたり裂傷を負ったりしている宮嶋が大股の前かがみで立ち上がっていた。彼のスタンド『バーニング・スカイ』も後ろで発現されている

「な……何で……」

「よく考えてみれば分からない事じゃない筈だぜ？俺の『バーニング・スカイ』は『感情』を『酸素』とする……俺が自分のスタンド能力の特性を忘れてパニックったりするアホに見えたか？」

「！」

稲庭は戦慄する。つまり、それでは

「そつだよ……爆風で火を掻き消す為にわざとあんな真似をしたんだよ……お陰でこのザマだが焼け死ぬよりはマシだから……『スタンド』はまだ発現出来る……即ちまだ戦う事の出来るという事だ……」

宮嶋の執念の精神力に、稲庭は畏怖と尊敬の念を抱くと同時に、それ以上に強い疑問が頭に浮かんだ

「何でこんな大怪我を自ら負ってまで戦おうとするの？分からない訳ないでしょ？死んじやうよ！」

それを、真正面から宮嶋にぶつけた。宮嶋はフンツと鼻で笑い、歪んだ笑みを浮かべ、言い放つ

「おい……敵の心配か小娘……優しいなあ……だが……愚かとしか言い様が無いな……」

「もしかして『矢』の持ち主に恩情か何かを感じてるの？もしそうだとしたら何で？」

宮嶋は表情を変えず稲庭の質問に答える

「言ったよな……俺はこの能力を授けてくれた奴に感謝していると……俺からすればお前等の方が理解出来ない。お前等も瀬上除夜を除いて彼に『矢』で射抜かれた事で自分達に秘められていた『能力』に気付く事が出来たんだろ？」

「……それが？」

「自分では気付く事が出来なかった『才能』を気付かせてくれたんだ……それも他の人間にや持ってない、自分だけの『特別な才能』にな……感謝するのは当たり前だろ？」

稲庭は一瞬視界が真っ白になった。考えが違い過ぎる

稲庭だって15年以上生きてきている。自分の価値観が絶対的なものではない事、そして自分には理解が困難、または出来ない考え方をする人間が世の中にいる事位、分かっているつもりだった

しかし、今日の前にいる男は、自分の想像を遥かに越えて『理解不能』だった

「出せよ……スタンドを……」

自分のスタンド『イザベラ』を出す

瞬間、『バーニング・スカイ』が『イザベラ』へと飛びかかってきた

『バーニング・スカイ』が『イザベラ』に接触する直前に、『イザベラ』は十数のパーツに分離し、それぞれが小型のスタンドとなる。分離した十数のスタンドは宮嶋へと接近する

『バーニング・スカイ』はUターンし、『イザベラ』を燃やす為、体の各所から分裂体に向けて火炎放射を食らわす。『イザベラ』はジャンプしたり左右や後ろにずったりしてそれをかわそうとするも、完全に避ける事の出来たのはおらず、全てが掠ったりして燃え出した
フィードバックで稲庭の肌が焼け始める。正直、洒落にならない痛さだった

だが、自分のスタンドからは、しっかりと目を離さなかった

(全部触れちゃったか……『好都合』！)

全てのスタンドを、そのまま宮嶋に向かわせる

「同じ手は食わねえよ……さつきみたいな真似はゴメンだ」

『バーニング・スカイ』から、焼き尽くす為に火炎放射を放つ。『イザベラ』達はそれを『直撃だけは』避けるように動く。それがトドメとなって何匹か燃え尽きるも、残りは宮嶋に近付きながら互いに近い個体に近付き、燃えている部分を拭き取った

(これだけダメージ与えてやってまだ勢いが衰えないのか……)

『バーニング・スカイ』が宮嶋の前に止まり、宮嶋を囲う『壁』となった。火の高さは五メートルは越えている。上は空いているが、『イザベラ』ではそこまでいけない

「行けっ！」

一切の躊躇無く『イザベラ』達にそう命じた。『イザベラ』達は一匹残らず炎の壁へと飛び込む

ダメージを無視した特攻により、炎の壁は呆気なく突破された。『バーニング・スカイ』のような不定形のスタンドは、攻撃を受け流す事が出来るが力で突破しようとした場合呆気なく突破されてしま
うのだ

「なっ……」

火を纏った『イザベラ』達は、宮嶋の足にしがみついて上っていき、背中や腹、足、腕とカイガラムシのようにつく。振り払おうとはしない。そんな事は無駄だと理解しているからだ

最後の一匹が喉まで上ると、『イザベラ』達は一斉に拭き取った火を出した

宮嶋は炎に包まれるが、勿論稲庭もただでは済まない。全身が、火炙りにされたように焦げ出した

「言つとくけど『イザベラ』は最後まで解除なんかしないよ？また自爆して火を消されちゃ面倒だからね……」

現在進行形でダメージを負う稲庭は、踏ん張って倒れそうな体をどっにか立たせる

宮嶋は視線を下に向ける。『イザベラ』はその殆どが焼け焦げており、その全てが消えかかっていた。つまり、本来は彼女は意識を保つのがやっと。だが分かる。彼女は死ぬまでスタンドを引っ込めようとはしない。じっと待ってそのままスタンドが消えるのを待つ事は出来ない

「おい……『自爆なんかさせない』って言ったよな……」

その様でやれるもんならやってみる

そう言い放った直後、宮嶋を燃やす火の勢いが強くなった

「『やれるもんならやってみる』？ やってやるわよ」

瞬間、背中に引っ付いていた一匹の『イザベラ』が、彼の眉間まで這い上がった

少し気になったが、今はどうでもいい。彼は今、高ぶった感情という名の濃度の強い酸素を自分を燃やす炎にぶち込んでいる

爆発する前兆は知り尽くしている。爆発の寸前に稲庭の傍に寄ってトドメを刺す。相討ちなら望む所だ

(前兆が来た……)

稲庭に向かおうとした時、異変が起きた

「え？」

何をやるうとしたのか忘れてしまい、『稲庭の姿が視界から消えてしまった』

(思い出せ……俺は奴に……何をしよう？それに奴は何処に……)

考えている最中に彼の体は限界を迎え、倒れた。それにより、『バーニング・スカイ』は勿論の事、彼と分裂体を燃やしていた炎は消えた

「何とか……勝った……」

「おい、大丈夫か稲庭？しっかりしろ！」

倒れそうになつた稲庭へ、突然現れた除夜が駆け寄つた

スタンド使いのスリを倒した俺は、事前に教えて貰っていた会場に向かつている最中に、突然火柱が上がつた

それがスタンド使いの仕業だと分かるのに想像を巡らす必要が無かつたので、会場へ行くのを中断してそっちに向かつた。ダメージは負つてはいるが、先程の戦いで見つけた瞬間移動の使い方があれば、余程相性が悪くない限り戦う事が出来るだろう。これは自信からの結論ではないが、それでも完全に間違つた認識ではない筈だ

そう意気込んで向かつたはいいが、途中で火柱は消えた。現場に到達すると、火傷と裂傷でボロボロとなつた男と、酷い火傷を負つた

俺のクラスの委員長がいた

これを見てここで何が起こったのかを理解した俺は、救急車を呼んだ後に稲庭を抱え、保健室に向かった

男の方の火傷は酷いものだったが、素人があれこれやっていいレベルを越えていた為、救急車を呼んで人を呼んで頼んだ後、放置した

「？あれ？」

「起きたか？」

「瀬上君……ここ何処？」

「保健室、火傷の処置をする為に抱えてきた。だが保険医は今日風邪をひいたか何かで休みみたいでな、悪いとは知りつつ鍵を破壊して応急処置をした」

「ありがとう」

「気にするな、あのままほっといたら死んでただろうからな」

「あ……」

稲庭は突然、何かを思い出したように止まり、顔を赤くした

「どうした？」

「あの……瀬上君……あちこちに包帯が巻かれていて……服も変わっているんだけど……」

「仕方無いだろ、全身に火傷を負ってたんだから」

「もしかして……あたしの裸……見た？」

「見たよ、仕方無く。そうしないと応急処置が出来ないし」

「そうだよね、仕方無いよね……診察や治療の為に服を脱がすのは普通の事だし、瀬上君の事だから悪意や下心あつての行為じゃないつてのは……あたしが動揺しているのはただあたしの合意が無い内に……」

「止めるお前のその言い方は第三者が聞いていたら下手すれば妙な誤解をされる」

瀬上除夜 稲庭に救急車が来るまでここで落ち着くよう強く言い聞かせて会場へ向かう

稲庭早良 除夜に会場で何が起きているのかを説明した後、除夜の言い付け通り保健室のベットで落ち着く事に

スタンド名 『バーニング・スカイ』

本体 宮嶋門貴

再起不能。 刑務所病院に搬送された

...D E F E N D E R S

学園祭サバイバル？（後書き）

『バーニング・スカイ』戦は終わりました

あんな戦法を取ったから当然稲庭も大ダメージなので除夜君は処置をする為に致し方なく裸にしました。因みに火傷の応急処置は昔義母から習いました

残りのしんのすけ&莓花対杵島は次回書きますので、宜しく願います

学園祭サバイバル？（前書き）

しんのすけ&藤方VS杵島戦

学園祭サバイバル、中盤突入！

学園祭サバイバル？

「ひっ……な……何なの……何がしたいの……？」

「……………」

大学生の女性は、怯えながら目の前の、自分に向けて『弓』を引いている男に訊ねる。男は何も答えず、弦から指を離した

放たれた古い『矢』は、女性の左胸を貫いた

「ひ……っ……え？」

『矢』が自分を貫いた事実慌てふためくが、すぐに異変に気付いた。『矢』は確かに自分の胸を貫いているというのに、『どうにもない』。刺さった所から血は滲み出ているが、痛くも何ともないのだ

男は女性の左胸を貫いた『矢』を引き抜いた。それにより出来た傷が、一瞬にして消えた

「え？あれ？私……矢に……」

目の前に男がいる事も構わず、彼女は服をたくし上げて刺された箇所を見る。やはり、出血も痕跡も無かった

男は口元を歪ませ、喋り出す

「安心していいよ。貴女にこれ以上の危害を加えるつもりはないから……」

「何なの……その『弓と矢』は……」

「詳しくは言わない。貴女はこの『矢』に刺され生きている……この事実から言えるのは、貴女は『矢』に選ばれ『スタンド』と呼ばれる精神の才能を引き出された……暫くしたら僕は貴女にある事を依頼するだろうけど、それまでにこの『矢』から授かった自分の新しい才能がどういった物なのかというのを理解しておいて欲しい。もしかしたら貴女かも知れないのだからね……」

「待つて……一体……」

戸惑いながらも、女性は男を呼び止めようとする。男はそれを無視し、そこから離れた

（今日ここで生み出した新たなスタンド使いは計八名……射抜いたのも八人だから何時も通り、自分の目に狂いはなしと……もう少しばかり射抜いておきたいがここで続きをやると騒ぎがより大きくなりかねない……今日の所はこれで満足しておこう……それに除夜達もいるから『僕』だとバレてしまいかも知れないし……）

ぶつぶつと小声で呟きながら人混みの中に紛れる。途中、男と肩をぶつかってしまった。相手の男は一言謝ると、そのまま去っていった。彼は呆然としていた。何故なら、その男に見覚えがあったからだ。あつて当然だろう。その男は彼が『矢』で射抜いた多くの者達の内の一人なのだから

（何故奴がここに？呼んだ覚えは……いや待て、普通に考えたらここは『学校』で、今日は『祭り』だ、誰が来ていたとしても不思議はない）

そんな中で何故『彼』が男とすれ違ったのかは不思議に思うまでも無い。何故なら『スタンド使い同士は引かれ合う』のだ

「だがいい意味で予想外だ。彼の『スタンド』ならもしかすると……」

急いで人混みから離れて物陰に隠れ、周囲に人がいない事を確認して携帯を取り出し、『彼』の電話番号を思い出してプッシュする

コール音が数回鳴った後、相手は出た

『もしもし、どちらさん？』

「久し振りだな……元気だったか？」

『あんたか……』

「初めて会った時に言った頼みを実行してくれ。奴が今何処にいるのかは分からないが、今日女子プロレスの交流試合の『あった』場所の近辺を見張っていれば……遭遇するだろう……以上だ、成功を祈る……」

電話を切り、物陰から出た

「ほらほらどうしたかな？野原しんのすけ君に藤方莓花ちゃん、逃げてばかりじゃあたしを倒す事は出来ないよ？」

杵島のスタンド『ルージング・エンド』は刀剣化した『ハリケーン』に触ろうと手を伸ばす

させじと後ろから全スタンドを集結させた『スイートハット』が大木を引き抜いて強力な音波で破碎した。音波に乗った木片が杵島を襲う

『ルージング・エンド』が杵島を守るように後ろへ移動する。飛んできた破片の内『ルージング・エンド』に触れた木片はスタンドに『沈んでいった』

「頑張るね……だけど大丈夫？二人共結構バテてるみたいだけど」

しんのすけも藤方も余裕は無かった

杵島のスタンド『ルージング・エンド』は『厄介』とか、『危険』とか、そんなレベルではない

触れてしまったらまずダメージは避けられない

二人が『ルージング・エンド』について分かっている事は、射程は数メートル程度の近距離型ではあるが破壊力はそこまでない。スピードが超凄いいけど

そして、スタンドの像に触れた物は、底無し沼のように沈んでいく。しかも能力の性質上ダメージは無い

能力の方にスタンド力を注ぎ込む為、破壊力は大して無いという訳だ

スタンドを倒す場合、触れる事はしてはならないが、しんのすけも藤方も直接攻撃のスタンドだ。だから本体を叩くのが一番手っ取り早い、それが『近距離型』という、互いのスタンドの共通点が阻む

二人同時に掛かれば可能性はあるが、その手の対抗策を相手が考えていないとは思えない

「八方美人ですな」

「それを言うなら発泡スチロールや」

「……『八方塞がり』じゃないの？」

「そうともいう」

「『そうとしか言わない』って……突っ込んで欲しいのかな？」

『ルージング・エンド』を近付かせ、刀剣にした『ハリケーン』に触れようとする。しんのすけは後退しようとするも、相手が僅かに早く、切っ先が胸部に触れてしまう

藤方はスタンドで沈んでいく『ハリケーン』の柄を握り、底無し沼のスタンドから引っこ抜いた

『ハリケーン』をしんのすけに渡す。しんのすけの手に渡った時、解除して元の近距離パワー型に戻った

『思った以上に手強いな……』

「でしょ？これからどんな手段を用いるうとも、『ルージング・エンド』は君達のスタンドでは攻略する事は出来ないと断言しよう……」

「なあ質問があるんやけどええか？お姉さん」

「どござ」

「しんちゃんのスタンド能力……随分詳しいみたいやけど……二人は知り合いか何かか？」

「ううん、あのおねいさんとオラは初対面だぞ」

「あたしも初めて会った……けれどね、君を筆頭とする瀬上除夜の仲間のスタンド使いの情報は予めあたし達にスタンド能力を授けた人が教えてくれてたの。だからある程度の情報はあるわよ」

「成程な……しんちゃん、こっち来いや」

「ほっほーい」

「作戦会議か何か？いいよ、あたしの『ルージング・エンド』はどんなスタンドだろうが少しでも触れたら途端に沈み込む。サービスで言っただけで処理の限界は無いからそれ狙いは止めた方がいいよ。100%出来っこないから」

「という訳や、分かったな」

「分かったぞ！」

「待たせたな姉ちゃん！あんたを倒す策が今思い付いたぞ！」

「やってみなよ」

「よし、それじゃ行くでしんちゃん！腹括れや！」

「ブ・ラジャー！」

「『スウィートハット』！」

藤方から、沢山の蝙蝠が出現する。蝙蝠達は三者の周りを飛び交う

三者は、自分の周りを活発に飛び交う蝙蝠で前もロクに見る事が出来なかった

学園祭サバイバル？（後書き）

『ルージング・エンド』は底無し沼をスタンドの像にしたようなスタンドです。宮嶋の『バーニング・スカイ』といい、自分で考えといて何か能力がデタラメなスタンドだなあと思いました

まあこれくらいじゃないと能力同士が足の引っ張り合いは出来ないだろうけど

次回も宜しければお楽しみに！

学園祭サバイバル？（前書き）

最恐のスタンド『ルージング・エンド』

しんのすけ達は勝つ事が出来るのか？

学園祭サバイバル？

「何これ？目眩ましか何か？」

つまらなさそうに、自分達の周囲を飛び交う蝙蝠群を見る

「まあ……すぐに取っ払うまでだけどね……『ルージング・エンド』

杵島は足を動かさず。飛び交う蝙蝠のスタンド群に、『ルージング・エンド』は杵島の周りを絶え間なく移動する事で自分の周りにいる蝙蝠を沈ませていった

途中、蝙蝠から蝙蝠へと飛び移っている小さな二足歩行の動物が目に入る。一匹だけでなく、何匹もいた

（よく見えないけど……十中八九群生型の『ハリケーン』……何を企んでるか知らないけど、何かする前に潰しておくのが一番か……）

指を鳴らす。すると、『ルージング・エンド』が今まで以上のスピードで移動や蝙蝠に向けて殴ったり蹴ったりをする。攻撃を食らった蝙蝠は、『ルージング・エンド』へと沈んでいく

数が五分の一にまで減り、見晴らしが良くなった時、藤方は露わと

なっている肌の殆どが変色していた。スタンドがやられ過ぎた事によるフィードバックだ

藤方はこれ以上やられる前に、『スウィートハット』を解除する。飛び回っていた蝙蝠は消え、そこには藤方と杵島の二人しかいなかった

そう、『しんのすけ』は姿を眩ませていた

「野原しんのすけは何処に消えたの？」

「何おもしろい事言うとんねんなお姉さん、しんちゃんも透明人間やあらへんよ……逃げ出したんや、あんたに勝つ為にな……」

「……つまりこういう事？さっき飛び回ってた『スウィートハット』に『ハリケーン』が飛び移っていたけど、それは『スタンド』で何かするつもりなのかと錯覚させる為？」

「それを教える義理はあるんか？」

「無いわね……で、どうあたしに勝つの？仲間でも呼ぶの？」

「さあ……『その時』が来れば分かるやろ……ウチは『その時』が来ないよういつちょ頑張るけどな……」

近距離パワー型の『スウィートハット』を発現させた

「これで決定ね……時間を稼げるだけ稼いで援軍が来るのを……」
「ルージング・エンド」！あのスタンドを沈めな……」

「おっと待ったー！」

藤方は杵島にビシツと指を差して大声で叫ぶ

「お姉さん、あんた年上やけど一個教えといたるわ……戦闘にせよ恋愛にせよ、考え無しのごり押しはようないけど……絶対そうや、そうやない思うんも駄目やで、思い込みによる言動や行動は失敗の素やで」

「フツ……何を言い出すのかと思えば……失敗？私に失敗は無い！あるとすれば！あんた達がこの私に立ち向かった事だあ！」

『ルージング・エンド』は『スウィートハット』に接近し、腹部に向かいストレートを放つ

音波の防壁を張るが、『ルージング・エンド』の能力の前にはそれは無力だった。放たれた拳は、的確に『スウィートハット』の腹部を捉えた

そして、『スウィートハット』に『ルージング・エンド』が抱き付いた

「ちっ……今、ほんまにヤバいなウチ……」

「そうだね、我が『ルージング・エンド』はパワーは弱い……ほぼ皆無と言ってもいい……だが、『ルージング・エンド』に触れた者は私が解除するか死ぬかしない限りは自力では決して抜け出す事は出来ない！たとえ最強と評される『スタープラチナ』とか『ザ・ワールド』とかという時を止める能力のスタンドでも、『ルージング・エンド』に触れてしまえば途端に沈んでいく！例外は無い！」

「せやな……あなたのスタンド能力、単体で勝てる奴なんかとてもやないけど考えられんわ……解除せえへん限り沈み続けるんならな……」

「逃れる方法は解除するか死ぬか、沈み込む途中でも完全に沈まない限りは助かるからね」

「ウチは……しんちゃんは逃げ出した言うたけど……遠くに行ったとは一言も言うたらん……」

『スウィートハット』の半身が沈み、沈んだ部分に相当する部位が泥がかかったような色となった藤方が喋る

「あなたの能力……確かに恐ろしいもんがあるけど……攻略不能やない……ただ……『一対一』では破れへんだけや」

「気付いてももう遅いよ……君は既に私のスタンドの術中にはまっているんだからね！」

「遅いのはあんたや……あなたは『大きな間違い』を気付かずに突

き進んだからな……」

「だから何言ってるの？無事なのはもう腕一本しか残ってないよ？
『ルージング・エンド』！完全に沈めなさ……」

下から深い刺突音がした

杵島はゆっくりと下に視線を向けると、腹部から刃渡り十数センチ程の『刀』が皮膚を突き破っていた

「あれ？」

若干透けているので実体ではなくスタンドの刀だ。それは間違い無い事だが、『誰のスタンドなのか』が分からなかった。『あの男』からの情報では刀剣のスタンド使いはいなかった筈だ

刺さっていた刀は引き抜かれる。今度はトドメを刺すつもりだ

「（マズい……『ルージング・エンド』は大きな物を沈めている最中は動きは遅い……）『ルージング・エンド』！解除なさい！」

『スウィートハット』を解放し、スタンドを自分の傍に立たせて後ろへ振り向く

脇差し程の長さの刀を持った、筋肉を削ぎ落とした体型の『ハリケ

ーン』が立っていた

『特別にタダで教えてやろう……私は、『遠隔操作型のハリケーン』だ！パワーは然程無いが移動スピードならお前のスタンドと同等、もしくはそれ以上に動ける！一〜二メートルがやつとだがな』

「な……何なの……聞いてないわよ！こんな形態！」

「そうやるうな……本体であるしんちゃんもついさっきこの『スタンド』に教えられるまで知らなかったらしいし……」

「大体遠隔操作の形態は既にあるじゃない」

『お前の言っているのは『群生型』の形態の事なら、その発言は的外れもいい所だ。近距離型にも幾つかの型があるように、『群生型』は『遠隔操作』の型の一つに過ぎないのだからな！』

『ハリケーン』の言い分は正しかった

そして、杵島は藤方が先程言った事の意味を理解した。しんのすけが逃げ出したのは、この場から離れて隠れる為だと

（射程は何メートル？パワーは人体を貫けるからそこまで離れていないでしょうね……）

『ハリケーン』は突きを放ち、左肩を貫く。引き抜く直前に『

ルージング・エンド』を出現させ、『ハリケーン』の刀を持つ手を胴体部分に触れさせた

「これで私の勝ち決定……さっきの不意打ちには驚いたけど私のスタンドは無敵……あんた達じゃどんな手を使ったとしても勝つ事な
んざ出来ないんだよ！」

「せやな……せやけど、あんた今隙だらけなの分からへんの？」

「へ？」

『スウィートハット』が横から拳を叩き込んだ

「残念やったな……ウチの『スウィートハット』は今普通に動かす事が出来るんよ、あんたが出してくれたんやからな……どうする？
またあんたのスタンドで沈めようとするん？そうしたら『ハリケーン』が自由になるけど……」

「ちょ……ちょっと待ってよ！分かったよ！あたしの負け！スタンドも解除する！」

両手を挙げ、降伏宣言をする

「随分と呆気なく降参したなあ……」

「元々依頼を引き受けたのは多額の報酬が魅力的だったからに過ぎないし……貴女達に恨みは無いし……自分がピンチに陥ったのに戦い続ける理由は無いよ」

「まあその通りやな……けどそれをどう証明するん？」

「はい」

『ルージング・エンド』を解除して『ハリケーン』を解放した

「ね？充分証明になるでしょ？あたしにはもう敵意の無いという証明にさ……」

『確かになるな……しかし逆に罠の可能性も強く感じられるな……』

「確かにそう思うよね？だけどさ、本当にあたしにはもう敵意は無いんだよ、無敵だと信じていた『ルージング・エンド』がこんな単純な方法で破られるとは思いつたし……」

「まあその通りやな……信じたるわ、あなたにもう敵意は無いのは誰でも今のあなたを一目見れば一目瞭然やしな」

「信じて貰えて良かったあ……それじゃああたし出て行くから」

「待てや」

『スウィートハット』で逃げようとした杵島の肩を擬音が出て来そ

うな程がっしりと掴んだ

杵島はゆっくりと首を後ろに向ける

「ほんま思い込み激しいなお姉さん、『敵意が無い言っんは信じた』
とは言ったけど、『逃がす』って誰が言ったん？」

「はい……誰も言ってません……」

「WRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!」

『スイーツハット』は杵島に拳のラッシュを食らわした

杵島彩美 - - 全治三ヶ月以上の重傷により入院。(どうにか)再起
不能にならなかったのは藤方曰わく『戦意の無い相手を再起不能に
するんは自分の良心が許せなかった』かららしい

TO BE CONTINUED

「あいつ等上手い具合にやってるかな……」

藤方はどうかは知らないが、しんのすけと琢磨は心配はいらないだろう。あの二人は十二分に頼りになる

だが、無傷で勝つというのは無いだろう。流石にそれは虫が良すぎる
最悪、俺一人で会場にいる敵をどうにかしないとイケなくなるが……

「……出て来いよ……俺をつけている奴……」

後方の物陰から、烏帽子のような紺色の帽子を被り、ベルトの金具のようなボタンのついた皮ジャンを羽織り、数珠のような首飾りをかけた20代前半程の男が現れた

「尾行するならもっと巧くやれよ、人が歩いているのに物陰に隠れているなんて不自然もいい所だろ」

「ごもつともだ……まあ半分冗談で行っていたからな……バレてい
いと思つてやつていたんだ……」

「それ聞いて安心したよ。あんな稚拙な尾行でバレないと本気で思
つていたんなら日本の教育を疑う所だった……で、一応質問。何故
俺を尾行する？」

「それを訊く必要性はあるのか？お前が一番それを分かっている筈
だからな……こいつを見ればな」

胴体が光沢のある灰色で、羽根が透明のウスバカゲロウが出現した。その腹部には、金属の筒のような物が括り付けられていた

「これがあんたの『スタンド』か……悪いがあんたと付き合っている暇は無いだよ」

「心配はいらない、何故ならすぐに終わるからだ」

接近する為に一歩進むと、地面に開いた『擗り鉢型の穴』に右足の爪先が入ってしまった

親指が何かに『挟まれた』ような痛みが走り、恐らく爪が割れたような音がした

「再起不能でいいみたいだからな。大人しくしてさえいれば命だけは助けてやるう、だが抵抗すると言うのであれば命の保証はしないぞ」

学園祭サバイバル？（後書き）

会場の外で襲ってきたスタンド使いを全て倒したと思いきや、まだ外での戦闘は続きます

彼は前回『矢』の所持者が連絡を取ったサバイバルの飛び入り参加者です

では、次回もお楽しみに

学園祭サバイバル？（前書き）

サバイバル戦に飛び入り参加した男のスタンドに襲われた除夜の運命は？

学園祭サバイバル？

挿り鉢型の穴にはまり何かに挟まれた足の指をどうにかしようと、俺は足を動かしたが、穴の中で俺の足の指を挟んでいる『それ』は俺を離したくないのか、更に力を加えたようで、指から感じる痛みが強くなった

しかも、その穴は足を動かす程どんどん広く深くなっている

人間の力で駄目なら『スタンド』でならどうかと考え、『プラネット・ルビー』を発現させ、足を握らせる。俺の『プラネット・ルビー』も近距離型。パワーなら人間より上だ。このパワーで一気に引っ張り上げれば……！

と、考えてみたが間違いだった

最初から全力で引っ張り上げようとするも、挟む力が更に強まり、決して外れなかった。どうやら抜け出そうとする力が大きい程それに比例する形で挟む力も大きくなるようだ

固定されてしまった以上、俺は能力を使用する事は出来ない。つまり俺は足を切断でもしない限りは、ここから一步も歩く事が出来ないという訳だ

そう、『このまま何もしなければ』だ

この穴の中にある存在は、足を『引く』と挟む力が強くなる。だったら、『押した場合』はどうだろうか？それをダメ元でやってみた

俺はこのまま爪先に力を込める。思った通り、足は何ともない。そしてスタンドの指を穴の奥に突っ込ませた。指にはやはり動く物が触れている

それを摘み、足と一緒に引き上げると、足の指を缺んでいる『何かを見る』

俺の足の指を缺んでいたのは、男の周りを飛び回っている『ウスバカゲロウ』同様に光沢のある灰色の、クワガタのような顎に太い胴体をした、所謂『アリジゴク』だった

そうか、俺はこれに噛まれていたのか。確認すると、アリジゴクを潰した。同時に、そのアリジゴクの巣は消える

噛まれていた足の指を見ると、水分を抜かれたかのように干からびていた。アリジゴクは自分の巣に落ちた虫の体液を吸うので、生體的に間違いはない。吸われた所は壊死した訳では無いので、ほっとけば元に戻るだろう

「ほう……これ程早く我がスタンド『ブラウン・シュガー』の幼虫から逃れる方法を見出すとは……あの男がお前に高額な報奨金をかける理由が今分かった気がしたぞ……近付かせて貰おう、お前のスタンド能力は対象が自分に近付けば近付く程その効力は無くなっていくみたいだな」

「……随分と知られているみたいだな……だがこれはご存じか？俺のスタンド能力が効力を発揮出来るのは……腕一本分の距離があれば充分だという事を！」

近付いてくる男を『軸』とし、俺は男から見て左後ろに瞬間移動し、男に拳を叩き込む

男は微動だにせず、拳は首に叩き込まれた。俺はそれに疑惑を感じた。まるで俺がどう動こうが問題にしていなみたいだ。そしてその理由が、すぐに分かった

中指辺りに先程と同じ痛みが走る。見ると、拳を叩き込んだ場所には『アリジゴクの巣』が開いていた

大体ながら分かってきたぞ、この男のスタンド能力が……

まずはこのアリジゴクを引っ張り出す事だ。アリジゴクを引っ張り出す方法は、先程やってコツは分かっている

手を伸ばそうとすると、男は俺の腕を殴りつけ、アリジゴクの巣を作った。男はアリジゴクの巣を少し広げると、アリジゴクを引っ張り出した

巣のあった場所から血が噴き出た

俺はどうか俺の拳を捉えたアリジゴクを引っ張り出して潰した。だが、男にアリジゴクの巣として開いていた穴から血は一滴すらも出ている様子は無い

「潰したのは失敗だったな……この幼虫の巣は幼虫の生きている場合のみ開いている巣だ、取り出して殺したら穴は完全に塞がるんだ

よ

男に掴まれている、俺の腕から取り出されたアリジゴクは動きが次第に弱々しくなり、絶命した

「えっとさ……訊いていい？あんたのスタンド……『ブラウン・シユガー』だっけ？その能力って……射程距離内にアリジゴクを生み出す能力……なのか？」

「惜しい、少し足りない」

「なら、そのウスバカゲロウから放たれる卵を自在に孵化させる能力か？そしてその卵が見えないのは単純に『大きさ』の関係だろ？多分顆粒くらいの大きさかな？」

「それなら正解。だが、分かるか？避けられるか？飛び散っている顆粒の卵を……」

はつきり言おう。出来ない

こんな攻撃分らないし分かった所で俺の能力を持ってしても避ける事も出来ない。ロンディネの『サード・アイ・ブラインド』なら確認は出来るだろうが、所詮そこまでだ。空气中に漂う大量の顆粒をどう避けると言うんだ

少なくとも今足のついてる地面に巣は出来ていないという事は、何かに触れている時は巣は作れないと見て間違いは無かるう

だがどうする？迂闊に動くとアリジゴクの巢に引っ掛かってしまう瞬間移動しても、攻撃をする為に止まらないといけないから……あれ？

(待てよ……もしかして……)

今の今まで思った事すら無かったが……もしかして俺の能力って、俺の思った以上に奥の深い能力なのか？

今思い付いた能力の使い方なら、あいつを倒す事が出来るかも知れない。上手くいくかは分からないが、このままでは絶対に勝てない。試してみる価値はある

そう考えている内に、俺の喉と頸動脈の辺りに『アリジゴクの巢』が開いた。どうやらもう時間をかけるつもりは無いらしい

巢からアリジゴクを取り出す為、手を伸ばす。俺はそれから逃れる為に男の右側に瞬間移動した。白倉の時にやったように僅かに移動するだけでは避けきれないと踏んだからだ

「瞬間移動が出来たな……だが忘れていないか？お前に俺のスタンドの攻撃を防ぐ手段が無い事を！」

俺は男の正面に移動し、胸部を狙って拳を放つ

「お前はアホか！同じミスを何回繰り返せば学習するんだよ！」

拳の届く予定位置に、アリジゴクの巣が開く。奴の顔は勝利を確信しているだろう

俺の拳は、俺の予定通りに、奴の予定を超えて

奴の胸部のアリジゴクの、『巣の右横』に着弾した。アリジゴクの巣はそこには無かったので、拳は普通に奴の体にめり込んだ

「グブオ！」

「ぶっつけ本番で出来るかどうか不安だったが……出来て良かった……」

だがまだ出来たとは信じ難い。白倉戦で見つけたあの使い方は、今まで使っていた方法での移動をほんの少し動かす程度にしかただけだ。最低でももう一度しないと、さっき思い付いたこの使い方が本当に出来るのかどうか確信は出来ない

出来たら勝って出来なければ負ける

だが、出来ない事を恐れては駄目だ。スタンドの強さは精神の強さで、スタンドの操作は機械の操作と同じだ

自信を持って！俺の『プラネット・ルビー』ならやれる！

殴り飛ばした男を見据え、俺はこう思った

学園祭サバイバル？（後書き）

『ブラウン・シュガー』の幼虫の習性や生態は基本的に普通のアリジゴクと大差ありません

スタンド名はローリング・ストーンズの楽曲から

除夜君が新しく見つけた能力の使い方は、思い付くよう思い付かない使い方だと思えます

それでは、また次回をお楽しみに！

学園祭サバイバル？（前書き）

『ブラウン・シュガー』 戦決着！

学園祭サバイバル？

奴はやや戸惑った様子で俺を見る

多分あいつは目測を誤ったとか、そんな事を思っているのだろうな。とんでもない事だ。狙いは完璧だった

『俺が放った拳が命中する時、俺が移動さえしなければ』だ

俺は至近距離まで奴に接近し、拳を打ち出す。奴は拳が着弾する位置に卵を孵化させ、巣を作り出した

拳が巣に入ろうとした瞬間、『能力』を使う事で巣と僅かにそれた位置に拳を着弾させる事に成功した

「よし……出来る……かなりの集中力がいるが、修業すれば比較的容易に出来るようになるだろう……」

「どうやら……俺の勘違いなんかではなく、本当に『動いた』んだな……」

「何なのか分かったのか？」

「ああ……お前の『プラネット・ルビー』の能力は「奴」から聞いて知っている。攻撃が当たる直前に瞬間移動をしたんだろ？それもほんの数センチのみ……」

「正解、もうこれであんたの『ブラウン・シュガー』だっけ？それ

の幼虫の巣には引つ掛からないよ？」

『巣』の設置は自動的なものではない。だからこの方法を使えばアリジゴクに引つ掛かる事はない

そう、これで奴のアリジゴク攻撃からは逃れられるが、少し計算を間違えたら攻撃そのものが失敗して大きな隙が出来かねんし、大体これだと狙った通りに攻撃する事も出来ない

奴が降参してくればいいのだが、奴はまだ勝負を諦めていないよ
うだ

奴は俺を見据えて、こう言った

「攻撃を食らった事に油断は無かった。だが、私はお前の事を見くびってしまったようだ、それについてはすまなかった」

言いながら、ポケットに手を突っ込む

奴は右足に『巣』を作り、そこにポケットから取り出した『細かく刻んだ消しゴム』を放り込んだ

「！」

右肩に、何かが飛んできて着弾する。皮膚や筋肉を突き破るが、骨

を破壊するだけの破壊力は無いらしく、そこで止まる

着弾した物が何か確認する為傷口に指を突っ込んでそれを取り出す。それは、先程奴が巣の中に放り込んだ『刻んだ消しゴム』だった

「知らないのか？アリジゴクというのは自分が食べる事の出来ない物が巣に入ると巣の外へ放り出してしまふ。または体液を吸い尽くした獲物を巣の外へと放り出す。その習性が私の『ブラウン・シユガー』の幼虫にもあるだけだ！」

つまり敵が射程距離外に逃げたとしても殺傷は充分可能という訳か

確かに脅威ではあるが破壊力は飛ばした消しゴムで貫通せずにくみ込むだけだから……充分大した破壊力だ

今度は釣りに使う鉛の錘を取り出す。そして左手首に巣を作って放り込む

巣に錘が入った瞬間、瞬間移動で奴の右側に回り、拳を打ち出した。勿論アリジゴクに引っ掛からないように着弾する前に僅かに瞬間移動してだ

「え？」

俺の腹部に何かが貫通した

見ると、奴の腰には巣があった。方向で計算すればこの向きでその巣から飛ばせば確かに命中した場所にヒットする

だが、奴は何時『その巣に何かを入れたのだ』？スタンドは一人一能力だ。奴の『ブラウン・シュガー』は幼虫の巣を作る。それ一つだけだ。まさか巣と巣がワープゾーンになつてる訳じゃあるまいし

……

俺は奴から離れた

「距離を取るか……だがそれがどうした？」

「こつするんだよ！返すぜ消しゴム！」

消しゴムを飛ばした

が、狙いが外れて奴から前方約一メートル前の地面に着弾してしまつた

「下手だね」

「球技苦手なんで」

奴は溜息をつき、俺の投げた消しゴムを拾い、それを自分に向けて飛ばした

着弾する前にアリジゴクの巣が出現する。そして、消しゴムが入った瞬間、奴は左手をその巣を隠すように翳した

すぐに左手を下に向ける。掌から消しゴムが放り出された。その消しゴムは右膝に作られた巣に入り、奴は素早く巣を俺の方へと向ける。そこから消しゴムが発射された

俺はどうか瞬間移動で避ける。命中した鉄筋コンクリートの壁が吹っ飛んだ

（成程……ビリヤードとかの要領で反射させていたのか……それに同じ弾丸（消しゴム）で今度はコンクリートの壁を粉々にしたって事は反射する事で破壊力を上げていると解釈していいな。反射すればする程、その速度は上がっていくって事が……）

「さあて、行くぜ」

ポケットから小石や鉄くず等を取り出して体に作った巣に次々と入る。入ってきた異物を、幼虫は外に放り出す

前方から次々と放たれる弾丸に、俺は接近しながら顔面に飛んでくる小石等を弾き飛ばす。手足に飛んできたのはそのまま掠るか貫通し、胴体に飛んできたのは出現させたアリジゴクの巣によって反射される

反射された物を、奴は地面を利用、そして自分の四肢や関節を動かす事で何回も反射させ、再度俺に向けて飛ばした

瞬間移動で回避するが、内一発が俺の右肩に当たるその直前に、アリジゴクの巣が出来、そこに入った

俺はその瞬間、能力を使った。ただ使うだけでなく、何処に移動したのか分からないように移動の終えた瞬間、中のアリジゴクが異物を放り出したと同時にまた瞬間移動をした

「ゴ……」

奴の後ろから、反射した物が奴の喉近くに飛んできて貫通。俺の体にあつた『巣』は消滅した

飛ばしている物は普通の物体だし、『ブラウン・シュガー』の巣は本体自身の意思で設置するものだ。つまり飛んでくる方向を計算してやっているという事

だから計算が出来ないように巣に物が入ったと同時に移動し、発射された瞬間にまた移動した

「正直……相当ギリギリだった……少しでも間違えていたら負けていたぞ……」

だがギリギリまで追い込まれたからかそれまで別々に考えていた体

を動かすのと能力を使うのが一緒に出来るというのが思い付けた。
その辺は感謝しよう

「う……ぐ……」

「どうやら致命傷はどうか避けているみたいだな……救急車もつ
一台呼ばないとな……」

アリジゴクの男 - 本名：蔵内萬^{マン}23歳

スタンド名：『ブラウン・シュガー』

再起可能

応急処置をした後に会場入口の前へ来ると、そこには琢磨としんの
すけ、藤方と宝来が既にいた。どうやら俺が最後のようだ

「除夜のお兄さん、あちこち怪我してるけど大丈夫なの？」

「怪我の具合なら琢磨とかも同じくらいだろ、心配するな、まだ戦
える。所でななこさんや優太達は？」

「三人は既に避難させています」

「そうか、じゃあ宝来、お前も」

「避難なんかしないよ、あたしだって戦えるから」

「いや無理だろ、この中にいる奴等は常識を越えた能力を……」

「知ってるよ、『スタンド』っていうんでしょ？」

「ああ、だからお前は引っ込んでろ」

「スタンドの事を知っているのは突っ込まないのね」

「大方琢磨が教えたかなんかだろ？知ってるだけじゃ勝てないんだよ、スタンド使いは……」

「えっと……除夜君、その事なのですが……」

「何だよ」

「彼女もスタンド使いなんです……」

は？

「マジで？」

「マジです……所で稲庭さんは？今何処にいるか知ってますか？」

「あいつは火傷を体中のあちこちにこさえてな、俺の判断で今保健室で休んでる……行くぞ、この中にいる奴等を倒せば俺達の勝ちだ」

「ええ」

「おお！」

『ああ』

「うん」

「せやな……」

残る敵が待ち構えているであろう会場の入口の扉を開けた

学園祭サバイバル？（後書き）

サバイバルもようやく終盤戦に突入しました

果たして、除夜君達は無事大学から出られる事が出来るのでしょうか

それでは、次回も是非ともお楽しみ下さい

学園祭サバイバル？（前書き）

敵スタンド使いも残るは二人！

学園祭サバイバル？

「ねえ夏帆……」

「何？」

「あいつ等何時戻ってくるの？お姉さん待ちくたびれたんだけど」

「それなんだけどさ……もしかしたら外の杵島さん達、もうみんな倒したのかもね」

「じゃああたし達待ち損じゃない」

「だけどその可能性は低いだろうね。それなら連絡がある筈だから。だからまだ戦闘中なのかも……」

夏帆が自分の考えを口に出していると、一葉の携帯に着信音が鳴った

『今日は、高橋姉弟』

自分達にスタンド能力を与え、自分達に除夜を襲うよう命じた男だった

「あんたか……何？いきなり電話なんかかけてきて……こっちは夏帆の言った通り連中を待っていて若干イライラしているのに……」

『それは済まない、だが外も少し君達にとって予想外な事が起こっているらしいのでね……それを伝えておこうと……』

「下らん前置きはいいからさっさとそれを言いなさい。つまらない事だったら即切るわよ」

『そうだね……君達姉弟以外にこの学校へと送り込んだスタンド使い四人と途中から入ってきた一人……まあ彼もスタンド使いなのだが……その五人全てやられたよ。もつとも連中も無事では済まずかなり負傷してしまっているがね』

「夏帆の言う通りになったわね……それで？」

『残る敵である君達を叩く為にここに帰って来ている……』

「だろうね……それで？そんな事を伝えにわざわざ連絡してきたの？」

『だろうね。それは百も承知しているだろうね……僕が懸念しているのは君達がその事実を知り、自棄になるかも知れないという事だ。そこで、君達の士気を上げる為に提案をしたい』

「提案？」

『瀬上除夜に掛けられた懸賞金を三千万に上げ、本来六等分の予定だった配分を君達二人の配分、つまり二等分にしよう。他の彼の仲間に関しては会場に入ってきた人数×百万円……どうだ？』

「いいの？」

『何が？』

「賞金の取り分は全員がそれで納得したじゃない。それをいきなり変更って……」

『問題はない筈だよ？懸賞金っていうのは成功報酬なんだから……言っておくがこれだけの大金を懸けるといふ事はそいつがそれだけ危険だというのを示しているんだからな、最大限気を付けるよ』

「……前払いは駄目？」

『ついさっき懸賞金は成功報酬って言わなかったっけ？』

「冗談よ冗談。そんじゃね」

「姉さん、来たみたいだよ」

通話が切られるのと、会場の入口のドアが開こうとするのは、ほぼ同時だった

会場のドアを開き、中へ入る。電気は消されており、中は薄暗い。床にはそこは琢磨達から話に聞いた通り、底に溜まる形で白い煙が漂っていた。煙越しに見える人影は、観客のようだ

ここでじっとしてても始まらないので、中に入る。煙の中に足を突

つ込むと、聞いていた通り水の張った田んぼの中に足を入れたような感触がした。全員入ると外から誰も入ってこれないようにドアを閉めて鍵を掛ける

同時、ギター之音が響いた。そして、天井のスポットライトが、リングに向けて照らされた

「よくぞ来てくれました！高橋一葉と！」

「……高橋夏帆の」

「二重奏コンサートホールへ！」

妙な形をしたギターを持った女と、甲羅の頂の穴から白い煙が噴出しているゾウガメが足下にいる男が、リングの上に立っていた

女の方はテンションが高く、ノリノリなのに対し、男の方はややげんなりした表情だ。渋々付き合っただけで行った感じである
よく見たらこの二人の顔は結構似ている。恐らく姉弟なのだろう

「あなた等が本体？」

「その通り！あたしは高橋一葉、そしてこいつは弟の高橋夏帆」

「宜しく願います」

（宝来さん……貴女のスタンドであの亀の甲羅の穴を塞げます？もしくは二人の内のどちらかの動きを封じるとか……）

（やってみる……『インフェミー』）

宝来の足下に大きな芋虫のスタンドが出現した。これが宝来のスタンドらしいな

『インフェミー』は俺の頭の上まで上り、二人に向かって液体を勢い良く吐き出した

「何するか知らないけどさせないよ？」

一葉はギターの弦を数回弾く。リングに倒れていた覆面レスラーが二人の壁になるように立ち塞がった。『インフェミー』が噴き出した液体は覆面レスラーにかかる

「教えてあげよう……我がスタンド『マッドキャット』は弦の振動により人間や動物を操る事が出来るの！」

まあ『音』は『空気の振動』だからな。音が届く範囲なら操れるだろ

琢磨に聞いた所体を壊さない為のリミッターも外すみたいだからただ操る能力じゃないのは確かだな

そして、優先して倒すのは姉の方だとしてもこの煙は厄介だな……

「夏帆、『トータス』の出す煙が薄まってきたわよ」

「うん」

土色の水の入った給水器を取り出し、亀に飲ませる。中の水は凄いですピードで無くなっていき、全部飲み終わると甲羅の頂から勢い良く煙が噴き出した

「それじゃ行くよ……病院かあの世で盛大な拍手を頂戴ね……」

『マツドキャット』を弾き始めると同時に、倒れていた観客が一斉に起き出した。琢磨達から聞いた通り床下に煙が充満しているにも関わらず普通に、いや、かなり速く動いている。どれだけパワフルなんだよ

「グギイヤアア！」

「ブジャアアア！」

観客達は獣のような雄叫びを上げ、襲い掛かって来た

「あたしの兵隊はまだ負けていないからね」

「グギイヤアア！」

今ので、殴り飛ばした観客達が息を吹き返した

急所に当たらないようにして手加減も若干してはいたがし過ぎていたか？いや、確かに相応のダメージは見た限りある。つまりー

「随分質の悪い能力だな……痛覚を感じないようにしているのか……」

「ピンポーン、痛みの感じない、故に殺すか重傷を負わせるかしない限りは決して襲い掛かる事を止めない正に理想の兵隊だよ……」

「もう一個あるだろ？お前をぶっ倒す事だ」

「ごもつとも……そしてそれが一番手っ取り早い方法だ……けれどね、あたし達がそれをさせると思ってる？」

これっぽっちも思っていない。こんな事はスタンドの知識を持っている人間なら誰でも思い付ける。対策も考えられている筈だ。『手っ取り早い』と『簡単』は違う

周りには本体の操る痛みを感じない兵隊達

床下にはまともに動けないよう弟が煙を亀から放出させている

「最悪だ」

これらを見て今の俺達の状況を述べるには、この一言で充分過ぎた

学園祭サバイバル？（後書き）

宝来のスタンド名は会場へ向かう最中に決めました。スタンド名はローリングストーンズの楽曲から

リミッターを外して痛覚を無くした兵隊にまともに身動きが出来ない現状ですから、もしかしたら最悪よりかなり悪い現状かも知れませんが、せんね

では、次回もお楽しみに！

学園祭サバイバル？（前書き）

知性も痛覚も無い兵隊とまともに身動きのとれなくする煙を相手に、
除夜達はどう立ち向かうのか？

学園祭サバイバル？

「グガジャアアアアアア！」

「ゴルルルオ！」

観客達は俺達に襲い掛かってくる。その姿に理性とか、そういったものは感じられない

痛覚が無いのもあってどれだけ殴ろうがすぐにゾンビみたいに復活するし、体を守る為のリミッターが働いていないから、自分の強い攻撃の威力に体が耐える事が出来ず、腕や足にダメージを負っていた

これで操られている連中が無事な筈はない。目に見えて明らかにダメージがある。しかも本人にはその痛みを感じないから、当然ダメージに気付かない。観客達を助けるには一刻も早く本体を倒さないといけないのに、それを観客達が邪魔をしているという構図が出来上がってる

それだけじゃない。厄介なのは弟のスタンドだ。亀から発生する『煙』が、こちら側の動きを鈍くしている

（相性いいなこの姉弟のスタンド能力……一方が人間をパワーアップさせて操作してもう一方が相手の動きを鈍くするか……）

「除夜君」

傍にいる琢磨が、俺に耳打ちしてきた

「どうした琢磨」

「宜しければ、僕が他の人呼んできましようか？」

「……構わないが、大丈夫なのか？二重の意味でロクに動けないんだぞ俺達」

「僕のスタンドはパワー型じゃないし能力も戦闘向きとは言い辛いですけど少なくとも下に溜まってる『煙』の問題はクリアー出来ますよ」

「それはこの煙の中を普通に歩けると解釈していいんだな？」

「『普段通り』ではなく、『君達よりかは』ですが……」

「信じていいか？」

「ええ」

自信ありげに応える。こうなったら俺が出す言葉は決まっていた

「分かった。呼んでこい。最悪誰も呼び出しに応じなかった場合そのまま逃げても構わないからな！宝来！お前は琢磨が出るのを援護しろー」

「ラジャー！」

「随分的確な指示を出すね……どうしようか？彼は無視して瀬上除夜を叩くのに全力を出す？元々それが『あの男』からの最優先指令だし……」

「いや、外に出られて仲間呼ばれたら面倒だしね。逃げようとするチビも叩く」

数人の観客が琢磨が動く前に襲い掛かる。宝来は『インフェミー』で襲い掛かる観客達に凝固液を吹きかける

凝固液を掛けられた観客は、身動きが取れなくなった

琢磨は直後に出入口に向かって駆け出した。それを見て、少なくとも高橋姉弟は目を丸くした

この身動きの上手く取れなくする煙が床下に漂っている中、『じく普通に歩いていた』

（成程……その手があったか……）

足をよく見てみるとその理由が分かった

琢磨は足を前に動かす際に、『前に動かす足の膝から下を自分のス

タンドの空間に持って行って前に動いた時に戻して』を繰り返していた

確かにそれなら普通に……と言えるのかは微妙だが、『煙』の影響はあまり受けずに動く事は出来る

俺は琢磨がこれが出来る事に驚いていた。つまりこれは、足を動かす度に持って行って戻して……を繰り返している。それも駆け足で理屈自体は単純だが、おいそれと出来る事じゃないだろ

させじと高橋一葉は観客の半分程を琢磨を襲わせる。『インフェミア』が液体を吐き出して動きを止めているが、数が多過ぎてそれでは対処仕切れていない

「余所見していいのかな？」

「ウバシヤアアア！」

後ろから観客が一齐に襲い掛かって来る。俺は瞬間移動で観客の後ろに回るが、それを待ち構えていたかのように物陰に隠れていた観客が襲い掛かった

俺は『プラネット・ルビー』でラッシュを繰り出したが、半数が跳び、もう半数が伏せる事で攻撃を避けた

今まで無かった回避の動き。多分本体の一葉自身、これ以上やたらと喰らわせたらヤバいと判断したのだろうか

それでも操作を止める事はしようとしてない。だから奴をどうにかせねばならないのは変わらないのだが、今の所俺達ではどうにもならないというのが歯痒かった

除夜君達が操られた観客達と戦っている中、僕は自分に襲い掛かる観客の攻撃を宝来さんの助力と自分のスタンド『SHUFFLE』の能力を用いて回避しています

『SHUFFLE』はつい先程より素早く、より多くの質量を持っていく事が出来るようになっていて、今やっているような短い間隔での能力の行使も出来るようになっていました

実戦を通じて僕もスタンド使いとして成長したようで、その現れなのか『SHUFFLE』自体の外見も多少変化していました。後頭部から腰にかけて三葉虫らしき化石が背骨に沿って引っ付いていて、両肩の首筋から脇にかけては昔のオウムガイの化石がついてました。他にも腕のテーピングが腕全体となっていました

それはさて置き、『非常口に僕の歩幅で大体百歩前後進めば到達するであろう地点』に到達した僕は、高橋姉弟へと体を向けました

「バカじゃないのあんた……何で立ち止まって私達の方を向くの？もしかして「アツカンベー」とでもするつもり？」

「そんなつもりはありませんよ……」

「じゃあ何のつもり？」

「僕は最初から仲間を呼ぶ為でもなく逃げる為でもなく……違う目的でここを目指していた……と言ったら？」

「ふざけんのは止めなさい。目的は他に何かあるの？」

怒気を含んだ声を放たれました。僕は気にせずに続けます

「最初からあなた達を倒す可能性を高める為に……ここへ向かっていたとしたら？」

その台詞に、一葉さんは深々と溜息をつきました

「ガツカリ……瀬上除夜以外でも一人叩けば百万貰えるっていうからどんな連中かと思えば……期待外れもいい所ね」

「姉さん落ち着いて、もしかしたら本当に何か企みがあつて誘っているのかも知れない」

「じゃああなたにあいつが何を企んでいるのか分かるの？」

「分からないから今は瀬上除夜達を優先して……」

「あいつから殺す！そうしたら本当に何か企んでいたとしても何の問題も無くなる！」

一葉さんは『マッドキャット』を弾きます。僕の近くにいた観客達が襲ってきました。本当に僕の予想通りです

観客達が攻撃を繰り出した瞬間、僕は右足の爪先を残して他を全て『SHUFFLE』の空間へと持っていきました

解除と同時に何かが破壊されたような盛大な音が後ろから響いたので振り返ってみると、観客達の攻撃で会場の壁に見事な穴が開いてました

僕は『SHUFFLE』を出し、非常口の扉を開けました

結果どうなるかと言つと・・・

「しまった！」

非常口と壁に開いた穴から空気が入り、溜まっていた煙が抜け出ていきます

「換気をする時は……窓は二つ以上開けた方がより効率的なんですよ？」

そう、僕の狙いは最初から『空気を入れ替えて煙を外に逃がす』事

だったのです

除夜君達には騙してしまつて済みませんでした、あの時『空気を
入れ換える』とただ言っただけでは、あの人は観客を使つて全ての
出入口を塞ごうとしたでしょう

だから僕は除夜君達に『誰かを呼んでくる』と嘘の提案をしました。
そして除夜君は了解し、指示を出してくれました

「観客を使つて追つてくるだろうとは容易に予想出来ましたからそ
れを逆に利用させていただきました」

「してやられたね」

「この卑怯者が……」

「文句は言わせませんよ、騙すのは立派な兵法ですからね」

学園祭サバイバル？（後書き）

『敵を騙すにはまず味方から』って言葉あるけど、まさにそうになりました

スタンドの外見の変化は原作にもあったので少しやってみました

では、次回もお楽しみに！

学園祭サバイバル？（前書き）

琢磨の策によって攪拌した『トータス』の煙

しかし、まだ手を隠し持っていて……

学園祭サバイバル？

「お、煙が薄なったせいかさつきよりかは大分自由に動けるで！」

『私の作戦勝ちだな』

「てめーは何もしてねーだろ……まあそれはいいとして……よくやった琢磨！」

「よし、これであの煙を噴き出す亀のスタンドは弱体化したね」

「まあな……だがこれはさつきよりかは『余裕』が出来ただけでまだ俺達が勝った訳じゃ無いからな……おい琢磨、戻って来い！」

「『まだ』？あんだ……もしかして今、『まだ』って言わなかった？」

「言ったが……どうした？」

「へえー……『トータス』の煙を攪拌させた程度で、もう私達に勝てたも同然って思っているの？あんだ達……」

高橋一葉は『マッドキャット』を弾く指の速度を少しばかり早めた

「そりゃ換気して夏帆の『トータス』から噴出される「泥水」を弱くするっていう発想には一杯食わされたけどさ……『それで』？」

嫌な音が耳に入った

音源へと顔を向けると、観客が琢磨の頭をぶん殴っていた。リミッターが外れた人間の拳を食らって無事で済む筈もなく、頭から血を噴き出しながら倒れた

「あたしの『マッドキャット』はこの通り、何の異常もなく使えるよ？」

高橋一葉は弦を弾く指の動きに強弱をつける

ぐったりと倒れている琢磨を、観客達はぐるりと囲った

「琢磨は人質か何か？」

「人質？とんでもない。変な事が出来ないよう囲んでるだけよ。大
体人質兼兵隊なら充分間に合っているわ」

「その人質兼兵隊つてのは、お前が今操っている無関係の観客の事
か？」

「ええ……その気になれば互いの首を絞めさせる事も可能なのよ……
…無論、君達ごとね……夏帆、今度は攪拌されないよう『トータス』
に今までよりも濃度の濃い「泥水」を与えなさい」

「分かった」

今までのよりも濃い色合いの泥水の詰まった給水器を『トータス』に与えようとして

「『インフェミー』！」

宝来のスタンドが給水器を持つ手に向かって凝固液を吹きかけた

固まる前に急いで与えようとするが、させじと『ハリケーン』がコインを飛ばして給水器を破壊した

『どうだ！』

「流石はオラのスタンド……ナイスだぞ！」

『活躍したんだから報酬よこせ』

「今言うかそれを！」

「だから簡単に……いやもういい……兵隊達！瀬上除夜達を押さえないさい！死んだとしても構わない！」

観客達が俺達へと向かってくるが、その動きは緩慢だった

動きが痛々しく、昔テレビで見た人型ロボットのように鈍く、それ

も次々に倒れていった

「くっ……こんな時に……」

「痛みとかを無視した動きをして俺達からあれだけ攻撃を食らったんで限界が到達したんだ。痛覚が無いのはほんの一次的なら確かに強味だろうけどそれが長く継続したら最早剥き出しの弱点以外の何でも無い。人間の体を都合良く考えたあんたのミスだ」

寧ろ今まで持った方だとも思う

高橋一葉はキョロキョロ見回すが、自分が操れそうな兵隊はもう数える程しかおらず、しかもその僅かな兵隊もしんのすけ達に叩きのめされた

弟は『インフェミー』の凝固液で片手を固定されている

「あたし達は完全に劣勢……て訳ね……兵隊はもう使えない、スタンドの正体もバレた、しかも夏帆はロクに動く事は出来ない、仲間はまだもういない……でもさ……まだ調子に乗るのは早いからね」

自分達が不利な状況である事を認めている。だが、全然諦めていない。まだ手があるのか？

「『鼯鼠猫を噛む』って諺知ってる？追いつめられた者は時として

自分を追い詰めた者を殺してしまう事もあるんだよ……夏帆、少し痛いだろうけど我慢してね……それで済んだら……あんたが決めなさい」

「『あれ』をやるつもりなの？」

「しゃーないでしょ。あたしだってやりたくないわよ。でも……やらなきゃいけないからね」

ネックから一本の弦を抜き、それを本体自らに接続。『マッドキャット』を弾き始めた

「キエエエエ！」

奇声に近い雄叫びを上げ、『マッドキャット』を振り下ろし、弟の片手についた『インフェミー』の凝固液を破壊した

「痛たた……」

自由になった手を少しさすった後、新しい給水器を取り出し、『トータス』に与えた

俺は給水器を破壊しようとするが、横から一葉に『マッドキャット』でぶん殴られた

「悪いけどさせないわよ……」

「『インフェミー』！」

『インフェミー』は一葉に凝固液を吹きかけるが、一葉はそれを素早く避け、『インフェミー』の近くにまで接近した

『インフェミー』は一葉に顔を向け、凝固液を吹きかけようとするも

「遅い！」

『マッドキャット』を振るい、『インフェミー』を吹っ飛ばした。宝来はフィードバックで弟のいるリングの上まで吹っ飛ばされる

「宝来！」

「余所見していいのかなあ！」

『マッドキャット』を絶え間なく振るう高橋一葉。最早『近距離パワー型スタンド』のそれとしか思えないスピードとパワーを持つ攻撃を、何発か食らってしまう

俺の頭を狙って振り下ろされる。同時、『ハリケーン』が俺を後ろ

に引つ張つて、『スイートハット』が高橋一葉を殴り飛ばした

「助かった」

『オタスケ料十億万円分割払いも可』

「痛いなあもう……意識が飛ぶかと思ったよ……」

口から血を流しながら、平然とした様子で立ち上がった

「おい……あなたの『マッドキャット』……もしかして自分にも」

「そう、『マッドキャット』は音で操作するよりも弦を対象に直接繋げた方がより精密に脳や神経に働きかける事が出来るからね……」

笑いながら解説する

ある意味スタンドの原則である『本体との距離と精密動作性の反比例』の具体例の能力だな

「まだ攻撃は続くよ瀬上除夜君！」

『マッドキャット』を俺に向けて振り下ろした

「ウチらどうしたらええんやろ？除夜の兄さんの方は足を引っ張る形にしか……」

「うーん……」

『私に良案がある』

「何や？」

『私としんのすけだけでは無理だ。全員で……』

「……全員で？」

『除夜を裏切つて不意打ちでトドメを刺し、相手側へ寝返る』

「……しんちゃん、このイノシシウチの『スイートハット』でたこ殴りにしてええ？」

「やめてよ莓ちゃん、本体オラだから全部オラに返ってきちゃうよ」

「せやな……」

『宝来瑪瑙を助けて残り一人を片付けたらどうだ？』

「それを最初に言え」

しんのすけと藤方は、宝来と夏帆のいるリングへ顔を向ける

『トータス』は「白い煙」を甲羅の頂の穴から噴き出しているが、その煙は何処かおかしかった

噴出した煙は片栗粉で滑りをつけたあんかけのように穴から甲羅に沿って流れている。それだけでなく、まだリングから煙は流れ出していない

『トータス』の煙の出が悪くなると、新しく先程と同じ色の濃さの「泥水」を取り出して亀に飲ませた

学園祭サバイバル？（後書き）

『マッドキャット』は弦を弾く時に生じる振動で人を操りますから、これくらいなら出来ます

『マッドキャット』も『トータス』もまだ終わりません

では、次回もお楽しみに

学園祭サバイバル？（前書き）

負傷していく仲間達

果たして、除夜達はどう立ち向かっていくのか

学園祭サバイバル？

「キヤアアア！」

奇声を上げながら『マッドキャット』を振り下ろす高橋一葉。俺はスタンドの腕でガードするが、その際に生じる衝撃が俺の腕に来る

(近距離型のハリケーン並のパワーに動作一つ一つが俺の『プラネット・ルビー』クラスのスピード……しかも精密性もプラスされている……距離を置こうとしてもそれをさせてくれない……)

「ほらほらどうしたの除夜くん、ダメージを負い過ぎたのか動きが鈍くなって来たかなあ？」

挑発的な言葉を口にしながら、自分に接続している『マッドキャット』の弦をネックから絶えず弾きながら攻撃してくる

何度も防ぎ続けている内に俺は奴のスピードに慣れてきてダメージの少ない防ぎ方を理解し始め、攻撃の殆どを防げるようになり、その際に来るダメージも少なくなった

だが油断は禁物だ。こいつのスタンドは何をやらかすか分からない
右腕狙いでスタンドを振るう高橋一葉。俺はその攻撃をスタンドの左手で防ぐ。途端、高橋一葉の口元が少しばかり緩んだ

『マッドキャット』を受け止めている『スタンドの左腕』を、『生身の拳』で殴りかかってきた

どう考えても不自然過ぎる。生命力の像であるスタンドは、スタンドでない限り物体では攻撃出来ない。それは肉体も例外ではない

こんな怪しい攻撃をわざわざ受けてやるつもりはない。俺は手首に力を込めて『マッドキャット』を弾き飛ばし、瞬間移動で後ろに回った

「あら……中々いい判断をするわね……」

「あんたのギターが何やらかすか分からないってのはもう既に分かっているんだ。どんな動作でも見逃したらどういった脅威に繋がるか分かったもんじゃ無いからな」

そしてそれは警戒し過ぎでは無かった

俺に殴りかかった奴の拳には、マッドキャットの「弦」が一本巻き付いていた。スタンドに直接攻撃する為に巻き付けたのだろう

(時間を掛けるのはマズい……だが焦ってはいけない……あの亀のスタンド使いはしんのすけ達に任せておくとして、こいつをどうにか倒さなくては……)

『トータス』の甲羅の頂から流れていく煙は、底の方で少しずつ広がっていく

しんのすけと藤方は全体に広がる前に本体を叩こうとリングに駆け寄る

「僕ってさ、ひよつとしたら運がいい方なのかな？」

夏帆は近くに倒れている宝来を自分の方へ寄せて襟を持ち上げると、ポケットから自転車かバイクかの鍵を取り出して頸動脈辺りに当てた

「言っとくけど動くなよ？この女の頸動脈を掻き切られなくなかったらね……」

口角を上げて、足を止めた二人へ言う

「何言うとんねん？あんたのスタンドから出て来る煙は今ようやつとリングの外に溢れたばっかやん？ボコボコにされと無かったら大人しくその人解放して降伏せいや」

「悪いけどそうはいかないよ？そっちのしんのすけって子のスタンドは何してくるか分からないし……ボコボコにするって言っても二人共この距離じゃ僕を倒す程のパワーを繰り出すスタンドは出せないでしょ？」

二人と夏帆との現在の距離は、二人のスタンドの近距離パワー型の形態の時の射程距離以上。つまり、到達すら出来ない

『スウィートハット』の超音波なら難なく到達は出来ると思うが、それでは宝来も巻き込んでしまう

「大丈夫。この煙が広まりきったら解放するから。言っておくけどさつきみたいに攪拌しようと考えても無駄だからね。僕も自分のスタンド能力の研究はしていてどれだけの濃度ならどれだけの風速の風で吹き飛ばされずに済むかとか、そう言うのは粗方把握している。今これから出てきている煙は台風レベルの風が吹かない限りは吹き飛ばしたりするのは不可能だよ」

それではリングに近寄ったら厄介だ。先程の「煙」でもまともに身動きが取れなかった。それが「濃度」が強くなったら足が取られて一歩も動けなくなってしまうだろう

「まあ、濃度を濃くした分この通り広まるのが遅くなってしまっただけど……」

夏帆は『トータス』を頭上に持ち上げる。相当重いらしく、キツそうな顔をしていた

そして、『トータス』をしんのすけと藤方目掛けて投げ飛ばした。

ぶつかるかどうかの所で『ハリケーン』がキャッチして床に置いた

「こつすれば……その欠点を少しでもカバーする事が……出来る……」

「何で投げたん？この亀の足は飾りなんか？」

「いや、歩けるよ。ただ、かなり鈍足で……」

「ほほっ……」

藤方はピッと夏帆に指を差した

「『策士策に溺れる』とはこの事や！あんたはこの亀投げ込んでウチ等の動き封じよ思ったみたいやけど、それはあんたはウチ等の目と鼻の先に自分のスタンドを投げ込んだいう事！つまり、これはウチ等がどうとでも出来るいう事や！」

「まあそれは事実だね……それでどうする？まさか『トータス』をこつちに投げ返すの？」

「そんな頭の悪い行動起こさん。根本的解決になつとらへんしな」

「じゃあどつするの莓ちゃん？」

「せやな……手っ取り早くぶつ壊せばええんちゃうか？」

「おお、莓ちゃん頭いい！」

「言っとくけど、それは頭のいい人間の発想じゃないから……」

夏帆は突っ込みを入れた後意地の悪い笑顔を作った

そしてー

「いいよ……壊してみなよ」

余裕そうにこう言った

「後悔すんなや」

「君達が後悔する事になると思うよ？これは僕なりの親切心からの忠告のつもり」

聞く耳もたず、『ハリケーン』と『スイートハット』は拳のラッシュを食らわせた

「何なの……これ」

「全然……ビクともしとらへん……」

二つの近距離パワー型スタンドの連続攻撃を食らっても、『トータス』には罅一つ入ってなかった。逆にしんのすけと藤方の拳の方が傷付いていた

「パワーもスピードもあまり無いけど頑丈さだけはトップクラスのスタンドだと思っているよ……物理的な破壊はほぼ不可能で、動きを鈍くする煙をその液体のある内は延々と出し続ける……」

「じゃあさ……元々動きの鈍いスタンドとかがあなたのスタンドの出す煙の底でゆっくり動いている場合は……どうなるの？」

宝来が夏帆に質問した

リングとその周りに充満している「煙」から、『インフェミー』が出て来て『トータス』の甲羅に凝固液を吹きかけた

甲羅に掛かった凝固液は、固まって頂の穴を塞いだ

「パワーもスピードも無いって言うのがかえって良かったよ……地中のミミズみたいに通常のスピードで煙を分けながら進めるもんね」

「お前……何時から目を覚ました？」

「あんたが今私の首に突き付けている鍵の先端が触れたと同時に……油断させる為に気絶しているフリをしていたの……まあこれであんなスタンドから煙が噴出されなくなった……」

「それが？確かに『トータス』はお前がスタンドで塞いだ穴を開けない限り煙を出す事が不可能となった……だが煙が無くなった訳じゃない！あいつ等が自由に動けないのもお前が人質だという状況に何の変わりはない……」

宝来は夏帆の顔に頭突きを喰らわせた

「気安く人に触らないで、汚らわしいから」

「痛え……」

痛々しく鼻血を出している鼻を押さえている夏帆の髪を掴んだ

「トドメに後一発喰らって貰うわ……大丈夫、素人の、それも生身の女の子の攻撃だもん。死んだり再起不能になったりはしないでしょ」

宝来は右膝をゆっくりと上げ、夏帆を思いつ切りそこに叩き付けた

この一撃で夏帆は戦闘続行不能となり、『トータス』は加湿器に戻り、煙は消え去った

「確か……膝とか肘とかって……殺傷力高いんだよね？」

「よくは知らんけどそう聞いた事はある……」

鼻血を出しながら気を失っている夏帆と、右膝にその血が付着している宝来を見て、二人は若干戦慄した

学園祭サバイバル？（後書き）

高橋弟をどうにか撃破

残る敵は高橋姉一人

次回、遂に決着（予定）！お楽しみに！

学園祭サバイバル？（前書き）

マッドキャット戦、学園祭サバイバル編終結！

学園祭サバイバル？

「ゴラァ！」

隙を作って高橋一葉の腹をぶん殴り、数メートル後ろに飛ばす。その隙に、リングの方に顔を向けた

奴の弟は伸びており、宝来はリングから降りてしんのすけと藤方へと向かっている

（取り敢えず、あの厄介な「煙」の脅威は取り払われたか……）

正面を向いて腕をクロスさせ、頭上まで持っていくと、振り下ろされた『マッドキャット』が腕のガードと衝突した

弾かれる前に腹部に蹴りを入れる

そう、まだこいつが残っている。脅威は完全に去った訳ではない。こいつを倒さない限り『勝ち』は無い

倒す算段はついている。自滅するまでの持久戦だ

『マッドキャット』はあくまで肉体の制御を外したり人間を操ったり痛みを感じなくさせるスタンドだけで肉体自体を改造したりとかの能力じゃない

そしてそれは相手も承知の筈。素直に自滅してくれる筈は

「ハイハイハイハイハイハイハイハイハイ！」

『マッドキャット』を先程よりも素早く振り回した。だが、この攻撃に俺は違和感を感じた

先程と違い、攻撃が外れてばかりなのだ。いや、確かに俺は避けるよう避けるよう動いているが、何処か引っ掛かった

「ゴリア！」

俺は隙を見て高橋一葉の顔を狙って拳を放つ。その攻撃を反射的に回避し、「弦」を巻き付けた拳をスタンドに向けて放った。何処に当たるかは見当がついた為、俺のスタンドはキャッチボールの要領で掌をそこへと持っていった

彼女は片手で袖を掴んで僅かに引っ張り、その結果軌道がずれ、空振りした

やはり変だ。何故彼女は『スピード』や動きの精密さを上げておきながら自分からの攻撃を決して俺に当てないようにしているのだろうか

(どつという事だ？そんな事して何になるんだ？俺を殺せるチャンス

を無駄に潰すだけだぞ……)

表情を見てせめて何か考えているのかというのを確認したかったが、スタンドによって表情は固定されていて、眉一つ動いていない

「隙あり！」

隙を見て俺は、高橋一葉の胸部に拳を叩き込もうとする。高橋一葉は『マッドキャット』で防御しようとした

「く……」

突然床に膝をつけた。スタンドの拳は力無いチャチな防御壁を弾き、高橋一葉に命中した

「まあ仕方無いか……」もう私自身があんた達を倒すのは諦めていたしね『」

吹き飛ばされる前に高橋一葉は、こう呟いた

「除夜のお兄さん大丈夫？」

「辛うじて……だがな……検査を受けてみないと分からないけど多分骨に細かい罫が入ったと思うぞ……どうせ数日で治ると思うがその間無茶は出来ないな……」

「数日って、何日位？」

「三日あれば完治するだろ」

『それは明らかにおかしいぞ』

「俺は昔から回復早いので、何だったら宝来や外にいる優太、もしくは義母さんに聞いてみるよ」

「それより……あのお姉さんほんまに大丈夫なんか？」

「大丈夫だよ、どう見ても気を失ってるし……」

「せやけど……」

「まあ莓ちゃんが心配するのも分かるよ、だからね……最終兵器！」

「？」

しんのすけはポケットから黒い靴下を取り出した。何処からどう見てもごく普通の靴下で、何故それを最終兵器と呼ぶか首を捻ったが、即座に理解した

その靴下は信じられない程の悪臭を放っていて、俺達はとっさに鼻

を摘んだ

「しんちゃん……何やねんその下手したら人を殺しかねん凶器は……」

「オラの父ちゃんの残業続きで四日間履きっぱなしの靴下、これを近付ければパンダ寝入りをしているのかどうかが分かる」

正解は『狸』だよしんのすけ君

てかあんな靴下の臭いを間近で嗅がされたら下手したら死ぬんじゃないのか？冗談とかそういうの一切抜きで

しんのすけはうつ伏せに倒れている高橋一葉に近付き、顔の横に靴下を置いた。必然的に俺の視界の中には高橋一葉の姿も入る

その時俺は理解した。高橋一葉の不自然な行動の意図を。殴った時に呟いた言葉の意図を

高橋一葉は『うつ伏せ』に、下の『マットキャット』に被さるように倒れていた

「駄目だ近寄るな！そいつはまだスタンドを発現している！」

（意識は……跳びそうだったし……今も……気をどうにか保ってい

るに過ぎないけど……『スタンド』は絶対に解除は……しない)

高橋一葉は薄目を開けながら、獲物に飛びかかる肉食獣の如くじつと待った

夏帆が倒された時、彼女は自分の体を限界までフルパワーを発揮させても勝てない事を悟ると、その時点で除夜達に押し勝つ事は諦めた
そして、それなら、敢えて負けてやろうと考えたのだ

(パワーは……結構想定外だったけど……当たる直前に底上げておいた反射神経のお陰で気絶せずには済んだ……後は精神力で意識とスタンドを保てばいい……)

『マッドキャット』の弦の内的一本を、右手で摘んだ

(瀬上除夜……あんたを……あんた達を『私が』倒すのは諦めた……だからあんた達はあるあんた達によって倒されて貰う……我が『マッドキャット』は「弦」を生物に繋ぐ事によってそいつを操作する事が出来る……そいつがスタンド使いならそのスタンドも操作出来る……これは夏帆すら知らない正に『奥の手』！さあ近付きなさいよー)

除夜が高橋の企てに気付き、叫ぶ

(チツ……勘がいいわね……だが充分射程に入った……体はボロボロだけど鞭を打てば一人に弦を繋ぐくらいは出来る！)

高橋は立ち上がり、一番近くにいた藤方に弦を繋ぐ為に手を伸ばした

(盛大に殴り飛ばしてくれたお陰で『プラネット・ルビー』はギリギリ射程外！私の勝ちだ！)

藤方に伸ばされた手の親指と人差し指に摘まれた弦は、藤方に繋がる事は無く、床に落ちた

弦を摘んでいた指は消えていた。いや、手首ごと消えていた

「SHUFFLE……」

頭から血を流し、フラフラになりながら歩いている琢磨が、後ろにスタンド『SHUFFLE』を出していた

俺はしんのすけ達へと駆け寄る

「早く決めて下さい……持ちません……」

「仕方無いよ。死傷者が沢山出たんだから」

同感だ。銃撃に爆破、謎の発火による数名が死傷、拳銃の果てに会場にいた人達が原因不明の重傷を負っている

こんな事が一日で立て続けに起こったのだ。中止されて当然だろう。しかも全て俺を狙ってる連中の仕業だから、俺も当事者の一人ではあるし

「まあ元気出しなよ、悪い事が起きたんならいい事あるよ」

「そつだよ、不幸な事が起きたからって救いは一つくらいあるさ」

咲良と優太がしんのすけを励ます。だが、しんのすけは池に落ちた石みたいに落ち込んでいた

数時間後、しんのすけがななこさんにゴールデンウィーク、北海道旅行に誘われたと報告してきた時の声は、落ち込んでいた事が嘘だと思える程意気揚々としていた

高橋一葉 - 再起可能、但し一ヶ月近い入院が必要

高橋夏帆 - 鼻はどうか折れておらず、目が覚めた後姉の付き添いで病院へ行った

須藤琢磨 - 頭の方は数針縫ったが他は軽い脳震盪程度で済んだ。

足の方が重傷と診察され、一週間余り入院する事となる

宝来瑪瑙 - スタンド使いとなった経緯を話そうとしたが、その夕
イミングで自宅についた為話せず仕舞

子猫 - 咲良に懐き、院に飼育される事となった

T O B E C O N T I N U E D . . .

学園祭サバイバル？（後書き）

色々あった学園祭サバイバル編は漸く終結しました

そしてこのゴタゴタで学園祭が中止となってしまうました（笑）

次回は少し懐かしいあの場所にしんのすけが行く事になります

では、次回も宜しくお願いします

かなり遅めの決勝戦？（前書き）

学園祭の翌日、慌ただしい日は終わってもまた慌ただしい日が始まる

かなり遅めの決勝戦？

その男はシヨルダーバックを担ぎながら歩いていた

「まさか送り込んだ六人全てが除夜を倒す事はおるか取り巻き一人倒す事も出来ずにやられるとは……」

学園祭での自分の送り込んだ刺客と、除夜達との戦いの結果。それは予想外だった

『マッドキャット』の高橋一葉を始め、送り込んだ「スタンド使い」達は、能力面では自分の生み出したスタンド使い達の中でも相当群を抜いていた筈だった。故に、「あいつ等」の誰も再起不能に出来ずに敗れるとは、思いもよらなかった

「まあ、仕方無い……『結果』はこれだ。出た結果は覆らない……この春日部にはまだ僕が矢で創ったスタンド使いは大勢いるしこれから創り放題だし……！」

男は、まだ小学生にもなっていないであろう少年にぶつかった

「余所見してごめん、ちょっと考え事をしていたんだ」

「いえ……こちらこそすみません……僕の方も考え事をして……」

…」

「そうか……これは個人的な好奇心で聞く事で答えたくなければ答えなくていいけど……その考え事って……もしかして、自分と競いたくてしょうがない相手か何か？」

少年は目を見開いた。男の言った事は正しかったからだ

「親友やその保護者が言うには僕は人の表情で強い感情を読み取ったり人の隠れた素質や才能を見出したりする事に長けているらしいんだ、特に後者がね……僕に『ある能力』を授け、『あるアイテム』を貸してくれた人達もそんな事言ってくれたからね……」

「そうですか……それじゃ」

男から不気味な雰囲気を感じ取った少年は、去ろうとした

が、前方に小石が転がってきて、それに足を取られて転んでしまう男はバックから『弓と矢』を取り出し、立ち上がろうとする少年に向けて弓を引いた

「ここで僕達が出会ったのも何かの『縁』だ。君にも『力』を与えてあげるよ」

「なあしんのすけ」

「何？除夜のお兄さん」

「何で俺を呼んだんだ？今回行く場所に俺は用は無いだろ？」

「久し振りだから一人じゃ心細くって……」

「オメーはそんなキャラじゃねーだろ」

頬を赤らめ体をくねらせながら柄にもない事を言うしんのすけ。多少慣れたとはいえ、やっぱり気持ち悪かった

あの慌ただしい学園祭の翌日、俺はしんのすけにいきなり呼ばれ、以前しんのすけが剣道を習っていた『自分流剣道場』という所へ向かっていた

みさえさんから話を聞いた所、しんのすけはその前の館長から剣の才能を見出され、少しの間その館長の下で稽古をしていたという。何でもかなりの将来性があったとか何だとかで、有望視されていたらしかった

やめた理由を本人に聞いてみると、自分を負かした相手に勝つ事が出来たのでそれで満足した為だと言っていた

何故今日そこへ向かっているのかと言うと、今日は模擬トーナメントがあり、門下生達からどうしても参加して欲しいとお願いされた

からだとか。最初は乗り気では無かったが、現館長からも門下生達の士気を上げる意味でもと頼まれた為、引き受けたという

「だが何で君の参加が門下生達の士気を上げる事になるの？」

「貴方や瀬上君が来る前に聞いたけど、何でも道場でトップクラスの実力を持つ子を倒したとか」

「けれど大丈夫なの？やめて結構経つんでしょ？」

「心配はいらないぞ、オラこんな可愛い容姿しても強いから」

「そうだな……強いのを認める……だが俺は一つばかり聞きたい事があるんだが宜しいかな？」

「聞きたい事？」

「お前にはない」

「じゃあ誰にあるの？」

「教えてくれませんか？」

「何であんた等がいるんだよ御厨先輩、ロンディネ！」

俺の質問に惚けた感じで答えた、俺達についてきている二人の知人に俺は指を差して叫んだ

「私はしんのすけ君に貴方のボディガードとして呼ばれたのだけ
ど」

「あんたの『マイ・フレンド』は自動追跡型で身を守ったりするの
に向いてないだろ！」

「僕も同じ理由で」

「それは嬉しいがお前の『ソード・アイ・ブラインド』は単体では
無力に等しいんじゃないか？」

「という事はしんのすけは二人を俺が来るという前提で呼んだみたい
だが、俺が来なかったらどうするつもりだったんだらう？」

「スタンド使いの仲間がここに三人いるから役立たずにはならない
つもりですぜ」

「一人論外だがな、てかお前いいのか油売ってて。ボスから任せられ
た仕事は大丈夫なのか？」

「いや、県警や警視庁のコンピューターをハッキングしたり忍び込
んで調書を盗んでコピーを取ったりと大変だったから息抜きに」

「任務を達成するまで捕まるなよ」

「安心して、逮捕されても任務による物なら組織が揉み消してくれ
るから」

「安心要素一つもねーよ！いいかロンディネ！それは立派な犯罪だ！」

「大丈夫だよ除夜さん」

「……そう言い切る根拠は？」

「昔から言っじゃん、『目的は手段を正当化する』って」

「その言葉は今後滅多な事でもない限り口にしないと俺に誓え」

確かに言うがそれは『その目的を達成する為なら何やってもいい』
って意味じゃねえし

「本当はもっとお誘いしたかったんだけど瑪瑙のおねいさんは日光へ日帰り旅行に出掛けちゃったし、莓ちゃんは転校手続きっていうのをしないといけなくて行けないって言うし、優太のお兄さんは『こうじ』ってというのがあって行けないって言うし……」

「『法事』な」

今日はあいつの家族の三回忌でもある

そんなやり取りをしている間に、俺達は今回の目的地である『自分流剣道場』についた

「うわ……ボロ」

「前もって話には聞いていたけど……」

「実際に見てみると驚くよね……」

これが俺達三人の『自分流剣道場』の初見で出た感想。しんのすけが言うには「オラがいた時はもっとボロかった」という

中からは結構な人数の掛け声が聞こえた。俺はこういったのは好きだ。だがおかしい。何故かという……

『チャーシューめん！タンタンめん！ワンタンめん！』

この掛け声だ。多分素振りの練習をしているのだろうが……何故こんな変な掛け声なんだろう？

「おじゃましてまうまかくのたいへん！」

……ここが一体どんな場所かは分からないが、少なくとも変な道場であるという事はよく理解出来た。そう言えばみさえさん言ったな……しんのすけの師である前館長は変な人だって

しんのすけは一礼をした後に入口近くの壁を蹴った

「おま……何してんだよ……」

「こっしないと開かないの」

扉を開き、中に入ると俺達も続いて入った

「うーん……」

「どうしたロンディネ？」

「ネアポリスにも剣道場はあるけど、やはり本場は違うなあって思
つて……」

「勘違いするな。俺は剣道場はよくは知らんが明らかにここは特殊
な例だから」

日本に関して誤った認識をさせないよう、俺はこのイタリアからの
来訪者に注意をした

かなり遅めの決勝戦？（後書き）

剣道編以降音沙汰も無かった『自分流剣道場』でした

タイトルにはちゃんと意味はあります（剣道編知ってる人はもろ分
かりでしようけど）

次回もお楽しみに

かなり遅めの決勝戦？（前書き）

剣道場で久々に竹刀を握るしんのすけ

門外漢の除夜達の出番は今の所ありません（笑）

かなり遅めの決勝戦？

中に入ると、五十人余りの子供達が竹刀を振るっている光景が真っ先に目に入った

「何時の間にやらこんな増えたんだね」

「しんのすけがいた頃は何人位いたんだ？」

「オラ以外いなかった」

それを聞いて俺達は顔を合わせて苦笑いした

「やあしんのすけ君、折角の休日なのに、わざわざ来てくれて済まないね」

「いやいや、久し振りにここを見ておきたいと思ひまして」

髭の濃い、初老近くの男の人がしんのすけに挨拶をしてきた。人の良さそうな普通のおじさんという印象を抱いたが、着ている道着がとても目を引いた

正確には袴である。袴の柄が、とてもいい趣味をしているとは思えないのだ

緑色の地に青紫の斑模様。長く見ると目が変になりそうだ

それが上下揃ってだつたらまだ抵抗なく受け入れる事が出来たかも知れない。だが、上の方は普通の道着であった為、違和感は更に増幅された

後で聞いたが上の方は汚してしまいクリーニングに出しているらしい。だつたら下も上と同じの着ればいいのに……

「こちらの方は？」

「しんのすけ君と最近友達になつた瀬上除夜と言います」

「御厨山女です」

「ロンディネと言います。好きな物はシーフードカレーとお汁粉です」

「お前イタリア人じゃなかったか？」

「イタリア人がシーフードカレーとお汁粉が好物じゃいけないの？」

「うん、ごめん、個人の自由だよ」

「因みに私はひつまぶしと魚肉ソーセージが好物だけど」

「聞いてねーよ！」

「ハハハ……随分愉快的な友達だね」

「まあね……」

そんなやり取りをしながらもしんのすけは道着に着替えて防具を付けた

「ねえ瀬上君、一つばかり聞いていい？」

「何ですか先輩？分かる範囲でなら何なりとお答えいたしますが」

「これから始まるのは剣道の試合よね？」

「はい、見ての通り」

「なんで剣道の試合ってあんな重そうな防具を着用するの？」

「……あんだそれマジで言ってるの？」

竹刀と言ったって、叩かれれば痛いし危ない場合もある。防具はそのダメージを軽減する為にある

「久々に着るからなこれ……やっぱり動き辛いや」

コサックダンスをしながら言うしんのすけ。うん、お前がそれ言っただけで説得力無いね

「相変わらずだね、野原君」

そんなしんのすけに、五人の同年代の少年達が話し掛けてきた

「おお、代々木君よこぎみ、元気だった？」

「うん」

一番前の茶髪の爽やかそうな少年と親しそうに会話をする

後ろにいた四人の内三人にこの二人の関係を聞くと、彼、代々木コージロー君はしんのすけの剣のライバルで、互いが互いに勝つ為に鍛錬していたという

俺は感心しながら、二人の試合の詳細を聞く。横で聞いていたロンディネがどんどん信じられないと言いたげな表情となっていた

「どうしたロンディネ？」

「あの……話を聞いていて……何の疑問も感じなかったの？」

「何が？」

「その試合……本当に小学校にもまだ入っていない子供同士のそれなの？」

あ……うん。 そうだね。 確かに君の言う通りだ

普通に聞いてたが、普通に考えればその試合は凄まじ過ぎる。 そんな当たり前な事も感じなかったのは、多分ここ最近現実離れした出来事（スタンド使いとのバトル）が立て続けに起こってたから、そういうのが若干麻痺していたんだろうな

「それでさ、その子は誰？」

しんのすけは代々木君達と一緒にいる黒髪の目尻に隈のある少年に指を差す。少年はしんのすけの指を叩いた

「痛いな何すんの！」

「叩いた事は謝るが人に指を差した君に非はある」

「おおそっか、ごめんなさい」

「自己紹介をしておこうか、僕はいみのせ一瀬江河、じぶんりゅうけんどうじょう自分流剣道場の門下で君と同年だ」

「そう、オラ野原しんのすけ五歳」

「知ってる、僕が自己紹介をしたのは初対面である他に君は恐らく

僕の名前を覚えていないと思ったからだ」

「え？オラ達って何処かで会いましたっけ？」

嘘や冗談ではなく、本心から困った様子で一瀬に聞くしんのすけ

一瀬は呆れ半分、まあそうだろうなといった感情が半分といった感じで溜息をつく

「名前を言えばピンと来ると思ったが……」

「え？何か言った？」

「気にしないで。自分の中で勝手に抱いていた期待が自分の中で勝手に裏切られたただだから」

何ともないといった感じで答えた。その表情からも、態度からも、それが嘘偽りだとは思えない

だが俺は、あいつの内面から強い負の感情が滲み出ているように感じて、寒気がした

一瀬は立ち上がり、踵を返した

「今日君と戦えるのを楽しみにしているよ、僕は君と当たるまで勝ち進むから君も僕と当たるまで誰にも負けないでね……」

「何なのあの子……」

「あいつは俺達とは少し後にこの道場に来たんだ、実力は代々木さんとはほぼ同等……いや、最近では三本に二本は取られてる……」

「相手にとって付録はないぞ!」

正解は『不足はない』だよしのすけ君

大丈夫だろうか?という不安はあった。しのすけはトーナメントで決勝戦に選出出来るまでの実力を有しているとはいえ、そこでやめたのだからブランクはある筈だ。現役の子供達に敵うのだろうか

トーナメント表がしのすけを含む参加者全員に配られる。紙は藁半紙で手書きだ。個人的には俺はこういったのは温かみを感じて好きだ

代々木君とあの一瀬という子はしのすけと別のブロックで、どちらかがしのすけと決勝で当たるといふ組み合わせとなっている

「相手が誰だろうと油断はするなよ、『勝負は時の運』って言葉はあるが油断と慢心は負けに繋がるからな」

「そう、一度自分に敵意を見せたら、相手が負けを認めようが泣き

叫ぼうが命乞いをしようが最低でも明日そいつの通夜が行われるまで……」

「それは徹底し過ぎです先輩」

最低がそいつの『通夜』って、相手死んでるじゃないですか。ここまですたら確実に鉄格子の向こう側に入られますよ。それも何年も

「全力でかかれ、出せる全てを出し切れ！但し勝ち負けは問題にするな。重要なのはどう戦ったかだ！」

「ムサシ先生と同じ事言ってる」

「ふーん……じゃあ俺はその先生と気が合うかも知れないな……」

「結構変な先生なんだけどね……」

こいつに変わって言わせる先生ってどんな人なんだろう……会ってみたい

「第一回戦始まるよ」

ロンディネに言われてしんのすけは竹刀を持って相手と向かい合った

「始め！」

相手は小手を狙って竹刀を振るうがしんのすけは当たる直前に数歩後ろに下がり

「きしめーん」

面打ちを食らわせた

二回目、暫し打ち合いをするが、相手が振り下ろすと同時に右に移動

「こつてりしたステーキ！」

「小手あり！勝負あり！」

あつと言う間に勝負が決まった。ブランクがあるのに大した物だ。スタンド使い達との戦闘も、ある程度はプラスになっているのかも知れないな

始まる前に抱いていた不安は払拭された。このペースだともしかしたら準決勝とかまで敵無しかも知れない

（あの一瀬って奴……何なんだ？）

一つの不安が払拭された俺の心の中は、別の不安が入ってきた

かなり遅めの決勝戦？（後書き）

新キャラの一瀬はしんのすけに対して恨みは無いのですが執着はしています。理由は後程

次回も宜しくお願いします

自分流剣道場でのボケは面白いけど中々使える機会が無いなあ……

かなり遅めの決勝戦？（前書き）

二日程空けてすみません

剣道は後少し続きます

まあ純粋な剣道試合は今話までだけど

かなり遅めの決勝戦？

無事一回戦を終えたしんのすけ。只今二回戦に向け、俺が持つてきた弁当の唐揚げを食べていた

「代々木君はやっぱリスゴいぞ。技のキレもコクも喉越しもオラと戦った時以上に上がったた」

「コクと喉越しはいらんいらん。……まあでも確かに凄かったな」

「でしょでしょ！」

「素人の私達から見ても凄かったわ。特に代々木君が相手の竹刀を僅かな動作で弾き飛ばした時は目を丸くしたわ……」

「それ『刃くずし』だぞ。オラ代々木君に初めて会った時あの技にやられたんだよな」

あの技は『刃くずし』というのか

確かにあの技は凄かった。竹刀を上下左右に素早く動かす事で相手の竹刀を弾き飛ばす。それも僅か一秒でだ。どんな手首の力をしてたらそれが可能になるんだろうか。そして、どうやって齡十にも達していない子供がどう身に付けたのか……見当もつかない

「それで、あの一瀬って子は？」

「あの子も凄いよ、特別変わった技とか使わなかったけどすごく早く力強く決めたよ！」

俺が今一番気になっている奴の事を、ロンディネが何処か興奮しながら言う。興奮する気持ちは分からなくはない。何せあいつは相手が攻撃してくる時を狙って相手に攻撃してきたのだから

俺はロンディネと違ってその試合で興奮したりなんかしなかった。どちらかというと、それを全く恐れずにやってのけた事に敬意に近い感情を抱いた

そりゃ防具着けての竹刀での打ち合いだ。武士の果たし合いみたいに防具を着けない真剣での斬り合いみたいに負けても死ぬ事はまずない

ないにしても、恐怖を抱かずあそこまで綺麗にやれるものなのだろうか

「代々木君は自分の力を活かした技が売りなら、あの一瀬は精神力が売りって所かな……」

「瀬上君」

御厨先輩が俺に耳打ちしてきた

「どうしました？」

「いや、試合を見て思ったけど、何か他の子大した事ないように見えるわね」

「先輩……あの二人を比較に出してそれを言っているんならその考えを改めた方がいいです。あの二人が圧倒的に群を抜いているんです」

剣道は門外漢の俺でもその位分かりますよ

「じゃ次オラの試合だから行ってくるね」

「頑張つて来いよ」

しんのすけは二回戦、三回戦を勝ち進み、準決勝に進出。代々木君と一瀬の二人も無事準決勝に進出した

「凄いしんのすけ！後二回勝ち抜けば優勝だね！」

「まーねー」

「優勝したら何か貰えるのか？」

「聞いた話だと、石鹸の詰め合わせが貰えるんだって」

「……御歳暮じゃあるまいし何で石鹸なんだよ……もう少し子供が喜びそうな物をチヨイスしろよ」

「それよりそろそろ試合よ」

「相手は？」

「名無君」

「……それ名字？」

誰が決めたのそんなの

「こつやって試合するのも久し振りだな」

「そつだっけ？」

名無君はずっこけた。様子から見てしんのすけはどつやら本当に忘れてるな

審判の合図と共に、名無君はしんのすけに向かって竹刀を振るった。狙いは胴打ち

しんのすけは振るわれたと同時に前へと動き、名無君に面打ちを食らわせた

「面あり！」

二本目

暫し打ち合いが続いていた。お互いがほぼ同じスピードらしく、打つては防がれ、打たれば防ぐといった応酬を繰り返している

しんのすけは名無君の面打ちを一步下がって避け、竹刀をまた構えようとした瞬間、胴打ちを食らわせた

「胴あり！勝負あり！」

「良かったな！次は決勝戦だぞ！」

「うん。でもその前に……」

「その前に？」

「おトイレ行ってこようつと」

相変わらず緊張感の無い奴だな

準決勝戦、代々木君対一瀬

審判が始めの合図を出した直後、代々木君は竹刀を上下左右小刻みに動かす。刃くずしだ

あの技に対し、一瀬はどうするのだろうか

期待を抱きながら見ていると、一瀬の竹刀が代々木君の小手に当たっていた

「じ……小手あり！」

「な……何が起こったんだ？」

「普通に小手打ちをしたただだよ……」

狼狽する御厨先輩の疑問に、『サード・アイ・ブラインド』を発現させたロンディネが答える

「何が起きたのか分かるのか？」

「うん、みんなと会って鍛えられてちよっぴり成長したみたいなんだ。『サード・アイ・ブラインド』を通して見た最新映像は自在に再生、巻き戻し、早送り、一時停止が出来るようになってね」

「ビデオカメラだなまるで……それで、あいつはどうやって『刃くずし』を破ったんだ？しんのすけは一度竹刀を手離す事で破ったみたいだがあいつはそんな素振りすら見せてなかったぞ」

「『刃くずし』は上下左右に動かす事で竹刀を弾く……だったよね？」

「大体分かった」

つまり、『元に戻った瞬間に叩いた』という事か

確かに、上下左右に動かすのであれば必ず何処かで元に戻る。理屈で言えば簡単だ

（だがこれは緻密で機械みたいな正確さが要求されるぞ。そんな動きをああ簡単に出来るもんなのか？）

二本目が開始される

代々木君は竹刀を上にも構えると、竹刀を強い風が発生する程回転させた。間違いない。彼が繰り出そうとしているのは、話にあったあの『風車』という技だ

竹刀を高速回転させる事で発生する強い風で相手の動きを封じ、その回転は相手の攻撃の壁となり、更にそれから繰り出される面打ちは普通に打つより強力になっているという

「これで決まりだな、一瀬はかなり強いがあの『風車』を破った事は一度もない！」

代々木君の勝利を確信したように名無君はそう言った。見ると、周りの子達も代々木君の勝利を確信しているようだ

俺だけなのかもな。あいつの勝利を確信し、『あいつが『風車』をどの様に破るのか』を期待しているのは

「胴！」

代々木君が面打ちをしようとしたその瞬間、一瀬は代々木君に胴打ちをした

皆が皆呆気にとられている。『風車』が破られるとは思ってもみなかったのだらう

考えてみれば単純な事だ。回転による風が動きを封じて、回転が攻撃を防ぐ壁となるなら、回転が止まった時に攻撃すればいい。それだけだ

（だからそれを迷わずにやれるっておかしいだろ……これで小学生にもなっていないって……）

「胴あり！勝負あり！」

「次はいよいよ決勝戦だね！」

「うん……まあね」

「何だ？この結果が意外なのか？」

「うん、代々木君が一本も取れずに負けるなんて思いもよらなかった……」

「そんな相手と次戦うけどどう思う？」

「……あの子ちょっと苦手……」

最初『出て来たのがそれかよ』と思ったが、考えてみれば無理はない

600

「それより決勝戦だぞ、さっさと出る」

「おう！」

両者は対面し、互いに礼をする

「この日を待ってたよ野原しんのすけ君」

「へ？」

「偶然だね、本来あの時こうなるべき筈だったんだよ……やはり」

神』とか『運命』とかつてあるのかもね……」

「何言ってるの？君」

「始め！」

一瀬は竹刀を振り下ろす。しんのすけは避けて、胴を狙って振るうが、一瀬は防御する

しんのすけは竹刀を手放し、下から小手を打つ

「小手あり！」

「ふははははは……流石だよ……まさか『刃くずし』を破った手段で一本取るとは……想像もしていなかったよ……」

審判は高笑いを続ける一瀬に注意をする。そして二本目が開始された

一瀬は竹刀を振るうが、しんのすけは防ぐ。一瀬が若干押しているようだが、しんのすけも堪えている

「凄いよ野原君……流石は、本来は決勝に行けただけはあるね……」

「何言ってるの？今が決勝戦じゃない」

「違う……こんな遊びの試合じゃない……僕と君が戦う筈だったの

は……こんなしみつたれた試合じゃなかったんだよ！」

竹刀を握っている奴の右腕に、『何か』が纏うように現れた

関節部を守るようにトタン板のような金属板で覆った、何処か透き通った空色の甲冑の腕の部分のような物

「あれは……『スタンド』？」

かなり遅めの決勝戦？（後書き）

どうにかここまで来ました

本当に除夜やロンディネの言う通りしんのすけや代々木君みたいに
僅か数歳であそこまで到達出来るっていうのは想像つきませんね

次話はスタンドバトルといきます

では、次回もお楽しみに

かなり遅めの決勝戦？（前書き）

スタンドを発現した一瀬

それは戦いの合図

かなり遅めの決勝戦？

一瀬の右腕に纏うように発現した『それ』からは手の甲から肘にかけて一本の『線』が浮かび上がった

その『線』から、しんのすけに向かって何かが飛び出してきた

しんのすけは『ハリケーン』を発現させ、一瀬を殴り飛ばした

「な……………何だ？」

「一瀬の奴が……………いきなり後ろに吹っ飛ぶように……………」

まあスタンドが見えない奴から見たらそう見えるんだろうな

「先輩、ロンディネ！今すぐこの道場にいる連中を外に出してくれ！お前等、今は理由を聞くな！一旦ここを出ろ！そしていいと言うまで入ってくるな！」

「え……………」

「早くしろ！死にたいのか！」

「あ……………はい！」

何かヤバい事を察してくれたお陰で、門下生達は館長や先輩達の誘導のもと素直に外に出た

これで巻き込まれずには済む。問題はあっちだ

しんのすけに怪我は無さそうだが、胴衣の脇の所がぱっくりと斬られていた

「どういう事？一瀬君は除夜のお兄さんを狙っている連中の仲間？」

「可能性は低い。理由は奴は俺じゃなくしんのすけの方にその意識を向けていた……俺には一切目もくれずね……有り得るのは『偶然』だろうな……」

「『偶然』？偶然とは……僕がこの『能力』を得た事ですか？」

一瀬は防具を外し、立ち上がる

関節部にトタンのような波状の板が張られた空色の甲冑を身に纏い、頭部にはカマキリを象った鎧が装着されていた。目の部分は西洋甲冑のような物がつけられ、その上にはバイザーが被されてあった

「あれは……？」

「纏うタイプのスタンドだな……」

「『スタンド』……『スタンド』か……そう呼ばれているんだ……」

この能力……そして君達も持っているんだね……他にもいるのかな？同じ能力を持った人達……」

「この春日部には結構いると思うぞ？それより、その能力は何時手に入れた？これはどうしても答えて貰うぞ」

「僕は自分にこんな能力があった事自体がたった今初めて気付きました……と、事実を言っておきましょう」

さっきの発言から予想はついてはいたが……なら質問を変えよう

「最近妙な怪我を負わなかったか？例えば、『矢』か何かに刺されたとかそんな感じの……」

「そういったのはよく分からないけどここへ向かう途中何故か喉を何かが貫いたような感覚がしましたよ……痛みは無かったですけど……」

それだな。どうやらここに向かう途中で俺を狙う奴に『矢』で攻撃されたという事が

俺の事も聞いてないみたいだし、情報は期待出来ないか……

「次の質問……何故しんのすけを目の敵にしているんだ？」

「それは部外者である貴方には関係無い話でしょう」

「お前がその『能力』を発現してしんのすけを襲った時点で俺は部外者じゃないんだよ。お前やしんのすけの『能力』を発現させた奴は理由は見当もつかんが俺を倒そうと目論んでいる奴で、俺としんのすけは仲間だからな……」

「それが起こったのは能力を発現する前の事なんだけど」

「関係無い。そもそも会った時からの言動からしてお前はしんのすけに変に固執していた……こいつがお前に何かしたのか？」

俺は奴に会ってから抱いていた疑問を一気に口に出した

一瀬はほくそ笑み、しんのすけに指を差して答えた

「あーっ！人に指差すなって言っただくせに自分ならいいの？」

「喧しい……」

しんのすけを睨み付ける

しんのすけは迫力に圧倒されて縮こまって「ほい……」と力なく返事した

「『何かした』？何もしていませんよ。そもそも僕とこいつは剣道

以外は何の接点もない。だからこいつが僕に何か出来る筈はない……」

「それなら……」

「だからこそ僕はこいつに対して怒りを露わにしているんだ……」

「何でオラは君に何もしていないのに怒ってるの？」

「そうだよね……君は『そんなつもり』じゃなかったのは百も承知だよ……それは理解しているさ」

「そんなつもりって一体何なの？」

焦った感じで聞く。こいつのこんな姿を見たのは初めてかも知れない

「分かったよ心当たりが思い浮かばないんだったら教えてやるよ……君が剣道を辞めた日……君は極端流、いや、代々木君と戦う為にトーナメントに出場した……その時君は準決勝戦に勝ち、決勝戦に進出する筈だった……」

何か分かってきたぞ……何故こいつがしんのすけに固執する理由が

……

「実は僕もそのトーナメントに参加して……決勝戦まで上り詰めた……そう、僕は君と決勝戦で当たる筈だったんだよ、君が準

決勝で勝った後帰らなきゃね……」

「で、どうなったの？」

「繰り上がって僕の優勝だよ！そうだよな、何せ決勝で戦う相手がないんだもん。必然的にそうなるよな！色々なトーナメントに出たけどあれだけ納得がいかない不満だらけの優勝は初めてだったよ！」

右手の指先から手首まで届く線が浮き出て、指先からその長さの刃が飛び出してきた。その恐らく両刃の刃は何処か見惚れる程美しかった

これがこいつの能力か

「互いに同じ能力を持っていて、今ここで戦う事になったのは偶然なのか運命なのか……この能力でお前を打ち負かしてやるよ野原さんのすけ！」

「……分かった、但し終わったらちゃんとオラの話聞いてね」

『ハリケーン』を刀に変え、しっかりと握る

「俺に出来る事は？」

「出来るなら何もしないで欲しいんだ。お兄さん剣道は素人なんで

「しよ？」

これはもう剣道じゃないだろ

俺はこの言葉が頭に浮かんだが敢えて消した。これはこいつ等の問題だ

「分かった、負けそうになるまで手を出さない。これでいいんだろ？」

「それでいいぞ！」

しんのすけがそう返した直後、一瀬は右手の爪のような刃をしんのすけ目掛けて振り上げる。しんのすけは『ハリケーン』の刀身でガードした

額から後ろにかけて線が一本浮かび上がり、振り下ろされるように刃が飛び出る。しんのすけは横に跳んで避けた

しんのすけと戦っている一瀬の能力を観察して思ったのは、『厄介だ』という事だ。あのスタンドからは何処からでも刃が出せる。それも好きな長さに、好きな出し方で

まだ有利なのは刃が出るまでにタイムラグがあり、浮き彫りとなった線を観察すれば何処から出るのが大体分かるという点。それを

考えれば、どちらかというところいった一対一の喧嘩よりも暗殺と
かに向いてる能力なのかも知れない

「完璧に不意を突いたつもりなのに……別にいいさ、この程度で真
つ二つになつたら面白くないもんな！」

右手の指先に出した『刃』を引つ込めた。指先から手首まで伸びて
いた線は消えた

両腕に片方十本程線が浮き出て、そこから押し出されるように刃が
出て来た

しんのすけは『ハリケーン』を振るうが、一瀬は右腕でガードする

『ふん、その装甲は見掛け倒しか？刀を防ぐ事も出来んのか？』

刀剣化した『ハリケーン』が一瀬に挑発的な言葉を言う。刀が喋る
なんて正直言つて気持ち悪い

「どんな能力か分からないのにまともに受ける馬鹿はいないと思う
けど？それに……」

右腕から更に数本『線』が浮き彫りとなり、そこから広がるように
刃が飛び出てきた

飛び出した瞬間にしんのすけは後ろに下がるが、先端が掠ってしま
い切り傷を作ってしまう

「防いでいる時に攻められないとは、誰も言っていないからね」

「成程、つまりこのなまくらだとその鎧みたいなスタンドは破れな
いのか」

『おい待て、なまくらとは何だなまくらとは』

「数打ちのが良かった？」

『道具型の私は正真正銘の名刀、業物だ！』

「こごなっ たら目には目薬、 歯には歯磨き粉だ！」

『聞けよコラ！』

『目には目を、歯には歯を』ですよしんのすけ君。君、一回辞書広
げるをお勧めしますよ。いや、わざと言っているのかも知れない

「オラ、参上！」

一瀬のスタンド同様、『ハリケーン』を身に纏い決めポーズと決め
台詞を取った

かなり遅めの決勝戦？（後書き）

身に纏うタイプのスタンドはこの小説では三体目です

固執している理由を漸く出せました

もう少し続けるつもりですので是非とも宜しくお願いします

かなり遅めの決勝戦？（前書き）

まだ底の見えない一瀬のスタンドに、しんのすけは……？

かなり遅めの決勝戦？

「位置について……よい……」

『装着型』となった『ハリケーン』を身に纏ったしんのすけは、クラウチングスタートの体勢を取る

「どんっ！」

地面を蹴り、駆け出す

しんのすけは一瀬との距離を詰める。一瀬は指から刃を出し、同じ様に接近して距離を縮める

指先から伸びる刃の射程にしんのすけが入る寸前、一瀬は腕を振り被る。同時、しんのすけも加速する

刃が一番長い中指のが切っ先を掠る。振り切った刹那、しんのすけは一瀬の顔面に拳を叩き込む。兜のバイザーは破壊されたが、一瀬自体にダメージは無いようで、更に攻撃を繰り出してきた。しんのすけはジャンプしてそれを避ける

「お、良かったやっぱり二人共無事だった」

ロンディネが入ってきて、俺の隣に座った。俺はロンディネに真っ先に気になった事を訊ねる

「御厨先輩は？」

「『足手纏いになるといけないから』って、自発的に残りました」

うん、事実だよ。あの人のスタンド『遠隔自動操縦型』だし……戦闘に参加出来ないし……

本当に一体何しについて来たんだろうねあの人……

気を取り直して俺はロンディネに指示を出した

「ロンディネ、お前は『ソード・アイ・ブラインド』で奴のスタンドを見てろ。そして奴がどう攻撃するかを見極めしんのすけにそれを言え。多少間違っつて構わない」

「それなら貴方が直接戦闘に参加すれば……」

「ヤバくならない限りは手出し無用と言われてるんで」

「そう言われているんなら僕がそうするのも……」

「これでお前が出すのは「口」であって一切「手」は出していない」

「それただの屁理屈じゃ……」

「マジな話その位なら別に構わないだろ？あいつのスタンドは生まれてでしかもどう来るか分からないからな……」

「了解承知つと……」

ロンディネは『サード・アイ・ブラインド』を発現した

一瞬仰け反った一瀬に、しんのすけはその隙を突いて首にチョップを食らわす

その速いスピードから繰り出される攻撃に一瀬は反応出来ても対処が追い付かず、まともに食らってしまふ

手刀が首から離れた瞬間、そこから展開するように刃が出る。その軌道上にあつたしんのすけの手をザックリと斬った

「ロンディネ、お前の……」

「刃が何処から出て来るのかはちゃんと目で捉える事が出来ている。だけどどう出て来るのかは出て来るまで分からないし分かったとしても早過ぎて口で言う前に……」

「あーもういい」

「言っておくけど言い訳しているつもりは」

「分かってる。それ含めて言わなくていい」

俺がお前の立場でも同じ事言うだろうな……本当に厄介なスタンドを身に付けた物だよ

「もしかしたら奴はあのスタンドの『新しい使い方』を思い付くやも知れないからな。それを攻略法を見付ける為に『スタンド』はまだ解除するなよ」

「はい」

一瀬はしんのすけに、短い小指から生えた刃で切りかかる

しんのすけは簡単に避けるが、薬指、親指、人差し指、中指と長さの異なる刃がそれぞれ数拍おいて飛び出てきた。しんのすけの右肩に人差し指の刃が突き刺る

しんのすけはそのまま突進し、体当たりをかました。俺達もだが一瀬はこれには予想外だったらしく、刃を出す暇もなく吹っ飛ばされた

「おっしやー！」

『しんのすけ、喜んでいる場合ではないぞ。奴のスタンドは極めて凶悪だ。早めに決着を付けないと負ける』

「でもどうするの？お前の攻撃は全部お前が直接触らないといけないんだよ？」

しんのすけの言う通りだ

『ハリケーン』の能力は「形態変化」。どんな姿になっても敵にダメージを与える手段は『ハリケーン』の直接攻撃以外の手段はない

そしてあいつのスタンドは接近したらマズい。先程の体当たりのような不意打ちが何度も成功する筈がない

こりゃマジで俺も手を出すしかないみたいだな……

『心配するな。私にはまだ手はある……あいつの刃を食らう事なく、パワフルに攻撃出来る手段がな』

「それ何だよ？」

『変身だ』

兜越しなのでよく分からないが、一瀬は若干目の前の光景に信じられないといった感じだ

俺がそう感じたのは、俺も目の前の光景にそう感じたからだ

目の前で戦っている知人が、変貌を遂げた

口元から上へと伸びる牙が生え、全身に産毛程の緑色の体毛が苔のようにびっしりと生え、全身が筋肉質の肉体。それには、野原しんのすけの面影は殆ど無かった

「何だ？その姿は？」

『この姿は確かに初御披露目だが、答えは出しているだろうか？』

「勿体ぶらずに教えろよ。確かに俺は察しは付いてるがそれはお前の能力を把握しているからだから」

『フツ……特別に一人十億万円（クレジットも可）払うのなら教えてやろう！今のしんのすけのこの姿は、私『ハリケーン』と私の本体であるしんのすけが一体化した姿！』

「本当だ。スタンド力はしんのすけの体内から感知してる……」

「ちょっと待て一つ疑問に思ったんだが聞いていいか？」

『何だ？』

「その形態があるんならさ、何で初めからしんのすけに教えなかったんだ？」

『だってカツ「悪いじゃん」の姿』

「そんな理由？」

もう色んな意味で信じられねえこのスタンド

「僕を小馬鹿にしてるの？体型が変わってそれで何が変わるとでも？」

一瀬は指から刃を出し、しんのすけに接近し至近距離で振るった

その攻撃に対し、しんのすけは『何もしなかった』

「『何が変わるか』……これで分かった？」

「！」

刃はしんのすけの皮膚に食い込み――そこでその動きが止まった

一瀬は必死に力を込めるが、全然動かない。寧ろ力の入れ方に問題があったのか、根元近くからパツキリと折れてしまう

しんのすけは、一瀬を突き飛ばした後顔面を狙って拳を放つ。一瀬は兜の正面から幾つもの刃を押し出すように出したが、拳はその刃を破壊し、顔面に命中した

スタンドの鎧は拳の形に凹み、一瀬は床にバウンドした

『一体化した私の筋肉は鎧の如き強度を誇る！そんな刃では皮膚を切る事すらも出来ん！』

一瀬は倒れた体勢から右手の指先をしんのすけに向ける。甲冑には、指先から肘にかけて線が浮かんでいた

それを確認した瞬間、何か金属のような物が落ちたような音がしたその音がしたと思われるしんのすけの足元を見ると、『五本の刃』が落ちていた

「ロンディネ……」

「あいつは刃を発射したんだ……原理とかは……言わなくとも分かるよね？」

「飛び出させた刃を、すっぱ抜かせたんだろ？」

ロンディネはコクリと頷く。厄介さが増したぞ。これで『何処からどう出て来るか分からず、そして離れていても射程距離内なら逃げるのが難しい』って意味になるからな

今のしんのすけの強味と言えば奴の攻撃でダメージを負う心配は無い事……だからこれは今のしんのすけを相手だとただの悪あがきでしかない

「発射する為に出した刃の線は消えていない……徐々にゆっくりと薄らいではいるけど……」

「発射したらそこからは暫くは刃を出す事は出来ない……」

両手をしんのすけの顔に向けて、刃を出す為指から線を浮かび上げさせる

一本の指から、大体五本の線が現れる。発射した右手の指からは、その両隣にそれぞれ二本、併せて四本が新たに出現している

他にも胴体からは、沢山の長さ二十センチ程の線が『黒髭危機一髪』の樽のようにあちらこちらに浮かんだ

しんのすけは一瀬に向かって駆け出す。それと同時に、一瀬はしんのすけに向けて浮かび上げさせた線から刃を発射した

「やっぱりものともしていない！このままぶちのめせるよ！」

「ああ……だが妙だと思わないか？効かないのは分かっている筈なのに何であんな事をするんだ？」

「確かに……！」

ロンディネの表情が一変し、しんのすけに向かって叫んだ。その時、既にしんのすけは攻撃が届く距離まで詰めていた

「右に跳べ！」

そう叫んだ瞬間、一瀬はしんのすけへと左手を振るう。しんのすけは言われた通り右へ跳んだが、右肩がすっぱりと切れ、傷口から血が滲み出た

「バ……バカな……」

「さっきあんた言ったよね？『そんな刃じゃ皮膚を切る事も出来ない』と……だから、『刃を変えてみた』」

一瀬の左手の小指からは、今までより薄そうな刃が出ていた

「な……何で……」

「簡単だよ。『スタンドから出る刃』って事は、違う言い方をすれば『刃もスタンド』って事だよね……『長さが自在に出来る』って事はもしかしたら『薄さも自在に出来るかも』って閃いたんだ……上手くいって良かったよ」

そう言って左手の甲を見せる。目を凝らして見ると、小指の指先から手首にかけて、シャーペンで書いたような細さの線が伸びていた

「これでその形態にも攻撃が通じるようになった……」

「瀬は、さぞ愉快そうにそう言った」

かなり遅めの決勝戦？（後書き）

一瀬のスタンドって考えてみると使い方が次々と出て来て面白いです

次の形態は『一体化』、実体ですから誰にでも見えます

では、次回も宜しくお願いします

かなり遅めの決勝戦？（前書き）

しんのすけ対一瀬江河戦決着！

かなり遅めの決勝戦？

「『薄さ』まで考慮するとその刃を出す為の線を浮き出すのに『長さ』や『出し方』だけのとは比較にならないまでの集中力を必要とするけど……充分だ。これはそれに十二分に値する」

「ヤバイ……一本だけ。一本だけだが……その一本は今のしんのすけの強味を帳消しにってしまった……」

しんのすけに向かって左手の小指から生えた刃を振るう。しんのすけはミリ単位まで引き寄せてギリギリで避ける

瞬間、一瀬は右手を翳す。その生命線に沿って『線』を浮かべ、それをしんのすけの左耳に狙い、刃を発射する。しんのすけは刺さる寸前で両腕を動かす。左手で刃を弾き、右手で一瀬の右腕を掴み、力ずくで投げ飛ばした

「この場合判定はどうなるんだろう？一本？技あり？有効？」

「知らねえよ、てか試合の内容柔道じゃなくて剣道だし」

「あいつのスタンドからさっき発射した分の刃の線、全部消えた」

「多分そう時間はかからないだろうな……どっちに転ぶとしても」

俺達がこうしてだべっている間にも、しんのすけと一瀬のほぼ五分

の攻防は続く

五分と言っても、一瀬の方が若干優勢で、しんのすけはやや後手に回っている。当然と言えば当然だろう。あいつの刃はスタンドと一体化しているしんのすけを切り裂く事が出来る。それでも五分と言えるのは、あいつの左手の小指から生えている刃は簡単に作る事が出来ない事だ。何本でも作ればいいのにそれをしないのは、本人が言ったように作り出すには相当の集中力が必要で、目覚めたばかりのあいつには戦闘中にそれだけの集中力を回すのが難しいからだろう

「しっ！」

「うおっと！」

通常の刃が何本も生えた右足でしんのすけの顔目掛けて蹴りを放つ。狙いは目

それをしんのすけは瞼を閉じてガード。放った足を払いのけるが、しんのすけの筋肉の鎧すら切り裂く小指の刃は既に振るわれていた

それを目で確認した瞬間、しんのすけの体は行動を起こした

右拳を振り下ろして小指の刃を破壊し、左拳を顎に叩き込んだ

「これでお前の切り札は無くなったな！」

「そうかな……この身を纏う僕のスタンドはまだ健在だけど？」

「その薄い刃は勿論、普通の刃を作る暇も無い程のスピードで……今のオラのパンチを連続で叩き込まれたら……その鎧でも流石に壊れるよね？」

「やってみるよ！やれるもんならなあ！」

スタンド全体に『線』を浮かばせる

その直後に、しんのすけは拳のラッシュを一瀬に叩き込んだ。ラッシュのスピードに刃を出すのが追い付かず、為す術もなく全て食らった

線が消えた事でラッシュを止め、最後に顔面に鋭い拳を叩き込んだ

「自分に君は倒せなかったか……これでも特訓は欠かさず真面目にやっていたつもりなんだがな……」

「そう落ち込まないでよ、オラだって『ハリケーン』と一体化出来るって事教わらなかったらやられてたんだから……」

スタンドバトルを終え、互いにスタンドを解除した後、負けた事が余程ショックだったのか、一瀬は座り込んで俯いている

しんのすけは元気を出そうと慰めているが、これっぽっちも反応しない

当たり前だろ。勝者の慰めなんて敗者にとって辛いだけだし、何より、『違うからだ』

しんのすけがかけている言葉も、一瀬がどうしたかったのかも

気がつけば俺は立ち上がって、二人のもとへ、正確には、一瀬の前に座り込み、向かい合った

「お前はどうしてしんのすけにあれだけ固執していたんだ？」

「聞いてなかったんですか？」

「質問に答える」

「決勝で……彼が帰って僕が繰り上がって優勝したから……僕はその優勝が納得いかなかったから……」

「そのトーナメントは何のトーナメント？」

「剣道のトーナメントですよ……」

「そうか……じゃあお前は勝負すらしてないのに負けたと思ってるんだな……それじゃしんのすけが決勝に出てたとしても確実に負けていたな」

一瀬は顔を上げて、視点を合わせていた俺の胸倉を掴み上げる。引張る事は体格や体重で出来なかったが、握力は強く、服が破れそ

うだった

勿論振り払おうと思えば振り払えるが、そんな事はせず、怒りを宿した視線を黙って受けた

「あなたに何が分かるんだ……」

「分かる訳ないだろ。本来どうしたかったのか、それすらも見失っている奴の気持ちなんて考えたくもない」

胸倉を掴む手の力が緩んだ

反応したから大丈夫だろうと判断し、手を振り払って言いたい事を言ってしまった

「もう一度『何故自分はそうしていたのか』をじっくり考えて答えを模索してみる……すぐに答えは出て来るだろーからな」

(僕が野原しんのすけと……『何をして決着をつけたかったのか』……?)

数秒の間が過ぎた後、一瀬は近くに転がっている竹刀の柄を握った

「(そんなの言われなくても、訊かれなくても初めっから決まってるじゃないか……) 野原しんのすけ!」

「何？」

「僕と……『剣道』で戦って下さい！」

「おお！」

御厨先輩に連絡し、一時避難させていた館長や門下生達を道場へ戻した

色々破壊されていた場所に関しては白蟻のせいで壊れたと誤魔化し、二人の試合のやり直しをする事となった。当然だが胴衣を着た上でだ

「始め！」

「広東めーん！」

しんのすけは面を打つ。一瀬は竹刀で受け流し

「胴」

竹刀が離れたと同時に持ち替えて胴打ちをした

「胴あり！」

「これでお互いに崖っぷち……泣いても笑っても次で決まる……」

「そうだね……」

「始め！」

一瀬は胴打ちをするも、しんのすけはしゃがんで避ける。竹刀が通り過ぎた後に立ち上がるが、一瀬はしんのすけが立ち上がりきると同じタイミングで竹刀を持ち替え、逆ベクトルに振るった

「これで……」

「鶏の鳴き声、こてこつこー！」

一瀬の攻撃が当たる直前に、しんのすけは竹刀を握る一瀬の手を叩いた

「小手あり！勝負あり！」

「やった！勝った！」

「ふー……負けたよ、凄いなしんのすけ君」

「……満足した？」

「十分ね……そして、代々木君に勝った後君が帰ったの……」

その話が持ち出され、しんのすけは罰の悪そうな表情となる。今回の事の始めはそれなのだから無理はないが……

「今なら少しだけ理解出来る気がする……そして、君と戦えた事が今凄く嬉しい！」

そう言つて笑顔で手をしんのすけに差し出した。しんのすけはその手を握る

一瀬江河 スタンド名：激しい雨（Hard Rain）（命名、

瀬上除夜）

再起可能。その日以降、

自分流剣道場 除夜が義母に頼み、破損した部分を直して貰った

瀬上除夜 この後、優太の家に行き花と線香を上げた

To Be Continued…

しんのすけの友人、風間トオルは、英会話塾を終え、書道教室へ足

を進めていた

その途中、一人のバックを持った男から声を掛けられた

「ごめん坊ちゃん、今人を捜しているんだ。もし心当たりがあるのなら教えて欲しいんだけど……いいかな？」

「構いませんが……どういった人ですか？」

「いや……変わった人……自分を隠さずに生きている人と言ってもいいですね。他にも悪い事に手を染めている人とか普段弱々しくて中に溜め込んでいそうな人とか……誰でもいい。そう言った人を知りませんか？」

「何でそんな人を捜しているんです？」

トオルは質問する

男は淡々と答える

「人に眠っている『特別な才能』を開発する為……僕にその『才能』の存在と知識を教え、引き出してくれた人からの話と半年近くの『開発した経験』からそう言った人達がその『才能』が引き出される可能性が強いと言っている……」

男の異常性を感じたトオルは、一言謝って男から離れる事にした

男は、トオルの右肩をがっしりと掴んだ

「今日だけで17人の『才能』を引き出した……確か君は……『野原しんのすけ』君の大親友なんだって？君に興味が少しだけ出て来た……幸い人は周りにいないし……『才能』をどう引き出すか……それを『体験』して貰おう……」

バックのジッパーを開ける。それには、弓と一本の『矢』が入っていた

男は『矢』のみを取り出した

「重要なのは……『矢』の『鏃』のみだからね……」

トオルに目掛けて、『矢』を振り下ろした

かなり遅めの決勝戦？（後書き）

やっと終わりました。最後は普通に剣道試合で

スタンド名はボブ・ディランの楽曲から

『矢』の所持者と風間君が接触。17人を射抜いたというのは確かですがその全員を出す気はありません。ただそれくらい大勢の者を射抜いているんだと考えて下さい

それでは

スタンド紹介？（前書き）

スタンド結構たまつたので二回目を行います

最初の方は第六部までで確認されたスタンド使いはどつやってスタンド能力を得るのかと『矢』の事を書いてみます

スタンド紹介？

- 1、生まれながら 能力にもよるが物心ついた時から使える者もいれば、経緯を経て気付くまでスタンド能力に無自覚な者もいる
- 2、血縁者が強いスタンドに目覚めた場合、その影響を受けて目覚める
- 3、『矢』に射抜かれる事で目覚める 誰もが得られるという訳ではなく、スタンドの素質が眠っている者のみを得られる（単純に『矢』で傷付けられた時のダメージから生き延びられたらスタンド使いになれるという可能性もある）
- 4、エンリコ・プッチ神父のスタンド『ホワイトスネイク』により『DISC』を与えられる スタンドのDISCの方は、対象にスタンド使いとしての素質と、そのスタンドとの適合性が求められる。また、この方法は純粹な『発現』ではなく一個人の能力による能力の『移動』である事から他の方法とは一線を画している
- 5、長年の分野の修業の成果として発現する

第七部では、アリゾナ砂漠の『悪魔の手のひら』という隕石によって出来た地帯に足を踏み入れたり、『聖人の遺体』を手にする事によりスタンド能力が目覚めた者達がいるが、これらは除外しておく

弓と矢

製作者及び製作方法が不明の石の鏃がついた矢。弓と矢とのセットで呼ばれる事もあるが、『鏃』のみでそう呼ばれる事もある
『鏃』によつて傷付けた者のスタンド能力を引き出す力を持つ
その原理の現在までの最有力説は、『鏃』に存在する『ウィルス』が体内に入り込み、生き延びた者にご褒美のように力を与えるウィルス進化説

『矢』には意思があり、勝手に動く場合もある

現時点で確実に存在している事が判明しているのは、1986年に『ディアボロ』がエジプトで偶然発掘した六本（内一本は破壊されている）だが、他にも存在している可能性はある

スタンド名 - スウィートハット

本体 - 藤方蓼花

群生型

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - C 成長性 - A

パワー型

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - D

持続力 - C 精密動作性 - C 成長性 - A

能力 - 超音波を発する

？群生型ではエコーローケーションで探し物を探す。群生型は二千もの数を出せるが、多ければそれに反比例して精密度合いが下がる
？パワー型では超音波で攻撃したり、防壁を作ったりする事が出来る

スタンド名 - インフェミー

本体 - 宝来瑪瑙

破壊力 - E スピード - E 射程距離 - B
持続力 - B 精密動作性 - D 成長性 - A
能力 - 強力な凝固液を吐き出す。完全に固まるには少しの時間が
要だが、凝固しきれば並大抵の攻撃では破壊出来ない。成長する可
能性があるが、本体も周りの人間もそれに気付いていない

スタンド名 - ゼブラヘッド

本体 - 白倉昌博

破壊力 - B スピード - A 射程距離 - C

持続力 - C 精密動作性 - A 成長性 - C

能力 - 物体に『引き出し』を作り、空間を作る

？幅や底の深さが異なれば、同時に開ける事は出来ないが同じ場所
に幾つでも作る事が出来る

？引き出しの中は時間は普通に経過するが、空間は固定されている
？引き出しを引き抜く事で、その部分の支えを無くす事が出来る

スタンド名 - バーニング・スカイ

本体 - 宮嶋門貴

破壊力 - E スピード - D 射程距離 - C

持続力 - C 精密動作性 - D 成長性 - C

能力 - 生物がこのスタンドの体である火に触れた場合、感情を酸素
として燃え続ける為気を失うか死ぬまで消える事は無い。火がつい
た状態で感情が高ぶると燃える勢いが増し、気を落ち着かせると逆
に火の勢いは沈静化する

スタンド名 - ルーピング・エンド

本体 - 杵島彩美

破壊力 - E スピード - A 射程距離 - E

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - E

能力 - スタンドの像に触れた物体を、像に沈める。幾らでも沈めれる

スタンド名 - トランクライズ

本体 - 猫 (名前は決められてない)

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - C

持続力 - A 精密動作性 - C 成長性 - D

能力 - 纏う戦闘機のスタンド。両翼等の装備からエネルギー弾や光線を発射する

スタンド名 - ブラウン・シュガー

本体 - 蔵内萬

成虫

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - C

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - B

幼虫

破壊力 - C スピード - E 射程距離 - C

持続力 - C 精密動作性 - E 成長性 - A

能力 - 顆粒の卵を射程距離内に散布する。卵は本体の意思で孵る。
幼虫は基本的に普通のものと同様に生態は変わらない

スタンド名 - マッドキャット

本体 - 高橋一葉

破壊力 - C スピード - B 射程距離 - C

持続力 - C 精密動作性 - B 成長性 - A

能力 - 弦の振動により生物の脳や神経に介入し、操作する

? 音を介して大勢の人間を操る

? 痛覚を無くして体の負担を誤魔化す事が出来る

? 弦を生物に直接繋いで操る

スタンド名 - トータス

本体 - 高橋夏帆

破壊力 - E スピード - E 射程距離 - 密閉空間ならほぼ全域

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - E

能力 - ? 物を溶かした水を与える事で、溶かした物の性質や特性を持つ『煙』を噴出する

? 煙の比重は空気より重く、溶かしている物の濃度が濃い程重くなる
? 加湿器に取り付き、実体化している為誰にでも見える

スタンド名 - 激しい雨 (Hard Rain)

本体 - 一瀬江河

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - C

持続力 - A 精密動作性 - C 成長性 - A

能力 - 身に纏ったスタンドの甲冑から、『線』を浮かばせ、そこから刃が飛び出させる。出し方、薄さ、長さは自在で、刃を飛ばす事も出来る

スタンド紹介？（後書き）

二回目のスタンド紹介は以上で終わりです

始めは書留のない事を書きました。「矢」に関しては基本知識が主です

これからの予定は少し新展開的な展開を繰り出した後ひまわりやマサオ君、咲良達のスタンド能力を自覚させてあげたいと思ってます

これからも宜しくお願いします！

束の間の安寧（前書き）

少しほんわかした話……のつもりです

束の間の安寧

自分流剣道場でのしんのすけと一瀬江河との戦いから早二週間が経過しようとしていた

その間自分に新手の『スタンド使い』が現れていないし仲間や知人からも現れたとも聞いておらず、この二週間ばかり久々に平凡な日常を満喫する事が出来た。『矢』の所持者に関しての捜査や、ロンディネの追っている麻薬密売人の捜査は行き詰まってはいたので少し歯痒かったが、それはそれこれという訳で、ここ二週間ばかり普通の学生生活を送っていた

週末近くの金曜日の放課後、俺は購買部で購入したキュウリを調理部で貰った味噌をつけてかじりながら、図書室で貰った廃棄予定の推理小説を読んでいた

「用事があるから買つといってくれて言ってたけど、まさか味噌を貰う事だったの？」

「悪いのか？」

「いや、別に」

俺の幼馴染みの親友である優太が俺に声をかけ、ペットボトルのポカリスエットを渡してくれた。HRが終えた後ジュースを買いに行ったので、俺の分も買ってもらったのだ

「はい、お釣り」

「悪いな」

「いいよ、ついでだし……それよりさ、そろそろ決めなくていいの？」

「何をだ？今二人目の犠牲者が主人公の目の前で首を切り落とされたんだ」

「……小説の描写は説明しなくていいよ、いや、部活」

「お前に言われなくても百も承知だよ……だけど変な話……あの妖怪万年女子中学生は『今抱えている問題を解決するまで部活は後回しでいい』って」

「……おばさんがそう言ったの？」

「不思議な事にな」

不思議なんてもんじゃないだろう。義母とは物心ついた時からの付き合い合のだが、時々俺が誰にも話していない事や口にも出していない事を分かっているかのように口出しする時が偶にある

今回も、まるで俺が今この街で起こっている事件に深く関わっている事を見透かしているようだった。もしかしたら俺に『スタンド能力』があるのをとくに察しているのかも知れない（スタンドという能力の存在は知らずとも）

因みに、優太や宝来を始めとした俺の中学時代からの友人や関わりのある先輩、後輩達は彼女の事を『おばさん』と呼ぶ。理由は、彼女がそう呼ぶようキツク言っており、『お嬢さん』『お姉さん』等と言つとマジで怒るのだ

その理由は本人曰く、『見え透いたお世辞は聞きたくない、そこまですぐに嫌いだからおばさんでいい』らしいが、その言葉に俺を含めたみんなが眉を顰めた

で、俺が調子に乗って『ばあさん』と言ったらピアノ力で叩き付けられたのを覚えてる。あれは痛かった

「でもさ、除夜は陸上部とか調理部とかに誘われてるじゃん。そっちに行かないの？」

「少し自力で探してみる……それだけだ、じゃ帰ろっか優太、丁度解決編まで読み進めた所だしキリがいい」

「そう言えば除夜はさ、時々怪我して登校したりしんちゃんや須藤さん達とよく一緒にいるよね……あれはどうして？」

「突然だな……どうしてだ？」

「いや……最近除夜も宝来さんも僕と一緒にいる時間が少ないから……いや、どちらかというと、僕を遠ざけているような感じがして

寂しいんだ……」

「……………」

「何か問題でも抱えてるの？それは誰にも言えない事？」

「……………」

俺は溜息を吐いた

思い返してみればその通りだ。こいつの言う通り俺は最近こいつを、いや、周りの人達を自分から遠ざけている

これは俺達が抱えている問題にこいつを、周りの人達を巻き込ませないようにしているだけなのだが、理由が分からなければ理解してくれはしない。納得してくれる訳がない

話したとしても荒唐無稽過ぎて信じてはくれないだろう。だけど、心配してくれる人達は、話して欲しいんだ

俺は電柱に寄りかかってもう一度盛大に溜息を吐いた

「本当に駄目だな俺は……少し夢中になるとそれ以外に目がいかなくなってこんな当たり前で大事な事が分からなくなる……」

「除夜？」

「優太、明日の昼辺り暇か？」

「うん」

「じゃあ出された宿題を今晚片付けて明日家に来てくれ、久し振りにゲームしたり縄跳びしたり缶蹴りしたりしようぜ」

俺のこの台詞で、優太は笑顔を浮かべた

「俺変な事言った？」

「違うよ。昔を思い出しただけ……懐かしいな、小学時代や中学時代は院のみんなと一緒によく遊んだっけ」

「中学時代は宝来達も加わったから賑やかになったな。古賀は喧しかったな。比留川も意外とやる時はのるし。三谷はあんまし積極的に体は動かさなくて、本荘は気分で参加していたな。そして時々先輩達も混じって……」

「一番楽しかったね」

「あつと言つ間に過ぎて、俺達以外はみんな違う学校に行つちまったがな……当たり前だけどバラバラになるのは辛いな」

「卒業式の後のおばさんが企画してくれた卒業祝いの宴会は楽しかったね」

「あれはあのもしかしたら三桁くらい歳誤魔化していた事が分かってても驚くにも値しないおばはんがやりたかったただけだろ、現にあの

人が一番はしゃいでたし……卒業から一ヶ月程度しか経ってないけど思い返してみれば会いたくもなるな。元気かな」

「元気に決まってるよ、現に古賀さんや三谷君は相変わらずだったしね」

「会ったのか？」

「うん、ちょっと前に勉強教えて欲しいって頼まれて」

「羨ましいな、知らなかったよ……」

「落ち込む必要も意味も無いよ。長い付き合いでも知らなかった一面はあるし、短い付き合いでも共通点があるなら簡単に分かり合えるもんなんだから」

「それは俺に対する嫌味か何か？」

「バレたか」

「嘘でも否定せい！兎に角明日沢山遊ぶぞ優太……宝来もどうせ暇だろうから呼ぶが文句は？」

「無いよ」

「じゃあ宝来には俺から連絡しとくから……宿題は今晚終わらせとけよ。量は少ないしお前は勉強出来るからすぐ終わるだろ？そんなじや今日はそれで」

「うん、明日本当に楽しみにしているよ、心からね」

優太は大きく手を振り、俺を見送った

今の時点で俺は、明日が来るのを楽しみにしていた

楽しみにしていた明日が、あいつの命日になるなんて、この時俺は
思いもしなかった

『もしもし……何の用ですか？僕バイトの帰りで今眠いんですよ…』

『こんな時間に急にごめんなさい。けれどちょっとお願いがあるんだ。明日の昼、時間は空いてる？』

『空いてますよ。明日はバイト夕方からですし』

『ある場所に来てほしいんだ。場所は明日話す。そこで』かなり重要な話』があるから』

『……その話とは？』

『それはその時話す。それじゃ』

受話器を本体に置き、また受話器を取って違う家の電話番号を押した

束の間の安寧（後書き）

一瀬との戦いから大体二週間くらい経っていて、除夜君は比較的普通の日々を送っています

親友と一緒に過ごせる翌日が楽しみな除夜君ですが、また何か波瀾な予感が……

クロスタウン・トラフィック？（前書き）

休みは何時だって突然終わりを告げる……

クロスタウン・トラフィック？

「除夜君除夜君！おっはー、朝だよ」

朝のニュースと義母の声が耳に入る。瞼を少し開くと、朝焼けの光が入ってきた

目を擦りながら起きあがると、俺の視界に信じられない物を捉えた

「よく起きたね除夜君、十時間以上眠っていたけど大丈夫？」

「……あんたの頭が大丈夫なのか？」

目に入った義母を見て、それを真っ先に口に出した

何故そんな事を言ったのか、それは義母の格好にある。義母の今の格好は、灰色の地にハイビスカスの花が描かれたビキニ姿だった

夏の昼辺りの時間帯ならまだ理解出来るが、終わりに差し掛かっているとはいえ四月に、それも朝っぱらからそんな格好でいるって……

「何故そんな格好でいる？」

「愛する息子が喜ぶと思って」

頬を赤らめて体をくねらせる我が親に、俺は大きく溜息をついた
朝っぱらからこんな格好で起こしに来られたら、普通は引く。それが義理で、外見はかなり若々しくとも母親なら尚更だ
そして俺はその普通に分類される感性の持ち主である

「あんましお気に召さなかったようだね。やっぱりあれ？こんなおばさんより若い娘の方が良かった？」

今でも外見は充分若い人が自分の事を『おばさん』と呼称するのは違和感があるな……その違和感に慣れてる俺もどうかと思うけど……

「安心して、お気に召さなかったのは事実だけどその理由はもっと根源的な所にあるから」

「もっと布地少ない方が良かったって？」

「それをギャグではなく本気で言っているのだとしたら全力であんたを叱る」

「それより御飯だから布団畳んでリビングに来てよ。もうみんな起きてるよ。後は除夜君だけだよ」

「そうか……それじゃまずあなたは着替えろ、せめて上から何か着ろ。上下共にだからな」

布団を畳んで寝間着から私服に着替え、自分の席に座った。今朝は中学生組が担当で、俺に仕切りに味を聞いてきた

ウチは社会に出た時の為に最低限の生活能力を身に付けるといふ義母の方針もあり、料理や掃除は当番制である。料理に関しては俺や義母、他にも料理の上手い子供や職員が監督、指導している

「新聞の地方欄さ、最近変なのばかりやってるよね兄ちゃん」

「そうだな……一昨日は駅で突然集団で飛び降り自殺が発生したんだっけ？それで昨日はパトカーの衝突事故で……今日はどんなニュース？」

「除夜君は朝刊を朝一番に読むのが好きなのに今日のはまだ読んでないの？珍しいね。明日隕石が降るのかね」

「小さいのなら海とか砂漠とかツンドラとかに落ちるかもね」

今日起きてすぐに朝飯食べるのを急かされた俺に新聞読む暇があったかどうかは俺が一番分かってるだろ

大体あんたが膝に乗せて広げているその小さい文字が書かれていて写真が載っている紙はなんだ？『自称』おばはん

瞬間、義母から睨まれ、かなり痛い視線を浴びせられた

「何か思った？」

「イエ、何モ……で義母さん、今日はどんなのが載ってるんだ？」

「一面に載ってるけど大した事件じゃないよ。ただこの近隣にある刑務所から囚人が十数人脱獄したんだって。それも殆どが大勢の人間を殺した死刑囚」

「十分過ぎる程大した事件だよ！大丈夫かこの辺！」

「写真や名前が公開されてるからすぐに捕まるでしょ。捕まらなくても自由に身動き出来ないよ」

「そうだといいが……このタイミングでこんな事態が起きるなんて……『スタンド使い』が関わっているかも知れないな」

「まあ何でもかんでもそう決め付けるのは良くない事だけど調べてみる価値はあるな」

「俺がこう考えていると、義母さんは箸の先端を俺に向けた」

「除夜君」

「何だよ……」

「言っとくけどこれはお巡りさんのお仕事なんだからね、民間人の君が自分から関わるうとするんじゃない！いいね？」

「はい……」

沢登家の広いリビング。そこで現在、ここ唯一の住人である沢登優太が外出する為に戸締まりの確認をしていた

「窓よし、勝手口よし、ガスの元栓よしと……荷物はお土産の菓子折りだけでいいし……出発しますか……本当に楽しみだな……本当に……」

優太は家から出て、玄関の鍵を閉めて門を出た

門から出て数メートル離れると、優太が歩いていった方向と逆の方向からこそこそとした様子で入れ違いに人影が一つ沢登家の門を潜った

「除夜兄、今日優太兄ちゃんが来るって本当？」

「ああ、マジだ」

「懐かしいな、何時ぶりだろう？」

「そこまで言う程経ってないだろ？最後に来たのはせいぜい一ヶ月近く前だしな」

そう言いながらも小学校時代や中学時代はより頻繁に来ていたなとも思った俺だった

優太は院の子供達に人気があり、俺より子供達と遊ぶ時間が長い時もしばしばあった。若干寂しかったが反面すぐ子供に懐かれる優太が羨ましくもあった

因みに今日は義母は県外にいる昔からの友人と茶を飲みに行き、咲良は友達と遊びに少し遠くへ出掛け、どちらも夕方までは帰って来ないらしい

「おーい除夜、おはよう、元気？」

噂をすれば影。優太が正面から手を振ってやってきた。俺はそれに対し簡単に手を振って返す

子供達は優太の姿を見ると、まるで砂糖に群がる蟻のように集まってきた

「相変わらず人気者だなお前」

「そうみたいね……ここ最近来てないせいかな……」

「済まんな色々……お前等嬉しいのは分かるが散れ、優太兄ちゃん困ってるだろ」

「はい」

「はい除夜、お土産の草加せんべい」

「そんな気を使わなくていいのに」

「『ここに来るのも一緒に遊ぶのも久々だからね』」

「強調して言わんでくれ俺だって悪いと思っっているんだからさ。トイレ行った後お茶淹れて来るからその間こいつ等と遊んでいてくれ」

「了解承知」

「お前等もこいつをヘトヘトにしたり困らせたりするんじゃないぞ」

「はい」

用を足し終えた後、俺は人数分のお茶を淹れようとしたが、茶葉が無かった為足して淹れた

湯呑みに淹れて持っていきこうとした時、俺の視界に『変な物』が入った

「……『ボール』？」

そう、『ボール』だ。形は球形というより楕円形で、大きさはピンポン球を一回り大きくした程で、色は水色。メロンみたいに白い網目が入っている

そんな物が幾つもふよふよと浮かんでいた。それもただ浮遊しているんじゃない。生物のように動いていた。『浮いている』というより、どちらかといえば『飛んでいる』という表現が合っているだろうよく見ると若干透けて見える。もしやと思い、『スタンド』で掴もうとすると普通に掴めた

「やはりこれは『スタンド』だ……」

掴んだそれを手放すと、群れへと戻っていった

沢山浮かんでいるという事は、群生型の遠隔操作のスタンドだろう。今日に入る物を全て潰してもいいが、能力を見極めない限り迂闊な攻撃は逆に危険だし、それに潰した所で焼け石に水かも知れない。やはりもう少し観察してみよう。行動に移るのはそれから遅くない

「おーい除夜兄、お茶まだあ？」

「ああ悪い。今から持ってくるから」

お盆を持ち上げると、飛んでいる内の数体のスタンドが、電気ポットに取り憑いた

スタンドが取り憑いた電気ポットは、四本足の怪物へとその姿を変えた

「ブギイ……」

電気ポットが変形した怪物は俺に向けて口を開け、熱湯を発射した

クロスタウン・トラフィック？（後書き）

前半はこれからの展開を考えてほのぼのを含めた会話をしてみました

まあ上手く消化出来たらいいんだけど……

新手のスタンドに除夜はどうするか

次回もお楽しみに

クロスタウン・トラフィック？（前書き）

物に取り憑いて実体化する無数のスタンド相手に除夜は？

クロスタウン・トラフィック？

吹きかけられてきた熱湯に対し、俺はお盆で防いだ。引っくり返した為当然湯呑みは床に落ち、幾つか割れてしまう。足元に熱いお茶がかかってしまったが、堪えた

怪物と化した電気ポットは第二撃目を食らわせる為、開いた口を俺に向ける

「『プラネット・ルビー』！」

それをされる前に、俺のスタンドがその拳を叩き込む。一撃で粉々に砕かれた

「強度は少し上がった程度で俺のプラネット・ルビーで充分破壊は可能……一番の問題は」

飛んでいるスタンドの内数体が床に転げ落ちた湯呑みに取り憑く。取り憑いたスタンドがアメーバのように体を伸ばし、小さな破片を寄せ集める。そして体が少し大きくなって手のひらサイズの怪物が沢山生まれた

それだけでなく、リビングに飛び回る無数のスタンド達は、電子レンジ、冷蔵庫、トースター、炊飯ジャー等の電化製品、お玉や食器、茶碗や箸、皿等に取り憑き、怪物化した。四本足のもの、人型に近

いもの等その形状も様々だ

それらの内小物勢が一斉に多方面からかかって来る。それらを次々と砕くが、前の敵を砕いている最中に怪物化した冷蔵庫（人型）が俺の後ろに回っていた

それに気付いたのは右肩にそいつの攻撃が当たってからだ。幸い上手く命中しなかったのだが『かなり痛い』で済んだ

逃げた方がいいと考え、少し遠くにいる怪物を『軸』にして瞬間移動する。その時にはあいつは攻撃を繰り返してきていた

対象がいなかったなのでその攻撃は床に叩き込まれる。床に穴が開いた

（……………まともを受けていたらその時点で俺でも数日は病院の世話になっていたな……………しかも）

粉碎した怪物の残骸に新しくスタンドが取り憑いて合体して新しい個体が生まれている。つまりこいつ等は幾ら倒そうが無駄で、確実な対策は何処にいるのか分からない本体を叩くしかないのだが……

（どう捜そう……………）

こんな敵がウヨウヨいる中で、果たして無事に本体を発見する事が出来るのだろうか？

仲間を呼ぼうにも、電話を使えば取り憑いて怪物になってしまうのがオチだろう

「あれ？」

さっき廊下とこの部屋を繋ぐ引き戸が動いたような音がした

まさかと思いはんの一瞬だけそっちに顔を向けると、そのままかだった

本棚、教科書、ちりとりや箒、掃除機等の掃除用具、洗濯機やテレビ、ラジカセやら玩具やら物置にしまっていたストーブや扇風機やらが怪物化したのがウジャウジャと押し寄せていた

「これで分かった事がある……本体は絶対にこの院の中にいる……」

でないと物置にしまっていたストーブやらに取り憑いているのは納得いかない。俺がこいつ等を潰している時に置いてある場所を探し出し、何処か壊れた音がしてない以上、慎重に物置のドアを開けたんだ

唯一幸いな所を上げるとすると、怪物になった家電品はその機能を使っていない事だ

理由は簡単。機械類は『動力』である電気の供給が無いから使えないだけだ

まだ不安要素は十分ある。まずこの何処かにいるであろう本体を探して倒さないといけないし、何よりもまず無関係な優太達を逃がさなくてはならない

「一人は辛いな……」

「激しく同感だよそれは……」

かなり聞き覚えのある声があった

聞こえた方向へと顔を向けると、優太がいた

「お前……何時の間に……」

「一人が辛いのなら誰かに頼れば済む事なのに……変な面子やプライド、そして君みたいに妙な責任感を持っている奴はそれをしようとしな……愚かじゃない？」

「優太……俺の事はいいから子供達を避難させといてくれ……言いたい事は分かるが何が起きているのかは聞くな、優先すべきは……」

「安心して、とつくに避難させてるよ……この院にある色んな物があんな訳の分からない怪物に変わっていくんだよ？妙だと感じるでしょ普通……何が起こるか分からないけど何か起きてからじゃヤ

「バイと思ってね……院の近くの公園に避難させといたよ」

「グッジョブ！」

「一番ベストな判断だ優太、お前はこういう時は現状を把握していないように把握している」

「てあれ？何でお前は避難してないの？」

「ん？ああ、君を呼びに行ったんだよ。置いてく訳にはいかないから」

「……うん、正しい判断だ。本当に」

「その必要は無いみたいだね。こいつ等は明らかに君を狙っている……そして、今見ていて分かるけど……君は『特殊な能力を持っているんだね』？そして、君が僕達を遠ざけている理由はそれにある……だろ？」

「……今は訳は聞くな。ここは危険だから離れている」

後でちゃんと説明してやらないとな。今この街で起こっている事とか。こいつは聡明なんだ。最初は難色を示すかも知れないけど分かってくる

そう思っていると、優太とは別の、聞き覚えのある声が出た

「瀬上君！その男から離れて！」

「……………宝来？」

俺の旧友、宝来瑠璃が足元に自分のスタンドを出して土足で入ってきていた。何やら、何時もと雰囲気は何処か違う

何故か肩に背負うバックを背負っているし、何よりこいつは今、優太を「沢登君」ではなく「その男」といい、敵を見るような目を向けていた

宝来のスタンド『インフェミー』は口から凝固液を吐きかけ、怪物の動きを止める

「瀬上君、私は君にあの日から相談したい事があったんだ……何故この事で君に相談しようと思っ立ったのかは自分でも分からない。多分そこいらの大人よりは真面目に聞いてくれるだろうなと思っただんだと思っ」

宝来は顔を俯せ、それでいて俺達にきちんと届く大きさで話した

「最初は錯覚だと思った。だけどすぐに違っつて分かった。だっつて、

こんなにも『痕跡』がはつきりと残っているんだもん」

袖を捲り、俺達に『腕にある穴』を見せる。『弓と矢』で射抜かれた痕跡を

「瀬上君はあの学園祭の後粗方説明してくれたよね？」「何者かが俺を殺す為に『矢』を使ってスタンド使いをこの春日部で増やしている」って……で、その犯人像で一番有力なのは私達の通う学校に籍を置き、自宅から学校までそう離れていない人物……そう言ったよね？」

ああそう言った。逢坂先輩の話から現実的に考えてこの推測を打ち立てたんだ

「それで話は『私が瀬上君に話したかった事』に戻すけど……覚えてる？今月の初めに沢登君の家で四人で遊んだの」

「覚えてるよ」

宝来の言ってるのは、優太が新作の対戦型ゲームを手に入れて俺と宝来、それと義母さんが誘われて優太の家に来た日の事だ。何度やっても義母さんが圧倒的大差をつけて一位で宝来こいつがビリだった

それでゲームに飽きた義母さんがかくれんぼを提案し、俺達は乗った。俺がじゃんけんで負けたから鬼になったんだ。宝来は隠れるの

が上手くて結局降参したんだっ

「古いクローゼットの中に隠れようとして、その中で私は壁に立て掛けてあった『ある物』を見つけた……そう」

肩に掛けてあるバックを下ろしてジッパーを開け、その中からそれを取り出した

古い弓と、石で出来た鏃の『矢』だった。間違い無くスタンド能力を引き出す『弓と矢』だろう。俺自身はそれを初めて見るが、何処かで見たような気もした

「これをね……私は最初ただの骨董品だと思つて興味本位で『矢』を取つただけ……その時に少し体勢を崩しちゃつて腕に刺さつて……そのショックでか気を失つたんだ……目が覚めたら『矢』は抜けてたし穴は空いてたけど血は出てないし痛みも無いから『矢』を直して瀬上君にこの事を話そうと……」

「何で今になつて話すんだ？」

「何時も何処かタイミングがずれてちゃんと話せなかったの！でね……学園祭の後の話とこの体験談を繋げて考えると……その犯人として沢登君が浮かんだんだ……真っ先に」

そこまで言い終えると、俯けていた顔を上げた

「けどね瀬上君、沢登君……これは私の勝手な推測でしかない……この『弓と矢』は確かに沢登君の家にあつたけれどももしかしたら犯人が勝手に置いていたのかも知れない……」「こんな物を他人の家に保管する訳がない」、そんな思い込みを逆手に取って勝手に置いたのかもつて……だから沢登君、お願いがあるの」

「お願い？」

「うん、一生のお願い……分からないなら分からないと言って。違うのなら違つと答えて……そう答えてくれたら……」

その言葉には切望が込められていた

これ以上は何も言わなかった。歯を噛みしめて、再び俯いた

クロスタウン・トラフィック？（後書き）

宝来がスタンド能力を得た経緯は乗せれました

果たして真実は？

取り敢えず次回もお楽しみに

クロスタウン・トラフィック？（前書き）

宝来からの切望に、沢登優太は？

クロスタウン・トラフィック？

宝来の言葉が生み出したのは、一時の沈黙

それを破ったのは、問われた優太だった

優太は何時も俺達に見せるような笑顔で宝来へと近付く

「何言ってるの宝来さん？何なのこの古い弓矢？こんなの今ここので見るまで見た事無いよ」

「そう……なの？」

「当たり前だよ。僕は死んだ父さんと違って骨董品に興味ないし……それにあの家は僕一人で住むには広過ぎて全体の掃除もロクに出来ないから一人暮らしになってから出入りしてない部屋も幾つかあるしね……多分そこに誰かが置いたんじゃないの？」

宝来は顔を上げ、安心した表情となった。俺も、心底ホツとした

「何てね……」

優太は俺すらも知らない暗い声を出し、表情を変えた

その表情は、俺達に今まで見せた事の無い表情だった

「残念だったね……切実な希望が裏切られて……」

優太は指を鳴らす。すると怪物が一斉に俺に襲い掛かってきた。そして優太は茫然となった宝来を突き飛ばし、その手の『弓と矢』を奪い取った

「何をしてるんだ優太！」

「何言ってるの除夜、この『弓と矢』は僕の持ち物なんだよ。盗人から取り返して何が悪いの？」

「盗人？」

「この女は人の家に勝手に入って僕の『弓と矢』を持ち出したんだよ。彼女が犯したのは立派な家宅侵入罪に窃盗罪。その彼女を盗人と呼んで何か間違いが？」

「つまり……認めるって事だな……お前が……お前が……」

「言いたい事ははっきり言いなよ。そうしないとちゃんと伝わらないよ?。」

笑顔で俺に注意する

こいつは今までここにいた俺の親友だが、別人としか思えなかった

いや、思いたくなかった

そんな俺の心情なんか知った事ではないと言うように、優太はそのまま俺の言おうとしていた事を答えてくれた

「そうだよ、僕が君を殺す為にこの街でこの『弓と矢』を用い、スタンド使いを増やしていたんだ……そして僕自身もこの『矢』でスタンド使いとなった人間だよ……スタンド名は『クロスタウン・トラフィック』……御覧の通り無生物に取り憑き、それを怪物として操作する能力だ」

「御丁寧にありがとう……で、何故今更正体を表したんだ？」

「僕としては今まで通り君の親友というポジションから君の動向を監察し、刺客を差し向けるというスタイルを継続しても良かったんだけどね。でもみんな君に大したダメージを与える事も出来ず返り討ちにされたでしょ？このまま続けてもその繰り返しだと思って僕が直々にお前を殺しに来たんだよ」

「随分短絡的だな……そのせいで正体がバレる事になったんだぞ……」

「正体を知られず倒すつもりだった。宝来さんが『矢』を見つけてたつていうのや既にスタンド使いになっていたというのは知らなかった……あの日別の場所に保管すべきだったよ……この時点で大失敗だった……まあこれもスタンド使い同士の『引力』なのかもな……」

対象の拳は『腕ごと消えたのだから』。その出来る奴は、俺は一人しか知らない

「間に合つて良かったですね除夜君……」

宝来の横に、後ろに自分のスタンドを出している俺の仲間、須藤琢磨がいた

琢磨は俺の足に刺さっているスタンドの俺の肉がめり込んでいないほんの一部分を除いて持つていった

「移動して下さい。今の僕ではスタンドや生物を複数持つていつても長く効果を持続させる事は出来ません」

「ああ……」

「彼……沢登君ですよ？そして彼が持っているのは間違い無く半年近く前に僕を射抜いた『矢』……除夜君……どついう事なのか……」

「説明しようか？」

「いえ、無用です。というよりイヤでも理解出来ますよ……除夜君、僕達は何が出来るか……」

「ここにウジャウジャいるスタンドを宝来と二人で潰してくれ。本体は俺がやるから」

「……その心は？流石に今回だけはちゃんと納得のいく理由を言ってくれないと宝来さん達は兎も角僕は納得しませんよ？」

言っている事の真意を察しているみたいだなこいつ……

「ただの我儘だ。優太は俺一人でやる。他に理由があるとすれば……俺はそれ以外では『納得のいく後悔』の出来る路は見出す事が出来ないから……」

「（他の理由って……立派な我儘じゃないですか……）承知しました……聞こえましたよね？三人共？」

腕を戻すと同時、何等かの力によってガラクタの巨人が破壊された。その周りもビリビリと震えている

巨人からして足下には、しんのすけと藤方、そして美術部の逢坂先輩がそれぞれ自分のスタンドを出していた

「何でお前やしんのすけ達がこのタイミングで出て来れた？」

「昨日僕に宝来さんから連絡が入りまして。その時宝来さんは片っ端から声を掛けていたみたいですね。他の人は聞いた所稲庭さんは風邪で塩屋君は家族と日光へ日帰り旅行、ロンディネ君は仕事を優先させて後……」

「いや、いいから断られた理由を説明せんでも……そんな暇無いし」

粉碎されたガラクタにスタンドが取り憑き、数十の怪物が生まれた本体である優太に全然フィードバックは出ていない。多分琢磨の言っていた『使い捨て』のスタンドなんだろうな……無生物なら取り憑く物を選ばず、合体する事で幾らでも大きくなり、しかも『実体化』している故に本体との距離が離れていても高い破壊力を持つスタンド……

「一応聞いておくが本当に任せるが大丈夫なんだよな！」

「心配しないで！」

「任せときー！」

「精一杯頑張るからそつちも精一杯頑張れ」

そう言つて五人は無数のスタンドに立ち向かつていった

俺は自分の役目を果たす為、足元で彷徨くスタンドを一蹴して優太の前に立った

「まず幾つか質問がある。言っておくが変な真似はするなよ？この距離だと俺のスタンドの拳のスピードが速いからな」

「何なりと……親友」

「まず……その能力と『矢』は何時どんな経緯で手に入れた？」

「半年前にある人達に会ってね……後は先程言った通り射抜かれて引き出された。『矢』はその人達から借りたんだ」

「この街に何人のスタンド使いがいる？」

「知らないよ。君がそうであるようにこの街のスタンド使いは僕が生み出した者達だけじゃないもん……まあ僕が生み出しただけでもまだかなりいるけどね」

「一番重要な質問だ……何故お前は俺を殺そうとする？」

「そりゃ君の事が殺したいまでに憎いからに決まってるじゃん。人が人を殺そうとするのにそれ以上の理由が必要？」

表情を崩さず、用意されている質問を用意された答を言うようにのよくにさらっと言った

「もしかして違う答えを期待した？誰かに強制されて嫌々こんな事をしていたとか」

「親友じゃなかったのか俺達……少なくとも俺は昔も今もそうだと思ってるぞ……」

「僕も君の事を親友だと思ってるし大好きだよ、今でもね。けれど、大好きな人間だからってその人に恨みや憎しみの感情を抱かないと思っているのならとんでもない大間違い、妄想の極致だよ……と言っても僕がこの感情を抱いていたとは『能力』を持つまで気付いてなかったけど。いや、知らんぷりしていたのかも知れないな」

そこまで言った後、その表情のまま俺を睨み付けた

「後さ除夜……僕が変な真似をしたら即『プラネット・ルビー』の拳を叩き込むって言ったよね？」

「それを今からやるってか？」

「甘いんじゃないの？既にやってるんだよ！よく見るよ！」

周りを見渡してみると、沢山の怪物が一ヶ所に集まり、更にそれに幾つものスタンドが取り憑き、それが合体して形を変えた

それは二本足に手首から刃物が伸びた二メートル程の怪物となった

さっきのガラクタの巨人もこうやって造ったのか

「『クロスタウン・トラフィック』の能力は先程言った通り……それにスタンド化した物質にスタンドを更に取り憑かせる事により、こうしてより大きく、よりパワフルなスタンドを生み出す……」

怪物は雄叫びを上げ、俺にその手に生えた刃を振り回した。振り下ろしきる直前に、その腕に拳を叩き込んだ

その衝撃で振り下ろされた腕は吹っ飛ぶ

腕が地面に落ちるとほぼ同時に、腹辺りに、痛みを感じた

俺の腹から、大きなナイフが生えていた。そのナイフは怪物化している

「ちゃんと注意しないと駄目だよ？こんな目に遭うはめになっちゃうんだからさ」

「お前がこんな事を平然とやるとはな……それは予想外だったよ……俺は一体お前にどんな酷い事をしてしまったんだろうな……」

「無理しないのを勧めるぞ……あれ？『こんな事をするのは予想外』？」

「流石は親友……気付くのが早いな……そうだよ、ナイフで刺されたのは予想外だ。だがそれだけだよ……」

何か企んでいるのかは最初から分かっていた。だからそれを逆に利用させて貰う

怪物化したナイフは優太の手に収まる。そのナイフを投げる

切っ先が俺の皮膚に触れるよりも早く、俺の『プラネット・ルビー』の拳は、優太の胸に叩き込まれた

「遅いんだよ……」

「流石にスピードは君の能力のが上みたいだね……」

「そういう言葉は要らねえよ……」

「つれないね……」

クロスタウン・トラフィック？（後書き）

どうにか大雑把に目的を載せれました。詳細は後の方になって出ると思います

スタンド名はジミ・ヘンドリックスのシングルから

頑張っていきますので次回も宜しくお願いします

クロスタウン・トラフィック？（前書き）

幾らでも増え、幾らでも復活し、幾らでも体積の増すスタンドに除夜達は？

クロスタウン・トラフィック？

「除夜のお兄さん！」

除夜君が沢登君に刺されたという衝撃的な出来事を目の当たりにした僕達は、今敵と戦っている事すら頭から抜けていました

その大きな隙を敵スタンド達が逃す筈はなく、僕達に一齐に襲い掛かって来ました

『危ない！』

『ハリケーン』の声と、彼が直後に本体であるしんのすけ君をスタンドが沢山蠢いている中に突き飛ばしたのを見て僕達は今の自分達の現状を思い出しました。周りを見ると、僕達を囲っていた結構な数のスタンドが、その動きを固まったセメントみたいな物によって封じられていたのです

「ありがとうございます。宝来さん」

「お礼はいいよ須藤さん……一時凌ぎにしかならないだろうし……それよりあっちどうにかしよう」

宝来さんが向けている視線の先には、沢山のスタンド達に襲われて

いるしんのすけ君に、しんのすけ君を襲ってくるスタンド達相手に奮闘している『ハリケーン』がいました

『貴様等何をしているさつさと手伝え！私一人ではこれだけの数のスタンドからしんのすけを守るのに限界があるんだよ！』

「おんどれがしんちゃんを敵の真っ只中に突き飛ばしたんやろそれは！」

莓花ちゃんが近距離型の『スウィートハット』で『ハリケーン』を殴りました。気持ちは分かりますがスタンドのダメージは本体に戻るんですからその辺忘れないで下さい

まあすぐに二人が協力してそこにいるスタンドを一時的に全滅させました。それを見届けると、今度は何か叩いて破壊している音が聞こえました

そっちに顔を向けると、複数体が合体したスタンドが、『インフェミー』の凝固液をスタンドごと破壊していました。その残骸に宙に浮かんでいるスタンドが取り憑き、再度怪物化しました

これを見て、宝来さんが『一時凌ぎ』と言った理由が理解できました

「これ本体を叩いた方がいいんじゃないのか？こいつ等倒しても倒しても残骸がある限りゾンビみたいに復活するぞ」

「逢坂君、ゾンビより質悪いですよ……」

「言っておくけど……瀬上君がやられない限りは二人には何もしないで……私達はこのスタンド達が外に出ないように……」

「それは百も承知や……けど瑪瑙の姉さん、ウチ一つどうしても知りたい事があるねん……」

「今それ所じゃ……」

「大事な事なんよ……何で優太の兄ちゃんを除夜の兄ちゃんの事あんなに怨んどるんや？学園祭で初めて会った時、二人共あないに仲良かったのに……」

「……………」

「それなのに何で憎んどるねん？いっちゃん付き合いのある瑪瑙の姉さんも知らんの？」

「私の……………」

宝来さんは意を決したように口を開きました

「私の知る限り……一っだけ心当たりがある……それを、こいつ等を対処しつつ話す……………」

複数体が合体し、人型で二メートル程の大きさとなった、腕に鈍器や刃物を生やした『クロスタウン・トラフィック』の群れが囲んで

いました。その数大凡五十以上

「ちゃんと聞き取れるよう、大きな声で話して下さいね……」

「分かってる……」

胸に一発食らった優太は、咳き込みながら立ち上がった。それは当然か。まだ聞きたい事があるから手加減はしていたし服のボタンが変形して拳の当たる地点に集まったんだから多少は軽減されていておかしくない

『弓と矢』はしっかりと握られていて、当たる時も吹き飛んだ時も力を緩めていなかった。本当に大事な物だと伺える

「まだ話は終わっていない。だからさっきみたいな真似をするな。次にしたら今度は容赦なくブチのめすぞ」

「ああしないよ……」

「その『弓と矢』、話によれば射抜く対象にスタンドの素質がない場合それ自体が人殺しの道具になるんだよな？それで何人殺した？」

「一人も殺してないよ。君やおばさんの言っていた僕の『人の隠れた才能を見抜く才能』がいい具合に働いてくれたみたいでさ。この半年大勢の人間を『矢』で射抜いたけどそれでは一人たりともね…

…これは本当」

「それは良かった……悪いな、お前が変わったのに気付いてなくて……いや、気付こうとしてなかったのかもな……どうした優太？さつきまでの余裕綽々な顔は何処に行ったんだ？その雰囲気は感情的にも程があるぞ」

「いや……ね……何でもないよ……」

上着から幾つもの皮袋を取り出し、その中に入っていた大量の鉄くずやガラス、陶器の破片、金属製の食器等をばらまいた。優太の体からスタンドが出現し、それらに取り憑き、更に複数体ずつが合体する

先程腕を吹っ飛ばしたのと同じ人型の怪物が何体も生まれた。怪物達はそれぞれが腕に生えた武器を叩いていた

「ゴラア！」

一番近くにいた奴の頭に拳を叩き込む。そいつの頭は破片となつて吹っ飛ぶ。だが、その動きは止まらず俺に襲い掛かる。行動が出来ないまでに破壊するしか取り敢えず動きを止める事が出来ないみたいだ。こういつた器物なら何とも思わないけどこの前の『マッドキヤット』みたいに生身の人間とかだったら嫌だな……

「ゲシヤアアアアア」

からこれくらいの手は打っておかないとな……」

俺の腹に蹴りを入れた後、スタンドにこう命じた

「やれ」

霞んで見えるのは、俺に向けて腕に生えている武器を振り下ろす様
だった

「痛てて……まあ当たり前だよな……ハンマーを一発頭に食らって
背中に一太刀食らったんだ……これで済んでよかったと思わなきゃ」

頭がガンガンするが意識は覚めた

怪物に囲まれた俺は、まず一撃目を素直に食らって朦朧とした状態
から抜け、その後は怪物を『軸』として攻撃の縫い目を見付けてそ
こへの僅かな距離の瞬間移動を気付かれないようやっていた

流石に全部は避けきれず、背中に一太刀食らってしまったが……

「皮肉って……こういう事を言うんだろうな……この『回避の為の
僅かな距離の瞬間移動』はお前が差し向けたスタンド使いとの対戦
中に思い立った能力の使い方なんだ……お前が奴を俺に差し向かわ

せていなければ俺は死体となって転がっていたな……」

「……そうなんだ、でもそれがどうしたの？」

指で合図して、怪物達に命令した。俺は俺と優太の間にいる怪物を『軸』とし、接近に成功。薬の効果の為、緩慢な動作で拳を振りかざす

そしてのばそうとした所でスタンドを出して、同じ動作をさせた。俺の影響を受けている為動きは何処か鈍いが、それでも普段の俺以上はある

襟元から怪物化したカッターナイフがひよこりと出て来て、俺に向かつて飛んできた。俺はこいつの後ろに瞬間移動し、その不意打ちをやり過ごす。『動作を行っている最中での瞬間移動』もお前の差し向けたスタンド使いとの戦いで思い立った使い方だよ

ガスッという擬音が向こう側から聞こえ、何かあるのか確認すると、腕が鈍器の怪物が俺のいた位置に向けて横にスイングしていた。丁度いい

「君は今こう考えている……」俺のスタンドの攻撃とあのスイングを食らえば目を覚ますだろう』と……」

え？

考えている暇もなく優太は俺に背中を密着させ、その体勢のまま後

るに回り、突き飛ばした

結果、『プラネット・ルビー』の拳はスイングを放った怪物に命中し、怪物のスイングは俺の腹部に命中した

「スタンド使いがスタンド能力だけを使って敵と戦うと思ってた？能力を使わなくともこんな風にちよつと体を動かすだけで相手にダメージを与える事が出来るのにな？」

ヤバい……さっきのを何発も食らったら内臓破裂じゃ済まない……

「スタンド能力だけじゃなく動作や道具も役に立つ立たない、使える使えないを最終的に決定するのはその使い手の使い方だ。そうだろうか？親友除夜……」

クロスタウン・トラフィック？（後書き）

ぶりぶりざえもんは結構やってるネタをやってみました

優太は本当に『矢』で死者を一人たりとも出していません

少しだけ優勢だったのがほんの僅かで不利になったけどこれも原作ではありがちですけど

次回も宜しくお願いします

クロスタウン・トラフィック？（前書き）

最初は過去話をしてみます。除夜が宝来と仲良くなった経緯込みの後関係無いけど天気予報の温度って日陰の温度だったんだ……

クロスタウン・トラフィック？

宝来瑠璃が瀬上除夜と初めて会ったのは、三年前の、中学校の入学式の時だった

生まれてから日本人以外会った事のない彼女にとって、並べられたパイプ椅子の隣に座っていた自分と違う学区から来た男の子の西洋系の顔立ちは、とても珍しくて目が引いた

だからか式が始まる前に自己紹介を含んだ挨拶をした。その挨拶は変わった所は何もない、ごく普通のそれだった

対して彼は嫌がる様子もなく笑顔で返してくれた。だが、彼女はそんな彼にいい印象を持てなかった。その時に自分を見るその目は、『自分の事をちゃんと見ているが直には見ていない』。言葉に表すとそんな感じがしたからだ

最初はどうしてそう感じたのだろうと思ったが、同じクラス、近い席になって数日彼と接し、観察していてその理由に気付いた。「彼は一人の例外を除いて人に対して境界線を敷いている」と

「距離」ではなく『境界線』。それも、「現実をゲームに置き換えてプレイしている」といった感じで

誰に対しても最低限のコミュニケーションは取るが、決して打ち解けようとはしない。当たり前だ。ゲームのキャラクターを好きになつたり感情移入したりしても、実際にそのキャラと友達だとか普通は主張しない。それも彼の場合感情移入とかしないレベルで他人と接していた。同級生は勿論、先輩や先生相手にも

そんな接し方をされて不快感を覚えない人間はあまりいないだろう。例外に当たる幼馴染みの親友である沢登優太以外で、学校で進んで彼と接しようとする人間が少なくなるのに時間は掛からなかった

それを見ていて宝来は、どうにかしたいと思い始めるようになった

「君は……どうしてもっと普通に人と接しようとするの？このままだと誰からも相手にされなくなるよ？」

入学から一週間経ったある日の休み時間に、宝来は既に『浮いた存在』となってしまうた除夜にこんな質問をした

何か悩みや問題があるのなら力になってあげたい。中学生の自分にやれる事はたかが知れているが、何とか出来るなら何とかしたい。そんな気持ちだった

対して除夜はすぐに、こう答えた

「嫌なら接しようとしなければいいだろ」

ただそれだけだった。それで話は終わった

そしてそれを聞いていた同級生達は彼への不快感を増大させ、関係は更に悪化していった

それでも彼女は根気強く彼と接したが、関係にも彼の彼女への接し方にも一切の変化もなく、ただそれによって彼と周囲の軋轢だけが大きくなっていった

四月の半ばのある日、事件は起こった

沢登優太の家族が、事故で亡くなってしまった

その日、沢登家は次男の優太の親友である除夜と一緒に郊外へドライブに行く予定だった。しかし、除夜の義母の友人の結婚式が同日にあり、義母が祝儀を無くしてしまい、それを探すのを手伝った為30分程遅れてしまった。ただそれだけだった

除夜が待ち合わせ場所に到着した直後、暴走車が沢登家の車に衝突。その時トイレの為車から出ていた優太を除いて全員死亡してしまった。原因は未成年者の飲酒運転で、運転手も衝突の際頭を強く打ち、即死していた

翌日、除夜は学校中の生徒から白い目で見られた。最初はせいぜいちょっとした侮蔑の言葉を遠くから投げつけられたりする程度だったが、元々快く思われていなかった彼への糾弾は、あつと言つ間にエスカレートしていき、遂には暴力も振るわれるようになった

この事に憤慨した宝来他同学年の生徒数人と上級生数人、そして当時の担任と彼の義母が立ち上がり、活動した

そのお陰でこの件は大した問題になる前に沈静化し、この事で除夜は他人に対して普通に接するようになっていて、宝来達とは良い友達同士、良い先輩後輩になっており、暇があれば頻繁に遊ぶようになった。特に同じ年の宝来達とは一緒に夕食を食べたり一緒にレジ

ヤー施設に行ったり、泊まりに行ったり来たりする程仲良くなった

「と、まあこれが私の知る沢登君が瀬上君を怨んでいるだろう理由だけど……どうしたの四人共……」

「そんな話聞かされて重い気持ちにならん奴がおるん？」

莓花ちゃんの台詞に、僕達はコクコクと頷きました。あれだけ憎んでいるには何か理由があるのだろうと腹を括っていたつもりでしたが高を括っていたみたいです

「関係ない訳ではないから」と、ついでに仲良くなった経緯も話してくれましたが、はっきり言って助かりました

「誤解しないで。これはあくまで私の考えに過ぎないから……だって沢登君は責任を感じて落ち込んでいた瀬上君を慰めていたもん……憎んでるのは別の件でも知れないし……」別の事でも知れない『……』

「まだ立ち上がるか……常人なら数ヶ月は点滴打ちながらベッドで

寝ていてもおかしくないよ」

「俺の頑丈さと回復の早さはお前も知ってるだろ？白々しく言うなよ……」

血を吐きながら何とか立ち上がる俺に対して、人型の怪物はその腕に生えた武器を容赦なく振るう。俺は瞬間移動で避け、スタンドで怪物を叩く。こういう時は俺のスタンドが近距離パワー型なのと能力が移動系なのに感謝するよ。自分に感謝するのは変だけど

然しどれだけ叩いてもどれだけ破壊してもすぐに復活する。もしかしたらと思い完全に怪物化する前に破壊したが、無駄だった

「本体がここにいるんだから直接向かって倒せばいいじゃん……本気でかかれば僕なんか容易いでしょ？僕は肉体的にはごく普通の人間なんだし……」

「それじゃ俺は納得しない……せめて何で俺の事をそんなに憎んでいるのか……俺に非があるのは間違い無いだろうが……その理由はどうしても知りたいんだよ……」

「はあー……」

完全に呆れた様子で溜息を吐いた

「どんな人間なのか知ってるつもりだったけどここまでアホだと

は思わなかったよ……」

「何言ってるんだ優太……」

いきなり胸倉を掴まれ、引き上げられ、殴られた

「まだ分からないのか？お前のそれが僕がお前を憎んでいる最大の要因なんだって事をな！」

何を言っているんだ？俺が気に障る事を言ったのか？

それに……よくは分からないけど、少なくともその顔は憎んでいる相手に向ける表情じゃなく……悲しんでいるとか、寂しがっている奴の顔だっというのは、俺にだって分かるぞ

「何一つ悪くないのに自分一人が悪いみたいに責任感じて……それを一人で溜め込んで外へ出そうともしない……僕はね、お前のそういう所が昔から一番尊敬していて一番嫌いだったんだよ！何で気付かないんだ？そうしている事が僕を一番傷付けている事に！」

「……………！」

「三年前の件にしたって今回の件にしたってお前は何も悪い事をしてないだろ！自分一人のせいだとか勝手に責任感じて何が楽しいん

だよ！」

溜め込んでいた感情を一気に爆発させた、そんな感じの声だった

その声を聞いて、その時の表情を見て、俺は、

「くっ……あっはっはっは……ふははははは……」

込み上げてくる笑いを抑えようとせず、声にして出した

「何がおかしいんだよ」

「いや、ごめん……なあ優太、昔……俺達がまだ小学校に入る前だった頃に義母さんが言った事覚えてるか？『人間は、一人の人間を完全に理解する事は決して出来ない……それは自分だって例外じゃない』って……初めてそれを聞いた時……俺は全然理解出来なかったけど、今ならその言葉を理解出来る……俺は今こうしてお前にこう言われるまで俺のその一面もお前がこう思っていた事も理解していなかった……許して欲しい訳じゃないけど、これだけは言わせて欲しいんだ」

俺は、頭を下げて、ただ一言こう言った

「ごめんなさい」

「……言った事全然理解してないな」

顔を俯けた優太が、こう呟くと、そのままの姿勢で、口を動かした

「三年前のは事故で、今回は悪いのは全部僕なのに……どうしてそれなのに除夜が謝らないといけないんだ！謝る理由は何もないだろ！何も……何も……」

膝をつき、涙を流し出した。浮遊していたスタンドは消えており、怪物は元に戻った

「除夜……ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

何度も謝る優太の頭を、俺は優しく撫でた

「結局、除夜君に対しての不満と、それを理解してもらえなかった寂しさが、彼に対しての怒りや憎しみにすり替わっていただけだったんですね……」

『これにて一件落着か……』

「あははははは……良かったね、瀬上君」

クロスタウン・トラフィック？（後書き）

前半は過去話です。財産の管理とかそう言ったのは除夜の義母が行いました

どうにか上手く終わったと思っってます

クロスタウン・トラフィック？（前書き）

沢登優太戦に辛勝した除夜……そして

クロスタウン・トラフィック？

「戦いは終わったみたいですね。除夜君、沢登君」

頃合いを見て琢磨が話に入ってきた

「それでは沢登君……君のその手にしっかりと握られているその『弓と矢』……こちらに渡して下さい。破壊します」

優太はその言葉に、『弓と矢』を強く抱き締めて拒絶した

「悪いけどそれは出来ないよ……この『弓と矢』は「あの人達」から借りたんだ……除夜を抹殺するという僕の目的が達成されるまでずっと貸してあげるって……」

「目的を失った以上もうそれを使ってスタンド使いを増やす理由は無いでしょう？」

「分からない人だな。確かに僕は目的は失ったよ。だけどね、この『弓と矢』は僕のじゃなくて他の人のなんだ。だから奪われたり壊されたりされたら駄目なんだ」

『借りた』？そんな物騒な物を他人に貸した奴がいるのか？何の為に？

もしかしたらそいつが本当の敵なのかも知れない。そいつに関しての情報は得ておく必要がある

「取り敢えず、『弓と矢』の事は一旦おいておく……優太、お前」

「それに僕はもう取り返しのつかない領域にまで既に足を突っ込んでいるんだよ……『矢』では誰も殺していないとはいえスタンド能力を引き出す為の理論を確立させる為の実験で何十人も人間を殺しているしね……だから……」

「それはお前が背負って一生かけて償っていくしか無いだろ。過去は変えられないし俺は代わりに背負えない。だけどアドバイスくらいはしてやれる……」

「そうだね……」

「じゃあ質問があるんだが……お前に『弓と矢』を貸し与えた人物は……」

「ちよい待ち……」

質問は、今度は藤方によって遮られた。藤方の視線は院内のガラス戸に向けられている

「ちっ……なあ、あんた今日ここに……仲間を誰か連れてきたんか？」

その台詞に、全員が警戒態勢に入る。優太は何なのか分からないという顔だ

「仲間？今日ここには僕一人で……」

「あ……あれ……」

逢坂先輩が指を差した。その指先の先にいたのは……

カメレオンの頭を模したデザインの目の部分を除いて棘の生えたメットに、口の部分を真っ赤に塗ったスッポンを模した仮面に背中からチューブが口に伸びていて、屈強な上半身に巨大な両腕、そして関節部や背中にロケットの噴出口のような物を取り付いているロボットのようなスタンドが、院の物陰から出て来た。全体的に機械的なデザインながら、胸部に大輪の百合の花が一つ咲いている

優太はそのスタンドを見て、目を丸くしている。俺達はスタンドを出して戦闘態勢に入る

そのスタンドは首を俺達に向けると、背中 of 噴出口から何かを噴出させ

「グブ……」

優太の前に接近し、反応する間も無く正面から優太の腹部をその腕で貫いた。『弓と矢』を握っていた腕は貫いた腕の軌道にあつた為、手首が千切れ、落ちた

「お……お前は……」

『この日をどれだけ待った事か……お前に何もかもを奪われ、お前にその『矢』に射抜かれたあの日から……どれだけ夢見た事か!』

『本体』の声が、スタンドから発せられる。その声からは、先程優太が俺に向けていたような『怒りと憎しみのオーラ』が

いや、違う。優太が俺に向けていたのは、心の中にずっと溜め込んでいた故に変質してしまった、俺自身への不満だ

こいつからは、かなりの濃密の「本物の憎悪」を感じ取れた

優太は苦しみながらも残った片腕で『弓と矢』を拾おうとするが、そのスタンドはその手を叩き潰し、『弓と矢』を拾った

『これは俺が戴いておこう……』

「お前……何故だ……何故お前が……」

『思っていたより頭が悪いのだなお前は……お前をこうする為にお

前へのこの憎しみの感情を抑え込み、仲間になっただけなんだよ……お前が瀬上除夜を徹底的に痛めつけて弱まった所にこの「サクリファイス・オブ・ヴィクター」がトドメを刺し、報酬の四千万を受け取った直後に貴様を殺すプランを立てていたのだが……予想外の展開になり金がパーになってしまった。まあ元々それはついで中のついでだったし、本懐は遂げる事が出来ただけ良しでしょう……」

「ク…… クロスタウン・トラファイ……」

『お前にはもう用は無い…… お前の声などもう耳にしたくもない…… 仮初めながらも仲間の誼だ。お前の目的は継いでやるしこれ以上苦しむ事無く逝かせてやる』

「おい…… 止める」

俺達の前でそのスタンドは右手で優太の頭を鷲掴みにし、180°回した。その際、凄く不快な音がした

そのスタンド『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は優太を貫いた腕を引き抜いた後、ゴミのように放り投げた

『瀬上除夜…… お前にもこのクズと同じ程の憎しみを俺は抱いているが今は殺さないでおいてやろう。こいつを殺した事で今凄く上機嫌だし、お前と今戦うにはリスクがあるからな…… いずれまた会おう』

『弓と矢』を持って物陰に隠れると、何か音がした。その物陰を覗いてみると、スタンドはいなくなっていた

藤方は院内に入り、院の中を駆け回る

「駄目や、おらへん……確かにガラス越しに多分あのスタンドの本体らしき奴がいたんやけど……」

「喋っている間に逃げたんじゃない？」

「そうか……あれだけ派手な登場をしたのは、僕達の意識をスタンドに向けさせる為か……頭は悪くないみたいですね」

「それなら何でこない近くに……」

「射程距離の関係か……もしくは憎んでいる相手が死ぬ様を自分の目でちゃんと見たかったのか……」

「そんな事はどうでもいいだろ！」

自分の推測を述べる琢磨に、俺は叫んだ

『弓と矢』は奪われてしまったようだ。だが今は優太の負傷が先だ。早く救急車を呼ばないと。悠長にやってる場合じゃない

「瀬上、何処行くんか？」

「決まってるでしょ先輩！救急車呼んで……」

「無駄です。首の骨が折れてます」

「そりゃ分かるよ。だから早急に救命処置を……」

「……分からないんですか？もう……」

止めるよ……聞きたくない。これ以上言うな

「もう……死んでいるんです。どんな手当ても、意味が無い……」

「どけっ！」

琢磨をどかして優太を必死に揺さぶった。死んでいる？もう手遅れ？

心停止して数十分後に蘇生した例はあるんだぞ？親しい人の呼び掛けだけで危篤状態から脱した例なんか幾らでもあるんだぞ？今の医学はどれくらい人体の事を解っているんだよ？

出血とか酷いけどまだ意識不明の重態なだけだって……すぐに治療すれば……

右肩に、宝来の手が置かれた

「瀬上君……」

「宝来……救急車、呼んでくれたか……」

「気持ちは分かるけど現実から目を背けないで……お腹に大きな穴を開けて血が沢山出て……その上首の骨が折れてるんだよ？これで生きていたら人間じゃないよ……終わったんだよ……沢登君の命は……終わったから、もう……もう、どうする事も出来ないんだよ」

俯き、涙を流しながら、自分でも認めたくない事を必死に口に出す宝来の姿を見て、俺は目が覚めた感じがした

地面に横たわって、もう動く事の無い俺の親友は、少なくとも復讐されて当然の事をしたから、こうなっても仕方の無い事やってきたからその報いが今こうして返ってきたんだ

確かに、これは当然の罰なのかも知れない。これは身から出た錆なのかも知れない

だけど……それでも……これは酷くないか？

「神様つてのがもしいるのなら……残酷だよな……自分のやって来た事の愚かさとかに気付いた人間に罰を与えてさ……自分の都合の為にだけにその行為を行い、誰にも罰される事無くのうのと枕を高くして眠っている奴は沢山いるのに、そいつ等は放置しておいてさ」

ここから、俺は帰ってきた義母さんが声をかけてくるまでの記憶は無かった

後から話を聞くと、俺はあの後も、同じ様な言葉を何度も何度も、
繰り返し言い続けていたらしかった

義母さんが帰ってくるまで、そんな俺に、誰も声をかけてこなかった

クロスタウン・トラフィック？（後書き）

最初思い描いていたのとは多少異なりましたが、無事にここまで終えました

何者かに奪われた『弓と矢』、まだ終わらないスタンド使いの脅威

次回もお楽しみに

友としてのけじめ(前書き)

前半少し重たい……かな？

友としてのけじめ

沢登優太が『サクリファイス・オブ・ヴィクター』に殺されて二日後、瀬上除夜は街が一望出来る程の高さの丘の上の切り株に座り込んで、街をボーッと見ていた

火葬場の煙突から煙が上がっている。親友が焼かれている煙だ。ふと、「三年前も同じ景色をここで見たな」と思った

ガサガサと、後ろから草を分けている音が聞こえた。後ろを見ると、その雑木林の木の間から彼の中学時代からの友人の女の子が、制服姿で現れた

「宝来か……何の用だ？」

「何考えてるのよ？通夜にも葬式にも顔を出さないでこんな所にいて……」

「よくここにいる事が分かったな」

「三年前に沢登君の家族が死んだ時、学校が終わったらここに1ヶ月は毎日来ていたでしょうが……」

「正確には37日だ」

俺がこう答えると、宝来は俺の右腕を取って引っ張り出した

「細かい事はどうでもいいわよ。それよりみんな貴方がいない事を心配しているんだから、さっさと来なさい!」

「ほっといてくれ……俺は今辛いんだ……」

右腕を引っ張る力が消えた

「瀬上君……貴方まさか……沢登君が殺されたのは自分のせいだと思ってるの?」

「……………」

「あのね瀬上君。沢登君が自分で言ったように、瀬上君は何も悪くないんだよ?」

「それは分かってる……けどどうしても考えてしまっただよ……
『どうすれば良かったのかを』……」

「瀬上君、ちょっとこっち向いて」

「1111?」

「111」

中指を突き出した拳で、俺の額を突いてきた

「何すんだお前……」

「あのさ……それを思ってるのは私もなんだよ。どうしたら沢登君を救えたのか、そんな事ばかり考えてる。だから今の瀬上君の気持ちは理解する事は出来る……だけどさ瀬上君……君は『親友から目を背けていて楽しい』?」

「『目を背けてる』?俺が?」

「そう。『責任を感じて後悔している事でね』。何で自分に責任は無い事でここまで自分を責めるの?そりゃ自責の念があるのはいい事だと思っし、それが貴方のいい所だとも思ってる……だけど、貴方はそこで立ち止まってる……責任を感じて、凄く後悔していて、それを楔にして何もしない。それが目を背けている以外の何だというの?」

「じゃあ聞くが……俺はこれから何をすればいい?俺はあいつの為に、何か出来る事はあるのか?」

「知るかそんなもん。『何をすればいい』?そんなの自分で答えを出すしか無いでしょ?『沢登君の為に何か出来る事はあるのか』?沢登君はもういないのに他人の私がそんな事分かる訳無いでしょうが」

「……他人?」

「そう、他人。親も、その親も、兄弟も、私が将来産むかも知れない子供も、君も、死んだ沢登君も、みんな私以外は他人だよ。何処か間違ってる?」

『自分以外は他人』……結構乱暴だけど……違うない

俺は瀬上除夜でしかなく、目の前の少女は宝来瑪瑙でしかなく、そして、死んだ俺の親友は、沢登優太でしかない

そう考えると、自分が何をすべきなのかが自ずと見えてきた

「宝来……」

「な……何？」

「ありがとう。お前が今そう言うてくれなかったら、俺はこの答えに辿り着く事は出来なかった……」

「教えてくれる？その答えを……」

「ああ」

ゆっくりと立ち上がり、宝来の方へ体を向けた

「俺は優太じゃないからあいつのやった罪は俺には償えない。あいつのやった事の責任は俺には取れない。だけど、あいつのやった事の『後始末』はしてやれる！だから俺は、俺のやれる範囲での『後始末』をする！それが俺のやるべき事だ！」

宝来は目を丸くして茫然としていたが、すぐに笑顔となった

「それで？」

「何か文句あんのかよ？」

「それ、自分一人でやるつもり？」

「分かってるよ……手伝ってくれませんか？」

「喜んで。ハイ」

宝来は右手を俺に差し伸べた。俺は右手でその手を強く握り締めた

夕方五時近く、サトーココノカ堂

そのレジで、風間母子が特売の白砂糖を持って並んでいた

「はぁ……」

「どうしたのトオルちゃん。そんな深い溜息なんかついちゃって。またしんのすけ君に何かされたの？」

「ううん、違うよママ、その逆。何でか分からないけど、最近しんのすけの奴、僕だけじゃなく、ネネちゃんやマサオ君、ボーちゃんやあいちゃんの事を避けているみたいなんだ……何か僕達悪い事したのかなあって思ってた……」

「何だ……そんな事か」

軽く言う母に、トオルはむっとした

「何だよそんな事って……」

「しんのすけ君はトオルちゃんが覚えの無い事でトオルちゃん達を嫌ったりなんかしないわよ。それはトオルちゃん達がよく分かっているでしょ？」

その通りであった。しんのすけのマイペースぶりは常軌を逸している所はあるが、他人の事を蔑ろにする人間では決してない。寧ろとても思い遣りに溢れ、優しい人間である事は、彼と少し付き合っている人間ならば誰もが知っている

実際、邪険したり下らない見栄の為に遊びの誘いを突っぱねた自分にも、変わらずに接してくれた

「これは誰に対しても言える事だけど、だからまず何故そうするのかを勝手に決め付けないで本人に直接聞いてみて、喋らなかつたら

少し押しして、そして、そこまで何かを察したら向こうが話してくれるまで聞かないでおいてあげなさい。それも一つの礼節よ」

「うん」

トオルは思った。自分は何て優しい人間に囲まれているのだろうと。この母にしても少し融通がきかない所はあるが、ちゃんと自分の心境を察してくれている

「ほら、しんのすけ君いるわよ。今からでも聞いてみたら？」

「ほっほーい風間くんお元気い？」

しんのすけは手を振りながら、母親のみさえと一度幼稚園でイタリアの話をしてくれた男の人と一緒に砂糖を持って風間母子の後ろに並んだ

「こちらの方は？」

トオルの母は野原母子と一緒にいる見る限り外国人の少年の事を訊ねる

しんのすけが少年にトオルの母の事を話すと、少年は頭を下げ着自己紹介する

「初めまして、イタリアのネアポリスから留学の為来ましたロンディネと言います」

ロンディネはスタンド関連に関係のない人に自己紹介をする場合、自分の事を『留学生』と身分を偽っている

本当の身分を明かさないのは、勿論その事によって標的が逃げられたりして任務達成が困難になるのを避けたい為であり、地元の間との余計なトラブルを避ける為の考慮である

「御丁寧にも、私、風間みね子と言います。トオルの母です」

「ママ、前行って。空いてるから……あれ？」

前に行くよう言うトオルは、『ある物』を見つけた

一階と二階を繋ぐ上がりの方のエスカレーターの中腹辺りの裏側に巨大な『球体』がくっついていて、その球体はまるで色の薄い所が黒く染まったようなイクラを思わせる物だった

『それ』はおかしかった。目を凝らしてよく見ると何処か透き通っているように見える

そして、場所的にも大きさ的にも誰も気付かない訳がないのに、誰もがそれを一瞥もせず素通りしていた。トオル以外は見えてないよ

うだった

大きな子供の声が聞こえたのでそちらを向くと、玩具を買って貰えるのが嬉しいのか、自分達と同じ年か一つ年下の少年が、親を急かしながらエスカレーターに近付くのを見た

その親子はエスカレーターに乗り込み、少年の方は待ちきれないと言わんばかりにエスカレーターを駆け出す

下に取り付いた球体の真上の段に少年が足を乗せると、それに反応するかのよう球体は大爆発を起こした

エスカレーターの突然の大爆発に、当然一階はパニックとなる

その様子を、一人のフードを深く被った男が、ビシソワーズを飲みながら二階から笑って見下ろしていた

その男の後ろには、人型のスタンドが立っていた

友としてのけじめ（後書き）

前半は『一人の代わりはない、代わりは誰にも務まらない』、それを踏まえた上で出た答えです

優太との戦いが終わって最初の戦いとなります。敵の目的は？

では、次回もお楽しみに

マーズ・ヴォルタ？（前書き）

突如現れた新手のスタンド使い！その目的は？

マーズ・ヴォルタ？

「最高だ……この悲鳴、絶叫……病み付きだ……」

彼は笑っている。自分の『能力』の破壊の凄まじさに

彼は歓喜している。自分のやった事によってどれだけの人間が傷付いたのかという事に

彼は数年前、日本中で大罪を犯し続け、警察に身柄を拘束された。判決は死刑

その後彼はずっと刑務所の中で大人しくしていた。無闇に脱獄しようとしてもそれはきつと失敗するだろうという事を知っていたからだからチャンスを持った

そのチャンスは突然に思いも寄らぬ形で訪れた。数日前に突然現れた謎の少年が自分を含む十何人かの収監された囚人達をその手に握る『矢』で貫いた

少年は言った。自分達は人間を越えた能力を手に入れたと。常識を越えた才能が己から引き出されたと。少年は自分への協力を条件に自分達に脱獄の手引きを行った

脱獄して少し経った頃、自分への変化に、自分の『能力』に気付いた。その能力は、『自分が最も望む』能力だった

「……あのガキはこの能力を使って犯罪を犯しても逮捕される事はないと言っていたが……」

彼は気付いていた。特売の砂糖を持ってレジに並んでいた一人の幼稚園児程の子供が、自分の『能力』を凝視していた事を。別に見られていた事は問題ではないが厄介だ

「仕方無い……始末しないと……」

突然のエスカレーターの大爆発に、パニックに陥り、我先にと屋内から逃げ出そうとする

一階のあちこちから、先程とは規模が少し小さい爆発が起きた

「何が起きているの?」

「さあ……」

エスカレーターから離れた場所に設置されている休憩所にいる野原母子と風間母子、そしてロンディネ

ロンディネが今外へ出ようとするとかえって危険だと言ってここに誘導したのだ

「ロンディネのお兄さん……」

「分かってる……スタンド使いの仕様だ。あの爆発にはスタンド力があった……どんな人間かは分からないが少なくともロクな人間じゃないのは確実だな……」

「何を言ってるの？」

「こちらの話です。気になるのは分かりますが多分分からないと思うので……」

「お前等には見えてるのかい？俺のスタンド、名付けて『マーズ・ヴォルタ』を」

しんのすけ達の前に、顔の前半分が隠れている雀をモチーフとした仮面を付け、上はジャケット、下はジーンズを着、腰に日の丸の上に『爆』と書かれた腰布をつけた男が現れた

その後ろには、胴体の前を甲冑が覆い、そこ以外を黒いイクラを連想する水疱が全身に出ているスタンドが立っていた。ピンポン球程の大きさの妙にリアルな目が、人体で目のある場所に水疱の隙間から覗かせていた

「貴様等があのがキの言っていた『敵』という訳か……」

「お前……何者だ？」

「『矢』によりスタンド能力って最高の力を引き出された者……それ以上でもそれ以下でもない……そして俺の名は敦賀つるが鯯背いなせだ」

「敦賀鯯背！」

「知ってるの母ちゃん？」

「うん……八年前に日本中で爆弾テロを犯した爆弾魔よ……神出鬼没でターゲットは個人から人が大勢集まる場所まで様々で述べ二百人は犠牲者は出たわ……逮捕出来たのが奇蹟とまで警察も言っていたわ……」

「解説ありがとう……お礼に楽に殺してやるとしよう」

ボールペンを取り出し、それを自分のスタンドに渡す。スタンドは自分の体に出ている水疱を一つボールペンにくっつけて投げた

しんのすけは『ハリケーン』を出してボールペンを横から殴りつけた

『ハリケーン』の拳がボールペンに接触すると、水疱が爆発した。スタンドの腕はその爆発を受け、本体のしんのすけはそのフィードバックで右腕が傷付く

「しんのすけ！」

「近付かないで！」

突然腕を怪我した我が子に近寄るみさえに、ロンディネは忠告する。トオルの母はしんのすけ達をジツと見ている我が子に、こつ訊ねる

「どうしたのトオルちゃん……そんなジツと見て……」

「いや、あいつのあの後ろに立っている人？がさつき投げたボールペんに付いていた水疱……何であの変な猪が殴ったら爆発したよね……？」

「！」

その台詞にしんのすけとロンディネが驚き、トオルの母とみさえは何を言っているのか分からないと言った顔をした

『何で私の姿が見えるのだ？』

「もしかして……風間君も？」

動揺を隠せないしんのすけと『ハリケーン』を、ロンディネは制す

ロンディネはみさえとトオルの母を首の後ろを叩いて気絶させ、『サード・アイ・ブラインド』を出し、それに指を差した

「これや……あの変な人らしきものが見えるのか？」

「はい……ハッキリと……」

「訳は後で聞く。それよりあいつの水疱がどうしたんだ？」

「いえ……あの水疱が爆弾みたいなんですけど……それがあの猪みたいなのがそれがついたペンを殴ったら爆発したから気になって……」

「それどういう事？」

「いえ……ただあのエスカレーターが爆発した時も子供が駆け出した時に……」

トオルの台詞に、ロンディネは水疱が起爆する条件を推理した

「地雷と同じか……」

地雷というのはスイッチが一定以上の衝撃が掛からないと爆発しない。対戦車用は対人用と違い、人間が足を乗せた程度では起爆しない。それと同じだ。ただ衝撃を与えただけで起爆するのなら手渡しした途端爆発する

どれだけの自由度があるのかは分からないが、その衝撃はある程度自分で設定出来ると考えた方が正しいだろう

衝撃を直接、または取り付けた物から感知して爆発する爆弾を取り付ける能力と、ロンディネは結論付けた

敦賀は『ねずみ花火』を取り出し、それに『爆弾』を取り付ける。しんのすけ達は何をするつもりなのか察した

しんのすけは『ハリケーン』を遠隔操作型にし、持っている剣で敦賀が取り出したチャッカマンを破壊しようとする。だが一瞬遅く、ねずみ花火に火を付けられてしまう

「じゃあな……」

爆弾のついたねずみ花火をしんのすけ達に投げつけた。口火から勢い良く火が吹き出、回転する

「しんのすけ！『ハリケーン』で口火を切るんだ！そのねずみ花火が爆発したら洒落にならないぞ！」

ロンディネに言われるまでもなく、既に行動していた。然しすばしっこいので難しかった

どうにか殆どの花火の口火を切る事に成功するが、残っていた一つが爆発し、その衝撃を感知して取り付けられた爆弾が爆発した

その爆弾だけでなく、爆風の煽りを受けて他の爆弾も誘爆した

「クハハハハハ……叫び声とか聞けなかったのは残念だが、これで俺は俺の楽しみの為に何の心配もなくこの能力を使える……」

マーズ・ヴォルタ？（後書き）

優太が『矢』で射抜き、脱獄させた脱獄囚第一号です。スタンド能力は『キラークイーン』の能力をアレンジしました。スタンド名はアメリカのロックバンドから

次回もお楽しみに

マーズ・ヴォルタ？（前書き）

爆弾のスタンド使いに、為す術はあるか？

マーズ・ヴォルタ？

「ほお……」

しんのすけ達の前に、しんのすけのスタンドが立っていた。爆発の影響を至近距離から食らったので、ボロボロだ。そしてそれは、本体であるしんのすけも同様だった

しかもダメージが大き過ぎたのか、スタンドが今にも消えそうだ

「正に命懸けで仲間を守ったか……その精神には素直に敬意を表そう……だが……死んで貰……ブゲェ！」

ロンディネが敦賀の顎に蹴りを入れ、体勢を立て直して膝で蹴った

「喋り過ぎなんだよ……」

「さっきの蹴り……ただの外国人じゃないな」

「まあね……僕のスタンドは戦闘とか身を守るとか一切出来ない不便なスタンドでね……ボスに保護された後護身術として格闘技を習わされた（もつとも相手が飛び道具持ったりスタンド使いだったりした場合すぐに逃げると言われているが）……」

それをさせてくれる相手では決してない。一人だけなら可能かもしれないが、今ここには成人女性が二人に幼稚園児が二人いて、内二人が気を失っていて、一人がまともに動けない程の怪我を負っている

（一人だけなら逃げる事は可能だ……だがそれはしんのすけ達を見捨てるという事になる……）

「『マーズ・ヴォルタ』！」

ロンディネに水疱を石鹼につけ投げつける。ロンディネは上着を脱いで水疱を受け止め、後ろにジャンプする

同時に水疱が爆発し、ロンディネは爆風を受けて本来の着地予定地より遥かに後ろに吹き飛んだ

「とつさの判断には上出来だ……だが生半可な防御策を取ったお陰で体がボロボロだな……まあそのゴミ程じゃないが……直撃してりゃすぐ死ねたもの……」

トオルは恐怖で震えていた。自分が今見えている目の前の起こっている事が何なのか分からない上、この危険人物に知り合いが次々と倒されていつている

「よし、最後は貴様だ……貴様の目の前で貴様の親や友達に爆弾を引っ付けて一緒に殺してやるよ」

後ろにスタンドを引き連れ、じりじりとトオル達に近付いていく

トオルは、しんのすけ達の前に腕を広げて敦賀の前に立ち塞がった

「何の真似だ？」

「ママには、おばさんには、そしてしんのすけには手を出させない」

力強くハッキリとそう言った。それに苛立った敦賀はベアリングを取り出し、それに小さな爆弾を取り付けた

「言葉は選べよ？貴様は俺に絶対に……」

「勝てないだろうね？でもお前からみんなを守りたいって想いはあるんだよ！」

「『守る』？そついう台詞は……」

爆弾を取り付けたベアリングをスタンドの手で弾き飛ばす

「相応の力と意志があつて初めて言つていいんだよ！片方しか無い半端者が容易く口にするんじゃない！」

ベアリングがトオルに接触する前に、トオルの腕から別の腕が出て来て、その腕がベアリングを殴って弾いた

弾かれたベアリングは、何個かは取り付けた爆弾が爆発し、何個かは不発だった

「さ……さっきのは……一体……」

『さっきのは……貴方です』

聞き覚えの無い、だがトオルにとって何処か馴染み深い声が聞こえた

「あ……貴方は？」

その声の聞こえた方向を向くと、自分のすぐ近くの距離に、人型の何かを立てていた

白いボクシングで使うようなメットを被ったカンガルーをモチーフとした頭部に、額から背中にそって小さい角が並んで生えていて、拳には×印のついたメリケンサックのような物が装備された全体的に光沢のある緑色の体色の亜人だった

「貴様……スタンドを出せたのか……」

突然現れた謎の亜人に、トオルは、『この人は自分自身だ』と直感で理解していた

そして、これはしんのすけや敦賀と同じ能力である事も理解していた

「やはり貴様もスタンド使いだったか……まあスタンド見えるのスタンド使いだけだから俺の爆弾が見えた時点でそれは驚かないけどね……」

敦賀は冷静に先程発射して爆発しなかった爆弾付きベアリングを観察した。『マーズ・ヴォルタ』に不発弾は考えられない。爆発しなかったのは何等かの理由があつて、それがスタンド能力と関わっているという事は確かだ。能力を見極めないところが負ける

よく見たらそれにはかなり小さな黄色の『×印』が付いていた。それは、あのスタンドのメリケンサックに付いている印と同じ物だった
スタンドは、敦賀に指を差した

『一回だけ言おう、もうお前は私達に勝つ事は無いだろう。大人しくここから立ち去り、自首しろ。そうすれば我々は何もしないと誓おう』

「舐めんなよ……お前の能力は大体察した……だから『確認させて貰う』ぜ」

ロケット花火を取り出し、腹の部分を指と指の間で挟み、ライターで導火線に火を点けた

爆弾を付けた時点で指先を下に向け、その指の力を緩める。爆弾付きロケット花火が発射された

トオルのスタンドは、そのロケット花火を難なく弾く。弾かれたロケット花火は後ろの壁や床に着弾し、破裂。爆弾は直接壁や床に当たった物以外爆発しなかった

(やはりだ……あのスタンドの能力は……)

「えっと……さっきから何で君が殴った物の付いた爆弾が爆発するのとならないのとあるの？」

『その理由は、我が拳で殴った物は物としての性能や物体、物質としての特性を停止させるからです。私は奴の「爆弾」の、『引っ付いている物からの衝撃を感じ取って爆発する』特性を停止させたのです！』

「つまり……爆発したのは直接爆弾に衝撃が加わったから爆発したって……事？」

『その通り！それが私の、そして貴方の能力です！』

「君の……名前は？あるのなら教えてくれる？」

『我が名は『カスタム・マシン』！貴方と共に存在し、貴方のそばにいる者です！』

マーズ・ヴォルタ？（後書き）

ロケット花火を指で挟んで火を点けるのは危険ですので真似しないで下さい（笑）

風間君のスタンドが発現。結構便利だけど当然制限はあります。スタンド名はザ・ビーチ・ボーイズの楽曲から

次回、決着！

マーズ・ヴォルタ？（前書き）

敦賀戦決着！

マーズ・ヴォルタ？

敦賀は、冷静に『カスタム・マシン』の能力の弱点を見極めんと観察していた

(納得がいかない……機能を停める能力だとしたら何故……！)

何かを察したらしく、走って建物の外へ逃げ出した

「待て！」

『追う必要はありません。それよりも救急車を呼んで……』

「うん分かってる……だけどあんな奴を逃がすと……」

外から複数の爆発音と阿鼻叫喚の叫び声が聞こえた。トオルはそれの原因をすぐに理解した

そして、横からガラスを突き破る音がする。そっちを見ると、大型バイクをウィリー走行で突っ走って来た。トオルとの間隔が5メートル程となるとヘッドランプの所で爆弾を取り付け、飛び降りた

『どうやら我が能力の弱点に気付いたみたいですね……我が能力は一つの性能、特性が対象なら同じ物なら幾らでも停める事が出来ま

すが同じ物でも違う特性を対象にする場合能力を解除する必要がありません。また、一つの物の全ての性質を停める場合その一つに対してしか能力を使う事は出来ません！」

「仕方無い……『カスタム・マシン』！能力を解除してあのバイクに付いている爆弾の全機能を停止させる！」

操縦者がいない為バランスを失い、倒れかけたバイクの爆弾を殴りつける。その爆弾には『赤い×印』が付いた

トオルは横に逃げ、当然だがバイクは横転し、延長上にあつた爆弾を爆発させ、最終的にそれによって大爆発した

「ならばこれはどうだ？」

窓に付けられたカーテンを引き剥がし、それに沢山の爆弾を取り付けてスタンドで角を掴ませてグルグルとその場で回らせる

最初は引き摺っていたが、遠心力によって次第にカーテンは浮かび上がり、胸の所まで浮かぶとトオルに向かって手離す

爆弾付きのカーテンは広がりながらトオルに飛んできた。しかも爆弾が付いている面とは裏だ

「カーテンの衝撃を伝える機能を停止させる」

『了解』

『カスタム・マシン』は爆弾の引っ付いていない角を優しく殴り、その機能を停止させた

そしてカーテンが地面に落ちると、敦賀は爆弾を引っ付けた消しゴムを投げつけた

トオルは今度はカーテンに付いた爆弾を殴ってその全てに黄色い×印を付け、消しゴムが爆弾に当たる前に拳で弾き飛ばした

敦賀は手近にある物を片っ端から爆弾を取り付け、片っ端からトオルに向けて投げつけた。どうやら物量に任せた攻撃に出たようだ

「カスタム・マシン！その全ての爆弾の衝撃感知を停止させる！」

飛んでくる沢山の爆弾付きの物体を、次々と叩き落とす。それを見てて敦賀はニヤリと笑う

「やはりスピードと精密動作性は貴様の『カスタム・マシン』のが上か……予想通り俺の攻撃を見事に全て無力化させてくれたな……」

その笑い顔のまま爆弾を付けた物を投げつけながら数歩後ろへ下が

り、一気に駆け出した。指には爆弾の付いたサイコロやビー玉が挟まっている

飛び道具がきかない以上接近した上で爆発させるつもりなのかと思っただが、よく考えればそれはリスクが大き過ぎる。至近距離から爆弾を爆発させるだなんて正気の沙汰じゃない

考えられるのは、そのリスクを全く恐れていない、または……

「食らえ！」

サイコロやビー玉を超至近距離で投げつけた。『カスタム・マシン』はそれを全てキャッチする

それを見て敦賀は、勝ち誇った顔をし、トオルの襟首を触り、そこに爆弾を引っ付け、更にもう片方の手でその爆弾に殴りかかった

最初からこれが狙いだった。そのまま爆発したとしても敦賀は腕一本が駄目になる程度で済むが、トオルは間違い無く死ぬ

『カスタム・マシン』は襟首についた爆弾の衝撃感知を停止させる為殴りかかるが、間に合わない！

「俺の勝ちだ小僧！あの世で恨め俺と遭遇した己の不運と俺に刃向かった己の愚かさをなあ！」

「その台詞は、きちんと勝った時に言うべき台詞だよ……爆弾魔さ

ん

「その声は……」

取り付けた爆弾に拳が当たる直前、敦賀の体は横から飛んできた人影に突き飛ばされた

「ごめん、あれだけカツコ付けといて早々に吹っ飛んで」

敦賀を突き飛ばした人物、ロンディネは申し訳無さそうに簡単に謝った

「いえ……無事で何よりです……」

「それより……君、何時の間にこんな近距離パワー型のスタンドを……いやいい。これに関しては後で話そう……」

「雑魚が一匹息を吹き返した所でどうって事は無いが……さつさと片付けてトズラしないとな……警察なんか怖くないけど『目を付けられたくなければ大きな騒ぎを起こすのは自重しろ』と言われてるのでね……」

「あなたにとって大きな騒ぎってどのくらいの規模だよ」

ロンディネがツツコミを入れた後、『カスタム・マシン』は爆弾の沢山付いたカーテンを持ち上げ、先程敦賀がやったように振り回し、放り投げた

敦賀は爆発の射程外へ逃れようとするが、『カスタム・マシン』は先程キャッチしたサイコロやビー玉を弾き飛ばす

サイコロやビー玉は爆弾の付いていない所にヒットし、カーテンはそのまま敦賀に被さるように落ちる

前にギリギリ掠るか掠らないかの距離で脱した

トオルはそれを見て不敵な笑みをし、爆弾の付いたビー玉を発射した

「てめーはバカか？お前の手元にある物の付いた爆弾はな、お前自身の能力で爆発しないようになってるんだよ……このカーテンを避けたのは視界が遮られるのを防ぐ為に過ぎん！」

サイコロを防ぐ為にカーテンを持ち上げたその時、気付いた。そのサイコロに付いている×印は、赤色だと

つまり、このカーテンに付いている爆弾は、通常に機能している

捨てようとしたが時既に遅く、カーテンに敦賀が持ち上げた事により、接触、至近距離で爆発した

至近距離から沢山の爆発力の高い爆弾の爆発を食らい、敦賀はボロボロとなり、倒れた

「どうにか倒せた……本当にどうにか……」

「お疲れ……後始末は警察の役目だから……警察と救急車呼んで待つてよう」

野原しんのすけ - 全治一週間の負傷

野原みさえ & 風間みね子 - この後、意識が覚醒した

敦賀鯨背：スタンド名：マーズ・ヴォルタ - 再起不能。再び刑務所に収監された

TO BE CONTINUED...

マーズ・ヴォルタ？（後書き）

風間君初戦闘初勝利！最後は自分の能力を上手く使って倒しました

次回も戦闘の予感がする話をやります

では、お楽しみに

ある5月の始めの日？（前書き）

最初は少し真面目に、途中からギャグで

そしてあの三人組が登場します！

ある5月の始めの日？

色々濃密な4月も終わり5月の始め、僕（須藤琢磨）は現在除夜君とそのお義母さん、そしてお義母さんの信頼する弁護士と共に沢登家に、仕事を休んで来ていました。理由は遺品整備のお手伝い

といっても僕達が手伝いに来ている理由はこの他にもあるのですが

「それにしてもこの屋敷結構広いし貴重品も沢山ありますね……」

「俺もよくは分らんが、沢登家の財産築いたの優太の曾祖母は義母さんの後輩で、その縁で俺と優太は仲良くなった。その時は既に故人だったけどね」

「……曾祖母が後輩？て事は君の義母のあの人は先輩？あの外見で？」

「うん、信じられない事にね……俺が初めてそれ聞いたの小学校入る前だったけど大いに驚いたもん……だから財産を遺した孫夫婦、優太の両親ね、が死んだ時優太の後見人をして遺産は18になつたら相続するようにしたんだと……」

「へー……所で話は変わりますが……見つかりませんね……探し物」

僕達が遺品整備の手伝いに来た最大の目的、それは、彼がスタンド使いにした者達が何人いるのか、そして沢登君の命を奪ったあのスタンドの本体の正体とはいかなくとも、その手掛かりは掴めるかも

知らないという希望的観測からです

こう思ったのには無論理由はありません。沢登君は僕を含んだスタン
ド使い達と連絡を取り、刺客を向かわせていた。という事はスタン
ド使いの情報や連絡先を纏めたファイルがある筈です。それが入手
出来れば先手を打つ事が出来ると……

「琢磨……」

「どうしました？」

「先手を打つつもりで家探しをしていたんだが……俺達はもう後手
に回っていたみたいだな……見るよ」

除夜君が指差した先は、教科書やノートが詰まった本棚でした。そ
の一番上には、半数以上が無かったのです

「この本棚が一番上で上に仕切りが無いにも関わらず、あまり埃が
ありませんね……それでいて同じ棚に並べられている本は少なくと
もそこより埃が溜まっている」

「だろ？多分俺達に来るほんの少し前にあいつに回収された……と
考えた方が自然だろうな。自分の正体がバレないように……今頃情
報は処分されているんだろうな。用心深い奴だ」

確かに、僕達は既に後手に回っていたんですね……そして少なくとも

も分かった事は、彼が『矢』を用いてスタンド使いにした者達に
関してです

ファイルに挟んで綴じていたのなら一人一ページで表紙の分を除い
てももしかしたら千人に達しているかも知れない……それくらい
の空きでした

昼の公園。そこは、子供達が遊具や砂場で遊び、お年寄りが犬の散
歩をし、鳩が芝生に止まっているのかな光景だった。そこに

「ふかづめ竜子！」

と名乗る髪を後ろに束ねた少女と

「魚の目お銀！」

と名乗る×印の書かれたマスクを付けた少女と

「ふきでものマリー！」

と名乗る太めの、顔にそばかすのある少女が、竜子を中心にそれぞ
れ別々のポーズを取る

「三人揃って、埼玉紅さそり隊！」

公園にいる彼女達以外の者達は、子供も若者も年配者も犬も鳩も彼女達に目を合わせないように去っていった

「フツ何時も通り、老若男女は勿論犬や鳩すらもあたしらにビビって去っていったぜ、危ない雰囲気醸し出すあたしらに関わりたくらしいな」

「うん、まあ違う意味で危ない雰囲気醸し出しているからなあたしら」

「あたしだったら違う意味で関わりたくないもんな」

二つの温かく、激しい拍手が聞こえた。拍手の聞こえた方向に顔を向けると、二人の子供がいた。坊主頭の子と後ろ髪を三角を描くように三点に束ねている少女がいた。内一人は彼女達にとってよく知っている人物だった

「凄いわこのお姉さん達！なあしんちゃん、こんなお姉さん達と何時知り合ったんや？」

「このおねいさん達はね、オラのお笑いの師匠なの。最初は押し掛けてきたオラを邪険にしていたんだけど、オラの熱意を理解してく

れて一番弟子にしてくれて……」

「嘘付くんじゃねえ！師匠って呼ぶなあ！それにお前も真に受けて号泣してんじゃねえ！」

坊主頭の少年、野原しんのすけと号泣している少女、藤方蓼花に怒鳴り込む竜子

『埼玉紅さそり隊』は、竜子、お銀、マリーの三人で構成される不良グループである。しかし、不良としての才能はあまりなく、どちらかと言えばお笑い芸人としての素質はある為、しんのすけからほぼ一方的に慕われていた

「しんのすけ、久し振りだな。所で、そいつは誰だ？」

「えつとね、この子は……」

「関西から親の都合で引越して来ました、藤方蓼花言います。しんちゃんのお友達です」

「丁寧な挨拶ありがとよ」

「宜しくね蓼花ちゃん」

「宜しくー」

「ああお前等、今日はちょっと人に用があつてな……まあ簡単な相談なんだが、頼まれた以上他人に聞かれるのは……それは分かるだ

る？」

「お、来たぞ竜子」

公園の入口から、縮れている茶髪にカチューシャを付けた、レモン色の布を縫い合わせた物を継ぎ接ぎした、制服のあちこちにリボンで作った花を付けた少女が現れた。その手には、本物と変わらない大きさのドーベルマンの縫いぐるみが抱えられている

少し改造されているが、制服は彼女達と同じデザインである事から、同じ学校の生徒だろう。どうやら彼女が竜子の言っていた相談相手なのだろう

「すみません先輩、私なんかの為に時間を割いてくれて」

「いいよ、あたしで良ければ力になるよ……場所変わるか？元々ここには待ち合わせ場所として指定しただけだし……」

（相談で待ち合わせ場所を指定せんやる普通）

（面白いでしょ）

「いえ、構いません。誰に聞かれても大丈夫な相談事ですから……」

「おねいさん、オラ野原しんのすけ五歳。好きな食べ物はチョコビで嫌いな食べ物はピーマンとニンジン」

「可愛らしい御挨拶ありがとう。あたしは庚木花かのえぎはなっていうの。高校一年生で趣味は縫いぐるみを作る事でそれで手芸部に入っているの。好きな食べ物たべものはネギを入れた納豆で嫌いな食べ物たべものはネギを入れた味噌汁」

「気が合いますな、ボクもです！」

「そうだね……（『ボク』？一人称変わってない？）」

「それはいいとして庚、お前の悩みつてのは？」

「はい、桶川先輩、宜しければあたしに雑巾の作り方を教えて下さい！」

そうはつきりと言った後、頭を深々と下げた

全員、彼女の言っている事の内容と彼女の真剣さとのギャップに、呆然とした。いち早く復活したのは竜子だ

「何で雑巾の作り方をあたしに学びたいんだ？」

「あたし、裁縫は好きですし得意なんですけど雑巾とティッシュカバーを作るのだけは駄目で……でもやはり雑巾くらいは作れるようにならないと思うって……先輩は走りながらも雑巾を縫えるって聞いたから先輩なら上手く縫えると思い教えて貰おうと……」

「雑巾を下手に縫う方が難しいと思うけど……分かった。ウチに来て。みっちり鍛えてやる」

「ありがとうございます！」

「なあお姉さん、その縫いぐるみ少し貸してくれへん？なあなあ」

「いいよー」

許可を貰ってドールマンの縫いぐるみを抱き上げる藤方。その表情は年頃の少女のものだった

「せやけどほんまりアルやなこれ……何処で売ってあるんやろ……」

首筋に指を当てた所で表情を変え、一言お礼を言った後庚に縫いぐるみを返した

その後、竜子は自宅へ向かい、庚とお銀、マリーもついて行った

「オラ達もついてこーよ母ちゃん」

「せやな……（何やあの縫いぐるみ……何で『触感は綿なのに脈を打つとつたんや』？）」

遅れてしんのすけと藤方もついて行った

ある5月の始めの日？（後書き）

結局春日部に何人のスタンド使いがいるのかとか分からずじまいです。除夜君のお義母さんは……何歳なんだ？

縫いぐるみの秘密はもう少ししたら明かしたいと思ってます

次回もお楽しみに

ある5月の始めの日？（前書き）

竜子達の後輩に頼まれ、竜子達と共に竜子の家へと向かうしんのすけと藤方

一方、他の人も……

ある5月の始めの日？

『埼玉紅さそり隊』リーダー、竜子の家に向かっている最中

しんのすけは、近所のおばさん達と井戸端会議をしているみさえと遭遇した。乳母車に乗ったひまわりもいた

「おう、ひまどうしたの？」

「たいの、たーよたーよ。たえあえ」

訳、買い物帰りの途中ママが近所のおばさん達に会って何時もみたいに長話を始めたの

「ほうほう、それは大変ですな。それで何分前に始まったの？」

「たや」

訳、大体五分前くらい

「始まったばかりという事が……なら後二時間半以上かかると見ていいね」

「しんちゃん。ひまわりちゃんの言っとる事分かるんか？」

「まあ大体はね、後動物ともほんの少しなら話せるよ」

「……世の中どうなっとなんねん……まあおばさんもお話に夢中やし、ひまわりちゃんもつれてこ。赤ちゃんに長時間直射日光浴びるんは危ないさかいな」

「そうだね……そんじゃ行こうかひま」

「たや」

こうしてひまわりも加わった

数分後、童子の家に到着した時、ついでに一緒に持っていった買い物袋の中からしんのすけと藤方は高級菓子を、ひまわりは卵ボーロを勝手に全部食べた

午後一時半。物が沢山詰まった買い物袋を持った白帯咲良が、自分が現在いる施設に帰宅する為歩を進めていた

今日は学校側が所用があつて午前で終わったので、院長から帰りに商店街の店で買い物をするよう頼まれたのだ

タイムサービスが終わる前というのもあつて、随分ともみくちゃとなつて疲弊しきつた表情を見せていた

「よくあれだけの混雑で物を無事に買えたよな……僕……今程自分を誉めたいと思った事は無いよ……」

「そうだね……俺もそう思うよ」

いきなり声を掛けられた。声のした方向を振り向くと、そこにはバス停に設置されているベンチに我が物顔で寝そべっている、裾の長い学ランを一番上のボタン以外を外し、蜥蜴皮の模様のネクタイをしめた薄いエメラルドグリーンの髪の色少年がいた。日差し対策なのか、大きめのタオルを顔に被せてある

男は腰を上げて顔に被せてあったタオルを取った。顔はかなり整っていて、紫色の目をしていた。彼のその容姿を見て、咲良は

「貴方は一体何処の国から来たんですか？」

と訊ねた

男はぼつの悪そうな顔をし、こう答えた

「俺は日本人だ。髪の色は地毛で瞳の色も生まれつき」

「そうなんですか……」

「見掛けない制服着てるね。何処の学校？」

「春日部市の双葉中学校っていう所です。最近引っ越してきたばかりでまだ制服出来てなくて……」

「懐かしいな、俺その学校のOBだよ。今は大宮の私立校に通ってるけどな……本荘信朗ほんじょうのぶあきってんだ」

「白帯咲良って言います」

「うん、宜しくね咲良君……えっとさ、今日何を買ったの？結構量多いけど何人家族？」

「何人と言われても……四十人以上はいますから……」

「多いね、施設暮らしか何か？」

「はい……」

「そうか……本題に入るんだけどさ、俺刺身醤油を買いに来たんだよ。言っとくけど学校は開校記念日で休み。けど人が多くて少し面倒になってね、それで買った人に譲って貰おうと考えて」

「ここで寝そべっていたと？」

「うん、まあね……買っているみたいだし、一本ちようだいよ。俺は物乞いとか追い剥ぎとかじゃないからその分の代金はちゃんと払うからな」

「こつちも困りますよ、お使いなんだし」

「いや俺も醤油無いと困るんだよ。ウチの祖父が入学祝いに鯛を送ってくれて造りにしようと思ってるんだけど醤油が切れていてさ。定価で買ってから譲ってくれよ」

「あの……」

本荘の押しの強さにやや引き気味の咲良。本荘は溜息をつく

「じゃあさ、荷物を下ろして。安心しなよ、盗ろつとかそう言った考えは無いから」

「はあ……」

不思議に思いながら買い物袋を下ろした

同時、指をデコピンの形で額に近付け、中指を弾いた

指が当たった途端、咲良の体が二メートル後ろに吹っ飛んだ

「え？」

この現象は明らかにおかしな物だった。指が叩かれた所はほんの少

し痛いくらいだ

もしこんな後ろに飛ぶ程の衝撃を受けたら、自分の頭は原型を留めていない筈だ

「まあさっきのデコピンは分かり易くする為に行った事で本来は一切の動作は必要無いんだけどね……」

「へ？」

「簡単に言えばね、俺は念じるだけで斥力を発生させる事の出来る能力を持っているんだよ……その気になれば石で君の体に穴を開ける事だつて可能なんだよ……」

(何言ってるんだこの人は……それじゃまるで超能力じゃん)

「持っていると言っても手に入れたのは先月の中旬辺りなんだけだね……まあ色々訳分からないけどまあ嬉しいなと思ったよ……」

本荘の後ろから、顔にはトランプのクラブを象った穴が開いていて、両肩にはダイヤを象った肩当てが、腹部にはハートが描かれた腰当てが、両膝にスペードを象った膝当てが装備された、腕に網目の模様が入っている人型のスタンドが出現した

「な……何なんだその人に似ている『何か』は？あんたの言ったその能力と関係があるのか？」

「……見えてるのか？『これ』が……まあこれは後で聞かせて貰えばいいか……」

道端に転がっている小さなそれなりに質量のあるゴミを拾い上げた

竜子の家

その竜子の部屋で庚は竜子から雑巾の縫い方を教えて貰い、他の5人はリビングで遊んでいた

「ちよいトイレ行ってくるわ」

「行ってこい」

「しんちゃんも一緒に来て欲しいんやけど、ウチ知らない家やと緊張する夕チやさかい」

「いいけど……それじゃ行くつかひま」

「たいや」

「という訳であるの二人の今いる部屋に行くで」

「トイレに行くんじゃないの？」

「……異性に連れション頼むか常識的に考えて……あの木花って姉ちゃんを調べにや」

「どうして？」

「あの姉ちゃんの持つとった犬の縫いぐるみ……確かに『脈』があったんや。感触は綿と布だけやったにも関わらずな」

「つまり……どゆ事？」

「あの姉ちゃんがウチ等と同じ『スタンド使い』かも知れへん言う事や！勿論違う可能性もあるけど疑う根拠がある以上は調べた方がええ！もしかしたら危険な能力を持つとるかも知れへんしな！」

「そうだね……」

「痛ッ！」

「大丈夫か……絆創膏絆創膏」

針を指に突き刺してしまい、竜子は絆創膏を取り出して庚の指に巻いた

現在、庚の両手の指には右手の親指を除く全てに絆創膏が巻かれてあり、部屋には使い古されたタオルや古着だった物が散らばっていた

「お前よくそれで縫いぐるみとか作れるよな」

「縫いぐるみとかは子供の頃からよく作っていたので……あたしは昔から内気で友達もあんまり出来なくて家もその日暮らしと大して変わらなかつたから既製品を買ってお金も無かつたし……自作の縫いぐるみだけが気の許せる友達だったんです。中学の頃は簡単なバイトで縫いぐるみを作っていた事もあつたし」

「そうか……」

「でも今は、友達を沢山作れるようになったからいいんです……先輩もあたしの友達にしてあげますよ……」

庚の後ろから、細く縫い針や待ち針、糸切り鋏等様々な裁縫道具のついた細いアームが沢山ついた右腕に、布切り鋏の形をした左手、そして背中に幾つもの色の糸を巻いた角の生えた、昆虫の複眼をした女性の体型をしたスタンドが出現し、そのアームで童子の体を捉え

三等身の縫いぐるみに変えてしまった

「可愛い『友達』になれましたね先輩……安心して下さい。『フレディース？デッド』に人を殺せる能力は無いですから……それで、そこで盗み見している人達、出て来ていいよ」

廊下とこの部屋を繋ぐ扉が、ゆっくりと開いた

ある5月の始めの日？（後書き）

庚木花はスタンド使いでした。スタンド名はカーティス・メイフィールドの楽曲から

咲良に襲い掛かったスタンド使いはある人物と繋がりがありません

それでは、次回も宜しくお願いします

ある5月の始めの日？（前書き）

スタンド使いと遭遇したしんのすけ達と咲良

このピンチをどう切り抜けるか

ある5月の始めの日？

開いたドアからは、しんのすけと藤方、そしてしんのすけに抱きかかえられているひまわりがいた。しんのすけと藤方は、既にスタンドを出している。タイプは近距離パワー型だ

それを見て庚は、嬉しそうな笑みを浮かべる

「君達も同じ能力を持ってたんだ。少し嬉しいな」

「まあな、『スタンド』って言うんやで。あんた何時この能力を手に入れたん？」

「あたしは四ヶ月前変な男の子に出会ってこの能力に目覚めたんだ……瀬上除夜って人に会ったら殺してくれって言われてね……人を傷付けるとか殺すとか嫌だけどこの能力は嬉しかったな……だってこの『フレディース・デッド』があれば人でも動物でも植物でも物でも何でもあたしの大好きな縫いぐるみに出来るんだもん」

竜子の縫いぐるみをギュツと抱き締めた。これだけ見れば可愛らしいのだが、抱き締めているのが人間の為、恐怖しか感じない

「同じ能力を持つ人は初めて会ったし……君達もお友達に加えてあげる」

「残念やけどな……ウチは曾孫に囲まれて死ぬんが望みなんよ……」

縫いぐるみになつたら成長出来へんやろ！」

『スウィートハット』の拳が迫る。『フレディーズ・デッド』は無数のアームをスタンドの腕に取り付け

一瞬にしてスタンドを縫いぐるみにしてしまった。床にそれが落ちると、藤方が縫いぐるみとなってしまった

スタンドの縫いぐるみは消えた

「可愛い縫いぐるみになっちゃったね……安心して、たっぷり可愛がるだけじゃなく汚れないように大切にしておけるから……ね？」

藤方の縫いぐるみを膝に乗せ、ペットの頭を撫でるかのように頭を撫でて話し掛けていた

撫で終わると、しんのすけとひまわりの方を見る。ひまわりは完全に怯えていた

「貴方達も『お友達』にしてあげる……出来るだけ可愛らしい姿にしてあげるから……大人しくしててね？」

本荘は咲良に向かってゴミを自身の能力で飛ばす。咲良はそれを避ける事が出来ず、喉と右足にそれを受けてしまう

「ガ……うぐ……」

「安心しろ。さっきも言ったが俺は追い剥ぎとかじゃないから殺しはしない。ただ……ほんの少しばかり俺の能力、名付けて『スーパートランプ』の恐ろしさを骨の髄までじっくりと教えてあげようってだけだよ」

咲良は、呼吸を整えると本荘から離れようと駆け出した。ゴミを飛ばそうとしたが、止めた

「随分速いな……鍛えれば世界陸上の代表選手になれるんじゃないのか？」

感心した様子で逃げる咲良の感想を述べる

同時に厄介だと感じた。既に自分の能力の射程距離外だ。斥力を強くすれば射程距離外でも届くが、貫通してしまう。そういうのは避けたい

咲良の買い物袋を持ち上げ、ある物に目をやる

「あれ？ここ何処だっけ？」

無我夢中で走った為、商店街から結構離れた河原に辿り着いていた

こちら辺には来た事が無かった為、道がよく分からず、困惑していた

「逃げ切れたのは良かったけど……荷物も置き忘れちゃったし、戻ったら見つかりそうだし」

「その心配はしなくていいぞ。持ってきたからな」

「ありがとうござい……」

買い物袋を受け取ると同時に、後ろに下がった

買い物袋を渡したのは、『浮かんでいる』薬局の看板に乗った本荘だった

どうやってここまでついて来たのかを理解した。斥力で看板を浮かせてそれに乗って、スケボーの要領で追ってきたんだ

「貴方が欲しいのは醤油でしょ？置いて逃げたんだから取ってけば良かったんじゃないんですか？」

「俺は置き引きをするつもりはねーよ。立派な窃盗罪だし。あくまで俺はお前に醤油を譲って欲しいんだよ」

「……変な所ちゃんとしてるんですね。やってる事は完全に滅茶苦茶なのに……」

「『盗まない、殺さない』をポリシーにしているからな。命が掛かっている時は別だけど」

咲良は、辿り着いたのは偶然とは言えここに逃げたのは失敗だったと感じた。ここは河原だ。飛び道具となるゴミも石も沢山ある

本荘は笑いながら比較的小さな石を拾い上げた

「安心しろ。醤油を渡してくれば何もしないし渡さなかったとしてもちよつと痛めつけるだけで勘弁してやる。顔は狙わないよ問題になるし」

「全然気休めになってません……それに、あんたには何も渡すつもりはありません。消えて下さい」

咲良は自分の言っている事に自分が一番驚いていた。相手は訳の分からない能力を使う。素直に渡した方が身の為なのに

だが、何故か今の自分には何処から来るのか、それを言う『自信』があった

本荘は何処か詰まらなさそうに、手に持っているゴミや石を先程よりも強めの斥力で飛ばした。当然先程よりスピードは速い

「避けられるんなら避けてみな！」

石やゴミが迫ってくる。それらが咲良に触れる前に

黒い蝙蝠の翼と白い鳥の翼の二枚が盾となるように咲良の前に下から伸びた

石やゴミはその翼に全て受け止められ、翼が少し広がるように動く、その全てが全く同じスピードで本荘に返された。本荘は『スピードランプ』で自分に返ってきた石やゴミを弾く

咲良と本荘は、二枚の翼が伸びている咲良の足元を見た。そこには

「1J……1Jれは？」

しんのすけと庚は、膠着状態となっていた

「どづしたの？かかってこないの？」

無闇にかかってこれる訳が無い。スタンドが人形化されたら、本体も人形となってしまう

近距離パワー型は論外、遠隔操作、装着、刀剣、一体化は全部一体しかスタンドがない……一体だけ？

「あ……何だ……こつてり忘れてた……バラける『ハリケーン』！」

『よし分かった！』

ハリケーンは『群生型』となり、庚と『フレディース・デッド』にしがみついた

「一体だけじゃ簡単にやられるんらいつぱいいれればいいんだぞ！」

「百位はいるね……多分何匹か潰した程度じゃどうにもならない……かな？」

『フレディース・デッド』のアームで何匹か潰して確認、観察する
庚。十匹程潰した後、庚は動いた

しんのすけに向けて足を

スタンドのアームはしんのすけに届き、しんのすけを呆気なく縫いぐるみへと変えた。ハリケーンは消滅する

「沢山出て来た時は焦ったけど一体一体にエネルギーを分散する分そのパワーは弱いんでしょ……後は」

しんのすけと藤方、童子の縫いぐるみを置いて、ひまわりの方へくると首を向けた

「君だけだね」

「ひ……」

「大丈夫だよ。縫いぐるみになったってボロボロにしない限り死ぬって訳じゃないし痛くもないし一瞬で終わるから……だから観念して安心して……あたしのお友達になってね」

『フレディーズ・デッド』のアームが迫る

「た……たやー！」

アームがひまわりの体に触れるその寸前、ひまわりの腕からひまわりの腕よりも一回りも大きな腕が飛び出し、『フレディーズ・デッド』の右手の甲を殴った

「痛っ！」

フィードバックで右手にダメージを負い、左手で右手の甲を当てた。
おかしいな感触がした

ゆっくりと左手を上げてみると、右手の甲の一部は、『透明度の高い水晶のような石』に変わっていた

「ま……まさか君も……あたし達と同じ？」

「たいやー！」

ひまわりの後ろから、スタンドが発現した

ある5月の始めの日？（後書き）

ひまわりと咲良のスタンドがとうとう発現したっぽいです

本荘のスタンド名はイギリスのロックバンドから。本荘はスタンドの装備品を見て名前を決めました

次回もお楽しみに

ある5月の始めの日？（前書き）

庚戦決着！本荘戦は……どうなんだろう？

ある5月の始めの日？

咲良の足下には、茶色の地に黄緑色の斑模様の、頭部は目とその周りを除いて骨が露出していて、右には上に白い鳥の、下に黒い蝙蝠の翼が重なるように付いていて、左は上下逆に翼が配置された肺魚のような魚がピチピチと跳ねていた

「お前も同じ様な能力を持っているみたいだな……『スーパートランプ』が見えていたのはそれが原因か……」

「能力……？この羽の生えた魚みたいのが……僕の……」

実感は湧かなかったが、理解した。この『羽の生えた魚』が自分の自信に繋がっているというのを

（この魚みたいなのがあいつの人みたいなのと同じ能力だとすると、あいつと同じようにコントロール出来る筈だ……出来ないと思うな……出来ると思え）

咲良は念じるように想うと、魚は飛び跳ねるのを止め、翼を広げ、体を尺取虫のように曲げて跳んだ

その勢いで二対の翼を広げ、羽ばたかせる。魚は咲良の右肩の上で翼を大きく羽ばたかせながらその場を飛んだ

「動いた……」

「見るからに貧弱そうな魚だな……そんなんで我が『スーパーラ
ンプ』に敵うのか？」

不敵に笑いながら言う本荘だが、内心ではその魚を警戒していた。
自分の放ったゴミや石が跳ね返された

どんな能力なのかはまだ分からないが、同じ失敗を進んで何度も繰
り返すバカはいない。どんな形でも失敗から学ぶから成功するのだ
能力を応用して一回跳んだだけで咲良の目前まで距離を詰め、その
ままスタンドで殴りつける

魚は白い鳥の翼をスタンドの拳の軌道上に来るよう動かし、受け止
める。そして僅かに翼を広げるように動かし、拳を弾き飛ばした。
本体の本荘はその衝撃で吹っ飛んだ

本荘は自分に起こった現象に疑問を感じ、そしてあの『魚』の能力
を理解した

（間違い無い……あの魚の翼は衝撃をそっくりそのまま跳ね返すん
だ……だからさっきゴミや石を返された時同じスピードで返ってき
たんだ）

「貴方の能力じゃ僕に勝つ事は出来ない！早く降参して下さい」

（どうやらあいつも自分の能力に気が付いたみたいだな……確かに厄介だ。十で攻撃したら十のまま返されるからな……だが、完璧に防ぎきるって訳じゃないだろ……）

本荘は口元を歪ませ、本体とスタンドは大量の石を拾った

ひまわりの後ろに現れた、右回りに『JEWELRY』と書かれたパイザーの付いた銀色の傘を頭に被り、耳元まで裂けたその口からは鋭い犬歯が覗き、首には大きな数珠を掛け、足には水掻きの付いている、ひまわりよりも少し大きな人型のスタンド

それに殴られ、透明度の高い石に変化した右手の甲

確認の意味を兼ねてアームの一本の針でそれが何かを確認する。針で引っ掻いて傷付かない所を見ると、少なくともガラスではない何より気になるのは、ひまわりだった。理由は、透明度の高い石に変化した右手の甲を見た瞬間からだ。今にも迫ってきそうで庚は若干気圧されていた

『フレディーズ・デッド』！

アームがひまわりに迫る。ひまわりのスタンドは、アームが本体に

接触する前に『フレディーズ・デッド』の右肩と腰を殴る。その部分分は、右手の甲同様透明度の高い石となり、衝撃が強かったのか、縦に二つに割れた

この性質を見て、庚はひまわりのスタンド能力がどういった物なのか推測出来た

「殴った物をダイヤモンドに変える能力……だから針で引つ掻いても傷付かないし、綺麗に割れたんだね……ダイヤモンドってある面に力を込めると人間の力でも割る事が出来るって、昔ラジオで聞いた事あるもん……だから殴る時力を込め過ぎたんだね」

右肩が元に戻り、割れた部分そのまま傷として残り、血を流した

「余計お友達にしくなっちゃったな……宝石になんか興味は無いけどダイヤモンドって不滅の石とかって呼ばれているんだよね……そんな能力を持った友達なら『不滅の友情』が築けそうだねえ……」

「だーやー！だいのめーめー！」

訳、こんな一方的な友情があつてたまるか！お兄ちゃん達を戻せ！

「何言ってるのか分からないけど、付き合っていく内に分かるよう

「戻った！ウチ元に戻った！」

「ひま、これがお前のスタンド？」

「たや！」

「あれ？一体何があったんだ？」

しんのすけはひまわりの後ろにいる人型のスタンドについて質問し、藤方は元に戻れた事を喜び、竜子は自分に何が起こったのか分かってないようで少し困惑していた

「何で……何で……何で誰も分かってくれないの？友達欲しいだけなのに……」

泣きながら同じ事を繰り返す庚を見て、しんのすけは近寄って手を差し伸べた

「オラで良かったら……お友達になってあげるけどどうかな？」

「いいの？」

「うん、今度さ、オラの家遊びに来ない？オラの友達紹介するか
ら」

「うん！」

「大丈夫か庚」

「先輩……」

「怪我治つたら、雑巾縫いの特訓やるからな」

「あんた裁縫得意なんやろ？ウチに教えて欲しいんやけど駄目か？」

「うん、いいよー！」

大量の石やゴミを拾った本荘は、強めの斥力でそれを咲良に向けて飛ばした

咲良はそれを魚の白い翼で跳ね返す。本荘もそれを『スーパートランプ』で返した

それを数回繰り返し返していくと

「ぐが！」

翼を広げて攻撃を跳ね返している最中に出来た隙間から弾丸が入ってきて、咲良に命中した

「お前のその魚の能力が一番隙だらけになるのは『翼を動かす』時だよ……狙うのは正直難しいが出来ない訳じゃない……」

「狙いを悟られない為に……わざと沢山の石やゴミを飛ばし、跳ね返した物を斥力で跳ね返していたんですか？」

「まあそういう事だ。気にするなよ。相手が俺じゃなかったら……」

「何をやっとなだお前は！」

本荘の後ろから除夜が現れ、本荘の頭を思いつ切りぶん殴った

「除夜兄さん」

「瀬上……」

「久し振りだな本荘……何やってるのか説明して貰うかな」

一時間後

「……醤油くらい自分で買えよ……」

二人から話を聞いての第一声は、これだった

それにしてもこの二人も『スタンド能力』を得ているとは……

「あの……このお兄さんと知り合いなの？」

「まあな、宝来と同じ中学生の頃の友人の一人……まあそれはいいとして、二人共今日の夜空にいるか？空いているなら八時から『焼き鳥デスペラード』って所に集まるから来てくれ。そこで詳細を聞きお前等の『能力』に関して知ってる限りの事を全部話す」

「焼鳥屋という事は晩飯か？」

「まあな。それを兼ねて……」

「言っとくが食費は割り勘だろうな？」

「……ああ、割り勘」

相変わらずだな。こいつの訳の分からんこだわりは……

白帯咲良（スタンド名：フィッシュボーン（命名、瀬上除夜））
- 柔らかい物が多少グシャグシャになったが買物は無事完遂

野原ひまわり（スタンド名：プレシヤス・エンジェル（命名、瀬上除夜））
- しんのすけと一緒に焼き鳥デスペラードに行く事となった

庚木花（スタンド名：フレディーズ・デッド） - 再起可能。怪我はそれ程深くないので、病院で少し手当てして貰った程度で済んだ
本荘信朗（スタンド名：スーパートランプ） - 詳細は知りたいし友達もいると聞いたので焼き鳥デスペラードに行く事に決めた。因みに醤油は義母に分けて貰った

TO BE CONTINUED...

ある5月の始めの日？（後書き）

何とか一段落しました

咲良のスタンド名はアメリカのミクスチャー・ロック・バンドから
ひまわりのスタンド名はボブ・ディランの楽曲から

本荘は除夜の同年代の友人の一人でした

次回もお楽しみに

身の回りの危険（前書き）

焼き鳥デスペラードに集結するスタンド使い達

そして……

身の回りの危険

焼き鳥デスペラードは、僕（須藤琢磨）を初めとして春日部にいる除夜君やしんのすけ君と会ったスタンド使いが集結しつつあります。理由は、僕達が沢登家で分かった事、僕達を含んだ春日部の住人が今どれだけヤバイ状況下にあるのかを報告する為と、咲良君や除夜君達の友人の本荘君に能力の説明や今、どのような事がこの春日部で起こっているのかを説明、そして能力を得た経緯の事情聴取の為に

除夜君と咲良君は時間ギリギリになって来るみたいで、他の来れる人達はもう既に来ていて好きにしているので暇潰しがたらず少し覗いてみたいと思います

「それじゃ張って張って」

「半」

「半」

「丁」

「半」

「丁」

杉江さんが仕切って、ロンディネ君、一瀬君、塩屋君、莓花ちゃん、夏帆君が半か丁か張ってました。任侠物の映画とかで見る『サイコ

『口賭博』とかという奴です

まあ、ただ言い当ててるだけっぽいし、ほっときましょ。因みに丁だったらしいです

「やった。大出世。部長になれた」

ガッツポーズをする庚さん……で良かったですよ？は、人生ゲームを大いに楽しんでました

……ルールブックを片手に一人で

友達が欲しいとか言ってきましたが、こういうみんなでやるゲームは細かい事を聞いて一々みんなから反感を買わないように、まず一人でやってちゃんとルールを把握してからの方が絶対いいし楽しいからという言い分です

まあ、こちらもほっときましょ

他は、しんのすけ君と風間君がゲームをしてたり、稲庭さんがボルシチを七十回目のお代わりをしたり、ひまわりちゃんが仮面ライダーに変身する主役の配役の俳優の写真集を見てうっとりとしていたり、御厨さんが『ピンクダークの少年』の単行本を一巻から黙々と読んでいたり、宝来さんと逢坂君、本荘君、蔵内さんはポーカーをやっていたりしていました

何処のグループにも参加する度胸が無かった僕は、カウンターでアルコール抜きのウーロンハイを注文して飲みながら店主さんと世間

話をしていました

集合時間ジャストに除夜君と咲良君の二人が店に入ると、各々の自分の時間が終わりました

まず、一番大切な事として庚さんや咲良君、本荘君に自分の能力はどういった物なのかを簡単に説明しました。これに関しては、多少の質問はありましたが特に問題は起きず、スムーズに話が進みました

しかし、次の話す内容である、『誰がどんな動機でスタンド使いを増やしていたのか』を説明し終えた後、咲良君は表情を変え、本荘君は説明をしていた除夜君の顔を殴りつけたのです

除夜君の胸倉を掴み上げ、尚も殴ろうとする本荘君を止めようとした僕達を、除夜君が手で制しました

「いい……それより稲庭……」

「もうやってる」

彼女の後ろには、彼女のスタンド『イザベラ』が腹這いになっていました。右の前足が無い為少し見回しましたが、その足から分裂した小型スタンドが店主さんの頭に張り付いていました。正しい判断ですね。これを見られてそのままにしておいたら下手すれば警察で説教、場合によっては留置場に拘留されてしまいますしね

「一ヶ月ちよつと会わないだけでふざけた冗談言うようになったな瀬上……よりにもよって沢登がお前の抹殺の可能性を上げる為に俺を始めとするこの春日部で大勢の人間を矢で貫いたって」

「俺だつて信じられないし信じたくもなかった、そしてそれは今もだ。だが事実だ、あいつは俺に憎しみを抱いていて、力が表面に出た事でそれを自覚して大勢の人間を巻き込んだんだ！」

「あいつがそんな事する奴かどうかはお前が一番分かっている筈だろ！」

「そうだよ……分かっていた『気でいた』……でも分かかってなかった……違う、分かるうともしなかったんだ……」

俯いて弱々しく喋る除夜君を見て、本荘君は胸倉を掴み上げる手を離しました

「悪い……さつきぶん殴つたのはただの感情任せだ……俺がこの能力を得たのは八日程前だけど、あの日の夕方沢登が遊びに来てな、ゆっくり話そうと思つてお茶を準備している途中にあいつが何処からその『弓と矢』を出して俺を射つた……目が覚めた時あいつは簡単に書き置きを残して帰っていた……雰囲気全然違つたから他人の空似かと思つていたしあいつが帰つたのも時間帯が時間帯だからと思つてたが……やはり沢登だつたんだな……」

「ああ……」

「大丈夫？」

「平気だ……奥歯が少しグラグラするがな……それじゃ話再開するぞ」

「分かった」

「その前に砂肝頼んでからね」

「つまり……今この春日部には千人近く、またはそれ以上のスタン
ド使いがいて……しかも情報を奪われたから『誰がなっているのか』
が全然分からないって事？」

宝来さんの質問に、僕と除夜君は首を縦に振りました。殆どが驚愕
していましたが、杉江さんと塩屋君、ロンディネ君は比較的冷静で
した

「何でロンディネさん達はそんなに冷静なんですか？」

「いや、大方そうだろうなと思ってたから」

「連絡を取れていたという事は何等かの形で連絡が取れるようにし
ていたって事だからね。つまり自分に繋がる情報もあるって事だし

……」

「僕がそいつだったたら多少のリスクを犯しても始末した後すぐにもそれを処分する。それも念には念を入れて全部だ」

ロンディネ君、杉江さん、塩屋君が風間君の疑問に答えました。その後間髪入れずに除夜君が数日前の朝刊を広げました

そのページには、刑務所を脱獄した囚人達計十三名の顔写真や刑務所に入れられた罪状とその詳細が書かれていました

「今の所スタンド使いと分かっているのはこいつ等……まあ敦賀はトオルが倒したから残り十二人……取り敢えずこいつ等の顔と名前は覚えとけ。覚えておいて損は無い」

「顔変えてる可能性あるんやけど……」

莓花ちゃんの言ってる事は何の間違いじゃない。スタンド能力で顔を変えたり別人に見せ掛けたりするのは可能でしょうし、そういうのが出来ない能力でも整形で顔くらいは変える事は出来ます。何時の世でも日陰者御用達の闇病院とか闇医者とかはいますからね

「話は変わるけど……そいつは沢登優太を始末した時『弓と矢』も奪ったんだよな？」

「ああ……」

「ニュースを見て知ったから知っている奴もいるだろうけども既にそいつは『矢』を使い始めている。今日までに分かっているだけで六人、『矢』に射抜かれた事で死んでいる。当然『矢』は抜き取られていたが御丁寧に確実に致命傷になる位置に『矢』を射っていた。警察は無差別殺人事件として捜査を始めている」

「ここまで詳しくマスコミに発表すると模倣犯が出て来る事も容易に危惧が出来るがそれは警察の仕事だ、俺達が首を突っ込む事じゃない……まああいつの目的はどうやら俺みたいだし最悪俺を餌に奴を釣る事も出来るだろうな。言いたい事は周りの人間をやたら警戒する必要は無いけど用心はしとけて事だ。そして脱獄囚に出会す事があったら不用意に近付くな。それが言いたくてわざわざ集まって貰ったんだ」

「分かった」

「了解」

「ここにいない姉さんと杵島さんには僕から伝えとくよ」

その日はこれで解散となりました

除夜達の通う学校の部室棟の二階の非常階段に近接する部室。そこに数人の男女がカーテンの閉め切り白熱灯の付けた部屋で番茶を飲

み、草加煎餅を食べていた

「まさか沢登優太が殺されるとは……」

「そうだね、全然予測していなかった……」

「確かにショッキングだが俺達にとって何の問題でもないだろ？」

上座に位置するパイプ椅子に座り、足をテーブルに乗せて組んでいる女子生徒が言う。その少女は顔と腕を上げながらヤンジャンを読んでいた

「俺達の目的はあくまで『奴』だ。多額の懸賞金が手に入れる事が出来なくなったのは残念だがそれを忘れるな」

「ふえーい」

「それで『部長』、これからどうします？」

「奴は近々帰ってくるだろう。その時動くぞ」

そう言って少女は同人誌を取って読み始めた

彼女達と除夜が関わりを持つのは、ほんの少し後の話だ

身の回りの危険（後書き）

前半はデスペラードで好き勝手する人達を書いてみました。少し突っ込み所ありますけど

最後に出て来た人達は勿論スタンド使いで、一応除夜達と敵対する事になるつもりです

まあ載せられたらいいけど

これからも宜しく願います

デザイナーに依頼しよう!? (前書き)

友達が出来て嬉しい庚は、今日も友達と遊ぶ為に遊びの練習をしていた

公園

「だるまさんが〜…転んだ!」

振り向いた

そう、彼女は一人で、『だるまさんが転んだ』の練習をしていた

デザイナーに依頼しよう!?

焼き鳥デスペラードでの会談の翌日の正午近く

現在しんのすけは、マサオと共に、ネネのお供をしていた。理由は弱みを握られ仕方無く

そして、行き先は最近出来た仕立て屋で、理由はおままごことに使う一部の服が破損した為、それを直して貰おうという物だった。因みに本日、幼稚園は休園

「オラ明後日にあるななこおねいさんと旅行があつてそれを準備しないとイケないのに……」

「うるさいわね、すぐ終わるわよ!」

「でさネネちゃん、僕達何処に向かつてるの?」

「最近本職の服飾デザイナーが開いたっていう店よ」

「でもさ、ここら辺に店なんかあるの?」

マサオの言っている事はもつともだ。ここいらは住宅地ばかりで、店を開けば余程規模が小さくないと目立つ筈だ。今から行く店は、いい仕事をしてくれると評判らしいので、一度くらいは耳に入ってもおかしくないのにしんのすけ達は聞いた事が無かった

然も彼等の目指しているのは少し古めのアパートだ。そんな場所に事業所を出すのだろうか

「着いたわ」

アパートの三階の305号室。その扉の前に、

『浅海デザイン事務所、服の依頼なら製作からボタン付けまで幅広く対応します。値段は五百円から』

と、手書きで書かれた藁半紙がガムテープで貼られてあつた

ネネはインターホンを鳴らす。一分した後、ドタドタと中から玄関に向かう音が聞こえた

「こんにちは……待たせて済みません……」

少し着崩れしたパジャマにボサボサの茶髪、目を擦り欠伸をしている多く見て二十代前半の女性が出て来た

「んー……」

「どつしたのしんちゃん？」

「いや、あの人結構美人だなあって……」

「ありがとう……それで何の用？」

「い……いえ、衣装が少し破けてしまったから……それを治して貰おうかと……」

「ああそう……そうだ、着替えて準備したいし細かい話が聞きたいから中に入って待ってて、何もなければおもてなしをする程度は出来るから」

しんのすけ達はリビングのソファで用意された番茶とかりんとうを食べ、テレビを見ながら待っていた

「どうしたのマサオ君ネネちゃん。おちゃちゃ飲まないの？」

「しんちゃんは何で飲めるのよ？これ渋過ぎて飲めないわよ」

「美味しいのに……」

「あはははは……これは嬉しいな。私の淹れるお茶は十人の内九人が飲めないっていうからね。こんな小さな子が理解してくれて嬉しいよ」

赤色の煉瓦模様のワイシャツに、ベルトが足を通す所に沢山してあるジーパンを着て、頭に水色のカチューシャを付けた姿で現れ、しんのすけ達が座るソファアの前に木製の椅子を出してそこに座った。隣にソファアをどかして

「何でソファアに座らないの？」

「これは私の睡眠用で君達が座っているのがお客様用……ここが自宅でもあるしね。自己紹介しないとね、私はこの浅海デザイン事務所の所長、浅海観月あのみみつきって言います。歳は22」

「オラ、野原しんのすけ五歳。好きな食べ物……」

「言わんでいい。私は桜田ネネです」

「僕、佐藤マサオって言います」

「ありがとう。何か私に対して質問ある？あるのなら何でも聞いて、個人情報以外なら答えるから」

「何で質問を求めるの？」

「信用の為かな？私まだ駆け出しで無名だし」

「じゃあ、デザイナーを目指したのはどうしてですか？」

「高校を卒業した後は少しの間会社員をやっていたんだけどね、テレビのショーを見て思い切って目指してみようって思ったんだ。美術や裁縫は好きだしね。今はその仕事はあまり来ないからボタン

付けとか裾を直したりとか簡単な仕立てのアルバイトが主な収入源
なんだけどね。まあ贅沢は出来ないけど生活は出来て貯金も少し出
来る程度の余裕はある」

「恋人いる？」

「いないない。こんな不安定な収入しか持たず仕事にしか興味を
持たない女相手する物好きなんかいないって」

「あの……この部屋の隅にあるカメラとかは何ですか？」

ネネは窓際近くの隅っこに置いてある三脚や望遠レンズ、ビデオカ
メラ等、服飾デザイナーの仕事とは無縁そうな撮影器具の数々に指
を差した

「ああこれ？デザインの勉強をするなら資料は沢山あった方がいい
でしょ？学校や職場の制服とかは資料が手に入るけどオーダーメイ
ドの服とかは資料が中々手に入らないじゃん。だから何時見掛けな
い服に遭遇してもいいように腕時計型のスパイカメラは常備してい
る」

そんなもん何処で手に入れたんだ？と三人が同時に思った

「このカメラの類は高い所から盗撮したりイベント会場で当日人数
が多くて入れないのを想定してよく会場が覗ける位置に仕掛ける為
に……」

「警察呼んでいい?」

「でも更衣室とかそう言った所に仕掛けたり撮影したり画像を脅迫のネタにしたりとかそういう事は一度たりとてしてないよ。私がやるのはあくまで私のデザインの勉強の為であってそれを越えたりするような真似はしないって決めてあるからね」

「何でそんな事をするんですか?」

「理由は簡単。デザイナーとかに必要なのは『想像力』。その想像力は私自身が現実に見て、聞いて、体験して、感じる事により発達、成長するんだ!そして私はその為に仕事に対して強い好奇心を持つようにしている!参考になるのなら『カレーの染み』や『被った泥』でも使えると思ったらまず資料にする」

「ほうほう」

「そつだ、こんな話より本題に入らないとね。頼みたい事って何?」

「よし、分かった。先約で四、五件あるから、それを片付けてから取り掛かるから明日の正午には出来ると思う。名前と電話番号これに書いて」

新聞の折込チラシをA4サイズに切って綴った、手書きの名簿を渡す。何故チラシで手書きかというと、パソコンは苦手で、出来る限り節約したいからだという

「マサオ君とネネちゃんはどうやら私の淹れた番茶はお気に召さなかったみたいだね。番茶が嫌いな人の為に準備しておいたダージリン産の紅茶あるからそれ持ってくるよ。後そろそろ昼だし、私の話で時間を取らせてしまったからね。お詫びと言っちゃ何だけど君達の分の出前も取るよ。醤油ラーメンの美味しい店があるんだ」

「よっ先生太股！」

「それを言うなら太っ腹……」

「いえ、悪いですよ」

「遠慮ばかりするのは悪い癖だよ。大丈夫、先月は仕事が多かったから余裕があるんだ。まあ食べ終わったらまた少し時間を取らせて貰うけどそれでいい？」

「それなら……」

出前を取る為にリビングから出て行った

「ネネちゃん何を考えてるの？」

「いや……デザイナーを役として組み込んだリアルおままごとの話を……」

しんのすけとマサオはそれを聞いて、参加されてたまるかと思った

デザイナーに依頼しよう!? (後書き)

前書きは、『一方その頃あの人は何をしているの?』という題材で小ネタを書いてみました

好評なら何度かやってみたいと思います

次回もお楽しみに

デザイナーに依頼しよう!? (前書き)

浅海の厚意でラーメンをご馳走となつたしんのすけ達

だがその代わりに？

デザイナーに依頼しよう!?

「ふー……美味しかった美味しかった……」

「ホント、あんなに美味しい醤油ラーメン食べた事無いわ」

「ありがとうございます先生。こんなに美味しい物をご馳走してくれて」

「いやいや、こちらこそお気に入りの店のお気に入りの品を気に入って貰えて嬉しい限りだよ……それじゃあ帰る前に『私の頼み』を……」

ノートパソコンのを一回り程小さくした画面の立てかけたディスプレイに、その下の四角の台座から伸びる八本の細い蜘蛛のような脚が浅海の左肘から手首までをがっしりと掴んでいる。そんな機械がその様な形で出現した

浅海はその画面をタッチして操作を行う

すると、三人の体が金縛りにあつたかのように動けなくなった

「な……何が……」

「君達に今起こっている現象は私の仕業。私には普通の人にはない『能力』を持つてるの、その力。けど安心して、命に別状は無いしどうこうするつもりも無いから……ただ少し『知りたいだけ』……」

…」

「知りたい？何を……」

「いや、さっき言ったけど想像力に大切なのは好奇心だね。君達がどういった物が好きでどのような事に興味あつてつていうのを知りたくてね……安心して、私の能力ではそれを詳しく知る事は出来ないから……!」

浅海は、自分の左腕に付いている機械を凝視している視線に気付いた。そして、しんのすけとマサオがその視線を向けているのを気付く

「あ……貴方達……私の『ジャンキー・チェイス』が見えてるの？はつきりと……?」

「何が見えてるの?」

浅海の言っている事が分からないネネは、不思議そうに浅海達を見ている。しんのすけは、浅海がスタンドを発現しているのとマサオがそのスタンドを見ている事に驚いていた

「マサオ君……見えてるの？あのパソコンみたいな機械……」

「うん……でも何で見えるのが不思議なの?」

「どうやらしんのすけ君のが詳しいみたいね……ちょっと調べさせ

て貰っわ……」

手際良くパネルをタッチして操作する

「へえ……私は『スタンド使い』って奴でこの春日部には私と同じ能力を持った奴が結構いるんだ……君の能力は……『ハリケーン』か……格好いい名前だね」

『誉めてくれてありがとう』

しんのすけの隣に、『ハリケーン』が姿を現す。マサオは突然現れた猪と人を掛け合わせたような怪人に驚く

『小僧、初対面の人間に対してそんな化物を見るような目で見るな』

「いや、お前人間じゃないしどう見ても化物と思っても無理のない外見してるし」

冷やかに突っ込むしんのすけ。浅海も同意で、コクコクと頷いていた

「所でハリケーン、あいつをやっつけて欲しいんだけど」

『承知した』

「やってみなよ……それが君達に出来るものならね……」

小馬鹿にした態度で、自信たっぷりな感じでそう言った。『ハリケーン』の拳が、振るわれた

その拳は、確かに浅海の顔に的中した

「いったいなあ……まあ……二年前に親不知を抜いた時のが、よっぽど痛かったけどね……」

だが、平然としていた

「何やってるのハリケーン！何でお前の拳が当たったのにこいつは平然としてるんだ！まさか手を抜いたんじゃない……」

『いや、してない！』

「よし、なら群生型だ！」

命令するしんのすけ。『ハリケーン』はその姿を全く変える事をしなかった

「ちよつと！命令を聞いてたのハリケーン！何でその形態を

『出来ない……』

「うん出来ないよね……さつき君の『ハリケーン』は確かに私を本気でぶん殴った……能力を使おうとした……何かしたのは私だよ……特別サービスで私は何が出来るのかを少しだけ教えてあげる」

『ジャンキー・チェイス』を操作して、しんのすけ達に見せる。その画面には――

私は、女好きである

はい　　いいえ

私は、ピーマンが好きである

はい　　いいえ

私は、三輪車でバイクと並んで走る事が出来る

はい　　いいえ

私は、納豆にはネギを入れるタイプだ

はい　　いいえ

こう書かれてあった

「何かのきっかけでいきなりムキになったり変な想像をしたりするのを『スイッチが入る』とか言うよね？それなんだよ、私の能力は……対象の精神をハッキングし、好みや興味のある物、趣味、特技等をアンケート形式で見ることが出来る、それをタッチするだけで私の思うように変更する。それが『ジャンキー・チエイズ』……その気になれば私は犬を英語に興味を持たせたり鶏にフライドチキン屋へお使いに行かせる事も可能なのだよ……君のスタンド、『ハリケーン』に殴られて私がピンピンしているのはパラメーターに手を加えて破壊力を弱くしたから、能力が使えないのは私が能力を使えなくさせたからだよ……」

しんのすけは戦慄した

趣味、特技、好み、端的に言ってしまう『考え方』、それらは、要約すれば『個性』である。つまり浅海はその『個性』を思うがままに好きなように出来るという事だ

「まあ普段は弄る事はしないけどね。ただ見るだけ。嘘は付けないからただ質問するより確実なデータを得られるんだ。しんのすけ君の好みは分かったし、今度はマサオ君ね」

マサオに歩を進める浅海。マサオは完全に怯えていた

「ちょっと待って！何時こんな能力を手に入れたの？他にこんな事が出来る人知ってるの？」

「去年の大晦日に大掃除中に誰かから『矢』に射抜かれて……後者の方は君が初めて……いや待てよ」

「心当たりあるの？」

「いや、二つ歳が上の従兄がいてね。その人少年ジャンプで漫画連載してるんだけどさ、その人の家に半年くらい前に遊びに言ったんだけど、その一ヶ月後の雑誌に掲載されてる漫画の内容に私しか知らない筈の体験が描いてあって……今度問い詰めよう……質問は終わり？」

「うん、終わり」

「それじゃマサオ君の好みを見せて貰うね。安心して、それ以外は見ないし絶対に口外しないから」

改めてマサオに向けて歩き出す浅海

『ガールル……ぐるるる……』

獣の鳴き声が聞こえた。犬や猫といった、可愛らしい物ではない

『グルルル……』

「な……何なのこの鳴き声……まだ何かあるの？」

「何……これ……」

「まさか……」

しんのすけと浅海は、声のした来客用のソファ―に目を向ける

そこには、額にネジのついた熊の頭部を持つ、如何にも屈強そうな身体をした大男だった

デザイナーに依頼しよう!? (後書き)

浅海さんはスタンド使いました。スタンド名はカーティス・メイフ
イールドの楽曲から

彼女の従兄は……まあ分かりますよね

次回もお楽しみに!

デザイナーに依頼しよう!? (前書き)

突如現れた熊のようなスタンド

それは敵か、味方なのか?

デザイナーに依頼しよう!?

『グルアア!』

熊のような大男はテーブルに向けて拳を振り下ろし、そのテーブルを粉碎した

『グルオオオオ!』

スタンド使いであれば聞こえる部屋全体に響くつんざくような雄叫びを、そのスタンドはその口から発した

しんのすけと浅海は本体を探している。木製の机を殴って破壊したという事は、本体が近くにいる近距離型だ

どれだけ離れていたとしてもこの部屋から位置が分かる距離までにいる筈だ

「1」……今度は何なの?」

完全に混乱しているマサオを見て、浅海は半分同情していた。当然だ。訳の分からない事態が、この部屋の中で次々と起こっているのだ。しかも原因が『見えている』だけに感じる恐怖や不安もかなりの物なのだろう

「あれ……?」

浅海は、先程自分が思った事に引っ掛かった。今確かに自分は『見えている』と言った。それは自分のスタンド『ジャンキー・チエイズ』の能力ではなく、己の目で分かった事だ

例外はあれど、スタンドが見えるのは同じ『スタンド使い』だけではないのか?

もう一度熊のようなスタンドを見てみると、先程より更に筋肉質となり、装飾も幾らか増えていた

「まあどんなスタンドでも私の正面にいて私をすぐ倒さなかった時点で私の『ジャンキー・チエイズ』に掛かれば無力!能力やパラメーターを解析してその両方を無力化させてやる!」

『ジャンキー・チエイズ』の画面をタッチし、解析と操作を始めようとするが、その前にスタンドが浅海を殴り飛ばした。攻撃のスピードがかなり早い為対応が出来ず、まともに食らった

『グロオオオオ!』

浅海に接近し、更に追撃を加えるスタンド。一方、しんのすけも突

然現れたこのスタンドが何なのか、大凡の見当がついていた

（あのスタンドの本体は間違い無くマサオ君だぞ……）

そして、恐らく本体のコントロールを受けていない、所謂「暴走状態」となっていると見ていいだろう。琢磨からの受け売りだが、本体がスタンド能力を能力の関係上制御出来なかつたり、能力に無自覚だつたりと本体がスタンド能力を制御出来る状態でない場合に陥る現象らしい

対処方法は、前者の場合はどうしようもないが、後者の場合は本体の素質にもよるが能力の使い方や本体が理解すれば意外と呆気なく解決するとか何とか。この事態は後者だろう

これを戦いとするのならば、もう勝負は着いている。流石にこれ以上は死んでしまう

「マサオ君……」

「な……何？しんちゃん……」

「あの人を殴っている熊みたいな大男、何か感じる所ある？」

「……まあ少しは」

「詳しくは後で説明するけどさ……あれ、マサオ君でもあるんだぞ」
「えっ？」

しんのすけの発言に驚くマサオ。まあ無理はない。あんな見るからに怪物が自分だと言われたら当然の反応だ

しんのすけはその反応を流して説明を続ける

「でねマサオ君、あれがマサオ君だとしたらマサオ君が動かせるの。動かすのに難しく考える必要は無いよ。手足を動かすのと同じ感覚で……」

「手足を動かすのと……同じ感覚……」

集中すると、スタンドは浅海を殴るを止め、ゆっくりとした動きでマサオに向かってきた

そのスタンドは空気の抜けていく風船のように縮んでいき、最終的に小熊程の大きさの、可愛らしい姿となった

「えっと……もう終わり？」

「うん」

『もう終わりだな、奴は完全に気絶してたとえ今日が覚めたと

してもスタンドを発現するだけのコンディションには回復しない』

浅海美月 - - スタンド名：ジャンキー・チエイス - - 再起可能。浅海デザイン事務所は二週間余り休業。当然受け持っていた仕事はドタキャンせざるを得なくなった

佐藤マサオ - - スタンド名：タイト・コネクション（命名：瀬上除夜） - - 後に除夜達から説明を受ける。トルやひまわりも同じ様な経緯から同じ様な能力を持っている事については大いに驚いた

桜田ネネ - - 今回の件は除夜と琢磨が上手く誤魔化した。服の修繕は洋服屋でやって貰う事にした

TO BE CONTINUED...

俺（瀬上除夜）の通う高校の職員室で、俺達のクラスの担任の黒髪にプラグのような髪留めを左右につけた、ヨレヨレの白衣にネクタイというだらしのない格好に室内なのに長靴を履いた二十代後半の女性、かやもこ ちゅうめい 栢下千晶先生。数学教師だ。因みに俺の中学時代からの担任で、保育士から大学教授までの免状を持っているらしい。この学校には俺達より一年早くに来た

何故俺がここにいるかというと、委員長の代理で日誌を届けに来た。因みに委員長であるあいつ 稲庭は風邪引いて休んでる

「はい、日誌を提出しに来ました先生」

「うん、ありがと瀬上……けどさ、稲庭はホント何してんの？結構しょっちゅう風邪ひいてるよね？」

「まああいつ体少し弱いみたいですしね、最近俺達の方で色々立て込んでからその疲労が今日ピークに達したみたいなんです」

食欲は減退しても並のフードファイター顔負けだけど

「ふーん……瀬上」

「何ですか？」

「若いんだからお盛んなのはいいけどまだ高校だったばかりなんだからちゃんと避けるようにしなさいよ？」

「一応聞いとく、何を？」

「男女の子供を作る為の営みで避けるべき物は決まってるじゃん」

「それ全然遠回しに言ってます。てか完璧に違います」

「え？違うの？だって君最近宝来や稲庭と一緒にいるから」

「違うに決まってるんだろ！てかそんな事昼休みの職員室で教師が堂々と言うな！問題になるだろうが！」

「分かった分かった……冗談が通じないんだからからかい甲斐が無

いなあ」

「あなたの冗談は生々しさもあって笑えねえんだよ……それより一つ聞きたい事があるんですが……」

「何だい？」

「ここ半年の間で不思議な事が出来るようになった生徒か教師、若しくは事務員とか……噂だけでいいのですで耳にした事はありませんか？望むなら出来る限り有力な事で」

デザイナーに依頼しよう!? (後書き)

マサオ君のスタンド名はボブ・ディランの楽曲から。取り敢えず無事勝利しました

今回は、除夜と学校に巣くうスタンド使いとの戦いになる予定です

では、次回もお楽しみに

打倒生徒会長！？（前書き）

スタンド使いの情報を集める除夜に、有力な情報が？

打倒生徒会長！？

放課後。全ての授業を終え、特に用もない生徒は明日から始まるゴ
ールデンウィークを楽しみにしながら帰宅していく

俺もそうしたいが、俺はある用で今生徒会室の扉の前にいた。理由
は三年のこの学校の現生徒会長である多嶋新治たしましんじに会いにだ

「確か今日は他の役員は所用でいないんだっただな……そっちのが都合いいけど」

昼休みの職員室

「この学校の会長が？」

「そう、私の知る限りでこの学校で君がいう不思議な能力を使う事が出来るかも知れない人物」

この学校の会長はこの学校の在校生なら誰でも名前と顔は知っている。その理由は『顔を出す機会が多いからだ』

入学式の挨拶等、本来校長先生が行う事を現生徒会長が代わりにやっているのだ。因みにこの学校の校長は先生や先輩達の話によると十二月中旬辺りから学校に来ていないという。その理由を訊ねても、まともな答えが返ってきた事は今まで無い

とはいえその話を聞くまでこの学校に校長が何等かの形でいなくなって新しい人は来たがらないからいなのかと思っていたので、校長がいる事に関して驚いた

そして校長がいなくなった時期が優太が『弓と矢』でスタンド使いを作っていた時期でもあった事が引つ掛かった

「で、多嶋会長の事をそう思うからには根拠があるんでしょう？なるだけ詳しく教えてくれませんか？」

「私も直接見た訳じゃないからよく分からないけどさ……今年の一月に多嶋はある有名な不良高校のグループに目を付けられて登校中に待ち伏せされたの……襲われたんだけど振り返りにしたんだけど……その様子を見ていた人達の証言がおかしくて……」

「それはどんな証言ですか？」

「いや、姿がいきなり消えたり瞬間移動したりとか……何か訳の分からない事が次々と起きて何時の間にかみんな伸していたんだって……当然問題にはなっただけど結局うやむやになってお咎めは無し……えっと……」

「有力な情報ありがとうございます先生。それじゃ失礼しました」

そして放課後、職員室

「元気ですね……先生の受け持ちの生徒は」

「まあね……無理しているのバレバレだから滑稽ですね……それにしても……何で知ってるんだ？半年前からウチの生徒の中に不思議な事が出来るようになった奴が沢山出てきている事……」

俺は生徒会室の扉をノックする。中から男の人の声があった

『はい、どちら様ですか？』

「一年の瀬上除夜です。会長に用があつて来ました。入っても宜しいでしょうか？」

『どうぞ』

「失礼します」

生徒会室に入った。中には一人の首に黒い縞模様のタオルを巻き、耳にゼムクリップを挟んだ会長の腕章を両手首と両肘に計四個付けている男子生徒がいた

「今日は、多嶋会長」

「やあ瀬上君」

「……？俺の事御存知なんですか？」

「まあね、行く先々で様々な事件に巻き込まれているのでね」

「人をシリーズ物の推理小説の主人公みたいに言わんで下さい」

生徒会に所属しておらず、今年から入った新入生の為この学校の生徒会室には初めて入るが、中学時代ちよくちよく出入りしていた中学の生徒会室とそこまで変わり映えは無かった

ただ少し変わっているとしたら、黒板の下に敷かれてある布団や、窓側の隅に置かれてある綺麗に畳まれた衣類や空いている棚に置かれた教科書や参考書類等、何処か生活臭を感じられる物が置かれてある所だった。付けられている流し場には、オーブンやカセットガ

スコンロ、『私用』と貼り紙の貼られた小さな冷蔵庫もあった

俺がそれを見ているのを察したのか、素っ気なく会長は答える

「ああこれ？全部俺の私物。何故あるか？俺がここに住んでるから」

「住んでるの？」

この事実には俺は驚いた

話によると会長は地方出身で、家があまり裕福ではない為当時誰もやりたがらなかつた生徒会長の役職を誰か立候補者が出るまで就くのを条件に生徒会室に住んでいるという

てか、御厨先輩も長野出身だしクラスメートにも関東の外から来てる人多いけど、この学校って家から出て一人暮らしをする程魅力あるのか？精々良い意味でも悪い意味でも多種多様な部活がある程度だぞ？

「まあせっかく来てくれたんだしコーヒーか紅茶でも飲む？」

「いえ、コーヒーも紅茶も飲めるんですが苦手です……だからもしあれば緑茶かジュース貰えませんか？無ければレモンティーで」

「はい承知」

冷蔵庫からレモンティーの缶を出して投げ渡された。会長は温かいレモンティーをメスシリンダーに淹れてストローで飲んだ

「……何でメスシリンダーで飲んでるんですか？」

「いや、愛用のビーカーが落つこととして割れちゃって……」

ビーカーもメスシリンダーも飲み物飲む為の道具じゃないんですが

「話は戻しますが多嶋会長……貴方は『不思議な能力』を持っていると噂に聞きましたが……それは真実ですか？」

俺がこの質問をすると、会長は冷めた目で俺を見た。まあ当然といえば当然だ。高校生が高校生に『貴方は超能力者ですか？』と訊ねたのだ。何のおかしくない反応だ

だが俺は何とも思っていない。この反応は当然予想の範囲内だ。笑われるのだって承知の上だったのだから、この程度で済んだのは良かったと思う

「そんな噂誰から聞いたの？そして何でそんな事を聞くの？」

「後者の方は無関係なら教える事はしたくないんです。前者の方は先生から少し……」

「ふーん……」

メスシリンダーの中のレモンティーを飲み干すと、口元を歪ませた

「ごめん……僕少しだけ嘘を付いた……」

「へ？」

「君とちゃんと対面するのは初めてだけど君の事は君がこの学校に入学する前から知ってたんだ……」

「自慢じゃないけど俺この学校入る前は普通の学生生活を送っていて対して目立つような事してないんですけど」

「……まあピンと来ないよね……そりゃそうだ……こうしてくれたら、ピンと来るよね？」

突然会長の姿が消えた。会長の座っていた椅子が動き、そして

「！」

右側から、強い力で押された感覚がして、俺は椅子から転倒した。右側には、会長が俺を見下ろす姿勢で現れていた

「なあ……ピンと来ただろ？」

「ああピンと来たよ……やはりあんたはスタンド使いだったか！」

『プラネット・ルビー』を出し、殴りつける

腕を伸ばしきる頃には、その拳が当たらないくらい後ろに移動していた。『足は一切動かさずに』だ

「殺したりしてももう金は得られないし後輩を病院送りにするのもあれだから命を奪ったり再起不能にしたりはしないけど……ちよつと痛い思いをして貰うよ……フフフフフフフ」

打倒生徒会長！？（後書き）

前半の除夜達の会話はちょっとした伏線の予定です

学校に住んでる生徒会長、多嶋新治。けど流石に年中いる訳ではなく、盆休みと正月休みには帰省します。基本学校にパラサイトして
ますが

次回もお楽しみに

打倒生徒会長！？（前書き）

中々話が頭に浮かばなくて……

予定より早く決着がつきました

打倒生徒会長!?

(こいつの能力……一体何だ？俺と同じ瞬間移動？だがそれなら何で……)

「訳が分からないみたいだね……まあ一切のヒントは教えないけど……去年の十一月下旬俺は沢登優太に出会い『スタンド能力』を手に入れた……その日が来たらお金貰えるから協力する事にしたんだが最近殺されたみたいだな……」

「よく御存知ですね会長……この学校では優太の死因は事故死という事になっているのに……」

「風の噂で聞いた……それよりまだ終わってないぜ……俺のスタンド『ノー・リモース』の『見えざる攻撃』はな……」

多嶋は俺の前から姿を消した。いる。足音は確かに聞こえるし、確実にそこにいる

ただ『見えなくなっただけ』で、絶対にいる

「そう、俺はいる……ただそれが確認出来ないだけ……」

俺の腹に、鋭いボディーブローが入った。多嶋の姿は今は目で見える

多嶋は俺に石を握った拳を振り下ろした。人間のスピードなら俺の

スタンド能力の敵じゃない。奴を『軸』としてギリギリで避ける程度の瞬間移動をして即座に反撃してやる

俺のこのプランは、見事に打ち破られた。拳をまともに食らったからだ

(『能力』が……発動しなかった?)

「何やってるの瀬上君？常人の生身での攻撃をまともに食らっちゃつてさ……」

余裕そうに言う多嶋。さっきのは俺の油断だ。能力を使わなくともあの攻撃はスタンドで防げた。だがそれをしようとする思わなかった能力が成長して少し思い上がっていたみたいだ

まずこいつの能力を整理しないと……まず、離れて攻撃していないから遠隔操作で無いのは確かだ。そして攻撃に普通の石を使っていた事から、パワー型のスタンドでもない。そもそも奴は一度もスタンドの像を出していない

十中八九、本体と一体化していて、能力に破壊力の無いスタンド能力だ

そしてどんな能力なのか、奴が今までやった事は『姿を消す』『無動作で攻撃が当たらない距離まで下がる』『能力の対象にならない』

一見バラバラだが共通点がある筈だ。スタンド能力は『一人一能力』

が原則だ

「余所見は厳禁だよ」

多嶋は前に現れ、俺の襟首を掴んで俺の顔目掛けて拳を振るった

俺はスタンドを出して反撃しようとラッシュを繰り出す。しかし、奴は攻撃が届かない位置まで何の動作もせずに（襟首を握った手は離れたものの）後ろに下がった。そのまま姿を消す

俺はスタンドを奴に近付ける。奴は姿は見えなくなるだけで存在はしている。足音を拾って追い込む事は出来る

俺の『プラネット・ルビー』の射程は八メートル。この部屋一つなら本体の俺が何処にいようが隅々まで動かす事が出来る

俺は奴を壁際まで追い込んだ。姿が見えると同時にラッシュを繰り出した

「危ない危ない……」

多嶋にラッシュは命中せず、横に移動していた。拳は全て壁に当たる

再びその姿を消し、俺に迫ってきている。頭部を掴まれ、床に叩き付けられた

俺の企みに気付いたのか、奴の表情には焦りが見え隠れしている。
だが逃がしはしない。逃がす隙は与えない

そして

「ゴラぁー！」

「ぶぎいー！」

『プラネット・ルビー』の拳は、見事奴に命中した

「これで少しの間は『攻撃が入らない事は無い』……決めさせて貰
うぜ、安心しろ。殺しも再起不能にもしないからよ」

「あ……あ……」

「ゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴ
ラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴ
ラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴ
ラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴ
ラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴ
ラ」

拳のラツシュ（一応手加減した）を喰らう多嶋は、窓の傍の壁にぶ
つかって床に倒れた。意識は飛んでいるが、生きてはいる

「あなたの能力は『入らなくする能力』……『視界』にも、『攻撃の射程や軌道』にも、『能力の効果』にも、『入らない』事が出来る……但しそれには制限時間があり、そして連続で同じ物を『入らなくする事』は出来ない……」

多嶋新治（スタンド名：ノー・リモース） - 再起可能

「あー今日はまた一段と疲れたよ……」

「お疲れ除夜君」

着替えてござの上に寝そべる俺に、義母さんが冷えた麦茶を持ってきてくれた。俺はそれを取ると一気に飲みほした

「いい飲みっぷりですね旦那、もう一杯どですか？」

「いや、いい。ここ最近俺の望む平穩無事とは懸け離れている事がはっきりなしに……」

「はいはい、明日からゴールデンウィークだから今日はゆっくり寝なさい。今日の疲れを残したまんまじゃ上手く遊べないでしょ？」

「そうですね……」

「後……君が今どんな事態に関わっているのかとか……それは聞かない。でもね、君には君の事を心配してくれている人がいる事を忘れないでね……その人達の為にも、無茶はしないって約束して」

「承知致しました……それじゃ俺シャワー浴びて寝るから……」

「お休み」

俺は疲労で重くなった足を動かし、浴室へ向かった

「やっぱり……『宿命』からは逃れられないのか……」

T o B e C o n t i n u e d ……

打倒生徒会長！？（後書き）

多嶋戦決着！だけど予想より短かったです

スタンド名はメタリカの楽曲から

次の話は……しんちゃんの旅行なんだけど……

次もお楽しみに

スタンド紹介？（前書き）

今回は前回の紹介以降から出て来たスタンドの紹介のみを行います

スタンド紹介？

スタンド名 - クロスタウン・トラフィック

本体 - 沢登優太

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - B

持続力 - A 精密動作性 - C 成長性 - B

能力 - スタンドの像が取り憑いた無生物を怪物化させる

？怪物化した物の破壊力は取り憑いた物の質量に比例する。取り憑

いた物の機能は、そのまま怪物の能力になる

？複数の物を複数体に取り憑かせる事でより強力な怪物を生み出す

事が出来る

？物に取り憑かせる事が出来れば、本来の射程距離に関係無く何処

までも動かせる

？スタンドの像や怪物化した物がどれだけ破壊されても、本体への

ダメージは一切無い

スタンド名 - マーズ・ヴォルタ

本体 - 敦賀鯨背

破壊力 - A スピード - C 射程距離 - D

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - C

能力 - 物に『スタンド機雷』を取り付ける。取り付けた機雷は、直

接、または取り付けた物体からの衝撃を感知して爆発する。この機

雷は幾らでも取り付ける事が可能である

スタンド名 - カスタム・マシーン

本体 - 風間トオル

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - E

持続力 - B 精密動作性 - C 成長性 - C
能力 - 殴った物の機能を停止させる
? 黄色い×印は、同一の物なら幾らでも対象に出来るが、一つの機能しか停止出来ない
? 赤い×印は、全機能を完全に止める事が出来るが、一つにしか対象に出来ない

スタンド名 - フレディーズ・デッド

本体 - 庚木花

破壊力 - D スピード - A 射程距離 - C

持続力 - C 精密動作性 - A 成長性 - C

能力 - スタンドのアームで生物、無生物問わず縫いぐるみに変える。その際の大きさは等身大から二頭身まで自在に出来るが、大きさを変える場合一度解除する必要がある。縫いぐるみとなった生物は問題無く生きている

スタンド名 - スーパーランプ

本体 - 本荘信朗

破壊力 - B スピード - A 射程距離 - E

持続力 - C 精密動作性 - E 成長性 - B

能力 - 斥力を発生させる。応用して物を飛ばしたり、攻撃を弾いたり出来る

スタンド名 - プレシヤス・エンジェル

本体 - 野原ひまわり

破壊力 - A スピード - A 射程距離 - E

持続力 - A 精密動作性 - D 成長性 - D
能力 - 殴った物をダイヤモンドに変える。殴った部分のみをダイヤモンドに変える事も、殴った物をダイヤモンドに変える事も出来る

スタンド名 - フィッシュボーイ

本体 - 白帯咲良

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - B

持続力 - A 精密動作性 - D 成長性 - A

能力 - スタンドの翼で、受け止めた物をそのままはね返す

? 白い翼は物理的な攻撃をはね返す

? 黒い翼にも何等かの能力があるらしいが現在未確認

スタンド名 - ジャンキー・チェイス

本体 - 浅海観月

破壊力 - D スピード - なし 射程距離 - D

持続力 - A 精密動作性 - B 成長性 - C

能力 - 対象とした生物の場合趣味や特技等を簡単なアンケート形式で映し出す

? 画面はタッチパネルとなっており、それを操作して好み等を変更したり出来る

? スタンドのパラメーターや能力の操作も可能

? 生物の他に、電子端末やそれが組み込まれた物もその機能进行操作出来る

スタンド名 - タイト・コネクション

本体 - 佐藤マサオ

破壊力 - D スピード - E 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - A
能力 - 本体の恐怖心が大きければその分このスタンドの破壊力とスピードが増す。本体がスタンドを制御出来ない精神状態だったり気を失っていたとしても、その恐怖の元凶が無事な場合、それを絶ちに何処までも追う。この状態となった場合スタンドがどれ程攻撃を受けようと本体へのフィードバックは一切無い

スタンド名 - ノー・リモース

本体 - 多嶋新治

破壊力 - E スピード - C 射程距離 - なし

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - C

能力 - 特定した事象から自身が『入らないようにする』事が出来る。制限時間があり、現在は二十秒が限界である。複数の事象を特定する事は可能だが、その場合の制限時間は事象の数 / 制限時間となる。また、同じ事象を連続で選択する事は出来ない

スタンド紹介？（後書き）

終わっただです……

次からは本編に入ります。新しいスタンド使いとの戦闘もありますので御期待していただけに嬉しい限りです

それでは

春日部の笛吹き男？（前書き）

しんのすけ、遂にななこお姉さんと旅行！

しかし簡単に出発を許してはくれず……

春日部の笛吹き男？

ゴールデンウィーク二日目の朝の野原家

その長男、野原しんのすけは今、ウキウキしていた

その理由は、初日で色々起きて学園祭が駄目になったのでその学園祭のあった大学に通うしんのすけの憧れの人、大原ななこが、今日から二泊三日の旅行に誘い、了承したからだ

好きな人と一緒に旅行という事で、しんのすけは非常に舞い上がっており、昨日は進んで洗濯物を取り込んだり、皿を洗ったりと、普段の彼を知る者からしたら奇行としか言えない事をしていた

「しんのすけ、ちゃんと荷物持ったか？」

「勿論！」

「いい事？一人で勝手に行動したりとか、迷惑になるような事は絶対にしちゃ駄目よ！」

「心配性だな母ちゃんは……」

「後事故とかに気を付けなさい。たとえ綺麗なお姉さんだろうとも知らない人に付いてつちゃ駄目よ」

「それじゃ行ってこい。お土産はいらなから、好きなだけ遊んで来いよ」

「ほい！この旅行でななこおねいさんとの仲を進展出来るだけしてきます！」

そう敬礼して出て行った一人息子の後ろ姿を見て、ひろしとみさえは、ハメを外さないか心配になった

待ち合わせ場所

「よっしんのすけ」

「時間までまだ早いのに随分早いですね」

「もしかしてあたしみたいに昨日ワクワクして一睡も出来なかったとか？」

「そんな遠足前の小学生みたいな理由はあんた一人よ」

「ハハハハハ」

そこには、除夜、琢磨、稻庭、宝来、咲良の五人もいた。彼等の姿を見た瞬間、しんのすけはブルーとなった

「えっと……どうしたのしんちゃん？」

「気にすんな咲良。こいつの事だからななこさんと二人だけだと思
っていたんだろ」

しんのすけは顔がブルーのままこくりと頷いた

「ま、まあ出来るだけ僕達は別行動に徹しますから、二人での旅行
を楽しんで下さいね」

「おお！」

琢磨の言葉に活気を取り戻し、力強くそれはいい顔で返事した

877

「あれ？所でななこおねいさんは？」

「まだ時間じゃ無いだろ。もう少ししたら来るよ」

「それまで人生ゲームでもやる？盤は無いけど」

「外で人生ゲーム？」

「盤が無いと出来ないだろ、何で一番肝心な道具が無いんだよ？」

咲良と俺は、思った事を口にした

結局、琢磨の提案で近場のハンバーガーショップに割り勘で少し摘む程度の食事をする事となった

「あー美味しかった」

「ねえ……何であたしの分だけ割り勘じゃなくてあたし個人の負担なの？」

「お前それギャグで言ってるのか？」

「あんたの分入れると割に合わないのよ」

俺達は多くて三品しか注文していないのに、稲庭はハンバーガー各種二十、フライドポテト四十、しかも他にも様々な物を大量に注文し、全部五分で食いきった

レジを打った店員の驚いていた顔が鮮明に思い浮かぶし、他の店員や少ないながらも来ていた客の視線が何か痛かった

マジでこいつの胃袋はどうなっているんだ？

「ねえ瀬上君、やっぱりあの量じゃかえってお腹空いちやうよ。向かいに牛丼屋さんがあるから食べに行こう」

「……お前はどれくらい飯を腹に詰めたら満腹になるんだ？」

「あたし常に何か食べてないとすぐお腹空いちゃうから」

新陳代謝が活発過ぎだろ。ネズミかモグラかお前は

「ダメだ」

「え？あたしのお金で食べるんだよ」

「誰の金でも食券でもダメだ。駅のキオスクで菓子を買ってそれを食べて……」

突然、背広を着たサラリーマン風の男が、俺にぶつかり、何も言わずにそのまま歩いていった

それだけなら多少不快感はするが、まあそれだけだ

俺が一番気になったのは、『その男を先頭として三十人余りの老若男女が軍隊のように規律正しく行進している』事だ。しかも全員目が何処か虚ろで、俺は『マッドキャット』で操られた人達を連想した

そして、最近新聞を賑わせている『春日部で起きている怪奇事件』の一つを思い出した

「……琢磨と咲良と宝来はスタンドを出して本体を捜してくれ。稲

庭は分裂させた上で、しんのすけは群生型で辺りを探ってくれ」

「えっと……何？」

「新聞とかニュースとかに興味は無くとも聞いた事はある筈だぞ……何の関わりも繋がりも持っていない人達が、突然集団自殺をする事件を」

「待ち合わせは？後二十分で時間だけど」

「今はそれ所じゃない。適当な事を言っつて駅に直に行くと伝えといてくれ！」

「うん！」

「俺達も本体を捜すぞ！多分遠隔操作とか、そういった類の奴じゃない！本体は必ず近くに居る筈だ！」

「捜す必要は無いよ……だって、直接来たんだから……」

声の聞こえた方向に振り向くと、前髪が赤毛で後は白髪の、ソプラノリコーダーやフルート、尺八等の様々な笛型のアクセサリを付けた水色のワイシャツを着た、咲良と同年代かそれより年下っぽい少年がいた。その少年の顔色は何処か悪かった

「貴方が『瀬上除夜』ですか……こんな所で会うとは……もしかしたら何等かの巡り合わせなのかも知れない……」

「君が本体か？一体何が目的なんだ？」

その少年の胸倉を掴み上げ、威圧的な声でそう言った。正直気は引けるがこういうのは舐められたら負けだ

少年は俺に屈した様子は無く、寧ろ俺を救いのヒーローか何かを見るような目で俺を真っ直ぐに見ていた

「あんななら……あんだ達なら……僕のスタンドをどうにか出来るかも知れない……」

「落ち着け、お前は俺達の事をあいつから聞いて知っているのかも知れないが、俺達はお前の事や今何が起こっているのか何も知らないし何も分からない」

「それもそうだね……何か分からないと対策の取りようが無いもんね……僕が話す事は多分あんだ達の期待に添える事は出来ない。けど全部事実だ。それを頭に入れた上で聞いてほしい」

春日部の笛吹き男？（後書き）

少年が語る真実とは？

今回は少年の能力が明らかになります

お楽しみにしてくれましたら嬉しいです！

春日部の笛吹き男？（前書き）

謎のスタンド使いの少年から告げられる、その脅威のスタンド能力とは？

春日部の笛吹き男？

「まず、僕の紹介が先だね……僕の名前は黒星繁寿くろほしげひさ十二歳……普通の中学生……ただ、普通と違うのは沢登優太さわのりって人に『矢』に射抜かれて『スタンド使い』になったって所だけ……多分貴方達の中にも何人かは彼にスタンドの才能を見出されて『矢』で射抜かれてスタンド使いになったんじゃないのかな？」

「知っている限り俺と後一人を除いて全員だ。で黒星君、君の能力を早急に教えてくれ」

「そうだね……その前にさ、あんた達の中に『ハーメルンの笛吹き男』って話……知ってる人いる？」

「知ってるよ。ネズミの被害の大きい街である男が報酬と引換にネズミ退治を引き受けた。男は笛を吹いてネズミをみんな溺れさせたんだけど街は男に報酬を出し渋り、怒ったその男は街の子供達を笛で洞窟まで連れてって内側から封印し、二度と現れなかつたってあれ？」

宝来がやや説明口調で物語の概要を解説した

俺も子供の頃義母さんから寝る前によく聞かされたからよく知ってる

「それなんだよ……僕の能力は……能力の射程距離内に僕以外に二人以上の人間がいて、その内の一人が本当に「死にたい」と心から思った時、その時射程距離内にいた全員がその者を先導として集団

自殺する……それが僕の『デープ・パープル』なんだ……」

「今すぐ止める！」

「出来ないんだ……僕の『デープ・パープル』は僕の意味とは無関係に条件を満たせば自動的に発動する……多分僕を今この場で殺したとしても『自殺』は止めるかやり遂げるかしない限りは決して止まらないだろうね……」

「多分彼の言っている事は全て本当でしょうね。そうでなかったら彼が僕達の前に姿を現す必要は無い訳だし、僕達に嘘を付く事にメリットは無いだろうし彼の説明には説得力もある……スタンドの暴走か……厄介ですね」

「うん……『矢』に射られたのは一ヶ月前だけど……僕の能力が僕の方では制御出来ない物と知ってあの人も僕を仲間にするのを諦めたみたいだから……」

面倒そうに言う琢磨。俺は黒星に、頭に浮かんだ疑問を聞いた

「さっきまでの言葉から推測するに当たって……少なくとも『自殺を止める方法』はあるって……解釈していいんだよね？」

俺の問い掛けに、黒星は黙って首を縦に振った

「はい……発動するきっかけとなった人間は、必ず集団の一番前に

いる。その人をどんな形でも集団から引き離すか動かなくすればスタンドの影響は消える……実際に偶然先頭の人が自転車に轢かれて負傷した時『ディーブ・パープル』の影響は消えていた……」

「だったら話は早いね」

「そうだな……あの集団の先頭の奴を動かなくすればいいもんな」

「あたしの『インフェミー』なら適任だよ」

「よし、早く済ませて駅に向かおう！」

「すぐに終わる」と思い、俺達は集団を追った

「一つ聞いて宜しいですか？対処方法が分かっているのなら何故僕達に助けを求めたんですか？多少問題になるでしょうけど……」

「それは後ですぐに分かると思う……『手段は知っている事』と『手段を実行出来る事』は違うという事をね」

俺達は集団の行き先を先回りした

宝来は自身のスタンド『インフェミー』を発現させ、先頭の人間の足元に向けて凝固液を吹きかける

先頭にいる人間は『まるで見えているかのように』横に移動した。凝固液は真後ろにいた女の足元に吹きかけられ、固まった。女はそれでも進もうとした為バランスを崩して転び、そのまま後ろから歩いてくる集団に踏まれた。幸い移動速度はゆっくりなので、怪我は大した事は無さそうだ

「どういう事？スタンドはスタンド使いにしか見えないんじゃないの？何である人見えているように避けられたの？」

「『デープ・パープル』は自殺を誘発するスタンド……そして自殺を完遂する為、失敗すればする程学習する……僕が貴方達に止めるよう頼んだのは、その性能にある……」

成程、自分の手に負えないから俺達に縋ったのか

俺は『暴走したスタンド』の脅威を、初めて実感した。『本体の意思を受け付けられない』という事が、これ程恐ろしいとは思わなかった

「少なくとも、能力を持っていない普通の人間が打てる手段は既に学習して通じないと取っていいんだな？」

「敵わない……いや、そうだ。打てる手段は思い付く限り何でもやってみた。僕単体では考え付くのも実行するのももう限界だ」

「それじゃ悪いが先頭の人には少し痛い目に遭って貰おうか」

俺は集団の前方に接近し、

「ゴラァ！」

拳を振るった。先頭の男はそれを軽々と避ける。手加減しているとはいえ、スピードには自信のある俺の『プラネット・ルビー』の攻撃を避け続けるとは大した物だ

だがそれでいい。元からこれで痛めつけようとは思っていない

右フックを避け、左ストレートを繰り出したその瞬間、俺はスタン
ド能力を使用し一瞬で後ろに回り、振り向く隙も与えずラッシュを
叩き込んだ

「これでいい？」

「敵いませんが……流石にやり過ぎじゃ無いんですか？この怪我じ
や素人了見でも暫く病院での生活を余儀無くされるって分かります
よ」

半分呆れながら黒星が言う。確かに、顔とかは狙わなかったとはい
え、あちこちが骨折している。職業が職業なら、再起不能と言い渡

されてもおかしくない

「そりゃここまでするつもりは無かったけどさ、動けないくらい痛めつけといたがいいだろ？加減を間違えたと言われたら否定はしないがよ」

「まあいいでしょう……これにて一件落着。後は救急車を呼べば僕達の役目は……黒星……繁寿君、確認の為に質問して宜しいですか？」

「何須藤さん」

「君の『デープ・パープル』は、スタンド自体が学習して成長するんでしたよね？」

「ああ、確かにそう言った。それが？」

琢磨は無言で集団に指を差した。それを見て、俺達は目を見開いた

先頭は叩いた筈なのに、別の人間が先頭となって集団で歩いていた

「そうか、発動のきつかけを作った人間が動けなくなったとしても離されたとしても……別の人間を代わりにすればいいんだって『デープ・パープル』は学習したんだ！」

「え？」

「嘘……」

「どつじにかならないんですか？」

どつじにこのスタンドはやはり、一筋縄ではいかないスタンドだった

春日部の笛吹き男？（後書き）

暴走状態のスタンドが今回の相手です

スタンド名はイギリスのハードロックバンドから

成長するスタンドに、除夜達はどうするのか

次回もお楽しみに！

春日部の笛吹き男？（前書き）

成長する暴走スタンド『ディープ・パープル』を止める手段はあるのか？

春日部の笛吹き男？

「もう駄目だ……唯一の手段だった『発動のスイッチを押した人間を動けなくするか集団から離す』という手段も通じなくなった……彼等はあのまま死に場所へ向かい、集団自殺をやり遂げてしまう……」

「諦めるな！まだ手段はある！」

「瀬上さん……」

「こうなったら警察をその「死に場所」に先回りさせよう。そして姿を見せたら一斉に捕らえるんだ……」

「随分人任せな方法だね」

「集団自殺は確実に起こる事だし何度も起きているんだからイタズラ電話と取られる可能性は低いだろう。間違い無く動いてくれる筈だ。さあ、教えてくれ」

「無理」

黒星は即答し、その後その理由を述べる

「理由は簡単だよ。自殺する場所はきつかけを作った人の『自殺したい場所』だったんだ」……」

その言葉で、俺達は先程の即答の意味を察した

黒星は体を震わせながら構わず続ける

「僕の『ディープ・パープル』はしつこいけれど自殺の完遂の為に「失敗」したらそれを「学習」して同じ過ちを犯さないよう「成長」するスタンド……向かっていく先にどんな物があるか分かったら先回りして未遂にするという事はとくにやった事だ……それから学んで、僕のスタンドは僕の姿を途中で見たり自分達を力づくで止めようとしたりする相手が自分達の進行方向にいた場合、方向を変えられるようになったんだ。それもジグザグに動いて行き先が分からないように、速いスピードで……」

俺は心の中で悪態をつく。琢磨が言った通りこいつに嘘を付く理由は無いから言った事は本当だろう

だが待て。万策尽きた訳ではまだ無い。まだ諦めるには早い。俺達で出来る手段が何かある筈だ

宝来は駄目だ。一度避けられている。咲良も無理だ。『フィッシュボーン』の能力ではどうする事も出来ない

「琢磨、『SHUFFLE』だ。全員を動けないくらい持っていき

「持っていく事は可能ですが自殺を止めるのは恐らく不可能です。前にも言いましたが僕の能力は生物やスタンドを長く持つていく事

が出来ないんです」

「……そうだったな……それなら稲庭、『イザベラ』を人数分分裂させて……」

「それで自殺衝動を拭き取れと？」

「そう」

「ごめん。『イザベラ』は深く刷り込まれた暗示とかには通用しないんだ。明らかにあれは暗示とかそんなレベルじゃないよ」

「おい『ハリケーン』！『ディープ・パープル』の能力を取り除くような型に変身しろ！」

『世の中自分にとって都合のいい事が簡単に起きるかこの馬鹿者が』

はい、正論です

したくはなかったが仕方ない。やるか

俺は集団の先方に突っ込み、拳を連続で突き出す。先程と違い本気だ

その本気の攻撃を、ギリギリで避ける。横から残りの全員が、俺に向かって飛びかかってきた。俺の動きを封じる気か

ラッシュを食らった集団は、一様に後ろへ吹っ飛んだ

「これで……終わるか？ いや……一筋縄じゃいかんからな……警戒して気を失っているかどうか確かめよう」

そう言っただけ俺は殴り飛ばした人達に近付くが、ある意味不要だった殴り飛ばされた人達は、一様に重力を無視したように立ち上がり、再度進んでいった

「瀬上君。まさか手加減間違えてし過ぎたとか？」

「それは無い。一人につき十発も入れてなく、急所はなるだけ避けたとはいえ殺す気でやった」

「それでまだ気を失わずに動けるだなんて……」

「いや、多分だけど……瀬上さんのさっきの攻撃でみんな気を失った筈なんだ……」

黒星が口を開いた

「多分『ディープ・パープル』は、「生き物は気を失ったら自力で動く事は出来ない」という事を学習したんだ……だから、「自分が

動かす事が出来なくなったのなら自分で動かしてしまえばいい』と結論付けたんだ」

「どゆ事？」

「つまり、電池で動く玩具の電池が切れて動かなくなってしまったから自分の手で動かす事にしたって事ですよ。分かり易く言つとね」

「わざわざ手で動かさなくても電池を換えればいいじゃん」

「……話の論点が違うけどそれをつ突っ込んだら話がややこしくなるだろうから敢えて何も言わない事にします」

琢磨、しんのすけの扱い慣れてきたな

だがどうする？これ以上攻撃したら殺してしまうかも知れない。だが下手に手を打てば学習させてしまうだけだ。どうすれば……

「あれ？何してるの君達？」

唐突に、宝来の物でも稲庭の物でもない、若い女の人の声がした

俺達は現在、下りの電車に乗っていた

あの後、外回りを兼ねた被写体の写真撮影の為に歩いていた浅海観月先生が偶然来て、しんのすけは彼女に今何が起きているのかを説明した

彼女は早速自身のスタンド『ジャンキー・チエイズ』を発現、作動させ、『ディープ・パープル』の影響下にある全ての人間の自殺衝動を『いいえ』にした。影響下にあった人達が目を覚ました時、その人達は既に正気を取り戻していた

あれだけ苦労したのに簡単に終わったので、疲れがどっと来た

疲れが少し取れた頃に急いで駅まで行くと、着いたのが俺達の乗る電車がホームに来るまで後二分前だった

そして現在、琢磨は持参した毛布を被って眠り、稲庭はキオスクから急いで購入した大量のお菓子を休みなく口に運び、宝来と咲良は窓から景色を眺めていた

俺はそこまで眠くないしお腹も空いてないし景色にもそこまで興味が無いので持ってきた英単語手帳を読む事にした

しんのすけはというと

「先生、本当に大丈夫なんですか？」

「安心したまえ。もうラストスパートだけだ」

「……………」

近々この世の終わりを告げられたかのように、ブルーになっていた理由は、ななさんだけでなく、忍さんやななこさんのお父さんと締切が近いらしくその担当の人まで一緒だからだ

「……………」

俺は何も声を掛けずに、ただ英単語手帳を捲っていた

瀬上除夜 - - ななこの父が自分の好きな『豪快シリーズ』の作者だと知り、昨日買ったばかりの最新刊にサインを貰った

黒星繁寿 - - スタンドの暴走が終わったので帰宅し、のんびり寝た
浅海観月 - - 協力してくれたせめてもの礼という事で、ポカリスエットとペロペロキャンデーを貰った

TO BE CONTINUED…

春日部の笛吹き男？（後書き）

物凄く呆気なく終わってしまいました。これで今回の『ディープ・パープル』の暴走は終わりました。報酬としては安いですがな

次回は旅先で除夜やしんのすけ達のはっちゃんける予定です！お楽しみ！

エンパイア・パーレスク？（前書き）

しんのすけ達が列車に乗っている頃

「『少年忍者吹雪丸』のよしいつすと先生と知り合いとはね……」

「はい、僕先生のファンなんです！」

「『吹雪丸』も大ファンだけど私は『ピンクダークの少年』が一番だな。あの名作を君はどう思う？」

「僕は絵が少し苦手だけどストーリーや登場人物は好きですよ。何か本当にありそうな事を本当にいそうな人達が……ていうのが！」

「それをあの絵で描くからいいんだよ！」

マサオは、遊びに来た御厨と共に座談をしていた

エンパイア・パレスク？

北海道、札幌市

駅に着いて別荘に荷物を下ろした俺達は、約束通りしんのすけと夜まで別行動を取る事となった

「お腹空いた……」

「……お前、マジでどれだけ食べば満腹になるんだよ……」

「ほへ？」

「お前の家お前の食い扶持だけで破産しちまうんじゃないの？」

「まさかー、人を大食いの食いしん坊みたいに」

「そう言ってるんだよ！」

「あの……それよりジャガイモを食べに行きましょう」

「え？ラーメンにしよう」

延々と話し合いが続き、このままでは埒があかないと判断した俺は、五人でジャンケンして最初に買った二人の希望を今日、残りの二人（俺は食べたい物が特に無かった為外れた）の希望を明日の昼に食べる事を提案、全員それを了承した

結果、今日は稲庭と琢磨の希望、明日は咲良と宝来の希望という事に決まった

そして……

「みんなどうしたの？食べないの？」

「いや……稲庭……何で、何で……」

「？」

「何で北海道までわざわざ来てミスドでドーナツを食べにやらないのだ！」

他の三人も頷いていた。稲庭は俺の言っている事が分からないのか、首を傾げている

因みに稲庭はドーナツを両手に持って必死に食べていた

「瀬上君達ドーナツ嫌いだったっけ？」

「そんな事一言も言ってねえんだよ！何で北海道来て春日部にもある店で春日部でも食える物を最初に食べないといけないんだよ！」

「食べたいから」

「すかつとした回答ありがとう」

俺達は稲庭が食べ終えるまでレジ前で待った

琢磨のリクエストも終え、俺達は次に土産品を扱っている店へ足を運んだ

理由は俺の希望で、義母さんや先生、本荘等の知人が色々希望があったので早めに済ましちまおうと思ったからだ。頼まれたのは小物類や菓子類ばかりなので、今買った所で何の問題も無い

俺と咲良は土産を買い終わり、俺達は三人が土産を買い終わるまで設置されていた椅子に腰を下ろした。今朝の疲れがまだ残っていて、そしてハシャいだせいか咲良は俺に寄りかかってスヤスヤと気持ちよさそうに眠っていた

「見てみて、提灯も木刀もペナントもキーホルダーもあるよ!」

「お土産物の定番ですからね」

「俺も少し眠るから、決まったら起こしてくれよ」

除夜達とは別行動のしんのすけとななこ、そして忍は、ラーメンを食べていた。ななこの父は、担当に監視され別荘で原稿を書いている

「美味しいわねここのラーメン」

「オラは、ななこおねいさんと一緒なら何でも美味しいぞ」

「しんちゃん、それって告白？」

「プロポーズです」

しんのすけのその台詞に、ななここと忍はプツと笑った

「オラ何か変な事言った？」

「ごめんごめん、店の中で言うには余りに真剣なんでつい」

忍の台詞に、しんのすけは人前で恥ずかしい事を言ってしまった事を悟った

しんのすけは一気に顔を紅潮させ……

「……しんちゃん？」

「いーいやーいやー！もう結婚出来ないー！」

店の外へ駆け出していった。ななこと忍は代金を支払い、しんのすけを追い掛けた

『全く、我が本体ながら呆れた物だ』

食べ残した三人のラーメンを、勝手に出て来た『ハリケーン』が通常の遠隔操作モードより更に小さく、ほっそりとした形態で食べていた。客や従業員は箸が浮いていて麺が空中で消えていくその光景を見て、唾然としていた。勿論ハリケーンは全く気にしていないが

別荘の書斎

「先生、そわそわしてばかりいないで原稿書き上げて下さい。締切近いんですから」

「これがそわそわせずにいられるか！ななこはな、今しんのすけ君と一緒にいるんだぞ！」

「忍さんもいますよ」

「だが、何か間違いでも起きたらと思うと心配で心配で……」

「五歳児相手に一体どういう間違いが起きると言っんですか。お茶

淹れてきますから、それで少しは気を落ち着かせて下さい。言っときますけど心配だからって出て行ったりしないして下さいね」

担当、鈴木けんすけは釘を差して書斎から出て行った

「全く……先生のあの病気にも困ったものだ」

再び土産物屋

「お前等決まった？もう一時間くらい掛かってるけど……」

「僕はもう済みましたが、宝来さんと稲庭さんがまだ……」

「……女ってのは何で買い物にそんな時間を掛けるんだ？」

「八八八八八……」

「琢磨、悪いがあいつ等に伝えてる。早く買い物済ませる。後十分待つからそれまでに決めるとな」

「その必要は無いよ瀬上君」

「ああ稲庭か……ちょうど良かった……」

買い物袋を二つ提げ、右手を振りながら何とローラーブーツを履いて、俺達に近付いてきた

それもかなりスピードが乗った状態で……

「何してんだてめーは！」

「いい靴があつたから買ったんだけどどうやら靴底にローラーが付いていたみたい」

「気付けアホ！てかお前ローラースケート出来たのか？そんなイメ
ージ無いよ？」

「失礼だな、ちゃんと滑れるよ……止めて」

「何考えてんだこのすつとこどつこい！」

咲良を琢磨に任せ、『スタンド』を出して稲庭を受け止めようとするが

ローラーブーツのスピードのが速く、俺は稲庭と正面衝突してしま
った

「一体何を考えてんだお前は！」

俺は稲庭をぶん殴った後、正座させて説教していた

店の品物や他の客や従業員に被害は無かった物の、あの後、当然ながら店の人に何故か俺まで一緒に叱られた

本当に他に被害が無くて良かったと思えた

「所で宝来は？」

「もう少しかかるみたいだったよ……あ」

噂をすれば何とらやか、宝来が買い物袋を提げてきた。だが何処か様子がおかしい。前かがみになっていて足も覚束ない

宝来は足を止めて携帯電話を取り出した。相手は俺の携帯だ

「もしもし」

『……瀬上君、動かないで……この店……何者かの攻撃を受けてる』

絶え絶えに言ったその台詞を耳にし、即座に俺達は辺りを見回した

見ると、客や従業員が何人も倒れており、しかも色や毛深さ等は個人差はあるが例外なく体毛が全身にびっしり生えており、中には蹄が生えていたり、角や牙が生えている者もいた

宝来の方もよく見ると、皮膚からは茶褐色の体毛がうっすらと生えており、後頭部には角が二本生えていた。指も人差し指から小指がうっすらとくつついて、親指も大きくなっている

「琢磨……これ、どう見る？」

「間違い無く何者かによる『スタンド攻撃』ですね……それも、『能力の射程距離にいる者を無差別攻撃する』タイプの能力です」

「こついった型の能力を止めるには？」

「一番手っ取り早いのが、本体を見つけて叩く事です」

「だろうな……」

ついてない。まさか旅行初日でスタンド使いに攻撃される事になるとは

俺は自分の不運を、心の底から呪った

エンパイア・バーレスク？（後書き）

前書きは『その頃あの人は何をしているの？』第二弾です。御厨さんはマサオ君と同じくマンガ好きです

行き先は北海道です。細かい事は出来れば気にしないで下さい。おかしいのは承知してますから（笑）

『ハリケーン』のあの型は遠隔操作型です。パワーはとても弱くなっています。射程距離は長くなっています

で、新手的スタンド使いの攻撃です。除夜達はどうするのでしょうか

では、次回もお楽しみに！

エンパイア・バーレスク？（前書き）

動物にするスタンド使いの攻撃に巻き込まれた除夜達は……？

エンパイア・バーレスク？

「スタンド使い？何で？春日部以外にもいるの？」

「そりゃいるでしょうよ……」

呆れながら言う琢磨。俺も同感だ

「春日部から来た旅行者の仕業か？それとも優太が脱獄させた囚人の内の誰かか？」

「それは分かりませんが、僕達を狙って攻撃しているとは考え辛いですね」

俺も同感だ。俺達を狙っているならもつとこつ直接的な攻撃をしてもいい筈だ。こんな無差別攻撃する理由が無い

「誰の仕業かは分かりませんが、このスタンド攻撃を行っている奴は何を考えてこんな事をしているのか、考えられるのは三つ程」

右手の人差し指を立てる

「1、何か目的があって気を引かせる為にやっている」

次に中指を立てる

「2、能力を自覚したばかりのスタンド使いがスタンドを上手く制御出来ず、暴走させている」

最後に薬指を立てた

「3、能力を自覚したばかりのスタンド使いが面白半分で能力を使っている、つまり愉快犯……僕が思い浮かぶのはこの三つです。他に何か理由を思い付いたら遠慮無く言っして下さい」

「特に無い。俺も大体同じ意見だ……」

俺的には一番あって欲しいのは二番だな

「で琢磨。俺達もこのスタンド攻撃の射程距離内に入っているが……これで本体を探せるのか？」

「僕にばかり質問しないで下さいよ」

「この中でスタンドに一番詳しいのはお前だしな……」

「僕だって沢登君から聞いた事と独学で調べた事ばかりなんですよ

！」

「だが一番知っているのは確かだ。こういった型の能力から逃れながら且つ本体を探せる方法はあるか？」

「……こういった型のスタンドには『攻撃に移る条件』みたいな物があるんです。それを見付けないと探しに行った所でただ攻撃の餌食になるだけですよ」

「その条件を見付けないと迂闊に動く事が出来ないの？」

「ええ、慎重に見極めないと……」

「お前等何深刻になつてんだ？そんな簡単じゃないかよ」

琢磨と稲庭が目を見開いた。え？俺そんな意外な事言つたっけ？

俺は携帯がまだ繋がっている事を確認し、相手に話し掛ける。攻撃を食らった奴に聞けばヒントくらいは分かるだろ

「宝来、俺達の話聞いていたよな？攻撃が始まる、または動物化の進行が進むにはどんな条件があると思う？些細な事でいい。思い当たる節があるなら教えてくれ」

『……瀬上君、私の動きと進行の様子をよく観察しててね』

そう言つて宝来はその場足踏みを二十歩程やった。ある。変化はあ

る。確実に後頭部から伸びる角が伸びて内側に曲がっているし、蹄の形もはつきりしてきている

進行し過ぎて二足で立ち上がる事が難しくなったのか、宝来は俯せに倒れた。執念で携帯は口の前に持ってきている

『これで分かったと思うけど……このスタンド攻撃は床や地面に足を着ける事に進行が早まる……言っとくけど逆立ちして進んでも進行するから……』

まさか試したのか？

俺は足をずらして前へ足を持っていく。琢磨達に確認するが進行はおろか発症もしてないみたいだ

「ありがとよ宝来！お前は漢だ！」

『私は女だ』

「俺達が敵を倒すまでそこで寝そべってる。後は俺がやる」

「俺がやるってどういう事ですか？」

「そつだよ。ここには四人いるんだよ。全員で探した方が効率的だよ」

「俺達は敵の攻撃のスイッチと進行の条件が分かったただけだ。これから何が起こるか分からないのに全員が同じ行動を起こすのは危険過ぎる」

「杞憂だよそんなの」

「何でそれが分かるんだ？」

稲庭は言葉が詰まった

「確かに杞憂かも知れない。だが考えられるだけの用心はすべきなんだ。この敵を早く倒さないといけないのは承知だがそれは焦るといふ事じゃない。俺一人で本体を探し叩けるのであれば叩く。お前等はここで何が起きているか変わった事があれば報告してくれ。俺もそうするから」

「……確かに、気に入りませんが明確な判断ではありませんね……」

「……もしかして怒ってる？」

「もしかしなくとも怒ってますよ……君は少し人に何かを押し付けるといふ事をした方がいい……」

ぶつぶつ言いながらポケットからタオルの切れ端を取り出し、俺に渡した

「……何これ？」

「取り敢えず持ってて。役に立つかも知れないから」

何の事がよく分からなかったが、無駄な事をする奴じゃないのは知
っている為素直に受け取った

「咲良君は？」

「寝かすとけ、わざわざ起こす必要は無い」

「ローラーブーツ使う？」

「危ないから使わない。しんのすけにはまだ伝える必要は無いから
な」

足をずらして探索へ向かった

一階の調べられる所は全て虱潰しに調べたが、成果は0だった

確かこの建物は四階建てで幸いな事にエレベーターは設置されてい
るから階段は上らなくてもいい。破壊されてるか何かさされて使えな
くさせられていると考えたが、どうやらそれは杞憂だったようだ

エレベーターに乗り込んだ俺は、報告の為に琢磨に電話を掛けた

「琢磨か？」

『除夜君、どうでしたか？やはり……』

「ああ、いなかった。それよりもう一度確認したいんだが……こう
いった風に能力が広範囲に有効なスタンドでもその本体には影響が
無いから本体だけは元の姿なんだよな？」

『ええ、暴走していたりしている場合を除いて普通はね……』

「分かった、そっちに何か変わった事は？」

『今の所ありません』

通話を切ると、いいタイミングで二階に着き、ドアが開いた。開の
ボタンを押しながら、足をずらして進む

二階は一階同様動物になりかかった人ばかりで、中には人としての
理性を失って暴れまわっている者もいた

「しかし見てみると、カバだのサイだのライオンだの白熊だの多種
多様な動物がいるが……何もかもが哺乳類だな……大きさも人間と
同じって事は変わるののは体の作りだけみたいだな」

自分でもどうでもいい事と分かっている事をぼやきながら慎重に本

体を探す。途中襲い掛かって来たのは『プラネット・ルビー』で軽く叩きのめした。手加減はしたし正当防衛だ。悪く思っなよ

「元が人間だからか人も恐れられないな……何処か松明とか無いか？」

人間を含めて動物は基本的に火を怖がる。松明じゃなくともチャツカマンが何かあれば助かる

首をキョロキョロ動かしていると、前方の床から『海豚』が俺に向かって飛び出てきた

勿論ただの海豚な訳が無い。水色の体色に昔図鑑で見た『カワイルカ』のように細長い口は鰭まで裂けている。背鰭は根元からの僅かな隙間が見えた事から、二枚重なっているのが分かる

そんな物が俺にぶつかった。意外と強い衝撃にバランスを崩し、転倒した

（動物に変えるスタンド以外の……スタンド使い……ここにいるスタンド使いは、俺達以外で二人……）

ただでさえ厄介な状況がより厄介になったのを実感した

エンパイア・バーレスク？（後書き）

動物化のスタンド使いの他にももう一人。能力の詳しい解説は次回
予定です

深刻となったこの事態をどう切り抜けるのか？

次回をお楽しみに

エンパイア・バーレスク？（前書き）

動物化のスタンドとは違うスタンドに追われる除夜。果たして……？

エンパイア・バーレスク？

バランスを崩し転んだ俺は、立ち上がる為に必然的に足を地面に着ける。すると、俺の体に赤みがかつた黄色い体毛がうつすらと生えた

俺は引き続き足をずって移動するが、先程同様スタンドが飛び出す。俺は『プラネット・ルビー』でスタンドを自分の後ろに瞬間移動させた

速いスピードで足をずらしてジグザグに移動するが、スタンドは俺を逃そうとせず追ってきて、飛びかかってきた。俺はそのスタンドを正面からぶん殴ったがパワー負けしてしまい、攻撃を食らってしまった。衝撃で一瞬意識が飛んでしまった

「こいつは遠隔操作のスタンド……それは確かだ。だがあのパワーは通常の遠隔操作型のパワーじゃない。それに攻撃パターンがあまりにも単調過ぎる……」

つまり、御厨先輩の『マイ・フレンド』同様『自動追跡型』のスタンドという事だろう。追跡までの条件はこの無差別攻撃のスタンドの攻撃条件を満たさない歩き方をしている事だろう

おかしい。スタンド能力は十人十色で能力の相性のいい奴と組んでいる事は何らおかしくない。だが、これはあまりにも『能力が噛み合い過ぎている』

イルカのスタンドには多分まだ何かがあるんだ。いや、今はそれを

考えるのは後回しだ。早くエレベーターで上の階に行かないと襲ってくる動物になった人間とスタンドの追撃を上手く逃れながら、片足をエレベーターの中に入れた。そのまま俺は携帯電話を取り出し、琢磨にかける

『除夜君』

「琢磨、単刀直入に言うぞ！この店には動物化のスタンド使いとは別にスタンド使いがいる！」

『え！』

「だが絶対上つて来るな！そのスタンドは遠隔自動操縦で動物化の攻撃条件を満たさない歩き方をしている奴を自動的に襲い掛かって来る！」

『それで僕達は？』

「念の為階段を見張っててくれ！もしかしたら本体達が降りてくる可能性がある……」

もう片方の足がエレベーターの中へと入れたと同時に、何か飛んでくる音が後ろから聞こえた

それがあのスタンドだというのに確認は不要だった

勢い良く叩き付けられ、閉まりかけていたドアに激突。ドアは変形

してしまい動かなくなってしまった。携帯電話もぶつかつた衝撃で落としてしまつて壊れてしまった

このエレベーターはもう使えないしこの店には他にエレベーターは無い。階段で上るしか無い

追跡して来るスタンドを能力で避けながら、階段に辿り着いた

普通に上つたら症状が進行する。能力を使った移動なら進行はしない。なら能力を使って上つていった方が正解だろう

ポケットからティッシュを出してそれを斜め上に放り投げた。それを『軸』として一番上の段まで瞬間移動した。完全な着地とは言えないが、踏み込んでバランスを取る程の物でもない

しかし後一センチずれてたら間違い無く後ろに転げ落ちていたな。やっぱ練習は必要か

もう一回同じ要領で階段を上り、三階へ辿り着いた

やはりここも二階と似たような事態になっている。動物化した人間が、三階を駆け回り飛び回っていた

俺は適当な動物をぶん殴つて気絶させ、そいつが着ている服から携帯電話を取り出した。これは騒ぎが終わつたら店の人に落とし物として届けるとしよう

今の所あのスタンドが襲ってくる気配は無いが、念の為近くのベン

手に腰掛けて琢磨達に連絡を入れる

「もしもし琢磨？」

『除夜君……いきなり電話が切れたから不安になりましたよ……』

「すまん、ちょっとアクシデントがあって携帯がぶっ壊れたんだ。今少し他の人の名も借りて電話してる」

『親切な人もいるんですね』

「三階もみんな動物化していても言葉が通じる状態じゃ無かったからな。勝手に拝借した。勿論返すつもりだけど……それよりどうだ？階段から誰か降りてきた？」

『いいえ、誰も降りて来ていませんよ。と言うより誰も階段に近付いても来ていません』

「そうか……俺は店内をもう少し探してみる。お前等は……」

目に映るあるものに、俺は釘付けとなった

『どうしました？』

「一応後五分階段の見張りを続けておいてくれ。もし五分で俺が戻って来なかった場合稲庭と咲良連れて店から出てしんのすけに説明してくれ。時間が無いから詳しくは話せない」

『もしかして本体を見つけたんですか？もしも……』

電源ボタンを押して切った

俺が目にした、赤いカッターシャツに青い長めのスカーフを巻いた、紅茶色の髪にスプレー缶の飾りのついた髪留めを左右につけた俺と同世代か少し年下程の少年は、俺の視線に気付いたのか急いで移動した。足を引き摺っての移動だ。つまり彼は自動追跡型のスタンドの方の本体と見ていいだろう

歩き方の割には移動速度がかなり速いと思い、彼の足元を見てみると、彼の履いている靴の底には、小さな球体が幾つか着いていた

見失う前に、俺は落ちていたハンドバツクを拾って奴に向かって投げつけた。見当違いな方向に飛んでいった

自分が球技が苦手だって事忘れてた

落ち込むより別の手だ。能力を使って追い掛けよう。ここは店だし今商品とかは錯乱している。『軸』となる物は幾らでもある

そう決めて俺は瞬間移動を繰り返し、奴の前へ先回りした。方向を変えて逃げ出そうとした所で、タックルを食らわせた

「捕まえた」

「さて……色々聞きたい事がある。まず名前とスタンド能力を得た経緯、そして何が目的なのかを吐いて貰う」

「スタンド能力って……？」

俺は無言で『プラネット・ルビー』を出し、こいつの顔に向けて拳を突き出す。少年は強く目を瞑り、スタンドの拳は当たる前に止まった

「見えてるだろ？俺の『プラネット・ルビー』が……これがスタンド能力だ。分かった？分かったんなら俺がさっきした質問に答えしてくれ。素直に言ってくれたら手荒な真似はしない」

「……僕は戸河内希新とがうちのきあけ14歳……普通の中学三年生」

「じゃあ次、お前の能力はさっき俺を襲ってきたイルカだよな？あれは何時から出せるようになった？切欠は？」

「信じられないと思うけど、今年の三月末に一年上のガールフレンドの卒業旅行に付き合わされて……旅行二日目に春日部まで行って、ホテルに戻る前に恐い男の人に変な『矢』で射抜かれて……」

やはり『弓と矢』でスタンド使いになったクチか……予感はしていたが、あいつやっぱ旅行者とかも射抜いていたんだな

「それじゃ次の質問。お前の仲間のスタンド使用は何処にいる？偶然とは言わせないぞ、お前はこの動物化の能力の事を知っていたんだからな……それと目的だ。言っとくが黙秘権は無いからな」

「そうだね……確かにこの無差別に哺乳類に変える『スタンド使用』……だっけ？彼女は僕の仲間だよ……何処にいるのかは知らない。今はね」

「そうか……」

「この三階の何処かにはいると思うけどな」

嘘は言っていない目だ。取り敢えず琢磨に連絡を入れよう

携帯電話を取り出し操作を始めると、後ろから何者かに殴られた。吹っ飛ばす前に首を掴まれる

そこにいたのは紺色のセーラー服のような襟のついた服に、膝から下の部分を前だけ切り取った長ズボンに水色のニーソックスを穿いた、右目を包帯で隠した黒髪の上に防災用のヘルメットを被った俺と同じ年程の少女がいた

彼女の後ろには、俺の首を掴んでいる青を基調とした、黒い縦線が一本額から腰まで伸びていて、肩に二の腕までの長さの魚の鰭が生えている、体の各部に親指程の太さの穴の空いた女性的な体のライオンのスタンドが立っていた

「こいつが君の後を追っていたから何なのかと思って付けてきたけど……思った以上に早かったから付いてくのが精一杯で……」

見ると、彼女は物凄く息を荒げていた

彼女はスタンドの手に力を込めた。俺の意識はそこで途絶えた

「所で希新、こいつ何者なんだ？見た限り私達と同じ能力を持っているっばいけど」

「さあ……」

「まあいいか。取り敢えずこいつ気絶させて家に持ち帰ろう。希新、『フィール・フロウズ』を解除して」

「うん」

「この店の別の所にもこいつの仲間がいるみたいだし、そいつらも片付けちゃおっか」

「わざわざ一階まで足を運ぶ必要はありませんよ……何故なら、内一人が君達の元へ来たからです」

声のした方向へ顔を向けると、そこにはタオルを掴んでいるスタンドを後ろに立たせた、一階にいる筈の須藤琢磨がいた

「初めまして、僕は須藤琢磨と申します」

エンパイア・バーレスク？（後書き）

戸河内希新のスタンド名はザ・ビーチ・ボーイズの楽曲から

琢磨が一瞬で一階から三階まで来た理由は次回

それでは！また次回も宜しくお願いします

エンパイア・バーレスク？（前書き）

スタンド使いの元へと移動した琢磨。果たして、勝利はどちらの手
に

エンパイア・バーレスク？

「敵は君達二人……と見て宜しいんですね？」

「な……何で……どうやってここまで無事に来れたの？」

女の子の質問に対し、僕は自分のスタンドが持っている『タオル』を広げて見せました

そして、タオルの四分の一の面積を『持っていった戻す』を見せました。戻した部分の先端に、店のソファアを結んでおいた状態で

「僕のSHUFFLEは物体の一部、または大部分を別の空間に持っていくスタンド。そして持っていった物は何があるのかも、空間の何処に置いてあるのかもSHUFFLEが把握している……更に、物を戻す際に空間にある違う物、例えば本体である僕の手がそれを掴んでいた場合、僕も戻す対象となり、僕は現実空間にある残った部分を含めて指定した戻す物のある位置へと移動出来ると言っわけですよ。引っ張られる形でね」

「つまり能力を応用して瞬間移動したって事が……でもそんな能力で私達に勝てると思うの？」

「さあ……勝負はやってみないと分かりませんか……」

「『エンパイア・バーレスク』！」

スタンドで僕に殴りかかって来ました。スピードは僕のスタンドとそこまで変わりはない

僕は左半身を持っていき、断面を向けました。スタンドの拳は断面に当たりました

「何で……何ともないの？私の『エンパイア・バーレスク』の破壊力は鉄筋コンクリートを一撃で破壊出来る程なのに……」

「そこまで教える程僕は親切ではありませんよ……」

もう片方の拳で殴りかかって来ました。今度は僕の生身の方へ。断面への攻撃が通じないから本体へ攻撃しますか

僕は腰を曲げてその攻撃を避けました。しかし

「げぼう！」

横から、除夜君の話していたイルカのスタンドが僕にぶつかってきました。除夜君の言っていた攻撃条件を満たしていないにも関わらずです

『エンパイア・バーレスク』の拳は今度は僕の腹部へと向かってきました。僕は一度能力を解除し、上半身を持っていく事で攻撃を避けました

戻ったと同時に、イルカが飛んできて、僕にぶつかりました。その隙を突かれ、『エンパイア・バーレスク』の拳は僕の顔に叩き付けられました

接触した瞬間に顔を持っていったからダメージは無いですが、横からイルカが飛んできて、僕にぶつかりました

（こんなの繰り返ししてたら遅かれ早かれやられてしまう……せめてあのイルカ的能力を解明しないと……）

今『エンパイア・バーレスク』の能力に引っ掛からない移動をしてもあのイルカは襲い掛からない。しかし除夜君の時はこの歩き方をしている時に襲われた

自動追跡型のスタンドは、大きく分けて特定のターゲットを攻撃するまで追跡を止めないタイプと、間近で条件を満たしている敵を無差別に襲い掛かるタイプがある。このスタンドは後者だ

これが分かっているならば後はその条件を……あれ？もしかして僕……もっと根本的な事を見落としていたんじゃない……あのスタンドの能力は、自分が今考えているよりもっと簡単な物じゃない……

「『SHUFFLE』！あの男の子の腕と僕の腕を持っていけ！」

あの希新という子の右腕と僕の右腕を『SHUFFLE』の空間に
持っていきました

やはり、イルカは僕に襲い掛かって来ましたが、ぶつかる前に別空
間にある希新君の手を掴んで、戻しました。僕もそこへ瞬間移動す
る訳ですから、イルカの攻撃は必然的に外れました

僕は希新君を羽交い締めにしました

「希新を離せこのチビ！」

「一応君達より年上の筈なんですがね……希新……と言いましたね。
君のスタンドは『追跡条件を変える事の出来る能力』でしょ？」

「さあ……」

「否定も肯定もしなくていいですよ……バれてしまえば下らない物
ですが、ドツボに嵌れば脅威その物な能力ですね。現に僕もついさ
つきまで「除夜君を襲い掛かってきたのと僕を襲い掛かってきたの
は何か隠れた共通点がある筈だ」としか考えていませんでしたよ…
…いや、知識がある分『既成概念』というものに発想が囚われてし
まっていたんですね……考え方を変えなかったらマジで危なかった、
心底してやられたって感じですよ」

希新君は僕の腕にしがみついて、足を床から離しました。同時、イ
ルカが猛スピードで僕に向かってきました

「（重さが増えると襲うように設定したんですか……考えますね）しかし無意味ですよ。僕の場合こうすればいいだけだから」

希新君の胸部から下と、僕の上半身の左半分を持っていきました。これにより持っていた分の質量は差し引かれる

狙い通りイルカは僕を見失ったらしく、少し探した後去っていきま
した

「私も忘れないですよ」

能力を解除する間もなく、僕の顔面に『エンパイア・バーレスク』の拳が叩き込まれてしまいました。一対象につき一ヶ所しか持つていく事が出来ず、反応も遅れたのでその拳は顔にクリーンヒットしました

希新君は手放してしまい、自分自身も一瞬意識が飛びそうになりましたが、それは辛うじて繋ぎ止めました

「痛たたた……鼻血出てる……ティッシュティッシュ……」

ポケットからティッシュを取り出し、右側の鼻腔に詰めました

「正直今のアンタ……ただ気持ち悪い」

相棒の女の子が今の僕の姿を見て率直な感想を述べました。まあそうですね。自分にかけて自分の能力を解除してませんかからね。まだ僕は上半身の左半分が消えた状態です。無闇に解除したらまたあのイルカに襲われますしね

だからまだ解除はしません

「よし、それならボコボコに殴るから、動物になりたくなければそこでジッとしてなさいね」

その言葉を聞いて僕は、その場で後ろに回り、大股で駆け出しました。少し経過して体を見てみると、やはり一步毎に症状が進行している。しかも理性を保つのが難しくなっています。ふと後ろを見てみると、イルカが追跡してきています

それを確認すると、僕は能力を解除して止まりました。現在の僕の姿は、鏡がないので触覚を頼りに推測するしかないのですが、上半身の左半分が症状が軽い状態で、後が獣化が進行しているという何ともちぐはぐな姿なのでしょうね

追跡条件を満たさなくなった為か、イルカは僕を追跡するのを止めました

僕は、ふと二人の後ろに立っている人物を見ると、口元を緩ませて

しまいました

「全く……遅いですよ、起きるのが」

二人が気付く前に、スタンドの手が、希新君の首を叩きました。希新君は気を失ったらしく、イルカは消えました

「俺が少し眠っている間にさんざん好き勝手やってくれたみたいだな……」

女の子の後ろに、スタンド『プラネット・ルビー』を立たせた除夜君が立っていました

「あら……起きてたんだ……」

「ああ……耳元で動物の鳴き声やら五月蠅くてね……そのお陰で目が覚めたよ」

「あのまま眠っていた方が良かったのにね……そうしたら痛い目に遭わずに済んだのに……」

「残念だな……それは違う……俺があのまま眠っていたら、お前が痛い目に遭わずに済んだんだ」

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
...

エンパイア・バーレスク？（後書き）

何とか終わりました。新垣のスタンド名はボブ・ディランのスタジ
オ・アルバムです

次回もお楽しみに

プール騒動？（前書き）

スタンド使い二人組を撃破した除夜達

一方、春日部にも新手のスタンド使いが……

プール騒動？

「あー疲れた……楽しい筈の旅行が初日から疲れてしまった」

愚痴を言いながら、俺は布団に大の字になって寝転がった

後から聞いた所あの二人は、『矢』に射られた事によって得た能力を把握した後、折角だからという事で能力を使って悪戯する事を思い立ったという。そこに偶々俺達が来たという訳だ

(予想はしていたが……)

春日部在住者だけを射抜くターゲットにしていたという希望的観測は元よりしていなかった

しかし、悪い予想が現実になったというのは、感じが悪い

当然『矢』に射抜かれた旅行者はあの二人だけではないだろうし、それに今こうしている内にもスタンド使いは増えているのかも知れない。一番歯痒いのは、俺達には射抜かれた人間が誰なのかを知る手段が無い事だ

歯痒い思いをしている俺の頬に、突然ひんやりとした感触がした。見上げてみると、瓶入りのフルーツ牛乳を持った宝来がいた

「飲む？私の奢り」

「飲む」

「但し最低でも上半身を起こしてからね。このままだと零すから」

「分かってるよ。そのくらいは」

上半身を起こし、フルーツ牛乳を受け取った。栓を抜いて一口飲む

「所で瀬上君。帰り随分と何か考えていたみたいだけど、悩み事？」

「……俺口にした？もしくは態度に出た？」

「何となく雰囲気。悩み事だったら私で助けられるんなら聞くよ？」

「いや、いい……大した事無いからな」

宝来は空の牛乳瓶の底で俺の額を二回小突いた

「一人で溜め込まない」

「……いや、こうしている間にも春日部に何十人、いや、何百人といるスタンド使いは「大丈夫大丈夫」」

最後まで聞かず、宝来は軽くそう言った。真面目に聞けよ

「真面目に最後まで聞く価値ない悩みだから途中で切ったの。気持ち分かるけど心配はいらぬよ。みんな強いから」

「……まあ、それもだが……」

「他にもさ、何処に何人スタンド使いがいるのか……悩む必要無いよ。考えた所で分からないし。調べた所で答えは無いし」

「そりゃあまあ……」

「そんなに深く悩まないで会った時にどんな状況かで決めればいいじゃん」

「思いつ切り行き当たりばったりだな……」

確かに、その通りだしそう考えれば気が楽だ

春日部ではずっとそうだった。余所に行ったってそれでいいんだ

「宝来」

「何？」

「何かカッコ悪いな俺……簡単な事で悩んではお前に諭されっぱな

しだし」

その夜は、暫く昔の話をフルーツ牛乳片手で話し込んだ

瀬上除夜達が土産物屋で『エンパイア？バーレスク』の無差別攻撃を受けたのと時間的に前後し、正午過ぎ

トオルとマサオは、ブレザー服を着てランドセルを背負った藤方に遭遇した

「あ、トオル君にマサオ君やないか。奇遇やなこんな所で会うなんて」

「はあ……所でその格好は？」

「今日学校でテストのやり直しがあってな。まあ原因国語のテストで名前書き忘れたからやけど」

「そんなミスやる人って本当にいるんだね」

「マンガとかじゃ結構ありきたりなミスやけどな。点数自体は良かったみたいで先生苦笑いしとったで」

そりゃするだろう

「所で二人はこのゴールデンウィークに何処か行く予定あるん？ウチは今年は何処にも行かへんけど」

「僕は無いね」

「僕も今年はありませんね。海外出張していた父が日本に帰ってきていて一緒に遊んでくれるんです」

「ウチもしんちゃんや除夜の兄ちゃん達と一緒に北海道まで着いてくべきやったわ……まあええわ、所で二人共この後暇か？」

「特に無いですね」

「僕も……」

藤方はポケットからチケットを三枚取り出した。それは、春日部の温水プールの割引券だった

「ほんまはゴールデンウィークに家族で行く予定やったんやけどおとんは仕事が食い込んでしもうておかんは妊娠四ヶ月で何かあったらあかん言うてウチに全部渡してくれたんよ。で、せっかくやし誰か時間空いとるスタンド仲間探そ思ったんよ。お金は全部ウチが持つから行かへん？」

「水着とかは？」

「そんなんレンタルでええやん。親御さんにはウチから連絡しとくから行こうや」

結局押されて藤方と共に温水プールへと向かう事となったトオルとマサオだった

温水プールへ着いた一同は、レンタルした水着に着替えてプールの中へ入った。中は思ったより空いていて、タオル達の他に二十人程しかいなかった

「意外と空いてますね。休みなんだからもつといるかと思いましたよ」

「県外とか、金のある家は海外とか行つとるんやろ。もしくは家でゴロゴロしとるとか……まあせつかく来たんやし思う存分楽しもうや。ここ色んな種類のプールあるって友達から聞いた事あんねん」

「泡がボコボコ出とるなあ」

三人が最初に入ったのは、ジャグジー風呂ならぬジャグジープール。深さは大人の男の肩まで浸かる程はあり、三人は当然足が届かないよって、タオルとマサオが浮き輪で、藤方はシャチの浮き袋でプカプカと漂っていた

「あれ？確か、藤方莓花ちゃんに……風間トオル君に佐藤マサオ君」聞き覚えのある声でしたので、聞こえた方向に首を向けると、ダイバースーツを身に包んだ塩屋がいた。ゴーグルとシュノーケルも装備している

「えっと……塩屋さん……」

「何してるの？」

「僕の家はゴールデンウィークとか、短期的な休みは何処にも行かない家だからね。初日に宿題も終わらせたし、プールで暇を潰そうと思って」

「その場違いな装備は？」

「レンタルしたの」

「何でプールでそんなんがレンタル品として用意されとるんや？」

「知るか」

藤方の疑問を、その一言で返した。確かに、一般客である塩屋がその理由を知る訳がない

「そんな事よりも……ちょうどよかった。僕がここに来る途中で、僕達のスタンド能力を引き出した人が解放した死刑囚の一人と通りすぎた」

塩屋のその言葉に、三人に緊張が走った

この春日部の大勢の人間をスタンド使いにした沢登優太が解き放ったスタンド使いの囚人の内の一人が、この近くにいると言われたのだ
塩屋は続ける

「あくまで見間違えで無ければ、けどね。因みにそいつは……」

視線を感じ、言葉を中断して上を見上げる

三人にも見上げるよう指で指示する。三人も見上げる

下半身が蜘蛛のようになっていて、上半身が黒と赤の縞模様で、のっぺりした射的の的みたいな模様の入った顔面をした人らしき物が、天井を這っていた。その顔の中心の黒丸からは、白い細い糸が伸びていた

「ス……『スタンド』……」

「ウチ等……何時どんな形でスタンド使いと遭遇してもおかしくない立場にあるんやっただな」

「『本体』を捜さない……」

藤方は『スウィートハット』を発現させ、散らばらせる。塩屋も『ストウーピット？ライク？デイズ』を発現させて、探索に向かわせた

天井にいるスタンドは、糸を下にいる少女の背中につける。四人は、何をするのか観察していた

「て……え？え？」

少女の体は糸により吊り上げられる。少女は何が起こっているのか分からず、狼狽えている

暫く上下した後、糸がぶつつりと切れた。少女の体は、必然的にプールの中に落ちた

「カスタム？マシン、あれをどう見る？」

『いきなり吊り上げられた事で動揺はしている模様ですが、特別何

かされたという訳でもなさそうですね。現にあの少女も結構な高さから水面に落ちた為痛がっているようですがこれは普通に有り得る事です』

「という事は、悪戯でスタンド使つとる愉快犯言う事か？」

「そうかも知れないがそうじゃないかも知れない……早く本体を捜そう」

温水プール入口

そこに、一人の男が近付いてきた

「くくくくく……初仕事はここでやろう……久し振りに人間を殺す事が出来る……」

プール騒動？（後書き）

少し春日部にいるメンバーにも視点を当ててみました

皆さんは、テストに名前書き忘れて0点を取った事ありますか？僕は今の所無いけど（笑）

次回もお楽しみに

プール騒動？（前書き）

温水プールにて糸を吐く謎のスタンドと遭遇したトオル達

だが、そこには別の影も近付いてきていて……

プール騒動？

「あの子の驚いた顔、本当に面白かった……次は誰を驚かそっかなあ〜」

ジャグジープールから離れたプールに設置してある、滑り台の頂上で、カルピスの包み紙のような模様のビキニを着た、水泳帽を被って長い髪を後ろで縛り、前髪が右目を軽く覆うようにセットした髪型の塩屋と同じ年頃の少女が、突然吊り上げた人間やそれを目撃した人間の驚く顔を見下ろして、愉快そうに笑っていた

彼女は思った

祖父が教授をしている大学の学園祭に遊びに行ったら銃声や爆発音が鳴り響き、体育館倉庫の中に隠れていたら変な男の人に『石の鏃』で攻撃された

その傷はすぐに『塞がった』がその日から妙な物が見えるようになっていたり、自分以外には見えない天井に張り付いている妙な蜘蛛人間を出し入れし、手足のように操る事が出来るようになった。彼女が「自分は普通じゃ無くなった」と自覚するのに時間はかからなかった。そしてどうせだから自分のこの能力で人をからかおうと思いついた

初めは小さな悪戯で満足していたが、もっと大々的に人を驚かせてみたいと考えるようになり、人が集まりそうな場所を選び、そこで人を吊り上げてより大勢の人を驚かせようと考えたのだった

「本当はもつと別の場所でも良かったんだけどね……何でか分からないけどやるならこつて、直感したんだよね。何の根拠もないのに……」

何でだろうと悩んだが、即座に頭を切り替え、双眼鏡（プールのレンタル用品）で次の標的を捜す

「次は貴女だよ！行け！」スパイダー？バレエ！」

スタンド、『スパイダー？バレエ』は天井をカサカサと移動した

鶺鴒かたな三ツ葉みつば……スタンド名：スパイダー？バレエ

「えつと……まだ見つからないんですか？」

「ごめん、僕の『ストウーピット？ライク？デイズ』は空飛ぶよう
に出来てないしスピード無いから地道にしか捜せないんだ」

「うちの『スウィートハット』も基本エコーローケーションで物を
探知しとるから何が動いとるかそう言ったのは分かるんやけど具
体的な区別は出来へんのや。しかも数を増やせばその分その精度が
大雑把になつていくんよ……」

「僕のスタンドは近距離型だし、マサオ君のは人や物を探すとか、
そういった事は出来ないし……」

トオルは溜息をつき、天井に張り付いているスタンドを見る。スタン
ドは、自分達の真上まで動き、糸を吐いた

その糸は、藤方の右肩に引っ付いた

「藤方さん！」

トオルは『カスタム？マシーン』を出し、糸の機能を停止させよう
とする。それを藤方は手で制した

「これでええ……寧ろこれでウチらはこいつの本体を捜し当てる事
が出来る……」

藤方の体は、勢い良く持ち上げられた

「さて……どんな表情しているかな……盛大に驚いている顔がいい
なあ……」

期待を込めながら、双眼鏡で吊り上げた藤方の顔を覗く鵜

だが、予想外の表情と行動に、彼女は目を丸くした

「滑り台や！あっちの滑り台の上に監視員でも無いのに双眼鏡覗いとる奴がおる！」

ほくそ笑んだ表情で、自分の方へと指を差すという行動に

鵜は悟った。理由は分からないが、彼女には自分の『スパイダー？バレエ』が見えていたのだと。そして自分を捜し当てる為に自分の能力を逆に利用したのだと

『スパイダー？バレエ』は顔から出ている糸をぶち切った。糸で支えられていた藤方の体は、プールに落っこちた

「この場合どうなるんだろう？やっぱり説教されるかな？いや、もしかしたら少年院に……」

「安心して、僕達は警察とかじゃない。君が『スタンド能力』を使って何をするつもりなのかを知りたいだけだ」

後ろから声がして振り向くと同時、そいつは鵜の両肩を滑り台の滑る方へと押した。鵜は頭からプールへ着水した。シヨックで気を失

ったのか、俯せのまま浮かんでいる

「塩屋さん……あの人大丈夫なの？」

「高さはそんなに無い。命に関わるような怪我はしてないだろ」

自分のスタンドで突き落とした本人は平然とした様子で言い放った

鵜が目を覚ました後、鵜はスタンド能力の発現の経緯と目的を、トオル達は春日部で何が起きているのかというのを、互いに説明した

962

「へー……その人があたしの能力を引き出したのはそんな目的があったからなのか」

「ええ……でもその事を除夜さんに言わないで欲しいんです」

「うん、終わった事だし、あたしも死んじやった人の事を悪く言う趣味は無いしね……どうしたの塩屋君」

やや惚けた顔で自分を見る塩屋に聞く

「いや、さ……いきなりそんな事聞かされてよく平然としてられるなあって思つて……普通多少なりとも取り乱したりしない？」

「そりゃ少しはね……でも人の眠っている才能……『スタンド』つて言つたっけ？それを引き出す『矢』で人を傷付けて……何か企てがあるって言われなくても分かるよ……そしてそれがロクな企てじゃないつてもね……それが分かつていたからかな？貴方達からして少なくとも表面上動揺が見られなかったのは」

そう切ると、今度は塩屋に逆に質問した

「僕はいきなり家に現れた彼に『矢』に刺されて、それでこの能力の事とかを説明されて、そして大金くれるってんで手を組んでいた」

「……君のが凄いよ。具体的に説明出来ないけど何かこう……」

「そうかね……」

「まあええんちゃうの？終わった事なんやし……閉館時間までプー
ル楽しもうや」

「そうですね」

いきなり、物が大規模に壊れた音がした。トオル達を含めた客や監視員の全員が、そちらを見る

そこには、廊下を隔てる壁に空いた大穴、そしてそこから入って来

る男がいた

その男は、アイドルのように端正な顔立ちに、長めの黒髪を鈴付きのリングの前に三本、後ろに五本束ね、白の地に水色の縦縞が五本入ったYシャツを着ていた。サイズが大きいのか、中指の先が見えるかどうかという所まで袖が伸びていた

トオル達は男とは初対面だが、その顔には見覚えがあった。その顔は確かに、沢登優太がスタンド能力を与え、刑務所から解放した死刑囚の一人だったからだ

「何だ……思っていたより入場者が少ないな……まあ、いいか……」

男は自分の背後にスタンドを発現させる。黒を基調とした、右目に雪の結晶が描かれていて、臍からは後頭部まで繋がっている白いパイプが伸びていて、緑色のサボテンを連想させる帽子を被った、手にガントレットを装備したスタンドだ

そのスタンドはその手を翳し指先を前に向け、そこにある微細な穴から液体を噴射させた

液体のかかった床に片足を乗せ、もう片方の足で床を蹴る。滑り出すと同時に転ばないよう両足を地面につけ、バランスを取った

「え？何であんな滑る事が出来るの？」

「何等かのスタンド能力だね。どんな能力かは分からないけど早め

に倒したがいいな……」

トオル達はプールから上がり、男の元へと駆け出した

プール騒動？（後書き）

鵠のスタンド名はイギリスのバンドから

塩屋君が鵠に対してやった事は真似しないで下さい（笑）

男の能力は次回判明します。それでは！

プール騒動？（前書き）

温水プールに現れた新手の脱獄囚……その能力は？

プール騒動？

プールから上がったトオルと藤方は、突然乱入してきた男の前に立った

「何だお前等……」

「あんた最近ニュースとかが騒いどる脱獄犯やる？」

「如何にも……俺の名は真淵悠智……最近刑務所から逃げ出した囚人の内の一人だ……」

「その囚人さんがスタンド出してこんなプールまで何で来とるんや？」

「その前にさ……昔のコントでさ、バナナの皮で足を滑らすってあるよね？あれってさ、普通は滑らないんだよね。考え出したの誰だろうね」

ケラケラ笑いながら、真淵は二人に聞く。いや、どちらかというところ二人が聞いていようがいまいがお構い無し、つまり独り言のように思った事を口に出していると言った感じだ

「俺ガキの頃それを知らずバナナの皮を教室の扉の前に置いてさ、踏んづけた先生に怒られちゃった事あるんだよ、いや参った参った……空き缶とかペットボトルとか、ビニールとか、平気で道端とか

に捨てる心無い人間っているけど……そいつ等の捨てるそういうのを踏んづけて怪我したりする人いるけどこの場合さ、意図した訳じゃ無くとも人を傷付けたって事になるよね？この場合は実刑になるとしたらどれくらい刑務所に入れられるんだろ？」

言い終わると高笑いする。すぐに笑い終え、スタンドでトオルに攻撃する。トオルと藤方はスタンドを出し、『カスタム・マシン』で攻撃を防ぎ、『スウィートハット』で真淵のスタンドを殴りつけたフィードバックで殴られた衝撃が本体である真淵に返ってきて、殴られた部分をさする

「おいおい坊主、お嬢ちゃん、問答無用で人をぶん殴るなんて人としてどーよ……なあ！」

真淵のスタンドは『スウィートハット』と『カスタム・マシン』に手を翳し、液体をかけた。反応が遅れ、まともに浴びてしまう

……だが、何も起こらず、起きる様子も無かった。ただベトベトして若干不快なだけだ

「何やこれ……？」

「『油』……？」

「正解だ。サービスで教えてやろう。俺のスタンド『パッション』

ピット』は油を出すのが能力だ……下らない能力だろ？他の脱獄仲間
の能力はどんな物かは知らんが多分どいつもこいつも凄く強い能
力なんだろうな……だが……『下らない能力』とは『弱い能力』と
いう意味じゃない……その意味分かるか？教えてやる……」

『スウィートハット』と『カスタム・マシーン』の拳は、真淵の顔
面に当たる

だが、当たった途端滑つて的中はしなかった

「まともに浴びた時点で、貴様等の攻撃は通用しなくなってるだよ」

足を動かして滑って接近し、二人の頭を掴む

「風呂場で走り回るなって母ちゃんに言われた事あるだろ？何故か
分かるか？それは濡れたタイルは滑るからなんだぜ……」

バランスを崩させ、二人の頭を床にぶつけた

「そんな……二人が……」

「真淵悠智……」

「塩屋君知ってるの？」

「まあね、数年前ニュースで見た事がある……大量殺人で死刑宣告を受けたんだ……その凶器は……二種類の洗剤。何で転けるんだ？」

塩素系の洗剤と酸性の洗剤は混ぜると有毒ガスが発生します

「詳しくは知らないけどかなり巧妙な手段だったらしくて少し間違えていたら迷宮入りになっていたらって聞いた……」

「ああ……と言っても刑務所でも充分人を殺したり傷付けたり出来たけどね……勘違いするなよ、殺したつつつても階段にわざと濡れて雑巾を置き忘れたりとかそんな可愛げのある方法だよ？ こう見えても刃物とか銃とか血腥い物は嫌いなんだね……死刑になるまでに何人殺せるかっていう暮らしも良かったけどやっぱりシャバに出て人を殺した方がすかつとする……最初に選んだこのプールでスタンド使いがいるのは驚いたが、まああのガキは「春日部には瀬上除夜の他にスタンド使いが沢山いるから気をつけて」と言ってたし、別に気にするまでもないか」

『グルルルル……』

マサオの後ろから、彼の恐怖心によって強化された『タイト・コネクション』が出て来て、真淵に向かって凄いスピードで殴りかかってきた

真淵はそれを紙一重で避ける。拳で生じた風によって真淵の頬が深

く切れた

「まともに食らったら最悪御陀仏だな……」

『グワアアアア！』

ジヤブを繰り出す『タイト・コネクション』。『パッション・ピット』でガードするも、パワー負けしているのか殴られる度に腕が傷付いている

埒があかないと判断し、『パッション・ピット』は『タイト・コネクション』に油を吹きかけた。『タイト・コネクション』はギリギリで避け、右フックを食らわせた

「ば……が……『パッション・ピット』オオオオ！」

自分のスタンドの油を自分に向けさせた。タイト・コネクションは追撃を加えるも、体中にかかった油により、当たっても滑ってしまい、上手く攻撃出来ない

タイト・コネクションの攻撃をいなすパッション・ピットは隙を見て対峙するスタンドの足元に油を至近距離で吹きかけた。そして即座に足払いする。バランスを崩したタイト・コネクションは転倒した

『グルアアアア……』

「止めを刺せパッション・ピット！」

『パッション・ピット』の手の形は手刀となり、『タイト・コネクション』の首に振り落とされた

『タイト・コネクション』の首へと振り下ろされたその手刀は、接触する寸前で止まった。否、『止められた』！

真上から伸びる『糸』が、その手刀にくっ付いた為だ。しかも糸は強靱なのか、どうしても引き千切れない

見上げてみると、そこには鵲のスタンド『スパイダー・バレエ』がいた。スタンドを確認した瞬間、糸が吊り上げられ、体が天井へと持って行かれた

「これでいい？」

「ナイス」

グツと親指を立てる塩屋

「ナメてんじゃねえぞ！食らえ！『パッション・ピット』！」

空いている腕で『スパイダー・バレエ』に殴りかかる。瞬間、真淵の耳に、何かが切れる音がした。比喩的表現ではなく、実際に。現時点でそのような音を立てそうな物は、一つしかない

そう、自分を吊り上げている、『スパイダー・バレエ』の糸だ

支える物の無くなった真淵の体は、床へと落ちていった

「『パッション・ピット』！」

スタンドを発現させ、己の体をキャッチさせた

「スタンドが近距離パワー型だから出来る事だな、僕のスタンドは遠隔操作型だからあれをやれと言われても不可能だ」

「そんな事どうだっていいでしょー！」

どうでもいい事を呟く塩屋に突っ込むマサオ

真淵は、自分の前方に油を敷き、スケートの要領で滑り出した。マサオ達の元へ向かって来ている

「プールの中に入ろう！幾らあいつでも水上は滑れないよ！」

慌てながらプールに指を差し、提案する鵜

「（スタンドはそんな甘くは無いんだが、他に案がある訳でもないから……）仕方無い、その案に乗る事にする！」

少し躊躇しながらもプールの中に入り、なるだけ奥に進む三人

真淵は、プールの前で止まった

「やった！あいつ追い掛けて来ないよ！」

「いや……安心はまだ早いようだ……」

真淵は油をプールに注ぐ。油は水より比重が軽い為、プールの水面を膜のように覆った

そして、油に足を乗せ、先程までと同じ様に滑ってマサオ達に接近して来た

「こんなんありー!？」

「……これは『スタンドが出した』油で普通の物とは違うからな」

鵲が目を見開くのは対照に、塩屋は物凄く冷静にコメントした

プール騒動？（後書き）

真淵のスタンドは、油を出すのが能力です。スタンド名はアメリカのエレクトロポップ・バンドから

水上も追尾出来る能力に、みんなはどう立ち向かうのか？

それでは次回！

プール騒動？（前書き）

マサオ達、絶体絶命か？

プール騒動？

「どつしどつ？」

「どうするもこうするも、移動に水の抵抗を受ける僕達とそれの無い奴じゃ必然的にあいつのが速い……つまり逃げる事は不可能だ」

「じゃあどつするの？」

「ここで奴を迎え討つ！それが出来ないと僕達は殺される！やるしかない！」

「でもどつやって……？」

「三人とも息を大きく吸った後水の中に潜ってくれ……」

塩屋の提案の意図は二人は何なのかよく理解出来なかったが、取り敢えず従う事にし、息を大きく吸って水の中に潜った

「あ？何を考えているんだ？」

いきなり潜った三人に、真淵はその行動の意図を察しようとする

そして、すぐにある結論に達した

自分は水をどうこうというより、水に油を浮かべてその上に滑っているだけに過ぎない。だから、水中に潜れば自分達に手を出す事は出来ない。そう考えたのだろう

（その通りだよ……自慢じゃないが俺は水上は滑るだけだ。水の中に逃げられたらお手上げだ）

だがそれがどうした

だったら接近しずっとお前等の周りを滑っていればいいだけの話だ

980

客観的に観たら単純な事は当事者からしたら気付にくいからな。だからそれにすぐに気付いた事は誉めてやる

しかし、連中はあのダイバースーツを着てシュノーケルを装備した少年を除いて装備は水着だけ（それが普通である）。つまり、いずれ水面に頭を出して呼吸をしなければならぬという事だ。どれだけ肺活量の優れた人間でも哺乳類である以上水中で呼吸なんぞ出来る筈がないからな

そう結論付け、三人の元へと接近する

「？」

三人との距離が一メートルに入ろうとした時、足元に異変を感じた。変に温かいのだ

ここは温水プールだ。プールの水が温かいのに不思議は無い。先程より温かく感じる。それも錯覚ではなく、本当に。しかもどんどん熱くなっていった。『温水』というより、最早『熱湯』と言つのが正しかった

通常の靴と靴下しか穿いていない真淵の足にその熱が耐えられる筈もなく、熱さで足を上げ、バランスを崩し、水の中へひっくり返った

それと同時にマサオと鵜が水面から顔を出し、呼吸をした

(急場の策だったけど……成功してくれて何よりだな……)

水中でスタンド『ストウーピット・ライク・デイズ』を出しながら、塩屋はそう思った

水の上では油を浮かべてその上を滑るだけ。それに気付いた塩屋は、自分のスタンド能力を用いて水の中に落とそうと考え付いた

塩屋のスタンド『ストウーピット・ライク・デイズ』は「液体の融点と沸点を変える」能力。その能力を用い、『プールの水面の沸点を低く設定した』のだった

最も、これは能力に超スゴい精密性を持つからこそ出来た事だし、塩屋自体水面のみのそれを変えるというのは最近出来るようになってきた事だ

体勢を立て直した真淵に、マサオのスタンド『タイト・コネクション』が恐怖の元凶である彼を叩く為に接近してきた

(理想は、そのまま『タイト・コネクション』が奴を叩く事だが…
…そう上手くいかないのが現実なんだよな……)

「『パッション・ピット』オ！」

タイト・コネクションが接近する前に、真淵はスタンドに自分の体を掴ませ、水中から出した。そして、そうしている内からも出していた油の膜の上に乗れ、滑り出し、『タイト・コネクション』と自分との距離を、一瞬にして空けた。『タイト・コネクション』は追跡するが、スピードは僅かに真淵のが速いらしく、ゆっくり、だが着実に少しずつその差を開いていっていた

「もう一度水の中に潜れ！」

塩屋は水面から顔を出し、マサオと鵜に指示を出す。二人は何も言わずに従った

それを見て、真淵は鼻で笑った。また水面を沸騰させるつもりなの

だろう

ワンパターン野郎め。さっきのは虚を突かれたというのもあって策にハマってしまったが、二度も同じ手段に引つ掛かるか。人間は失敗を通じて学習するのだ

案の定、足元が熱くなった。真淵はわざと片足を上げ、体勢を崩すと同時に前方に自分のスタンドを出し、自分の右手を掴ませ、引き上げさせた

(油膜は十分ある。着地……いや、着水か？兎も角足がつけばそのまま滑ってお前等を一人一人水から引き揚げてぶっ殺してやる……)

真淵の足が水面についた瞬間、足に何か固体が当たったような感触と、何かが砕ける音がした。足は水面につかず、水の中に普通に沈む周りを見てみると、プールの水面は、薄い氷で覆われていた。真淵は理解した。さっきのは氷が砕ける音だという事を、そして足に着いたのに滑らないのは、油が凍ってしまっているからだ

しかも自分が今浸かっている場所も、徐々に凍り付いてきている。再度スタンドを出して周囲の氷上に油を吹きかけ、スタンドで水から引き上げさせると、滑りながらシュノーケルの出ている所を探した

(多分この凍ったプールはあの男の仕業……能力は多分『水の熱を

操る』んだらう)

当たらずとはいえ遠からずの推測を立てながら首をキョロキョロ動かす。水面すれすれに出しているのか、中々見つからない

本来は滑らずに探す方にじっとしている訳にもいかない。タイト・コネクションは依然自分を追跡しているのでそうは言っていられない

(お前の事を一瞬『頭がいい』と思ったが……正確には『間抜け』と言っべきだったよ……水面を凍らせてくれたお陰で水面を滑る時よりお前等を捜す事に集中力が向けられるんだからなあ!)

シユノーケルが出ている所を見つけた真淵は、スピードを加速させて接近した

「バカめ!この俺を手こずらせたのは素直に尊敬してやるが、最後の最後で下らないドジを踏みやがって!それがお前等の敗因だあ!」

スタンドを出し、手を手刀の形にし、氷ごと叩き壊す勢いで振り下ろした

手刀は氷にぶつかり、氷を破砕

出来なかった。手刀は確かに氷に当たっているのに、水面を覆う氷は一センチもない筈なのに

氷には、『罅一つ入っていなかった』

「僕の『カスタム・マシン』は、物の機能を停止させる能力……これを使い、水面を覆う氷を衝撃で破壊出来ないようにした……」

自分の後ろから声がして、振り向くと、そこには風間トオルと、涙目で頭をさすっている藤方母花の二人がいた。後ろには、二人共自分のスタンドが立っていた

「き……貴様等」

「うー……頭痛いわ……瘤になつとらへんかな……」

「よくは分からないけど、普通に立てて普通に動けるんならあまり大した事無いんじゃないんですか？それでも心配なら早く診て貰いましょう」

そう言ってトオルは真淵に指を差す

そして、力強くこう言った

「こいつを倒してからね」

プール騒動？（後書き）

取り敢えず次回決着の予定です

塩屋君がメインで活躍しました。プールは水だらけだし、彼ならその能力をフルに使えると思って

それでは、また次回！

プール騒動？（前書き）

温水プールでの戦い決着！

ブル騒動？

「倒す……俺を？やってみるよ」

トオルは近付いて『カスタム・マシン』を出し、真淵に殴りかかる

真淵は『パッション・ピット』を出し、『カスタム・マシン』の攻撃を防ぐ。そして、空いている手でカスタム・マシンの顎を殴りつける

拳が当たる直前でその間に『スウィートハット』の手が割り込み、パッション・ピットの拳を掴む

その拳をがっしりと握り、力任せに放り投げた

真淵は落下予定地点に油を吹きかけ、衝撃を和らげ、即座に立ち上がる

立ち上がりきる前に、頭上に拳が通った。人間のそれではなく、スタンドの物だ。後ろを振り向いてみると、『タイト・コネクション』がいた

「そう言えばコイツもいたな……」

『グガジャアアア！』

真淵に拳を振るうタイト・コネクション。真淵は『パッション・ピット』の油を、タイト・コネクションの拳にかける。それにより拳は、真淵に当たったとしても滑つて的中しなかった

そしてパッション・ピットは油を『カスタム・マシーン』と『スイートハット』にもびっちょりとかける

「どうだ！お前等のスタンドは人型だ！人型のスタンドは大抵対象を殴ったりして能力を発現させる！こうなった以上お前等は能力を使えないし殴ろうが蹴ろうが貴様等は俺にダメージを与える事すらも出来ない！俺の勝ち……」

「あんた年上やけど一つ教えたるわ。そういう勝ち誇った台詞は、実際に勝った後に言うもんやで……トオル君、ちよい痛いけど我慢してや」

『スイートハット』の超音波で『カスタム・マシーン』、『タイト・コネクション』、真淵にかかっていた油を吹き飛ばした。真淵とトオルは体に幾つか傷を追う

(超音波で……油を吹き飛ばした……やばい……『逃げる』！)

足場に油を敷き、それに足を乗せて滑ろうと

「あれ？」

足は、足場となってる氷についていない。それどころか、下を見ている自分の視野が少しだけ広まった気がする

いや、気のせいではなく紛れもない現実だ。そして心当たりがある天井を見上げてみると、鵲のスタンド『スパイダー・バレエ』が真淵の真上にいた。糸は自分へと伸びている

『タイト・コネクション』と、『カスタム・マシン』を後ろに出しているトオルが、じたばた足掻いている真淵に近付いてくる

「わ……悪かったよ……俺は人を偶然を装って傷付けるのが好きだけで、本当は刑務所で一生を終えても良かったんだがスタンド能力を大々的に試したくてあのガキの口車に乗ったんだ……分かったよ自首するよ。俺は刑務所の中で満足していれば良かったんだって今思い知ったよ……信用出来ないなら簞巻きにしても構わないから……」

汗を垂らしながら必死で弁解するも、タイト・コネクションとトオルはジリジリと近付いてくる

そして、射程距離に入ると、ピタリと止まる

「あ……あのね君達、俺もう戦意とか無いんだよ……それなのにト

ドメを刺すの？駄目じゃんかそんなの、軍隊だって降伏した敵軍を……」

「もう何も喋らないで下さい……もうあなたの口からは何も聞きたくないから……歯を食いしばっている！」

「ああ……うわぁ！」

『カスタム・マシン』と『タイト・コネクション』のラッシュが真淵の体に叩き込まれた

スタンド名：パッション・ピット - 本体：真淵悠智 - 再起不能。
再び刑務所に収監され、独房に死刑執行のその日まで監視付きで投獄される事となった

風間トオル、佐藤マサオ、藤方莓花、塩屋常陸、鵜三ツ葉 - 真淵を警察に引き渡した後、閉館時間になるまで貸切状態となった温水プールで遊びまくった

To Be Continued…

午後九時、藤方莓花は北海道にいる仲間到现在今日あった事を伝えていた。相手は琢磨だ

『そうですねか……その様な事があつたんですか……』

「まあな……楽しい筈のプールなのにめっちゃ疲れたわ……」

余談だが、その疲れの主原因は、あの後休みなくプールで泳いだり足漕ぎアヒルさんボート（レンタル用品）を全力で漕いだりして遊んでいた為である

「そつちも大変やな、行く前と土産物屋でスタンド使いと遭遇するなんて……」

『こつちも心配は要りませんよ。それより気を付けて下さいね。貴女達の力を低く見ているつもりはありませんが今春日部には……』

「分かつとるよ得体の知れへんスタンド使いが何処にいてもおかしくない言いたいんやろ？それよりウチもう眠りたいんよ……ウチがかけといて何やけどそつち用件伝え終えたんなら切つてええ？」

『ええ……スタンド使いにもですが体にも気をつけて下さいね』

「莓花ちゃんは何の用だったんです?」

受話器を本体に置いた僕に、咲良君が話し掛けて来ました。隠す事も無いので事細かに説明しました

「向こう(春日部)も大変ですね」

「そうですね……」

そんなやり取りをしていると、しんのすけ君が部屋の中に入ってきました

何の用か聞いてみると、しんのすけ君は即座に枕を掲げました

「枕投げしよう」

「……何故に?」

「いやあ何か寝付けないし、それに枕投げは修学旅行の定番だって聞いた事あるし」

「僕は修学旅行で来ているんじゃないしそれは『定番』というより『御約束』と言った方が宜しいのでは無いのでしょうか?」

「ノリ悪いなお兄さん、みんなやる気だよ?お父様は新作の高層ビルを寝ている所だけだ」

どこから「お父様と呼ぶな」と聞こえてきました

……しんのすけ君、ビルは余計です。この場合の『こうそう』は漢字で書くと構想こえです。そして「寝る」ではなく「練る」です

……困りました。時間的にまだ起きていてもおかしくはありませんし、何より子供の頼みが無碍に断るのもどうかと思いますが……

今は疲れていて正直早く眠りたいです

「仕方ありませんね。十分だけです。それに君も今日の疲れを残さず朝を向かえたいでしょ？」

因みに、翌朝目覚めるとしんのすけ君の部屋にいました。話を聞いたら始まって七分後、僕に枕が複数当たり、それで眠ってしまったようです。それ程僕は疲れていたのでしょうか？それとも今まで何処かで溜まっていた疲れが噴き出したのでしょうか？

兎も角僕は、これ以上無いくらい爽やかな気分朝を向かえる事が出来ました

プール騒動？（後書き）

次回からは北海道に再び視点が向けられます

次回もお楽しみに

鶏がいつぱいついて来る!?(前書き)

旅行二日目の除夜達

鶏がいっぱいいついて来る!?

北海道旅行二日目

俺は現在「札幌の料理屋という料理屋のメニューを制覇するぞー」と意気込み、実行している稲庭と一緒に中華料理屋にいた

土産物屋の件もあり、万が一の為俺の提案で今日はスタンド使いは最低二人一組で行動する事となった。しんのすけはバツの悪そうな顔をしていたが、提案の意図をきちんと理解している為か、文句は言わなかった

俺が稲庭と一緒にいるのはくじ引きの結果だが、何でくじ引きで組決めする事を思い立ったのだろうと後悔していた。店員や客の視線が痛い……

皿に乗せられていた大盛炒飯を食べ終わると、レジへ向かった

「稲庭……食欲旺盛なのは結構だが少しは自重してくれ。頼む」

「えー」

困り顔となって頬に指をつけ、首を傾げる。仕草は可愛らしいのだがテーブルの上の大量の大皿や丼を見るとそんな感情が湧き出ない

次の店に行こうと俺の腕を引っ張っている稲庭に、若い男が声をかけてきた

「いやー、まさか声をかけられるとは思わなかったよ……」

「ああ、本当にな……」

居酒屋で煮付けを摘みながら、先程あつた事を談笑する俺達

稲庭に話し掛けて来た男は芸能事務所のスカウトマンだった。スカウトだと理解した時当人は少し困惑していたが、札幌には旅行で短い期間いる事と何か恥ずかしいからという理由で断った

余談だが俺は右頬に平手の痕がある。これは芸能スカウトと聞いた時、「食品コーマーシャルに使えるモデルを捜していたんですか？」と頭によぎった事を言ったら、こいつにひっぱたかれた。ヒットした時、スツゴいい音が響いた

「あの……すみません。一つお願いがあるのですが……」

俺達に、金髪のショートに鳶色と青のオッドアイに、紺色のブレザーの上に裾が腰まで伸びた、半袖の白衣を着込んだ俺達と同じくらしい少女が声をかけてきた。その手には、少し古いタイプと思われるポラロイドカメラが握られている

「何の用ですか？」

「あ、いえ、ちょっと写真撮らせて貰いませんか？趣味で写真撮影しているんです」

カメラで写真撮影か……おかしくはないが、今時珍しいな

別に断る理由も無いので、俺達はその子の頼みを聞いてあげる事にした。撮った写真は三枚。二枚は俺と稲庭別々、一枚は二人一緒に撮った写真は、素人の俺から見ても中々の物だった

稲庭は彼女に「一緒に話そうよ」と誘った。あまりにもしつこいので止めたが、彼女は苦笑いして了承した。すみません……本当に

場所を変えて近くの喫茶店に入った俺達は、手近のテーブルに座って適当な物を注文し、和気藹々と話し合った

余談だが、彼女（名前は梶本雪那かじもと ゆきな）と言い、俺達より一歳年下という）は紅茶とケーキ一つ、俺は玄米茶とお汁粉一杯で、稲庭はメニューに載っている物を片っ端から大量に頼んでいて、店員を驚かせていた

「上手いな、もしかしてその趣味始めたの長いのか？」

「いえ、趣味での写真撮影は今日から始めたんです」

「何で瀬上君に声をかけたの？」

「いえ、最初は写真映えする人のがいいかなあって思って……」

そのお眼鏡がかなったのが俺って訳か

そう言えば、俺時々外人とかに間違われるけど俺の造形って、日本人離れしているのかな？

「瀬上君みたいなのタイプが好みなの？」

「いえ違いますよ。ただ……」

「ただ？」

「いえ、何でもありません……」

「『趣味で始めたのは今日』って言ってたけど、写真自体は何時頃からどういった経緯で始めたんだ？」

「大学で研究の為」

「へえー……大学？」

話を聞くと、彼女の両親は父親の仕事の都合で母親が彼女を身ごも

っている時にアメリカに渡り、十四年近くそっちで住んでいたという
彼女はそこで飛び級を重ね、十二歳で大学を出たという。因みに写
真を始めたのは大学で専攻していた鳥の生態調査や研究の為らしい

「ヘースゴいねー」

「頭でつかちなだけですよ」

「ふーん……」

俺的には飛び級自体充分凄い事だと思いが、彼女にとっては嫌味と
かでなく本当に大した事ない事なのだろう

彼女は紅茶を半分口に入れると、俺に顔を向けた

「まあ私の話は置いて……貴方の名前、『瀬上君』と言われて
ましたけど……」

「俺のフルネームは瀬上除夜っていうの。除く夜と書いて除夜」

「出身地は？」

「埼玉県春日部市」

「ふーん……」

「いや、どうしたんだお前？何でそんな事いきなり……」

「いえ、別にお気になさらないで下さい……それで、何で札幌へ？」

「友人の友達が誘ってくれた祭が予期せぬアクシデントで台無しになっちゃって……それでその友達から旅行に誘われたから」

嘘は言っていない

俺が質問に答えると、梶本は椅子から立ち上がり、出入口へと足を運んだ

「すみません……今お金の持ち合わせ無いです……」

「ああいいよ俺達が無理強いたんだから、こっちが持つよ」

流石にそこまで迷惑をかけるつもりはない

「そうですね……ありがとうございます」

そう言って梶本は店から出て行った。俺達も会計を済ませ、出て行った

余談だが、俺達が出て行った後、店員が閉店の看板を出したが、稲庭^{いとう}と食事に出掛けた時はほぼ必ず見る光景なので何とも思わなかった

タクシーの中

「お客さん、嬉しそうに鼻歌を歌っているが、何かいい事でも？」

「ええ、少しね……」

クスクスと笑う梶本

喫茶店から出て行った梶本は、あの後タクシーを呼び、一度家に帰ってお金を取り、郊外近くの養鶏場へと向かっていた

そこで、有精卵を沢山買い込み、自宅へUターンする

自室へ買い込んだ卵を持ち込み、タオルで顔を隠し、マットを敷いて卵を並べた

「産まれる！『ニューロティカ』！」

並べ終わると、一斉に卵に罫が入り、孵化した。勿論通常は有り得ない

卵から孵ったのは鶏の雛ではなく、上半身は緑、下半身は紫色を基

調とした羽毛が生え、細長い嘴には小さな歯が並んでいる、歯車の
ような鶏冠が四つ並んでいるヒヨコと同じ大きさの人型の怪物だった

「みんなよく産まれましたね……」

『ビィ、ビィ』

『ビィビィ』

「うるさくしないで……近所迷惑になるから……君達にはこいつを
追いつけて貰いたい……」

ポケットから除夜一人が写っている写真を取り出し、上手く怪物全
てに見せる。怪物達は、けたたましく鳴いた

怪物達が立ち上がると、梶本は部屋の窓を開ける。怪物達はそこか
ら一斉に飛び出していった

「頑張つてね……」

全員部屋から飛び出ていったのを確認すると、再び卵を並べ、怪物
を孵化させた

鶏がいつぱいついて来る！？（後書き）

梶本雪那はスタンド使いです。スタンド名はキング・クリームゾンの
楽曲から。写真を見せた理由は次回詳しく書きます

それでは、また次回

鶏がいつぱいついて来る！？（前書き）

運命は、休む事を許さない

鶏がいっぱいいついて来る！？

二度目に孵化させた怪物 - 『ニューロティカ』達にも除夜の写真を
を見せ、一羽に発信機をついた足輪をはめ、窓から飛び出ていくの
を確認すると、孵化させた殻を捨て、残りの有精卵を割れないよう
にマットや座布団に包み、それを非常用リュックサックやビニール
袋の中に詰めた

「さて行くか…… 『ニューロティカ』は対象とした者を何処までも
追い掛けるけど私にも今何処で何をしているのか分からないもんね
……」

本当に私に凄い能力をくれたものだと、梶本は『彼』に感謝した

(四ヶ月前、鳥の簡単な分布調査で日本中を回っていた頃に春日部
に寄った時、怖いお兄さんにいきなり『矢』で攻撃された時は心底
怖かったけど傷はすぐに治ったし……)

その後に、彼は同じ事を様々な人間にして回っているというのを、
何故こんな事をしているのかという事を、そして、自分に目覚めた
能力が何なのかを教えてくれた

自覚したばかりの時は流石に戸惑ったが、知れば知る程この能力が
自分の中にあつたという事に喜びと嬉しさを感じるようになった

最初の頃は鳥の住処を調べるとか、そういった事に使っていたが、昨日ふと人間に試してみたくなり、今日誰かをターゲットとする為に写真を撮りたいと思い付いて街に出たら、『彼』が言っていた「瀬上除夜」と外見特徴の似ている人を見掛け、もしやと思い声を掛けたら本人だった。何故タイミング良く彼がいたのかは分からないが、自分の能力を試すのに不足は無い相手だ

（有精卵を媒体として生まれ、有精卵のある限り何度でも、幾らでも生産が可能で、最初に見たのが物ならそれをそのままターゲットとし、最初に見たのが動物の顔や身体の一部ならその動物の現在地を本能で理解し、自動追跡を行う……『ニューロティカ』は何処まで瀬上除夜に通じるのか、そして瀬上除夜は『ニューロティカ』に何処まで通じるのか、楽しみだなあ……）

発信機からの信号を頼りに、梶本はそこへ駆け足で向かった

郊外近くの公園

そのベンチで、俺と稲庭はジュースを飲んでいた

少しお腹に溜まってきたから休ませるといふ意味合いで……

「何見つめてるの？」

俺の視線に気付き、訊ねる稲庭

「いや……お前にもちゃんと食うのに限界があった事に安心感を覚えただけ……」

そう素っ気なく答えると、前方の茂みからガサゴソと音がした。狐とかの野生動物か雉みたいなの野鳥だろうと思いい、気にもとめなかったその姿を見せるまでは

『コケエ……』

『ココココココココココココ……』

小学校高学年程の大きさの、羽毛や嘴等、鳥の特徴をもつ人型の怪物が現れた。しかも次々と同じ姿をしたのが現れる。その数ざっと百以上

その怪物達は更に現れ、あっという間に俺達を包囲した

「二日目の午前中に……どうやら神様って奴は俺達をこの旅行をのんびりとした楽しい思い出にさせたくないらしいな」

俺は『プラネット？ルビー』を出して戦闘態勢に入る。そして、真正面にいる奴にジリジリと近付き、射程距離に入ると同時に拳をぶち込んだ！

打ち込まれた拳はそいつの顔にめり込み、後ろに吹っ飛ばす。後ろにいた仲間も、巻き添えで何羽か吹っ飛んだ

巻き添えを食らった鳥はすぐに立ち上がる。俺がパンチをその顔に叩き込んだ鳥も、何事も無いように立ち上がった。そいつは顔面にプラネット？ルビーの拳の跡があり、目が飛び出ているにも関わらずだ

「何なのこいつ等」

「分かりきってるだろ？スタンドだ……『群生型』で『実体を持つている』……殴った感触で分かる。あの触感は何れもなく動物の肉体を殴ったそれだ……そして、あの不死身さからまず間違い無く『自動追跡型』のスタンドだ……」

「不死身さ？」

「そして何等かの方法によって特定人物の追跡をするスタンドだ……よく観察してみる、こいつ等は俺『のみに』目を向けてる……証拠見せようか？」

屈んで足下にある砂利を拾い上げ、真上に放り投げる。それを『軸』

とし、上空へ瞬間移動する

鳥達は一齐に、上空にいる俺へと顔を上げた。そして、特徴的な歯の生えた嘴を開く。その啞内から、赤い光弾が放たれた

俺はポケットの中のティッシュを横に投げ、射程距離ギリギリの所で瞬間移動し、着地する。先程俺のいた場所に、一齐に放たれた光弾がぶつかり合い、相殺された

「瀬上君！」

「来るな！」

駆け出して近寄ってきた稲庭を、言葉で制した

「分かっているだろ！遠隔自動操縦のスタンドを本当に倒すには本体を叩くしか方法は無いと！だからお前は本体を捜す事に専念しろ！本体の目星はついていてる！十中八九さつき会った梶本っていう女だ！」

「ちょっと瀬上君……でも……」

「何も言わずに従ってくれ！俺は本体を捜す事は出来ない！これはお前しか出来ない！俺の事を心配しているのなら本体を早急に捜し出してくれ！」

少々戸惑っている様子だったが、本体を捜す為、公園から出た

（だが真面目な話、どれだけ持てばいいんだ？こんな数相手に……二十分？三十分？そもそも稲庭が本体を捜し出すまで俺は……）

マイナス思考となった自分の頬を叩いた

（あんな大口叩いといて何簡単に気弱になってるんだよ俺は……あいつは俺を信じたから俺の言う事を聞いてくれたんだ。だったら俺の役目はそれまで持ち堪える事！勝つのはあいつの役目！）

再度嘴を開き、光弾を発射する。間近にいたスタンドを瞬間移動させ、盾にした

全弾がそのスタンドに着弾したと同時に、俺は前へ駆け出した。鳥達は再度光弾を発射しようとする

俺は発射される前にギリギリまで真正面のスタンドに接近し、背後へ瞬間移動。そして、嘴をスタンドで掴んで閉じた

光弾が発射されると同時、嘴を閉ざした鳥の頭部は爆発した。フィードバックで両手首に傷を負う。その傷は思った以上に深刻で、指が何本か折れていた

正直痛いはまだ軽傷の内だ。これしきの傷に今構ってる余裕はないし場合でもない

無理矢理拳を握り、発射された他の光弾を弾くも、数が多過ぎて全てを防ぐ事が出来ず、右腕に四発、胴体に六発食らった。腕に食らった時は、腕が吹き飛ぶかと思った

まだ左腕は残っているし俺自身もダメージはまだ致命的なレベルじゃない。それに俺の役目は『堪える』事だ。こんな怪我でへばってどうする

そう自分に鞭を打ち、スタンドを向かわして鳥を叩く。気のせいか、スタンドのスピードが少しばかり速くなっているような感じがした

(全力で戦えるのは後数分が限界か……それまでにこいつ等をせめてまともに動けなくし……)

上空から何かが羽ばたいて降りてきた。それはこいつ等と同じ姿をした怪物達だった。つまり増援。その数目測で凡そ五十くらい

そいつ等と共に鳥達は俺に顔を向け、嘴を開いた

横から、『大型トラック』が俺を横切り、それは俺の盾となり、鳥達に激突。トラックは炎上し、爆発。鳥達の半分近くはそれに巻き込まれ、バラバラとなった

「こつちに来て体を温める意味で始めたジョギングをしている途中

気のせいかな懐かしい顔を見たので確認の為にUターンしてみたら……
…他人の空似とかさういったものではなく本当はここで会えるとは
露程も思ってたなかった『姉の中学時代の友人』に会うとはね……」

四ヶ月程前までよく聞いていた声が、公園の入口の方向から聞こえたのでそちらを振り向いた

そこには、長めの白髪に（その人物の年齢で考えたら）平均よりやや低めの身長、黄色のバイザーを装着し、首に太い鎖をかけ、皮革のブーツを履いた少年がいた

その少年の右手には、ラジオにあるアンテナの伸びたテレビのリモコンらしき物が握られていた

「何が起こっているのかよく分からないけど、お困りならばお助けしますよ？お兄さん」

バイザーを上げ、片目を瞑って笑顔を見せる

「金色の瞳は相変わらずだな……」

「こればかりは生まれつきだよ……」

鶏がいつぱいついて来る！？（後書き）

『ニューロティカ』はスタンドの元がある限り大量生産が可能なスタンドです。有精卵が本体の手元にあれば幾らでも産み出せます

最後の方に現れた少年の正体は次回明かします

それでは、次回もお楽しみに！

鶏がいつぱいついて来る！？（前書き）

ピンチの除夜の元に現れた少年。その正体は？

鶏がいっぱいいついて来る!?

「ここまで喋っておいて今更な質問をするが……勝海……お前は俺の友人の比留川純恵の二つ年下の弟、比留川勝海だよな?」

「そつだよお兄さん」

手に持っているリモコンを弄りながら笑顔で応える

「そう言えばお前等の母親の実家は札幌だったな……まあ、元気そうで何よりだ」

「そりゃどうも……で、一体何がどうなってるの?それにお兄さんの後ろにいるその『人みたいなの』とかその変な鶏とか、『僕の能力』と何処か似ているんだけど……」

勝海は『リモコン』のスイッチを押す

すると、空き缶の入ったくず入れが浮かび上がった。勝海が別のスイッチを押すと、くず入れは凄スピードで光弾を発射準備をしていた鶏の頭に激突。その鶏の頭の内容物が、くず入れの中の空き缶と共にぶちまけられた

他の鶏が動き出したので勝海は身構える

「大丈夫だ。こいつ等の狙いは俺で、こいつ等は俺しか狙わない。俺が囿になるからお前はこいつ等を倒してくれないか？てか倒してくれ、今のこの状態じゃ攻撃を避けるのが精一杯だ」

「……別に構わないけどお兄さん。何が起きているのか終わったら説明してよね」

リモコンで散らばった空き缶を操作し、一個一個を光弾の発射準備をしている鶏の口の中へ丁寧に入れていく。発射と同時に啞内に缶を詰められた鶏の頭部が暴発して吹っ飛んだ

一方稲庭は、『ニューロティカ』の本体の逆探知をし、そちらに向かっていた

逆探知といってもそこまで難しい事じゃない。公園へと向かってきた方角を逆に向かっていつているだけだ。自動追跡のスタンドは殆どが標的へと向かっていく事しか出来ないのだから、向かってきた方角を突き止めれば、まず間違い無くその先に『本体』がいる筈

「あーもー！何でみんな出てくれないのさ！」

本体のいる場所へと向かいながら、携帯で電話を掛けていた。掛け先は札幌にいる仲間達だ。だが、道中何度も掛けているにも関わら

ず、一向に誰にも繋がらない

仲間への連絡を諦め、一直線へ走る。途中で上空から翼を羽ばたかす音が聞こえたので見上げてみると、案の定自分の向かっている方角から『ニューロティカ』が飛んでいつていた

スタンドの大群を見た一般人の反応は無視し、必死に走った

俺は勝海に、『スタンド能力』に関しての簡単な説明と、この鶏のスタンドに襲われている理由を推測を含めて話した

因みに鶏共は勝海の協力のお陰で、一羽残らず地面に倒れていた。
勿論全て動かぬ体で

「成程……つまりこの『メタル・ミリティア』はその『スタンド能力』って奴なのか……」

「一応聞くが……札幌（札幌）で出来た知人や友人でそのリモコンが見えたり俺や勝海みたいな事出来る奴はいるか？」

首を横に振った

「そうか……詳しい話はまた後でちゃんとする。それより救急車呼んできてくれ。流石にこの傷はしんどい……」

「分かった。でも僕携帯持ってないよ？中学生だから親が持たせてくれないんだ」

「近くに公衆電話があったからそれに……いや、安心するのはまだ早過ぎたみたいだ……」

複数の翼を羽ばたかす音が、上空からまた聞こえた。百羽以上のあのスタンドが、公園に降り立った

そいつ等は俺に体を向け、口を開いて光弾を発射する。俺は瞬間移動でその攻撃を避け、勝海はくず入れやトラックの破片を操作し、そのままぶついたり先程同様唾内にぶち込んだりした

傷は痛むが、先程より冷静になっていた俺は、勝海の能力がどういった物なのかを理解した

あのリモコンで動かした物は、空き缶にそのくず入れ、そしてトラック

空き缶の原料は塗装を除いて『鉄』か『アルミ』、あのくず入れは『針金』で造られていて、車の主原料は様々な『金属』

つまり

「『金属を己の支配下におく』能力か……」

十中八九そうだろう

更に言えば、支配と言っても可能なのは『ラジコンのように動かす程度で、『変形』とか『爆発』とか、そういった事は出来ないのだろう。出来ていたらとっくにしてきているだろうからな

『コケエエエエ……』

『コココココ……』

残りの鶏共は俺に向けて光弾を発射する。瞬間移動で殆どを回避したが、俺の死角となっている場所からの攻撃は気付くのに遅れ、背中に着弾。能力は使わなかったがとっさに体を動かした為、思ったよりかはダメージは少なくて済んだ

「お兄さん!!」

「俺の事は気にするな!早く鉄とか動かして……」

「もうない!!」

そう言われて、見回してみると、公園にある金物は滑り台、ブランコとその囲い、後ジャングルジム等の遊具で、そのどれもががちりと地面に固定されている

空き缶やトラックの破片は既に使えるような物ではなく、くず入れもボロボロ（何度もぶつけ続けてきた為まあ当然といえば当然だが）しかも、スタンドはどんどんこっちに来て降り立って来てもいる

（今の所不幸中の幸いはこいつ等の目的はあくまで俺一人だけで本来無関係の勝海に目を向けない事……）

早く本体を叩いてくれ稲庭……正直何時限界迎えたとしてもおかしくないんだからよ

『ニューロティカ』が飛んできている方向にある壊れかけた廃ビルの屋上

そこで梶本は、有精卵を敷いたマットの上に並べていた。マットの隅に最後の卵を置こうとした寸前に、背後から音がしたので振り向く下の階へと続く階段から、擦り傷だらけで頭から血を流している稲庭が最後の段に足を乗せていた

「貴女は……確か瀬上除夜と一緒にいた……」

「その反応を見る限りやはりあの変な鶏の本体は貴女だったみたいね……」

「という事は……貴女も私や彼同様『スタンド使い』って奴？何でそんなにポロポロなの？」

「道中何度も転んでこのビル入って階段上っている最中にも一回頭から転んだ……」

「……大丈」

「大丈夫か？そんな訳無い……それでも倒れる訳にはまだいかない……理由は、彼は私を信頼して貴女を叩いてって言ったからね……その信頼に応えたい、ただそれだけだよ」

梶本はマットの上の有精卵を一つ持ち上げ、手に乗せる。稲庭も自分のスタンド『イザベラ』を出した

「へえー……随分可愛い姿をしたスタンドですね……」

卵殻に罫が入り、『ニユーロティカ』が孵った。その目は、稲庭をはっきりと捉えた

鶏がいつぱいついて来る！？（後書き）

除夜の友達の弟さんでした。まあ前回本人も口にしていましたけど
（笑）スタンド名はメタリカの楽曲から

今回は決着を予定しています。これからも宜しくお願いします

鶏がいつぱいついて来る！？（前書き）

ニューロティカ戦決着！

鶏がいっぱいいついて来る!?

稲庭の姿を見た雛鳥は、梶本の手から飛び降り、稲庭に向かっていった

雛鳥は凄まじいスピードで成長し、僅か三十秒足らずで公園に降り立った怪鳥とほぼ同じ大きさとなった。成長すると、嘴を開き、光弾を稲庭に向けて発射した

その攻撃を避けると同時、『イザベラ』の右腕が本体から分離し、それからミニサイズのイザベラが生まれる。それは稲庭に攻撃するニューロティカに引っ付いて頭上まで登っていった

(よし!これで攻撃の意思を拭き取る!そして本体である彼女を叩く……!)

ニューロティカは動きを一切止めず、稲庭に向かって光弾を放った。
『イザベラ』で弾き飛ばす

最初は何なのか分からなかったが、すぐに理解した

(そうか……私のスタンドが拭き取れるのは『実行に移す前の思考』だ……攻撃に移る為の条件が『プログラミング』されている自動追跡型には効かないんだ!)

つまり自分が彼女を倒すには、ニューロティカの攻撃をどうにかしながら接近して直接叩かないと駄目だと言う事だ

それも時間をかけるのではなく、すぐに決めないといけない。自分が今日の前のスタンドを相手にしている今も、彼女はスタンドを生み出し、除夜のもとへ向かわせているのだ

(私に出来るのは……これしかない！)

ニューロティカは稲庭に向けて光弾を発射する

稲庭は、それを避けようとせず、直撃した。が、足は止めずに突き進む

接近して腰に抱き付き、そのまま突き進み、飛び降りた！稲庭は『ニューロティカ』から手を離し、自分のスタンドを出して縁を掴んだ
落とされたスタンドはそのまま地面に激突し、潰れた。稲庭は這い上がって梶本に駆け寄る

「あ……貴女正気なの？一歩間違えれば……」

「正気よ……無駄だと思うけどいっぺん言っとく……スタンドを解除しなさい。言う事を聞いたら私は何もしないから」

梶本はニヤリと笑い、ポケットから卵を取り出し、孵化させた

稲庭は手に乗ったニューロティカの雛鳥を払い落とし、イザベラで潰す

「悪あがきしないでくれる？あたしのスタンドは近距離パワー型だからこの距離だと貴女のスタンドよりかは分があるわよ」

「確かに『この距離じゃ貴女のが分がある』……だったら簡単だ！距離を取って『ニューロティカ』を大量生産してやる！そして貴女を敵だと刷り込ませて……！」

有精卵の詰まったりリュックを持って距離を置こうと走り出した。稲庭はそれを見ているだけで、何もしようとしなかった。当然梶本は疑問に思う

「何してるの？止めないの？」

「あんたがこう出るっていうのは分かっていた……どの道あんたに『勝利』はもうない！」

最初のはったりかと思っただが、それにしても言葉に自信が満ちていた梶本は威圧されるも、距離を取り、卵を取り出そうとリュックに手を入れた

中から、「グチャ」という音が聞こえた気がした。手に触れている物は何処か湿っぽい

リュックを見ると、染みが付いていた。それも何処か『黄色かった』まさかと思いい中を確認すると、リュックの中には小さな『イザベラ』と、『割れた卵の殻』があった

「あんたの『ニューロティカ』……だっけ？それは「卵が手元にある限り幾らでも作る事が出来る」……それ、逆に言えば「卵が手元に無ければ作る事が出来ない」っていう事だよな？」

「そうだけど、でも何時リュックに分裂させたスタンドを私に気付かれずに潜り込ませ……！」

梶本は気付いた。イザベラ本体の右腕が、『未だに無い』事を。そして思い出した。右腕を「何時分離させた」のかを！

「まさか……飛び降りたのは……！」

「そうだよ。貴女の意識を私に向ける為。と言っても最初からそのつもりだったんじゃないかあのスタンドに抱き付いた時思い付いたんだけどね……まあこれで貴女は無力ね……」

稲庭はジリジリと梶本との距離を詰めている。梶本は戦慄していて、

腰が抜けていた

「数発殴るだけで勘弁してあげるから歯を食いしばりなさい……」

「ヒ……ああ……」

稲庭の拳が、怯えきつた梶本の顔面に入った

植栽されていた木を引っこ抜き、それを振るって『ニューロティカ』に叩き付けた

「これでラスト……」

どうにか全てのスタンドを倒した俺達は、飛んできた方向から新しいスタンドが飛んでこない事を確認すると、勝利を確信した

戦場となったこの公園には、遊具だった物が散らばり、スタンドの亡骸が転がっていた

「稲庭もどうにかしてくれたいだな……勝海肩貸してくれ。病院行く」

「救急車呼んだ方が……」

「待っている間に警察が先に来る可能性がある。もし来たら俺達はまず確実に職質される。そうなたら色々面倒だ」

納得した顔をし、肩を貸してくれた。病院へ行く前に公衆電話で稲庭に自分の行き先を告げ、そこで一度落ち合う事にした

病院で治療を受けた俺達は、新垣のいる病室（他に患者はおらず、個室状態）に集まった（新垣が入院している病院と俺達が治療を受けた病院が同じだった）。新垣の病室に集まったのは、新垣と戸河内にも詳細を知る権利があるからと思ったからだ

因みに俺も稲庭も通院こそは必要だが入院する程の傷ではない事だった

俺は手始めに自分達の知る限りの『矢』の知識と、誰が何の為に春日部でスタンド使いを増やしていたのかを説明した

「……意外とショックが少なさそうだな、勝海……」

「まあ……半年近く前優太君の家に勉強を教えて貰おうと行った時、帰りにおまじないと言って掌を変な『矢』で軽く刺されて、その日から金属の支配が出来るようになったから……」

それならシヨックが俺達より比較的少ないのも納得だな

「取り敢えず四人共自分の連絡先を紙に書いてくれないか？春日部から札幌まで距離があるからお互い簡単に顔は出せないが情報交換はしておいて損は無いだろ？」

「大丈夫だよお兄さん。僕GW明けたら春日部に戻るから」

「ハア？ちよつと待て！何で戻るんだ？」

「両親が仲直りしたから」

「別居の理由は？」

こいつの両親はとても仲が良かったが、四ヶ月程前突然母親が勝海を連れ出して実家に帰ってしまった、事実上の離婚となってしまった

こいつの姉に理由を聞いたが、「理由は恥ずかしくて言えないから聞かないで」と言われた為、追求は一切しなかった。他人の俺達があーだこーだ言っても解決しないだろうし……

それ程険悪だったのに、だった四ヶ月で簡単に仲直り出来たのは納得がいかなかった

「それがさ、四ヶ月前デザートでパイナップルを食べただけどさ……まあ缶詰めだけど……均等に分けて三枚余って、それを父さん

が三枚共食べちゃったんだ。それで喧嘩が始まって……」

「……………理由そんだけ？」

「うん」

それがいい大人の、それも人の親のやる喧嘩か

梶本雪那（スタンド名ニューロティカ） - - 再起可能

比留川勝海 - - 荷造りをする為に帰宅した

稲庭早良 - - 新垣の見舞い品を全部食べ、それで新垣と喧嘩になった

瀬上除夜 - - 稲庭を諫めた後、別荘に帰った

TO BE CONTINUED…

鶏がいっぱいについて来る！？（後書き）

勝海の両親の別居理由は幾つか考えてましたが、妥当な所でこれにしました

次回から他の班にもちゃんと視点向けます

次回もお楽しみに

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？（前書き）

梶本を撃破した除夜達

だが魔の手は除夜達だけでなく……

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？

五月二日、時刻は午前4時を少し過ぎた頃

場所は函館

数十人の警官が、ヘルメットを被って盾と警棒を持って、一人の男を囲んでいた

「お巡りさん……何もしていない人に対してこれは少しオーバーなんじゃないですかい？」

男は、余裕な態度で自分を取り囲む警官達にそう言う。その態度が癪に障ったのか、リーダーらしい男が怒鳴りつけた

「お前は刑務所から脱獄しただろう！どうやって函館こくまで来れたか知らんが、今日お前を再び檻の中へ戻してやる！」

男は、鼻で笑って先程と変わらぬ態度で言う

「どうやって来たか？普通に青函トンネルを使ったに決まってるでしょ？脱獄をするという事は、自分達が思い付き、自分達の出来る『捕まらない方法』を……いや、いいか……もう俺は警官如きに逮捕される事は無いのだから……」

「えらい自信だな。この状況で逃げられると？」

「逃げられるさ……なあアンタらに一つ訊ねるけどさ……追いかけ
つこで自分が追われる側だと想定して、追う側の追跡を上手く逃げ
られる一番有効な手段って奴を知ってる？」

「さあ……それより痛い目に遭いたくなければ両手を前に出せ。抵
抗しないのであれば逮捕だけで許してやる」

「優しいなアンタ……アンタ気に入ったよ。すぐに家に帰りな。そ
うしたら今日の朝肉親や友達に無傷で会えるよ？」

男は『水の入ったペットボトル』を出し、キャップを開けて中身を
右手にかけながら、その余裕の態度を崩さず言う

警官達は男に迫る

「警告はしたぞ……」

突然、熱した石や鉄に水をかけた時に生じるそれに近い音が複数聞
こえ、男の一番近くにいた警官達が倒れた

「おいどうした！何があった！」

「……お前……何をした？」

「……教える義務も義理も無いね……まあ後で思う存分考えてくれ……死んだら幾らでも時間がある訳だしな」

無数の叫び声が、その場に木霊した

そこに残っていたのは、『カラカラに渴いた多数の警官の死体』だった

「うん、うん……はい分かった。そんじゃ」

「稲庭さんは何て？」

「うん、何でも目的達成まで後少し時間が掛かりそうだから昼食みんなで食べられそうに無いって」

「……彼女の消化器官って本当に人間のそれなんですか？」

「……自信ないけど、そうだと思う」

僕の質問に、宝来さんは苦笑いをしながら応えました

僕（須藤琢磨）は宝来さんと組む事となり、札幌の名所を回りました。それが終わった時ちよっどいいタイミングで稲庭さんから電話が掛かってきました

後で聞いたら、その時スタンド使いを倒してその時に生じた戦闘による怪我の治療に病院へ向かっている途中だったそうです

「それにしても除夜君も人が好いですね。一緒に行動しているとはいえ、食べ歩きに付き合うなんて……」

「そうね……」

「あの、宝来さん。除夜君今居ないし、思い切って訊ねたい事があるのですが宜しいですか？」

「何？須藤さん」

「これは僕の好奇心からの質問であってそれ以外の何でもないという事を前提として聞いて下さい」

「質問なんて大概そんなもんでしょ？そんな事改まって聞くような事じゃないじゃない」

「では単刀直入に訊きますが……」

「宝来さんは除夜君の事好きなんですか？」

「え、えっと……何を聞いているの？」

顔を赤らめながらそっぽ向いて聞き返しました

「先程も述べましたが単なる好奇心です。答えなくても宜しいですよ？ただの質問なのですから」

「何でそんな事思っただの？」

「いや、宝来さんは除夜君の事何時も気にかけてますし……他にも色々あるんですが、少なくとも「友達以上の好意」を寄せているのは確実だなと思ってます……それで愚直に恋心を抱いているかなと思いいこの質問をした訳で……答えてくれなくて構いませんし誰にも言いませんよ」

少し悩んだ後、顔を俯かせて応えてくれました

「正直……よく分からない」

「そうですね」

「反応それだけ？」

「言ったでしょ？この質問はただの個人的な好奇心だって。答えてくれるならそれもよし、答えてくれないならそれもよしといった感じで聞いたんですから……一応これでも貴女より四年長く生きてるので分かったような事を言いますが……自分の気持ちをハッキリ

させて、どんな答が返ってこようと構わないという覚悟と、望まぬ答が返ってこようと少なくともその人の前では平然としていられるくらいの意志が出来たら、相手にそれを伝えればいいと思う……生半可な気持ちや押し付けの愛情は相手は勿論自分にとっても絶対幸せじゃないって事はそういうのに疎い僕にも何となく分かりますから

「確かに……」

僕は手を二回叩きました

「それじゃこの話はこれで終わり。僕で良ければ何時でも話に乗りますよ」

パチパチパチと、誰かが拍手する音がしたのでそちらを向くと、『男』がいました

黒の地に蠍座の配置に金色のビーズが取り付けられたYシャツの上に無地の白い肩掛けを羽織り、草鞋を履いている、前髪を脱色した黒髪に人の指を模したプラスチックだと思われる装飾のついたピアスを右耳につけた男が、水の入ったペットボトルを右手で弄っていたのでした

この男とは初対面ですが、僕はこの男の顔を知っています。そう、こいつは……

「いい事言うね君……あれ？何でそんな警戒してんの？まだ何もしてないのに……」

「『まだ』って事は何かをするつもりなんですよ？刑務所から脱獄した死刑囚の一人の……『長篠京都』ながしのみやこさん？」

「あら？俺の名前知っていたんだ……」

「何故貴方が札幌にいるんです？他の方々同様埼玉にいるものかとはかり思っていましたよ……」

「何故って……生まれ故郷に帰るのに理由が必要なのか？警官じゃないってのは何となく分かるが……俺を追う者である以上生かしておく訳にはいかないな……」

長篠はキャップを外し、中身を街路樹の根元に注ぎました。水分が蒸発したかのような音がすると、水を掛けた街路樹は、枯れていました

長篠の足元には先程彼が街路樹に掛けた水が動き、僕達に向かってきました。スピードは無い為簡単に避ける事は出来ましたが、僕達の後ろにあった街路樹に触れ、その街路樹を枯らしたのでした

「俺のスタンドを取り付かせた水はな、物体に触れるとそれに含有されている水分を根こそぎ奪ってしまう！それが俺の能力『ホーリー・ウォーター』！」

高らかに、彼は自分の能力名を口にしました

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？（後書き）

宝来は除夜と一緒にいて悩みを聞いたりする事多いんで少しだけ…
…因みに本荘や勝海も琢磨同様気付いてます（笑）

新たな脱獄囚長篠。彼が何をやったのかは次回判明します。スタン
ド名はバッド・カンパニーのスタジオアルバムから

次回もお楽しみに

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？（前書き）

脱獄した死刑囚、長篠のスタンドが、琢磨と宝来に迫る

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？

水分。それは生物がその生命を維持する為に必要不可欠な物

絶食した状態でも、水の有る無しで生きられる期間が大きく違う

人体を構成する成分も大半が水であるし、クラゲのように九割以上が水分で出来ている生物もいる

生物だけでなく、オパールとかの宝石にも水分が必要な物がある。水分の重要性がこれだけで充分分かる

「宝来さん……彼が何をして警察に捕まったのか覚えてますか？」

「殺人と……」

「誘拐及び殺人及び死体損壊……あの男は子供を連れ去ってはその子供を殺してミイラにして『薬』として通販で販売していたんです……その人数は明らかになっただけで二十人以上……」

「その何が悪いんだ？ミイラは昔漢方でも薬として使われていたんだぞ？俺はそれを現代で行っただけだ」

「ミイラって薬としての効能あるの？」

「そういう学問の知識はないので分かりません」

「俺も知らねえ……多分無いだろうな……だが、アフリカやアジア

で角目当てのサイの密猟が行われていてその角は薬として使われる
そうだが……まあ全部が全部そうじゃないだろうが……それって本
で読んだが爪を食べるのと同じらしいぞ。それが判明して尚サイの
角に効能があるって本気で信じてる……言い伝えとかに縋る馬鹿っ
て言うのは何時の世にもいるものだ……他にも昔の中国の皇帝の中
には不老不死になりたくて水銀飲んだと聞いた事もある……無論中
毒で死んだそうだが……ミイラを原料とした薬も『需要』があつた
から『供給』してあげただけさ」

『ホーリー・ウォーター』は僕達に襲い掛かって来ました。僕は『
SHUFFLE』を出し、水の殆どを持っていきました。残ってい
るのはマグカップ半分程度の量です

「へー……やはりスタンド使いたったか……最近ミイラを燃料とし
て売り出そうと考えていてな……お前等を干からびさせて渴いたミ
イラがどれくらい燃えるか実験してやるよ……」

蒸発する音が後ろから次々に聞こえ、振り向くと、道沿いに並ぶ街
路樹及び下に生えている草は一キロメートル先の物は枯れていました

枯らしたのは長篠のスタンドです。しかし、長篠のスタンドの姿を
目にした時、僕達は目を疑いました

「マグカップ半分程を満たす程しかなかった筈の量」しか残ってい
なかつた筈なのに、何時の間にか『増量していた』のです！

最初は何なのか分かりませんでした。が、直後にピンとききました

「接触した物の水分を『奪う』……なら……『奪った水分』は！」

「その通り……我が『ホーリー・ウォーター』は奪った水分を自らの質量とする……奪えるのは触れたそれに含まれる水分！その特性故に仮に海に入れたとしても、海の水、そして海洋生物の水分全てを我が物とするだろう！」

随分と使う場所と状況を選ぶスタンドなんですね……

時間の経過と共にその体積を増すスタンドは、僕に向かってきました。僕は『自分の右手』と『自分に一番近い枯れた街路樹の太い枝』をSHUFFLEの空間に持っていき、空間で枝を掴んで戻しました

次に宝来さんに襲い掛かって来ました。宝来さんは逃げようとしたが『ホーリー・ウォーター』は彼女を囲むようにその姿を変えました。まあ『液体』だからその形に自在度が高いのは当然ですけど

彼女は僕のスタンドの射程距離内にいたので、僕は自分の左手と彼女の右腕を空間に持って行って掴んだ後に戻しました。僕の左手には、彼女の右手首ががっしりと握られていました

「須藤さん……助けて貰ってただけ……手の力緩めてくれない？痛い……」

「すみません……」

この能力を応用しての瞬間移動は『自分がスタンドの空間に持って行ってその空間で掴んだりしている物の現実空間に残したパーツを置いておいた場所へと移動するだけ』かと思っていたから宝来さんを僕の元へ引き寄せたのは単なる思い付きでだから結果どうなるのかとか考えてなかったんですが……

この移動法に関しては後程じっくりと研究しましょう

枯れ木の枝には人間二人分の体重は重過ぎたのか、枝の根元がピキピキと音を立ててきました。なので僕は手を離しました

水は僕達に迫って来ています

宝来さんはスタンド『インフェミー』を出し、凝固液を『ホーリー・ウォーター』に向けて吹きかけました

成程、固めてしまえば少なくとも動く事は出来なくなる！

そう感心したのも束の間……

凝固液が『ホーリー・ウォーター』に掛かった途端、今日何度聞いたか分からない、蒸発する音がしました

どうなったかというと、『ホーリー・ウォーター』は固まらず、寧ろ凝固液を掛けた分その体積が増していました。水が通り過ぎたその跡には、海水を煮詰めて塩が残ったかのように、白い塊が点々と残っていました

「じゅめん……」

「謝る事は無いですよ」

発想の着眼点自体は良かったのは事実ですし

確かに『ホーリー・ウォーター』の体積を増やしてしまったという結果となってしまうましたが、これは結果論ですし、やってみない事にはどう転ぶか分かりませんしね

しかし、僕と宝来さんだけで「どうしたらいいんでしょう」？

能力で考えればあいつに有効なのは除夜君の『プラネット・ルビー』や塩屋君の『ストウーピッド・ライク・デイス』、後は杵島さんの『ルージング・エンド』や本荘君の『スーパーランプ』、そしてあの山猫のスタンド辺りですね

除夜君なら『軸』があればホーリー・ウォーターを飛び越えて本体を叩けるでしょうし、塩屋君は蒸発させるなり凍結させるなり出来る

杵島さんはスタンドに水を沈める（表現としてはおかしいですが）のは可能でしょうし、本荘君は斥力で近寄らせる事もさせないでしょう。猫のは空を飛ばますしね

瞬間移動は僕も可能ですがそれが能力の除夜君には足元にも及ばないし、僕のスタンドは遠隔操作型だからどれだけの近距離から攻撃したとしても人を再起不能、もしくは気絶させられる程のパワーが

あるかを聞かれたら、『いいえ』とハッキリと答える事が出来るでしょうね

まあ、何十発も殴れば話は違つてでしょうが

浅海先生がここにいて彼女の『ジャンキー・チエイズ』で『調整』すれば話は別……て何現実逃避しているんですか僕は

「須藤さん！こつち！」

何時の間にか出現した白い土台の上に乗っている宝来さんに、上がるよう勧められ、僕は上がりました

「これは？」

「『インフェミー』の能力で作つたの。あの水は直接触れさせなければそこまで脅威と呼べる物じゃないから……」

確かに。このスタンドは地面を移動していますが登ったりとかはしてはいない。単純だけどそれだけに有効な手段です。僕より彼女のがよっぽど冷静にあのスタンドを観察していますね

問題は、この足場がどれだけ保つのかですね。当然ながら土台は『ホーリー・ウォーター』に直接触れている『訳だから周りから水分を

奪われて少しずつ崩れていつていますからね

「心配しないで須藤さん……確かに大ピンチだけどまだ終わった訳じゃ無い……まだ手段は無い事は無い！インフェミー！」

宝来さんは自分のスタンドに呼び掛けるも、スタンドは何も反応しませんでした。不思議と思い、よく見てみると

「！」

「え……？」

『インフェミー』の体の色が全体的に薄い灰色となり、外に足を広げてぐったりしていました

薄い灰色でしたが、時間が経つ毎にどんどん濃くなっていきました

「何で？どうして動かせないの？あたしの『インフェミー』……」

「僕にもさっぱり……」

そう、この時は僕達には『インフェミー』に何が起ったのか、見当が付きませんでした

インフエミーの背中に『裂けるような罅が入っている』も含めて
……

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？（後書き）

ミイラが薬の材料だったのは本当です。後、燃料とかにもミイラは使われていました。「ミイラ取りがミイラになる」という諺は、ミイラがこうやって使われていた時に作られた諺でしょうね

次回もお楽しみに！

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？（前書き）

『インフェミー』に突然起きた異変とは？

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？

「何で？どうして動かなくなっちゃったの？あたしの『インフェミ
ー』……」

変色し動かなくなった自分のスタンドを見ながら、絶望感と悲壮感
の混じった声で呟きました

「しっかりして下さい宝来さん！まだ敵は……」

宝来さんに叱咤しようと思いを掛けましたが、途中で目に入った『イ
ンフェミー』の様子を見て、言葉を止めました

変色したインフェミーの背中が大きく裂け、そこからほぼ同サイズ
の幼虫が脱皮したのです

その姿は黄緑色を基調とした体色に背中の子線から体全体に葉脈
のように模様が描かれ、頭に金色のネジみみたいな角が二本生えた芋
虫でした

最も不気味なのはその口で、頬の裂けた口には、鯨のような歯が二
重に並んでいました

『ギィ……』

外見によくマッチする、物凄く低い声で鳴きました

現在、足場はとてもヤバい状況で、寄り添えばどうにか二人の人間の足場が確保出来るといった感じですよ

「仕方無い……一か八か……インフェミー！」

宝来さんの足元のインフェミーは口を閉じ、もごもごと動かし、何かを僕達を取り囲む水に向けて吐き出しました。それは、直径一センチ程の、白い球でした。その球は水の中に落ちると、消えました

「えっと……それで？」

「それでって言われても……どうやらこれで終わりみたい」

「こ……これで終わりですか……？」

「何だつまらねえ……まあいいさ……お前等はこれにて……」

長篠の言葉が止まりました。何だろうと思いましたが、僕もおかしい事が起きているというのを気付きました

それは、『足場がもう崩壊していない』という事です。さっきまでは少しずつ崩壊していたのに……

『ホーリー・ウォーター』が流動していないというのも、よく見て気付きました

宝来さんもそれに気付いたようで、不思議そうな顔をしています

(まさか、この『インフェミー』の能力?)

僕はポケットからハンカチを取り出し、自分を囲んでいる水に先端を付けてみました

その結果、何も起きないだけでなく、『ハンカチが水の上に乗った』のです!

指で直接触れてみると

「大丈夫なの?」

「大丈夫です。この水ゼリーみたいになってますよ」

僕の発言を確かめる為、宝来さんも水を指でつつきました

「うん、確かにゼリーみたいになってる」

同じ結果となり、同じ答えが返ってきました

「宝来さん……」

「分かってるわ須藤さん……これはこの『インフェミー』の新しい能力……口から吐く球によって『液体』をゼリーとかみたいにする能力……」

「『寒天』とか『ゼラチン』みたいですね」

「レベル2……『インフェミーACT2』！」

『ギイ……』

「それで俺に勝ったつもりかい？」

余裕ぶつた表情で、長篠が僕達に聞いてきました。その右手には新しい水の入ったペットボトルが握られています

「能力が封じられたと言うのに随分余裕そうですね。悪い事は言わない。能力を悪用しないと僕達に約束して大人しく去りなさい。そうしたら僕達は何もしないし追いも通報もしない！」

「能力を封じた？馬鹿言うな……我が『ホーリー・ウォーター』はたとえ蒸発や化学反応とかで消えたとしても水さえ手元があれば問題無く発現が可能なんだよ！」

「マズいよ須藤さん！早く何とか……」

「する必要はありません。言いましたよね？『能力は封じた』と」

ペットボトルの蓋を開け、自分の手に中身を掛け、水は地面に零れ

「は？」

案の定、水は地面に吸われていきました

「馬鹿な！何故ホーリー・ウォーターが……貴様等何かしたのか？」

「ええ……いや、正確な表現をするならば……『何かをしていた』が正しいですかね……」

僕は後ろに自分のスタンドを出しました

「改めて紹介しましょう。これが僕のスタンドです。名前は『SHUFFLE』……僕のスタンド能力は一部、または大部分をスタンドの空間へと『持っていく』事……能力自体に殺傷能力は無いから生物をどれだけ持っていても問題無く生きている。但しその部分は現実に残った部分がどんな状態となったとしても影響は受けない……そして……僕は『ホーリー・ウォーター』の一部分を持っていてまだ返していない……そこまで言えば分かりますよね？」

「本体である俺の操作を受け付けないだけで問題無く操作出来るから……」

「ピンポーン。君のスタンドは群生型じゃないからスタンドが取り付いた水が無事なら君は改めてスタンド能力を水に取り付かす事が不可能だという訳です。言っておきますけど時間が経てば、とか距離を取れば、何て希望的観測はしない方が宜しいですよ。一度持っていたものは僕が何時間眠ろうがどれだけ僕から離れていようが僕が解除しない限りは能力は継続されるんです」

「ふふふふ……『僕が解除しない限りは持続し続ける』？あるだろ？スタンド能力を消し去る最も簡単な方法がよ……」

「それは？」

「それは貴様を殺すという手段だ！」

殺気立った目で、長篠は僕との距離を詰めてきました

『僕の予想通り』に……

「いじぶおー！」

突然奇声を上げ、腹部を抑えてうずくまりました……

長篠の顔と行動だけを見ていれば、そう見えるでしょう

「だが、実際はあなたの腹部を『持って行って』そのままスタンドで腹部を殴ったからです」

個人的にあまり好きじゃないので使いたくないんですがね

未だ高圧的な視線を向けてくるので、喉を持って行って殴りました

「ガ……」

「僕のスタンドは破壊力こそありませんが急所を殴ってダメージを与えられる程度はありますよ……さて……これから僕はあなたの急所を一発ずつ殴る……全部殴り終えたらもう一度だ……それをあなたが再起不能になるまで繰り返す……どんなに泣き喚いたとしても止めない。警告は既に行っている。言っておくが僕のスタンドはパワーが低いからすぐに終わる事は無いと頭に入れておいて欲しい」

「う……うああああああ……ゴッ」

「何か……疲れちゃった……」

「僕もですよ……」

長篠を警察へ引き渡した僕達は、コンビニで軽食を幾らか買って別荘に戻りました

少し侘びしと感じましたが、今日の分の体力とかは既に殆ど使い切っていたのでこれでも充分でした

「『スタンド使いとスタンド使いは互いに引かれ合う』って言うけど、まさか札幌で二日連続でとは……お陰でバカンスは台無しだし」

「確かに……まあ命があってやれやれって感じですけどね僕は……」

長篠京都（スタンド名：『ホーリー・ウォーター』） - 再起不能
再び刑務所に収監

To Be Continued...

聖なる水（ホーリー・ウォーター）？（後書き）

長篠戦の決着はつきました。琢磨が決めるってというのは決めてたけど決め方は執筆途中で思い付きました

札幌編はまだ続く予定です。次回も楽しみにして下さい！

リアルヒーローショー？（前書き）

札幌にいるスタンド使い達の魔の手は、当然しんのすけ達にも迫り来る！

リアルヒーローショー？

「まだかなあ？」

「まだだよしんちゃん、始まるのは11時半からでまだ後十分あるよ？お……お……お……」

「お………何？」

「お………おばさんもよく言うもん。待つてる時間って長く感じるものだった」

札幌の中で観光をしている除夜達と異なり、しんのすけ、咲良、ななこ、忍、四十郎の五人は、札幌から少し離れた遊園地に行く事となった

その理由は、この遊園地でしんのすけの大好きな特撮ヒーロー、『アクション仮面』のアクションショーがあるからだった

と言う訳で、しんのすけは遊園地に来てからというものの、そわそわしっぱなしだった

「しんちゃん、そんなにそわそわしなくてもアクション仮面は逃げないわよ」

「そうなんだけど………早くアクション仮面に会いたくて会いたくて………」

「後八分で会えるよ」

「時計壊れているんじゃないの？」

「君がせっかち過ぎるだけ、時間は問題無く普通に経過しているよ」

「えー？後八分も待たないといけないの〜？」

「……少しは別の事考えたら？ただ待っているよりかは気が紛れると思うよ？」

さり気なく横から進言するななこ。しんのすけは「う〜んう〜ん」と少しの間考え、何か思いついたのか俯けていた顔を上げた

「結婚記念日に夫婦で外食へ行つて店が混んでて相席になってそのテーブルの先客がカップルでその二人と言つのがお互いの不倫相手というストーリーを……」

「そんなそれだけで昼ドラの話が一話作れそうなドロドロとしたストーリーは考えなくていい。と言つよりそんなストーリー考えて楽しい？」

「同じ組の友達が好きそうだけど」

「その友達の親の顔が見たいんだけど。幼稚園児にどんな番組を見せているのか聞いてみたいから」

「それでその夫婦ってというのが結構なお金持ちで……」

「も……もういい、もういいから」

「お願いします。謝るから止めて」

「しんのすけ君、そろそろ始まるんだが……」

「教えてくれてありがとうございますお義父様！この御恩、ななこさんと結婚し、ななこさんを幸せにする事で返します！」

「お義父様と呼ぶな！そしてそんな形で返そうとするな！私はまだ認めてないぞ！」

相手が幼稚園児なら認めては駄目だが

「忍さん」

「なーに咲良君。ポップコーン食べる？」

「いただきます。仲良しですね。あの二人」

「まあね。ななこのお父さんも、口で言う程嫌ってはいないし」

遊園地の入口前の駐車場で、一台の黒いワゴン車が停まった

後ろの席のドアが開き、そこから黒い覆面に黒を基調とした服を着た、見るからに不審人物だと自分から名乗っている恰好をした男達が六人降りてきた。その手には、本物のライフルが握られていた

降りた六人に、運転席にいる男は、シートを倒して寝そべりながら、煙草を吸いながら指示を出す（危ないので真似しないで下さい）

「貴様等、目一杯暴れてこい。但し持っている鉄は出来うる限り人に使つな。手筈通りお前等がヒーローショーを制圧したら、またはお前等が逆に制圧されたら……」

「分かってますよ」

「リーダー達が出向くんではよ？」

「分かっているんならいい。行け」

その声と同時に、六人の男が遊園地へと向かっていった

少し間を空けて、助手席にいた男が、リーダー格の男に話し掛ける

「リーダー？何で僕達が最初に行かないんです？僕達二人の『能力』ならヒーローショーどころか、遊園地の制圧くらい簡単に……」

「バーカ、そうしたらつまないだろ……それに最初はどうした方がインパクトあるだろうが」

「キツキツキツキ……アクション仮面、長きに渡る我等の因縁、今日ここで終わらせようではないか……」

「望む所だ、『音楽大將軍パワークリケット』！」

ボス格の怪人の後ろには沢山の下っ端怪人に数人の怪人がいる。これはお決まりだ

最初の下っ端怪人を向かわせ、ヒーローがそれを難なく倒す。これもお決まりだ

下っ端怪人が粗方倒された後、部下の怪人がヒーローと戦う

そして……

数発の銃声の後に、四人の不審人物全開の格好でステージに上ってきて、ステージの上にいる人と観客に向けて、手に持っているライフルを向けた。これは非常事態だ

後ろには、二人の同じ恰好をした同じ銃を持った男が二人いた。同じ様に観客に銃口を向けていた

ステージの上に立っている男の一人が、大声を上げた

「いいか！ここはたった今、我々『六月末日の結婚前夜』が支配した！妙な身動きしてみる！その場で……」

「すみませんトイレに行きたくなったらどうすればいいんでしょうか？」

観客の誰か（しんのすけ達ではない）が、ある意味空気を読めていない発言をした

「もしかしてこいつ等を刺激してしまったんじゃないか……」という不安が観客達によぎる。だが……

「それなら手を上げる。我々の内の誰かが付き添って……」

極めて真面目に返した……

「リーダー、制圧が完了しました」

『よくやった貴様等。手筈通り今から俺達もそこへ行くからな』

「へい」

「おびちゃん……おびちゃん……」

グループの一人が無線機でリーダーに連絡を取っている最中、赤ん坊の泣き声が響いた

男の一人が銃を持って泣いている赤ん坊の元へと近寄る。母親は子供を庇うように抱き締める

「俺に貸してみな。そんな抱き方があるか」

男の意外な発言に、母親はおろか周りの観客も啞然とした。その隙を見て男は赤ん坊を母親から取り上げる

「赤ん坊ってのはこう抱くんだよ」

男が赤ん坊を抱いて少しすると、赤ん坊はキャツキャツと笑った

「何なの？この人達……」

「さあ……」

「この遊園地さ……今外どうなっていると思っ？」

突然しんのすけ達からして右側から声がした。そこには男がいた

金色を基調とした全身に少し前のロボットアニメに出て来るようなロボットのデザインの装甲服を纏い、背中にはコイルが左右に付いているバッテリーに似た装置が取り付けられ、右肩にプラス、左肩にマイナスの記号が描かれていて、頭には頭頂から首にかけて針が生えている装甲服に繋がった帽子を被った男だ。顔は下半分が装甲服と同じ金色の覆面で隠れている為よく分からないが、二十代後半から三十代前半だと思われる

「数人の従業員が一つのアトラクションにいた人を連れて避難させてる。考えたな、無闇に不審者が来たって知らせたら全体がパニック状態に陥るかも知れんし……野次馬根性の強い馬鹿が興味本位でここに来て犯人を刺激するかも知れないからな……」

これだけ奇抜な恰好をしていながら、仲間達は兎も角、観客もステージの上にいる人達も何も感じてないようだ

それを見て、しんのすけと咲良は根拠は無いが直感的にこの男が自分達と同類であると確信した

「咲良お兄さん、あいつ……」

「うん、『スタンド使い』だ……『身に纏うタイプ』の……どんな能力かまだ分からない以上、下手に動くのは……」

ガチャガチャと音が聞こえたので、音のした方向に目を向けると、男の仲間が自分の武器を捨てていた。ライフルだけでなく、ナイフも持っていた

仲間達が武器を捨てたのを確認すると、男は両手を上げる。すると、男の身に纏う装甲服に異変が起きた

装甲服が、「スパークしている」！

両手の間に電気が球体の形で溜まり、そこから仲間も観客もいない地点に、電撃が放たれた！

「どうだ！俺は放電する事が出来るんだ！聞け！観客共！俺達『六
月末日の結婚前夜』の目的は、この金を奪う事！妙な真似をした
ら俺達の手で天国に……」

「『ワイルドボアライダーキック』！」

リーダー格の男に、『ハリケーン』を纏ったしんのすけが必殺の蹴りを入れた

「オラ、参上！」

決めポーズと決め台詞を、吹っ飛んだリーダー格の男に向かって決めた

リアルヒーローショー？（後書き）

スタンド使いと遭遇するシチュエーションが中々思い付きませんでした。何とか思い付けました。それだけです

まあ、次回もお楽しみに！

リアルヒーローショー？（前書き）

武装集団を率いるスタンド使いにしんのすけ達は？

リアルヒーローショー？

『ハリケーン装着型』の必殺技、『ワイルドボアライダーキック』を食らうも、平然とした様子で立ち上がった。そして、『スタンド』が見える者は覆面越しで分かり辛い口元を歪ませた

「まさか同じ能力を持つ者がここにいるとはな……もしかしてお前も埼玉県春日部に足を踏み入れて『矢』に射られたクチか？」

「『矢』に射られたって……もしかしてお前も……」

「その通り、俺達は三ヶ月前春日部に旅行で来た時沢登優太に出会
いこの『能力』を得た……自己紹介をしておこう。俺の名は奥谷丈
夫。能力名は『モータープレス』」

「オラ、野原しんのすけ五歳。スタンドの名前は『ハリケーン』、
好きな食べ物……」

延々と自己紹介を続けるしんのすけに、奥谷は右腕をスパークさせながら殴りかかった！

しんのすけに当たる直前、奥谷の拳は『白い翼』に阻まれる。白い翼が動くと、奥谷の拳は弾かれた

しんのすけの後ろには、二対の白と黒の翼の生えた魚が飛んでいた

「咲良お兄さん！」

「大丈夫？」

「大丈夫だけどさ……こんなに堂々と人前で能力使って大丈夫？後で五月蠅くない？」

「よく見て」

見回すと、観客も、アクション仮面や怪人達も、奥谷の仲間達も、ここから消えていた。残っているのは三人だけだ

「俺の能力は結構大雑把だからな。危険が及ばないよう最初から俺が来て能力を何度も使うような事があつたら逃げるよう、そして逃がすよう指示しておいたのさ。金が目的で人命まで取ってみ？強盗から強盗殺人にランクアップしてしまうからな」

『その辺は考えてあるんだな』

「無計画は失敗のもとだ。『失敗は成功のもと』とよく言うが防げたであろう失敗はするつもりはない」

奥谷は後ろに下がり、掌から電気を放った。しんのすけと咲良は避ける

「しんちゃん。僕の『フィッシュボーン』の翼が防げるのは打撃攻

撃だけだよ」

奥谷の攻撃を受けた白い翼は、若干ではあるが焦げていた

「『モーターブレス』！」

両手から高圧電流が放たれる。しんのすけと咲良は避ける。だが……

「え？」

電撃は咲良へ「カーブした」！咲良はギリギリまで引き付けて、後ろへ跳んだ！

その攻撃は避けられたが、奥谷は攻撃を止めず、電気を球体にして次々と放つ

咲良は走るが、何故か電気の球は咲良を追ってくる。半ば気休めで電気の球の軌道上に『フィッシュボーン』を出し、その四枚の翼を素早く羽ばたかせた！

結果、咲良は全身にあちこち火傷を負い、『フィッシュボーン』も同様にボロボロになった

とはいえ全てを食らった訳ではなく、十数発の内の五、六発だけが、「フィッシュボーンの翼に当たって軌道がそれた」からか、スタンドを出せるコンディションは保っている。そして咲良は、その現象が何故起こったのか大凡理解していた

「気をつけてしんちゃん！敵はもう一人いる！」

咲良の声に応じたかのように、ステージの物陰から男が一人現れた。角張っていて角が下に、内側に向いた鍔をした七色の帽子を被り、長い襟の立った所々五センチ四方の菱形の形に染め抜きされた紫色のYシャツに、白の地に黒の十字架模様があちこちに入った長ズボンを着た男だ。年齢は、奥谷と同じか少し下といった所だろう

その男の後ろには、案の定スタンドが立っていた。銀色が基調の、首等の関節に金色の輪を詰め、頭にヘルメットを被り、そのヘルメットの頭頂から後頭部までに棘が一行に並び、両肩には根元にコンクリートの土台のような物から伸びる角が生えている、人型のスタンドだった

「今日は……お楽しみの中邪魔して悪かったね……」

「まだいるの？」

「安心して、能力者……『スタンド使い』だっけ？それは僕達二人

ただだから……僕もリーダーにならって自己紹介をしておくよ……
僕の名は豊浜真義。スタンド名は『プラズマティックス』だ！能力
は電流の流れの向きを変える事！」

「おい……能力をバラすな」

「バラした所で何の意味も無いでしょ……僕達が組めば無敵なんだ
から……」

余裕そうに言う豊浜。だが、確かにそうかも知れない

奥谷が電撃を放ち、豊浜がその方向をコントロールする。隣合わせ
のジグソーパズルのピースのように、互いに合う為に生まれた能力
だと言ってもオーバーではないだろう

「しんちゃん、豊浜を相手にして、僕は奥谷を相手する！こっちも
二人である以上こいつ等を一緒に相手にするなんて危険を犯す必要
も理由も無い！」

豊浜は拍手した

「確かにその通りだ。僕達の場合同じ土俵に上がるより別個で倒し
た方が勝率が上がるだろう……どうしますリーダー？」

「乗ってやるうぜ……いいだろう、望む通りにしてやる。但し容赦
はしないから死んだ所で怨むのは筋違いだぞ？」

「よし、これでこっちが勝つ可能性が上がった！」

「大丈夫なの？何かあいつ等余裕そうなんだけど……」

「大丈夫、それに……少し試してみたい事があるんだ……」

しんのすけ対豊浜、咲良対奥谷の組み合わせに分かれ、戦闘は再スタートする

まず、咲良の方にカメラを向けてみよう

咲良は、奥谷の『電気を帯びた拳のラッシュ』を、主にフィッシュボーンを使って避けていた。白い翼を使っているので事実上防げるのは物理的なものだけで、翼は攻撃を食らえば食らう程焦げていく。フィードバックで腕の火傷も酷くなっていく

「『力をそのままはね返す』……恐ろしい能力だ……だが、マトモに食らう電気を徐々に食らっていつていてキツイみたいだな……」

「恐ろしい能力って言ったたらあんたもでしょ……あなたの能力……動いたら電気が作られる』能力でしょ……？」

「根拠は？」

「移動なり攻撃なり、あんたはほぼ常に体を動かしている……単純に電気を放つ能力なら、離れて攻撃した方がより有利だ……それを

しないって事は、それが出来ない、またはそれを続ける事が出来ない理由があると言う事だ……違う?」

「正解だよ……中々賢いんだなお前……」

掌を翳し、電撃を放つ。だが、その掌が向けられているのは咲良でもしんのすけでもなく、『しんのすけと対峙している豊浜のスタンドだった』

豊浜は見えている筈のその攻撃を、避けようとせず食らわせた

「リーダー、やるんなら事前に言って下さい」

「ああすまん」

まともに食らった筈の豊浜のスタンド『プラズマティックス』は、電撃によるダメージは皆無だった。本体へのダメージも無い

「どうして驚く?あいつの『プラズマティックス』は『避雷針のスタンド』だ。直に電気を食らった所でそれによるダメージを受ける筈が無いだろ」

「随分親切だね」

「少し賢いお前に敬意を表したんだ……それにこの程度の事は分かるうと思えばすぐに分かる事だしな」

余裕の態度を崩さず、説明する

（確かにあの程度は誰にだってすぐ分かる事だ……だからこそ自分から教えたんだ）

無駄な事をしない人だと咲良は感心した

（こいつを倒せる『可能性』はある……だがこいつ等は強い……）

「『モーターブレス』！」

一気に接近し、殴りかかった

リアルヒーローショー？（後書き）

奥谷のスタンド名はメタリカの楽曲から。豊浜のスタンド名はアメリカのハードコア・パンクロックバンドから。概念は『発電機』と『避雷針』です

次回もお楽しみに

リアルヒーローショー？（前書き）

襲い掛かる奥谷と豊浜に、しんのすけ達は……

リアルヒーローショー？

野原しんのすけ（スタンド名：ハリケーン）対豊浜真義（スタンド名：プラズマティックス）

「食らえ」

豊浜の電撃を、『装着型』のまま回避する。電撃はしんのすけに向かって曲がってきた

しんのすけはハリケーンを刀剣に変え、地面に突き刺す。電撃はそのまま刀剣に当たり、地面へ逃がした

「体がビリビリと来たぞ……ちよっぴり痛いけど……何か快感」

フィードバックで電気を体で感じたしんのすけは、何処か恍惚とした表情でそう言った。それを見た豊浜は、若干顔を青ざめた

しんのすけは再度ハリケーンを体に纏わせ、距離を取って走り出し、必殺技、『ワイルドボアライダーキック』を繰り出した

「『プラズマティックス』」

高圧電流をバリアの形で流す。しんのすけのキックは電流のバリアに阻まれ、弾かれた

『くっ……厄介だな……奴の能力……』

豊浜のスタンド能力は『電気の流れを支配する能力』だとは、しんのすけも『ハリケーン』も感じていた

それを応用して電流を自分や他人に向けたり、さっきのように『電磁スクリーン』を作って物理的な攻撃を防御したりも出来る。電気はリーダー格の男が入れば幾らでも供給出来るし、そうでなくとも配電盤なり発電機なりあれば供給可能だ。と言うより日本の人が利用する場所で電気の供給が望めない場所を探すのは至難の業だろう

『しんのすけ、我々は取り敢えず電撃を避け続けるぞ』

「おっ！」

『プラズマティックス』がしんのすけへ向けて、電撃を放った

『モーターブレス』の攻撃を、咲良は『フィッシュボーン』の翼を使って受け止めた

だが、それは今までと違う防ぎ方だった

『白い翼の上に黒い翼を重ねた状態』で、攻撃を防いだのだ

そして咲良は、勢い良く二枚重ねにした翼を開いた。奥谷は吹き飛び、ステージの壁を突き破った

奥谷は立ち上がり、咲良に拳を連続で振り下ろす。『フィッシュボーン』の二枚重ねの翼は一発一発を受け止め、僅かに動かす事で受け流した

「貴様……一体何を……」

「僕のスタンド『フィッシュボーン』の能力は、攻撃をその翼で受け止め、翼を開く事でそれをそのままの力で跳ね返す事……今まで気付かなかったけど、その翼は自分で動かす事が出来るんだ。だから、『受け止めた後、ちよつとだけ動かして軌道を変えた』……」

「つまり……俺ではお前に真正面から拳を食らわせる事が出来ないという事が……」

距離を取り、両手から電流を流し、それを掌に集める

「だったら攻撃手段を変えればいいだけだ。お前はこれを防げない」

咲良に向かって、電撃を放った

フィッシュボーンは咲良を守るように『黒い翼』を電撃へ向ける。
翼は電撃を『受け止め』、跳ね返した！

「さっき二枚重ねにして攻撃を受け止めたのに何の疑問も感じなかったの？これもついさっき気付いたんだけど、『フィッシュボーン』は使い分けが出来るんだよ。殴るとか蹴るとかの攻撃は白い翼、それ以外、たとえばあんたの電撃とかの攻撃は黒い翼というようにね……」

「つまり黒い翼で拳に帯びている電流を受け、白い翼で拳その物を受け止めた訳か……」

「正解。まあ黒い翼からのダメージは若干あるけど帯びている電流を直に食らう程でもないな……」

「つまり馬鹿正直に真正面からぶつかっても、時や空間をどうこうするとかしない限りお前には俺の攻撃は通じないという事か……」

「そうなるね……仲間さん達を連れて逃げたら？もう僕の能力に勝つ事は出来ないから」

「ハハハハハハハハ！威勢のいいガキだな！確かに、さっきも俺自身が言った通り真正面から挑んだ所で俺はお前の能力に勝つ事は出来ない！認めよう！『真正面から』ならなあ！」

腕から今まで以上の電気を流し、突進してきた。咲良は二枚重ねの翼を先が交差するよう、自身にくるんだ

予想通りと言わんばかりの顔で、左腕から電撃を放つ。外側は黒い翼の為、電撃を受け止める。そして、跳ね返す為に左側の翼を動かした瞬間

「待ってたんだよ、この時をよ……」

左右の翼の隙間を潜り抜けて、至近距離から拳を振り下ろした

「確かに俺の能力では真正面から相手するのは無理だ。だが、こういう風にそれなりの策を取れば貴様の能力等簡単に打ち破れる！猛獣に人間が勝てたのは、人間がそれらへの対策を打ったからだ！」

咲良に拳が当たる寸前に、右側から二枚重ねの翼が間に入り込んだ。拳は割り込んだ翼にその進行を阻まれた

「さっき言った事……僕も同感……そして先程僕が言い、あんたも同意した事……『あんたは僕の能力に勝つ事は出来ない』……対策を練って挑んでくるのは分かっていた……どんな対策を練ってくるのかというのも粗方予想はついていた……だからこっちも対策を打たせて貰った……」

拳を引く前に、右側の翼は勢い良く広がった。必然、奥谷の体は後ろへ吹き飛んだ

「ウ……………」

奥谷がゆっくりと立ち上がる。ダメージがあつたのか、その身に纏つているスタンドは全体に罅が入っており、その罅は広がっていた。その隙間から電気が流れ出ている。自意識で発しているのではない、明らかな漏電だった

「まだ立てるのか……………大したものですね」

「当たり前だあ……………食らいついてでも貴様に勝つぜ……………貴様は超えねばならない壁だ……………いや、壁というのは避けて通る物ではなく、超える為にある物なのだあ！」

電気を一気に流し、ステージ全体に広がるよう放電しながら咲良に突っ込んできた。咲良は自分に来る電撃を受け止める

「俺は貴様という壁を打ち壊した後に跨ぐ事で乗り越えてその先に進み、栄光を掴むううう！」

「『壁は避ける物ではなく超える物』……………か……………」

咲良は観客が置き忘れた金属製の水筒を拾い上げ、上に放り投げた。そして、『フィッシュボーン』の白い翼で奥谷に向かって飛ばした！

奥谷はそれを難なく避ける

「あれだけ大口叩いてこんな稚拙な策しか打てんのか！やはり貴様が俺を壁として超える事は不可能だったと、所詮貴様は俺が通るべき通過点だったんだ……」

喋っている途中で、咲良の方から飛んできた電撃が当たった

「『塵も積もれば山となる』……あなたが発していた電気を黒い翼で溜めていたんだ……あなたは電気を作るだけで電気に対する耐性は無いんでしょう？外部から電気を受けたら普通に感電するんでしょう？」

感電した奥谷は、力無く倒れた。スタンドは消えている

「僕が勝ちあんたが負けた……それが物語っているのは……結局あんたが……僕の前に聳える壁だったって事だね……そして僕はあんたを乗り越えた……」

目の前の敵を倒した事で気が緩み、蓄積されたダメージと体中の痛みによって気を失った

リアルヒーローショー？（後書き）

黒い翼の能力は、一応最初から決めてました

残りは『プラスマティックス』の豊浜対しんのすけ戦で、決着を予定しています

では、次回もお楽しみに

リアルヒーローショー？（前書き）

奥谷丈夫を倒した咲良。残るは豊浜のみとなり……

リアルヒーローショー？

奥谷と咲良が倒れたのを目にして、豊浜の動きが一瞬止まった

「『ハリケーン』！」

『承知した』

しんのすけはその隙を見逃さず接近。近距離パワー型の『ハリケーン』は、豊浜を殴りかかった

豊浜はハリケーンが振り被った所で首をしんのすけ達へと向け、『プラズマティックス』の電磁スクリーンで防いだ

『やはり素直にやられてはくれないか……』

「当然だろ？」

豊浜は咲良の下まで寄って首を腕に回し、持ち上げた

「もしかして……『人質』？」

「そつだよ、悪党の常套手段だ……一先ず逃げさせて貰う……僕の能力が最大まで発揮されるのは彼と組む事でだからな……動くなよ。」

僅かでも動いたらコイツの首を焼き切るからな……」

「うん動かないよ……」オラは『」

最後の所を強調した為疑問に思ったが、その直後に咲良の首に回している腕の肘の部分に痛みが走った

肘には『細い剣』が突き刺さっており、その剣をほつそりとした体型の『ハリケーン』が持っていた。痛みで回していた腕の力が緩み、その瞬間、『群生型』となって咲良を下から持ち上げ、しんのすけの傍まで運び込んだ

『言っておくがこれは『私』の独断の上での行動であり、私の本体である『しんのすけ』は何も考えてないし何も動いていない!』

出血を腕を縛る事で押さえた

『どうする？謝るか？それともまだやるか？どちらかを選べ。何れにせよ再起不能にはなって貰うがな……』

「馬鹿かお前……何でその二択なんだ……？いや、どっちを選んでも同じ末路である以上事実上一択か……僕にはもう一つ取れる手段がある」

「手段？」

「『お前等から逃げる』事だよ！言っとくが追うなよ。もし追ってきたら容赦なくこれを街中で発射してやるからな！」

ライフルを掲げ、しんのすけ達から背を向け、外へと逃げ出した

『その手があったか……ふむ……予想もしていなかった……』

「どうしようハリケーン……あいつこのまま逃がしていいの？」

『心配するな、奴が我々から逃げ切る事は叶わない。お前に私の隠された『新形態』を教えてやろう！』

「おー！」

盛り上がるしんのすけに、『ハリケーン』はそつと手を出した

「……何？」

『金』

「……………」

自分のスタンドのがめつさに、しんのすけはただ呆れるしか無かった……

(こんな奴獵銃で撃ち殺されて牡丹鍋の具になればいいんだ)

誰にも気付かれる事無く遊園地を脱出した豊浜は、乗ってきた車のエンジンを動かして逃げていた。現在は赤信号に捕まり、停止している

「まさかリーダーがやられるとは……まあいい……僕には『プラスマティックス』がある……リーダー達が捕まったとしても電気を蓄えて留置場を襲撃して……」

『むあーてえー!』

「はい？」

後ろから、先程対峙していた幼稚園児の声がした。空耳だと内心思いながら後ろを振り向くと、しんのすけがいた

しんのすけは、ヘッドに猪の頭蓋骨を付け、ガソリンタンクの横から正面に向かって光沢のある灰色の牙の生えたバイクに跨っていた

『これぞ私の『器物一体化』形態！二輪車に取り付く事で、私は最高時速三百キロのスピードで走る事の出来るバイクとなる！普通自動車等何処まで逃げようと簡単に追い抜かせるわ！私の犬にも勝る

嗅覚があれば追跡も容易よ！」

「じゃあ何で最高時速での追跡をしようとしなの？」

「そんなスピードで走ったら車体もお前も風圧でバラバラになるから」

「……それって意味無いんじゃない？」

青信号になったと同時に、アクセルを軽く踏んで動かし、直後にギヤをトップにしてアクセルを踏み込んだ

スピードが上がった瞬間、「ハリケーン」もスピードを上げ、そのまま車へ突っ込んだ

当たり前だがバイクにはシートベルトが無い為、しんのすけの体はぶつかった衝撃で上空へ吹っ飛ばす。車も爆破炎上した

しんのすけは「ハリケーン」を再び装着し、持ち前の運動神経で余裕で着地した

「大丈夫かしんのすけ？」

「全然オツケー……だけど……あいつ無事かな？」

目の前で炎上している車とバイクを見ながら言った。あの中にいたら普通は生きてはいない

「ゼー……ゼー……」

炎の中から、上着が燃え、あちこち火傷を作りながらも体自体には大きな傷を負っていない豊浜が、背後にスタンドを出して出て来た

（危なかった……激突する瞬間に電磁バリアを全身に張ってないとやられていた……）

それを見てしんのすけは安堵の溜息を吐いた。たとえ悪人であろうと、死んでいたりしていれば流石に後味が悪い

しんのすけは数歩後ろに下がり、駆け出す。必殺技を決める為に

（さっきのバリアに使い過ぎた……今は人間一人を気絶出来るかどうかという程度の電撃を一発撃てるかどうかだ……）

『逃げる』という選択肢も頭に浮かんだが、それは打ち消した。逃げたとしてもすぐに追ってくるだろう。車を盗むなど難しい事ではない。だが、車が作れる電気程度ではしんのすけが今したのと同じ事をしたら、バリアを作っても容易に破られる

「『プラズマティックス』！」

豊浜の取った選択は、しんのすけと今戦う事だった

スタンドの指先のみを放電させ、留めた。スタンガンの要領だ

必殺のキックを繰り出し、腕が届く距離まで近付けると、腕を伸ばした。狙うは首

指先が、しんのすけの首に触れた瞬間

「！」

『ハリケーン装着型』が解除され、首に向けて伸ばされた腕の手首が、肩から伸びたスタンドの手によって掴まれていた

スタンドの腕は掴んでいるスタンドの腕を引っ張り寄せ、後ろに投げた。スタンドと共に本体である豊浜も引っ張られる

投げ飛ばした豊浜に、しんのすけはスタンドを出してギリギリと近づく

「プ……『プラズマティック……』」

倒れた体勢で指先から放電しようとするが、冬場の静電気レベルの電気が少し流れただけで、それもすぐに止まった

目と鼻の先まで距離を縮めると、止まった。豊浜は、フツと笑い、しんのすけの顔を見上げる

「僕の負けだ……覚悟は出来てる……遠慮はいらない。好きにしろ」

『それなら遠慮も容赦もなく』

『ハリケーン』のラッシュが、豊浜に叩き込まれた

奥谷丈夫：スタンド名：モーターブレス - 再起不能

豊浜真義：スタンド名：プラズマティックス - 再起不能

六月末日の結婚前夜 - 壊滅。リーダー格の奥谷、豊浜共に懲役刑に処される

野原しんのすけ - 急いで遊園地に戻り、ななこ達にはトイレに行っていたと誤魔化した

白帯咲良 - この後、病院へ行って火傷の治療して貰った。入院及び通院は不要

TO BE CONTINUED...

リアルヒーローショー？（後書き）

ハリケーンの実体化（器物一体）形態が出て来ました。ハリケーン自身が申告した最高時速はマジで出せませう。申告した通り本体と車体は持ちませんが（笑）

取り敢えず、今回で札幌編は終わり、次回はスタンド紹介で、その次から春日部に戻ります

では、これからも宜しくお願いします

スタンド紹介？（前書き）

今回は紹介の前に、スタンドの基本ルールを記載します

スタンド紹介？

スタンドの基本ルール

1・スタンドは、一人につき一体

この一体は「一物体」という意味ではなく、全く異なるスタンドは持つ事は出来ないという意味である。同じ姿形、能力を持ったスタンドが別人から発現する事は一部の例外を除いて確認されてはいないが、存在しないという訳ではないと思われる

2・スタンドが見えるのはスタンド使いだけ

例外として本体、器物と一体化したスタンドはスタンド能力を持たない者にも視認出来る

3・スタンドが触れるのはスタンドだけ

実体化した場合を除き、スタンドはスタンド使いであっても直接触れる事は出来ない

スタンドからは触れる事が出来る。限度はあるが物質透過が可能。透過しなかった物体に対して力負けしてしまった場合、スタンドでない物体によりスタンドが損傷するのは有り得る

4・スタンドは本体の意思によって動く

例外として遠隔自動操縦型や精密動作性の低いスタンド、本体とは別に自我を持つスタンドはその限りではない。スタンドが本体の意思を無視して動く場合もある

5・スタンドが傷付けば、本体も傷付く

スタンドは本体のスタンド使いの生命力が像をなしたものであり、傷つくと本体も傷（主に肉体と同じ部分）を受ける。本体が死亡するとスタンドも消滅する

例外も存在し、形状が人型でないスタンド、遠隔自動操縦型等本体の意思と切り離されて行動するスタンド、物質同化型のスタンド等には当てはまらない場合もある。人型でもただの道具の場合、破損しても影響のない場合もある

群生型の場合、数にもよるが一体が潰れても大したダメージにならない

本体が死亡してもスタンド能力は生きているケースもある

暴走を起こして本体の制御を受け付けない状態のスタンドもダメージが本体に影響しない場合があるようである

6・本体から離れて行動出来る距離に限界がある

一般的に「射程距離」と呼ばれる。基本的に距離の長さでスタンドの力強さは反比例の関係にあり、遠くまで行けるスタンドは弱く、そうでないスタンドは強い。同じスタンドでも本体から離れればそれだけ弱くなる

短い部類では2メートルで、50メートルは長い部類とされる。特定条件を満たす事によって何処まで遠くに行けるスタンドもある
遠隔自動操縦型のスタンドは、どれだけ離れていてもパワフルに動けるが、精密動作性が低い傾向にある

7・スタンドは特殊能力を一つ持つ

スタンドはそのスタンド固有の能力を持つ。人型であれば手足での戦闘は含まない。条件を満たす事で発動する能力も存在する

例外として複数の形態と能力を持つスタンドも存在する。逆に、能

力らしい能力を持たないスタンドも存在する

能力はスタンド像のパワー・射程距離に関係無く、近距離でありながら超遠距離まで能力が発揮されるスタンドや、パワー評価が低いにも関わらず、能力による破壊力は高いスタンド、射程やパワーともに高いスタンドも存在する

スタンドは成長する

スタンド使いの精神的成長や何等かの外的要因によっては新能力が目覚める事がある

スタンド名 - インフェミーACT2

本体 - 宝来瑪瑙

破壊力 - D スピード - D 射程距離 - B

持続力 - B 精密動作性 - C 成長性 - A

能力 - 口から白い球を吐き出す。その球が液体に触れると、その液体をゼリー状に固める

? 固められた液体の性質は変化しない

? 固められた液体は弾力性があり、並大抵の衝撃では碎けない

スタンド名 - ディープ・パープル

本体 - 黒星繁寿

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - C

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - A

能力 - 射程距離内に本体以外の二人以上の人間が存在する時、始めて発動する。その人間の内一人が「死にたい」と思えばその人間を自殺させ、射程距離内にいる人間を道連れにする

？自殺を止めさせる事は可能だが、その妨害に対抗する手段を学習する為大抵の手段は一度しか使えない

？スタンドが本体の制御を受け付けない、所謂暴走状態の為たとえ本体が途中で死んだとしても自殺は中断されない

スタンド名 - エンパイア・バーレスク

本体 - 新垣望

破壊力 - A スピード - D 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - B

能力 - 体の一部が床や地面に触ると人間以外の哺乳類になる。例えば普通に歩く場合、進むごとに姿形が変わっていき、最終的に精神までも動物となってしまう。動物が能力にはまると別の種類の動物になる

スタンド名 - フィール・フロウズ

本体 - 戸河内希新

破壊力 - A スピード - A 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - C

能力 - 床に潜り込む自動追跡型のスタンド。その追跡条件は何時でも自由に設定できる。追跡条件を満たした者に体当たりをする。特定の人物を追うようには設定出来ない

スタンド名 - スパイダー・バレエ

本体 - 鵠三ツ葉

破壊力 - D スピード - C 射程距離 - B

持続力 - A 精密動作性 - B 成長性 - B

能力 - 壁や天井に張り付いて、吐き出す糸で引き寄せたりする。糸は非常に頑丈で、引き寄せたりする分にはどれだけの重量の物でも決して切れる事は無い

スタンド名 - パッション・ピット

本体 - 真淵悠智

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - D

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - E

能力 - 腕から油を放つ。その油はよく滑る。基本的に性質は油なので、水には浮く。訓練すれば水の上でも油の上なら滑る事が出来る

スタンド名 - メタル・ミリティア

本体 - 比留川勝海

破壊力 - D スピード - C 射程距離 - C

持続力 - B 精密動作性 - B 成長性 - B

能力 - 射程距離内の金属を支配する

? 肉眼で金属だと確認出来なければ支配出来ない

? 爆発や変形等はこの能力では出来ない

スタンド名 - ニューロティカ

本体 - 梶本雪那

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - D
能力 - 卵から孵って初めて見た物や人をターゲットとする
? ターゲットが動物の場合、初めて見るのが写真でも良い
? ターゲットの居場所は本能で察する為、逃げたり隠れたりしても
正確に追跡してくる
? 有精卵を使い、生まれるスタンドの為誰でも見える
? 有精卵が手元にある限り幾らでも『生産』する事は可能だが、有
精卵であれば何でもいい訳ではなく、刷り込みの習性のある鳥（キ
ジ類やカモ類等）の卵でなければならぬ

スタンド名 - ホーリー・ウォーター

本体 - 長篠京都

破壊力 - E スピード - E 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - A

能力 - 水に取り付き、実体化しているスタンド。触れた物の水分を奪い、その体積を増やす。勿論水に直接触れるとその分体積が増す

スタンド名 - モータープレス

本体 - 奥谷丈夫

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - B

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - D

能力 - 体を動かす事で、電気を発生させる事が出来る。作った電気は放出出来る

スタンド名 - プラズマティックス

本体 - 豊浜真義

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - A 成長性 - D
能力 - 外部から電力を取り込み、電力を自在に操る。本体は電気に
よる攻撃は無力化される

スタンド紹介？（後書き）

どうにか終わりました

『ディープ・パープル』と『ホーリー・ウォーター』の成長性はA評価ですが、これは能力が無制限に増長するタイプのスタンドだからです

それでは、次回から本編に移ります。宜しくお願ひします

ガンス・アンド・ローゼズ？（前書き）

札幌への旅行が終わり、春日部へ帰ってきた除夜達。その終わりは
始まりでしかなく……

ガンズ・アンド・ローゼズ？

除夜達が春日部に帰ってきてから翌日の夕方、焼き鳥デスペラード

そこの一つのテーブルには、藤方、トオル、マサオ、本荘、塩屋、御厨、庚、浅海、黒星、鵠、そして庚の膝の上に座っているひまわりは、各々が注文した物を頬張りながらしんのすけと除夜、宝来から土産話を聞いていた

因みに他のメンバーは用事があるのと今回はあくまでただ旅先の話聞いて盛り上がるだけの集まりであり大して重要性が無いのもあり、来なかった

「そんな事があつたんか……行かなくて正解やったなあ」

「かもな……」

「勝海の奴帰って来るのか……」

「ああ、まああいつがスタンド使いになつていたのは驚いたが……」

「話を聞くと逃げ出した死刑囚はこれで三人倒したって事になるね」

「うん……でもまだ何人もいるし、それにそいつ等だけじゃなくともスタンドを使って犯罪を犯している人達がまだいるだろうし……」

「『矢』やそれを優太から奪った奴の事もあるしな……心配事は減る所が増える一方だろうよ……」

楽しい座談会のもりで集まったのに、妙な雰囲気になってしまったのを肌で実感した。多分それは俺も一因しているのだろう。自分から言い出しておいて、憎悪に近い感情がそれをきっかけで湧き出して来ているのが実感できる

息を荒立て始めた時、俺の肩が誰かにポンと叩かれた

「瀬上君」

「宝来……」

「水」

「ありがとう……」

宝来から受け取った水を一気に飲み干した

「悪いけどみんなの楽しい雰囲気をこれ以上壊したくないからな。取り敢えず帰る」

「あ……ああ……」

俺は自分の分の勘定を払って外へ出た

「まだ……吹っ切れとらんみたいやな……」

「しゃーねえよ……沢登とあいつはこれ以上無いくらい仲良かったからな……」

翌日の午後一時過ぎ

今日は四限で終わりの為、生徒会の仕事のある宝来や本日委員長の集まりのある稲庭と違い、何の用も無い俺は、帰りのSHRが終了後直ちに帰路についた

「あ」

「お」

院までの距離も半分に差し掛かる地点で、ロンディネに会った。春日部に来てそれなりに経って道をそれなりに知っている筈なのに、地図を持っている。この辺りにある何かを探している様子だ

気になった為、ロンディネに話し掛けた

「何探してるの?」

「僕が何でこの春日部に来たか覚えてる?」

この言葉で、こいつの探している物の見当がついた

こいつはイタリアのギャングで、上の命令で春日部にいるとされるイタリア国民に麻薬を売っている売人のアジトを探りに来たんだった

「この連休を利用して聞き込みをしたりして西高須章雄に似た人物を目撃したって情報の頻度がここら辺に集中しているからもしかしたらここら辺にアジトを構えているんじゃないかなって……」

地図を見てみると、ここら辺を示す所に、小さな点が細かいスクリーントーンのように付けられていた。所々僅かな範囲ではあるが塗り潰された所もある

この点は目撃情報のあった場所と見て間違いは無い。そして塗り潰されている所は、その多くがこの辺に集中している

「アジトを構えるとなったら現実的に考えたら普通のマンションとか借家とか……一般人と変わらん場所だよな」

「まあね。映画とかでよくあるような無人島とか森の中とかじゃかえって目立つもんね」

「よし、元々こっちの事情に協力する代わりに俺等もお前の事情に協力するって約束だったもんな。探すの手伝うよ」

「いや、そんな……」

「後一步なんだろ？」

「つまりここまで探したんだな？」

「うん」

最初は渋っていたが、根負けしたのか俺が手伝う事を了承してくれた
俺が手伝う事を了承した最大の理由は、自分には戦える力が無いと
いう事だった

こいつの能力は自分一人では身を守る事も戦う事も出来ない。相手が
スタンド使いである可能性が高く、仮にそうだとしたらどんな能
力か分からない以上万が一戦闘になった時一人ではまず間違い無く
倒されてしまうからと、了承した後ハッキリと述べた

余談だが俺はロンディネに「何でお前だけ行かせたんだ？」と聞いたら

「僕の任務は売人の居所と、出来たらどんな能力を持っているかというのを突き止める事で戦闘は任務に入っていないから。後他の人は別の任務や『ポルポ』って幹部の「矢の試練」に巻き込まれてスタンド使いになった人達にスタンドの使い方を教えたりしていたりして手が空いていないから」

と回答した

つまりこいつに与えられた任務は本当にそれ一つだけと言う事だという何よりの証明だ

閑話休題

歩いている途中、妙な物が目に入った俺は、立ち止まってそれを凝視した

「どうしたの？」

「いや……最近この辺り来てないけど……この家ってこんなに花があっただけって思ってた……」

俺が目を凝らして見ている物……それは、屋根の一部が若干壊れ、壁に穴が開いていたり窓ガラスが割れたりしている、小さな洋館だった

広がる庭の内側にはバラや松、杉や檜等が植えられていて、それを囲うかのように小麦が植えられていた

「ここがどうかしたの？」

「いや、おかしいなと思って……」

「確かに……何で庭に麦が植えられているんだろう？」

「……それも確かに変だが……俺は去年の十一月末まで友達と連んで色んな所に出掛けて遊んでいたんだ。この洋館もその通りがけに時々見た事あるけど……この庭、雑木や雑草が生い茂るロクに整理されていない荒地同然の所だった」

別にそれは不自然じゃない。この洋館を新しく手に入れた人物がこっぴどいのが好きで、庭を整理して植物を植えたとしても何らおかしくはない

問題は『植物自体』だ。バラは雑誌とかに掲載されているローズガーデンの写真みたいになっている。松や檜も、植えられてから数年は経っているという感じだ。花も木も素人の俺から見ても見事に手入れがされていると思うが、これは技術云々の話ではない。どう考えても有り得ない。不自然極まりない

音を立てながら玄関の扉が開くと、そこから驚くべき人物が現れた

緑色の地に銀杏の葉の模様の入ったジャケットを羽織り、白い長ズ

ボンと黒い長靴を履いた、西高須章雄が出て来た。髪は染め、髪型は若干変え、眼鏡をかけているが間違いない。そしてそれはロンディネも気付いたようだ。俺はロンディネに耳打ちする

「なあ、あいつのいるのがここだと分かったんだ。ここは……」

「分かってる。帰ってボスに……」

「君達……こんな所で何をしているんだい？」

俺達に気付いた西高須は、極めて自然に俺達に声をかけた

「い……いえ、ここらに最近見事な庭があるという噂を耳にしまして……そこで少し拝見したいと……」

ロンディネが慌てて（と言っても、慌てた素振りを見せてないが）とっさについた適当な割には出来た嘘に、俺は感心した。西高須は俺達をジロジロと見る

「見た限り二人共日本人じゃないようだが……」

「こいつはそうですが俺は日本国籍を持つ日本人です」

「失礼」

「いや、僕最近日本へ機械の技術を学ぶ為に留学して……それで日本の農業や園芸の高い技術にも興味があつて……」

「君は？」

「成り行きでの付き添いです」

「……入りなよ。こんな所で見ているより間近で見た方が勉強になるだろ？」

「宜しいんですか？」

「構わないよ」

純粹な厚意からなのか、それとも何か企んでいるのか、俺達は招待された。あんな事を言った手前、断ると刺激しかねない為、中に入る事にした

ガンズ・アンド・ローゼズ？（後書き）

ロンディネの本懐である売人と除夜と本人が接触、勿論ただで済む
筈はありません

次回もお楽しみに

ガンス・アンド・ローゼズ？（前書き）

庭園に招かれた除夜とロンディネ。当然ただで済む筈はなく……？

ガンズ・アンド・ローゼズ？

西高須の屋敷の見事な庭へ招待された俺達は、取り敢えず小声で奴の前でスタンドを使わない事を決めた。奴がスタンド使いとするならスタンドを発現させれば見られるし、何をするか分かったもんじゃない。こちらから仕掛けるのはなるだけ避けなければならない

俺達は自分達が最初に言った通り見事な庭を見る事にした

「見事な技術ですね。素人の俺からしてもこの庭は心が奪われますよ」

「いやいや、趣味とはいえ長い事園芸やっていたからね」

「趣味？園芸が本業じゃないんですか？」

「いや、今は個人の販売業。少し前まではそこその大手企業で営業をしていてね。でも上を中心に販売が禁止されていた物を買っていたから、嫌気の差した同僚が内部告発を受けて警察の捜査が入ってね。それが原因で潰れちゃったんだ」

感心した。よくそこまで言葉を置き換えられるものだ

大手企業Ⅱ麻薬売買組織、営業Ⅱ麻薬の売人、販売が禁止されていた物Ⅱ麻薬、嫌気の差した同僚Ⅱ逮捕された売人、内部告発Ⅱその売人の証言……と言った所だろう。言葉だけ聞けば以前は普通の会社勤めしていたと取れる

それに『上を中心に』と言った。自分が関わっている事を肯定はしていないが否定もしていない

「どんな物を販売しているんですか？後、客層は？」

「自分が育てた植物を使った製品だよ。そのままじゃなくて植物の成分を抽出してだけだね。それが海外で結構好評だね。生産に忙しくて昨日までにようやく発注分を作り終えてね」

「そこで狙いすましたように僕達がここへ立ち寄ったと……」

「そうなるかな……折角来てくれたんだ。日の当たる部屋でプランターで作っているハーブ茶でも出すよ。植物も引っこ抜いたり茎や枝を折ったり……総じて植物を傷付ける行為をしない限りは触っても大丈夫だから。じゃあ俺の庭で何か学べる事があればいいね」

そう言つて西高須は屋敷の中へ入っていった

俺達は内側は見事としか言えない庭園を回りながら、この庭に生えている植物の中に何か不審なものは無いかを探っていた

「あ」

「どうした？」

「草刈り機が落ちてある」

ロンディネの指差した場所に、確かに草刈り機が一台あった。汚れがあまり無いのを見ると、多分置いてあると思う

ここに置きっぱなしというのも危ない為、持っていく事にした

「それよりロンディネ、あいつは俺達を見ていない。『サード？ア
イ？ブラインド』でスタンド力が確認出来るか・・・」

「もし確認出来たら？」

「最悪、この庭の庭園と麦畑を焼き払う」

「やっぱり……でもそうするのは惜しくない？」

「それは俺も同感だ。今はお前はお前が春日部に来た本来の目的を優先させるんだ。その為には確認は絶対に必要だ」

やや渋々といった感じで、ロンディネは自分のスタンドを発現させた

結果・・・

「当たり前だよ。ここの植物、小さな雑草とかを除いて全部何等かの
スタンドの影響下に入っている」

「それだけ分かれば十分だ。少なくともお前の任務である売人のアジトを突き止めるのとあいつが『スタンド使い』である事は判明した。今はこれだけ分かればいい」

ロンディネも同意だった

本心ではその能力の詳細も知りたい所だが、むやみやたらに欲したとしてもそれはいたずらに自分を危機に陥れるようなものだ。戦闘タイプじゃない自分がそうなるのは好ましくない

玄関のドアから、ビسケットとオレンジジュース、そして赤いジャムの入った容器をお盆に乗せた西高須が出て来た

「どうだい？勉強になった？分からない事があつたら僕の知る範囲で教えるけど……」

「いえ……それよりハーブ茶をご馳走してくれる筈では……」

「ごめんね。昨日ハーブを収穫して全部加工したの忘れてたんだ。このジャムはハーブ類と同じ場所で育てている木苺から作ったんだ。ビスケットに付けて食べてよ」

無碍に断って刺激するより、食べた後即座に帰る事にした

「あれ？その草刈り機どうしたの？」

「あちらに置いてあったので……ほっといたら危ないかと思いつてきたんです」

「済まないね。後でなおすからこの場に置いて」

草刈り機を足元に置き、クッキーにジャムを乗せる俺達。ジャムと言ってもスーパールとかで売ってあるような果実を潰した物ではなく、手造りらしい果実の形を保ったジャムだった

食べてみると、かなり美味しかった

「お味は？」

「かなり美味しいです。宜しければこれの作り方を教えて貰えませんか？」

「いいよ」

俺はクッキーを片手に、このジャムの作り方を熱心に聞いた

ジャムの作り方を聞いていたら、もうクッキーもジャムも無くなっていた

「すみません。もう俺達帰ります。こいつの学校今日は開校記念日で休みなんです俺は下校してすぐに来たんで」

「そうか……でも残念だね……お前等はもうこの屋敷から出る事は出来ない。我がスタンド『ガンズ？アンド？ローゼズ』の術中に既にハマっているからな……」

今までの友好的で物静かな態度から、一変して表情が変わった

危険を感じた俺達は、逃げようとしたが突然体が『痺れだし』、まともに動く事が出来なくなつた！

「逃げられたら困るからな。取り敢えずこれでお前等は体を動かす事は叶わない……安心しなよ。クッキーの材料はただの痺れ薬程度に設定した『小麦粉』だ……命に別状は無いし喋る事は出来るよ……」

「それがお前の能力って訳か？」

「一から十までを話す必要は無いか……俺は自分が育てた植物の『成分』を自由に弄る事が可能なのだ。それによつてたとえば砂糖に麻薬の中毒性と依存性を持たせる事が可能だし、食べたら聞かれた事をどんな事であろうと喋らざるを得ない強力な自白剤の作用を持った成分を含むジャガイモだつて作る事が出来る……それが俺の能力！」

「随分と親切だな……自分の能力を簡単にホイホイ教えるなんて……」

「術中に嵌ったから教えるんだ。もし予め教えていたらあのジヤムを食べたか？」

教える理由が後半の台詞に集約されている

「その能力をどうやって手に入れた？」

「数ヶ月前に沢登優太ってガキに会って『矢』に射られた事だ……当然お前の事は知っていたよ瀬上除夜君……そして今年度に入って俺の事を探し回っている『パツシヨーネ』の一員が日本に来たって情報が入ったしな……まあその二者が雁首揃えて来るとは流石に夢にも思わなかったけどね」

「それで……俺達を殺すのか？」

「瀬上君は当然ね。だけど死体が見付からないようにする、見つかった所で身元は分からないようにする。この春日部の街は純粹な意味で大好きなんでね。愛着があるから健やかな気分で暮らしたいんだ。君の仲間から逃げ回る生活なんて真っ平御免だよ」

「ロンディネはどうする？」

「生かしておいてあげる。始末したらパツシヨーネが新しいスタンド使いを送り込んでくる可能性があるし。俺は能力も自分自身も戦闘向きじゃないんでそうなたらまず確実に始末されてしまうし。但し深い催眠状態にして操り人形になって貰うけど」

成程、伊達や酔狂で海外に麻薬を売っていた訳ではないようだ。『もしそんな事をしたらどうなるか』とかはちゃんと視野に入れて考えている

みすみす殺されるつもりはない。『やられる前にやれ』はあまり好きではないが、そうするしかない。だが、どれだけ体に力を込めようと、体は起き上がらない

「あれ？」

妙な事に気付いた。体中が痺れて口々に動けないのに、口の前にある自分の左手は、『比較的動かす』事が出来たのだ

成分の作用を無力化出来る方法はあるのかも知れない。それを見つける為には時間を稼がないといけない

どこまで時間を稼ぐ事が出来、そしてその時間までにそれを見つけ出す事が出来るかだ

まさに『時間との戦い』と言つに相応しい戦いが、今幕を開けた

ガンス・アンド・ローゼズ？（後書き）

スタンド名はアメリカのロックバンドからです

次回もお楽しみに

ガンス・アンド・ローゼズ？（前書き）

時間稼ぎをし、解明しようとする除夜

ガンズ・アンド・ローゼズ？

取り敢えず口は動かせる。なるだけ質問してその傍ら作用の無力化、出来ないならせめて弱体化する方法を探ろう

「麻薬を使ったらどうなるか知ってるのか？」

「少し例を上げると、幻聴、幻覚を引き起こしたり、情緒不安定になったりする……それによって被害妄想を引き起こしたり、麻薬を買いお金欲しさに犯罪に手を染め、何もかもがめっちゃめっちゃになる……そんなの中学や高校に通っていれば誰だって一度は習うよ」

「なら何故その麻薬を商品にしているんだ？」

「俺の『昔からの夢』の為さ……俺は麻薬を使って世界征服するのがガキの頃からの夢だったのさ……」

「……は？」

俺は思わず声を上げた。理由はこいつが今述べた事が理解出来なかったからだ

麻薬で世界征服？どうしたら出来るんだ？

「分からないみたいだね……そりゃそうだ。麻薬を使って世界征服を遂げるなんて馬鹿げているよね……俺が君の立場でもそう反応し

たと思うよ……」

「出来るのか？」

「それは分からない。けど俺は『やるんだ』」

よし、この流れは時間を沢山稼げる流れだ。利用しない手は無い

「目的を達成するには計画が必要だろ？それは考えているのか？」

「何当たり前な事言ってるの？当然じゃん」

「その計画って言うのをなるべく具体的に説明して欲しいな。興味があるから」

「瀬上君は死んでしまっし、ロンディネ君は自我が無くなっちゃうんだから教えてあげる。そもそも俺が麻薬の売人になったのは最初からそのつもりだったからだ……組織が壊滅してしまったのは想定外だが結果的に俺のプランはより改善しより確実な物となった。物事はどう転ぶか分からない物だね」

「前置きはいい。あんたは俺達に『話す』と言ったんだ。一切の嘘偽りなく話して貰う」

「ピンチに陥っているのは君達の方なのにやけに強気だね……まあ構わないよ。そう言ったのはこっちだしね。嘘偽りなく話すよ……それよりこの体勢キツくない？椅子持ってきてあげるけど……」

よく言う。こうしたのは自分だろうか

「何を行うにも先立つ物は必要だからな。後ろ盾の無くなった俺はまず、どこかに拠点を作り、そこで麻薬を製造する事にした。海外に売り出したのは単に顧客の層を厚くする為だよ。売買は実に簡単だったよ。『ガンズ・アンド・ローゼズ』で作った成分はどれだけ高度な技術をもつてしても検出する事は出来ないし本物の小麦粉とか油とか香水とかを売り出すんだから金のかかる裏ルートを使わず、堂々と正規の手順で正規の値段で正規の業者に頼む事が出来るからね。これが今の第一段階。因みにこの時点では依存性は強いが中毒性が弱い物を、高くて精々キ口数万〜十数万という安価で売り出す」

何処が安いんだよと思ったが、即座に撤回した。種類にもよるが麻薬はキ口数千円するという。作るのは自分一人だから人件費はゼロだし、植物の種や苗とかは数千円あれば大体纏めて購入出来るし、いざとなれば山や河原とかで採取すれば材料費すらもかからない

諸経費をさっ引いたとしてもボロ儲け出来るというのは確かだ

「そして資金が潤沢になったらそれを元手に会社を二つ作る。食品や化粧品等を製造する会社と、それを取り扱う会社の二つを、裏で作るんじゃないかって堂々と。但し俺は指名手配食らっている身だから誰かそこそ自己主張の出来る人間に社長の椅子に座らせ、裏で糸を引く。俺自身はそこそ広い土地を購入し、短期間で荒れ地でも

よく育ち、狭い土地でも沢山収穫出来る作物を作り、それを俺が創設した会社に取り扱わせる。つまり顧客の拡大だな。それが第二段階。この時点で依存性はそのまま、そしてより中毒性が高く、短期間で薬の効果が切れ、そして耐性がつきやすい薬を、キ口数千万で販売する。一度使えばそれこそ薬抜きでは生きられないって薬をね……」

「短期間で荒れ地でもよく育ち、狭い土地でも沢山収穫出来る作物？」

「あるよ。例えば粟、稗、黍……『雑穀』と呼ばれるそれらは米が食べられない農民の主食だったし、薩摩芋なんかは御存知の通り戦後の日本人にとって大勢の人を飢え死にから救ってくれた。それは塊根から蔓まで食べられたからもあるけど何よりこの条件を満たしているからだよ」

「まさかこんな所でそんな話を聞く事になるとはな……」

「そして第三段階……それは、一般人向けの麻薬の販売を止め、麻薬中毒を治す薬をタダ同然の値段で世界中に配る。そして少し間を置いて全世界の要人に麻薬を配る。今までに売るような物ではなく、より素晴らしい快樂を得られる成分をしたね……一時的に販売した後、一部の俗に言う発展途上国数ヶ国にその麻薬をタダで大量にプレゼントする……無論薬漬けにした上でね……」

「一時的って……」

「そう、その発展途上国数ヶ国以外の麻薬の取引は止める。そして先進国に「その数ヶ国が薬を独占している」と囁く。麻薬があるかどうかは科学分析とかでは分からなくとも駆け引きとかで分かるも

のだ。役人は薬害に侵されていて、しかも薬の性質上薬無しでは生きていけない程禁断症状は辛いから適当にもっともらしい理由をつけて戦争を仕掛ける……俺は戦争の準備中に興奮剤等様々な薬を先進国側に売りつけて金を搾り取る……搾り取った金で最新兵器を購入し、数ヶ国に赤字覚悟の捨て値で売り飛ばす……米軍がベトナム戦争以外の戦争で勝ってきた最大の理由は戦車、戦闘機、空母、爆弾等の兵器の差だと言ってもいい。その差を徹底的に埋める。多分その戦争は第三次世界大戦となるだろう。戦争を長引かせるだけ長引かせ、頃合を見て話し合いの場を用意する」

「それで？」

「話し合いの場には各国の首脳陣達を集める。そして自我を奪い、操り人形にする薬をお茶なり食事になり混ぜ、彼等を水面下から操る……これが俺の計画だ。まあ細かい疑問は幾つか浮かんだだろうがそれは説明するの面倒だからしない」

話が大き過ぎる。こいつの能力があれば確かに実現可能だ

「さっきも言った通り細かい事は答えないけど大まかな事なら答え
てあげる」

よし、指は大体動くようになった。そして成分の無力化、または弱体化の大体の予想はついた。もう少し……もう少しだ

「あんたの目的が突き詰めれば首脳陣の自我を薬で奪う事なら……何でそこまで遠回りに計画するんだ？手っ取り早く首脳陣に薬を飲ませれば……」

「より確実に薬を飲ませる為さ……さつき「手っ取り早く」って言ったけど目的達成には時間がかかるのが当たり前だし失敗や障害があつて当然だ……それに『急がば回れ』って諺があるように遠回しに物を進めたが結局円滑に物が進むんだよ」

「話を聞く限り相当な時間がかかりそうな計画だけど……どれくらいを予想してるの？」

「少なくとも二十年から三十年……目的を本気で達成しようと思つたら結果だけを求めたら躓くし、達成出来ても大きな綻びを生む……プロジェクトの大きさから考えてもこの予定期間は何も間違つてないよ……」

「成程ね……あんたの計画は確かに実現可能な物だ……だがあんたの計画はあんたがいるからこそその計画……つまりあんたを今ここで倒せばあんたの計画は完全に机上の空論となる……」

「まあそうだね……『ガンズ・アンド・ローゼズ』は俺の能力だし、俺がやられたらその時点で完全に失敗するね……でもどうするの？俺がここにいる事や俺の計画を知っているのは君達二人だけ。そして君達は二人共俺の能力に嵌り、体が痺れてロクに動かす事が出来ない……今度はこつちから聞かせて貰うが……で？何を企んでいるんだ？何か企んでいるってのは目や表情を見れば分かる事だよ……」

やはり気付いてくれない程甘くないか……

だがいい……既に『判明している』！

俺は上半身を起こし、間髪入れずに西高須に拳を打ち込んだ！

「成程……『その為』に時間を稼いでいたという訳ね……」

殴られた箇所を押さえながら、西高須は納得したように言う

俺は、スタンドの腕で腰や足を『強くさすりながら』立ち上がった

「あんたのスタンド……『ガズ・アンド・ローゼズ』だけ？ それの成分……『高い熱』に弱いんだろ？ 吐息が何回か当たったら当たった部分の影響が弱まるくらい……だから常温のビスケットに冷たいジャムを出してハーブ茶は出さなかったんだろ？ 体が温もるからな」

「ハーブ茶を出さなかったのは素で切れているのを忘れていただけだ……冷やしたのを持ってくるつもりだった」

「で、それが分かっただら対応策を出すのは簡単だったよ……見えなようにスタンドの腕を出してあんたの視界の死角となる部分を『乾布摩擦』の要領で擦って暖めた……まあ分かったのは幸運が重なった上での結果に過ぎない。少し間違っていれば確実にあんたに始末されていただろうから……」

「仕方無い……君を今ここで始末しなければ……俺の計画は完全に頓挫してしまうという事か」

「そんな馬鹿げた野望、今ここでお前を倒す事で阻止してやる！」

ガンス・アンド・ローゼズ？（後書き）

西高須の目的はこんなです。自分でも遠大だとは思いますが、ここまで遠回りじゃないと現実に成功しないと思います

因みに、麻薬が原因で戦争になった阿片戦争が（作者が）この計画の発案に至った理由です

次回もお楽しみに

ガンス・アンド・ローゼズ？（前書き）

麻痺状態から回復した除夜。反撃なるか！

ガンス・アンド・ローゼズ？

これが一時的な物なのか、それともずっと続くのか、少なくとも麻痺状態は抜け出した。ロンディネも回復させないとならないが、簡単にはさせてくれないだろう

そしてそれは分かりきっている事だ

俺は草刈り機の燃料タンクを見て中身が入っているのを確認し、即座に作動させた。回転する刃を、西高須の足に向けて振るう

西高須はそれを軽々と避け、袖から液体の入った『スプレー』を取り出し、向けた

「いけないなあ……草刈り機は人体を傷付ける物じゃなくて雑草を刈り取る物だよ……」

中身を噴射させる。若干掛かったが、意に介せず草刈り機を西高須へ投げつけた

「ゴラゴラア！」

草刈り機にラッシュを叩き付け、粉々に壊す。部品や燃料タンクに入っていた燃料は辺りの植物に飛び散った

バラバラとなった草刈り機の刃を掴み、西高須へ放り投げようと振り被った

「？」

突然、「スプレーの中身の掛かった腕」が、猛烈に「痒くなった」！腕を見てみると、掛かった部分が「かぶれていた」！我慢する事出来ない猛烈な痒みに、刃を手放し、爪を立てた

その隙を逃す筈もなく、俺は地面に引き倒され、ポケットから小瓶を取り出し、スポイトで爪で引つ掻いた為出来た傷に数滴落とした傷口から、まるで何かが中から暴れているような激痛が走る。数秒経つとその痛みは消えたが、数秒経つと再発した

「これは本来拷問用で作った物……持続性は無く個人差はあるも一分しか持たないが、血液に直接注入する事で激痛と鎮静を数秒の間隔で繰り返す……そして」

また新しい小瓶を取り出し、スポイトで傷口に垂らした。体が痺れて指をスローで動かす以外の事は出来なくなった。今度は顎どころか舌も口々に動かす事も出来ず、呼吸もやや苦しい

スタンドも自由に動かす事が出来ず、射程距離内を這うように動かす事しか出来ない。このまま力押しで倒せると思ったが甘く見えてい

た。出来ないならまあいい。一応策は一つ考えてある。下準備も既に出てくる

やるなら今だ

西高須はロンディネに俺を麻痺させた液体を傷に数滴垂らすと、俺の目を覗き込んだ

「まだ希望は失ってないみたいだね……少し話したいから舌と顎を動かす程度には弱めてあげる……今度は麻痺した体に吐息をかけて温めようとするなんて小細工はさせないし、『スタンド』は口クに動かせない……だからスタンドで擦って体を温めるなんて小細工も出来ない……」

今までと違い、三重丸が描かれた貼った小瓶を取り出し、スポイトで俺の傷口に数滴垂らした

「さて……これで自由には言えないものの喋れるようにはなった筈だ……その口から聞かせて貰うぞ。お前が何故そんな目をしているのかという根拠をな……」

呼吸こそまだ苦しいが確かに普通に喋れるようになったのを実感し、俺は軽く笑って喋った

「あんたってさ……人の目を観る眼力や……遠い場所を広範な視野

で見る目は……持っているのに……目先にある事実を見る目は無い
みたいだな……」

「どっという事だ？」

「俺は……あなたのスタンドが作り出す成分を弱められる……方法を
知った時……その手段として擦って体を温めたけど……何で擦れ
ば温まるのか……それ分かるか？」

「……何を言ってるんだ？俺はお前に何を思っているのかを聞いて
いるんだぜ……」

「答えてくれ……」

「『摩擦』だろ？」

面倒そうに応えた

「そう……木を擦れば火が出来るのはその摩擦の力によるものだ……
……」

「それくらい常識だろ？義務教育きちんと受けていれば誰だって知
ってるよ」

「さっき俺は草刈り機をぶっ壊したの……刃を機体から外すだけじ
ゃない……本命は寧ろ『中身』の方なんだ……充電とか必要としな

い機械の燃料って色々あるけど……元は基本的に『石油』だよね……
…当たり前な事聞くけど石油って燃えるよね？」

「随分当たり前な事をまた……」

「俺をよく見てみなよ……喋れるようになったとはいえ呼吸が困難である筈なのに今結構スムーズに喋れている事に何の疑問も感じないのか？そしてよく考えてみる。体を擦る以外に、「体を温める」のに使われる一般的な方法を」

俺は若干感じる体の痺れに耐え、立ち上がった

「バカな……有り得ない……」

「周りを少し見てみな……そうしたら俺が立ち上がれている理由が分かると思うからよ……」

庭園の、『俺のスタンドの射程距離内』に入る場所の何ヶ所かに、『煙』が上っている

「まさか……植物を『燃やした』のか？」

「正解……あんたが自分のスタンド能力の弱点を知らない筈は無いし、当然俺達に見破られた場合何かしら対応を取ってくる事は分かっていた……そしてあんたがまだなのかどうかは知らないが作用その物で人を殺せる成分が作れない事は分かっていた……と言っても

最初の麻痺を解いた時点では推測の域に過ぎなかつたけどな。何故そう推測したのかは『ジヤム』だ。あんたの能力なら人を殺める作用の成分を作る事は出来る筈だ。なのに俺達を麻痺させただけだった。これがまだ推測の域だったのかは殺したら厄介な問題になるだろうロンディネも一緒に食べる事になるから……と考えられるからだ」

「その推測を確信に変える為に……」

「そう、あんたの能力で俺がまた動けなくさせられる事も頭に入れていたよ。スタンドがともに動けなくなる程強いのは予想外だったがかえってうまくいった……あんたが油断してくれた事で……本当に世の中何がどう転ぶか分からないもんだね……」

「ま………待て！言っている事は理解出来る！だが、どうやって火を……」

俺は『擦り切れて血が滲み出ている右手の指』を見せた

これを見て、どうやって火を点けたのか察したようだ

「そう、さっき体を温めたのと同じ要領………水気のある根付いた植物に火を点けるってのは燃料があっても大変だったけどな………スタンドと本体は基本的にリンクしているからスタンドを通じて………後はもう言わなくていいよね？」

『プラネット？ルビー』を出し、接近する

「まだだあ！」

西高須はスプレーを出し、俺の目に向けて中身を噴射した。目に水が入った事で、俺は目を瞑ってしまった

俺は射程距離から奴を逃がさぬよう、取り敢えず全身した

「これは本来目にかける物じゃないし火の熱が作用を無力化させてしまう……だが、一瞬でも視界を奪えばそれでいい……お前の命も、ロンディネを操り人形にする事も諦めてやる……愛着のある街だが止むを得ない……逃げてやる！お前等の手が届かない場所まで！俺は世界を統べる男だ！こんな所でお前等如きをどうこうする事に拘って倒されるなんてアホな真似はしない！してたまるか！」

「安心しなよ……あなたはもう後ろを気にしたりする心配は無い……あなたはもうあなたの長ったらしいスパンに基づいた計画がどう成功するかとか悩む事は無い……」

俺が糊付けされたみたいで開く事が出来ないから奴の顔は覗く事は出来ないから、どんな表情しているのかは分からない

「俺は多分今あなたの真正面にいるだろうが、それは俺の『プラネット？ルビー』の能力による物だ。『軸』となる物を設定していれ

「ゲブ……ゴ……」

「ゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラ
ラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴ
ラ」

「ゲ……ゲブ……ゴゴ……」

「ゴラア」

ラッシュを食らい、最後に思いつ切り殴り飛ばされた。殴り飛ばさ
れた先には松があり、その松に体を叩き付け、西高須は地面に横た
わった

「……ロンディネ、悪い。任務以上の事をやっちゃまった」

その後俺は音を頼りに火のある場所に向かい、熱で視界を閉じてい
る成分を無力化させ、ロンディネの麻痺状態も回復させた

ガンズ・アンド・ローゼズ？（後書き）

どうにか終わりました。西高須があの後どうなったかは、次回書きます

最後のラッシュは、文庫版38巻の最後のあれをイメージして下さい
い（笑）僕はあれを見て気分的に凄くすっきりしました

では、次回も宜しくお願いします

任務をやり遂げた男が次にする事は…（前書き）

前回西高須を倒した除夜達。そしてロンドンディネは……

任務をやり遂げた男が次にする事は…

除夜が西高須を倒した日の深夜十一時過ぎ

ロンディネが泊まっている部屋

そこで、ロンディネは電話をかけていた。かけた先は彼のボス達にいるイタリアだ

三回のプッシュの後、繋がった

『ふー……間に合ったぜ……どうにか「四回目のプッシュ」が鳴る前に受話器が取れたぜ……』

「『ミスタ』さん？」

『お、この声ロンディネか？何の用だ？』

「えっと……ボスは何処へ？」

『『ジョルノ』は今少し所用で『フーゴ』と一緒にローマに行ってる。俺は留守番。ジョルノに言いたい事があるなら俺が伝えとくか』
『う』

「はい……言い渡された任務を完遂しました」

『本当か？よくやった！で、そいつは今何処にいる？』

「まだ終わってません。慌てないで下さい」

「?」

「西高須章雄はスタンド使いでした。それと……春日部にいた協力者が彼を倒して日本警察に身柄を拘束されました」

「ほ……本当か?」

「ええ……詳しく説明しますが協力者の彼もスタンド使いです。しかし彼は『矢』とは関係ありません」

「分かった。その事はすぐにジヨルノに連絡する。お前もすぐに……」

「その事なんですけどミスタさん……少し我儘を聞いて貰えませんかしょうか……」

翌日、昼休み

県立星陵高等学校の生徒会室

そこに、現在、除夜、琢磨、宝来、稻庭、ロンディネが集まっていた。生徒会室の主であり生徒会長の多嶋は現在委員会の予算の話し合いの為別の教室に行っている。残りの副会長、書記、庶務もそれぞれの仕事で現在ここへは来ない

「一個聞いていいか宝来」

「何？瀬上君」

「俺達の学校名……今初めて出て来なかったか？」

「出てきたね……そして私も一つ質問して宜しいかな？」

「何だ？」

「何でこの学校とは何の関わりも無い須藤さんとロンディネ君が普通に校舎内に入っていて、普通にお茶飲んでるの？」

番茶を飲みながら本（琢磨は広辞苑、ロンディネはピンクダークの少年のイタリア訳版）を読んでいる二人に、宝来は指を差した

「確かにこの学校昼休み中は部外者も入れるけどそれは食堂と図書室限定でしょ？何で校舎内の生徒会室に二人がいるの？」

これは事実だ。この学校は昼休み中は火曜と金曜だけが調理部が担当しており、その日は学校関係者以外も利用出来る

その曜日だけ調理部が担当しているのは、「外から調理師雇うより、一日二日だけでも生徒がやれば安上がりだから」と俺達一年はまだ見ぬ校長が言っただけでそれが職員会議で多数決で決まったかららしい（勿論調理部にも見返りはあり、担当の火曜、金曜は三限と四限は調理部は公欠扱いで、売上の四分の一を調理部に還元するという約束

をしている)

学校関係者以外が利用出来るのは、火曜と金曜は通常価格の半額の為なのと、上述した約束の為である。俺が知っているのは時々手伝いを頼まれる時があり、その時間いたからだ。それを聞いた時、俺はこの学校の行く先に不安を覚えた

図書室は置かれてある本が充実しているからだ。それこそ、乳飲み子に読ませる絵本から書いてあるのが日本語だとは理解出来るが何が書かれてあるか理解出来ない専門書。他にもゲームの攻略本やら数十年前に発行された新聞やら高校の図書室に置いていい物ではない18禁の本(流石にビデオ店のアダルトビデオコーナーのように別にされているが)やらが置かれてあるので、図書館が休みの日だったり読みたい本が図書館に無い場合、部外者が借りに来る

閑話休題。俺は宝来にこいつ等がいる理由を簡潔に説明した

「琢磨とロンディネは俺が呼んだ。先生にも事前には許可は取ってある……で、ロンディネ。俺達を集めた理由は何だ？」

今回召集をかけたのはロンディネだ。理由は今朝出来るだけ早く知らせたい事があると言ってきたからだ

昼に集まる事となったが何時もの集合場所である「焼き鳥デスペラード」は開いてないし、開いているとしても校外への勝手な外出は出来ない。俺の提案で生徒会室を集合場所にし、時間帯と場所的に都合がつく者のみ集合する事となった。だから集まったのが学校関係者が集中しているのは自明の理だ。琢磨がいるのはこの日は休日

だからである

「そうだね……まず西高須章雄の処遇なんだけど……」

「それを教える為に召集をかけたの？」

「協力してくれたんだから知る権利とかはあると思って。後で聞かれるのも少し面倒だし今言った方がいかなと思ひまして。隠す程の事でもないし」

「君結構律儀ですね」

俺達が昨日戦ったヘロイン西高須こと西高須章雄は、警察に逮捕された後、パッションネが裏で根回しして、身柄をイタリアのネアポリスへと送られる事が決定された

本来は始末する予定だったが、ロンディネから彼のスタンド能力を聞いた上層部は、制裁を加えた後、彼の国籍をイタリアに移し、麻薬中毒者の症状を緩和する成分を製造する事、生涯監視付で軟禁する事を条件に、身の安全と安定した生活を保証するという取引を結ばせる事となつたらしい

それを聞いて宝来や稲庭は「甘くない？」と意見を述べたが、俺はそれが一番いいと思った

体で実感したが、あの能力は『善いも悪いも使う奴次第』の能力だ。能力を潰すより『善い使い方』をさせた方が世の為だ。そしてその

使い方は、『善い使い方』だ

「それで、ロンディネ君はどうするんですか？どんな形であれ任務を終えた以上春日部にいる必要は無くなった訳でしょう？」

「それ？この騒ぎが一段落するまでいる事にしましたけど……最後まで任務に協力してくれたせめてものお礼として」

「て事は……組織の人に俺達や『矢』の事を喋ったのか？」

「うんにゃ、喋ってない。「ボスの生まれ故郷の日本はいい国だからもう暫く観光したい」と嘘をついた。これは僕個人が関わった問題でパツシヨ―ネは関係無いからね。そう言ったとしても問題が問題だから……」

「言いたい事は大体分かる」

この後取り留めのない雑談をし、授業五分前の予鈴が鳴ったと同時に、解散となった

放課後。 げた箱

宝来は帰宅の為外履きを出すと、靴の間に挟まっていた茶色い便箋が足元に落ちた

拾ってみると、鉛筆書きで丁寧な文字で自分の名前が書かれてある。自分宛なのは間違い無い

放課後のげた箱に入れてあるという事は、もしかしたら恋文かも知れない。そんな根拠だけでこんなありきたりな発想しか出来ない自分は想像力が乏しいなと思いつながら、人目のつかない場所に移動して便箋の中身を見る事にした

「もしかしたら不幸の手紙って奴かも知れない……」

便箋を開封した後、宝来はそんな事を考えた

だが、どんな内容だろうとそれはたかが紙に書かれた文字でしかない。そんな物に動揺したりする等愚の骨頂だ

意を決して広げると

もしお暇であったら、『河馬の尻公園』まで、お一人で来て下さい

七時まで待っています

と書かれていた

こんな内容なのだから、まず告白だと思つ。だから、この手紙を書いた人が河馬の尻公園にいるだろうから、丁寧に断ろう。そう思った

任務をやり遂げた男が次にする事は…（後書き）

ロンドンディネは残らせる事にしました。まだ活躍させたいので

宝来に送られたラブレター（仮）。これがまた新たな騒ぎとなります

では、次回もお楽しみに

禁断の愛を育もう!?(前書き)

ラブレターを貰った宝来は、断る為に公園へ向かうも……

禁断の愛を育もう!?

午後六時、河馬の尻公園入口前

「放課後のげた箱に入れてあってこの内容って事はまだいるわよね」

断る為にここまで来た宝来だが、心境自体は複雑だ。何せ彼女は恋愛経験が無いのだ。こんな風に恋文が送られたりした事は無い為、嬉しいという気持ちはある

それに、送った側も意を決して書いて出した筈だ。果たして、なるだけ傷付けず上手く断れるかどうか自信は無かった

それ故に、どうしても目の前の一步が踏み出せない

「どうしたの瑪瑙ちゃん？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえたので、バツと振り向くと、野菜の詰まったエコバックを右手に持ち、左手を上げて振っている除夜の義母がいた

「て……あ……おば……お……お……お……おばさん、驚かさないで下さいよ」

「これはみんなに言えるけどいい加減スムーズにおばさんって言いなさいよ……それなりの仲でしょ」

「死ぬまで難しいと思います」

「所で何か悩み事でもあるの？これでも53年生きてるんだから頼りになると思うよ？」

「よく分からないけどそれ以上生きてるんじゃないですか貴女……」

ここで一人で悩んでいるよりかはマシかと思い、恋文の事を話した

「以上です」

「じゃお赤飯炊かないと」

「何故炊くんですか？」

「ま、冗談は置いて、断ろうと思っているんだよね？何で？」

「何でって……あたしは男女の関係に対してはそれなりの憧れや関心はありますけど……詳しい事は言えませんが今それ所じゃないんです……それに、まだあたし自身の気持ちが分かってない内に恋人として付き合うのはこの人に失礼だし……」

「それを伝えたらいいじゃん」

「はい？」

「選ぶ権利は誰にでもあるよ。だから今の気持ちを堂々と返事として言いなさい」

「分かりました」

「頑張つてね」

義母の声援を受け、公園に入る宝来。時間が時間な為か、人はいない

「てか……この公園の「何処にいるの」？この手紙出した人……」

手紙に書かれてあるのは、『河馬の尻公園』に、『午後七時まで待つ』である。公園の何処で待っているのかは書かれていない

「まあいいや」

『もしかして悪戯だったのか』という考えが頭によぎったが、まだ時間はある事だし、捜してみる事にした

公園の敷地面積は広いものの、人が隠れそうな所は限られている為、捜し始めてすぐに見付ける事が出来た

その場所とは、遊具として設置されているトンネルの中。明らかに人を待つ場所じゃない

捜し出した人物を見て、宝来は自分の目を疑った

「宝来さん！私の為にわざわざ時間を裂いていただき誠にありがとうございます！」

「えっと……という事は、やっぱり貴女がこの手紙を……」

「はい！」

トンネルの中にいた除夜や宝来達より少しばかり年下の「女の子」は、元気良く返事した

トンネルからベンチへ移動し、宝来と灰色のセーラー服に、上にブローチをつけた蝶ネクタイをし、頭に交差するよう二つの光沢のある緑色の力チューシャをつけた少女は、座り込んだ

「えっと……改めて自己紹介しようか……あたしは宝来瑪瑙。君は？」

「私は土浦心優つちうらこころみゆと言います。今年で15歳になります」

「その制服……あたしが通っていた中学の四つ隣にある私立梅棹学院のだよね？」

「学校を御存知で光栄です」

「えっと……それで」

世間話を切り上げ、一番聞きたい事を聞くのを決意した宝来だった

「この手紙……何の為にあたしに出したの？」

「はい！あ……あの……宝来瑪瑙さん！私……貴女の事を、一年前からずっと想っていました！お願いです！私と結婚を前提としたお付き合いをして下さい！」

宝来は予想していたが予想を越えた返事を耳にして、思いつ切りずっこけた

自分の隣にいる少女は、何を言っているのだろうか？言っている事が飛びすぎている

そもそも彼女は現在の日本の法律を理解しているのだろうか？同性婚は日本では出来ない。海外で結婚式を挙げるつもりなのだろうか

「土浦……さん？」

「心優と呼んで下さい！」

「心優……ちゃん？何でいきなり……？」

「すみません……幾ら何でもいきなり過ぎますよね……今日は……自分のこの気持ちを瑪瑙さんに伝えられただけで満足です……我が儘なのですが……もし宜しければ……今度の土曜……五時頃……御返事を貰いたいので……お暇ならここに来て貰えませんか？」

「ちょっと心優ちゃん！あたしも貴女に幾つか聞きたい事があるんだけど……」

「出来れば……それは今度の土曜に……今恥ずかしくて顔から火が出そうなんです……失礼します！」

土浦は立ち上がり、ダッシュで公園から出て行った。後には、当事者でありながらやや置いてけぼりとなっている宝来が残された

「中々衝撃的な場面に出会してもうたな……」

「うん。ここにネネちゃんがなくて良かったね」

しんのすけと藤方の二人が、宝来の座っているベンチの後ろにある茂みの中から顔を出した

二人の声を聞き、宝来は二人に顔を向けた

「何時からいたの？」

「そりゃあんたが……えつと……あと……お、おば……」

「除夜のお兄さんのお義母さんと話してた時から」

引っ掛かりながら言う藤方に代わって、彼女に対して適切な言葉でスムーズに言った

「……かなり初めの方からというのがよく分かった。二人共横に座りなさい。ここにずっといたら虫に食われるわよ」

「瑠璃姉さんも隅に置けへんなあ」

「あたしや今の気持ち複雑なんてもんじゃないよ。女の子からあんな事言われるなんて思ってもいなかったもん」

「ま……普通は思わんわな」

「それでどうするの？断るの？」

「彼女には悪いけどそうする」

「彼女はタイプちゃうんか。ほんならタイプはどんな女の子なん？」

「あたしはゴモラの女じゃない」

「成程、という事はバイセクシャルという訳ですな」

「違うわ！何でこんな結論になるんだ！あたしは普通に男性だけが恋愛対象です！」

「でも……女の子からのラブレターを読んで書かれてある通り来たよね？」

「結果的です！」

「ムキになる所がまた怪しいなあ……」

「女子校に通っているのならまだしも共学の学校に通ってて同性からラブレターを貰うなんて考える？しかも直接手渡されるんならまだしもげた箱の中に入れてあったんだよ？」

「そうだね」

「せやな」

「二人共、他の人には絶対喋らないでよ。お願いだから」

「五月だけど今日は随分と冷えるねー……」

「せやなあ……コンビニのおでんを食べて体を温めたいなあ……」

「はいはい買いますよだから黙っててね。言っとくけど消費税込みで一人五百円までね。それ以上は駄目！」

『ふむ、私も頼むぞ』

「はいはい……とんだ出費だよ……」

『ハリケーン』の分はスタンドで本体がしんのすけの為、支払いたく無かったが自我を持ち、勝手に話してしまう事が危惧される為選択肢は無かった

千五百円の出費は意外と痛いものだが、知られた場合必然的に起こる騒ぎに比べたら安いものだ。そう思おう

「言っとくけど本当に喋らないでよ。約束だからね!」

「分かつとる。うちら口が堅いのが自慢やから」

「本当に誰にも喋らないでね!」

二人に何度も釘を刺すと、宝来は早足で帰っていった

禁断の愛を育もう!?(後書き)

えっと……同性愛者に告白された宝来。まあこれから厄介な事になっていくつもりです

今回は土曜の話を中心に書きます。これからも宜しくお願いします

禁断の愛を育もう!?(前書き)

同性愛者の土浦心優に告白された宝来

禁断の愛を育もう!?

私（宝来瑪瑙）は現在、私達が今通っている学校の家庭科室にいた。私一人だけでなく、心優ちゃんもいる

私は畳の上に座布団を敷き、その上に正座していて、心優ちゃんは厨房に立っている

「ごめんなさい。私料理出来ないって訳じゃないけど苦手なんです。パスタとか味噌汁とか……恥ずかしいけど御飯を炊くとかそう言ったのしか出来ませんから……」

「い……いいよ。人には向き不向きがあるから……良かったらあなたが作るうか？母さんとか瀬上君とか古賀さんとか勝海君とか、おばさんとかに手ほどき受けて少なくともお袋の味の定番くらいは普通に美味しいってレベルで作れるから」

間違い無く私は気が動転している。何故ならあの人の事を私は普通に「おばさん」と言えた

こんなのを自分の今の精神状態がどうかの物差しとするなんて、本当どうなんだろう……

「いえ、貴女には私がどんな人間かを知って欲しいです。だから座ってお茶を飲みながら待って下さい」

何か聞いてくれそうにない為、卓袱台に置かれたティーカップに、同じく置かれてあるティーポットの中のお茶を注いだ

中身はやはり紅茶だ。紅茶は苦いから苦手なんだよな。安物でいいから番茶か玉露が飲みたい

「紅茶苦手なんですか？」

「うん……緑茶の方が好き……少し渋めで」

「紅茶を淹れるのは自信があつたんですが……ごめんなさい。嫌いな物を出して」

「いい……いいよ。それより調理しなくていいの？火かけっぱなしだよ？」

いそいそと戻る心優ちゃん。何でこんな事になっているんだろう……

彼女の告白の返事をしに五時に公園に来ただけなのに……

心優ちゃんから愛の告白を受けた翌日、若干落ち込んだ気分で学校へ向かった。精神的な疲れで帰つてすぐに寝て、お母さんに起こされるまで眠っていた為遅刻ギリギリだったが、今日は何も無い為問題は無い。土曜まで何か起きるまで何時も通りに過ごそう。そう思

つてた

「やっぽー瑪瑙ちゃん。真面目な会計さんにしては珍しく今日は遅かったね」

「おはよう稲庭さん」

「それに制服もシワシワだし……もしかして昨日制服のまま寝たの？」

「うん。疲れていて」

「所でさ、中学生の女の子から愛の告白を受けたって聞いたけどそれ本当？」

我がクラスの委員長はその台詞に、私は一瞬石化した。稲庭さんのその言葉に、同級生達は反応した

私は稲庭さんの胸倉を掴み上げた

「稲庭さん……それ誰から聞いたの？」

「あ、事実なんだ」

「うん事実だよ……あたしは稲庭さんの質問に答えたんだから稲庭さんもあたしの質問に答えて……それは誰から聞いたの？いや、あの二人の内の誰から聞いたの？」

「莓花ちゃん……」

それを聞いた直後、私はあいつの学校へ足を向けた

「おい宝来これからHRだぞ何処に行く気だお前！後廊下は走るな
！」

後ろから瀬上君の声がしたが、無視した

あいつのいる学校のクラスに乱入した私は、私に向けられた視線を
気にせず、あいつへの距離を詰めていった

「め……瑪瑙姉ちゃん……何の用や？それより姉ちゃん、今日姉ち
ゃん達も学校ちゃう……」

全てを言う前に、こいつの胸倉を掴み上げた

「先生、手出さんとして。このお姉さんウチの友達やから……みんな
なも怯えんでええよ。このお姉さん不審者とかとちゃうから……」

かなり冷静に、彼女はそう言った。うん、頭少し冷えたけど私今通報されたとしても文句言えないよね？

現に児童達は悲鳴を上げているし

「昨晚の事は誰にも喋るなって言った筈だけど……？」

「喋つたらんよ。電報打つたんや。スタンド仲間全員に」

「昨日のおでん代返せ」

「安心してや。おでん買って貰った事はウチもしんちゃんも誰にも伝えたらんから」

「そっちはどうだっていいんだよ」

これ以上は水掛け論にしなければならない事を悟り、私はこいつを手放した。当然その後どちらの学校の先生から、私はこっぴどく怒られた。家に帰ると、連絡を受けた両親から同じ様にこっぴどく叱られた。私の自業自得である

それで、その後も野火のように広がったその噂の為、私は周囲からの視線が嫌で、早く週末になって欲しいと切に願った。私はこの間ロクに勉強に集中していなかった

そして、この日が来た

決意を決めて時間五分前には着くよう家を出る。既に彼女はベンチに座っていた。彼女は私の姿を見ると、目を輝かせて私を見た

複数の視線を何処から感じるが、敵意とかそう言った感情は無いのでほっとく事にした

「えっと……貴方方に問い質したい事があるのですが宜しいでしょうか？」

「ええよ琢磨兄さん」

「貴方方は一体ここで何をしようとしているのですか？」

茂みの中に上手く隠れ、双眼鏡やらで宝来さん達を覗いているしんのすけ君、莓花ちゃん、稲庭さん、本荘君、勝海君に訊ねました

「何聞いとんの？二人の様子を覗き見るんや！」

莓花ちゃんは僕の質問に対し、親指を立て、口元から覗かせる綺麗な歯をキラリと光らせながら、不健全な事を堂々と言い放ちました

「すみません。来て早々なんですけど、僕帰って宜しいですか？」

「駄目。仲間は多い方がいい」

僕は無視して帰ろうとしましたが、スタンドで取り押さえられました。抵抗はしましたが集まっている人の内勝海君を除く人達が近距離パワー型のスタンドを操る為、遠隔操作の僕のスタンドでは敵わず、簡単に屈伏させられてしまいました

勝海君と本荘君が、押さえつけられている僕に謝罪してきました

「ありがとうございます……私なんかの為にわざわざ時間を……」

「そんなん気にしなくていいから。それより本題に入ろう」

「あの……お返事は……」

「その事なんだけど……ごめんなさい。私は貴女とお付き合いでする事は出来ません」

それを聞いて、強いショックを受けたように絶望的な表情となった

「な……何ですか？それは私達が同性だからですか？」

「それも理由の一つだけだよ……私達、こつやって喋るの自体初めてでしょ。よくは分からないけどこついうお付き合いつて、お互いがお互いにある程度知らない内はしちゃいけないと思うんだ。それに……」

「……………」

「ねえ、聞いてる？でもさ、普通の友達としてなら付き合っけど……」

「という事は……貴女の言い分だと、私達はお互いをよく知らないから付き合っつのはよした方がいいと……」

「うん……それに抱いているのが恋愛感情かどうか分からないけど気になる異性もいるし……」

「分かりました……」

「でも、普通の友達としてなら……」

「と言う事は……時間をかけてお互いが理解し合い、そして本当の意味で好きにならないと駄目って事ですね」

「うん……」

「その心配は要りません……私達が理解するだけの時間はたっぷりあります……」

「まあね……私達まだ十代だもんね」

彼女はポケットから紙を取り出した。それは『写真』だった

その写真に写っているのは、私達が現在通う、星陵高等学校だった

「この写真に指をつけて下さい。指じゃなくてもいいですよ？体の一部が触れさえすれば」

何か嫌な予感ビンビンしたが、言う通りに指を写真につけた

「！」

すると、私の体が、写真へと吸い込まれていった！『インフェミー』を出す間も無く、私は何時の間にか星陵高等学校の駐車場に立っていた

そして何時の間にか、心優ちゃんが私の横にいた

「誰にも邪魔されない、私達だけの世界にようこそ！」

満天の笑顔を私に向け、彼女はそう言った

禁断の愛を育もう!?(後書き)

結果的にピンチとなった宝来。果たして、この状況をどう乗り切るのか

次回は彼女の能力名と能力の詳細を出します。それでは次回も宜しくお願いします

禁断の愛を育もう!?(前書き)

写真に引きずり込まれた宝来……彼女の運命は!?

禁断の愛を育もう!?

「な……何で……何でいきなり私達星陵高校に？」

今はあたしが思い付くありきたりな反応をしよう。演技力は自信は無いが、妙な反応をして自分の身を危険に曝す事は無い

迂闊だった……まさか彼女が『スタンド使い』だったとは……

「うふふふ……驚きました？実はここ、『星陵高校であって星陵高校ではない場所』なんです……いえ……『空間』だと言った方が表現として正しいのかも……」

言われて周りを見回した。確かに、全体が何処か変だ

まず、今午後の五時の筈なのにやけに薄暗い。何か明け方みたいだ何より、私達以外で人の気配が無い。休みの日でもテストとかそう言ったのが近々無い限りは部活動はあり、部員が屋内外で頑張っている

それにこの学校には多嶋会長を始めとして生徒が何人も居住している

「私ですね。自分の撮った写真に『写し出された空間』を作り、その空間に入る事が出来るんです……そしてこの空間は時間が止ま

つていて、私や私が動かす事を許可した者以外は物を動かす事や形を変える事が出来ないんです……これが私の能力、名付けて『アリス・イン・チェインズ』です」

確かに……写真の中の空間なら時間が止まっても不思議じゃないな
脱出も外で私を見ていた視線は間違い無く私の仲間だから仲間の救助も望めない……能力自体に殺傷能力は無いのだからけど、逆にキツイ

「私この学校の校舎に入るの初めてなので……家庭科室に案内して貰えますか？お腹空いたでしょうし、自信は無いけどお料理を作りますから」

「うん……うん……」

逆らったりした所で無駄だし今は無難に付き合おう……幸い彼女は私に対して敵意は無いし……

と、言った経緯で今私はこのような状況になっている……

「い飯出来ましたよ」

「ありがとう」

二人分なのか、料理は結構な大皿に盛り付けてあった。献立は、握り飯ともやし炒めだ

「おにぎりの中身はおかかですけど……おかかは嫌いですか？」

「嫌いじゃない。あたしはコンビニのおにぎりの中身は現在出回っている物なら全部食べる事が出来るから。特に好きなのがおかかと高菜、後シーチキンマヨネーズ」

「私はおかかと梅と昆布と鮭が好きですね」

「な……見たか……今の……」

「ああ……宝来とあの女の子が……」

「写真の中に……『吸い込まれた』！」

「これが示す答え……彼女は『スタンド使い』だったという事ですね……僕達同様、沢登君が放った『弓と矢』でスタンド使いになっただけでしよう……」

「なあ須藤さん。あんたスタンドに関しての知識は相当あるって瀬上から聞いたけど……どんな能力なのかという見当はつくか？つく

のなら教えてくれ。どうにかなるかも知れないからな」

「……彼女のスタンドはまず間違い無く『別の空間に相手を閉じ込める』タイプの能力ですね……そしてこのタイプのスタンドは、外部にいる我々にはどうする事も出来ない……」

「ちょっと待って！それじゃあたし達何も出来ないの？」

「正確には空間の中に入れば打つ手の一つか二つは見付かると思うのですが……このタイプは大抵本体が何等かの条件を満たす事に入る事や出る事が可能となると聞きます」

「その写真破くか燃やすかしたら？」

「宝来さんがどうなってもいい事を事前に理解した上でどんな結果となっても責任を持つのなら御自由に……スタンド能力から解放される手段である本体を倒す事も僕達には出来ないんです……かなりマズいですねこのスタンド」

「感心してる場合かよー！」

「少なくとも彼女は宝来さんに危害を加えるつもりは無いみたいですから無事なのは確かでしょう……あくまでも『今の所』ですが……手出し出来ない以上宝来さんがどうにかするしか無いですね……」

「お味はどうです？」

「美味しいよ。このお握り」

「…………え？」

「本当。毎日食べたいくらいだよ」

本心でそう思った。本人は料理が苦手と言ったが、それは多分『ちやんと作れる品が少ない』という意味だろう

「幾つか知りたい事があるんだけど…………この『写真の能力』は…………」

「この能力？教えてもいいんですけど、信じてくれますか？」

「信じる信じる」

私も『同じ能力』を持っているし

「私の五つ年上の姉は大学生で、学園祭に連れてって貰ったんですよ」

「その学園祭って、もしかして初日で発砲事件とかがあって中止を余儀なくされたあれ？」

「はい…………そこで誰かに『矢』に貫かれてこんな事が出来るようになったんです…………今思えばあの人は恋のキューピッドだったんだと思うんです」

共通点弓矢だけだ

「他にこれに近い事を出来る人は？」

「さあ……でも私以外にもいるんじゃないんですか？もしかしたら私の身近にもいたりして」

身近どころか目の前にいるんだけどね……言わないけど

少し間を置いて、私は彼女に一番聞きたい事を聞いてみた

「ねえ……心優ちゃんは何であたしなんかの事が好きなの？あたしなんかの何処がいいの？」

「一目惚れですよ……但し好きになったのは容姿ではなく……『目』ですね……」

「『目』？」

「瑪瑙さんは、本当に綺麗な目をしているから……何時も一所懸命で、他人の事を本気で考えられる、人として本当に強い力を感じられるその目を一目で気に入っちゃって……」

「私、本当にそんな目をしてるの？てか目を見ただけでそこまで分かるもんなの？」

「よく言っじやないですか。』目は口ほどにものを言い』って」

そっか……そんな事思った事は無かったけど、少なくとも彼女から見た私はそんな人間なのか

随分な買い被りだと思った。けど、私が今やるべき事は理解出来た

「……どうして私を能力で閉じ込めたの？」

「瑪瑙さんが言ったじゃないですか。付き合うにはお互いがある程度理解し合った方が良く……だから……まず私という人間をただ理解して貰いたかっただけです。それには二人だけの空間の方がより効果的だと思って……」

そう言う彼女の顔は、屈託のない笑顔だった

成程、彼女は本当に、本気で私の事が好きなんだ……

その家は無いとは言え、自分の事を真剣に想ってくれる人がいる事が、こんなに嬉しい事だっというのは初めて知った。初めて実感した

「ありがとう……私の事を真剣に想ってくれて……だけど、私は今の貴女とは付き合えない。女同士とかそういうのじゃなくて、私は……力づくで自分を押し付けようとする人はあまり好きじゃない……力を使わないと他人に自分を解らせる事が出来ないってみたいで……怒りを通り越して可哀想としか思えなくて……」

「え？」

「今の貴女は……可哀想な人間……自分の想いという流れにただその身を委ね、自分を見失っている、気の毒な人……私には、貴女はこういう風にしか見えない……」

彼女は何も言わない。そして顔を俯けている

「私は貴女の想いは嬉しかった。貴女がそう言ってくれたから、私は貴女にこう言う事が出来た。だから委ねっぱなしじゃなくて……」

「黙れよ」

私は心優ちゃんにいきなり突き飛ばされた

「心優ちゃん……」

「五月蠅いんだよ……あなたは一体何が言いたいんだ？」

語調も声色も変わった。表情も強張っている

「確かにあなたの言ってる事は正しいと思うけどよ……でもさ、あなた自分の言い分が正しいからってそれだけで全部通ると思ってるのか？」

「……あんだこそさつき私が言ってた事聞いてたの？私は自分の言
い分を一方的に通そうって言うのが気に食わないの……」

「埒があかないな……だったら私の事を体で理解させてやるよ……」

どう考えても優しい手段で理解させるつもりは無いようね……

私は『インフェミーACT1』を出した

「その芋虫みたいなものは……」

「私もね……あんだと同じ能力を同じ経緯で持っている……ただそ
れだけだよ……」

心優ちゃんは私に皿を投げつけてきた。『ACT1』の凝固液を、
皿に向けて吐きかける

皿は凝固液にかからず、まっすぐ私の頭に飛んできた。皿は私にぶ
つかり、砕け散った

「あんたが私と同じ能力を持っていたのは驚いたけど……どうって
事無いんだよ……『アリス・イン・チェインズ』の世界の中ではな
……」

禁断の愛を育もう!? (後書き)

スタンド名はアメリカのロックバンドから

結果的に逆鱗に触れてしまった宝来。果たしてどうなるのか

次回もお楽しみに

禁断の愛を育もう！？（前書き）

結果的に戦う事となった宝来。仲間の救援も逃げ出す事も不可能な空間での、圧倒的不利な戦いが幕を開けた！

禁断の愛を育もう!?

そう言えばそうだった。この空間は空間にある物を含めて時間が止まっているから、あいつの許可を得ない限りは『私が持ち込んだ物』でどうこうする事が出来ないんだ

私は今の所許可は得ている。多分私のスタンドの『インフェミー』も同様だと思う。スタンドは本体の精神力だから

だけど凝固液は『吐き出した時点で私とは別の物』になっているから何をしようとした所でこの空間で何か出来る筈が無……

私は止血した後、あいつに向かって走り出した。あいつは私同様現実空間からこの世界に来たんだ。この世界の主とは言え、これは唯一私と同じ条件だ。直接叩く!私がこの世界から脱出出来る手段はそれしかない!

「と粹がってみたけど……当然そんな事は想定済みで対策を練っていない訳無いわな……」

私の攻撃は、奴のポケットから取り出し、広げた『台拭き』によって防がれた

台拭きは広げられた状態で、そのまま固定されたように私の拳を受け止めている

この状況で、私の取るべく行動は唯一つ……

「『逃げよう』」

私は家庭科室から飛び出すように逃げ出した。ドアを開け、廊下に出たと同時にAC11の凝固液で入口を塞いだ。勿論これは一時凌ぎにしかないだろうが、あいつが私を見失えばそれでいい。勝機はある

あいつがこの校舎の事をどれだけ把握しているのかは分からないが、私はこの学校の生徒だし、生徒会の見回りとかで学校の中は把握している……隠れながら逃げる事は容易だ。但しそれは通常ならばだ

(この事態は通常じゃない……時間が経てば経つ程私に不利になる……なるべく早くケリを付けないと……それにあの壁は今思えば……)

「えい」

土浦は入口を塞いでいる壁を、両手で押す事で倒した。壁は床にぶつかると同時に盛大に碎け散る

「バカだね…… 入口を塞いだのはいい案だけど、この空間は時間が止まっただけで私と私が許可したものの以外は干渉出来ないんだよ……こんな即席の壁じゃ時間稼ぎにも……」と言いたいけど、地の利はこの学校の生徒であるあっちの方にあるか…… 何事も一日の長のある者が強いからな……」

「少なくとも…… 『教室』 を探し回っている間は自由行動が取れるな……」

現在私は、一度外へ出て少し遠回りして二階の理科室に来ていた

この空間に関して分かった事。まず、写真の空間の中にある物を触る事を一度許可したら本体はその許可を取り消す事は出来ない。写真に入る時かもしくはその後か…… 許可が出来るのは何時かは分からないが、これは確実だ。出来るのであれば私だったら逆らった時点で許可を取り消す

そして、この空間は『閉じ込める』事は優れているが、本体単体では弱点を敵の前面に出すのと同じ事だと言う事。閉じ込める対象が私みたいに『スタンド使い』の場合、スタンドも出す事もその能力を使う事も可能だし、基本的に奴は普通の中学生その物。簡単に叩く事が出来る

但しそれは『破壊力の高いスタンド』または『戦闘向けのスタンド』を使うスタンド使いに限られる。そして私のスタンドはそのどちら

でもない。私自身が戦闘タイプじゃない

「えっと……」

理科室の机に一つずつ取り付けられている水道の蛇口を捻ると、水が出て来た

「よし……」

「おかしいなあ……階段に行く暇は無い筈なのに……何で一階のどの教室にも居なかったのかなあ？」

土浦は、二階へ繋がる階段を上りながら呟く。一階の教室の、人が隠られるスペース全てを探した彼女は、今度は二階に捜しに向かったのだ

普通なら外に出て逃げ出した可能性はあるが、この空間の中ではそれは有り得ない。何故なら

「『アリス・イン・チェインズ』の世界は『写真に写った建物、または敷地』のみ……そして私達が入ったこの写真に写っているのはこの建物と駐車場だけ……他は見えたとしても足を踏み入れる事は

出来ない……私ですらも……」

土浦は理科室のドアの前に止まった

その理由は

「……何考えてんだ？」

ドアの隙間に『黒板消し』を挟んでいるという、頭に「超」のつく古典的な悪戯が目に入ったからだ

ドアの前に立ち止まり、勢い良く開いた。黒板消しは落下する。同時に、ドアが勢い良く開く音がし、そこへ顔を向けると、別の出入口から水が入ったバケツを持っている宝来がいた。息は絶え絶えで、口から水が滴り落ちている

宝来はバケツの中の水を、土浦にかけた

「『インフェミアCT2』！」

ACT2の口から吐き出された液体をゼリー状に固める球は、土浦にかかった水に当たった。球は水に溶けずに、そのまま床に落ちる

「これでも駄目か」

蛇口から水は普通に流れ出て、私はACT2の能力で動きを止める事を考えたが、この空間の中の物質は時間が止まっているので普通にやっては能力が使えないのは分かっていたので、水に『工夫』を加えた

それはまず水をがぶ飲みして、そのまま吐き出すという物だ。口から入った水は『胃』の中に入る。その胃の中には『胃液』が分泌されている

胃液は私から出る物で、この空間の物ではない。だから一度水を胃に貯めて混ぜれば……と考えたのだが

結果的に水のかかった場所に薄い膜みたいに固まっただけで、廊下は普通に水浸しになった。固まっているのは、私の胃液でまず間違いは無いだろう

「これで終わりか？何ならこっちから行くよ」

『ホームセンター』が写っている写真を取り出し、中に入った。私も追おうとしてこの空間に入った時と同じ方法で入ろうとするが、何も起こらなかった

何かをするのは、何を企んでいるのかは分かりきっているが、干渉が出来ない以上何も出来なかった

数分後、奴はチェーンソーや金槌、ドライバーや鋸等、大量の工具の類を両手の買い物籠に入れたり、脇に挟んだり、口に咥えたりして持ち込んできた

「写真の中の物は現実空間に持ち込む事は不可能だけど写真の中の物を別の写真の空間に持ち込む事は簡単なんだよ！」

「ちよつと、チェーンソーとか扱えるの？」

「扱えなくてもぶん殴られたら痛いじゃ済まないと思っけどな」

確かにそうだ

奴は鋸を二つ両手に持ち、私に飛びかかって振るってきた。ただがむしゃらに振るってきただけだが怖い。動きを見て紙一重に避けるなんていう真似は出来ず、ただ近付いてきたらその分離れるといった事しか出来なかった

勿論そんな手が長続きする筈はなく、あっという間に追い込まれた。後ろは壁で、廊下の窓を突き破れば逃げ出せるが怪我は免れない

（こうなったら一か八かだ……あいつの鋸でわざと手首とか『血液』が沢山出る場所を切るんだ……顔か足かにかけてACT2で……それしか手段は……）

ここまで考えた後、私は『ACT2』を出した

但し、何処か変だ。色合いが生気を感じられない灰色に変色しているし、何より『頭部から背中にかけて割れ目が入っており』、何だか今にもそこから真っ二つに分かれそうだ

私はこの『インフェミー』の異変に関して同じ様な事がつい最近あった事を思い出した。あの時もかなり追い詰められて……

『ヴィギイ……』

割れ目から鳴き声がしたかと思うと、割れ目からブリッジをするかのように、昔瀬上君達と昆虫採集しに裏山に行き、偶然見掛けた蝉の脱皮みたいに背中を後ろに大きく反りながら、それは出現した

エメラルドグリーンを基調として、紅色の斑点がチヨンチヨンと出ている、大粒の黒真珠を連想させる目が広い視野を見渡せるようついでいて、両目のちょうど中間辺りにはピンポン球が入るか入らないか程度の大きさの穴が空いていて、そこから琥珀色の、蜂蜜みたいな液体が流れ出ている、それを黄色い舌で舐めとっている

そして背中には中にシワシワの翅が入っているみたいに盛り上がっている、幼虫と蛹を混ぜたような姿をしたスタンドだった

「な……何だこれは！」

『ヴィギイ……』

「まさか……『ACT3』？」

禁断の愛を育もう!? (後書き)

こういう閉じ込めるスタンドは原作でも出てきたけど、どいつもこいつも一筋縄ではいかないスタンドばかりですからね。相当ヤバいです

そんな時に再度進化した『インフェミー』。『LEVEL3』の能力とは？

それでは、次回もお楽しみに！

禁断の愛を育もう!?(前書き)

窮地に陥り、進化したインフェミィ……その秘めたる能力とは？

禁断の愛を育もう!?

『インフェミーACT3』は、頭の穴から流れ出る蜂蜜みたいな液体を舐めとると、奴に体を向けた。足が無く、腹を動かして移動している為か、動作は極めて緩慢だ。ハッキリ言って『ACT1』の方がスピードがある

「土壇場で進化してくれるとは……いや、あたしがこの土壇場でちよつとだけ成長したのかな？」

「また形が変わったか……あんたの能力……『スタンド』だっけ？それ、随分楽しいな」

奴は今度は重量がありそうなチエーンソーを両手で持ち、起動させる。エンジンの駆動音と共に、それに取り付けられた刃は回転を始めた

そのまま、常識で考えればあんな物を手に持っていては出せるとは思えない速度で、私との距離を詰めた

(そうか……普通に触ったり動かしたりは出来るけど基本的に時が止まっている世界の物質は重さを感じたとしても重量自体は無いんだ！)

自分でも何を言っているのかは分からない。だが、今はこいつの世

界で起こってる現象をあれこれ理屈つけて考えている場合じゃない

私は何とか避ける事が出来たが、肩に傷を負ってしまった。振り下ろし、持ち上げるまでの僅かなタイムロスの際に、奴を蹴り飛ばした。確実に入ったが、私如きの攻撃では入った部分を手で押さえながら立ち上がってきた。そして今度は大きな金槌を両手に一つずつ持ち、左手のを投げつけてきた

但し、私ではなく廊下の窓ガラスにだ。ハンマーは正確に窓ガラスに命中し、粉碎。砕け散ったガラスは、私に降り注ぐ。同時に奴は私に接近してきた

その時、私が取った行動。それは、「奴との距離を自分から縮める」事だった

そして、先程同様、攻撃してきたら届かない所まで後退。ハンマーを振り下ろしきるその直前

「『ACT3』！あいつに向かってお前の能力を吐き出せ！」

『ヴィギイ……』

そう私が命令すると、頭にある穴から、バルブが全開となった水道管のように、先程まで流れてきたのを舐めとっていたのと同じ液体が噴出してきた。その勢いは、まるで土石流か何かだ。そして見ただけでかなりの威力がある筈なのに、巻き込まれた物は奴を含めて『動いていない』

そして、すぐに私は『LEVEL3』の能力が如何なるものであるかを理解した。『ACT3』での攻撃を止め、液体のかかった奴の足元や振り下ろしたハンマーを握る手を見ると、積もったかのように『ACT3』の正面を向いている側が盛り上がっている形で先程の液体が固まっていたからだ

「火山の噴火で流れ出した『マグマ』みたいに噴き出して……原理は分からないけど、物に触ったらそれと同時に固まる……ACT1や2にあつた多少の精密性を削る代わりに威力に移した……無差別に広範囲を攻撃する事の出来る能力！」

「……へえ……随分と面白い能力を身に付けたものだね……でもどうするの？身動きが取れなくなった相手をたこ殴りにでもするの？」
「そんな真似はしない。流石に悪い人じゃない人を身動き取れなくしてから殴るなんてリンチ以外の何でもない。けどスタンドは解除して貰うしその為の手段は選ばない」

私は、奴との距離を一步步詰めた

約一分後、現実空間に私と、「琥珀色の物体が全身を覆って窒素した」彼女が戻ってきた

「あ……あれ？」

「やっと意識を取り戻したみたいですね」

「私……」

「宝来さんから話を聞いてます」

僕は彼女にあの後何があったのかを説明しました。能力を解除させる為に窒息させた宝来さんが、解放されたと同時に本荘君に覆っている物体を斥力で取り払うのを頼んだ事、そして僕に心臓マッサーを頼んだ事をきちんと

説明を聞いた彼女は、体を起こして宝来さんに話し掛けました

「……………どうしてですか？ねえ……………どうしてですか？最初からそのつもりじゃなかったとは言え、私は瑪瑙さんを手にかけようとした……………それなのに……………」

「それはね……………『私が殺すつもりは無かった』……………理由を強いて拳げるとしたらただそれだけ……………色々聞きたいだろうけどこれで納得してね」

「どんな形であろうと人助けに形式や理屈は必要無い言う事や」

「そうそう。そういうのに小賢しい理由を付ける方がおかしいんだよねえ……………」

「そういう事にしといて。でも良かった。貴女が生きていて……」

この微笑ましい光景に、僕達は笑って見ていました

「あっそつだ。君達に話があるんだつた」

宝来さんがしんのすけ君と莓花ちゃんの元へ向かっていき、二人の肩に手を置きました

顔はこれ以上ない程笑っていますが、目はこれ以上なく怒っています。恐いです

「君達に質問があるんだけど……いいかな？」

「ほ……ほい」

「何で君達がここにいるの？」

「う……ウチ等が休日に誰と何処で遊んでいようがあんたに口出しする……」

指に力が込められ、肩の肉に指が食い込みました

「もういい。貴方達には聞かない。勝海君。答えてくれない？何で貴方達がここにいいのか」

「莓花ちゃんが『どんな返事するのか楽しみやから見に行こ』って言い出してしんちゃんと早良さんがノリノリでのって、信朗君はコーラで釣られて僕はキャラメル買って貰うって事で……あ、須藤さんはただの巻き添えだから怒らないでね」

「中学生や高校生がキャラメルやコーラで買収されるなよ……まあいいや。須藤さんが巻き添えだというのは彼の性格とか考えて事実だろうから疑念を挟まない。勝海君は素直に喋ってくれたから何も言わない」

「ほ……ほんならウチ難しい宿題貰ったん思い出したから、ほな……」

「お……オラも……シロのお散歩行かなきゃ……」

指の力が更に込められたのが、肩により深く食い込んだ指で分かります。二人は痛みにより表情を歪めました

「このタイミングでそんな事言ったらたとえ本当の事でもこの場から逃げる為の苦しい言い訳にしか聞こえないよ……」

二人はスタンドを近距離パワー型で出して自分の肩にかけられている手を無理矢理退かし、逃げ出しました。宝来さんはそれを追い掛

けます。途中、稲庭さんや本荘君も逃げる側に加わりました

「須藤さん……僕達は完全に蚊帳の外って感じですね……どうします？」

「先に帰るときしましょう。彼女は僕が送りますが……君は一人で大丈夫ですか？」

「ええ、家からそこまで離れていないので」

「えっと……土浦さん……でしたっけ？家に帰りましょう……」

「確かに……動きを封じたんだから私を殺して『アリス・イン・チエインズ』から逃げるといふ手段もあった筈だ……でもしなかった……」

土浦さんは顔を俯かせてぶつぶつと何か呟いています。呟くのを止めると、顔を上げて宝来さんの方へ上半身を向けました

そして、宝来さんに抱き付いて来ました

「心優ちゃん？」

「瑪瑙さん！私貴女の事より好きになりました！だから今度はゆっくりと時間をかけて貴女が私を見てくれるよう頑張ります！」

「分かったから離して！追えないから！」

「どうやら彼女は瑪瑙さんに任せていても大丈夫っぽいですね」

「そうですね……じゃあ帰りましょうか……僕明日早いし」

土浦心優 - - スタンド名：アリス・イン・チェインズ - - 再起可能。
宝来への好意をより確実かつ強いものにした

野原しんのすけ、藤方尊花、稲庭早良、本荘信朗 - - 全員捕まり、
宝来から怒られた

須藤琢磨、比留川勝海 - - そのまま帰宅した

To Be Continued…

禁断の愛を育もう!? (後書き)

結構色々ありましたが無事脱出する事が出来ました

ACT3は能力的に1や2程出番は無いかも……

次回もお楽しみに

春日部の吸血鬼事件？（前書き）

日曜の何時もの朝、野原家は平凡な時間を過ごしていて……

春日部の吸血鬼事件？

朝。野原家

現在野原一家は朝食をとっていた。余談であるがテーブルには四人前の食事の用意がされている

野原一家は、御存知の通りしんのすけ、みさえ、ひろし、ひまわり、シロの四人と一匹。ひまわりは乳飲み子でシロは犬の為、三人分ではない筈だ

勿論理由はある。それは - -

『ふむ。今日の朝飯は白米に納豆、豆腐とわかめの味噌汁に鰯のひらきか……和風だな』

しんのすけのスタンド、『ハリケーン』の為だ

ハリケーンは本体の意思と無関係に自ずから出て来て勝手な行動を取る事が度々ある。それは野原家でも例外ではなく、眠っているしんのすけから勝手に出て来て準備した食べ物勝手に食べたりテレビを見たり新聞を読んだりしている

その様子を目撃した時スタンドの見えないみさえとひろしは大層驚いたが、次第に慣れていき、ハリケーンの方までご飯を用意したりお土産を買ったりするまでに至った

閑話休題

ひろしは、いち早く食べ終わると今日の朝刊を広げた

「何だよ……また出たのかよ『吸血鬼』が」

「え？また？」

三面を開いて、最初に目にした記事を見て、ひろしは開口一番にそれを口にした

ひろしの言った『吸血鬼』。それは、二週間前から春日部のあるシヨッピングセンター付近に出没する連続殺人鬼の通称である

何故そう呼ばれるのか、被害者の首筋に犬歯を突き立てられた痕があり、それ以外に目立った外傷は無い事、被害者の死因が一因して失血死である事からある。そして――

「これで若い女性ばかり十五人……未だに犯行手段も犯人への手掛かりもゼロ……」

「何か最近こんな怪奇事件が頻発しているわね……あの店私も気に入っていたのに恐くて行けなくなっちゃったわ……」

「母ちゃん母ちゃん」

「何しんちゃん？」

「被害者は若い女性限定なんだから、母ちゃんが行ったって犯人は相手にしないから！」

「そう言うのを杞憂って言うんだぞみさえ」

「たやたたた」

『全く……おばさんは図々しくて困る』

「ぬあんですって〜！」

みさえはしんのすけとひろしにぐりぐり攻撃を食らわせた

『……一兆歩譲って襲われたとしても犯人が被害者になるんじゃないかな？』

「よっ 吉祥寺」

「あ、瀬上君」

午前十時、ショッピングセンターの入口近く

黒髪に右サイドに後ろから伸びている触覚のように髪がはねている、

ワイシャツの襟を学ランの外に出した格好をした同い年の少年が俺に軽い会釈をした

名前は吉祥寺穂^{きちじょうじのほ}。俺達の隣のクラスで生徒会執行部の庶務を任されている。俺とは会計の宝来を介して知り合い、結構気が合うので昼休み等一緒に遊んだりしている程度の仲だ

今回は遊びの約束ではなく、生徒会室の備品を買う為だ。本来は宝来と行く筈だったが、昨晚突然あいつから疲れ切った声で代理を頼まれた(余談だがその理由を琢磨と藤方に聞いた俺は呆れ半分で苦笑いを浮かべた)

閑話休題

俺達は買い物をしに店の中へ入った

「で、何を買うんだっけ？」

「記録用のノートと伝票。後鉛筆とかボールペンとかの消耗品」

「っーかさ……」

「どうしたの？首をキョロキョロ動かして」

「いや……あんな事件が起きてるってのに何で人が集まるのかなって思っ……」

「あんな事件って……『吸血鬼』の事？」

「うん。てかこの近辺で起こってる事件ってこれの他にあるのかよ」
「被害者は昼夜問わず出てるからもしかしたら犯人や殺人現場が見られるかもって所じゃないの？」

根拠は無いが説得力はあった。突き詰めてしまえば『野次馬根性』の一言に尽きる

「だが、普通は人の立入を禁止、もしくは制限するだろ？何でそれが無いんだ？」

「それは・・・」

「それは憶測だけど事件は今の所この店とその近辺でしか起こってない。でもそんな事したらもしかしたら犯人は別の場所で犯行を行うかも知れない。だから警察は敢えてそれをしない。つまり本気で早期解決するつもりみたいだよ」

物凄く聞き覚えのある声が吉祥寺の言葉を途中で持つていった

振り向いてみると、手に大量のスナック菓子の入った袋を持ち、一匹丸々のスルメを啜えた稲庭がいた

「瀬上君に吉祥寺君……プライベートでは珍しい組合せだね……」

「今日は稲庭さん」

「挨拶の前に取り敢えず口に咥えているそのスルメを放せ」

「うん」

スルメを口に含められるまで口に詰め、一噛みで引きちぎった。かなりの速度で顎を動かし、飲み込んだ

それを四〜五回繰り返し、スルメを自分の手や口の中から消した

「これで喋ってもマナー違反とかにはならないよね？」

「うん。ならないね」

「……お前、歯と顎丈夫なんだな……」

「うん。小さい頃からよく歯を磨いたり堅い物をバリバリ食べていたからね」

「俺達がここに来たのは生徒会室の備品の購入だが……お前は何しにここに？」

「このチーズケーキ美味しくて」

「……何十ホール食べた？」

「やだな瀬上君、人を胃の化物みたいに……」

お前の一回に食べる量の半端なさを知っているからそう聞けるんだよ

その問い掛けの答えは、予想通りのもので、予想外なものだった

「十八ホールしか食べてないよ」

「少ないな。ダイエットでもしてるのか？」

「ううん。最近金欠で。お父さんも少し食べる量を減らしなさいとも言われたし」

「安くて腹にたまるもん食べよ」

「いや、十八ホールの何処が少ないの？」

「こいつとはプライベートでも付き合いがあつて俺はこいつの食べ歩きに結構付き合わされているんだ。この前札幌と一緒に旅行した時なんかはかなりの数の飲食店や喫茶店の食べ物を食いきつたし」

吉祥寺はその話をとても信じられないと言いたげな表情で聞いている。そう言えばこいつ稲庭と一緒に食事をした事無かつたっけ

「ちよつと恥ずかしいよ……それよりさ、良かったら買い物付き合つてよ。近くで新しい回転寿司屋見つけたから」

「好意は素直に受け取るがお前金欠なんだろ？少しは控える」

「すみません……お急ぎでないのなら一つお聞きして宜しいでしょうか？」

物腰穏やかな声で、黒く癖の無い綺麗な髪に清楚な雰囲気をした、如何にも大和撫子系の若い女性が訪ねてきた。俺はこの女性を悟られない程度に警戒した。何故なら――

「何ですか？」

「御手洗いはどちらでしょうか？私ここに初めて来たばかりですのでよく分からなくて……」

「それならここをまっすぐ行って……」

「宜しければその方に御案内をしていただきたいのですが……」

そう言つて稲庭に顔を向けた

「あたし……ですか？」

「はい。私お恥ずかしながら方向音痴でして……だからただ言葉で何処にあるか御説明されても不安でして……」

「ごめん瀬上君吉祥寺君、少し待っててくれない？この人トイレまで案内するから……」

「うん分かった」

稲庭は女性を連れて、トイレまで案内しに行った

「吉祥寺、お前はここにいる。俺はあいつ等の後をつける」

稲庭と女性は、あの場所から最も近いトイレについた

「ありがとうございます」

「いえいえこのくらいお礼を言われる程でもありませんよ」

「そうですか……」

女性は稲庭に近付き、抱き付いた。突然の抱擁に稲庭は動揺するが、それはすぐに危機感に変わった

抱き付かれている力が強過ぎる。女の力とは、いや、人間の力とは思えない程だった

「貴女の血……美味しそうね……」

打って変わって甘ったるく、妖艶な声色と口調で舌で唇を舐めながら言う。垣間見えた口には、人間のそれとは思えない程伸びて、鋭く尖った『透けている犬歯』が生えていた

「まずい……」

『イザベラ』を出そうとしたが、何かしようとしているのを察したからか、女性は腕の力を強める。圧迫感から呼吸が苦しくなり、息が荒くなる

「あが……あ……」

「いただきます……安心して。痛いのは歯を突き立てる瞬間だけ……同時に痛みは和らいで、眠るように意識を失っていくから……大人しくしてね。私に身を委ねないと楽に死ねないわよ」

稲庭は必死で抜け出そうとするが、どうやっても抜け出せない

口を大きく開き、首筋に噛み付いた！犬歯から血が抜き取られ、稲庭の抵抗も弱々しくなっていき……

「そんな事だろうと思っていたよ……」

女性の顔に、革靴の靴底がめり込み、女性の体は後ろに吹っ飛んだ。その勢いで突き立てられていた犬歯は抜け、稲庭は解放された

「ゲホツゲホツ……」

「取り敢えず深呼吸しろ。落ち着いてきたら水を飲め」

咳き込む稲庭に、除夜がそう言った

春日部の吸血鬼事件？（後書き）

世間を騒がす犯人と遭遇した除夜達。犯人の恐るべき能力とは？

次回もお楽しみに！

春日部の吸血鬼事件？（前書き）

襲い掛かる『吸血鬼』に、除夜達は？

春日部の吸血鬼事件？

「瀬上君！」

「吉祥寺……」

「痛ててて……」

女は手で顔を隠し、立ち上がった

「何時から気付いたの？」

「稲庭に案内させた時初めてと言ったのに慣れている足取りだった……御丁寧に稲庭を抜かないようにしていたが、それでこれじゃあまりに不自然だ……それに……変装している人間が近付いて来たら警戒するのは当たり前だろ？」

「バレてたんだ……」

隠していた手を退かすと、案の定蹴りを入れた部分を中心に顔が破れて素顔が見えていた

女は顔を覆っていた破れた仮面を破り捨て、俺達にその素顔を見せた。仮面の下にいたのは、紅茶色の短髪にピアスをつけ、右目の下にヤツデの葉のような入れ墨をした、二十代後半から三十代前半の女だった

「その顔……あなた……『當麻佐鳥』か？」

「御明察……」

「瀬上君……當麻ってまさかあの……」

「ああ……元中学校の世界史教師で二年前に己の若さを保つての生徒を殺してその血を飲んでいたっていう変質者だ……逮捕されるまで学校の生徒を四十人くらい殺していて当然死刑判決を受けたんだが……」

「嬉しいね……君みたいな若い子が私の事を知っているなんて……」

「少し前の囚人の集団脱走事件で逃げ出したのは知ってたけど……それが何でショッピングセンターで稲庭さんを襲ったの？」

「そりゃあ『若さ』を持続させる為……『美しさ』は年取った後でもどうする事は出来るけど若さはそうはいかないからね……そもそも私が教師になったのは手近に若い子が沢山いる職業だったからだ……まあ今の愛情が稀薄な世の中をどうにかしたかったのも本音だけどね……だって子供が少なくなると……私の若さが無くなってしまうからね……」

「あなた一度精神鑑定受けた方がいいんじゃないの？」

「受けたさ。で、結果は当たり前だけど正常だった……だから死刑判決を受けたんだけどね。異常だったら刑務所で他の囚人達と一緒に御飯を食べたり労働したりしてないと思うけど……」

「それもそうだな……だが俺はそんな事は聞きたくはない……さっきの『スタンド』だな？それで何をするつもりだ？」

「……若い女の子にしか興味は無いしそれ以外は殺したくないんだけど……仕方無いわね……どうやら生かしておくと後々面倒になりそうだし……今ここで殺してあげる……」

「悪いがそれは無理だ……何故なら」

『プラネット？ルビー』を出し、當麻を再度蹴り飛ばす。そして稲庭と吉祥寺の腕を引っ張り、外へと逃げた

「女子トイレに俺達が長々といると後から人が入ってきたら警察沙汰になるからだよ！」

「……瀬上君。それ……正確ではあるけど的確じゃないよ」

……うん、そうだね

「逃げ足は早いな……まあ……逃げる獲物を追うのも面白そうだけどね……」

「どうしよう瀬上君」

「どうもどうも……ここで俺達が奴を倒すしかないだろ……」

「そうだね……」

「何言ってるんだよ瀬上君、稲庭さん！」

大声を上げて吉祥寺が俺達の会話に入ってきた

「二人の今の話じゃこのショッピングセンターであいつをどうにかすると取れたんだけど……」

「取っていいぞ。そのつもりで言ったんだし」

「何でさらつと言つのか？ここは警察に通報して……」

「通報は出来ないんだよ……いや、通報しても警察じゃまず敵わない……あいつには普通の人間にはない『特別な能力』を持ってるんだ……」

「『特別な能力』？」

「今は詳しく説明している余裕は無い……悪いがお前も一緒に行動して貰う。顔を見られた以上お前も確実に殺されるだろうから……取り敢えずしんのすけか琢磨辺りに連絡するぞ。俺達を探し回らるうから少し場所を移動しよう」

「うん」

「ちょっと待って!」

「どうした?」

「これだけは答えて。何で瀬上君達はいつにそんな『能力』がある事が分かるの?」

「俺達も『同じ能力』を持っているからだ」

「そ……それって」

「悪いが他の質問は、奴を倒してからだ。稲庭、なるだけ人が来なくて出入り出来る場所が限られている所知らないか?」

「うん、ついて来て」

「で、付いて来たのはいいけどよ……」

「食べないの二人共?伸びちゃっよ」

「何でこんな時にラーメン食べないといけないんだよ?」

現在俺達は、シヨップینگセンターの四階にあるラーメン屋でキムチラーメンを食べていた。因みにこのキムチラーメンは稲庭が注文した物だ

席はお座敷で、位置は壁近く

「だってお腹空いたんだもん」

「お腹空いたんだもんじゃねえよこの万年欠食胃下垂胃拡張人間」

「じゃあ空腹なんだもん」

「同じだろうが……分かったよ今下手に動き回るのは逆に危ないからな。これ食い終わるまでここにいよう。俺は仲間に……」

『仲間に……どうするつもりだったのかな？私にも教えて欲しいなあ……』

稲庭の後ろから『腕』が伸びてきて、それが床に手をつき、そこから這い上がるように當麻が出現した

濃い黄色を基調とした、先の尖った楕円形の耳に、目元を赤外線スコープの上に赤いバイザーを付けた、首から手首にかけて蝙蝠の翼をモチーフとしたマントを着けたスタンドを身に纏って

俺は稲庭と吉祥寺を連れ、外へ向かった。その前にレジに五千円札を置いた

「お釣り要らない！」

「ちょっと、お客様……？」

息を切らしながら、ベンチに座る俺達

現在地は一階下の、ラーメン屋の真下のスペースのゲームセンター

「さっきの『壁抜けの術』みたいなのが瀬上君の言っていた能力？」

「そうなる……」

どういう訳だ？ スタンド能力は『一人一つ』が原則の筈だ。あいつの能力は『血を吸う能力』じゃないのか？

それとも血を吸うのとあの壁抜けは何か繋がりがあるのか？

「後あいつ何で妙な服着ていたの？ もしかして瀬上君がさっき……」

「悪いが黙っていてくれ……今奴の能力が何なのかを考えている……
…暇は無さそうだな」

稲庭が背を向けている壁を通り抜け、稲庭の首筋に噛み付こうと口を大きく開ける。そしてその犬歯の先端が先程噛んだ痕に到達しようとする

その前に、俺は『プラネット？ルビー』を出して奴の首を掴み、投げ飛ばす

「大体分かったぞ……こいつの能力……！」

「え？」

「こいつは、『血を吸った相手を何処までも追跡する能力』なんだ……その結論に至った根拠は壁抜けをした時必ず近くに稲庭がいた事……『血を吸った稲庭』がな……血を吸った奴の居場所が分かるのはDNAを探知出来るようになるからか別の要因があるからなのか不明だが……まあ根拠があるのは確かだ」

「正解……そしてそれが私の『ヤング？ブラッド』の能力……」

「随分らしい能力だな……まあいい。お前を再起不能にする決定は揺らがない……」

俺はスタンドの腕を出し、拳のラッシュを當麻に叩き込む

が、當麻は俺のラッシュを捌きながら俺の懐に入り込み、俺を『通り抜け』、稲庭に飛びかかった。稲庭は逃げるが當麻の動きのが早く、呆気なく捕まった

「つーかまーえた」

「くっ……離せ……」

「無駄だよ……私は血を吸うと体は頑丈になって身体能力も格段に上がるんだよ……それじゃあ……残りの血をいただきます」

「い……嫌……」

「そそるね……その恐怖で歪んだ顔……私の一番好きな表情だ……」

當麻は、稻庭の首筋の噛んだ痕に、犬歯を突き立てた

春日部の吸血鬼事件？（後書き）

スタンド名はバッド・カンパニーの楽曲から。當麻のエピソードは一応モデルはあります。僕自身昔ちよつと聞いただけでよく知りませんが（笑）

次回もお楽しみに

春日部の吸血鬼事件？（前書き）

噛まれ、血を吸われる稲庭。絶体絶命？

春日部の吸血鬼事件？

俺はスタンドで當麻の頭と下顎を掴み、稲庭を解放した

「吉祥寺！」

俺の声に吉祥寺は反応し、稲庭の腕を引っ張ってこの場から立ち去る。當麻も追おうとするが、俺のスタンド能力で俺の眼前に瞬間移動させた

「悪いけど通さねえよ……血を吸った稲庭とは別の方向へは普通の移動しか出来ないんだろ？」

「確かに……じゃああんたをコテンパンに熨してからあいつ等を追いかけてようかな？」

俺の目を狙って右フックを打ち出してきた。俺はギリギリで回避するが、避ける際に体を後ろへ反らした為、足元に隙が出来てしまい、転ばされ、顔面を踏みつけられた

間髪入れずに後頭部に蹴りを入られた。一瞬奴から目を離した隙に奴は俺から逃げていった。逃げた先は二人が逃げた方向とは別方向だ

後を追うより二人と合流した方がいいと考え、俺は二人が逃げてい

った方向へと駆け出した

「瀬上君」

「稲庭に吉祥寺」

大して距離が開いてなかったのが幸いし、すぐに二人と合流出来た。捜している間に奴にやられてなんていうパターンにならなかったのは幸いだったが、素直に喜んではいられないようだ

稲庭の顔色が悪いし、吉祥寺の肩を借りてどうにか立てているという感じだからだ

「瀬上君……稲庭さんどうしたんだろう？もしかして血を吸われる以外であいつに何か……」

「いや、これは多分血を少し吸われ過ぎたんだろうな。病院に連れて行って輸血して貰わないといけないかも知れない。何れにせよ無理はさせられない」

『最悪のパターン』こそには到らなかったが、『最悪の現状』に陥っているのは確かだ

おぶつていけば移動は出来るが撃退は難しくなる……どうすればいいんだ？

「あいつが俺達を諦めてくれるとは思わない。取り敢えずこの建物をゆっくりでいい、絶え間なく動き回るぞ。気休めにしかならないかも知れんが一ヶ所にずっといるより居場所は特定し辛いからな。幾ら奴が稲庭こいづつの位置を探知出来るとしてもな」

「あのさ瀬上君、移動しながらでこれだけはどうしても答えて欲しいんだ」

「何だ？」

「さつき瀬上君から出た……」

『簡単には諦めないよ？』

天井から、當麻が現れ、俺達に飛びかかってきた。『プラネット？ルビー』を出して殴りかかる

「ゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラ」

「ただ殴るだけじゃ通用しないよ？」

プラネット？ルビーのラッシュを簡単に捌く。そしてまた俺をすり抜け、稲庭と彼女に肩を貸している吉祥寺へと駆ける

が

「？」

それは、『濃い灰色の筋肉質の腕』が、當麻を殴り飛ばす形で阻止した

間違い無い。あれは『スタンド』だ。そしてその腕は、『吉祥寺の肩』から発現していた

兎も角俺達は急いで奴から離れる為、走った

「どうにか……また『蒔けた』みたいだね」

「だが、さっきも言ったけど止まらず絶えず動き回ろう……そして早ければ次に奴が現れた時に奴を倒す」

こっちに時間的余裕の無い以上、何時までもダラダラとこの鬼ごっこを続ける理由も必要もない

そう決めた後、俺は吉祥寺に顔を向け、スタンドを出し、殴りかか
る。本気で殴るつもりはないので拳一つ分の距離で止めるつもりだ
った

吉祥寺は自分のスタンドを出して攻撃を防ごうとした。触るか触らないかの距離で、『プラネット？ルビー』の拳は止まる

「何の真似だ？」

「やっぱり見えていたのか……そして……『それ』がお前のスタンドみたいだな……」

自身の前に出した吉祥寺のスタンドを見る。それは濃い灰色を基調とした、十本の角が顔の輪郭に沿うように生えた山羊を模した頭部に腕や足にはタコやイカの吸盤のような模様が入っており、背中には亀甲模様が入っていて、手の甲を初めとして体の各所に三角形のルビーというより赤系の色のサファイアみたいな宝石を埋め込んだ、筋肉質の肉体のスタンドだ

「スタンド？」

「ああ、俺やお前、そして奴が持っているこの能力の総称だ。稲庭も持つてる。そしてこの能力を持つ者の事を『スタンド使い』という……」

「ふーん……」

「で？大体の予想はつくがどんな経緯でその能力を手に入れたんだ？」

「星陵の受験前日春日部の親戚の家に行く途中に『矢』に刺された……君もそつなの？」

「俺が振っておいて悪いが今はこれで話は終わりだ……後からでも出来るからな。今は」

「キヤアアアアアアアアアアアア！」

後ろから女性の叫び声がした

「瀬上君叫び声がしたよ！ただ事じゃないよ」

「分かつてる十分聞こえた！だが俺達だつて危ないんだ！見ず知らずの他人に構っていられる余裕なんかない！」

「じゃあ稲庭さんをお願い！あいつは稲庭さんを優先して追跡しているんでしょ？」

「おい吉祥寺！」

「頼んだよ！」

俺に稲庭を押し付け、吉祥寺は声のした方向へと走っていった

何考えてるんだ？確かに奴は稲庭を優先的に追い掛けてはいるがそれは俺達を狙わないって訳じゃ無いんだぞ……あいつの罠だったらどうするんだよ……

「仕方無い！」虎穴に入らば虎兇を得ず」だ！」

俺は稲庭を抱え、吉祥寺を追い掛けた

この階から上の階に繋がる階段は、現状を一言で表現するとすれば『凄惨』が最も似合うと思う

勿論世の中ではこれよりもっとその言葉が似合う出来事が沢山あるのは分かっているが、俺が生きてきた中で俺がこの十五年程の人生で見えてきた光景の中では今俺が見ているこれがその言葉が似合うだろう

ここは本屋のコーナーだが、今の立場でなくとも俺は今ここで本を購入する気になれない

現在ここは、客、店員、老若男女問わず人が『首筋に噛んだ痕』をつけて倒れていた。全員が血を死なないギリギリの所まで抜かれていた

「逃げ回る獲物を追うのも楽しいけど……逃げ回る獲物をどうやって『追い込む』かっていうのも……狩りの『醍醐味』の一つだと思わない？」

本棚の物陰から、當麻が現れた。無論スタンドは発現したままだ

「そして君達はまんまと罠に引っ掛かってくれた……」

「『プラネット？ルビー』！」

俺は稲庭を吉祥寺に任せて奴に接近し、スタンドを出して拳を振り下ろした

その瞬間、顔に強い衝撃が走り、俺は吹っ飛ばされ、天井に背中を打ち付けた

「私が君達を追い掛けるのを止めたのはね……単純に君達を追い掛けるのに飽きたからなの……私はね、血を吸ったらその日はずっと凄まじい身体能力が身に付くの……あんた達如きを瞬殺するなんてステレオの中のCDを再生させるのと同じ簡単な事だったんだ……分かる？あんた達は今まで『追われる側だ』と思い込まされていたのよ！」

今度は喉と腹部に強い衝撃が走る。腕や足で攻撃されているのは間違いない。それが『反応が出来ない程速い』だけだ

パワーは勿論、スピードも結構自信のあった俺の『プラネット・ルビー』より遥かに上だ

「『アルティコロ・トレンティーノ』！」

吉祥寺がスタンドを出した。スタンドの体の各所に埋め込まれた赤系の宝石から、黒い『煙幕』が立ち上り、その煙幕は瞬く間にこのスペースに充満した。これが吉祥寺の能力か……

吉祥寺のスタンド『アルティコロ・トレンティーノ』は俺の手を引っ張り、本屋のスペースから脱出した

「この煙ただの目眩ましかからあいつ相手じゃ役に立たないだろうけど少しでも離れよう！」

吉祥寺に腕を引っ張られながら、俺は奴の言っていた事に何処か辻褄が合わないのを感じていた

春日部の吸血鬼事件？（後書き）

吉祥寺のスタンド名はイタリアのヒップホップバンド。能力は煙幕を発生させる能力です

次回は當麻戦決着を予定しています。お楽しみに！

春日部の吸血鬼事件？（前書き）

除夜の感じた事は、不利な現状を打破するのに繋がるか？

春日部の吸血鬼事件？

「何を考えているの瀬上君」

「吉祥寺……あいつは血を吸ったら人外の身体能力をその日一日獲得するんだよな……」

「うん、あいつが自分で言っていたから間違い無いと……」

「それだよ……俺が頭の中で引っ掛かって取れないのは……」

どついう事だと言わんばかりの表情で俺を見る

俺は構わず言葉を続ける

「分からないのか？それなら何であいつは初めからその身体能力を使わなかったんだ？」

「気分じゃないの？」

「それもあるだろうがそれとは違う、もっと重大な問題があるんだと思う。もし血を吸っただけであんな身体能力が使えるなら生身の人間の蹴りで吹っ飛ばされた時の衝撃如きで抱き付いた人間を簡単に離すか？」

ハツとした表情となる。俺の言いたい事をどうやら理解してくれた

らしい

何か言いたそうだが、あまり時間的余裕が無い為話を進める

「その後だつて今考えてみれば妙だつた。あれだけの身体能力だつたら俺達を殺すなり動けなくなるまで痛めつけるなりして稲庭の血を吸う事だつて出来た筈だ。だがしなかった……そして暫し追いかけて……そんなレベルじゃ無いけどな……をしている時も使おうとしなかった。だがさつき大勢の人の血を吸つたら突然途端に強くなった……考えてみればその何もかもがおかしい事ばかりだつたんだ！」

「つまり……あいつは……」

「そうだ。さつき見せた人外の身体能力は『使わなかった』んじゃない……『使う事が出来なかった』んだ！そしてその理由は単純に奴のスタンドの能力……少なくとも身体能力の向上は『他人の血液が『エネルギー源』として必要だつたんだ！』」

「それなら辻褃が合うね……」

「だが……これが分かったからって何の意味があるんだ？」

あいつの言つた事が引つ掛かったから考えてみたんだが、結局これは圧倒的不利な現状を打破する事に繋がってない

どれだけ上手く隠れても稲庭の位置はあいつは探知出来る。それならいっそ稲庭を置いて待ち伏せするか？駄目だ。稲庭は今逃げ回っ

ている奴の手を借りて逃げているのにそれを止めたら何か企んでいると感づくだろうし何をやらかすか分かったもんじゃありません！

いい手が思い浮かばない！せめてここに琢磨か宝来がいてくれたら充分どうにかなるのに！

「瀬上君……耳を貸してくれない？」

「別にいいけど……何でだ？」

「ちよつと作戦を考えてみたんだけど……」

「聞こう。何だ？」

時間はほんの少し遡り、當麻は稲庭を探知して追っているスタンスを継続し、除夜達を追跡していた

腕ずくでいくのを止めたのは、今回は自分と同じ能力を持つ者が相手だったとはいえ、派手に暴れ過ぎたのを反省しての事だ。能力による犯罪は立証する事は出来ないとは聞いているが、自分は脱獄した死刑囚。お尋ね者だ。顔を覚えられて、身動きがとれなくなるのはなるだけ避けたい

「このフロアに留まっついていて常に移動しているという事は……まだ諦めてはいないか……」

稲庭が動いている方向と速度を計算して、先回りする為に足を動かす
何十歩か歩いた所で、突然止まった。理由は

「え？いきなり移動を止めた……？」

動いていた反応が、突然止まったからだ。曲がり角を曲がると、また妙な事が起こった。それも目に見える形で

道の右側にある『洋服屋』で、『黒煙』がもくもくと出ていた

普通なら火事何かだと思うが、當麻はそうは思わなかった。あの中に稲庭の反応がしている。そして吉祥寺のスタンド能力は煙幕

「下らないな……逃げ回って思い付いた手段がそれ？」

敢えて逃げ場の無いスペースに入り込み、煙幕を張って稲庭をわざと置いていって入れ違いで出て後ろから不意打ちを食らわせるつもりだと當麻は考えた。出来た作戦だがおざなり過ぎる。自分が対象に向かう時障害物をすり抜けられるのを忘れたのか

心底がっかりした表情で反応に向かつて駆け出した。壁も商品もすり抜け、そして稲庭の反応が一メートル以内までに詰めたと同時に

から立ち向かったとしても返り討ちが関の山。隠れて攻撃しようにも、素直に思惑通りに人は動いてくれないからね。だから僕の煙幕を利用した」

「煙幕を……！まさか……」

「察してくれたみたいだね……『僕達が稲庭さんの近くにいた事を確認出来ないよう』煙幕を張ったんだよ。稲庭さんに向かってくる事も分かっていたよ。煙幕を張ったとしてもあんたは稲庭さんを探知出来、障害物をすり抜けられるからね。だからそれを逆に利用させて貰った」

「私が向かってくるのが分かっても、私が『何処から来るのか』は……」

「人間の情報収集に使う器官は『目』だけじゃない。音を拾う『耳』もある……音の大きさや音の聞こえる方向で『何処から来るのか』『自分とはどれだけ離れているか』とかは素人でも集中すれば大まかには分かる。それに洋服屋なら食品店とかと違って棚とか少ないからある程度は何処から攻め込まれても対応はし易い。服をハンガーで立て掛けているくらいだから」

「それじゃあまた逃げられたりしたらたまらないからな……もう一回ブチのめす」

「僕も参加していい？」

「構わねえよ……」

「え？いや、ちょっと、大の男二人でやるのはちょっと……」

春日部の吸血鬼事件？（後書き）

どうにか終える事が出来ました。能力も使い方ですので、こんな勝ち方もありだと思います……

次回もお楽しみに

しんのすけの中学校訪問？（前書き）

除夜達が戦っている中、しんのすけは……

しんのすけの中学校訪問？

稲庭が當麻の『ヤング？ブラッド』によって血を吸われ、除夜達との追いかけつこが始まったのとほぼ同時刻

野原家

現在この家にいるのはしんのすけとシロ、そして『ハリケーン』

他の家族は全員遠出して買い物へ向かっている

何でもみさえが前からまたずれ荘の大家、大屋ぬし代とひまわり組の担任、旧姓よしながみどりと一緒に食事をするのを約束していたらしい。ぬし代はひまわりの事を可愛がっているので連れて行った方が喜ぶだろうと連れて行く事に

ひろしはみさえ達と一緒に行く事を急遽決めた。理由は

『行ってこい。俺達は適当に家にある物を食べるから』

『ありがとうあなた。そうそう、歩きで行くには少し遠いの。だから車使わせてね』

『みさえ！』

『何？』

『俺も行く事にした！』

……以上である

何故ならみさえは機械類に弱く、特に車の運転ではそれが顕著に表れる。みさえの運転技術を知る者達は死を覚悟する程下手なのだ

道に間違えたり、家を出る時に車体を壁に擦るならまだいい。エンジンをかけてないのに動かそうとし、本気でその理由が分からなかったり等、上手、下手とかいう問題ではなく、最早本当に免許を持っているのかどうか疑わしいレベルである

よってひろしが運転手を申し出た時、反対する者は誰一人いなかった。みさえは不満だったが

という訳で現在野原家には一人と一匹とスタンド一体しかない……
…答だったが

「ねえ聞いていい?」

「答えられる範疇であれば」

「何で常陸君がオランチで家探しして見つけた高級お菓子食べながらテトリスしてるの?」

しんのすけの向かいには、しんのすけが述べた事をしている塩屋がいた。ひろし達が車で出て行った直後に入れ違いに入ってきて話があると言ってズカズカと入り込み、寛いでいた

「ねえ、何か飲みたいんだけど何か飲み物ある？お茶系がいい。置いてある場所を教えてくださいたら自分で淹れるから」

『それならキッチンの上の棚にあるぞ。私はしんのすけ達が寝静まった後よく茶を飲んでいるからな』

（ああ……最近お茶の減りが早くなって母ちゃんばやっていたけど……）

「ありがとハリケーン」

『礼はいらんぞ。どうしてもと言っのなら形でくれ』

「じゃあ取り消す」

「ねえ常陸君。お話って何？何かあるからオラんちに来たんでしょう？」

「別に。宿題終わって行き着けの温水プールも休みだし、で、君んちに遊びに来たと……」

しんのすけはハリケーンを『刀』に変え、構えた

「ちよっ待てよ！冗談！さっきの冗談！話があるのは本当だからスタンドは元に戻して！」

「そりゃ勿論僕に非はあるけどさ……さっきのくらい笑って流してよ」

「でさ、何の用？」

レモンティーを口に含んだ後、胸ポケットから写真を取り出した。それには一人の制服を着た女の子が写っていた

「『スタンド使い』を探し当てたみたいだから君の家に来たんだよ」

塩屋のこの台詞に、表情が強張った

「えっと……それがこの女の子？」

「まあね……多分僕達同様沢登優太の放った『弓と矢』でスタンド使いになったみたい……彼女の名前は葉山瑞乃……僕と同じ学校に通う一年生の子なんだ……」

『こいつがスタンド使い？本当か？』

「あくまで可能性だ。僕の学校の生徒だけで約三十人くらい可能性のある奴がいたがその中で彼女が一番可能性が高いんだ」

「ふーん……この人の事を何で『スタンド使い』だつて思ったの？
「可能性が高い」っていうには確信に近い根拠があるんでしょ？」

「いい質問だ……彼女は小学生の頃所謂「いじめ」つてのを一部の
クラスメートから受けていたらしいんだよ……こういう問題に有りが
ちだけど教師は知つて知らぬふりをしていたみたいだしいいじめ
をしていたリーダー格の親が財界では結構な実力者らしくてさ……
その辺は詳しく調べなかつたけどそりゃ酷いものだったみたい。彼
女自身も気が弱くて臆病だったみたいでさ、報復とかが恐くて親と
かにも言えなかつたんだつて」

「ほうほう」

「本題に入るけど……二月頃いじめグループに呼び出されて、そん
でそいつ等は彼女をいじめていたんだけどさ……どういう訳か……
リーダー格がいきなりボワツと燃えて一瞬にして骨まで消し炭にな
つたんだつて……その子は当然死んだ。勿論彼女が真つ先に疑われ
たらしいがガソリンをぶっかけて燃やそうとも一瞬にして人間を骨
まで燃やすなんざ不可能だ。だから事故死として片付けられたよ」

その話を真面目に聞いていたしんのすけは生唾を飲んだ

これだけの事があれば、確かに一番可能性が高いと言われて頷ける

「彼女は天文部に所属していて日曜とかは泊まり込みで学校に天体
観測をする為にいるみたいだよ」

「じゃあ調べるのは夜になって？」

「いや、結構朝早くからいるみたい。日が照っていても天体観測は出来るからね。今日も日曜で補習もない筈なのに来ている事は確認している……じゃあウチの学校までの地図は渡すから宜しくお願いね」

「え？手伝ってくれないの？」

「僕の場合は液体の融点、沸点を変える事。雨の日とか水が沢山ある場所では強いけど今日みたいな雲一つない洗濯日和で場所が学校じゃ弱いよ。スタンド自体も遠くまで行けるけど戦闘には不向きだから相手がスタンド使いで戦闘になったらまず間違い無くやられる。その辺は僕は自分の能力をちゃんと見てるつもりだ。足手まといにはなりたくない」

「……要するにオラに丸投げする為に来たって事？」

「身も蓋もないけど要約すればそうなるね。頼んだよ」

塩屋の通う春日部第二中学校

校門前に、しんのすけとロンディネが立っていた

「ここにスタンド使いがいるのか」

「そうみたい。常陸君は「スタンド使いの有無の調査だけでいい」
って言ってた。戦闘とかはなるだけ避けてって」

「まあ当然だね。俺達にしても無用な騒ぎは御免だし」

『どうやって入る？裏口から忍び込むか？』

「それはいい案ですな」

「おいそのジャガイモ小僧とオークもどき。そんな事したら通報
されるだろ。俺達は盗人じゃないんだから正面から堂々と入ればい
いんだよ。僕達が部外者つつつても何かしない限りは学校側も何も
言ってこないんだから」

「ロンディネのお兄さん頭いいね」

「……いや、普通の発想だろこれ」

スムーズに校舎の中に入った二人は、葉山のいるだろう屋上に繋がる
非常階段を上っていた

「彼の情報だと、彼女は屋上で天体観測の準備をしているみたい」

『それならすぐに見つかるな』

屋上へと続く扉を開けると、一人の少女が天体望遠鏡を組み立てていた

色素の薄い髪にセーラー服を着用。但しスカーフではなくオレンジ色の蝶ネクタイをしていて、肩から袖口、そして腰にかけて一列に並ぶ形で金属製の星の飾りがつけてあった。間違い無く写真の女の子だった

「いきなり当たりか……どうする?」

「ロンディネのお兄さんはスタンドを発現しといて。オラは確かめてみるから」

「手荒な真似はしないでよ」

「ほっほーい」

「何してるの貴方達?」

二人に気付いた葉山が、天体望遠鏡を支える三脚を広げながら控え目に訊ねた

「見た所学校の生徒じゃないわね……そっちはどう見ても子供だし」

「オラ子供じゃないぞ！野原しんのすけって名前があるぞ！」

「ごめんなさい……それで何しに来たの？」

「お姉さんに用があつて来たの」

そうやってしんのすけは近付いた。射程距離まで入ると、『ハリケーン近距離パワー型』を発現させ、殴りかかった！

葉山は拳を避ける為に後ろに下がる。ハリケーンの拳は、途中で止まっていた

「お兄さん見た？このおねいさんスタンドが見えてるよ」

「手荒な真似はしないんじゃないの？」

「攻撃するつもりは無かったよ。だから寸前で止めたじゃん」

「向こうはそう思って無さそうだよ……」

葉山の方を見てみると、やや青ざめた顔で両手で頭を押さえながらぶつぶつと呟いていた

心配してかけよるしんのすけ。だが……

「来ないで……」

しんのすけの目の前の床が、高熱を帯びて『熔解した』。しんのすけは足元の熱に耐えられず、後ろに下がった

ロンディネは『サード・アイ・ブラインド』越しにこの現象を見て、目を見開いた

「な……何でだ……」

「どうしたの？」

「スタンド攻撃には間違い無い筈だ……なのに、何であの熔解した床からは、『スタンド力が感知されないんだ』？」

しんのすけの中学校訪問？（後書き）

その頃他のメンバーは……といった感じの話となります

みさえの運転技術はある意味神業ですからね（笑）信じられないくらい

しんのすけが刺激してしまいスタンドバトルが勃発してしまいました。彼女のスタンドには謎があります

それでは、次回もお楽しみ下さい！

しんのすけの中学校訪問？（前書き）

謎の攻撃を繰り返す敵に、二人は？

しんのすけの中学校訪問？

『スタンド攻撃で床が溶解したのではない』

ロンディネのこの台詞に、しんのすけ達は信じられないと言わんばかりの表情をする

当然だ。鉄筋コンクリートの建物の一部を何の道具も用いずに溶解する。こんな事が出来るのはスタンド使いだけだ

「本当にスタンド能力でこうなったんじゃないの？」

「俺の『サード・アイ・ブラインド』の能力は俺が一番知ってる！俺にしたってさっきの言ったのが俺でなかったら絶対に信じられない！兎に角この現象は『普通に起こり得る現象』！それは間違い無い筈だ！」

「ゴチャゴチャ五月蠅いよ」

ロンディネの右足の置かれている位置の真横が溶解する。余熱で靴底の一部が溶けた

「しんのすけ！逃げるぞ！こいつには『謎』がある！それを見付けないと俺達は負ける！」

「ブ・ラジャー！『ハリケーン』！」

近距離パワー型で熔解して薄くなった床を叩き、穴を空ける。その穴に、しんのすけとロンディネは急いで入った。下は丁度廊下で、急いで下の階へと向かった

残された葉山は、顔を俯かせぶつぶつと呟いていた

「私には力がある……この力があれば私はもう誰にも苛められる事は無い……」

現在二人は音楽室にいた。日曜であり、音楽関係の部活がこの学校には無いのかそれとも今日は部活動は無いのか

それは分からないが、使われていないので当然鍵は閉まっていたので、ハリケーンで力づくで無理矢理こじ開けた。いけない事だとは分かっているが、そう言うてはいられない

「分かっている事は『スタンドを使って攻撃はしているがスタンドで攻撃したりスタンド能力で攻撃してはいない』……聞いたら混乱しそつだが事実である以上それを前提として考えるしか無いな……」

『ここは考えられないか？』床や地面の下のスペースの空気を高温にする能力』で、下の教室の空気を高温にした』

「矛盾点が幾つも生じる。空気をどれだけ高温にした所で鉄筋コンクリートをそれで溶かすなんて非現実的だし仮に出来たとしてもあんなピンポイントに熔解出来ない。絶対にこの校舎の一部はその原型を留めてないし、能力者である彼女もそれに巻き込まれる危険性がある」

「そうか……それじゃこういうのは？下の階に『遠隔操作』のスタンドを置いておく。そいつの能力は火炎放射する能力で、オラ達の足場を直接熱する事は無く……」

「それならピンポイントで攻撃出来た理由は説明はつくが下から穴が開かないと説明はつかないぞ。それに俺のスタンドはスタンド力その物を感知する事が出来るんだ。スタンドの火で熱すればそれを拾う筈だよ。そして下の階に降りる時見掛けても……」

「ねえお兄さんはオラ達の案を次々と否定してばっかだけどそれならお兄さんは何かあるの？」

「無い！だが思い返してみるとあの現象は理科の勉強で習った事があつたような気がするんだよ……ただそれが思い出せない。度忘れしたみたいなんだ」

「そんな事考える必要なんか無いしあつたとしても与えるつもりは無いよ……」

音楽室のドアが開き、そこから葉山が入ってきた

『私達の居場所が何故分かった？』

「君は外見だけでなく知能も獣並？使われていない筈の教室のドアが力づくで破られていて、しかもそこから話し声がするんだよ？おかしい点だらけで不審に思わない方がどうにかしているよ」

音楽室のカーテンの一点が焦げ、そこから燃えだした

「悪いけど私に立ち向かおうとかそんな事を考えている間はたとえ入院が必要な大怪我を負おうとも学校から出て行こうともそれを蹂躪するまで何処までも追跡してやるからな……」

「（あの目は本気でやるって目だ……）いつせー……の！」

しんのすけを抱きかかえ、葉山を横切るロンディネ。少し間を置いた後振り返るが、ロンディネは窓を開けて飛び降りていた

「『外に逃げた』か……都合だ……」

「二階から下は花壇とは言え、人を抱えて飛び降りるなんてやるもんじゃないな……」

足を引き摺るように移動している。体が出来ていない十代半ばでは、やはり相当堪えたようだ。特に靴底が大ダメージを受けた右足は左足と比べ、動作が遅い

見るに堪えたのか、しんのすけは『ハリケーン』を出し、肩を貸した

「すまない……」

「いや、別にいいぞ」

「奴の能力……どんな能力なのかを理解出来た……漸く思い出せた」

「本当？」

「あいつの能力を説明する前に俺達はまず……」

しんのすけ達の前方にある車のガソリントankの近くが紅く変色した。高熱で色が変わっているという事だ

中のガソリンに火が点き、爆発した

「……まず、奴から隠れる事が重要だ。『屋内』で『面積は狭く』、『なるだけ人のいない所』でそして『窓とかが無い、または小さな

物しか取り付けられていない』、この条件を、少なくとも後の二つを満たしている場所……知らない？」

「……オラここに初めて来るんだけど」

「僕も初めてだよ。でも日本に来て間も無くの俺より生まれも育ちも日本の君のがそういう場所はピンと来るだろ？今まで行った事のある場所でそういう場所は？それを思い浮かべるだけでいいから」

「あ、ある」

「早いな……」

早いに越した事は無い。だが、もう少し時間はかかるだろうという予想が裏切られ、驚き半分呆れ半分の視線をしんのすけに送った

「あちこち逃げ回って……でも校舎にはまだ出ていないって事はまだ学校の外には言っていない……追い詰めて心を折ってあげる……フフフフフフ……」

異様な雰囲気醸し出しながら独り言を言って笑う彼女に、体操服を着た女子は引いていた

しんのすけ達を見失った後、葉山は学校にいる人達に二人を何処で見掛けたかというのを聞き込んでいた

動き回って居場所を特定出来ないようにしているらしいが、それなりの人数に聞き込みをすれば何処にいるのか、何処に向かっているのかは大まかながらも分かる。学校のような限られたスペースなら尚更だ

彼女が向かった先はプール。暖かくなつたとはいえプール開きはまだだ。立ち入る人間はそんなにいない

「ここで決着をつけるつもりなのかなあ……」

入口は当然鍵を閉められていた。しんのすけ達は金網を登って侵入したのであろう

そう思いながら、ポケットから天体観測の準備中に風で飛ばされてプールに落ちた物を回収したいという題目で職員室から借りたプールの鍵を出し、下ろされていた南京錠を開けた

「証言だところちへ彼等が向かったのはほんの数分前……時間はそんなに経ってないからまだいる筈……」

プールで隠れる事の出来る場所は限られている。水に潜って隠れても上手く長く隠れるなんて出来ないしそんな事相手も承知だろうか
ら水中は捜したりする必要は無い

となると、トイレか更衣室かのどちらかになるだろう。鍵は閉まっているから、音楽室の時と同じく『スタンド』で無理矢理こじ開けたに違いない。だからその形跡のあるドアの繋がる部屋に奴等はい

「……でもその程度は考えてあるよね。うん」

更衣室への鍵は全て破壊されていた。勿論この中全てに彼等がいるとは考えない。体を分けられない限りそんな事不可能だ

更衣室は五つ。前から三番目、つまり中央の更衣室のドアは全開だ。一番目、二番目、五番目は僅かに開いており、四番目のドアはしっかりと閉じられている

普通なら全開にしている部屋に人はいないと考え、しっかりと閉まっている四番目を怪しむのがセオリーだろう

だが、そう考えるのは承知の筈だ。だから逆に考える。故に彼女は『ドアが全開にしてある部屋』に踏み込んだ。部屋は南向きに小さな窓が取り付けられているだけで、電気も点けていないので当然薄暗かった

「見つけた」

更衣室の隅に、座り込んでいるロンディネの姿があった

しんのすけの中学校訪問？（後書き）

追い詰められたロンディネに為す術はあるのか？

次回で決着を予定しています

しんのすけの中学校訪問？（前書き）

葉山戦決着！

しんのすけの中学校訪問？

ロンディネは自分のスタンド『サード・アイ・ブラインド』を発現させ、葉山と向き合う。熊と遭遇した時と同じだ。目を背けたらやられる

葉山はニコリと笑った。すると、ロンディネのボロボロの右足の靴は黒い煙を立てた

決して視点を外す事は無く、ロンディネはニヤリと笑った

「何がおかしいの？」

「俺のスタンド名は『サード？アイ？ブラインド』……能力はスタンド力を『感知する』能力……」

「それが？」

「コンクリートの建物を熔解させた時、溶けた部分からはスタンド力が一切感知出来なかった……正直攻撃の正体は皆目見当がつかなかったよ……だが音楽室でカーテンが『一点が焦げながら燃えだした』事で大まかながら攻撃の正体を理解したんだ……」

葉山は何も言わない。ロンディネは喋り続ける

「ズバリ、君は『太陽光を一点に集めていた』！つまり君の能力は

『空間にレンズを作る能力』！一見平和的で大した事の無い能力だ
と思うけど攻撃に転用したらこれ程強力で防ぎようのない能力はそ
うないわな。太陽光は少し集めれば鉄を熔解出来るって聞いた事が
あるから集まる所に人間がいたら骨まで燃え尽きるのは納得だ。そ
れに光の速度は音より速いし、分かっているだけでも避けようが無いし」

スピード以前の問題だし……と言って、立ち上がった

「とは言え確信は持てなかったからな。念の為光があまり入ってこ
ない場所に入って確認させて貰った。そして今さっき君の後ろには
確かにスタンド力が感知出来た」

「それが？確かに全部正解だけどそれは自分は私の能力には絶対に
敵わないって認めているんだよ？」

「その通りだ。否定はしない。僕のスタンドは根本的に戦闘に向い
ていないし、そうでなくとも君のスタンドを用いた攻撃をかわせた
り防げたり出来るスタンド使いはそういないだろうし……でもさ、
『君自身』はどうだ？」

「へ？」

「俺を見つけた時、何も思わなかったのか？『俺が一人でいる事』
に、何も疑問に思わなかったのか？」

何を言っているのかを察知したと同時に、閉まっていた前から四番
目の扉が勢い良く開き、その中から『ハリケーン』を出したしんの

すけが現れた

ハリケーンは葉山を押し倒し、馬乗りして拳を振りかぶった

そういう事かと葉山は納得した。全開の扉と閉まっている扉を怪しむのは当たり前で、どちらに入っても同じ結果が待っていたと言う事だ

つまり自分がここに来た時点で、自分は詰められていたという訳だ
そう考えている内に、ハリケーンの拳が、振り下ろされた

（私はやられるのか……そうか……私は結局『無力な側の人間』なのか……）

去年の十二月、終業式が終わり、冬休みに入ったばかりの日、私は下に電車が通る陸橋へと足を運んだ

理由は『死ぬ為』だ。死ぬ理由はもう疲れ切ってしまったからだ
毎日のように私をいじめる人達、乗じていじめに荷担する同級生、責任問題にしたいくないから知って知らぬふりをする教師。親に助けを求めた事もあったが、その翌日からいじめがエスカレートしていった為もう嫌になった

このままでは卒業を待たずに殺されてしまう。それでは悔しいから、

自分から死ぬ事にした

下調べをして電車が通過する時間帯は分かっている。後五分待てば私は死ねる

『ねえ……君は何をしているの？お兄さんで良かったら話してくれない？』

後ろから、大きなバックを抱えた妙なお兄さんが私に声をかけてきた。会ったばかりの人間に何を血迷ったのか、「この人ならどうにかしてくれる」と直感的に思い、話す事にした

『成程……でもさ、本当にそれでいいの？自殺して、君に対してのいじめが問題になったとしても世間は少し騒いですがすぐに忘れるさ。いじめで自殺なんてそんなに珍しくはないからね……それに君をいじめた子達も君の事なんかすぐに忘れて同じ事を繰り返すよ？用意された文を上つ面の態度で読んで少し少年院に入って出て来たらはいおしまい。君は無駄に死んでみんなから忘れられる。そっちのが悔しくない？』

『なら……どうしろっていつの？』

『いじめを止めさせればいいじゃないか。それで全ては解決する』

『何処か行ってくれない？』

その言葉を聞いた時、私の心はその人への失望感でいっぱいだったがその人は私がそんな態度を取る事は分かっていたかのように、ポケットから小石を取り出した

その小石は、『モンスター』に姿を変えた

『これはトリックとかじゃない……僕の能力だ。この能力を君にも与えてあげる』

バックを降ろし、その中から『弓と矢』を取り出した

『さっき言ったのは話し合いで止めさせようって事じゃない……殺して止めさせようって意味で言ったんだ。下らない倫理観とかは持つ必要は無い。正当防衛だ。法律でもそれはちゃんと保証されている。まあ法律じゃ罰する事は出来ないけどね』

『その『弓と矢』は？』

『これはね、人間につきさつき見せた『能力』を与えるアイテムだね。射抜くと能力が手に入るんだ。僕もこの矢で能力を得たんだよ。そして僕は今ある目的の為にこれを使って仲間を増やしているんだ。今日はこの辺りで重点的に増やしているね。十五人能力を引き出す事に成功したよ』

『つまり……その『矢』に射抜かれれば……私にもその『能力』が

手に入るって事？」

「厳密に言えばそれは君次第だ。この『矢』は素質ある者を欲しがり、人を選ぶ。素質があれば能力が己の精神から引き出されるが、そうでなかったらまず確実に死ぬ事になるからね」

「……………え？」

「安心しなよ。今の所だけど僕が選んだ人で射られて死んだ人は0だし、それに僕が通りかからなかったらまず間違い無く君は身投げして死んでただろ？一度死んだと思って「はい」と言いなよ。そうしたら僕はこれで君を射抜いてあげるよ？」

「えつと……………」

「無力なら……………無力じゃ無くなればいいだけだろ？」

その言葉は、私の答えを決定させた……………

(これがこの様か……………仕方無いか……………)

そっと目を瞑った

右耳から強い音がした。何かを横切ったような感じの風も感じる
目を開けて音のした方へ首を向けると、振り下ろされたハリケーン
の拳は、自分から見て顔の右側へ振り下ろされていた

「な……何でトドメを刺さないの？」

「お姉さんいい人だから」

「は？」

返ってきた答えに、葉山とロンディネは呆れた声で間抜けな言葉を
発した

しんのすけは続ける

「だってさ、オラあんまり頭良くないからロンディネのお兄さんの
言ってた事あんまり分からなかったけどさ、オラ達がこうしてお姉
さんを追い詰める事が出来たのって、オラ達が生きているからだよ
ね？」

「いや、何を当たり前な……ああそうか」

納得したロンディネ

確かに彼女の能力なら、自分達へ焦点を合わせて燃え尽きさせる事

は容易だった筈だ。だがそれはしなかった

もし彼女が人を殺すのに躊躇の無い人間だったら、戦いが勃発した時点で自分達は消し炭になっていた

「そもそもこの戦いが始まったのはオラがお姉さんを刺激させたのが原因だし、茶碗に言ったら調べるきつかけの事件もお姉さんが殺した人はお姉さんに対して凄く悪い事をしていたんだし……だからお姉さんはいい人だよ！ごめんねお姉さん、怖がらせちゃって」

ロンディネはぼそりと「さら（更）だろ」と小声で突っ込みを入れる

しんのすけは頭を下げた

それを見て、葉山はふーっと息を吐いた

「私の負けだよ。頭を上げて」

しんのすけが下げている頭を上げると、葉山は右手を差し伸べた

しんのすけも右手を差し伸べ、その手を握った

（凄いなこの子……）

葉山瑞乃(スタンド名:ソーラー・システム) - 再起可能

TO BE CONTINUED...

しんのすけの中学校訪問？（後書き）

スタンド名はザ・ビーチ・ボーイズの楽曲。能力は「パタリロ！」で過去パタリロが発明した巨大なレンズ装置と、太陽光を使つての殺人事件があつたのでそれを参考にしました

次回もお楽しみに！

スパニッシュ・フライ？（前書き）

塩屋「僕はこの能力を得てから、カップ麺に直接水を注いでいます。理由は、水の沸点を変えて一瞬でお湯を沸かす事が出来るようになったからです」

琢磨「それで？」

塩屋「他にも、湯船に水を半分入れて沸かして水を足しています」

琢磨「何が言いたいのですか？」

塩屋「僕にはお湯を沸かすのにガスを使う事は無いという事です。

また、同様の理由で製氷器は必要ありません」

琢磨（これって能力を上手く使っていると取っていいんでしょうか？）

外出の際かさばる物を能力で一部だけ空間に持って行って後は家に置き、使う時手元を持ってくる人

スパニッシュ・フライ？

日曜から二日経った、つまり火曜日の正午

俺は義母さんと共に、小さい頃からの行き着けのお好み焼き屋『ジヤバウオック』で、豚と烏賊、コーン、餅、海老、浅蜷、チーズの入ったスペシャル焼きを食べていた

因みに学校はサボっていない。今日は何やら学校が用があつて午前中授業だった。義母さんが一緒なのは本日が参観日だからでもある。店の紹介をすると、瓦屋根の和風建築で二階建て、そして何よりの特徴は、『ボロい』事だ。外装がこんななのは、店長の趣味らしく、小さい頃から変わっていない

内装は普通だ

知る人ぞ知る名店らしい

お好み焼きの種にはかなり細く千切りにしたキャベツが沢山使われているのが特徴で、味はかなりいい。中三の三学期から来なくなつて久しいが、やはり美味しい

俺はまだほんの子供だった頃から義母さんや優太と、中学生になつてからはそれに宝来や勝海達と一緒に好み焼きを食べに来ていたのを思い出した

「除夜君よく食べるね。父兄参観そんなに疲れたの？」

「ああ疲れたよ。あんたの暴走の制止にな」

頼んだガラナの蓋を取り、コップに注いで一気に飲んだ

この人は俺が初めてほんの赤ん坊の頃から育ててきたからか、俺の事をやや溺愛している傾向があり、体育祭や文化祭、授業参観の日等は余程の事が無い限り万難を排して来ている

それに関しては素直に喜ばしいとも嬉しいとも思うが、授業参観の日は来て欲しくないと思っっている

理由は、『滅茶苦茶恥ずかしいから』だ

本人曰く「若い頃を思い出してはしゃぎたくなる」らしい。そして実際はしゃぐのだ

指名する前に自分から進んで答えを言ったり黒板に答えを書いたりする。ちゃんと答えてくれたらまだいいが、明らかかなウケ狙いのふざけた回答だったり、全く違う話に突入して流れを滅茶苦茶にしたり、黒板を消して落書きをしたり、授業の主導権を握り、生徒、父兄を巻き込んだゲームを思い付きで開催したりしていた

これだけならまだいい方で、今回に至っては授業は現国なのに、教師を退かして化学の授業を進めたり（この人一応一通りの教員免許を持っている）、後半に入ると現国とも化学とも関係の無い手品を披露し、生徒から拍手喝采を浴びた

ブーイングを無視して何とか必死に追い出して最後の五分（未満）

は普通の現国の授業を行えた。勿論大して教科書が進まなかったが

……

これに似たり寄ったりの事を、この人は小学校から授業参観の度に引き起こしている。もう一度言おう。来てくれる事は素直に喜ばしいし嬉しい。だが自重して欲しい。止めるの大変だから

「はい。スペシャル焼きもう一丁」

「ありがとうオヤジさん」

飲食店の為セミロングの髪をゴムで纏めて三角巾を被った、背の高い女の人が、注文したお代わりを持ってきてくれた

彼女はこの店の経営主であり店長である。彼女の事は常連客は皆「オヤジさん」と呼ぶ。理由は彼女がそう呼んで欲しいからだ

余談だが彼女は実年齢が49歳で、今年で五十歳の筈だが、どう多く見ても二十代前半である

「食べないの？冷めるよ？ポーツとして」

「注文した以上食うよ勿論」

「いやーやつぱり『ジャバウォック』のお好み焼きはいいね。それでさ除夜君、次何処行こうか？」

「……近々中間テストがあるから俺的には早く帰ってテスト勉強したいんだが……最近色々トラブルに巻き込まれて勉強おざなり気味になっているから成績自信無いんだよ」

「テスト？成績？そんなの求められてるの結果だけじゃん。勉強頑張っていていればそれでいいんだよ。そんなの気にする必要無いって」

「進学には結果を残す必要があるし就職だって特定の学歴がないと雇ってくれない所も結構あるけどな」

「あれ？蠅でもいるのかな？」

「え？そんな……」

何別におかしくもない事を言ってるんだよと言おうとして、止まった

確かに『羽音』は聞こえる。だがそれは、蠅にしては大きいし、リズムも何処か激しい

羽音の聞こえる方向に顔を向けると、『蝉』がいた。モスグリーンを基調とした、あちこちに継ぎ接ぎ模様のある、三十センチ以上の長さの羽の生えた、クマゼミを一回りから二回り大きくした蝉が、俺に向かって飛んできている

「『スタンド』か！」

「へ？」

「悪い義母さん！」

スタンドを出して首の後ろを手刀で叩き、気を失わせた。何が起きているのかこの人には分からないだろうが、騒がれるよりは眠らせていた方がいい

義母さんを物陰に隠し、すぐに蝉のスタンドに殴りかかる。蝉のスタンドはギリギリ紙一重で回避する

羽の先端が人差し指に当たり、切った。フィードバックで同じ箇所には傷が出来る。結構深かったらしく。骨は露出していないがそのギリギリまではザックリといった

『掠っただけ』でだ

あの蝉の羽は刃みたいになっていて、触ったら切れるのであろう。それは間違い無い。問題はこの切れ味だ

これだけの破壊力は近距離で操る型か自動追跡型じゃないとまず出ない。そして避ける動作をしたり急所を狙ってくるので自動追跡型である可能性はまず無い

そして本体が近くにいる様子は無い事から、近距離パワー型の線は消える

(つまりこいつは遠隔操作で何等かの能力で『羽』の切れ味を上げていると考えたが妥当だな……)

それが何なのかを観察している余裕は無いし、こいつには少しダメージを受けて貰うか……

そう考え、即座に実行に移した俺は『プラネット・ルビー』の腕を出して俺の首を狙ってくるスタンドの顔を狙ってやや右寄りに右ストリートを繰り出す

それを『蝉』は、まるで「お前の攻撃なんか止まって見えるんだよ！」とナメた風に言うように体を斜めに傾けて回避した

その瞬間を逃さず、間髪入れずに左拳をスタンドの『胴体部』へ叩き込んだ！

羽は比喻ではなく本当に触れたら切れるとしても、その羽が生えている胴体部は触ったとしても何ともない

普通にそこ狙いで攻撃した所で避けられるのは分かっていた。だから『最初の一撃で避ける向きを誘導し、避けたと同時に左を振るっ
た』

「まだ動くか……」

それは予想していた。渾身の一撃を食らわせてやったつもりだが、やはり拳がすれて羽に当たってしまった事を恐れ、無意識に力をセーブしてしまったのだろう

大したダメージは与える事が出来ず、問題無く飛んできた。それも先程より速く、正確に首狙いだ

自分を『軸』にしてスタンドを後ろに瞬間移動させた。スタンドは大きく旋回し、俺に向かってきた

「こりゃスタンドを叩くより『ここに近付いてきている本体』を直撃叩いた方が正解かな？」

接近してくるスタンドを真横に移動させ、後ろから殴りつけた

俺の攻撃をスタンドは上にカーブしそのまま腹を空に向け、体を傾け、そのまま俺の腕に向かって直線に飛んできた

俺は自分の腕の軌道を、左腕で二の腕を殴る事で無理矢理変えた。お陰でどうにか手の甲から肘近くまでの切り傷を一本作るだけで済んだ。傷口から血が噴き出た

「痛い……遠くからで充分だと思っていたが、あの野郎の言う通り

『スタンドとの戦闘』はあっちの方が経験豊富か……そうでなくちや面白くねえ……」

ヒヒヒヒと笑いながら、男は自分のスタンドと除夜との戦闘が繰り広げられている場所へと向かっていた

スパニッシュ・フライ？（後書き）

最初の方は、琢磨と塩屋のちょっとした話。能力をどう使っているかとかそんな話です（笑）

スパニッシュ・フライ？（前書き）

鋭利な羽を持つスタンドに、除夜はどうする？

スパニッシュ・フライ？

「ゴラゴラゴラゴラァ！」

近付いて顔面や腹部、背中を狙って今自分のスタンドの出せる最高速度で殴りかかる

その攻撃を、紙一重でひらひらと避け、逆に攻撃してきた。攻撃を受けたのは運動が止まったばかりの腕で、反応する事が出来たので重傷はどうにかながら免れた

この場合の重傷とは、指や腕が切り飛ばされる、または使い物にならなくなる程深く切られる、が定義だ。指には深い切れ込みが幾つも入ってるし、腕も同様だ。どうにか反応出来たからこの程度のダメージで済んでいる

「少なくとも『本体』はここに近付いてきている……動きは確かにさっきよりも精密になってきている……」

「『近付いてきている』……ね、ついさっきまでだったらの確な表現だったが今は『近付いてきていた』のが正解だよ、瀬上除夜……」

背後から声があったので、目の前に接近してくるスタンドを『軸』にしてスタンドの背後に回る事で、後ろを向いた

伸ばした前髪を右側は上げ、左側は下げて左目を隠し、他は逆立て

て雲丹のようにセットしている変わった髪型

星陵高校の制服をベースとし、長袖は切り取ってYシャツの上に網シャツを着ていて、膝に金属製の膝当てを付けた、背丈は俺とほぼ同じか少し低めの男だった。直接の面識こそは無いが、顔は知っているし名前も聞いた事はある。確か――

「お前……たけさわひろかず嶽沢弘和か……？」

「俺の事は御存知か……まあ同じ学校で同じ学年だから知っ
ていてもおかしくはないが……」

クラスは違うが絡んだ上級生十人余りを半殺しにして入学式前に自宅謹慎処分食らった奴なんか印象が強過ぎて簡単に頭から消えねーよそれに自宅謹慎中にも謹慎明けた後も喧嘩の噂は絶えないし

「改めて自己紹介しよう……俺は嶽沢弘和。この虫……『スタンド』の名前は『スパニツシュ・フライ』……で、俺の目的は……」

「優太から俺を始末するよう言われて……じゃないよな？」

「優太？……ああ沢登優太か……最近変死したっていう……違うな。今日学校から家に帰る途中にいきなり『矢』で攻撃されてな……で、矢を放ったスタンドからお前を遭遇次第始末するよう言われてな。最近スリリングな喧嘩は無いし、引き受ける事にしたんだよ」

つまり成り立てのスタンド使いつて事が……

こいつを倒せばあいつに繋がる情報が少しだけでも手に入るかもしれない

だが落ち着けよ俺……ここで焦ったりして考え無しに突っ込んでやられましたじゃただのアホだ。確実に本体をぶちのめそう

スタンド『スパニツシュ・フライ』が飛んでくる。『軸』はまだ解いていない為、奴からして右斜め前に瞬間移動し、リアアットを繰り出した

獄沢は難なくかわし、俺の腹部に肘打ちを食らわせた。反応が来ず、まともに入った

「うげ……」

思わぬ痛さに腹を押さえ、しゃがんだ。その隙を逃さず、俺に向かって奴のスタンドが飛んでくる

俺はスタンドの後ろに瞬間移動する事で攻撃を回避した

「まさかスタンド使いはスタンドさえどうにかすれば本体は無力だと思ったのか？俺はどっちかって殴り合いのが自信あるんだよ。」

どれだけ動作が素速くともスタンドが人間の姿をしているなら予備動作で何をするつもりかは大体の先読みは可能だから回避も出来るし対処も打てる……お前は自分の能力を少しばかり過信し過ぎているんじゃないか？」

悔しいが反論出来ない

車の運転は慣れてきた頃が一番危険だと聞くが、それは今なら少し実感出来る。俺は『スタンドでの喧嘩』に慣れてきて人間相手での戦いを考慮してなかつたみたいだ。それは反省しないと

『スパニツシュ・フライ』が右側から本体の嶽沢と共に接近してきた。スタンドはその場で止まって、嶽沢はそのまま俺に接近し、殴りかかる

俺はスタンドで嶽沢の拳を防ぎ、両手首を掴んだ後に自身の左拳を奴の顔面に向けて叩きつけた

途端に、スパニツシュ・フライが飛んできて、俺の左拳の、中指と薬指の間から掌から見て生命線の所までザックリと斬られた

慌てて後ろに下がり、スタンドも一時解除する。ついでにボロボロになった上着を脱いだ

「こりゃ手術が必要だな……完治までにどれくらいかかるんだろう」

呑気な事を言っているが、これは焦燥感にかられないようにする為に言ってるだけだ。勿論何の解決にもならなければ気休めにすらもならない

もっと建設的にあのスタンドの羽の切れ味がかなりいいのは何故か考えよう

「何か考える余裕がお前にあるのか？」

接近して蹴りかかる。奴を『軸』にして今蹴りを放った足が通り過ぎた地点に瞬間移動

そして、俺の右肩から左脇にかけて結構深い傷が出来た。『スパニッシュ・フライ』だ

攻撃を回避する事を頭に入れ、瞬間移動が終わったと同時に俺の死角から発現させたのだろう

全く、澄んだ水みたいな羽だ……斬る為にあるような刀みたいだ

ん？ちょっと待て、それっておかしくないか？

思い返してみたらおかしいぞ……何でだ？何で……

何で、『あいつの羽には血が付いていない』んだ？

『切る』って物と物とが接触する事で起こるんだぞ？人間を切りつけたら血は付着する筈だぞ？

スタンドだから？いや、有り得ない。スタンドは確かに同じスタンドでしか触れる事は出来ないが、スタンドが実体に物理的な干渉をする際は当然それに触れないといけないから少なくとも切っている最中は血が付かないとおかしい筈なんだ。なのにそれが無い

結論を導くにはもう少し『観察』してからだな。それよりも今はあいつに確実にダメージを与える方法だ

素手での格闘は駄目だ。殴り合いの喧嘩なんか口クにした事の無い俺じゃ勝てない。スタンドでも駄目だ

奴に勝つには『P・ルビー』^{ブラネット}の能力しかない。それも全く新しい使い方を、今すぐに考え付かないといけない

今まで思い付いたのは、『回避の為の僅かな距離の瞬間移動』と『何かを行いながらの瞬間移動』……

そうだ！これを実践してみよう！

そう思い立った途端、俺の左肩がスパニッシュ・フライに斬られた。肉に食い込んだ部分は、左肩を通り過ぎた時も血は付着していなかった

「あれ？」

左肩を観た時、おかしな事に気が付いた

切られた時の血しびきとは別に、『かなり細かい血痕』が付着していた。俺はこれを見て、奴のスタンド能力を理解した

「何を考えてるのか知らんが、お前は期待外れだったみたいだな…
…お前の能力は俺には通じない」

獄沢は接近して、殴りかかった。俺は避ける為にこいつの右側へと瞬間移動。そしてそのまま殴りかかった

瞬間、スパニツシュ・フライが俺の頭上に発現し、その羽を俺に向かって振り下ろした！

こいつはこの時、頭に何を思い描いていたのであろうか？俺が頭から真っ二つにされるグロテスクな画だろうか？

まあ少なくとも、今のこれは頭になかったのは断言できる

俺が『こいつがスタンドを発現したほんの少し後に、こいつの左側に瞬間移動してこいつをぶん殴った』という現実に起こった事実は

獄沢は立ち上がり、俺を睨み付ける

「ミリ単位でしか間隔を空けてなかった筈だ……そして即座に攻撃に移った……避けられる筈が無い……瞬間移動といってもお前のは……」

「そつだよ。俺のは移動する所を決めてないと出来ない。だから前もって決めた」

「どついつ……」

「言った通りの意味だ。俺が今まで考えた中に『何かをしながら移動』ってのがあってね。その何かを『しながら』の部分に視点を变えて見てみた。『しながら』は『過程』、『過程』とは『行為』、『行為』とは『進行』、『進行』とは『時間』だ。瞬間移動する方を角を予め決めておいて、『何時瞬間移動するかを』設定しただけだ。俺が何処に瞬間移動するかを決めて、お前が確認するのにかかる時間に瞬間移動するようにな」

スパニッシュ・フライ？（後書き）

スタンド名はヴァン・ヘイレンの楽曲から

除夜の新しい能力の使い方は、『時間が来たら決めてた所に瞬間移動する』と解釈して下さい

次回決着です

スパニッシュ・フライ？（前書き）

嶽沢戦決着！

スパニッシュ・フライ？

追い込まれて人間は進化するというが、今が正にそれだな……

いや、最近気付いた能力の使い方も追い込まれたからこそ思いつけたもんか……

「つまりこういう事が……今までは『決める』『移る』だったのが『決める』『移る』『時間が経つ』『また移る』になった訳か……つまり俺はさつきみたいに一方的に攻撃を繰り返す事が出来なくなってしまうたって事が……」

「随分と冷静だな」

動じて焦ってくれば儲けものだったがそう上手くは運んでくれな
いか

喧嘩は慣れてるって聞くし、不測の事態になる事はそれなりに経験
しているんだろうな

「まあいいや……後さ、分かったよ。何でお前のスタンドの羽の切れ味がそんなにいいのかがね……その答えはこれだ」

俺は自分が着ているワイシャツを、正確にはワイシャツについている『自分の血痕』に指差した

「よく見えはしないだろうが聞いて貰うぜ……変だと思ったんだ。刃物で人間斬りつければよっぽど早く振らない限りは刃に血は付着する……お前のスタンドの動作の速度は俺の『プラネット・ルビー』より少し遅い程度……だから付着しない訳がない……そして俺のワイシャツには、そして脱ぎ捨てた服には『細かい血痕』がついていた……つまりこういう事だろ？『付着しなかった』んじゃない、『飛び散らした』んだ……」

俺は獄沢に人差し指を差した

「つまりお前のスタンドは、『刃である羽を高速振動され、切れ味を上げている』……だから遠隔操作で精密性もありながら破壊力が高いんだろ？」

中学時代に宝来達と一緒に見たSF映画であつた振動ナイフを思い出したおかげでこの発想に至れたんだけど……

本当何がきっかけでどんな結論や結末に至るのか分からんな……

「分かっただろ？お前はもう俺には勝てない……止めれば許してやる。お前にその能力を与えた奴の事を知る範囲で洗いざらい全部教える」

「誰が教えるかよ。俺はまだ負けた訳じゃないってのに……なあ！」

俺の顔に向けて蹴りを放つ。仕方無い。一度気を失わせよう

嶽沢の後ろに瞬間移動、そして手刀を振るう

奴が俺の位置を確認すると同時に設定した時間が訪れ、設定した方向へ瞬間移動。手刀は瞬間移動後のコンマ数秒後に、嶽沢に命中

同時に右手を伸ばし、俺の襟首を掴んだ。左手は俺の右手首を掴んでいる。親指が傷口に食い込んで半端なく痛かった

「どつだ……封じたぞ……お前の能力」

「お前の能力は確かに恐ろしいものがある……だが、掠る程度なら兎も角、こっしっかりと自分に触っている物に対しては移動させる事も『軸』にする事も出来ないんだろ？」

ピョンと跳んで俺の両足の爪先を踏みつけた

「だが俺はこのままでも自由に攻撃出来る……さっきは悪い事言っただな。随分楽しかったぜ……だがこれで終わりだ！食らえ！『スパニッシュ・フライ』！」

スタンドを発現させたと同時に、俺は奴に『頭突き』を食らわせた。互いの額から血が出て、嶽沢は倒れた

スタンドも消えた事から、間違い無く気を失ったのは確かだ

「喧嘩は能力や手足だけじゃなくて「頭突き」とか「体当たり」とかも有りなんだよ……水持ってきて顔にかけるか」

「おーい除夜君」

よく知った声が聞こえたのでそっちに顔を向けると、笑顔で手を振りながらこっちにやってくる我が義母がいた

……あれ？何だか知らないが、何時ものこの人懐っこい態度が何処かおかしいような……

「て何その怪我！あたしが倒れている間に何があったの？てか何であたしいきなり倒れたの？」

「多分だけど日射病で倒れたんじゃないの？」

「日光は除夜君のが弱いじゃん」

「義母さん毎日のように外出するでしょ？それもあるんじゃない？で、日陰に置いて塩水を用意しようと思ったら通り魔に斬りつけら

れてさ。勇んで立ち向かったらこの様だよ。通り魔には逃げられるし、自業自得とはいえホント散々な目に遭ったよ……」

「……それが本当なら、私も嬉しい限りなんだけどね」

「何か言った？」

「何でもない……それより病院行かなくていいの？ 幾ら治癒能力が高い君でもその傷は縫合とか必要じゃない？」

「そりゃ分かってるよ。でも日帰りは無理だろうけどせめて明日までには退院出来るかな？ 学業疎かにしたくないし」

「傷の深さとかにもよるけど……難しいと思うよ？」

「だろうな……」

嶽沢弘和（スタンド名：スパニッシュ・フライ）： - 再起可能。除夜と共に病院へ搬送される。軽い脳震盪と戦闘による負傷により、一日ばかり入院した

除夜達の暮らす孤児院

「ねえ咲良君」

「何ですか？えっと

.....おばさん

「.....そこまで間を空けないとスムーズに言う事が出来ないのかね？」

ほぼ日常的な会話だが、彼女の様子が何時もと違つものには何となく気が付いた

普段の陽気でおちゃらけた様子はなりを潜め、何やら深刻な悩みを抱えているようだった

「まあそんな事はいいや。除夜君の事だけ」

「ああ結局二〜三日程入院が必要と診断されたんですね.....」

まあ当然だろう。上半身に、特に両腕に沢山の深い切り傷を作ったのだ

余談だが診断された時除夜は少し落ち込んだが、すぐに「授業受けれないのは残念だけど宝来達にノート見せて貰えばいいし入院しても勉強は出来る、テストが始まる前に退院出来るからまあいいや」と納得した

「お陰で家事当番を少し変更しないといけなくなっちゃったけど……そんなのはどうだっていいんだよ……」

「？」

「咲良君……『宿命』は生まれながらに持つ物で、『運命』は他者から与えられ、自分でどうこうする物だってまだ若い頃聞いた事あるんだよ……」

何を言っているのか分からないという表情を作る咲良

「もしその言葉が本当だとしたら……『運命』を与える『他者』はどんな存在なのかな？」

「えと……何が言いたいんですか？」

「除夜君の『運命』は、誰から与えられたのかな？神様かな？私かな？それとも……『あの人』かな？……て思っちゃってね……」

「『あの人』って誰ですか？」

「それは……いや、ごめん。忘れて。馬鹿にした言い方に取れたなら謝るけど、君が知った所でどうにもならない……いや、『誰が知った所で』……かな？」

飴玉を頬張り、立ち上がった

「うん、ごめん色々……じゃあ今日は久々にみんなで外で食べるにいいかない？お金はあるから……咲良君は悪いけど玄関先に集めて貰える？あたしはバスを呼んでくる」

「はい」

彼女の言っていた事が気になってしょうがない咲良だったが、取り敢えず今の所自分の胸の中に秘めておく事にした

T O B E C O N T I N U E D …

スパニッシュ・フライ？（後書き）

まあ決着はつきました。ボロボロになった除夜は当然病院へ（笑）

次回もお楽しみに。それでは！

春日部に渦巻く殺意（前書き）

前回『スパニッシュ・フライ』の獄沢を倒した除夜。彼から知れた事とは？

春日部に渦巻く殺意

除夜君が退院した日の夜中、僕（須藤琢磨）は集会へ参加する為、集会場所である店へと行きました

集会場所は何時もの『焼鳥デスぺラード』ではなく、除夜君や宝来さんの馴染みの店、『お好み焼き屋ジャバウオック』です。何故デスぺラードではないのかというと、今晚は団体の予約が複数入っていてマスターに「悪いけど今晚は他に当たってくれ」と言われ、だったらと宝来さんにジャバウオックを紹介されたからです

で、例によって全員好き勝手にしていました……

何をしているのかと言うと、まず、除夜君や宝来さん、稲庭さんや吉祥寺君は宿題を共同でやっています。宝来さんの横には土浦さんがカルピスを飲んでいます

しんのすけ君と尊花ちゃん、本荘君は今作の劇場版エンピツしんちゃん感想や意見を言い合い、庚さんはひまわりちゃんに合わせて一緒に宝石の通販カタログを読んで、マサオ君と御厨さんは最近始まったゲームが元ネタの漫画について和気藹々と話し合い、トオル君と咲良君は一緒にゲームをしていました

ロンディネ君や一瀬君、多嶋君や逢坂君は黙々と各自で注文したお好み焼きを食べ、勝海君や塩屋君、黒星君や鵜さん、葉山さんはフライドポテトを摘みながら楽しそうに会話していて、杉江さんや高橋姉弟、杵島さんは僕と同じテーブルで僕と一緒にこれからの日本経済について話していました。当然僕達のテーブルが最も盛り上がりつつありませんでした

因みにオセロツトの子猫も来ています（咲良君が仲間外れは可哀想だからと連れてきた）が、飲食店なので動物は入れる事は出来ず、外で店長さんが昔大型犬を飼っていた時に購入したというヒグマが余裕で入れるのではないかという大きさの檻の中でピンクマウス（マウスの生まれたての赤ん坊）を食べてました。浅海先生は仕事があつて欠席するみたいです

宿題が終えた除夜君は、パンパンと手を叩いて静粛を求めました

そして、店長さんに人払いを求めた後、話し出しました

「つまり……その嶽沢って人は自分にスタンド能力を与えた奴の事は何も知らなかったんか？」

「ああ、嶽沢は奴の事は知らなかった。能力と少し調べれば分かる程度の俺の情報を与えられただけで本体には直接会ってないってね……いきなりスタンドが目の前に現れて持っていた『弓と矢』で射られたって……」

「て事は何だよ、有力な手掛かりだと思つたのに収穫ゼロかよ！」

「いや、一概にそうとは言えないよ本荘さん」

と、塩屋が冷静に発言する

「どういう事常陸君」

「僕達はそいつがどんなスタンドを操るかどうかすら知らない訳でしょ？」「突然現れて矢で射られた」って事はスタンド能力を得る前つまり能力者でない普通の一般人にも見える、要は『実体化している』スタンドって事になるじゃん」

塩屋の説明に納得したかのように相槌を打つしんのすけ達。俺達があいつを見た時、つまりあいつが優太を始末した時居合わせた人間は全員『スタンド使い』だったし、そんな発想はその証言を聞くまで無かったからまあ最初ピンと来なくとも無理は無いけど……

少し空けて勝海が俺に質問してきた

「一応聞くけどそのスタンドの特徴は……」

「ちゃんと聞いた。そして俺達があの時遭遇したあいつとドンピシヤリだった……後獄沢は少し興味深い事を言ってた」

「興味深い事？」

「あいつは優太を殺害した後、優太が所持していた『弓と矢』を持ち逃げした。俺達はその行為をあいつが言っていた通り俺を仕留められるスタンド使いを生み出す為だと思っていた」

俺の言葉に、その時居合わせたメンバーがコクコクと頷く

「実は違うと?」

「あくまで可能性だがな、あいつは嶽沢を射抜いた後こう言ったらしいんだ。」

『倒してくれなくとも遭遇して戦闘になって時間を稼いでくれたらそれでいい』

とね。だからあいつが『弓と矢』を持ち逃げしたのは俺達が今まで思っていた理由とは少し違う目的があつての事だと思っただんだ」

「それって……」

「時間を稼ぐ必要のある目的……この春日部から『逃げる』、または……」

「君を確実に殺せるだけの力を着ける……」

鵜が何かと質問しようとし、黒星の発言がそれを遮り、杉江さんが続けるように言った

「ああ、あいつは優太の他に俺にも怨みがあるみたいだった。鵜呑みにこそはしていないがあいつの口振りからして杉江さんが言った事が有力だと思う……俺自身は後者であって欲しいとは思ってる」

「え？何で？人生に疲れたんか？」

「梅花ちゃん、その発言は今この場には不適切ですよ」

代わりに突っ込んでくれてありがとう琢磨

「少なくとも除夜君が生きている間はあいつはこの春日部からは出ないでしょうからね。そうでしょ？」

「ああ……出来るだけ早く『本体』は捜し出さないといけないが、焦る必要が無いっていうのが現状のこちら側の強みだから……」

その後四時間近く食事をし、解散となった

流石に夜遅くは危ないので、俺は宝来を送る事にした。昔の話で盛り上がりたいと本荘と勝海もついて来て、時間的にお巡りさんに見付かったら俺達だけでは補導されるので琢磨に同行して貰った。咲良は帰りは同じなので当然一緒

「それにしてもよ瀬上」

「何だよ本荘」

「いや、沢登を殺した奴の話をしているのによく平然としていたな
と思つてな……前はかなり殺気立ってたのに……」

「平然と……ね……」

そんな筈はない。怒りや憎しみで何時暴れ出してもおかしくなかつた。そうならなかつたのは、自制心を総動員して辛うじて食い止められていたからだ

「ねえ瀬上君」

「何だ宝来」

「今度の日曜さ、あたしと一緒に遊園地に行かない？あたしが誘つたんだし、あたしが全部持つから……て何？」

「いや、もうすぐテストだぞ？俺最近成績落ちてるみたいだし集中したいんだよ、だから悪いけどまた今度……」

「『また今度』じゃない。瀬上君は最近張り詰め過ぎ。偶には息抜きしないと体壊すよ？」

「お前も知つてると思うけど俺は体が丈夫なんだ。そうそう体調は崩さん」

そう言つと、宝来は俺に正面から指を差した

「うん知ってる。そう言っている人程体調管理がおざなりになりがちだったのもね」

「……はいはい行きますよ！日曜は何の用事もないから好都合です！」

「瀬上君は直射日光に弱いんだからちゃんと帽子被って水筒も持って……」

「やかましい！お前は俺の保護者か！ごめん、喉が痛くなった……ジュース買ってくる」

「お金は出しますからついでにコーンスープ買ってくださいませんか？」

「俺コーラ」

「あたしポカリ」

「トマトジュース」

「自分で買え！」

「僕も付いていくよ。缶とはいえ一人で五つのジュースは持つの辛いでしょ？」

お金を受け取り、ついでに買いに行った。後ろから咲良も付いてきている

俺って本当が良いな……それは自覚していいよね？

「それにしてもよ、やるな宝来」

「何が？」

「お兄さんの事だよ。悟られる事なく上手くデートに誘えたねって」

「え？あれってデートのお誘いだったの？」

『は？』

「いや、貴女除夜君を遊園地に誘いましたよね？あれデートのお誘いでは無かったんですか？」

「ううん、今の瀬上君は少し見ていられなくて……だから何処かで楽しんで少しでもって思ってた……何で三人共何て言えばいいのかわからないって顔してるの？」

「うん、マジで分かんねえもん」

「瑪瑙ちゃん、僕達がそれ聞きたいよ……」

「お前等、ジュース買ってきたぞ……て何だこの変な空気」

「君は関係無いし君に言う内容なのかどうかも判断に困るので訊ね

ないで貰えませんか？」

こんなやり取りはありましたが、全員無事帰宅しました

春日部に渦巻く殺意（後書き）

久しぶりの全員集合です（一人足りませんが）。これと後半部分に比較的自然に移行する為に書きました。高橋姉と杵島さんは退院しました

次回は除夜と宝来と一緒に遊園地に行く予定です。それではお楽しみに！

遊園地に行こう!?(前書き)

前回気遣って除夜を遊園地に誘った宝来。そこで何が起きる？

遊園地に行こう!?

日曜、春日部駅

俺（瀬上除夜）は宝来と遊園地に遊びに行く約束をされた為、手作り弁当を持って待っていた

「動き辛い……」

現在の俺の服装は、何時もの制服とは違い、緑を基調とした帽子に、カジュアルな服装をラフに着込んでいる。靴はおろしたばかりのスニーカーだ

俺のこの格好は、昨日何処からか（多分本荘か勝海）今日宝来と二人で遊びに行く事を耳にした義母さんがブティックと靴屋に俺を無理矢理連れ出して購入した物だ

別にいいと断ったのに、『女の子と二人で遊びに行くのに少しはお洒落しないと駄目でしょ』と言って聞かなかった

何で誘われたのはこっちなのに俺が待っているのは、何故か（情報源はまず間違い無く義母さんと同じ）先生が昨日の夜来て、何かお互いが楽しむにはどうしたら良いのかとか、礼儀やマナーとか色々書いた紙の束を渡され、その中に『最低でも30分前に来た方がいい』と書いてあった

余談だがまともな事が書かれているのは一ページ目だけで、二ペー

ジは一行目から実行したら間違い無くこの作品が官能小説になってしまうかがわしい内容で、二行目以降は読まずにシュレッダーにかけた

友達と二人で遊びに行くだけだと言うのに、どいつもこいつもまるで人がデートか何かに行くみたいに……

噂をすれば影と言うが、宝来が来た。何時もの制服姿ではなく、私服だ。赤色の膝上五センチ程のスカートに、青の時に赤の横縞の中に紫色の星がズラツと描かれているワイシャツを着ていた

「瀬上君お早う」

「時間十分前……」

「何？ジーツと見て……」

「いや、お前のその服装久し振りに見るなと思ってな……」

「久し振りって言うっても片手で数える程しか着てないんだけどね……」

中三の頃こいつの誕生日プレゼントで日頃からの感謝の意を込めて作った服だ。義母さんが『市販品より自分で作った物のが喜ぶから』と言われ、作ったんだった

貰った時は難色を示していたけど、持っていてくれていたとは驚いた

因みに本荘には竹製の水鉄砲、勝海には小さな本棚をプレゼントした

「じゃあ切手は待ってる間に購入したし、電車も後少しで来るから」

俺は宝来の分で購入した切手を手渡す。宝来は洪々と言った感じで受け取った

「あたしが全部出すって言わなかったっけ？」

「そう言ったけど気遣ってくれたから行き電車賃くらいは出させてくれ。今日小遣い貰ったばかりで余裕はあるし」

余談だが気遣ってくれたのか、何時もより金額は少し多めだった

電車で約二時間四十分。私達は遊園地に着いた

瀬上君はカフェで少しココアを飲んでから遊ぶそうで、私は少し別行動を取る事にした

「……何してるの？」

私は物陰に隠れていた、しんのすけ君と莓花ちゃん、勝海君に心優ちやんを怒りと呆れの混じった視線で見下ろした

四人の格好は、一様に黒の背広にサングラスを掛け、黒い帽子を被っていた

「な……何でウチ等の完璧な変装がバレたんや？」

「莓花ちゃん、それ真面目に言ってる？そんな完璧なまでの尾行ルックで尾行してバレないと思ってるの？」

「てか駅員さんとかはこの子達を素通りさせたの？何で？」

「こんな格好で徒党組んで公共交通を利用するのに何の疑問も抱かなかったの？」

「……だからこんなカツコするの止めろって言ったんだ」

「じゃあ勝海君は何で一緒にそんなカツコしてるの？」

「三対一でこの恰好で行くのが決まって……多数決に従った」

「……幾ら多数決で決まった事でもどうしても納得いかない場合は反対していいからね。特にこういう場合は……それで、君達は何の為にこんな格好でここまで来たの？」

答えが分かりきった質問をする

それに対し、しんのすけ君のスタンドが予想通り過ぎる答えを言った

『お前達の様子を覗き見る為だ!』

「……何も言えん。取り敢えずしんのすけ君、ハリケーンをしまつて。それと四人共カモン」

私は四人を少し離れたアスレチック広場に連れて行き、叱った。特にしんのすけ君と莓花ちゃんを重点的に

「……大体お金とかはどうしたの?」

「ウチが半分出した。ウチの家自分で言うのも何やけど一般レベルでは裕福な部類に入るからな、貯金ちよっと下ろしたんよ」

「莓花ちゃん、君は後で少しお金の使い方について一緒に勉強しよう」

「ま……まあ私達が悪うございました。私達は帰るから二人で楽しんできて下さいね……」

やや落ち込んだ感じで言う心優ちゃん

「……まあ折角来たんだし、貴方達が良かったらあたし達と一緒に遊園地回らない？」

『え？』

「な……何？あたしそんな意外な事言った？」

「瑪瑙ちゃん。この子達はデートだと思っているんだよ。尾行していた人間が尾行対象にそんな事言われたら誰だって驚くと思うよ？」

「それは貴方達が勝手にそう思い込んだだけでしょ？勝海君は知ってるけどあたしが瀬上君を遊びに誘ったのは瀬上君が気を張り詰め過ぎていたからで他意は無いし。行き先に知り合いがいたとしても同伴するのに別段何も思わないよ？」

「はあ……」

「それじゃ行こうか。後せめてサングラスと帽子は外しなさいね」

「安心して下さい。着替えは念の為此の中に用意していますから」

心優ちゃんは『一軒家の写真』をひらひらと見せた。写真の中の物は現実空間に持ち出せないからその中に持ち込んだ着替えを置いているのか

四人が着替えた後、私達は瀬上君が待っているカフェへと向かった

「うーん……」

「どうしたの？」

「いや、みんなから言われた事を考えているんだ」

隠す意味合いも必要も無いので、隠さずに言った

瀬上君への気持ちか……友達としての感情はある。でもそれとは少し質の違う感情も前々から感じている……

まあいいや。いずれそれが何なのか分かる日は来る。今は今を楽しもう

「ねえその年下の子をいっぱい連れなお姉さん」

「私……ですか？」

「うん、君」

私に話し掛けてきたのは、銀髪に結構恰幅の良い体型の、派手な柄のシャツの上に厚手の黒いコートをボタンをつけずに着込んでいる、茶色のサングラスを掛けた二十代半ば程の男だった

正直あまり好感は持てない

「この子達君の弟や妹？お世辞にもそこまで似てないね」

「友達です。所で私に何の用ですか？用があるのなら速やかに仰つて貰えませんか？ナンパなら余所でやつてくれませんか？私は高校一年ですの」

「手堅いね……まあ俺は少なくとも十八未満には手を出さないって決めてるんだ。問題は起こしたくないから……いや、ね。何でも無いよ。ただ君達に声をかけてみたくなっただけだから」

「そうですか。それならもう用は済んだと受け取っても構いませぬ？それじゃあ私達は人を待たせてあるので」

みんなを連れて急いで立ち去ろうとすると、その男の手が私の右肩に置かれた

「人の話は最後までちゃんと聞きましようって小学生の頃先生から教わらなかつた？それにそんな人を露骨に避ける態度も戴けないな……君の親や君を受け持った教師は君に一体どんな教育を施したの？」

な……何？こいつのこの手……ついさっきまでは普通の体温が伝わって来ていたのに、いきなり『氷を直に皮膚に押し付けられたみたいに冷たい』……

違う！こいつの手から『凄く冷たい空気』が出ているんだ！

まさか……こいつも！

「ぐげ！」

異変に気付いてくれたしんのすけ君と莓花ちゃんが、お互いのスタンドで奴を殴り飛ばした

「大丈夫ですか？」

「う……うん……右肩は間違い無く霜焼けになっただろうけどね……」

「痛いな……お前等の後ろにいるその人型の……どうやらお前等は俺と同じ様な『能力』を持っているみたいだな……初めて会うよ……俺の他にもいるんだな……」

確かに『ハリケーン』と『スウィートハット』を見ている上で言うてる……間違い無い！

一方その頃、除夜は……

「遅いな……宝来の奴……」

カフェで四杯目のココアを飲みながら宝来を待っていた

遊園地に行こう!?(後書き)

デート?でまあ定番の尾行をしんのすけ達にやらせました。でもあんな格好で仕事してたら不審極まりませんよね本当

『アリス・イン・チェインズ』の写真に現実の物体をどれだけの入れても重さはその写真一枚分です

次回もお楽しみに!

遊園地に行こう!?(前書き)

しんのすけや宝来の前に現れたスタンド使いが、五人に牙を剥く!

遊園地に行こう!?

その男は自分の背後にスタンドの像を出した

灰色を基調とした色合いに、頭部に紺色の長い羽根が髪の毛みたいに生えていて、レンズのような目が左右に四つずつ縦に並んでついでいて、口元は裂け、そこから短いながらも鋭い犬歯が覗いている。全身にはアイスピックでかち割った氷みたいな形と色合いの装甲が所々着いており、手の甲や指の装甲には、磯巾着というより珊瑚のポリプみたいなのが幾つか付着していた

「近距離パワー型のスタンドか……」

「スタンドって何か分からないけど……見た所一人一人その姿形は違っつぽいね……俺的にはここに来たのはただの暇潰しだけ……こりゃ随分面白い暇潰しが出来そうだな……期待を裏切らないでくれよ……」

男は接近して私達に殴りかかった。やはり近距離パワー型で、能力による攻撃も接近しないと相手に届かないタイプみたいだ

私は『インフェニーACT1』を出して、まず能力を封じる為に腕を狙って凝固液を吐き出した。腕を狙ったのは、人型の像のスタンドは手で触る事で能力を発現するタイプが多いと須藤さんから聞いたからだ

男は自分のスタンドの腕を凝固液に向けた

装甲に付着しているポリプから、『白い何か』が噴き出した。噴き出された何かを浴びた凝固液は、奴にかかる前に『固まってしまい』、地面に落ちて粉々になってしまった

「どいてて瑪瑙ちゃん！」

勝海君が自分のスタンド『メタル・ミリティア』を発現。間近にあった自販機を操作し、奴にぶつけようとする

男は冷静にポリプから白い何かを自販機に吹きかけ、ギリギリの所まで近付かせて殴りつけた。外側は粉々に破壊され、剥き出しとなった内側にもその拳は叩き込まれ、砕かれた

すかさず勝海君は別のスイッチを押す。その途端、粉々になった自販機の破片の内、拳大以上の物が奴に引き寄せられるかのように勢い良く動き出した。奴は冷静にスタンドで自分に向かってくる破片を対処した

「勝海君、しんのすけ君や莓花ちゃん、心優ちゃんを連れて瀬上君呼んでくれない？あたしが死なない程度に精一杯の時間を稼ぐから」

「……大丈夫？僕かしんちゃんかが残って瑪瑙ちゃん達がお兄さんと呼んだ方が……」

「『私が一番時間稼ぎに向いている』……心優ちゃんに奴を写真の

中に入れて貰ってというのも考えたけどそれは戦闘タイプじゃない心優ちゃんには難しいし……だからお願い、今すぐに瀬上君を……」

「もう既に行ってるぞ」

「せめて最後まで言わせてくれ！」

「自己紹介が遅れたな、俺の名前は夢前天名^{ゆめさき あまな}26歳……スタンドの名は『ジャツカ・ロウ』……能力は大気中に最も多く含まれる窒素を吸収して融点まで冷やし、液体にしてそれを噴射する……能力まで素直に教えたのは隠す意味が無いからだ」

「じゃあ私も做う……私の名前は宝来瑪瑙、スタンド名はインフェーミー、能力は時間差で固まる凝固液を吐き出す事」

嘘は言っていない。ACT2とACT3の方はこいつに教える必要は無い。大体能力を教えると言っても全部教えるとは言っていないし、さっき言った事は全部嘘かも知れないという可能性がある。

警戒は必要だし全容まで教えるなんて自殺行為だ

最もこいつが「あいつ」と繋がっているならこんな隠し事は無意味だが、少しばかり探ってみよう。ここで遭遇したのは本当に偶然かも知れないが、イコール奴の仲間じゃない事にはならない。私の事は知らないみたいだけど振りかも知れないし瀬上君以外知らないのかも知らないのかもしれない

「聞いていい？貴方は『何時』こんな能力を『どんな経緯』で得た

の？」

「何言ってるの？俺のこの能力は……生まれながらにして持っているんだよ……お前等もそうなんだろう？」

そう言えば須藤さん言ってたな。『矢』に貫かれなくてもスタンド能力を発現出来るスタンド使いも少なからず存在するって。その場合最も多いケースが生まれつき持っている場合だって

現に瀬上君も『プラネット・ルビー』は自分が物心ついた時から発現する事が出来たと言ってた

「違うの？じゃあ何でそんな能力を持つてるの？実に興味があるな………実に知りたいな………」

奴は両手を私に向けて、液体窒素を噴射してきた。私はインフェミ
ーの凝固液を吐きかける

勿論凝固液が奴や奴のスタンドに付着する前に氷ってしまうのは分か
かっている。だが防御にはなる

そして氷つたのを確認すると、すかさず『ACT3』へチェンジ、
『ACT1』とは性質の違う凝固液を大量に吹きかける

大量の凝固液が土石流のように流れ込む。奴は先程氷らせた凝固液
に足を乗せ、それを踏み台にして跳ぶ事で回避した

その判断力は褒めてあげるけど、『その後』はどうするの？『ACT3』はまだ凝固液を吐いていて、人間は空を飛ぶ事が出来ないしあんたのスタンドも『飛行』だの『滑空』だのは出来ない

それとも私が『インフェニーACT3』を倒す？

どうやって？あんたのスタンドは近距離パワー型だし、能力も――

「俺のスタンドは俺からそう離れる事は出来ないし、スタンドの能力も離れている敵には通用しない」……と考えているだろ？」

え？何で考えている事が分かったの？

「読心術とか使えなくとも流れを見れば大体の見当は着くよ……確かに俺の『ジャツカ・ロウ』は俺から短い距離までしか離れる事は出来ないし能力使ってもどう頑張った所で五メートルが精一杯だ……うん、俺の能力をよく分析してると思う。いい流れだ。素直に誉めてやるよ……だが宝来……これは読めた？」

『ジャツカ？ロウ』は拳を地面の、いや、ACT3の垂れ流す『凝固液』に向けた

ポリプから、液体窒素が噴射させ、凝固液を氷らせ、一人一人分の足場を作り、そこに着地。衝撃でぐらつくも、パニックになる様子もなくサーフィンの要領でバランスを安定させた

これを見て、私は奴が何をしようとしているのかを理解した。だが、

もう遅かった

自分の前方へとスタンドの拳を向け、液体窒素を噴射。そのまま前へと駆け出す。その軌跡には『氷の路』が出来ていた

二メートルまで距離を詰めると、勢い良くジャンプし、私のスタンドの真横に着地する。そしてすかさず、『ジャッカ・ロウ』の右足で、私のスタンドを踏み潰した

「うぐえ！」

フィードバックで背中に強い痛みが走り、私はバランスを崩して倒れた

「あれ？スタンドを踏みつけただけなのに何でお前も痛そうに顔を歪めて背中を押されたみたいになんて倒れてるの？」

演技とかではなく本気で訳が分からなそうだな

こいつがあいつとの繋がりには本当に無さそうだが、それより一つ言える事がある

それは、『こいつは強い』という事だ。特に私との相性は最悪だ

凝固液を放ったとしても、かかる寸前で氷らされてしまう。戦闘面でも接近されたら私には為す術はない

「成程、スタンドは本体とリンクしているからスタンドを攻撃すると本体も傷付くのか……」

「ゴラァ！」

夢前の顔に、スニーカーが突き刺さり、吹っ飛んだ

突然奴を蹴っ飛ばした人物の顔を見上げた。その人物は、私の良く知る人物だった

「瀬上君！」

「大丈夫か宝来？カフェでココアを飲んでる途中何故か来ていたしんのすけや勝海達からお前が一人でスタンド使いと戦ってるって聞いてな……あいつ等に勘定の立替を頼んで急いで来た」

「何でそんな説明口調？」

「へー……彼氏の登場？」

「残念だが俺はこいつの『彼氏』なんかじゃない……『友達』で『仲間』だ」

「まあ俺としては選手交代は一向に構わないよ！」

一
氣
に
接
近
し
て
右
ス
ト
レ
ー
ト
を
瀬
上
君
へ
放
つ
た

遊園地に行こう!?(後書き)

スタンド名はボブ・ディランの楽曲から。因みに液体窒素を吹きかける能力というのは本当で、その攻撃はスタンドにも通じます

次回は(一応)決着の予定です。お楽しみに!

遊園地に行こう!?(前書き)

ピンチの宝来の前に現れた除夜は夢前を倒す事が出来るか?

遊園地に行こう!?

「それじゃ宝来。安心して適当に休んでいる。こいつは俺が倒す」

「それって……俺を倒せる確固たる自信があるという事か？糞餓鬼」

「そう言ってるんだけど……おっさん」

「気をつけて瀬上君！そいつのスタンドは拳から液体窒素を吹きかける！」

直撃は避けたい能力だな。窒素の沸点は - 195 だったから食らったらその部分是最悪壊死だな

能力は恐怖だが、こいつは『俺とは相性がいい事』は分かった！

「それとこいつは生まれながらのスタンド使いで『あいつ』に関しては何も知らない。『弓と矢』の存在も知らなかった！」

「分かった……すぐに倒して遊園地で一緒に遊びまくるぞ！」

俺は奴に接近し、拳を大きく振りかぶった

奴は拳を向ける。拳に付着しているポリプからは白い - 液体窒素が漏れ出ていた。俺の拳が振るわれるのと、奴から液体窒素が噴き出したのはほぼ同時だった

「あれ？」

「余所見は禁物だぞ」

俺の拳は、奴の後頭部にヒットした。奴はその攻撃をまともに食らい、吹っ飛ぶ

どんなに強い攻撃でも当たらなければ意味が無い。奴の能力による攻撃は拳からだし、液体窒素を噴射する能力はその軌道は直線だ。どれだけ速くとも距離があれば当たり前な事だが到達までには相応の時間はかかる

俺の能力は『瞬間移動』。直線にしか動かない攻撃を避けるのは容易い

俺は回し蹴りを放つ。奴は右手で攻撃するが、当たる前に瞬間移動でつま先がから空きの位置に当たる地点まで移動した

回し蹴りはヒット。引く前に脚を掴まれた。もう片方の手のポリプを俺の掴まれた脚に押し付けると同時に、俺は奴の顔に拳を打ち付けた

相手が悪いと察したのか、奴はポケットから何か爆弾みたいなものを取り出し……て待て！あいつ何しようとしてるんだ？

安全ピンを抜いて俺達に投げつける。急いでキャッチしてより高く投げ飛ばした

と、同時に爆弾が炸裂。音と光がこの場に行き渡った。『スタングレネード』とかという奴か

音と光が治まった時、奴の姿は消えていた

「逃げられたか……」

「どうする？ 探す？」

「そんな必要は無いだろ。どうしても倒さないといけないって奴じゃないし、俺達はここに戦いに来た訳でもないし、逃げてくれて越した事は無い。それじゃ行くぞ」

「行くつて……何処に？」

「何処つて……お前が何言ってるの？ お前が誘つといて忘れたのか？ 遊びにだよ。何処行きたい？ 観覧車？ お化け屋敷？ コーヒーカップ？ 長い間日の当たる奴以外なら付き合うぞ？」

「あ……うん」

「それならしんのすけ達とも合流するか。行くぞ」

「あ……あのさ瀬上君……一つ、一つお願いがあるんだけど……」

「ん？」

「良かったら……あたしの事……」

「おーいお二人さん無事やったんか良かったなあ！」

宝来が何か言おうとしたが、それは合流してきた藤方の元気の良い答えに掻き消された

「ようお前等……で、お前さっき何て言おうとしたんだ？」

「いいや……今は」

宝来は少しがっかりした表情を見せたが、すぐに何時もの笑顔を見せた

俺達はそれから、閉館時間ギリギリまで遊び回った

午後一時

県立星陵高校体育館

そこに、全校生徒が並んでいた。新しく来る先生の紹介の為に、と言っても、少し前までこの学校に教師として在籍し、ある理由で少しばかりこの学校を離れていたらしく、上級生達は誰だか分かつ

ていたようだった（俺達は最下級生だから二年生以上は上級生だけだ）

どんな教師が来るのか、正直わくわくしていた

『生徒の皆さん静粛に、これより、先生の紹介を行います』

スピーカー越しに多嶋会長の声が響き渡る。ステージの床の中心に穴が開き、そこに天井からゴンドラが降りてきた。演劇部が劇に使う為に機械工学研究部（活動内容は名前の通り）に頼んでステージに現校長に許可を貰って取り付けたりしいけど、よくこんな工事許したな現校長……

「！」

現れた人物に、俺は目を見開いた。恐らく宝来も同じ反応だろう

ゴンドラに乗っている人物は、間違い無く遊園地で俺達と戦ったスタンド使いだったからだ

いや、それは不自然じゃギリギリでない。二十代半ばなら教員免許を有していて自然な世代だ

俺がそう考えている中、当然だがそんな俺の様子に気付く事無く、夢前は設置されているマイクに手を取った

『一学年、三学年の方は、私の事を御存知な方が多いかと思われま
す。一学年の方は初めまして。私の名前は夢前天名。この埼玉県立
星陵高等学校の第六十三代目の校長の椅子に座らせて貰っている者
です。嘗て一部の生徒や保護者達と色々揉めました。互いに過去
の事は水に流し、共により良き学校を作っていきましょう！』

（あんだ嘗て一体何をしたんだ？聞きたかねえけどよ）

少なくともろくでもない事をしでかしたのは分かるよ、うん

六時限目の世界史の授業は、担当が風邪を拗らせたとかで自習とな
っていた

自習課題を素早く終わらせた俺は、宝来と稲庭を読んで、これから
を小声で話し合った（稲庭には夢前がスタンド使いである事は説明
済み）

「どうする？」

「どうするって……敵じゃないし今この春日部で起こっている事を
説明して協力して貰った方が……」

「ちげえよ、これからの学校生活をどうするかって意味で聞いたんだ。休み時間に御厨先輩や逢坂先輩、多嶋会長に聞いてみたが何でもこの学校一部の生徒が事件を頻繁に引き起こして、そのきっかけを作ったとかで懲戒免職は免れたが長期の謹慎処分を食らったらしいぞ」

そのきっかけの詳細は、何でも箝口令（ある事柄について口外するのを禁じる事）が敷かれてあるらしく、訊ねても教えてくれなかった

「別にいいじゃん。少なくとも今は平和で問題は起きてないんでしょ？過去に何かあったかも知れないけど、あたし達はそれを知らないから気にする事ないじゃん」

満天の笑みをその顔に浮かべて稲庭はそう言った。お前のそういう所は本心から羨ましい

そして確かにそうだとも思えた。少なくとも今現在あの校長が原因での騒動は聞いた事が無い。過去の事は箝口令こそ敷いているらしいが、学校生活に支障は無いあたりそこまで気にする事はないか

と、その時はこう思っていた

夢前天名の復帰により、この学校に在籍している『ある者達』が動き出し、そいつ等と俺達は戦う事になってしまいが、それはもう少し後の話だ

遊園地に行こう!?(後書き)

除夜対夢前は何か呆気なく終わったな(笑)

夢前は星陵高校の校長でした。留守にしていた理由は暫くしてから判明させる予定です

次回もお楽しみに!

家族みんなでホテルに行こう!? (前書き)

週末の野原家が小旅行に行く事に!

家族みんなでホテルに行こう！？

土曜日の朝

野原家

「なあしんのすけ、みさえ、ひまわり……今日泊まりがけでホテルに行かないか？」

居間での食事中、ひろしがこんな事を言い出した

話によると、先週日曜の新聞の広告の中に、春日部にあるホテルで新しいイベントがあり、その参加者を募っていたので野原一家四人の代表として応募してみた所、見事に当たったという

「何でも斬新な企画らしくて一回試してみて好評か不評か見るんだつてよ」

「で、その斬新な企画ってどんななの？」

「知らん」

「何で？父ちゃんその広告に目を通して応募したんでしょ？」

「そうだがな、『イベントが何であるかは当日まで秘匿とさせていただきます。そちらの方が楽しみが増すかと思ひまして。尚、応募

者多数の場合、抽選とさせていただけます』と書かれてた。どんな訳ありイベントなんだろうな、話のタネに応募するのもいいかと思つて……」

「オラ行きたい行きたい！」

「ちょっと、大丈夫なのそのイベント」

「大丈夫だろ。優勝者には豪華賞品をプレゼントつてあるから他人と競う物なのは確かだけど、ホテルはちゃんとした所だし、こつやつて参加者を募つているんだから危険は無いだろ」

「豪華賞品？行きましょ！そして優勝を目指すわよ！ファイヤー！」

『豪華賞品』という単語が心をガツチリと掴んだらしく、みさえは行く前から燃えていた

「言つとくが、イベント始まるのは夜八時からだからな。それまでに行けばいいんだからな」

聞いているようには見えなかった。みさえのその様子を見て、しんのすけ達は溜息をついた

『おばさんは欲が深いから困る』

納豆をかき混ぜながら、ハリケーンは呆れ顔で呟いた

シロをお隣のおばちゃんの家に残け、ホテルへと向かう野原一家。春日部にあるとは言え、場所は野原家とやや離れているので、車で向かっていた

「所でさ父ちゃん、そのホテルってどんな場所？」

「『ホテル黒鬼』って名前の創設から八十年余りの歴史を持つてる個人経営のホテルだよ。規模とか普通なんだけど三年前にオーナーが代替わりしたのを機に少し風変わりなホテルになったって評判だ」

「どんな風に？」

「ネットとかで調べただけで直接行った訳じゃないから詳しく知らないんだけどよ、現オーナーは『ただ客を泊めるだけじゃなく、宿泊客に娯楽を提供する』って方針みたいでな、色んなイベントを打ち出すんで有名なんだとよ」

「例えばどんな？」

「地下に温水プールがあつてそこで着衣のままの水球とか、敷地全体を使つての二人三脚での鬼ごつことか……」

「よく思い付くわね、こんな変なイベント」

「参加者を募って試すっていうのはこれが最初みたいだぞ」

「ふーん……」

そんな会話をしている内に、目的地であるホテルについた。駐車場には既に車が沢山停まっていた。恐らくこの全てがイベントの参加者に選ばれた人物なのだろう

「随分多いね」

「定員が五十組二百人と多かつたからな」

「でも一人や二人組の人結構いるね。特にあそこらへん」

しんのすけが指差した場所の、自転車、自動二輪車置き場には中学生や高校生と思われる年頃の男女もいた。地元か近郊の子供達だろう彼等も同じく応募してみて、当選したのだろう

「おいしんのすけ、部屋のチェックインするから付いて来い」

「ほっほーい」

「因みにチェックイン済ました後は参加者は地下のホールに集合するようについて書かれてあるからな。はぐれるなよ」

「失礼な！オラはそうそう簡単にはぐれたりなんか……」

綺麗な若い女性を見つけ、フラフラとついて行った。ひろしとみさえが急いでしんのすけを止める

結果、ホールに行くまでみさえが手を繋ぐ事となった

無事チエックインを済ませ、部屋の鍵を貰って部屋に荷物を置きに向かった。野原一家の部屋は、八階の非常階段に隣接する部屋だった

「うわー、広いしきれーい」

そう言ってしんのすけはふかふかのベットに寝転がった

「ねえ、石鹸とタオル持っていきましょうよ」

「おいおいそんな後でいいよ。それよりホールに行くぞ。説明会に行かないとイベントの参加は出来ないみたいだからな」

荷物を置いてホールに向かう。勿論しんのすけはガツチリとみさえに手を繋がれていた

ホールの中のテーブルの上には、標準的な立食パーティーの献立の並んでいた

「おお、美味しそうだぞ」

「中々豪勢って感じがするわね」

「おっあそこに美味しそうなローストビーフがある！ねえ食べに行つていい？」

「別にいいけど、くれぐれもホールから勝手に出たりしないでよ」

「ほっほーい」

皿を取ってローストビーフのあるテーブルに向かって走っている途中、人にぶつかってその反動で転んだ

「痛いなあ……ちよつと！ちゃんと前を見てよね！」

「いや、この場合こんな人が大勢いる場所で走っている君が悪いんじゃない……あれ？」

自分に注意する声に聞き覚えがあるので見上げてみると、その顔はよく知った顔だった

金髪に、日本人離れた顔立ち。そう、彼は――

「除夜のお兄さん？」

「しんのすけ？」

自分の通う学校の制服を着た、野菜や魚料理を乗せた皿を右手に持った瀬上除夜だった

俺（瀬上除夜）は、抽選に当たったイベントに参加する為、このホテルに来た

抽選に当たったといっても応募したのは義母さんで、今朝いきなりその事実を知らされた

何でも義母さんは四人一組で応募し、俺に土日暇な奴を連れて行かせるつもりだったみたいで、俺に行く事を頼み込んだ

勿論直後に「自分が行けよ」と行ったが、即答で「知人の結婚式に招待されたからそっちを優先する」と言いやがった。まあ身近な人間を大切にするのはあの人の良い所だし

まあ、仮に来れたとしてもあの人は外見的に保護者と名乗るには少し難しいか……うん、俺を引率に抜擢したのは正しいな。高校生ならまだ不自然じゃないし

だが暇な奴と言うのはそうおらず、部活動や友達と遊びに行く約束を交わしているのが大半で、暇だったのは人付き合いが希薄気味な俺（だから頼んだのだろうか）と春日部に来てまだ間もない咲良の

二人だった為、知り合いで暇だった稻庭と本荘も誘ったという訳だ
少し見渡してみると、他にも琢磨、宝来、藤方、庚、鵠が目に入っ
たので声をかけた。話によると五人共自分で応募したり応募したは
いいが急遽行けなくなった知人から譲り受けたみたいだった（藤方
は母親と一緒に来ており、簡単に挨拶した）

意外な所（という程でもないが）で遭遇した知人達と会話を勤しん
でいる時、突然ホールの電気が消え、真っ暗になった

数秒後、ステージの中央にスポットライトが当てられ、そこに、マ
イクを持った、藁で編んだ傘を被り、白のタキシードに中央に十字
架の描かれている長方形の青いワッペンをあちこちにつけた、赤い
ゴムの長靴を履いた男がいた

男はマイクのスイッチを入れ、口を動かす

『只今、マイクのテスト中、只今、マイクのテスト中、ただいま、
マイク、テストはどうだった？』

うん、今このホールには微妙な温度の空気が流れたぞ。空調ちゃん
と整備しているのかね

『突っ込んで下さいよ！今日この日の為に四日間徹夜でこれを考え
たんですから！』

「いや、そっちのが笑えるぞ」

俺は何時も通り突っ込みを入れる

『まあこれは忘れて下さい。多数の抽選から見事に選ばれた皆様、この度は我がホテル黒兎の新イベントの試験導入に興味を持っていただき、誠にありがとうございます！私はホテル黒兎の現オーナーの喜好正午きよしほと申します！年齢33歳！彼女いない歴と同じです！』

普通『彼女いない歴』とやらの後で年齢言わない？まあどうでもいいけどよ

『皆様が楽しみにしている我がホテルのイベントですが、その時間が来るまで秘匿とさせていただきます！安心して下さい。そのイベントは誰にでもすぐに行えます。特別な準備などは必要ありません。老若男女問わず、健康な方でも身体障害のある方でも重い疾患を患っている方でも誰でも楽しめるイベント……であればいいなと心から思っています』

「ここは『イベントです！』で自信持つて言えよ！」

『だって今日試験導入するんだもん。つまり初めてやるんだよ？お客様である君達が楽しめるかどうかなんて分かんないじゃん』

正論だがあんたがこの場で言う事なのか？

『それじゃ時間までワクワクしながら待っていて下さい!』

ホールの電気が戻った

この日の夜が長く、濃密な夜になる事を、確信は無いが薄々感じていた

家族みんなでホテルに行こう!? (後書き)

何か執筆途中で公開してしまいました

どんなイベントなのかは次回のお楽しみに

では!

家族みんなでホテルに行こう!?(前書き)

その時間が訪れ、祭りが始まる……

家族みんなでホテルに行こう！？

俺（瀬上除夜）達に割り当てられた部屋は、最上階の広い部屋で、四人で寝るには過ぎるスペースだった

もともと、年頃の女が、それも一人で年頃の男三人と同じ部屋に寝るといふのは流石にどうかと思うので、宝来に頼んで稲庭をそつちに預かって貰った

稲庭は「別にいいよ」と言っていたが、それは無防備もいい所だと思う。俺や咲良は常識人で、本荘はあれで道徳観念はまともだが、やはり別々の方が好ましいだろう

宝来もそれには全面的に同意のようで、快く承諾してくれた

閑話休題

時間まで特にやる事が無い為、ホテルに来ていた俺の知るスタンド使い達は、夕食まで俺達に当てられた部屋で遊ぶ事にしたみたいで、各々が適当に遊んでいた。このホテルには各部屋にコンピューターが一台取り付けられ、チェスや将棋、囲碁、人生ゲーム、双六等の他、電子ゲーム類や雑誌まで貸し出されており、地下の遊技場ではビリヤードやパチンコ、ルーレットやスロットマシンに一般的なゲーセンにあるようなゲーム機は一通り揃ってる。一階の喫茶店には漫画でしか見た事の無いテーブルと一体化したゲーム機等、宿泊客に娯楽を与えるというあのオーナーの方針らしいと言えららしい

だが、ハッキリ言って何が何だか分からない。裏には畑もあるし、鶏や山羊も飼育されているし、地下一階には資格取得を目標として

溶接技術を教えるコーナーもある。もうここは『観光客を泊めるホテル』というよりこのホテル自体が観光名所になれそうな気がする。「ねえひまわりちゃん、このサファイアのアクセサリー、何でダイヤが取り巻かれているか知ってる？」

「たーやー？」

ひまわりと庚は相変わらず仲が良い。一緒に本を読んでいて微笑ましい

……読んでいる本が宝石屋のカatalogでなければより微笑ましい。てか庚は本当に宝石に興味が無いのか？

「なあ瀬上、1-4が一番堅いと思うんだが……お前は？」

「知らねーよ俺は馬券なんか買わねーしてか買えねーし」

コーラを口に含みながら競馬新聞を読む本荘。こいつの名誉の為に言うけどこいつはまだ馬券を購入した事は無い。ただ、こいつたのを読んで大人の気分を味わっているだけだ

……出来ればもっと健全な大人の気分を味わって欲しい。俺の認識では少なくとも賭博行為は健全じゃない

咲良と鵠は借りてきたトランプでババ抜きしている。琢磨は、借り

てきたファミコンでテトリスをやってる

宝来と稲庭はここにはいない。何でも見たい映画が上映されているとかで、遊技場の向かいにあるシネコンに向かった。マジでこのホテル訳分かんねえ……

しんのすけは大人しく本を読んでいる。あのしんのすけが静かに集中して、そして何やら興奮して読んでいたので、どんな本なのか興味を持った俺は覗き込んだ

本の内容を見て、俺は絶句した。何とこの本は、18禁の無修正のエロ本だった。俺は即座にしんのすけからこの本を取り上げた

「除夜のお兄さん、取っちゃ駄目」

「没収！てかこんな物何処で見つけた？」

「いや、あのオーナーのおじさんが「飽きたからあげる。お父さんに渡したらお父さんは喜ぶよ」ってオラにくれたの。で、変な内容だったら父ちゃんの人格形成に悪影響を与えるからまずオラが目を通して……」

「こんな本幼稚園児の内に読んだらお前の人格形成に悪影響を及ぼすわ」

俺の足は経営者を確保する為に動いていた

数分後、何だかホテル全体に経営者の叫び声が反響したらしいけど、

あれ何だろう？もしかして何か恐ろしい夢でも見ているんだろうかね

午後七時半

イベント開始まで後少しといった時間帯に、経営者から大ホールに集まるよう言われた。イベントの内容の説明かと思われたが、違う物だった

箱に詰められた、番号が振り分けられたピンポン球を引く、『くじ引き』という奴だった

全員がピンポン球を引き終わると、ステージの屋根から巨大なスクリーンが降りてきて、その右側にこの建物の図が映され、一階、二〜四階、五〜七階、八〜屋上と、そして左側に上から見たホテルの全体図が映され、建物と駐車場と色分けされ、左側の建物を除いて、それぞれに番号が振り分けられていた

『自分が引いたピンポン球の番号が振り分けられているエリアに、皆さんは直ちに移動して下さい。移動が終了し次第、今回の最大の目的であるイベントの説明を始めたいと思います。尚、ここでお願いがあります。同じエリアに振り分けられた人とはなるだけ視界に入らないように隠れて下さい』

「何で？」

『そうしないとイベントが成り立たないからです。因みに参加者同士協力するのは五人以内なら構いません』

確認すると野原一家（小学生未満の子供連れの場合、代表者一名が引くシステム）と庚は駐車場、琢磨と本荘は一階、咲良と鵠は五階エリア、稲庭と藤方母娘が二階エリア、俺と宝来は八階エリアに分けられた

意外と人数均等に分けられる物だなと思いつながら、俺と宝来は八階エリアに移動。何時の間にかマスターキーで開けたのか、全ての部屋の扉が開いていたので、八階の、建物の中の上りの階段の隣の部屋の中に入った

出る前に簡単に説明された事柄では、どの部屋に入ってもオーケーだが、自分に割り当てられた部屋でない部屋は、当然だがそれ以外の行為は許されない

「多分みんな準備は出来てきた頃かな……」

至る所に設置されているスピーカーから音楽が流れる

『ただいま、マイクのテスト中、おはようございます、ボブはペストに感染中』

そのギャグを聞いた時、俺は思いつ切り引いた

『皆さん、移動は終了し、上手くばらける事が出来ましたか？それではこれより、『第零回、ホテル黒兎、バトルロイヤル大会』を開催致します！』

「は？」

俺は素つ頓狂な声を上げた。多分、大部分の参加者達も同じ事を思っただろう

知った事かと言わんばかりに、説明を続ける

『ルールは単純明解、自分のエリアの人が三人になるまで戦闘を行って下さい……戦いが終わるまで逃げ隠れるもよし、積極的に戦うのもよし、気絶したらリタイアです。素手でも武器でも相手を殺害しない限りは問題はありません。まあ『出来れば』ですが……また、別のエリアに入ったり、外に逃げるのも禁止です……これも『出来たら』ですけどね……』

「どうやらそうみたいだよ瀬上君……」

部屋の窓を開けた宝来は、深刻そうな表情をしていた

窓から手を出そうとしたが、途中で止まった

最初何をしているのか分からなかったが、『分からなければ自分も試してみて』という目を向けられ、俺も手を出そうとして、理解した

途中で『見えない壁のようなもの』に阻まれて、出す事が出来ない。スタンドを使っても同様だった

『スタンド使い』がこのホテルにいるという結論に達した。そしてそのスタンド使いは、間違い無くあのオーナーだ

『皆様御理解いただけましたでしょうか？このホテルの各エリアは、私が大会のスタートを声明すると同時に、それぞれが『別空間』となったのです。如何なる手段を用いても別のエリアに行く事は出来ませんし、当然ホテルの外部から誰かと連絡したり接触する事は出来ません。貴方方が私の『能力』から逃れられる唯一の手段は、私の定めたルールに則る以外に無いのです』

土浦の能力と同系統の能力か……ここは刃向かわない方がいいな

長い夜が、始まった……

家族みんなでホテルに行こう！？（後書き）

考えたイベントは、バトルロイヤルでした。一応まだ説明は続きます

では、次回もお楽しみに！

家族みんなでホテルに行こう!?(前書き)

バトルロイヤルは幕を開ける……

家族みんなでホテルに行こう！？

『では、注意事項を説明します。まず、私が開始を宣告した時点で先天的、後天的問わず病気や障害は一時的にですが取り除かれませんでした。骨や足腰の弱い方も、一時的にですが平均的な二十代の若者と同じとなりました』

成程、最初の集会で言っていたあの事はこういう意味だったのか

『戦闘による負傷は、如何なる傷でも勝者、敗者問わず決着の付いた時点で消えます。途中で相手が逃げ出した場合、負傷はそのままですが次の相手との勝負で決着を着けた場合はその戦いで負傷も前の戦いで負傷も消えます。尚、敗者はこことは別の空間に飛ばされ、イベント終了までそこにいて貰います』

つまりこいつの能力は、『自分の催すイベントに強制的に参加させる能力』って訳か……そして参加者は奴のルールに絶対に従わないといけないのね……いや、『従わさせてしまっ』の方が表現のが正しいか

本体を叩けば手っ取り早いですが、エリアに閉じ込められている以上それは不可能だ。仮に行けたとしても、あいつは参加者と別の空間にいると考えていいな

『因みに致命傷を受けた場合は戦闘続行不可能とみなし、気絶して

なくてもその時点でリタイアします。また、間違い無く即死するよ
うな攻撃をされた場合、受ける寸前でリタイアさせますので御了承
下さい」

それに関しては異論のある奴はいないと思う

『以上が、私の『コロシウム』と名付けた能力であり、今回のイベ
ントの注意事項です。このイベントを良い思い出として家に持って
帰れるよう、ルールを遵守して楽しんで下さい。尚、イベント中破
壊された物は私の能力の世界の物体で現実の物体ではないので、イ
ベント終了と同時に元通りとなります』

『コロシウム闘技場』……ね、随分とセンスの感じ取れるネーミングだ

『楽しんで下さい』って、いきなりバトルロイヤルやれと言われて
それを楽しむ奴いるのかよ

「宝来、分かれて参加者を気絶し回るぞ。お前がこの階、俺は上の
階」

「え？こんなイベントに乗るの？」

「俺も乗りたくはないがそうは言ってられないしな。早めに終わら
せるぞ。俺達にはスタンドがあつてそれは正常に使う事が出来る。
これが俺達の強みだ」

「それは分かるけど……」

「『インフェミー』の能力は確かに戦闘向きじゃないが強いぞ？ 自信を持って、お前なら出来る。じゃ、そゆ事で」

俺は宝来と分かれ、階段を駆け上った。説明された通り「エリア内」なら移動は可能だ

俺は九階に上り、参加者を捜そうとする

「！」

俺の胸部に、『殴られたような衝撃』が走った。それにより俺はよろめいて足を踏み外し、階段から転げ落ちた

落ちる時、『人型のスタンド』を後ろに発現している男をチラッと見た

迂闊だったと言っしかない。浅薄だったと言っしかない

春日部で人が集まる所に、俺達以外のスタンド使いがいるなんて、参加者の中にもいるかもしれないなんて、簡単に予想出来た筈なのに、てか今までも何度も体験した筈なのに……

来た時はイベントが何なのかというつまらない事に、始まった時は

イベントを早く終わらせる事にとらわれ過ぎていて、頭によぎりすらしなかった。俺はバカだ……

階段を再度上り、何等かの能力を使って俺を突き落とした野郎の顔を拝んだ

その顔は、俺の知る顔だった

「やあ瀬上君、久しぶり、星陵の合格祝い以来だね」

「松任……朝熊先輩？こりゃ懐かしい顔だ……本荘といい勝海といい……最近は会えて嬉しい友人が会いたくない形で再会するな……」

短く切り揃えた黒髪に遠視用の眼鏡をかけ、ズボンの中にブレザー服を入れ、袖やズボンに蛍光テープをミイラのように巻き、反射板を胸ポケットにつけた男、俺の中学時代の頃の二年先輩で、現在は星陵とは別の工業系の学校に在籍している松任朝熊がそこにいた

後ろには、彼より頭一個分大きな、黄緑色を基調とした、頭に、虫食い痕のような小さな穴がポツポツあるロツプレイヤーのような垂れた長い耳をし、顔には目の所に丸い穴を空けた白い罅の入った仮面を付けた人型のスタンドが立っていた。仮面の穴からは、黄色い目が浮かんでいる

「……それがあんたの能力って訳ですか？」

俺は問う。それに対し松任先輩は口を動かした

「見えてるんだ……」

その言葉だけで十分過ぎる回答だった

俺は自分のスタンドを出して臨戦態勢に入った

「君も同じ様な能力を持っているのか……」

「その『能力』、何時どんなきつかけで手に入れたんですか？ここ半年余り以内で、何者かが放った『矢』に射抜かれて？」

「うん、四ヶ月前にカラオケで遊んでたらいきなり誰かに腹を貫かれて……もしかして君も？そして他にもそういう人がこの春日部に何人くらいいるの？」

「何人いるかは分からないけど相当数いる事は確か……すみませんけど気絶して貰えませんか？早くこんな下らないイベントを終わらせたいんですよ」

普通なら同意すると思うが、この先輩はそっち方向では普通じゃないからな……返答は多分

「やだ」

「はあ……」

やっぱり……

「こんなの望んだって体験出来るもんじゃないよ。だからこのイベントを最大限まで楽しみたい。だからやだ」

思いつ切り溜息をついた。この人は現状を面白く楽しもうとする性格だ。ゲームに乗ったのも、自分も他人も命の危険が無いからとさつき本人も言った通り、滅多にない体験だからという理由に違いない

「だから……瀬上君も精一杯楽しもうよ」

スタンドが俺に向けて右拳を放つ。何をしているのか分からなかった

先輩のスタンドはパワーが凄い代わりに本体から遠くにいけない『近距離パワー型』。射程は離れててせいぜい五メートル（俺の『プラネット・ルビー』は最近射程が伸びて十メートルだが、琢磨曰わく珍しいらしい）

距離は十メートルはゆうに離れていて、本体は『一步も動いていない』。案の定スタンドも本体からそこまで離れてない。目測だが二

メートルと言った所だろうか

必然的に空振り。だが油断はしない。さっきはもっと離れていた筈なのに、攻撃を受けたのだ

そして、案の定俺は攻撃を受けた。間違い無い。当たった場所は、もしスタンド抜きで殴られた場合、先程の拳の『着弾予定の場所』だ

（拳圧を飛ばす能力か？）

自分の発想が馬鹿げた物だと自認はしている。だが、これが一番現実的な回答だ

スタンド能力の恐ろしさの一つは、『どんな能力を持っていたとしてもおかしくない』事だ

なら安心した。先輩の能力は俺の能力と相性はいい

俺は駆け出し、先輩に接近する。先輩は俺のいる方向に向かって拳を放つ。俺は何発も食らうが、その衝撃やダメージは無視して接近する

先輩には既に『軸』設定を施している。後は先輩の周りを余裕で瞬間移動出来るまでの距離まで近付くだけだ

接近に成功。先輩は左ストレートを俺の腹部に向かって放つが、俺は瞬間移動で先輩の左斜め後ろに移動した

「それが瀬上君の能力って訳か……」

すぐに俺の今いる方向に体を向けて拳を放つ。俺は瞬間移動で回避する

それを繰り返していて突然……

「？」

背中に衝撃が走り、俺は前方へと吹っ飛んだ。俺の髪を乱雑に掴んで、俺の顔に膝蹴りを食らわした

俺は先輩の体を押して後退しようとする

その途中、今度は腹部に衝撃が走った。『先輩は何もしていないにも関わらず』だ。見逃してなんかない。瞬き一つの動きもちゃんと見ていた

（どういう事だ？何で何もしていない筈なのに俺に衝撃が来るんだ？先輩の能力は拳圧を飛ばす事じゃないのか？）

「もしかして悩んでる？僕がどうやって攻撃しているのかを……まあ教えないけど」

直線上俺のいる所に拳を放つ。そして、全身に殴られたような衝撃が来た

家族みんなでホテルに行こう!? (後書き)

本格的に始まりました。オーナーのスタンド名はイギリスのプロゲ
レシブ・ロックバンドから

で、除夜が早速スタンド使いと遭遇してしまいました。松任の能力
とは？

では、次回もお楽しみに！

スタート・ミー・アップ？（前書き）

中学時代の先輩のスタンド攻撃に、苦戦する除夜。スタンド攻撃の謎を解けるのか？

スタート・ミート・アップ？

俺は再度松任先輩に近付いた。スタンド攻撃の謎を解くには、謎が分かるまでスタンド攻撃を食らうしかない

幸い先輩のスタンド攻撃は一撃一撃が大ダメージを食らう程の威力はない。俺の身体が頑丈なものもあるかも知れないが、何発も食らっている俺が気絶すらしていないのも見て、能力の威力はそんな脅威と言えるものではない

先輩は俺のいる方向へ向かって右ストレートを放つ。俺は左に身一つ分瞬間移動した。同時に、先輩は俺から見て右に二歩移動した

俺の背中の中の右の肺の位置に、攻撃が命中した。意に介さず、接近しながら考える

(『跳弾する拳圧』を放つ能力……？)

これなら後ろから衝撃が来るのは納得がいく

だが、それなら壁や窓ガラスに衝撃が当たった音がする筈だ。だが、そんな音は『していない』

それにこんな狭い空間で使ったら、自分も被弾してしまう可能性だつてある。それとも何か？自分には決して当たらず寸前で消滅するのか？それとも、自分の『拳圧を飛ばす』という前提で推理している事が、間違っているのか？

俺がこう考えている間にも、先輩はスタンドを用いて俺のいる方向へと真正面、斜めと様々な角度で拳を放つ

俺は左に身二つ分の距離を瞬間移動した。それを確認すると、先輩はまた俺の正面から向かい合うように移動した

と、同時に、様々な角度から衝撃が俺に襲ってきた

「結構冷静なんだね。僕の能力を攻撃を食らいながら……いや、『食らう事によつて』分析しようとしているのか……普通なら怖じ気づいて逃げるとかやけくそになって突っ込んでいくとか……だよ？現に僕がこの能力を得て喧嘩した相手はみんなそうだったよ？」

「俺は自分やあんたと同じ能力を持つ輩とは喧嘩慣れしているんでね、ヤバい状況こそ冷静にならなきゃ駄目だったのはその経験から心底理解しているつもりですよ？」

「……少し見ない内に結構変わったね。昔は他人や現状に流されっぱなしだったのに……でも、僕の攻撃の謎が解けない限りは、僕を倒すなんて夢のまた夢だよ」

「その謎が人間の作る物なら、同じ人間が解けない道理は諦めない限りありませんよ……」

「推理物で主役の探偵の決め台詞みたいな事を言うね……説得力のある正論だけど……」

冷めた表情で俺のいる向きへ拳を放つ。俺は今度は先輩の後ろに瞬間移動した

先輩は体をターンして俺に拳を放つ

……あれ？冷静に考えたら、思い返してみれば変だぞ？

何で先輩は、『常に俺と正面から向き合うように体を動かしているんだ』？

限定条件……もしくは、この行為が攻略への路なのか？

まだ持ってくれ俺の身体……後ちよつと、後ちよつとで謎が解けそうなんだ……

ホテル黒兎、駐車場

「何なのよ一体、突然バトルロイヤルをしろだなんて、あの人何を考えているのよ！」

みさえが、当然の文句を口にする

一緒に行動する事にした野原一家と庚は、事実確認の為、ホテルの

駐車場エリアを歩き回った

結果、ホテルの外へは出られず、ホテルの中にも戻れないという、つまりイベントのルールに従うしかこのホテルからの脱出は出来ないと理解した

ふと、ひろしは何かを思い出したようにしんのすけの顔を見下ろす。その表情は、何やら深刻そうだった

「しんのすけ、ちょっと聞きたい事があるんだが……」

「な……何？」

「お前……ここ最近何か頻繁に事件に巻き込まれているよな……それも訳の分からない事件に……もしかして、これってその事件と何か関係があるのか？」

何となく出た疑問を、ただ口にしたただけだった。だが、ひろしのその疑問は的を得ていた

先月の日曜参観に塩屋が幼稚園に襲撃した事件

柿枝がまつざか梅の財産を盗もうとして能力を悪用した事件

大原ななこの大学の学園祭で起こった、発砲事件や人間の謎の炎上、集団で体がボロボロになっていた事件

敦賀が来襲した時に起こった、原因不明の爆発

北海道の遊園地でヒーローショーを行っている最中に乱入してきた、武装グループの襲撃事件

ひろしの知る限り、これらの現場にしんのすけは居合わせていた

「最近春日部で妙な事件が間をおかず頻発しているのは知っているが、お前、もしかしてそれが何か知っているのか？」

「話は待って、あの車の陰に誰がいる……」

庚の指を差している先――赤のパジェロの陰に、『誰か』がいた

その『誰か』はすぐに姿を現した。その姿を見た野原一家と庚の感想は、『デカイ』だった

二メートル近くはある、引き締まった体をした巨漢だった。髪は金色に脱色しており、鋭くつり上がった目、無地のYシャツの上に赤の地に紫とオレンジの斑点のある、腹部と肩の部分の布地を逆三角に切り取ったジャンパーを羽織った、二十代後半らしき男だった

「何だよ……最初に遭遇したのがファミリーかよ……」

「私は他人だけどねーひまちゃん」

「たえ」

抱きかかえられているひまわりは、庚の言葉に相槌を打った

「俺は木戸正一……このホテルのイベント参加の広告に応募して選ばれた参加者だ……こんなイベントだとは夢にも思わなかったがな……」

そりゃそうだ。常識的な人間なら、バトルロイヤルをホテルでイベントとして開催するなんて想像も出来ないだろう

「だがいい……このイベントに応募してみて良かったぜ……何せよ」

木戸の後ろからスタンドが出現し、しんのすけに殴りかかった。しんのすけはギリギリでかわす

「この能力を与えられて早三ヶ月余り……初めてこの『能力』をフルに活用する事が出来そうだから……」

木戸の後ろには、銀色を基調とした、光沢のあるオレンジ色の肩鎧と胸当てを装着した、頂が空に向かって緩やかなカーブを描いて生えている漆黒の捻れた角が額から生えた機械的なデザインの亜人型のスタンドが立っていた

「お……おい、何だよあれ……」

「何？あの人みたいなのは……」

スタンドに指を差すひろしとみさえ。スタンドが見えない筈の二人がスタンドを見ているのには驚いたが、しんのすけは庚に二人を連れて後ろに下がるよう指示する

ひまわりは庚から降り、しんのすけの肩までよじ登った。そして、二人は自分のスタンドを自分達の前に発現させた

「へー……どうやらお前等も俺と同じ様な能力を持っているみたいだな……」

「『ハリケーン』！道具型になれ！」

『お助け料五億万円分割払いも可』

木戸のスタンドはしんのすけに鋭い左ストレートを放つ

『ハリケーン』は道具型、しんのすけの右手に刀、左手に手の甲の部分に直径五十センチ程の盾のついたガントレットに変型する。しんのすけは左手の盾で攻撃を受けた

「おーすごいぞ、お前、刀だけじゃなくてこんなカツコイい盾にも

なれたのかあ」

『分裂してこの二つに変身出来るようになったのは私の本体である
お前が成長したからだ』

「やっぱりオラってスゴいのか……」

「随分と面白い能力だな……だが、俺には物理的な強度など……」

拳の当たっている所を中心に罅が広がっていき、破壊された

その反動でハリケーンは基盤の近距離パワー型に戻る。木戸のスタ
ンドの拳は、そのまま真っすぐしんのすけに向かう

「たやーい!!」

ひまわりが懐に潜り込み、彼女のスタンド『プレシヤス・エンジエ
ル』が木戸のスタンドの右腕を掴み、放り投げた。木戸の体は駐車
場に停めてあったワゴン車のフロントガラスを突き破った

「いってえな……フロントガラスの強度を脆くしなかったらリタイ
アだったぞ……」

平然と立ち上がり、地面に降りた

スタート・ミー・アップ？（後書き）

しんのすけ達も敵と遭遇。能力者はさろつさんが送ってくれたキャラです

スタンド使いじゃないひろしやみさえがスタンドを見える理由は後に判明させます

これからも宜しくお願いします

スタート・ミー・アップ？（前書き）

松任戦決着！だが、イベントはまだ始まったばかり……

スタート・ミー・アップ？

先輩のスタンドは俺の居る方向に向けて休みなく拳を振るう。その行為は一見シャドーボクシングみたいだが、れっきとした俺への攻撃だ

俺の体に衝撃が走る。大した威力じゃなくとも連続で食らえば結構キツイ

俺は背後に移動した。背後からは少なくとも先輩がそっちへ向かって攻撃して来ない限り衝撃は来ないのは分かっている

右足に履いているスニーカーの靴紐を解き、足を蹴り上げてそれで飛ばした。俺はコントロールは自信が無いのを思い出したが、今回は上手くいったようで、真っ直ぐに先輩に向かって飛んでいく

先輩のスタンドは簡単に靴を弾いた。まあ近距離パワー型は拳銃の弾丸を弾くくらい容易に出来るって聞くし、人間が生身で飛ばした靴は簡単に弾けるわな

弾かれた靴は、床に落ちた……あれ？

そつだ……飛んでいる物が壁に当たったらぶつかって……その壁を貫くか……または弾いて……飛んできた向きに……

そつか分かった！これなら辻褃が合う！

ならば俺のやるべき事は……

俺は先輩に接近する為に駆け出した。先輩は俺のいる方向に拳を打ち込む。俺は今度は決して避けない

「へえ……避けないんだ……何発も直撃するといつのに躊躇いとか感じないね……」

「ホテルの経営者でこのふざけたイベントの主催者の言った事が事実ならあんたをぶちのめすか俺がリタイアするかすれば戦闘によるダメージは治るらしいから……それに……あんたはもう『詰んでいる』んだよ」

先輩との距離は既に一メートルもない。先輩は俺の顎に向かってアッパーカットを決めようとした

「！」

「想定してなかっただろ？俺がこつする事を……」

拳が顎に命中する寸前、俺は能力を用いて先輩の攻撃を、先輩との距離を互いの鼻息が届く距離まで縮める事でそれを避け、先輩の両腕を脇で挟んで固定した

『軸』にしたのは先程飛ばした『スニーカー』。落ちたままそのままだった為使った

「言っておきますがしつかり挟んでいるので抜けたり解いたりはお出
来ませんよ？寧ろ暴れないのを勧めます。もしこれ以上もがけば万
が一振り解かれた場合を考えて腕をへし折ります。戦闘が決着をつ
く形で終えればそのダメージは消えますが決着をつくまではダメー
ジは残るといふのは俺自身が体で理解している。本当はしたくない
があんたの能力は恐ろしいし逃してしまつたら二度と通じない……
だから大人しくするのを進めます」

どうやら俺が本気なのが分かつたようだ。骨が軋む音がするまで脇
に力を込めたのがその意思表示だと理解してくれたようで本当に良
かつた。じゃなければ腕をへし折らなければならなかつた

「これであんたの攻撃と同時にあんたの能力も封じた……観察して
いたけどスピードなら僕のスタンドのが早い。もしスタンドで俺を
攻撃しようならこの距離なら俺の攻撃が先に届きますよ？」

「くっ……」

「あんたのスタンドの能力は『拳からエネルギーを放つ能力』だろ
？そのエネルギーは無生物に当たつたら自動的にそうなるのか、対
象を選ぶ事が出来るのかは分からないが、兎に角障害物に当たつた
ら『自分に向かつて跳ね返る』……だからあんたは俺の正面になる
よう移動していた……確実にエネルギーを当てる為に、能力を謎め
かせる為に……！」

多分だけど跳ね返つた後も本体へと向かうと考えたが自然だな

本当に恐ろしい能力だよ。特にこういつた屋内での戦闘じゃ防ぐ事も避ける事も難しいもんな

「正解だよ……それが僕の『スタート？ミィ？アップ』の能力だよ……見破られるとは思ひもしなかったよ。誉めてあげる」

「言っただろ？俺は俺やあんたと同じ能力を持った奴との喧嘩は何度も経験してるとな……」

先輩は跳んで俺の膝に足を乗せ、俺に目線を合わせ、首を大きく後ろにそらせた。何をするかは分かる。頭突きだ

ギリギリまでそらせると、思いつ切り前へ突き出した

互いの額が激突した音と、俺が脇の腕を挟む力を強め、先輩の腕をへし折った音が聞こえたのは、同時だった

「あ……あ……あ」

額が割れて血を流し、両腕が曲がってはいけない場所から下へと曲

がった先輩は、悲鳴にならない悲鳴を挙げる

俺は既に先輩の腕を脇に挟んでいない。もう必要が無いからだ

「余計な真似をしようとしたからだ……」

「く……」

「知人が痛みで苦しむ様は僕は見たくないからな……更に痛い目に遭わせるが命までは取らない。まあこのイベントのルール上殺そうとしても殺せないけどな……リタイアするまでは痛みがあるからそれは覚悟しておく事を進めますよ」

「ああ……なるだけ早くリタイアさせてくれる事を望むよ……痛いのはあまり好きじゃないからね……」

「ゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラ」

拳のラツシュを先輩に打ち込む。先輩は吹っ飛び、滞空中で気絶したのか床に落ちる前に消えた。そうか、別空間に飛ばされるってこういう事が……確かに、気を失った人があちらこちらに倒れていたらイベント進行に支障が出るからな……

体中の痛みは消えた。見てみると、この戦闘によって出来た傷や痣は全て消えていた。あの説明は全て真実だという事が、この二つの事象によって完全に証明された

「参加者の中には多分先輩みたいに俺達がそうだと確認していないスタンド使いが複数いるんだろうな……他のエリアは勿論、このエリアにも……」

不安になった俺は移動を開始した。俺が今感じた不安は多分全員がしている筈だ。そしてその不安はまず確かに当たっている

あいつ等は『強い』、それは自信を持って言える。だが、このホテルにはどんな能力を持ったスタンド使いが何人いるのか分からない。しかも、このホテルのオーナーの能力によってエリア分けされており、自分と同じエリアにいる奴でないと助けに向かう事も出来ないし非スタンド使いの参加者も敵だ

仲間の助けも期待出来ず、仲間を助ける事もままならない。本当にある意味今までで一番最悪の事態だ……

「て……何ネガティブに物を考えてんだ俺……違うだろ……俺の、いや、『俺達』のやる事は『現状』をどうにかする為にかむしゃらになる事だろうが……」

どんな訳の分からない敵と遭遇するとか何時もの事だろうが……何時もとどう違う？そう思え！

俺は再び他の参加者を見付ける為、廊下を走り出した

(イベント終わった暁にはあの経営者をポコポコにぶん殴る！)

『コロシウム』の能力によって、イベント参加者のいる空間とは別に作られた空間

その遊技場で、喜好はテトリスを勤しんでいた。彼の顔の前には、三桁の数字の並んでいる画面が浮かんでいた。その数字は、少しずつ減っていつている

現在表示されている数字は『174』、そして、『173』になった

そう、この数字は別空間で繰り広げられている、バトルロイヤルの残りの参加者の数だ

この順調に変動する数字を見て、喜好はかなり満足している様子だった。何故なら――

「参加者はみんな楽しんでくれているようだし……満足満足」

これである

彼がこの企画を打ち出したのは、純粹に自分の経営方針から来る物である。故に、自分の催すイベントを客が楽しんでくれる事は、彼にとっては至上の喜びなのだ

「この能力を与えてくれたあの少年には頭が上がらないよ……この能力があればもっと凄いイベントが……」

怪しげに笑いながら、筐体の画面を見てボタンを動かしていた

スタート・ミー・アップ？（後書き）

松任のスタンド名はローリング・ストーンズの楽曲から

では、次回もお楽しみに

ファイブ・フィンガー・デス・パンチ？（前書き）

バトルロイヤルに紛れ込んだスタンド使い達は、しんのすけ達に容赦なく牙を剥く

ファイブ・フィンガー・デス・パンチ？

金髪の巨漢、木戸正一は、後ろにスタンドを出してしんのすけ達に殴りかかる

しんのすけはスタンドを『遠隔操作型』にして、木戸の後ろに回り込ませた。後ろに回り込んだハリケーンは、右手に持つ剣の切っ先を木戸に向け、突きを放つ

「甘いんだよ」

木戸はその場でターンして刀に向けてスタンドの拳を打ち出した。その動作に、一切の迷いも躊躇も無かった

刀の切っ先に拳が接触し、拳が『刀を破壊して』そのまま前へと突き進む。そして拳は右手に的中し、ハリケーンの右腕の肘から先のその内部を粉碎してしまった。フィードバックにより、しんのすけも同様の負傷を負ってしまう

「しんのすけ！」

「しんのすけ！」

「見たか、これが俺のスタンド『ファイブ？フィンガー？デス？パンチ』の能力！このスタンドの拳でぶん殴った物体の硬度を好きなように変える事が出来る！より硬くする事も、より脆くする事もな

！」

「成程……貴方が近距離パワー型でしんちゃんが遠隔操作にタイプを変えていたとはいえ、何故しんちゃんのダメージがあんなに大きいのかを理解しましたよ……しんちゃんの腕を脆くしたんですね」

「まあな……因みに刀はクッキーやビスケット並に脆くした……このしんのすけってガキにもそこまで脆くして攻撃する事は考えたが残念ながら出来なかった、何故かは知らんが俺のスタンドは生物の硬さのコントロール自体は出来るが接触して完全に粉々にする程脆くは出来ないんだよ」

それを聞いて、しんのすけは琢磨の言っていた事を思い出した

スタンド能力はその本体の『無意識の才能』と言っても過言でなく、心の中に罪悪感等の「良心」と呼べる物があれば、無意識に何処かで「ブレーキ」をかける能力になるらしい。つまりそれが彼の能力の「ブレーキ」という事となる

ついでに言うと、そういう良心の類を持たない人間がスタンド能力を発現させると、悪意を象徴したようなとんでもない能力になる場合もあると聞いた

「何であの猪みたいなのが怪我したらしんのすけも同じ様に怪我してるのよ！」

「あれはしんのすけから出て来たようだった……俺だってよく分からないが、あれはしんのすけとリンクしているからしんのすけが同

じ様に怪我したんじゃないのか？そして逆に、しんのすけが怪我したらあれも同じ様な怪我をするんじゃないのか？」

ひろしがしんのすけ達の怪我を見て、自分の考えを言う。それを聞いて、ひまわりと庚は拍手をした

木戸は片膝を地面に着け、地面に向けて両拳を振り下ろした

地面を素早い速度で次々と拳を振り下ろす。どうやら舗装や土を脆くしているらしく、拳が振り下ろされる度に地面の破片が周りに飛び散っている。何をしているのかは分かる。『穴を掘っている』

自分が一人と半分が縦に入る程の深さまで掘ると、今度は横に向けて拳を叩き込んだ

「あいつ……何をやる気なの？」

棒立ちしている庚の後ろの舗装に『罅割れが生じた』。その罅割れからは、けたたましい「掘削音」が聞こえる

庚が振り向くと同時、罅割れの中心から木戸が飛び出してきて、スタンドで殴りかかった

「ぬおおー！」

二輪車と一体化したハリケーンに跨ったしんのすけが、猛スピードで木戸に迫る。木戸は拳を無理矢理止めて穴に潜った

バイクは穴を飛び越え、急ブレーキをかけて止まった。けたたましいブレーキ音が、エリア内に響く

「ありがとうしんちゃん」

「お礼はいいぞー!」

ひろしとみさえが穴に近寄る。しんのすけもハリケーンから降りた。庚はスタンドのアームで地面の壁をつつく。地表から坑までは意外と浅く、10センチも無かった

「木花ちゃんも、しんのすけ達と同じ様なのを出せるのか……」

「話は後で……坑の壁……そこらの鉄筋コンクリートより硬いですよ……」

「つまり……どういう事?」

「みさえ、お前話聞いてなかったのか? あいつは物体の硬さを変えられる能力を持っているんだぞ? 穴を横に掘ると同時に、崩れないように壁や天井を殴って硬くした……だろ?」

ひろしの推測に、庚は頷く

「おお、父ちゃん凄いぞ！それに比べて母ちゃんは……ハア……」

「うるさいわね！私はこの現状自体を未だに信じれてないんだから！」

「母ちゃん、起こってる事が非現実的な事でも現実を起こっているんだから素直に受け入れなよ……これだから見栄っ張りしみつたれペチャパイケツでかの三段腹おばさんは……」

「ぬあんですつてえ〜！」

「うお〜！久し振りのグリグリ攻撃はかなり効くぞ〜！」

「……私はつい最近まで生きた人間との付き合いは希薄だったからよく分からないけど、いきなり訳の分からない事態に巻き込まれたら普通はこういう反応を示すと思うよ？」

しんのすけの横から掘削音が響き、舗装に罅割れが生じる。中心から木戸が飛び出し、スタンドの拳が迫る

ひろしがしんのすけをギリギリで手を引っ張って助け、みさえがラリアットを繰り出す

木戸はみさえの攻撃をスタンドで受け流し、穴の中へ入った

『どうする？出て来る場所を予測するのは容易だが、こちらからの攻撃は難しいぞ？』

「何を言ってるんだ？あいつを穴から引き摺り出すなんて簡単だよ」

「え？父ちゃん何か秘策があるの？」

「父ちゃんに任せなさい！」

ひろしは胸を張り、拳でドンと叩いた

坑の中

木戸は坑を掘りながら、勝ち誇った顔をして笑っていた

音で出て来る場所が分かるという欠点はあるが、寧ろそれが相手に焦燥感を煽らせている。自分は地上から伝わる足音から大体の位置は予測出来る

そしてウロウロしている間にも更に下へ斜めへ横へと複雑に坑を掘る。この事で坑に入って来れたとしても深追いが出来ないようにするついでに念を入れて自分が入れる程度の横穴や途中で行き止まりの

ダミーの坑も掘る

「これで簡単には俺を追えねえ……破れるもんなら破ってみやが……へ？」

ガスとかとは違う、何か強烈な異臭が鼻についた

「さあ出て来い……」

全員が、座っている。ひろしの靴下が片方無くなっているのが、よく見ると分かる

木戸が出て来た後坑に戻っている事から、『坑は全て繋がっている』という事実気付いたひろしは、自分の靴下を片方、坑に放り込んだひろしの靴下や靴の臭いは、直接嗅いだら人が嘔吐、場合によっては失神してしまう程強烈である。そんな臭いを発する物が空気の流れのあまり無い坑の中に入れたらその臭いが坑全体に充満するのは火を見るより明らかである

数分後、しんのすけから見ても前方から今までより速いリズムで掘削音が鳴り、飛び出し、振り上げられた拳は、上に停めてある車を破壊した

そして、顔を青くし、息を荒くしている木戸がその穴を広げて這い上がった

「今……五年前に死んだ妹が川の向かい側で手を振っているのが見えた……」

「思いつ切り臨死体験ですね」

「相手は弱ってる！ひま！」

「たいや！」

近距離パワー型に戻ったハリケーンは一番近くの軽自動車のドアを引きちぎり、ひまわりの頭上を狙って投げる

ひまわりはドアが自分の頭上を過ぎると同時に、『プレシヤス？エンジェル』を発現し、ドアを殴った

『プレシヤス？エンジェル』の能力で、ドアはダイヤモンドになる

「それがどうしたあ！」

『ファイブ？フィンガー？デス？パンチ』で飛んでくるダイヤモンドのドアを殴る。スタンド能力によって、ドアは粉々に砕け散った
ダイヤモンドの破片を浴びながら、しんのすけは接近していた。射

程距離内に入ると、近距離。パワー型のハリケーンを出し、殴りかかった

攻撃をギリギリで避け、ハリケーンの腹部を蹴り上げた。しんのすけは後ろに吹っ飛び、後ろに停まっていたバスに激突した

「甘いんだよ……」

「まだまだあ！」

ハリケーンを動かす。だが、しんのすけ自身はバスにぶつかった衝撃でロクに動けなかった

「バカかお前！お前のスタンドのその型は俺と同じ！つまり本体から遠くへはいか……ぶご？」

ハリケーンの拳が、木戸の腹部に突き刺さった。本体であるしんのすけとの距離が、射程距離より離れているにも関わらず、『ハリケーンは木戸の目の前にいた』

ハリケーンは拳を振り上げ、お返しとばかりに吹っ飛ばす。木戸の体は、二輪車置き場に突っ込んだ

「あれは……まさか……」

驚きながらもしんのすけやハリケーンを冷静に観察していた庚は、
この事象の原因を、大体ながら頭で纏めていた

ファイブ・フィンガー・デス・パンチ？（後書き）

スタンド名はアメリカのデスメタルバンドから

現象の理由は次回で明らかとなります

それでは、次回もお楽しみに！

ファイブ・フィンガー・デス・パンチ？（前書き）

しんのすけと『ハリケーン』に起こった事とは？

木戸戦決着！

ファイブ・フィンガー・デス・パンチ？

「あれ？オラ……どうしちゃったの？」

『何だ？何が起こったんだ？そして今、私に何が起こっているんだ？』

しんのすけは、自分のスタンドに何が起こったのかを把握出来ていない

『ハリケーン』も、自身に何が起こったのかを理解出来ていない

そしてそれは、吹っ飛ばされ、立ち上がっている木戸も同様だったしんのすけは自分のスタンドのあの型があそこまで自分から離れられるとは聞いてないし、『ハリケーン』は自身の基盤であるこの姿が『本体』であるしんのすけからここまで離れられ、然も今までに無いパワフルな動きで動ける等、不可能な筈なのだ。そして木戸も、戦いながら観察していてそれを理解していた

一方、蚊帳の外のメンバーの内、野原兄妹同様スタンド使いである庚は、冷静にしんのすけと『ハリケーン』を見ていた

いや、二者の周囲に散らばったり刺さったり引っ付いたりしている、木戸が砕いたひまわりのダイヤモンド』を、見ていた

「メレダイヤモンド……かなり小さい……中石を引き立てる為のダ

イヤモンド……」

「何の事だ？」

「ダイヤモンドはそれ自体がメインとなりうる宝石ですが、他にも中心の石を引き立てる性質もあるんです。宝石のアクセサリーとかで目立つ宝石の周りに小さなダイヤモンドが散りばめられているの、カタログとか宝石店とかで見た事ありますよね？」

「へー……この前通販で買ったブローチのサファイアの周りにダイヤモンドがあつたのはその為だったのか……」

「ちょっと待て！お前そんなもん買ってたのか？」

「あつけない」

「おおかたカタログ見ていて欲しくなつたから買ったんだろぅが、そついう衝動買いは控えろと何度言つたら分かるんだよ！」

ひろしの小言にみさえは小さくなって「すみません」と謝っている。何時もならそれ以上に大声を出して理不尽な反論をするが、大きな買い物だつた為何も言えなかつた

庚は野原夫妻のやり取りを無視し、続ける。ちゃんと聞いてくれる状況でも知識が無い以上話した所で理解は出来ないだろうと判断したからだ

「多分『ハリケーン』の性能が一気に上がったのは、それだと思つ

……ひまわりちゃんの『スタンド』で作られたダイヤモンドだから、スタンドや本体の周りに散りばめられると性能がかなり引き立てられるんだ……」

立てるようになったしんのすけは立ち上がり、対峙するかのよう
に木戸の前に立つ

二人は、後ろに己のスタンドを発現させていた

「何でお前のスタンドが突然性能アップしたのか知らねーけどよ…

…」

「うん、オラも知らないから聞かないでね」

「ああ聞かない……どうやら本当に知らないみたいだしな……一つ提案があるんだがどうだ？」

「何？」

「武器とかそう言ったの使わず……素手で、と言ってもスタンドだ
がな……それで殴り合おうぜ……」

ファイティングポーズを取る木戸

「悪くないだろ？お互い近距離パワー型、つまり接近戦に向いてい

るスタンド同士だ……こういう殴り合いで決着つけるってのも悪くない、そう思わないか？」

「つまり……拳で語り合おうと？」

「まあそう取って構わないよ？分かってると思うが手加減は一切しない。但し能力は使わないがな……お前はガキだがただのガキじゃなく俺と同じスタンド使いだからな……」

しんのすけもファイティングポーズを構える

木戸が飛び出して右拳を振るう。それをしんのすけは『道具型』に変身させたハリケーンの盾で防ぐ

ひまわりのダイヤモンドによって性能を引き出されている状態でのその防御力は先程までのそれではなく、能力を使っていない事を考えても何ともなかった。寧ろ殴りつけた木戸のスタンドがダメージを受けており、本体もフィードバックによって同様の傷を負った

「これでおあいこだぞ！」

「ダメージの度合いはお前のが上だな……」

「よし、とどめを刺すぞ『ハリケーン』！」

「心得た！」

『ハリケーン』は装着型となり、しんのすけに纏う

「オラ、参上！」

お決まりのポーズと台詞を決め、木戸と距離を取る。木戸は接近する

途中で止まり、しんのすけも木戸に向かって走り出し、跳ぶ。そして、跳び蹴りの態勢を取る。足の裏を向けているのは、勿論木戸だそう、これから繰り出すのは、『ハリケーン装着型』の必殺技にして、しんのすけのスタンド、ハリケーンの最大の技！その名も！

「『ワイルドボアライダーキック』！」

それを真正面から見て木戸は、笑った

「そうか、それがお前の最大の技か……このタイミングじゃどうせ避けれん……なら受けて立ってやるよ！『ファイブ・フィンガー・デス・パンチ』！」

スタンドを自分の前に発現させ、しんのすけに向けて拳のラッシュを放つ

しんのすけの跳び蹴りは、その攻撃を弾き、木戸の胸部に命中した

骨が砕ける音がする。内臓が損傷した感じがする

『ワイルドボアライダーキック』を直撃した木戸は、口から血を吐きながら、何メートルも後ろへ吹っ飛んだ

どうにかという感じながら、立ち上がった

「今の……中々だったぜ……随分と楽しめた……俺は負けちゃったが、結構、今……気分爽快な……んだ……」

気を失うと同時に、木戸はエリアから『退場』された

同時、装着型は解除され、ハリケーンは消えた。戦闘が決着のついた形で終わった為、戦闘によって負った傷は消えた

「父ちゃん！母ちゃん！ひまー！木花ちゃん！オラ勝ったよー！」

「ああ見てたぞしんのすけ！」

「凄いわしんちゃん！」

息子の勝利を心から喜び、抱き締める野原夫妻

二人は暫し抱き締めた後、真面目な表情でしんのすけ達を見た

「もし教えても問題が無ければ教えて欲しい。お前達から出て来たあの『妙なもの』は何なんだ？」

真剣な顔で見詰める。話してほしい。口には出さないが、その顔は、その目はそう言っていた

しんのすけは口を開こうとすると、何か手を叩く音がした。音源と
思わしき方向には、両手を合わせている庚がいた

「気持ちは分かるけど今はそんな状況じゃない。少しでも早くこの
ふざけたイベントを終わらせないといけない。今の戦いで感じた疑
問を訊くのもその疑問を応えるのもその後で充分の筈よ。そうでし
よ？」

「う……うん」

「大体こういうの当事者がある程度揃ってないとでしょ？こう実際
見せられたらどんなガチガチの石頭でも事実と認めざるを得ないと
はいえ簡単に話そうとするのは良しとはしないな」

「ほーい……」

「このイベントが終わったら教えてくれるんだな？」

「ええ、みんな教えてくれると思いますよ。ここまで見事に関わってしまっただから……」

庚は簡単に言っているが、それは難しいだろうとは感じていた

まあさっき言った通りここまで見事に関わってしまった以上は説明してくれないと納得はしないし、自分の目で観て耳で聴いた以上は内容を受け入れてくれるだろう

どんな時でも何処でもそうだが、一番の問題は自分達が置かれている『現状』だ。自分達を含めて二百人いる参加者の中で、何人スタンド使いがいるのか分からない。当然このエリアの中にもまだスタンド使いがいる可能性もある

その可能性はしんのすけ達も、別のエリアに振り分けられた除夜達も理解している筈だ

(せめてもの幸いは、参加者には一切の『肉体的な危険』は無いない事か……)

ファイブ・フィンガー・デス・パンチ？（後書き）

ひまわりのスタンドの可能性を考えてみました

スタンド紹介を挟んで、まだホテル黒兎編は続きます。宜しく願
いします

スタンド紹介？（前書き）

お馴染みのスタンド紹介も五回目。今回はスタンドの紹介のみです

スタンド紹介？

スタンド名 - インフェミーACT3

本体 - 宝来瑪瑙

破壊力 - B スピード - D 射程距離 - B

持続力 - B 精密動作性 - E 成長性 - A

能力 - 土石流のように凝固液を吐き出す。ACT3の凝固液は生物と無生物の僅かな温度差に反応して固まる。固まった凝固液は、熱を伝える

スタンド名 - ガンズ・アンド・ローゼズ

本体 - 西高須章雄

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - なし

持続力 - D 精密動作性 - なし 成長性 - A

能力 - 自分が育てた植物の成分を操作する。植物で作った物はたとえば小麦粉であれば通常のそれと色、形、性質等全てにおいて同じである為見分ける事が出来ず、また、操作した成分は通常の如何なる検査でも検出する事は出来ない

スタンド名 - アリス・イン・チェインズ

本体 - 土浦心優

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - なし

持続力 - C 精密動作性 - なし 成長性 - なし

能力 - 写真の中の空間に入り込む。写真の中は時が止まっており、本体以外は中に入る際に本体が干渉を許可した者を除いてどうする事も出来ない。空間の中の物質は現実空間へ持ち込む事は不可能だが、写真の中から別の写真の中へ入る事は可能で、この場合写真の

中の物を持ち込む事が出来る。写真の中へは人や物を持ち込むのは可能で、この場合持ち込まれた分の重量は消失する

スタンド名 - ヤング・ブラッド

本体 - 當麻佐鳥

破壊力 - C スピード - D 射程距離 - D

持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - E

能力 - 生物の血液を吸い取る。吸い取ったらその生物が逃げたとしてもその生物が生きている限りは生気を感じし、追跡出来る。追跡中は障害物をすり抜けられる。血を吸うと身体能力が上昇する

スタンド名 - アルティコロ・トレンティノ

本体 - 吉祥寺穂

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - C

持続力 - D 精密動作性 - E 成長性 - A

能力 - 体の各部の宝石から煙幕を発生させる。煙の色の濃度は噴出させる前なら本体がある程度コントロール出来る。このスタンドから噴出される煙幕はスタンド使いでない者にも視認出来る

スタンド名 - ソーラー・システム

本体 - 葉山瑞乃

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - A

持続力 - C 精密動作性 - B 成長性 - C

能力 - 空間を歪曲させてレンズを作る。レンズの大きさ、角度、度合い等は調節出来る。空間を歪曲させている為、レンズに映る向こう側の拡大された景色は一般人にも見る事が出来る

スタンド名 - スパニッシュ・フライ

本体 - 嶽沢弘和

破壊力 - E スピード - B 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - C 成長性 - C

能力 - 刃物である羽を一秒間に二百回以上振動させ、切断力を上げる。

通常、遠隔操作のスタンドは本体から遠くへ離れられる分破壊力は落ちるが、それを能力でカバーしている例と言える

スタンド名 - ジャッカ・ロウ

本体 - 夢前天名

破壊力 - A スピード - A 射程距離 - D

持続力 - D 精密動作性 - D 成長性 - C

能力 - 空気中の窒素を取り込み沸点まで冷やして液体化させ、それを拳についたポリプで噴射する。スタンドに直接ダメージを与える事も出来る

スタンド名 - コロシウム

本体 - 喜好正午

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - 半径10キロ以内

持続力 - B 精密動作性 - なし 成長性 - なし

能力 - 射程距離の中にいる者を、自分の定めたルールに従わせる。射程距離は範囲内で例えばイベントが始まる前までなら面積や形等を変える事は可能である。

エリアを分けする事は可能で、各エリアはそれぞれ別空間となり、別のエリアへの行き来が不可能となり、仮に行く事が出来たとして

も割り当てられたエリアとは別のエリアの人や物への一切の干渉は不可能となる。また、それとは別に空間を作りそこに特定人物を収容する事も可能である

スタンド名 - スタート・ミー・アップ

本体 - 松任朝熊

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - E

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - C

能力 - 拳からエネルギーを放つ。そのエネルギーは本体が対象に選んだ物以外に当たると、その物体の大きさや強度等関係無く本体に向かつて跳ね返る。また、跳ね返った後も本体が移動した場合本体に追尾するように戻ってくる

本体へ戻ってきたエネルギーは本体に触れる直前で消滅する

スタンド名 - ファイブ・フィンガー・デス・パンチ

本体 - 木戸正一

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - D

持続力 - A 精密動作性 - B 成長性 - D

能力 - 殴った物体の強度を自在に硬くしたり脆くしたりする事が出来る。生物を対象にする場合粉々に出来る程脆くは出来ない。あくまで「強度」に関する能力で、その物質の持つ性質は変化しない

スタンド紹介？（後書き）

こんな感じですよ

次回は別のエリアの仲間を書きます

では！

刃物が沢山飛んでくる！？（前書き）

スタンド使いの参加者を倒した除夜と野原一家

一方、他のエリアに分けられた者達も……

刃物が沢山飛んでくる！？

一階エリア

目の合った参加者に接近し、己のスタンド『スーパートランプ』の斥力で吹っ飛ばし、気絶させ、会場から『退場』させる本荘。一階エリアの彼と琢磨も除夜達と同じ発想に行き着き、現在は二人でエリアを回って参加者を潰していた

エリアを一周した所で、琢磨と合流した

「おっ須藤さん……どうだ？」

「ええ……スタンド使いがいる事も考慮して臨みましたが、『今の所』いませんでしたので一通りスムーズに終える事が出来ました」

「俺も……スタンド使いとは『今の所』遭遇しなかったからここまですべて楽に終える事が出来た」

僕達は『今の所』という所を強くしていました。そして、互いの瞳に映る自分の顔は、これ以上ない程に苦笑いしているのが分かりました

『苦あれば楽あり、楽あれば苦あり』と言いますから多分……いや、絶対これからがキツくなる事は確かでしょう

「参加者見つけ。それも二人も！」

後ろから僕達に向かって声が聞こえたので振り向くと、そこに女の子がいました

中学生辺りの年の瀬と思われる、肩甲骨辺りまで伸ばした艶のある黒髪に、灰色を基調とした腹部を前の方を切り取ったセーラー服にセーラー服特有の大きな襟の端に多分二羽の釣り糸に絡まった力モメのブローチをつけ、切り取った腹部から見える下に着込んだシャツからは、『都』という文字が達筆で書かれていました。目を凝らすとその上に左向けにハネた、同じく筆で書かれた棒が見えた事から多分修学旅行か何かで記念品として買ったのでしょうか

別にその少女の恰好は問題視していません。本人の自由ですし……問題は、彼女の右手に握られている物です

握られている物、それは『ナイフ』でした。刃渡りは30センチあるかないかの直刀で、昔図鑑で見た『ダマスカス鋼』のような模様があり、柄には白い布が巻かれていました

「須藤さん……あいつ多分スタンド使いだ。早めに倒さないと……」

本荘君が僕に耳打ちしてきました

僕もそう思います。然し、彼女がスタンド使いだと証明出来る方法

は彼女がスタンドを発現させる以外に無い

少なくとも僕がこれまで遭遇した参加者は全員僕のSHUFFLEが「見えた」。恐らくこの空間は少しでも不公平にならない為に非スタンド使いもスタンドが見えるようになっているのでしよう。見える見えない、それだけで随分と変わってきますからね

それは兎も角、その少女はスキップしながら僕達に近付いてきました

その少女は僕と視線はほぼ同じだった為か、まず僕に顔を近付けました。まじまじと見てみると、目はハッキリと開いていて大きいように見えました

「初めまして、あたしの名前は櫻庭春季さくらばはしゅんき、今年で中学二年生になりました！」

「須藤琢磨……現フリーターです」

「本荘信朗……高校一年だ……」

「宜しく！そして……お二人にはここで脱落して貰います」

僕と本荘君に右手に握られたナイフで切りかかってきました

切っ先は僕の頬を切り、そこからは痛みが地味にじわりじわりとしてきました。本荘君は自分にナイフが当たる前に斥力で櫻庭さんを

後ろへ飛ばしました

壁に激突した櫻庭さんは平然とした様子で立ち上がり、ナイフを持つ手を緩めました

すると、ナイフが分身するかのようになり、次々と増えていき、十本以上になりました

本荘君は廊下に飾ってある花が活けてある花瓶を叩き割り、大きな破片を一つ取り、斥力で弾き飛ばしました。その攻撃は櫻庭さんの右肩に命中し、突き刺さりました

「年下相手にこんな事するのは気が引けるけどよ。お前がスタンド使いで俺達に攻撃を仕掛けてくるってんなら遠慮も容赦もする必要はねえ。どうせこのホテルの経営者のスタンド能力で決着がつけば勝った負けた関係無く戦闘で負った負傷は消え去るんだしな。つまり手加減無しで暴れられるって事だからな！」

「……何か、それ何処か違う気がします」

対し櫻庭さんは、ニタリと笑い、こう返しました

「つまり……私も手加減せずにこの『ドリー・ダガー』の能力をフル活用して貴方達二人を倒していいって事だよな？」

「何でそう取るんだ？」

「そう取れますよ。相手も力を持っているんだから」

「それにしても初めて会ったよ……『スタンド』……だっけ？同じ能力を持った人……スタンド使いになったの四月始めだけど……」

櫻庭さんは僕達に向けて数十、もしかしたら百以上のナイフを投げてきました。これから察するに物量で攻めるタイプのスタンドみたいです

本荘君が前に立ち、斥力でナイフを弾きます。取り零した分は、僕の『SHUFFLE』で弾きました

「まあ普通そうするよね……だけど……『ドリー・ダガー』にそれは間違いだよ？」

見下ろすと、弾いた『ドリー・ダガー』は切っ先が僕に向いて、一斉に飛んできたのでした

僕は本荘君から離れ、遠くに瞬間移動しました。『ドリー・ダガー』は僕に向かってきています

僕はスタンド能力を用いてナイフの刃の部分を持っていき、足下に迫るのはスタンドで掴み取りました。掴み取ったナイフも、刃を『SHUFFLE』の空間へ持っていきました

「それ、正解……」

「ハハハハハ……愛らしい顔して随分と意地の悪い能力を持っているみたいですね……」『血液を付着させる事でその対象へ追尾する能力』……しかも切りつけられたのが一度だけで一本きりなのに他のナイフまで僕を追尾するという事は読み取った情報の共有もする……
「……そうでしょ？」

「そうですね？間違いを上げるとしたら対象から発する生命の『気』の波長を読み取るんだから薄皮でも髪の毛でも構わないという所です
すね」

「『気の波長』？何だそれ？」

「あたしも詳しくは知りませんが、生命体は常に生命の気を発していてそれには波長があるんです。指紋と同じく同一のものは存在しない。この『ドリー・ダガー』は覚えたそれに反応して何処までも追ってくるんですよ」

除夜君達から話聞いた脱獄囚の一人、當麻佐鳥の『ヤング・ブラッド』と似て非なるスタンドですか

実際に比較する事は叶いませんが、数で攻める分、そして本体から離れていられる分こっちのが強そうですね。まあ僕個人の主観ですが……

こう考えている内に彼女は動きながら大量のナイフを僕に向けて投げつけてきました

僕は『SHUFFLE』の能力を用いて瞬間移動を行いました

「！」

瞬間移動をする為に持っていった右腕に、『大量のナイフ』が突き刺さっていたのです

何故かと思い一瞬だけ床を見下ろして、その理由を理解しました。先程刃を持っていった、床に転がっている筈のドリリー・ダガーが『全部無くなっていた』のでした

つまり、こういう事でしょう。僕のスタンド能力が物体の一部を自分の空間に持っていく事。持っていったのが生物の場合は『切り離されるもの』の問題無く生命活動は行っている、『つまり』気の波長』という物を出している

仕方無しに僕は近くの部屋に飛び込み、ドアを内側から閉めました

「彼女のスタンドの破壊力はそこまでない……これで充分防ぐ事が出来る筈……」

ナイフを抜き取り、部屋の中にあつた救急箱の中から消毒液と脱脂綿、包帯を取り出して処置に入りました

次の瞬間、『ドリリー・ダガー』の力を勝手に自己完結させてしまっ

た自分がどれだけ浅はかだったか、思い知りました

ドアや壁から、無数のナイフが大量に、次々と、休みなく『すり抜けて』僕に向かってきたからです

「追尾に優れているにも程があるでしょ！」

そう突っ込みながら、僕は掴み取り、持っていくながら密室から脱出する為にドアに向かいました

刃物が沢山飛んでくる！？（後書き）

次は琢磨と本荘に視点を当てます

スタンド名はジミ・ヘンドリックスの楽曲から。能力は琢磨が言った通り『ヤング・ブラッド』に似て非なる能力です

では、次回もお楽しみに！

刃物が沢山飛んでくる！？（前書き）

スタンド『ドリリー・ダガー』に苦戦する琢磨と本荘。勝機はあるのか！

刃物が沢山飛んでくる!?

壁越しに飛んでくるナイフを、『スタンド』を前方に出して防ぎながらドアに向かいました

僕の『SHUFFLE』は精密な動作が得意とは言え、何十本と休みなく飛んでくるナイフを完全に防ぐ事など出来る筈が無く、胴体や四肢に何本も刺さりました

途中、「バチン」と何か強く弾く音がしたと思うと、ナイフの投擲が止まりました。その間に僕はドアを開けました

そこで目に入ったのは、左腕に深めの切り傷を作った本荘君と、左手に刃が血で濡れた『ドリー・ダガー』を握って数メートル吹っ飛んでいる櫻庭さんがいました。これを見て、先程起こった音が何なのか、そして何が起こっていたのかを理解出来ました

「助けてくれて有難うございます……」

「礼は要らねえ……友達がピンチに陥った時助けに動くのは当然だからな……とは言え、俺もあのナイフの追跡対象になっちまったがな……」

「……………」

櫻庭さんは無言で立ち上がり、両手に握られているナイフの数を増やしました

「来るぞ」

「分かっています」

「ていやあー！」

可愛らしい掛け声と共に、それに似合わない凶器を大量に僕達に投げつけてきました

僕が前、本荘君が後ろに回り、僕はナイフの刃を「持っていき」、持っていき損ねたのを本荘君が斥力で弾き飛ばしました

勿論それで追尾は終わらないというのは承知済み。本荘君が弾き飛ばしたナイフを動く前に持っていきました

「意外と上手くいくもんだな……」

「こんな状況で目的は一緒だから自然と考えが同じだったんじゃないでしょうか……」

「まあな……須藤さん、喋るなよ……」

本荘君は僕を脇に抱えました。僕は低身長な為、簡単に抱えられました

本荘君は『スーパートランプ』を発現させ、櫻庭さんに向かって思いつ切り跳躍しました。踏み込む際に斥力を発生させたのか、天井スレスレの高さまで跳びました

櫻庭さんはまた大量のナイフを投擲して来ました。本荘君が弾き、僕が持つていく。それにより、彼女が投擲したナイフは全て殺傷能力を失いました

「これはさっきまでの分の……お返しじゃ！」

着地すると同時に、本荘君は櫻庭さんを殴り飛ばしました

彼女は普通に立ち上がり、血の混じった唾を吐き捨て、廊下の分かれ目まで言っ僕達から見て左へ行きました

僕達は追おうとしましたが、それは止めざるを得ませんでした

何故なら、左側の壁から、無数のナイフが飛んできたからです。それも左側の壁一面から

「なあ須藤さん、これどう見る？」

「外側を回ってナイフを投げつけてるって所ですね……」

それしか考えられません。このホテル、一階は内側を一周するかの

ように通路がありますからね。五メートル間隔で非常口が設置されていますし

『ドリー・ダガー』ならその能力でこのような奇襲攻撃は簡単な事なのでしょね

本荘君は斥力で弾き、僕は刃を持っていきました。しかし真正面だけの時でも対処仕切れなかったのを、左側の様々な方向から、それも壁越しで来るのを完全にどうにか出来る筈が無く、僕達は腹部や四肢にナイフが先程よりも多く刺さってしまいました。どうにかながら、頭部と胸部は無事でしたが

「強過ぎる……こいつのスタンド……」

「認めてくれて嬉しい限りですよ本荘さん」

僕達の後ろに、櫻庭さんがナイフを持って立っていました。まあ一周するかのよう通路が造られているんだからこうなるのは必然ですが……

彼女は僕達と向かい合う位置に立つと、大量のナイフを投げつけてきました。本荘君は再度僕を脇に抱え、櫻庭さんに向かって前進していきました

「ワンパターン野郎が！同じ手を何度も使った所で同じ結果に……」

櫻庭さんは、僕達の予想を越えた動きを取りました

大量のナイフを投げつけると同時に、ナイフごと自身を突っ込ませ
てきたのです

その想定外の動きに僕も本荘君も呆気にとられました。すぐに反
応し、僕は両手のナイフの刃を持っていき、本荘君は最大限の斥力
を発生させ、飛んでくる大量のナイフごと彼女を吹き飛ばしました
ナイフは床や壁にぶつかり、斥力の影響で電灯が割れて花瓶等の飾
りが吹き飛びました。彼女も、背中に壁を思いつ切り打ち付けたよ
うです

「痛い……」

「最大限でやったが、能力を得たばかりの頃はここまで強力じゃな
かったぞ……」

本荘君はこの戦いで成長していつているみたいですね。まあ、命が
懸かっていると頭が思ったから今まで無意識にセーブしていた力が
表に出た。とも解釈出来ませんが……

どの道成長には間違い無いでしょう。『自覚している』のと『無自
覚』じゃ大きく異なりますからね

最も、彼女のナイフは吹き飛ばした程度じゃどうにもなりませんけ
ど……早く『本体』である彼女を叩かないと……

本荘君は櫻庭さんに指を差しました

「さーてどうする？お前さん御自慢のナイフのスタンドは俺達の前ではほぼ無力……」

注意していれば刺さる事はないという意味ではそうですね

「お前のナイフの能力は記憶した気の波長つてのを追尾する、それは恐ろしいがそれだけだ……形勢逆転だな」

何でそこまで自信たっぷりと言えるんですか。現状何も変わってないに等しいでしょ

「ククククク……アツハハハハハハハハハハハハハハハハハ……確かに、つい先程までのあたしならこの現状に絶望し、膝を地面につけ、失禁し、意識を失い、そしてそのまま土下座していたでしょうね……」

「すみませんそれは何処からどう突っ込めば宜しいのでしょうか」

「でも今は違う……たあ！」

また大量の、それも今までの比ではない、前方が殆ど見えなくなる程の数のナイフを投擲してきました。本荘君は苛立ったように再び前方へ最大限の斥力を発生させ、ナイフを全て吹っ飛ばしました。視界を遮る物の無くなった前方には、やはり櫻庭さんの姿はありませんでした。そして僕は、『ある違和感』を感じました。

「右に行ったか左に行ったか分からなくなったただけじゃねえか……工夫つつてもこの程度かよ……あれ？」

「どうやら本荘君も『先程と異なる点』に気付いたようで、僕同様『吹き飛ばして床に散らばってそのままのナイフ』を見下ろしています。このスタンド『ドリー・ダガー』は記憶した僕達の「気の波長」を追って、たとえ身を隠そうが弾かれようが僕達目掛けて飛んでくる筈なのに、今までそうだったのに」

『全く動かない』

「それによ……おかしいよな……」

「それにも気付きましたか本荘君……ええ、確實におかしいです」

「「何で壁越しにナイフが飛んでこないんでしょう・んだ？」」

「その理由を教えてくださいませんか？」

先程同様に彼女が僕達の後ろから、ナイフを握って立ってました

彼女は、俗に言う『指パッチン』を行いました

「ぐっ！」

すると、本荘君の背中に、床に落ちていた『ドリリー・ダガー』が突然飛んで突き刺さったのでした

「何の事はない……とても単純な事ですよ。あたしは今まで『ドリリー・ダガー』を投げる『事で飛ばしてました……そして追尾もオートでした……」

何故か……僕には彼女がどんな事を思い立ったのかが分かりました。彼女は何処か歪んだ笑みを浮かべながら、言葉を続けました

「でもね、貴方達と戦って今まで思いつけなかった発想が頭によぎったんです……『もし追尾を開始するのが己の意思で出来たら』、という発想にね……意外とうまくいくものですね。思惑は当たり、この通り、見事に成功しましたよ……」

最悪……としか言い様がない……

今まで僕達が『ドリー・ダガー』の攻撃を曲がりなりにも防いでいられたのは、僕と本荘君が一緒だったのと、追尾が勝手に始まっていたという点が大きい

それなのに追尾の開始が自在にコントロール出来るようになり、更に本荘君は『退場』はしていないにしろこの怪我では最大限の斥力を発生させる事はおろか、スタンドを発現出来てもまともに動かせるかどうかという所でしょう

ほんの少しだけ傾いていた流れが、大きく戻ってしまった……

落ち着いて下さいよ僕……まだ僕のスタンドでやれる事はある筈です

本荘君はこの戦いで現時点で自分の出せる最大限のパワーを自覚した

櫻庭さんはこの戦いで自身のスタンドの新しい可能性を見付ける事が出来た

僕にも出来る事がある筈です。背水を目にして諦めるのは早い

僕のスタンド『SHUFFLE』の能力は「一部をスタンドの空間に持っていく」

それによって出来るのは攻撃をかわす、断面は干渉出来ないという特性を活かしての防御、相手の一部を持っていったの物理的距離を無視した直接攻撃、自分の一部ともの一部を持っていき、繋げる事での瞬間移動及び取り寄せ……

あれ？

そうか……こんな考え方もあったのですか……

今考えた「この使い方」が出来れば……僕は勝つ事が出来る

ロクな根拠もないのに、僕はそう心底から思いました

刃物が沢山飛んでくる！？（後書き）

少し長くなりました

展開云々を考えていて間が空きすぎました

今回はスタンドの成長し合いです。琢磨は果たしてどんな使い方を
見出したのか！

それでは、次回も宜しくお願いします

刃物が沢山飛んでくる！？（前書き）

追い詰められ、新たに考案した『SHUFFLE』の能力の使い方とは？

刃物が沢山飛んでくる！？

「何を見当違いな方向にナイフを投げているんですか？」

「え？何で？」

彼女は、僕達が『彼女から見て右側の空間』にいるのが信じられないように、目をぱちくりしています

気持ちは分かります。僕達に向けて視界が殆ど遮られる程の大量のナイフを投げつける事で、壁越しに彼女の意味で追尾を始めるナイフを置く事で僕達の動きを封じた筈なのに、

『僕達はそのナイフに掠りもせず、彼女の真横にいるのだから』

僕が行ったのは能力を利用しての瞬間移動。但し、自分と他の物体をスタンドの空間に持って行って、繋げて戻す事で発生するものではなく、「自分と対象の間にある『距離を持っていく』事での、真正銘の瞬間移動」

一つの存在につき一部しか持っていく事の出来ないという制限の通り、持っていつている間はもう瞬間移動は出来ない

しかし、持っていったナイフが突き刺さる事は無く自由に移動出来るというのは、結構強い

とは言え、空間というのは元に戻るというエネルギーが生命体やスタンドよりも強く、ちょっと気を抜けば戻してしまいそうです

そして、当たり前というかとっくに分かりきっていた事ですが、ナイフは僕達に向かつての追尾は止めません。刃先を僕達に向け、飛んできました。更に、櫻庭さんも新しくナイフを投げつけてきました

「う……う……」

「大丈夫ですか本荘君」

「背中に刃物が幾つも刺さって無事な奴がいたらお目にかかりたいよ……で……飛んでくるナイフを全部吹っ飛ばせばいいのか？」

「いいえ、彼女が今飛ばしたナイフのみを弾き飛ばして下さい。あちらのナイフは僕がどうにかします」

「分かった。それくらいなら……今のコンディションでも可能だ」

僕は廊下から飛んでくる大量のナイフに目を向け、本荘君は彼女が先程投げしてきたナイフに目を向けました

バチバチと何かを弾く音が聞こえてきます。斥力でナイフを弾いている音だというのは、確認する必要は無いでしょう。僕はもう少し『ナイフを引き付けておく必要』がありますからね。タイミングがズレたらタダじゃ済みませんから、じっくり見ないと

よし！

「で……今度は何をしたの？」

目をつり上げ、やや怒気の混じった表情で僕を見ています。素直に恐いです

「思い返してみてください。そうしたら僕が何をしたか……いや、何をやったか」が理解出来ると思いますよ？」

威圧されながらも、平然とした態度で応えました

僕達が今いる場所は『僕が距離を持っていく前までにいた地点』。そう、自分達に向かって戻ってきた全てのナイフが僕達がいた地点を通り過ぎるのを待っていた。通り過ぎれば方向転換まで何も恐がる事はない。壁越しに飛んでくるナイフは、本荘君が弾いてくれる

「ならばこれならどうだ！」

大量のナイフが方向転換する前に、本荘君が弾いたナイフの切っ先が僕達に向かれる前に、櫻庭さんは再度ナイフを投げつけました。一体何本が上限なんでしょうかね

「無駄ですよ」

僕は自分達と彼女への距離を「持っていき」、彼女の後ろに回りました

彼女は新しいナイフを生み出そうとしました……が、その前に僕が彼女の両腕を肩の肉を深く抉り出したように「持っていきました」。これで彼女はナイフを投擲する事は出来なくなりました

「さて……これで君は新しくナイフを発現出来てもそれが使えなくなりましな」

「前から発現していたナイフはどれだけ追尾出来ようが須藤さんの能力で避けられる……壁越しに置いているナイフは今の俺のコンディションでも弾ける……途中で俺が力尽きようとも無限じゃない以上減りはする……その分残った須藤さんは楽が出来る……逆転したぞ」

「あ……あ……」

「さて……お仕置きの時間だ……安心しなよ。さっきも言ったがどれだけの大怪我を負おうが決着が着いた時点でその傷は治るんだからな……注射や歯医者さんと同じで、ちょっと我慢したら痛みは取れるからね」

（明らかな暴力を歯科医や注射と同列に列べると言うのは相当無理があると思う僕はまだ正常なんでしょうね……）

口には出さず、心中でそう呟きました

直後、恐怖で叫び声を上げる彼女に、本荘君の斥力が叩き付けられました。鼻と口から血が出て、壁にぶつかりました

まだ気絶している様子は無いので本荘君は追撃をしようと近寄りましたが、さっきの攻撃が致命傷だった為かたった今気絶したのか定かではありませんが、彼女は『退場』し、僕達が戦闘で負った負傷も消えました

本荘君は不機嫌そうに斥力の影響で倒れた観葉植物の鉢を蹴り始めました

「畜生、ボコボコに出来なかったのが心残りだぜ！イベント終わったら殴っても蹴っても吹っ飛ばしても最悪残る怪我作るから出来ねえしよ！」

「君が良識のある人間なのか相手が誰だろうと平気で手を上げる人間なのか理解に苦しみます」

気持ちは分からないでもないですがそういうのは口に出さない方がいいですよ……

二階エリア

単独で行動していた稲庭は、階段の陰で隠れながら、『ある光景』を見ていた

参加者である鼻や耳にピアスをつけた、茶髪の男が、自分と同年辺りの少女に左手にメリケンサックを装備し、胸倉を掴み上げていた。臍が露出するよう四角に切り取り、肩や腕の部分に青いフリルをつけた紺色のセーラー服に膝上十センチのスカートに水色のハイソックスを穿いた、黒髪のシルバーのヘアピンを付けた少女だ

当初は常識的に助けようとしたが、参加者同士の潰し合いもいと考え、隠れていた。だが、男は少女をそうしたままだ。かれこれ十分は経っている

男は少女の服を掴み、引っ張った

男が何を考えているかが分かり、流石に放置しておけなくなった稲庭はスタンドを出して階段の陰から飛び出して二人に駆け寄った。彼女のスタンドは、以前までと異なり、人型の山椒魚のようになっていた

が、途中で足を止めた

少女の横から、自分達が持っている力と同じそれが発現したからだ。人型の、銀色を基調とした、頭にヘルメットを被り水牛の角の生えた肩当てが取り付けられた、耳の所にゼンマイのようなものを取り付けてある、女性的なラインのスタンドだった

スタンドは左手を上げて、掌を開いたり閉じたりしている

男は、その手の動きに注目している

右腕から繰り出された正面からのストレートを、顔面に食らい、吹っ飛んだ。男は体を床に叩き付けられる前に『退場』した

(ス…… 『スタンド使い』……)

キッと慎重にドアを開くかのように、彼女は稲庭に顔を向けた

刃物が沢山飛んでくる！？（後書き）

取り敢えず終わらせました

読んでくれている姉から、『SHUFFLE』は『ザ・ハンド』に似ていると言われ、そうだなあと思いやってみました

次は稲庭です

では、今後とも宜しくお願いします

インヴィジブル・キッド？（前書き）

稲庭と接触したスタンド使いの少女。その能力は？

インヴィジブル・キッド？

少女が自分へ首を向けると同時、稲庭は『イザベラ』を自身の前に出し、構えさせた

少女はその『イザベラ』を見て、意外そうな顔をした

「へー……」

「どうしたの？」

警戒しながら訊ねる

「いや、あたしに似た『能力』を持った奴、他にもいたんだって思っただけ……」

「自分以外では初めて会ったの？」

「ああ、うん……多分あのオーナーも同じ様な能力を持っているんだなあって思ったけど……でもこうやってあたしの『インヴィジブル・キッド』みたいに出せる人は初めて会った……まあいるだろうとは思っていたけどね」

「どうして？」

「あたしさ、先月の半ば過ぎに一番勉強の出来る中学時代の友達に

勉強教えて貰っていたんだけど途中トイレに行って……トイレから出たと同時に『矢』で右肩を射られて……それで……」

「ちよつと待って！その中学時代の友達の名前教えてくれない？そして出来たら貴女の名前も！」

「え？」

「いいから！あ、自分から名乗るのが礼儀だったね！あたしは稲庭早良っていうの！」

稲庭の尋常ならぬ勢いに圧倒され、萎縮しながら答えた

「あたしの名前は古賀幸……それで、勉強が出来る友達が沢登優太……」

「やっぱり……」

稲庭は除夜や義母、宝来、本荘、勝海から除夜達の中学時代の話をしよつちゆう聞いている。基本的に過去の話をしようとしないう除夜が、一番楽しそうに話すその様子を、稲庭は結構好きなのだ。話の内容も覚えている

その覚えている内容の中には、中学時代に関わっていた人物の名前も必然的に入っている。彼女の名前は、その中の「除夜と一緒にいた同じ年の大切な友達」に入っていた

そして古賀の話で解った。その勉強を教えている日に、優太が彼女を射抜いたのだと

「やっぱりって……やっぱり貴女も『矢』に射られたの？」

「うん、そしてそんな事をした理由も分かってる……本人から聞いた事をその場に居合わせた人間から聞いたからね……興味ある？」

それを聞いて、古賀は顔を俯かせた

そして拳を力一杯握り締める。爪が肉に食い込み、血が滲み出ている

稲庭はその様子を見て、彼女は犯人が誰なのかを察している事を察した

「稲庭さん……貴女あたしと歳そう変わらないよね？」

「同い年」

「貴女の……貴女の通っている学校名は？」

「県立星陵高校。そして瀬上君と宝来さんの友達で、二人とあたし達を射抜いた沢登君の同級生」だったよ」

引き延ばす意味も必要もない。そう判断した稲庭は、彼女が訊くであろう質問の答えを含んで言った

相当ショックだったのか、涙を流し嗚咽を漏らす。止めるつもりはない。止めようとも思わない

自分だってそれを知った時ショックを受けたのだ。除夜や宝来、本荘、真意を聞いた勝海、そして目の前の彼女はどれだけ衝撃を受けたのだろう……多分それは、自分が想像している以上のものなのだろうなというのは、大体だが察する事は出来る

「涙は止まった？」

「うん……」

その後、数分程泣き続け、漸く流す涙が枯れたらしく、顔を見上げた

「沢登君が何故あんな事をしたのかも知ってる……それを教えるから気絶されてくれない？あたしは……そしてあたしの仲間はこんなふざけたイベントを早く終わらせる為に動いてるの」

『イザベラ』を発現し、近寄る稲庭

対し古賀は、同様に自分のスタンド『インヴィジブル・キッド』を自分の前に発現させ、右手を翳し、親指を動かした

稲庭の顔面に、スタンドの左拳が叩き込まれた

「悪いけど、それとこれとは話は別……時期は違えど同じ瀬上君の友達を傷付けるのは心が痛むけど……少し憂さ晴らしに付き合って貰うよ……」

「戦闘準備は万全って事ね……」

ハンカチで鼻血を拭き、立ち上がる

稲庭の心境としては少しばかり複雑だった。彼女のこの暴走のきっかけを作ったのは間違い無く自分だ。いずれは知る真実とはいえ、少しはオブラートに包むべきだった

これは省みないといけないし、悔やんでもいる。だが、黙って憂さ晴らしの相手をされる程自分はお人好しじゃない

「立ち上がるんだ……て事は戦うの?」

「一方的に殴られるとかは真っ平だからね……古賀さんの気持ちは少しは理解出来ると思う。付き合いは短いけどあたしだって瀬上君の友達だからね。だけど、それだけ聞いてこれじゃ沢登君の真意はおっかなくて言えないからね……戦って存分に憂さを晴らしてあげる……いい?」

「別に構わないよ……でも『存分に』やっていいの?あたし加減とか苦手だよ?」

「あたしこころ見えても強いよ？手加減されたら困っちゃうな」

軽く挑発する稲庭。古賀はそれに乗ってくる様子はない。どうやら考えなしに突っ込もうとする程頭に血は昇っていないみたいだ

稲庭は古賀の一挙一動をじっくりと観察する。さっきの攻撃はしているつもりはなかったが、何処か油断していたのだろう。だから、どんな細かい動きも見逃さない。その気概でじっと観ている

古賀は胸ポケットに手を入れ、何かを出そうとした。取り出すのに苦労しているのか、悪戦苦闘している

稲庭の額に衝撃が走る。それが古賀の放った回し蹴りが命中した事による衝撃だと理解したのは、彼女が足を振り切った後だった

（流石にさっきのは油断していたとか、見落としていたとかじゃ説明がつかない……回し蹴りなんて拳動の大きい技、真正面から観察して気付かないというのはおかしい！彼女のスタンドだって本人の前にはいた！）

つまり、彼女は能力を使って攻撃している

先程の彼女の発言からして、彼女には仲間はいない。だから彼女が何等かの能力で攻撃を当てるその瞬間まで自分に知覚出来ないようにしていると考えるのが妥当だと思った

(となると……彼女はさっきまで指を動かしたりポケットに手を入れたりしていたから……もしかしてそれが……)

「隙あり」

自分の頭上から古賀が左拳を降り下ろしてきた。恐らく自分のスタンドで自分を投げ飛ばしたのだろう

振り下ろされる拳は稲庭の頭にヒットする直前に紙一重で避けられたが、稲庭の顔面に、右拳が叩き込まれた。稲庭は後ろへまたも鼻血を出しながら吹っ飛ぶ。スタンドを後ろに発現させて自身を受け止めた

「痛いな……そう何度も顔を殴らないでよ。幾ら決着がついたら傷が治ると言っても変形したらどう責任取るつもりなのよ!」

「傷が治るんなら……責任取らなくてもいいんじゃないの? いや、傷が治るんならどう責任取ればいいのか?」

冷やかに突っ込む古賀

それに構わず、稲庭は古賀に指を差し、高笑いした。古賀は指を差された事で不快感を覚えた

「何がおかしいの？」

「残念ね。貴女の実力の攻略手段をあたしはたった今思い付きました！だから貴女はあたしに勝つ事はもう出来ない！」

「その言い方だとあたしの能力がどういふ能力なのかを理解したみたいだけど……理解したの？」

「うん、完璧、パーフェクト、確実に、100%、絶対に見破ったよ！」

「余計な形容詞をつけなくていいから話してみなよ……貴女の考えを……そして……あたしの能力の攻略法を……」

「それは……今ここで話すと変に長くなる予定なのでまた次回！」

「結局次に回すのね」

インヴィジブル・キッド？（後書き）

スタンド名はメタリカの楽曲から

久々のハイテンション稲庭です。次回の始めの方に古賀の能力を解説します

では、また次回！

インヴィジブル・キッド？（前書き）

嘗ての除夜の友人、古賀と対戦する稲庭

彼女の能力を、真に理解出来たのか？

インヴィジブル・キッド？

「前回の続きです！」

「前回……」

「まず何であたしが貴女の攻撃をかわす事はおろか攻撃を受けるまで繰り出したのを確認出来なかったのか……それは、貴女が攻撃する前に行った拳動にあたしが注目していたから……」

「……………」

さっきまでの様子はなりを潜め、黙って聞いている。稲庭は続ける

「初めは自分の注意力とかが散漫になっていると思ってた……だけど、よく考えてみれば攻撃を行う拳動のが否応にも目につく……超スピード？拳動を終えるまで視認出来なくなる能力？それとも時間に関係している能力？色々考えたけど、結局ピンとくるものは無かった。理由は色々あるけど、それなら、指を動かしたりポケットに手を入れたりする理由は無いからね……カムフラージュかと思っただけど、そんな事して謎めかせるより問答無用で何か考えさせる暇なくポコポコにした方がいい……それなのに何故しているのか？それは能力を使うのに必要だからだ。ならどんな能力か？その動作にあたしを釘付けにさせ、他に意識を向けなくする為だ！」

「……………」

背筋を伸ばし、古賀に指を差す。古賀は黙って聞いている

「そう、つまり貴女の能力は、『行った動作に注目させすぎる能力』
！奇術は大きな動作で観衆の視線をそこに集めて……が肝と聞いた
けど、これは無理矢理視線を向けさせ、離さない……ハマったら気
付くまで抜けない能力だね……どう？正解？不正解？」

古賀は手に耳を当てる。その目は、稲庭に視点を当てていない

「エ？何デスカ？スミマセンワタシ日本語ヨクワツカンナイ」

「図星かい。そして残念だったね……貴女はもうあたしに勝つ事は
出来ない！何故ならあたしのスタンドは貴女みたいなタイプと能力
的に相性がいいからね……『イザベラ』！」

「させるか！『インヴィジブル・キッド』！」

イザベラが何かをする前に、古賀は接近しインヴィジブル・キッド
の拳をイザベラへ振り下ろした

パワーもスピードもイザベラよりインヴィジブル・キッドのが上、
それは攻撃を受けた稲庭がよく分かっている

故に、稲庭はイザベラの特性を用いる事にした

拳が当たる前に、特性である分裂を用い、二十体余りの群体スタンに変えた

(人型に姿が変わってもこの状態は山椒魚のままなんだ)

心境でどうでもいい事を思いながら、スタンドをバラけさせ、一斉に飛びかからせた

「ごめん、あたし蛇とか蛙とかは平気だけど蜥蜴の類は嫌いなもの」

そう言つて『インヴィジブル?キッド』で正面のスタンド数匹を叩き潰した。潰された分のフィードバックで、稲庭は負傷する

因みに蜥蜴は亀や蛇と同じ爬虫類、山椒魚は蛙と同じ両生類で全然違う生き物です

横から何匹も飛びかからせるが、殴ったり蹴ったり、掴んで壁に投げられたりして、次々と潰される。稲庭は全身の皮膚が裂け、血が溢れ出ている。立っていられなくなったのか、床に膝をついた

「よし……これで貴女はまとも動く事も出来なくなつたね……後はあたしが貴女に一撃食らわせればこれでおしまい……充分楽しめたわ。憂さはもう晴れた。これで貴女達から何を聞かされようが事実として受け入れられる気がする……」

「そう……それは良かった……本当に良かった……それと一つ言っ
てあげる。貴女はこれからあたしにとどめを刺す為に攻撃するんだ
よね？」

「うん」

「それは決して当たらない……貴女がこれから行う攻撃は、もう決
してあたしに当たる事はない……そう断言してあげる……」

古賀はイラツとした

相手は大怪我で、最早立ち上がる事は出来ない。対して、自分は怪
我という怪我を負っていない

スタンドは潰した。もう打つ手はない筈

「何をするつもりなの？そんな満身創痍の状態です……」

「じゃあ試してみたら？」

「それは挑発？それとも負け惜しみ？」

「挑発」

即座に、迷いなく、きっぱりと言い切った

それなら乗ってやると言わんばかりに、スタンドの拳を握り締め、振りかぶり、駆け出し、距離を詰める

（やっぱり負け惜しみじゃん。これっぽっちも動く様子はないし…）

まああんな状態で躊躇なく大見得を張っただけでも尊敬出来るな。リタイアしても死ぬ訳でも傷が残る訳でもないらしいから何処殴っても変わらないから顔を殴るつもりだったけど敬意を表してお腹に渾身の一撃にしてあげる

そう心中で思いながら、腕のリーチが届く距離まで接近すると、稲庭に向けて拳を振るった

勝った

古賀はその瞬間、確信をもってそう思った

だから、予想外だった

『自分の放った拳が、稲庭の体をすり抜けた』のは

「！」

拳を振り切った勢いで数歩前に足を進めた時、『見えない何か』に躓いて、転倒した

「え？何ですり抜けるの？てもういない？何で？何処に行ったの？」

上手くいった

立ち上がって訳の分からなさそうに首を動かして自分を捜す古賀の後ろほんの一メートル足らずの地点に、這いずっている稲庭が、古賀の後頭部を見上げながら、そう思った

古賀の後頭部からは、先程分裂させた細かな『イザベラ』二体の尻尾がプランと垂れていた。こめかみに、左右一匹ずつ張り付いているのだ

『イザベラ』を分裂され、向かわせた時、二匹だけこっさり古賀の後ろに回し、他のイザベラを潰している最中に素早く足から登らせた。他の事に集中している時、特に体を動かしている最中に、こんな小さな感触は脳に伝わらない

そして自分の姿を『目から拭き取り続け』、攻撃を仕掛けてきた時、拭き取っていた自分の姿の最初の方を絞り出す。複数体で一能力の群生型と違って元は一体のスタンドだ。拭き取ったものの伝達は可能だ

「あたしはここだよ」

気力を振り絞って何とか立ち上がり、古賀を羽交い締めにしたのと同時に、スタンドを一匹自分に引っ込める

「ハハハ……これで貴女の勝ちはもうない……」

「何言ってるの？貴女は满身創痕で今にも気絶しそう。多分あたしの首を掴むので精一杯なんじゃない？」

「そうだよ……このままカッコ良くスープレックスをかけて決めようと思ったけど、どうやらこれじゃ踏ん張る事も出来ないや。実に残念」

「へへへ……と笑う

「いや、それ女の子の発想？」

「踏ん張る事は出来ないけどさ……体重をかけて転ばせる事は出来るよ……こんな風にね」

体重をかけて古賀の体を転ばせる

そして、頭を上げた

「そして……上げた頭をトンカチみたいに振り下ろす事も、まだ出

来るよ」

「へ？」

バランスを取り直すとか、受け身とかという考えは、思い立った瞬間に残っている一匹に拭き取らせているので、実行が出来ない

古賀は為す術もないまま顔面から床に体を叩き付け、同時に降り下ろされていた稲庭の額が、後頭部に叩き込まれた

前後から叩き込まれた衝撃で、古賀は漫画みたいに目をぐるぐる回して伸びた。同様に、稲庭も目を回している。衝撃に耐えられなかったらしい

同時に気を失った為か、二人同時に『退場』となった

インヴィジブル・キッド？（後書き）

どうにか決着をつける事が出来ました

今回起こった現象は、説明した通り二人同時に退場する条件を満たしてしまっただからです。ちょっとふと思いついてやってみました

次回は別の人に視点を当てます。次は誰なのでしょう？

壁に当たったら破るっ!?(前書き)

スタンド使いの混じったイベントを終わらせる為、奔走する除夜達。
次は？

壁に当たったら破るっ!?

稲庭と古賀との戦いが終息したその頃、イベント参加者とは別に作られた空間

その空間に唯一存在する、ホテル黒兎の経営者にして『コロシアム』の本体である喜好正午は、もぐら叩きゲームをやりながら顔の前に浮かぶ画面に映った数字を見て、至上の喜びを実感したかのような笑みを浮かべていた。浮かんでいる数字は、現在113。つまり、現時点での残りの参加者はその数となる

現在、この数字の変化は当初と比較して落ち着いてきている。戦いを勝ち抜いた事で、戦いを目の当たりにしてきた事により、生き残った参加者は皆が皆より慎重に動いているのだろう

ここに行くのは思ったより早い。正直もう少し数を減らしてからだと思っていた

「まあそれは参加者の気持ちだな。俺は企画を立案し、開催しただけで展開は参加者がどう動くかで決まるからな」

そうせざるを得ない状況下で、その状況下を自分が作ったとはいえ、自分の企画したイベントを真剣に取り組んでくれる人達がいるというのは、非常に嬉しい

客にエンターテイメントを提供し、思い出を作ってくれる事を至上の喜びとしている彼には、客が楽しんでくれている、真剣に参加し

ているという事は、両手を挙げて飛び上がりたいまでにハッピーな事なのだ

「さあて……存分に楽しんで下さいよお客様方、このイベントはただ中盤に差し掛かったばかりですからね……」

五階エリア

その廊下の天井に張り付いているのは、スタンド『スパイダー？バレエ』

吐き出した糸は、途中で二つに分かれており、それには本体である鵲三ツ葉と、知人である白帯咲良がくっ付いてぶら下がっていた

この二人はスタンドの性能や能力が戦闘向きじゃないので、他のメンバーと異なり、他の参加者とは数がある程度減るまで出来る限りやり過ごすという結論に出た。そこで取った手段というのが、これだった

『スパイダー・バレエ』自体のパワーは低いが、糸で物を吊り上げる場合はかなりの重量の物を吊り上げ、移動する事が出来る。中学生二人を吊り上げて動き回る事など造作もない

この作戦は当たった。どれだけ用心深い人でも、廊下の幅が広いこういった空間で、天井に人がつり上がっているとは普通考えない。勿論一ヶ所に留まらず絶えず移動しているので、気配や視線に気付いた人物が天井を見上げる事もあるが、その時は既に視界に入っ

ないのでバレる事は無かった。人数が数える程にまでなった頃合に、降りて参加するという算段は、この調子だと成功しそうだ

そう思っていた

「これで八人目……」

二十歳前後の、肩まで伸ばした金髪の上に紺色のキャップを被った、耳に赤と青のピアスをつけ、ジツパー式の牛革のコートにゼムクリップのような肩当てと肘当てをした男が、自分が倒した参加者を見下ろしていた

こてんぱんにしてやったにも関わらず、ギリギリで気絶していない。よってまだ『退場』していない

とどめに、男はその参加者の顔に一撃入れた。参加者はそれで気絶し、漸く『退場』した

「っーか……やっぱり気になるな……この視線」

男は天井を見上げる

男は、自分達を見下ろす視線に気付いていた。気のせいとかではな

く、自分達は見下ろされている。そんな視線を、確かに感じ取っていた。そして今でも感じ取っている

どうやって天井にいるのかは知らないが、これだけのアドバンテージを有しているにも関わらず、自分を初めとする参加者に何かしている訳でも、何かをしようとしている訳でもないので放置していたが、やはり落ち着かない。当然だ。気にしないよう気にしないようしているが、得体の知れない何かが自分達を見下ろしているのだ。警戒感を向けない方がおかしい

「このイベントの優勝を虎視眈々と狙っているから今は動いてないのか攻撃に移れないのかそれとも只のアホなのか……その確認だけでもしないと落ち着かん……」

もしかしたら、俺と同じ『能力』を持つ者かも知れないしな

と言って、立ち上がって直立不動する

「『ベルリン』!」

そう叫んだ直後、彼の後ろに、グレイを基調とした、額に鎖を、太い有刺鉄線を体に巻いている口が耳まで裂けた人型のスタンドが出現した

そのスタンドは両手で拳を握り、床にそれを叩き込んだ

すると、前の床の一部が盛り上がり、『壁』が飛び出た。その壁は勢い余って床から飛び、天井にぶつかつた

「うわっ！」

「きゃっ！」

直後、後ろから声がした。振り向くと、下半身が蜘蛛のようになっているスタンドが横たわり、そのスタンドから伸びている糸は、背中を打ち付けて痛そうな表情をしている中学生程の少年と、その腹の上に乗っている少年と同年代と思われし少女に途中で分かれてくっ付いていた

男にとって意外だった。自分にこの『能力』を授けてくれた男からこの『能力』に関しての知識は与えられてはいるが、まさかこんな子供とは思わなかつた

（スタンドは一人一能力だからこのスタンドは二人の内のどちらかので、もう一方もスタンド使いなんだろうな……）

後ろに『ベルリン』を出したまま、二人との距離を縮めた

「咲良君……」

「勿論分かってるよ」

咲良と鵠は、自分達を落として自分達へ近付いてくる男の背後に立っているスタンドを凝視していた

参加者の中に自分達以外のスタンド使いが紛れ込んでいる可能性は、二人共きちんと考慮に入れていた。そして自分達と遭遇する事が最悪の事態というのはちゃんと理解していた

二人のスタンドはどちらかと言えばサポート向けで、相手との相性にもよるが前線で戦えるようなタイプじゃない。ましてや今回は除夜達は別の場所というより別の世界にいて、助けを呼ぶ事も出来ない。遭遇した以上自分達でどうにかするしかないのだ

咲良は鵠の前に立って『フィッシュボーン』を出し、自分の前に動かす。それと二人の目を見て男は期待に満ちた目を二人に向けた

「いい目だ……楽しみだよ……お前等がどんな手段で俺に立ち向かい、俺をどう倒すのかを！」

男は駆け出して二人との距離を詰め、強く握ったスタンドの拳を咲良の顔面目掛けて打ち出す

フィッシュボーンの白い翼で、その攻撃を『受け止めた』

「防御のスタンドか……俺の『ベルリン』の拳を受け止められるとはな……」

「誉められた事は素直に嬉しいな……この「白い翼」は物理攻撃であれば受け止める事が出来る……」

「成程……それなら……これならどうだ？」

『ベルリン』のラッシュが、『フィッシュボーン』を襲う。咲良は臆せずスタンドを操り、翼を上手く操作して一発残らず正確に受け止めていた

「中々やるな……お前さんよ」

「経験は少ないながらも僕も同じ能力を持った人と何度か戦った事がある……」

「成程……それなら……」

両手を握って拳を作り、それを頭上に上げる

どんな攻撃をするつもりなのかは言われなくとも、聞かれなくとも分かる。振り下ろす気だ

咲良に行動を起こす暇を与えず、思いつ切り振り下ろされた

「！」

「ギリギリセーフ……」

『フィッシュボーン』の白い翼によって、その攻撃は受け止められていた

「あなたは一つ勘違いをしている……それは、僕の『フィッシュボーン』は防御のスタンドじゃない……そうかも知れないけど、正確には『受け止めてそのまま返す』スタンドなんだ……」

翼が動こうとしている

逃げようと足を動かすが、足が宙を蹴っついていてこれでは進めない。見上げると、自分の真上に鵜のスタンドがいて、そのスタンドの糸が、男の体をつり上げていた。文字通り地に足が着いていないのだ。これでは動ける筈がない。スタンドもギリギリで射程距離外だ

ジタバタしている足を白い翼が受け止め、優しく押し出す

それを何度も、徐々に強めながら押す

「充分だ……三ツ葉ちゃん、糸を切つて！」

「了解！」

翼に男の体が触れると同時につり上げていた糸を切り、そして、翼が勢い良く開き、男の体を飛ばした

壁に当たったら破るっ!?(後書き)

スタンド名はアメリカ出身のバンドから。能力にこれ以上合っている名前もそうないし

まだ続きます。宜しくお願いします

壁に当たったら破ろう!?(前書き)

咲良と鵠は敵を倒せるか?

『ベルリン』戦決着!

壁に当たったら破るっ!?

飛ばされた男は、激突する直前にスタンド『ベルリン』を後ろに発現させ、自分自身を受け止めさせる事でダメージを防いだ

「やるな……」

男はそういうと、スタンドは手を堅く握り締め、床を叩く

すると、床や天井から、レンガ四つ分程の壁が押し出された。それも次々と、どこかしこから

「うわっ」とと!」

自分の足下から次々と出て来る。しかも出る時のエネルギーが凄いのか、足下から壁が押し出される度に多少の痛みを感じる。まるで大きなノック式ボールペンを縦に並べ、その上に敷かれたシートの上を歩き回っているみたいだ。当然こんな経験は二人共無いが……

「『スパイダー・バレエ』! あたしと咲良君を……」

鵠の命令を聞き、二人の真上に向かっていている途中で『スパイダー・バレエ』の足下が同時に二ヶ所盛り上がり、バランスを崩して落下

した

すかさず男は床を強く叩く。すると、落下する『スパイダー・バレエ』の真下から、巨大な壁がスパイダー・バレエを押し潰そうと飛び出した

「『フィットシュボーン』！」

『フィットシュボーン』が迫り出す壁と『スパイダー・バレエ』の間に入り、壁を翼で受け止め、押し返した。壁は床に戻され、嵌ると同時にエリアが揺れた

「思い通りにいかないな……」

「世の中思い通りにいかない事ばかりじゃないの？」

「ああそうだな……だが……だからこそ楽しい。だからこそワクワクするんだよ……俺は今、お前等を相手にして物凄く楽しい！」

手を掲げ、澁刺とした声で、男は言う。その表情は、確かに心から楽しそうだった

「思い通りにいかないのは障害があるから……そしてその障害を壊す事で、つまりお前等を倒す事で俺は己を克服した事を実感する！」

『ベルリン』は床を叩く。すると、床から出た壁が戻り、嵌った後は壁の出ていた痕跡も消えた

「敬意を表して俺の名前を言おう！俺の名は東郷陶治^{トウキョウ トウジ}25歳！この春日部に生まれ育ち、三ヶ月程前に『矢』に射られた者だ！」

『ベルリン』は右拳を握り締める。左手は本体の東郷を持ち上げ、壁に向けて投げ飛ばした。東郷と床との距離は、正にスレスレで、床に接触するかしないかだ

足の裏に壁が当たると同時、『ベルリン』はその壁を殴る。東郷が足を跳躍の為に延ばすと同時、足元から壁が勢い良く飛び出る。反発力の加わった跳躍により、東郷の体はかなりの速度で二人に迫る

「三ツ葉ちゃん！僕の後ろに！」

咲良は鵲の手を引っ張って自分の後ろにやる。咲良の立っているのは、飛んでくる東郷の軌道上だ

咲良は自分と東郷の間に『フィッシュボーン』を配置し、白い翼の片翼を前に向ける

「どうだ！このスピードで返されたら、流石のパワー型のスタンド

使いでもただじゃ済まないだろ！」

「うわああああ……なんちゃって」

両拳を握り、床に叩き込む。すると、『フィッシュボーン』と東郷の間、やや『フィッシュボーン』寄りの位置に、壁が出て来た

東郷はその壁に手をつけ、運動を止める。その際壁の根元から音がした。着地すると同時に下を確認すると、現在進行形で亀裂が走っていた

亀裂は段々と大きくなり、遂に倒れた。無論咲良達の方へ

「まあこれは偶然だが……これで俺の勝ちだ！まあ下敷きにはなってもすぐに治るから……」

壁の運動が、途中で止まる。自分に（というか天井に）向いている壁の面、その上の方に一本の『糸』が引っ付いていた。辿ると案の定、鵠のスタンド『スパイダー・バレエ』がいた

『スパイダー・バレエ』はそのまま壁を吊り上げる。それにより遮る物が無くなり、両者の姿がよく見えた

『スパイダー・バレエ』はそのまま壁を東郷の頭上まで持っていく、糸を切った。壁は落下する

『ベルリン』が拳を振り上げ、壁を瓦礫へと変えた

「やっぱりこの程度の策は通じないね」

「そうだね……？」

先程壁を出して、残った根元が引っ込んだ床の一部分は、破壊された分の体積の穴が開いてあった

「あれ？」

咲良は、今までを思い出していた。うん確かに。それなら納得出来る
となれば――

何かを思い付き、鵲に耳打ちする

「三ツ葉ちゃん」

「何？咲良君」

「お願いがあるんだけどさ――出来る？」

「出来ない事は無いけど……どうして？」

「考えが間違っただけなら……これであいつを倒せるのかも知れな

い

「何を言っているんだい？君達はよ……」

東郷の後ろに立つ『ベルリン』は、床に拳を次々と叩き込んだ

それにより、小さな壁がまた床から次々と出て来た

同時、二人は悪くなる足場を駆け出し

「はいはいはいはいはいはいはいはいはいはい」

「はいはいはいはいはいはいはいはいはいはい」

腰を曲げて、床から出て来る壁を片っ端から『抜き始めた』。二人の手が届かない範囲は、『スパイダー・バレエ』が吊り上げて抜いている

『壁が飛び出した所から穴が空いている』のを、『壁が押し戻った時壁の出た痕跡が消えた』のを思い出し、咲良は『ベルリン』の能力に気付いたのだ

『ベルリン』は『壁を作る能力』でなく、『物体を壁の形に押し上げる能力』だという事に

(押し戻せば元に戻る理屈は分からないけど……少なくとも引き抜けば奴の能力は相当限定される……)

させじと東郷は自分に近い鵲へと接近する。上手い具合に比較的足場が安定している場所を跳びながら

そして鵲の至近距離に接近した所で、東郷は拳を振り下ろした

「させないよ」

その拳は、『フィッシュボーン』の白い翼で受け止められた。そして翼は東郷が次の動作を起こす前に広がる

『フィッシュボーン』の能力により拳は押し返され、東郷の体はその勢いで後ろに仰け反る

同時、東郷の体に、糸が張り付く。そしてそのまま吊り上げられる吊り上げている『スパイダー・バレエ』は、首を動かす。東郷の体はゆらゆらと揺れ動いた。その体を、先程同様白い翼で押した

(さっきやったのと同じ攻撃をするつもりか?)

途中で糸が切れ、『フィッシュボーン』は東郷を床に向けて

『極めて優しく』押した。それと同時に、フィッシュボーンは消えた

「？」

疑問に思わない訳はない。この速度だと運動音痴の人間でも普通に着地出来る。着地の際の心配事項は床に無造作に空いた壁を抜いた穴だが、『スタンド使い』である自分にとっては無用だ

何で、こうする？

そう考えている内に、東郷の足は着いた

『フィッシュボーン』の白い翼に

同時に、翼は広がり、東郷は転倒――

する前に、『スパイダー・バレエ』の途中で分かれた糸が両腕に引っ付き、ぶら下がる

そして聞こえる二人分の足音。それが白帯咲良と鵲三ツ葉のものだ。というのに天才的な推理力が必要としない

顔をひきつらせる。近付いてくるその二人の両手には、自分が出して二人が引き抜いた、『小さな壁』だった

「悪いけど、気絶するまで我慢してね？」

「大丈夫だよ？どれだけ大怪我を負おうとリタイヤしたらこっちで負った傷は治るんだからね？」

笑顔を浮かべて、二人は両腕を振り被った

少しの間、五階エリアの一角に鈍器で殴打する音を、このエリアに振り分けられた参加者の耳に入った

壁に当たったら破るっ!?(後書き)

ようやくと更新出来ました

.....まあ、勝てばいいという事で。はい

もう少しこのイベントは続くのでこれからも宜しくお願いします

それと今年も宜しくお願いします

クラシック・ケース？（前書き）

強敵を倒し、快調に参加者を倒していく野原一家＋
のだが、一つの壁を乗り越えても、別の壁が待ち構えて……？

クラシック・ケース？

「食らえ！靴下スタンプ！」

ひろしは襲い掛かる参加者に、片方脱いだ靴下を顔面に押し付ける。しんのすけ達は鼻を摘んでなるだけ臭いを吸わないようにしている

「ぐおお！臭え！」

嗅覚が健全な者なら、ひろしの靴下の臭いを、直に、0距離から臭って無事でいられる人間など考えられない。その参加者は靴下のあまりの臭いにむせた

「げぶおっ！ごぼっ！がぼっ！」

「隙有りい！」

「ぐああ！」

尋常でない臭いを嗅いで苦しんでいる所に、みさえはラリアットを食らわせた！参加者の体は吹き飛び、『退場』した

「凄いぞ父ちゃん母ちゃん！」

「あたぼつよ！伊達にサラリーマンで営業やってんじゃねえからな
！」

「当然よ！酔狂で専業主婦をしてないわ！」

（専業主婦とラリアットはどんな関係があるの？）

みさえの言葉に、庚は疑問に思った

「よし、次の参加者を潰すぞ！」

「あついたわよあそこに！」

みさえが指差した赤い車の陰から、女の参加者が姿を現した

『！』

同時、野原一家と庚が目を見開く

その女は、長さがメートル近くはあるであろう細長く、両側が鋭く尖った『針』が、背中や足に何本も刺さっていた

こんな明らかな異常な事態に、全員がその女に駆け寄る

「おねいさん何があったの？」

勿論しんのすけや庚は分かっている。これは『スタンド攻撃』だ

こんな物が駐車場に置いてある筈がないし、こんな物をホテルに持っていくなんて考えられない

だからこの質問は、「『どんな奴が』『どんな方法で』」という意味合いでの質問だ。重複するが参加者は経営者のスタンド能力の影響でスタンド使い、非スタンド使い問わずスタンドの像が見える。だから、上手くいけばどんな能力なのかそのヒントが掴める筈なのだ

「あいつは……」

弱々しく口を動かす

「あいつは……妙な形の……」

重要な所を喋ろうとする

だが、喋る事は構わなかった。腹部に、同じ針が腹部に刺さったからだ

針が舗装を突き刺さると同時、女は『退場』した

「ふー……中々タフで逃げ足も速くて隠れるのも上手で随分手こずらせてくれたけど……随分楽しめたしまあいいか」

声と足音のした方向に、全員体を向ける

綺麗な銀髪に赤と黒と緑の三色に三分割された円が胸部に印された黒いレザージャケット、そして迷彩柄の、ポケットの部分に鈴がつけられたジーンズを通した、藤方より少しばかり年上らしい少年が現れた

「あんた達も参加者……だよな？ここにいてるって事は……」

野原一家と庚に尋ねる。五人とも頷く

「貴方……『スタンド使い』……よね？」

今度は恐る恐る庚が尋ねる

「『スタンド』？」

その質問に、少年は首を傾げる。その様子に演技や嘘は混ざってない
なら少し質問を変える

「貴方……ここ数ヶ月以内に何者かに『矢』に刺された？何か古臭い……石の鏃の矢に……」

「よく知ってるな。そうだよ。四ヶ月ちよつと前に下校途中沢登って人に刺されて……もしかしてあんた達もか？」

それなら……と言って右手から『拳銃』を出現させる

琥珀色でグリップに緑色の宝石が埋まっている、銃身が二つ重なっており、引き金も同じ様に重なるように配置されている、拳銃と呼ぶには大きな銃だ

それを見て、全員がそれが『どんなスタンド』なのかを理解した

「何かを撃ち出すスタンド……」

「御名答……まあ一目瞭然だがな……」

グリップから弾倉を出し、それにポケットから取り出した鉛の錘やネジ、釘を入れ、嵌め込んだ

そして宝石を二回触れる。宝石の色は、水色になった

拳銃をしんのすけに向ける。しんのすけは『ハリケーン』を出す
同時、引き金にかけられた指に力が込められる。下の銃口から、直
径十センチ程の砲弾が発射された！

『おっと！』

『ハリケーン』は砲弾をキャッチするも、後方の射程距離まで後ろ
に吹き飛び、最終的に手離して、後方の車に激突。車は爆発した

しんのすけの手は、フィードバックにより掌の皮膚が擦れて筋肉が
露出していた

「車とこれだけで……十分その威力を物語ってるな……」

「ちよつと待つてよ！あんなの直撃したら骨折じゃ済まないわよ！
頭とかだつたら即死よ！」

「弾倉に入れた物を、形を変えて発射する能力……そしてその変形
は、質量保存の法則を無視している……」

庚は少年の持つ『銃のスタンドの能力』を解析する

『質量保存の法則を無視している』というのには根拠がある。あの
砲弾は明らかに中は空洞じゃない。そして弾倉に込められた鉄クズ

全部合わせたとしても、あんな砲弾を作れる訳がない

(それに新しく込める様子が見られない事から、鉄クズ一つで一発の弾丸が創られると考えていい……それに威力も高い……)

どう考えても早めに倒すに越した事はない

目の前の銃のスタンドを構える少年を前にして、五人はこう思った

「鳥取開とっとりかい……これが我の名前だよ……この銃の名前は『クラシック・ケース』……このグリップに埋め込まれた宝石の『色』それぞれに撃ち出す『弾丸の形』がある……」

「色？」

「こんな風にね」

鳥取は宝石に触れる。すると、宝石は『緑色』に戻り、横にある車に向けて発砲。その弾丸は、細長い『針』だった

針は車を貫き、爆発した

「とまあこんな風に……」

宝石の色を水色に変え、構える。銃口の先には、しんのすけがいたそれを視認したひろしとみさえが、しんのすけの前に立ち塞がった

「何の真似で？」

「見て分からないのか！親が子供を守ろうとしているんだ！」

「私達はあんたみたいな力なんか持ってないけどね・・・」

みさえが喋りきる前に、発砲。発射された砲弾はみさえの腹部に命中

する前に、ダイヤモンドと化した車が、二人の間に突っ込む。車は一部が砕け、砲弾も地面に落ちて転がる

「ひま！」

しんのすけは大声をあげて、車の飛んできた方向に顔を向ける。つられて、全員が同じ方向に顔を向ける

そこに、ダイヤモンドにした車のドアを楯とした庚と、その庚の胸元にしっかりとしがみついているひまわりが、そしてその後ろには、ダイヤモンド化させた軽自動車を持ち上げた、『プレシヤス・エンジェル』がいた

「たいや！」

ひまわりが叫ぶと、『プレシヤス・エンジェル』は軽自動車を鳥取に向けて投擲する。鳥取はバックして回避した

「フン」

投げ飛ばされた軽自動車の上に乗る、二人に向けて針を次々と撃ち込む。庚はひまわりを抱き込んで当たらないようしゃがみ込む

連発では精度が落ちるのか、今の所せいぜい掠る程度で刺さってない。針が飛んでこなくなるまで動くまい。庚はそう堅く思う

「ちっ……」

鳥取の舌打ちが聞こえる。針が飛んでこなくなった事実を確認したのは、その直後だった

見ると、鳥取は『クラシック・ケース』の弾倉を取り出し、それに鉄クズを込めている途中だった

（チャンスだ！）

庚はひまわりを下ろし、鳥取に向かって走り出す。その背後に、『フレディース・デッド』を発現させて

攻撃力は脅威だが発射する前に潰せば恐くはない

（この距離なら発砲に移るまでに『フレディース・デッド』の射程距離に到達する！射程距離に入ったと同時に、縫いぐるみにする！これ……）

「『勝った』？」

鳥取は庚に『クラシック・ケース』の銃口を向けていた。弾倉は片方の手に持たれている

だから砲弾も針も発射される事はないと、『高を括ってしまった』

引き金が引かれ、銃声が響く

庚の腹部に、砲弾がめり込んでいた

クラシック・ケース？（後書き）

野原一家対スタンド使い二回目です

スタンド名はアメリカのエモバンドから

まだ続きます

クラシック・ケース？（前書き）

銃のスタンドを操るスタンド使いを相手に、野原一家は大苦戦！

クラシック・ケース？

「残念だったね……この『クラシック・ケース』はオートマチック……発射すると弾倉から弾丸が一発銃身へ装填される……発射した弾の数を覚えてさえいれば一発残しておくなんか訳ない事さ……」

「う……う……」

うつ伏せになりながら苦しそうに鳥取を見上げる庚

そんな庚を意に介さず、鳥取は弾倉に鉄クズを込める。その作業を終えると弾倉を銃に込めた

「たーたー！」

「大丈夫だよひまわりちゃん……こんなの大した事な……」

無理して立ち上がるうとした所に、庚の頭に砲弾が当たった。これがとどめとなり、庚は気絶、『退場』した

鳥取がスタンドの銃口を、庚のいた場所に向けていた

「心配しなくていいんじゃない？あの人の説明だと脱落者も負傷は治るみたいだし……だからあんた達一家も……同じ所に送ってやるよ……」

グリップの宝石に触れ、その色を緑色にする。最初に銃口に向けたのは、ひろしだった

「まず一家の大黒柱から切り倒すのが……礼儀だよな！」

「来るか！こう見えても俺は、学生時代卓球をやってたんだぞ！」

「それが？」

ひろしに向けて針を発射する。それも単発ではない。連射だ

「危ない！父ちゃん！」

しんのすけは『ハリケーン』を身に纏い、ひろしの前に立つ。そして、針を全て横から叩く事で弾いた

そして、鳥取に向かって駆け出し、空高く跳躍。そのまま跳び蹴りの姿勢を取った

『ハリケーン装着型』の必殺技！

「『ワイルドボアライダーキック』！」

「…………で？」

グリップの宝石を触る。宝石の色は、『黄色』となった

それをしんのすけに向けて発砲。銃口からは、二メートル近くある、上半身がゴツい鉄の人形が発射された

しんのすけの必殺のキックは人形の頭部に命中。大きな音がエリアに響いた

しんのすけは地面に着地し、人形は地面に落下する。キックが命中した頭は、足の形に凹んでいた。それを見て鳥取は、冷や汗を一筋垂らした

（あんなのマトモに食らったら最悪死ぬな…………普通で入院だ…………）

「足が痛い…………」

（まあ…………あの様子だとあのキックは今ももう出来ないみたいだけど…………）

本気で足を抑えているしんのすけを見て、安心する

（まあこれ以上あれが来ないのは安心した…………あれは『取って置き』で一発で弾倉と銃身にある『弾丸』を全て消費してしまうから…………）

弾倉を取り出して鉄クズを込める。その作業が終わると、グリップに込める

「これから『本気』で、『全力』で行かせてもらう」

鳥取のこの言葉に、野原一家は戦慄した

「誤解しないでくれないか？今までも、さっきまで倒した参加者達に対しても『真面目にやっていたし』、『本気でやっていた』……『全力でも戦っていたよ』……ただ」

一呼吸おいて、続ける

「この『クラシック・ケース』の全ての能力は……実は使っていないんだよ……」

「え？あなたのスタンドの能力って、鉄クズを変形させて発射するんじゃないの？」

「うん……そうだよ。それは間違っていない……だが、それが全貌だとは誰も言っていない……乱用出来るけどそうしたらつまらないし外したら少し手間がかかるからあんまり使いたくはないんだ……」

そう言った直後に、しんのすけに向けて銃口を向ける

「させるかあ！」

自分の靴を放り投げるひろし。鳥取はそれを首を動かして避ける

「うおりゃあああ！」

みさえは車の上によじ登り、鳥取に向かってジャンプ。そのまま尻を突き出す！

鳥取はスライディングして回避する。みさえの尻が地面に激突すると、凄い音がした

……みさえの尻を中心に、舗装に罅が入った

二人が次の行動を起こす前に、急いで銃をしんのすけに向け、指を上への引き金に掛け、引く。今まで下の銃口から発射されていたが、今度は上の銃口から発射された

発射されたのは今までの金属の何かではなく、パチンコ玉程の大きさの、紫色の玉だった

「『ハリケーン』！」

近距離パワー型に戻し、それを右手で弾こうとする

それは、右手の甲に触れた瞬間、風船の破裂する音がして、紫色の液体が飛び散った

そして――

「ねえハリケーン」

『何だ？』

「……何か……異常ある？」

『いや……別に、何も……』

「そうだよー、大体お前に何かあったら本体のオラにも何かある筈だしー……」

そして、『何も起きなかった』

正確には、手の甲に付着した液体が糊のように固まり、それが剥がれないだけだが、『別に何ともなかった』。これが、あのスタンドの使わなかった機能とやらなのだろうか

不思議に思っていると、鳥取は笑った

『何がおかしいのだ？』

「いや、何がって……これに当たってくれた事にだよ……防ごうとするんじゃないかって普通にかわせば良かったのに……」

笑顔のまま、宝石の色を水色にした

そして、銃口を上空へと向ける

「教えてやるよ……さっき言った言葉の意味を！」

引き金を引き、発砲した

「分かったでしょ？さっき言った言葉の意味が……」

「しんのすけ！」

鳥取は、血だらけになった右手首を左手で抑え、痛みを堪えていたしんのすけの傍にいるハリケーンは右手の皮膚が裂けて血で真っ赤に染まり、指も曲がってはならない方向に曲がっている

その近くには、鉄の砲弾がコロコロと転がっていた

「さっきのペイント弾は発射した弾丸を威力をそのままに当たった所に転移させる……ペイント弾はちよつとしたシヨックで簡単に割れる……この弾は連射出来ないから外したら少し面倒なんだよね……」

強味と言える強味はせいぜい弾の残りを考えなくていい点くらいだし……と続ける

しんのすけは痛がりながら『ハリケーン』の右手を見る。付着していた液体は、既に消えていた

「それじゃガンガン行くよ……好きなだけ足掻いてね。そうしないと盛り上がらないから……」

巨大な針が次々と撃ち出される。ひろしはしんのすけを、みさえはひまわりをしつかりと抱え、この攻撃を避ける

弾丸切れを狙っているのだろうか？弾丸が無くなったのを期に、同時に攻撃を仕掛けてくるつもりなのだろうか？

「それじゃ素早く……！」

後ろから殺気を感じる。鳥取は振り返った

そこには、細い体に刀を持った、猪のスタンドが直立していた。『ハリケーン遠隔操作型』だ

ハリケーンは左手で刀を持ち、振り上げる。鳥取はそれを余裕でかわした

『クラシック・ケース』を向けるが、発射する間もないまでの猛攻を繰り返され、避けるのがやっとだった。服が何ヶ所か裂け、間に見える皮膚からはうっすらと血が滲み出る

『とう！』

足元に向けて刀を振るう。鳥取は後ろに跳んでおり、切っ先は舗装の表面を軽く削った

距離を離れた鳥取は、その隙にしんのすけにペイント弾を撃つ。ペイント弾は右肩に命中。更に砲弾を放とうとするも

「ウチの子にこれ以上傷付けるんじゃないわよお！」

「ゲブツ！」

引き金を引く前にみさえのリアットを後ろから喰らう。鳥取の体は、呆気なく吹っ飛び、前方の車を数台飛び越え、軽自動車のボン

ネットに激突した

「あなた！」

「おう！」

しんのすけに『ある事』をした後、鳥取の飛んでいった方向にひろしが向かう。ひまわりをしんのすけの横においてじっとしているよう言い聞かせ、ひろしの後を追った

背中を思いつ切り打ち付けた鳥取は、ゆっくりと立ち上がる

「痛ててて……何て馬鹿力だよ……あのオバサンは……」

「君結構タフだな……みさえの攻撃を受け、車にぶつかりながらも動けるとは……」

「くっ……」

鳥取の前に、ひろしとみさえが立つ。ひろしは両手に凶器である靴を手に持っていた

みさえは、鳥取にビシッと指を差す

「言つとくけどね……私は『おばさん』じゃないわよ！『お姉さん』よー！」

「欺瞞の極致だ」

鳥取は失礼過ぎるツッコミを入れる

そして、二人に『クラシック・ケース』の銃口を向けた

「大丈夫だ……」

ひろしは言う

奴の説明だとペイント弾を撃つた後は、少なくとも一発はペイント弾の当たった所に弾丸は転移するという。つまり、最低でも一発はどうにかなるという事だ

当たったしんのすけにも、しんのすけ自身に弾丸が当たらないようにした。だからしんのすけは安心だ

「いいかみさえ。俺達があいつを倒すんだ。あいつを倒して、しんのすけの怪我を治すんだ。たとえ俺達が敵わない相手だろうと、子供を守らないといけない義務が親にはあるんだからな」

「言われるまでもないわ」

決意を固めた目で、顔で、声で応える

そして、分かれて別の方向から駆け出した

「無駄だ」

鳥取はみさえに向けて銃口を向け、引き金を引く

次に起こった現象に、二人は目を見開く

下の銃口から、針が「発射されたのだ」。この攻撃を、みさえはギリギリ横に移動してかわす

(どういう事だ？あの弾を撃ったその後の弾丸はあの弾の着弾地点じゃないのか？それとも、既に撃った後なのか？いや、それなら音は……)

「あなた！」

「！」

考え込んでいるひろしに針が飛んでくる。動くが間に合わず、左腕の手首近くの肉が抉れた

クラシック・ケース？（後書き）

藤方「こんばんは！突然やけど重大発表があるで！」

勝海「150話突破を記念し、『スタンド人気投票』をする事になりました！」

藤方「ルールは以下の通りやで」

？今話（151話）までに出て来たスタンド

？お一人につき最大十体

？多重投票不可

藤方「この3つを守って投票してや」

勝海「出来たらそのスタンドを選んだ理由や更新した話の感想も書いてくれたら嬉しいです」

藤方「人気投票と銘打つとるけど何も『好きなスタンド』を選べとは言つとらん……おっかないとか、敵に回しとうないとか、印象に残ったスタンドなら何でもオーケー！」

勝海「なお、言われるまでもないと思われませんがこの小説オリジナルのスタンドに限ります」

藤方「ぎょーさん応募してーやー」

勝海「締切は二月十四日までです。結果は集計を終え次第活動報告で公表します」

という訳で、皆さん是非とも御参加下さい

除夜「……何で前回これ発表しなかったんだ？」

琢磨「前話を更新した後思い立ったらしいですよ……」

クラシック・ケース？（前書き）

ひろしとみさえは、子供を守る為、スタンド使いに立ち向かう！果たして勝つ事が出来るか？

鳥取戦決着！

クラシック・ケース？

粉々になった手首を押さえながら、音のする方向へと体を向ける上半身裸のしんのすけ。脱いだ上着は後ろの車のワイパーに挟んで固定している

その横には、ひまわりと『ハリケーン』が座り込んでいた

「ひま、ハリケーン」

「た？」

『どうした？何時ものおバカで下品下劣で元気しか取り柄のないお前らしくもない意気消沈した声を出すな』

……何でコイツは本体のオラに対して悪口を平気で言えるんだろう

そう心中で思いながら、言った

「父ちゃんと母ちゃん……あいつに勝てるのかなあ？」

言わんとする事は分かる。ひろしは頭が回るし、みさえも主婦にあるまじき腕っ節の強さを誇る。並の人間なら、武器を持っていた所で相手にならないだろう

だが、今回対峙している敵は『スタンド使い』、摩訶不思議なスキルを持つ能力者だ。並の人間ではない

用意された特殊なステージの中の為非スタンド使いでもスタンドが視認出来、先程までの自分達との戦闘で能力はほぼ判明しているとはいえ、簡単に勝てるとは思えない

やはり自分が行くべきだろう。この程度の怪我で根を上げている場合ではない。これが力を持ち、そして除夜の手伝いをする約束した自分のやらねばならぬ事だ

そう決心して立ち上がった所で、右肩に手を置かれた。手を置いたのはハリケーンだ

『心配は無用だ』

「た？」

『あの二人はお前の親なのだろう？ だったら信じて待つんだ。それが子供のやるべき事だ』

「……本心は？」

『右手が使いもんにならんこんな状態でスタンド使いと戦うなんてごめんだし。しかもあいつのスタンド破壊力とかハンパないから正面衝突なんて自殺行為も同然だもん』

へらへら笑いながら本音を語る。ひまわりは額に血管を浮かばせな

がら自分のスタンドを発現し

「でやあ！」

『ぐお！』

「おお！」

ハリケーンの顔を思いつ切りぶん殴った

「あなた！」

手首の肉の抉れたひろしを見て、みさえが声を上げる。そんなみさえに、鳥取は銃を向ける

「みさえ！危ねえ！」

針を発射する。みさえはひろしの声に反応し、その場に伏せた。頭上に針が通るのを音と空気を感じ取り、もしあのまま立っていたらと思うと、戦慄した

だが鳥取は攻撃の手を緩めない。宝石の色を変え、砲弾を発射する。

みさえはそれを動き回る事でどうにか直撃を避ける

(くっ……やり辛い……)

自分の思うように事の進まない苛立ちを、鳥取は感じていた

今日の前の主婦は、確かに何発も砲弾を食らっているが、まともに当たっていないのもあって普通に動いている。ほっとしてまず夫の方を倒した方が良いのかも知れないと思っただが、あの攻撃力は無視出来ない

思考を巡らせながら撃つていくと、弾丸切れとなった

(弾丸の残りを頭に入れるのを忘れてた……)

初歩的なミスをおかしてしまった。失敗を恥じながらも、弾倉を取り出して銃弾を込める。銃はみさえに向けたままだ。勿論神経はみさえにも向けている

弾倉を外しても一発だけなら撃てるというのはこの二人も目の当たりにしている。実際に見ている以上、警戒して動きを緩める筈だ

最も、今回は銃身にも弾丸は入っていないから虚仮威しにしかならないが、わざわざそんな事教える必要はない。というか教えたら虚仮威しにならない

「うおおおおおおおおお！」

袖を破って腕を縛ったひろしが、靴を持ってとびかかってきた。鳥取は銃口をひろしに向け

「おらあああ！」

みさえの回し蹴りを、後頭部に食らった

まだ全部込めてはないが、そんな事をしていたら終える前にやられてしまう。やむなく再装填を中断し、弾倉をグリップに込める

そして二人と距離をおきながら銃口を向ける

「みさえ！」

「分かったわ！」

みさえは車のボンネットの上に乗る、飛び降り、地面に尻を向ける着弾と同時に辺りが揺れ、鳥取は動きを止める

「隙ありい！」

その隙にひろしは鳥取の後ろに回り、彼を羽交い締めにして靴を呼吸器に押し付け、その強烈な臭いを嗅がせた

「ぐっ……っ……」

靴の臭いを嗅がされ、必死に逃れようとする鳥取。ひろしはそれを逃すまいと、腕の力を強める

「さあ嗅げ、存分に臭え！遠慮する必要は無いぞ！たっぷり嗅げ！」

「っ……お……がげえ！」

言葉にならない悲鳴を上げる。自分を締め付けて動きを制限しているひろしに、必死で攻撃している。だが、ひろしは力を緩めない

「何だ？嫌なのか？駄目だぞ好き嫌いは。成長期なんだから……」

まるで子供を躾るかのような言い方だ。鳥取は必死に『クラシック・ケース』の銃口をひろしの顔に向け――

ると同時に、ひろしは羽交い絞めを解いた

「亭主に何て物向けるのよ!」

みさえの右拳が、鳥取の顔に的中する。鳥取の体は吹っ飛ぶ

「うげえ……」

胃の内容物を吐き出しながら、立ち上がる。顔色もかなり悪い

全力を出さないと勝てない。全力を出せない現状では勝てない。鳥取はしんのすけ達のいる場所へと走り出す。ひろしとみさえも、その後を追う

「音がしなくなったね……」

『そつだな……』

「決着がついた……訳じゃないよね?」

『だろつな。お前の父母が奴を倒そうがその逆だろつが終われば傷は治る筈だしな……』

銃声がしなくなった理由を、しんのすけと『ハリケーン』は暇潰し半分で推測していた。ひまわりはすやすやと眠っている

「…………その理由を教えてあげようか？」

正面の車の陰から、顔がやや青く、口の周りがべとべとになった鳥取が姿を現した

「安心しろ…………君達に危害を加える為に来たんじゃない…………」

フラフラしながら、上半身裸のしんのすけとその後ろに停めてある車のワイパーで止めている上着を見た

（成程…………ペイント弾が当たったのは『服』だから脱げば…………と考えた訳か…………）

まあ間違っていないけど

胃液を吐き、顔を上げながら『クラシック・ケース』の引き金を引く。フロントガラスの割れる盛大な音がした

『どつする？理由は分らんが弱っている今なら簡単に叩けるぞ？』

「…………お前なんでそんな何処か嬉しそうなの？」

「一つ…………聞いてい…………い？うおえ…………君のお父さん…………靴と足をちゃんと洗ってるの？」

その台詞で何故弱っているのかを理解した

「洗ってるに決まってるだろうが！」

横からひろしの蹴りが炸裂した！

「この臭いはな、営業の仕事で培ったサラリーマンの誇り、更に！
家族を支える為に働く、一家の主の証だ！」

「……………」

「そして分かったぜ！何故お前がしんのすけにマーキングしたのに
普通に俺達に向けて撃てたのかを！」

『クラシック・ケース』を持つ腕を持ち上げてひろしに狙いをつけ、
ペイント弾を撃つ。ひろしはそれを避けず、腹部に受ける。そして
そのまま

「させるかあ！」

背後からみさえが現れる。みさえはそのまま鳥取の腰に手を回し、ジャーマンスープレックスをかました

「しま……あれ？」

頭に当たった感触も衝撃もしない。但し、髪の毛に物が当たっている感触はする

状況を理解した。当たる寸前で『止められているのだと』

「みさえ！俺が合図するまでこのまま離すなよ！」

「ええ！」

(そうか……『転移』を封じる為に……)

逃れようとするが、ガツチリと掴まれていて腕を動かせない

銃は地面に向けられていて、そんなに離れてもいない。こんな状態で撃つたら、自分もダメージを受けてしまう

「どつした？何で撃ってこないんだ？一発なら銃口が何処に向いていようが必ずここに転移するんだろ？」

「……………」

トントンと、ペイント弾が付着した腹部を人差し指で叩く

「出来ないよな…………何故なら転移させるには『お前がマーキングした場所を見ていなければいけない』んだからな…………だからしんのすけにマーキングしていながら俺達へ撃つ事が出来た。だから能力を使う為にここに帰ってきたんだろ…………」

「くっ……………」

「よし、みさえ！トドメだ！」

「了解！」

みさえは鳥取を手離し、すかさず立ち上がる。鳥取の体はうつ伏せに倒れた

「よくもコケに……………」

鳥取はグリップの宝石を「黄色」にし、引き金を引こうとした

そんな彼の背中に向かってジャンプし、尻を突き出した！

「ジャンピングボンバー……ヒップ！」

「のおおおおあああああ！」

背中にみさえの全体重を乗せたヒップアタックを食らい、鳥取は気を失い、『退場』する。同時、しんのすけ達の負っていた傷が消えた

「おー凄いぞ母ちゃんのケツ！」

「ケツだけかい！」

『それにしても凄い音がしたぞ。もう少し体重や体脂肪率に気を遣え』

「うるさい豚！」

「えっと……こないだ四？太ったとか言ってたから、確か以前……」

言おうとした所で拳骨を食らった

TO BE CONTINUED…

クラシック・ケース？（後書き）

野原一家の勝利で終わりました

次は誰にしましょう（笑）

まだホテル黒兎編は続くので、これからも宜しくお願いします。出
来たら企画の方もお願いしまーす

ターン・アラウンド？（前書き）

激闘続くホテル黒兎

緊迫した状況が続く中、オーナーからあるニュースが？

ターン・アラウンド？

「取り敢えず厄介な強敵は倒す事は出来たけど……少なくともエリア毎に振り分けられた参加者がそれぞれ三人まで残らない限り……このホテルからは出られないのよね？」

「あのオーナーの言っている事が事実ならな……まあまず事実だろうがな。こういうのは信頼が命だ。こんな客を死傷させるようなイベントを何の準備も用意もなくやらせるなんて普通なら考えられない」

鳥取を撃破した野原一家は、現状のおさらいをしていた。他の残った参加者に見つからないよう、場所を移動して、物陰に隠れて

「で、俺達の、というか生き残っている全参加者に共通する問題は、自分のいるエリアに後何人残っているか……だな」

「だよねー、それを何時でも知る事の出来るようになってくれればいいのに……あのおじさんもケチだよねえ」

ひろしの言う事に相槌を打つしんのすけ

直後、学校のチャイム音が鳴り響いた

『只今、マイクのテスト中、お帰り、パパは入浴中』

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

緊張の糸を容易に切る、気の抜けるギャグをスピーカー越しに言うのは、このイベントの主催者である喜義正午だ

このギャグを聞き、生き残っている参加者は全員が大なり小なり微妙な反応をする。張り詰めた空気を壊して微妙な空気に作り替えた張本人は、我関せずと言った様子で続ける

『現在、残っている参加者は現時点をもちまして総勢80名となりました。私が思っている以上に皆様がこのイベントをお楽しみになられているご様子で、私も大変嬉しく思います』

「いや、楽しんでねーぞ。全然」

『折り返し地点となりましたが、最終的に生き残るまで気を抜かずに頑張ってください』

「取り敢えず、残っている参加者の数は分かったな」

「ええ。でも『どのエリアに何人が残っているか』とかは教えてくれなかったわね」

「まあな……」

「見つけたぜ、それも四人もよ！」

サングラスをかけて耳だけでなく、鼻や唇にもピアスをつけ、顔に入れ墨を彫った男が、ボールを振り上げて野原一家に駆け寄ってきた

「獲物が四人、これで更に近づけ……」

「「うるせえんだよ！」」

ひろしとみさえは、男の顔面に拳をめり込ませ、男の体を吹き飛ばした

残り、79人

「もう五分の三減ったんか……早いな……まあ、それだけみんな必死いう事か……」

一層気を引き締めんとあかな

二階エリアに振り分けられた藤方尊花は、流れた放送を聞いてそう
呟く

一緒に振り分けられた母親は既に『退場』している。これは、始まって早々娘である彼女が気絶させたからだ。理由は色々あるが、第一は戦闘に突入すると非力な自分はスタンドを使わなければならぬ。そうなった場合、母親が傍にいと面倒な事態になりそうだと
思ったからだ

そして、現在まで、逃げたり隠れたり、時に応戦する事で生き残っていた

「せやけどもう積極的に動かんとあかな……死ぬ心配とかない言うとっただけど……なあ！」

人型の『スウィートハット』を出し、自分の後ろを思いつ切り殴らせた

「うおっ危ない危ない……」

案の定後ろから声が聞こえる。振り返るとワインレッドの髪を伸ばして束ね、緑色のラインが入ったブラウンのワイシャツに普通のより一回り程大きな、赤い蝶ネクタイをした男がいた

「実に危ないな、突然『スタンド』で殴りかかってくるなんて……」

「何言うとんの？このイベントは『自分以外は全て敵』やろ？大体……」

「大体？」

「うちの『スウィートハット』が『スタンド能力』言うの知つとる奴がただの参加者な訳ないやろ……あ、言つとくけどな、ただの参加者言うたって、お金取るとか、そういう意味やないから」

「……何故そんな分かりきつた事を？」

「ボケ封じ」

「（変な子だな……）まあ確かに……同類である以上隠し立てをす理由は無いからね……私の名前は下関刀吾郎しもせきとうごろう17歳……長崎県対馬に生まれ育ち、今年の三月末に父親の仕事の都合によりこの春日部に越してきたのよ……」

「つまり……それから能力を得たいう事か？」

「やはり『同類』だ……越してきた日の夜に沢登優太という男によつて『矢』に刺され、能力を手にした……」

下関は笑いながらスタンドを出す。赤を基調としており、後頭部からは細長く弧を描いた巻き貝のような角が生え、口の部分からタコヤイカのような細かい、胸までの触手が何十本も伸びた、胸と手の甲に鋼色の十字架を埋め込んだ人型のスタンドだ

(どんな能力かは分からんけど……披露するまで待っている必要も義理もあらへん……速攻で倒す！)

そう決めて藤方は下関にスタンドで殴りかかる。一方、下関は、余裕の笑みを浮かべる

下関のスタンドは『スウィートハット』の拳を受け止めた

(やっぱり『近距離パワー型』かい……)

「『ターン・アラウンド』」

自らのスタンド名を口にする。同時、『ターン・アラウンド』は拳をスウィートハットの顔面に向けて振るった

藤方は片方の手でガードしようとしたが、間に合わなかった

(しまっ……)

反応して目を堅く瞑る

(やられ……あれ?)

痛みはない。薄目を開くと、『ターン・アラウンド』の拳は自分の顔面の寸前で『止まっており』、拳からは懐中電灯程の光量の『水色の光』が放たれている。下関の瞳から写される景色から見ると、その光は自分を『透過して』、正確な数値は分からないが恐らく三メートル先まで伸びているようだった

(何やら……この『光』……)

これが下関のスタンド能力というのは分かる。だが、これは何なのだろう?

光に当たっているが害はない。強いて言えば目がチカチカするが、それはこの程度の光量の普通の光に当たってもこうなる

『ターン・アラウンド』は下関の後ろに戻る。水色の光は、そのまま切り離されたように拳のあった位置から届いていた先まで伸びていた

不思議な現象だが、こんな事に疑問を持ち、頭を悩ませていたら脳が幾つあっても足りない。悩むより行動に移した方がいい

藤方はまたも殴りかかろうと、拳を振りかざす

だが、そのほんの数瞬間前に、下関は行動を起こしていた

下関は、正面から真つ直ぐに『ただ歩き出していた』！

何のつもりかは分からないが、早々に蹴りをつける。その意気込みで『スイートハット』は走ってくる下関へと拳を振るう

予想もつかない現象が起こった

『スイートハット』の拳は、確かに下関を捉えた

だが、捉えた拳は、全て下関の体を『すり抜けた』

下関はそのまま歩く。そして藤方の体をすり抜け、立ち止まり、その場でターンした

藤方もすぐに振り向くが、その眼前には、振るわれた拳が迫っていた！瞬きも出来ず、顔面に的中し、ぶっ飛んだ

「くっ……」

壁に叩きつけられた藤方は、口元から流れる血を拭き取り、立ち上がる

「そのまま気絶してしまえば良かったのに……そうしたらこれ以上痛い目に遭わずに済むというのに……」

「うるさいわ……ウチの相手をする以上、痛い目に遭うんはあんたや」

睨み付け、言い切る

そんな藤方を見て、下関はフツと笑う

「ならばこつちも、君は私に敗北すると宣言しよう」

「ふーん……」

下関の自信溢れた宣言に、藤方は冷めた反応を返す

「残念やな……その宣言、たった今破れる事になるさかいな」

「へ？」

「『スウィートハット』！」

『スウィートハット』が藤方の前方に現れ、特大の超音波を放った

!

ターン・アラウンド？（後書き）

取り敢えず折り返し地点にまで到達しました。長かったあ……

今度は藤方の戦闘が開始されました。スタンド名はビリー・ジョエルの楽曲から

では、次回も宜しくお願いします。それと企画の参加お待ちしています

ターン・アラウンド？（前書き）

イベント後半に藤方に遭遇したスタンド使い、下関刀吾郎。彼の恐るべき能力とは？

ターン・アラウンド？

藤方は、廊下に倒れ、腕で体を支えながら、『ターン・アラウンド』を発現した下関を見上げていた。その顔にはあちこち殴られた痣があり、皮膚も裂けて血も出ている

「我がスタンドの破壊力もそれなりにあるというのにそれを何発も喰らって気絶すらないとは……中々タフだね。」

「ウチは『元気』と『丈夫』が取り柄やからな……ウチ生まれてから一度も風邪ひいた事ないのが自慢なんよ。」

ほらよく言っやると続ける

「『バカは風邪をひかん』って。」

「……いや、それを自分で言うのは自分はバカですと言っていているよ
うなものだけど？」

呆れながら突っ込みを入れる下関

一方藤方は、ふざけた事を口に出しながらも、先程殴られるまでに何が起きたのかを思い返していた

特大の超音波をあいつに放つコンマ数秒前に、あいつのスタンドは

拳を振るい、拳から光を放った後、奴は間髪入れず歩き出した

結果、奴は超音波攻撃を『素通りし』、自分の背後まで進んだ所で止まり、自分が振り返った直後に拳を叩き込んできた。最初数発は命中したが、後は『スウィートハット』で防ぐ事が出来た。でなければもう『退場』していただろう

藤方は痛みを堪えて立ち上がり、後退りをする

対し下関は、わざと藤方と歩幅と歩調を合わせ、迫っている。その顔は余裕に満ちていた

(遊ばれとる……)

その表情とこの現状から、それを心底から感じ取れる

お前なんか何時でも殺せる。だがそれではつまらないから少し遊んでやろう。

多分今の状況で自分がいっただったら、相手に向かってこんな事を言うのだからなあと思う。後退りをしながら、ふと、妙案が頭に思い浮かんだ。これなら、これで倒す事は出来なくとも、能力の攻略の糸口が見えてくるかも知れない

「『スウィートハット』！」

自らのスタンド名を叫び、像を発現させる。発現させた像は、人型ではなく、数え切れない程の異形の蝙蝠だった。その群れが、二人の立つ廊下全体に広がる。そして、全ての蝙蝠が二人へ体を向ける

「おかしい、スタンドは一人一能力が……」

「そう、一人一能力……ウチの『スウィートハット』は『人型』と『群生型』と二つのタイプを使い分ける事が出来んねん」

「ウザったい！」

自分の周りに飛び交う蝙蝠を数匹叩き潰す

(数匹叩き潰した所でダメージは無さそうだ……それならば……)

『ターン・アラウンド』は拳を打つ体勢を取る。同時、藤方は耳を指で塞ぎ、右足で床を叩く

それを合図に、蝙蝠達は一斉に超音波を放った

超音波が当たった物に罅を入れ始めると同時、『ターン・アラウンド』は拳を振り抜いた

蝙蝠達の放つ超音波が壁や天井に罅を入れ、窓ガラスを割っているのを傍目に、本体である藤方は、ジッと下関を観察していた

この限られた空間で、避ける事も叶わない全方位からの一斉攻撃。遠隔操作で力が分散している為に威力は弱い、それでも纏める事で多少のダメージは与えられる。それから逃れるには、能力を使う以外にない

拳を振り抜いた後、拳から光が出て来てそれが本体から五メートルの所まで伸びた

放った直後、下関は口を大きく開き、少し経った後閉じて、足を動かした。どうしても気になったのは、ここからだった

『スウィートハット』の拳をすり抜けた時のように、超音波をやり過ぎた時のように、確かに前進している

但し、『二〜三秒に一步という遅い間隔』で、『一步につき数センチという歩幅』でだ。明らかにおかしい

少なくともこれで『材料』は粗方揃った。これはもういい

藤方は指を鳴らして蝙蝠達に超音波を出すのを止めさせる。破壊が止んだのを確認すると、先程までとは打って変わって走り出し、眼前の所で止まって直後に拳を振るう。藤方はこの攻撃をしゃがんで避けた後、頭上に飛ぶ数匹の蝙蝠を差し向け、距離を取った

危なかった。ギリギリだった。僅かに反応が遅れていたらやられていた

差し向けた数匹の蝙蝠が潰されたのを確かめると、残りの蝙蝠を全て引っ込める

下関は蝙蝠が消えたのを確認すると、藤方へと駆け出した。一方、藤方も、自分へと迫る下関を見て、人型の『スウィートハット』を後ろに出して距離を縮める

互いのスタンドの腕のリーチが届く距離に入る。先に動いたのは『ターン・アラウンド』だった

『ターン・アラウンド』の右拳が、藤方に迫り来る

当たる直前に、『スウィートハット』はその拳が握られる手首を掴み、止めた。左手で殴りかかるが、それも止められた

そのまま『スウィートハット』は、『ターン・アラウンド』を持ち上げる。連動する形で下関の体も持ち上がった

（能力が使われていたのは拳から光が出た時、拳から光が出たのは拳を振り抜いた時……そして、能力は『体を進めている時しか使えへん』！動いottaのはそういう意味やる！）

『スウィートハット』は下関に向けてキックを放つ

その瞬間、藤方は自分の勝利を確信した

「『ターン・アラウンド』」

「！」

掴まれていた右拳が輝き、そこから掴んでいた『スウィートハット』の手を、藤方をすり抜けて後方の床まで光が伸びる

キックが当たる直前、下関は足を動かす。すると、『ターン・アラウンド』を掴んでいた手応えがなくなった。藤方は下関を見て、驚いた

両手の束縛から放たれ、まるで足場があるかのように悠々と『空中を闊歩していた』

驚きのあまり何か行動を起こす事も忘れている藤方を後目に、下関は藤方をもすり抜け、床に靴底をつける

その音で我に振り返るを振り向くも、その時は既に下関が拳を放った後だった

ギリギリでその攻撃を『スウィートハット』で防ぐ

「随分人が悪いなお兄さん……拳振るわんでも光るんなら初めからそうしてくれたってええやろ」

「そんな事は一言も言っていない以上引つ掛かったそっちが悪い」

「それに空を歩けるんなら最初に言っただろ。こっちは見えてもウチ子供の頃からずっと憧れとったんよ。何の道具も用いず空を飛ぶって…」

…」

「『子供の頃』って……今でも充分子供だろ君……」

「人は傷付き、傷付け、何かを覚え、何かを忘れることに大人になつていくんや、つまり一秒前の人々は皆子供で、一秒先の人々は皆大人なんよ。せやから人は皆終わりを迎えるその日まで子供という皮を脱ぎ捨てていくもんなんや」

「ウザいんだけど」

「まあウチの名台詞が伝わらんかったのはショックやけど別にええわ。もうウチ負けるの確定みたいな空気やけど、それでも今までやられた分一発でも返さな悔しいねん。せやから一発その顔面に拳入れさせてな」

接近する藤方

それに対し、下関はギリギリまで引き寄せ、握った右拳を藤方に向ける

輝く寸前に、『スウィートハット』の片方の手が『ターン・アラウンド』の右手を「押した」。光つたのはズレた後。当然、藤方には『通過していない』

先程の攻撃を防いだ時、藤方の頭には下関の能力が何であるかの別の可能性が浮かんでいた

それは、『光が通過した存在やその起こした現象を、足を動かしている間はすり抜ける事が出来る能力』の可能性。これなら自分や

自分の攻撃がすり抜けられた理由も理解出来る

その推測はその推測で空中闊歩が可能である説明が出来ない等穴はあるが、試してみる価値はあると踏んだ。だから試してみた

今までのように前進する様子が無いようだから、多分近いのだろう。だが、正解を出さずとも、倒せるチャンスが見えたならそれを逃す理由はない

肉弾ではかわされたり防がれたりする恐れがある為、今度はそのまま超音波を放とうとした

下関は光が伸びている方向へと体を向けて、歩いた。口を開いてすぐに閉じ、先程全方位での超音波をやり過ぎた時の歩幅と歩調で、足を動かした

超音波は同様に放たれた方向にある下関以外の物全てを損壊、破壊する

無駄なのを悟り、超音波を止める。同時に下関も足を止め、藤方へと体を向けた

(どうなっとなねん一体……何やねんあの『光』……あの光を辿った途端あいつに何にも手を出せんようになってまう……あの光を通ると何か神様の加護を受け……)

あれ？今自分は何を思った？

あの光を通ると……そう思った……『通る』？

まるで『道』みたいに……！

ここまで考えた後、どんな能力なのかを理解した。これならば物体をすり抜ける理由も、空中を歩ける理由も説明出来る

「聞いてええか？」

「何なりと」

「あなたのスタンドの手から出るあの光……あれは……『道』なん
か？」

その質問の後、静寂が場を支配した

「クククククククククククククククク……」

静寂を笑い声で破ったのは、質問された下関だった

「そして、『一方通行』で『一回限り』で、『止まったらあかんの
やる』？」

「クッハハハハハ！ハーツハハハハハ！」

より高らかに笑う

「何かツボに入ったんか？」

「御明察！我がスタンド『ターン・アラウンド』は私専用の絶対安全な道を即席で造る能力！この道に入っている間、私という存在は現実と異なる次元に移され、現実のありとあらゆる存在や現象は干渉されなくなる！分かるか？如何なるパワーを、如何なる能力を持ったスタンドだろうと私の能力を破るのは、理論上不可能だというのを！」

ハッキリとそう高らかに言い切った

ターン・アラウンド？（後書き）

下関の能力を藤方は破る事が出来るか？次回、下関戦決着！

PS・前回出した企画、締切を二月末にします

それでは、これからも宜しくお願いします

ターン・アラウンド？（前書き）

絶対に干渉の出来ない下関の能力……それを知った藤方はどう出るか？

下関戦決着！

ターン・アラウンド？

使えば『道』を渡りきるまでの間は、外部からは干渉する事は決して出来ない能力。使っている間はどちらも攻撃は出来ない能力。自分と相手、どっちに分があるのかは言うまでもない

（能力使わせたら無敵なら逆に言えば能力使わん内はこっちからの攻撃は通じるいう事……つまり、能力を使う前にキツいのを叩き込めばええいう事やけど……）

勿論そんな事は理解している筈だ。だからどうすればいいか考えている

一番簡単なのが接近して近距離から攻撃するという手段だ。だが、それは最も警戒されていると想定している。だからそれをただ実行に移した所で失敗するのが目に見えている

確実に倒すのであれば『近距離パワー型』での肉弾戦。それは間違いはない。『超音波』では両タイプ共に気絶させる前に道を作られ、逃げられてしまう

「何もしないのか？ならばこちらからいかせて貰うよ」

射程距離内まで接近した後拳を向け、光を放つ。光が伸びきった後、口を開いて閉じ、駆け出す

藤方は前進し、下関を通過した。干渉不能である事を逆に利用して「正面から逃げた」のだ

下関は途中で無理矢理ブレーキを踏んで止まり、振り返る。この時既に撃ち出された『スウィートハット』の拳が迫っていた。『ターン・アラウンド』はクロスさせた両腕でその攻撃を防ぐ

「安全な道作る言うてもそれは直線で、道の中で伸ばす事は出来へん。そして、『一度立ち止まる』か『出るまで進む』かせんと道を消す事は出来へんのやろ？」

空いているもう片方の腕で攻撃を放つ

着弾する直前に下関は右腕を地面と平行にし、その拳から光を放ち、足を動かす。させじと足元に向けてキックを放つが、それより先に左足は『道』に踏み込んだ

横歩きをする下関の足元へと放ったキックは向かうが、当然空振る振るいきるタイミングを見計らって足を止め、脇腹に向けて蹴りを放った。藤方はその蹴りが飛んでくる方向に『超音波の障壁』を張る。蹴りはその障壁に防がれた

このガードは予想外だったらしく、目を瞬かせる。足を掴まえようと藤方は手を伸ばすも、その前に足は引っ込まれていた

「どんな形でも道に沿って進めば無敵になるんかい……」

「道は通る為にあるものだよ？」

「せやな……」

フーッと、息を吐く

「よう分かったわ……あんたの能力を打ち破る方法がな……今思い付いた」

藤方のその発言に、下関は眉をピクリと動かす

あれだけ己の力が自身に通じないという事実を見せ付けられて、よくもこんな事が言えるものだと感じた

最初は動揺を誘って調子を狂わせる為のブラフかと思っただが、それにしては発言に自信が満ちているのを感じた

「行け！『スウィートハット』！」

藤方は距離を詰めた後、人型の『スウィートハット』を発現し、超音波を放つ。超音波は床や壁に罅を入れる

(通じないのを忘れたのか？所詮子供か……)

落胆の表情を浮かべ、右拳を突き出し、『光』を放つ。そして口を開いて閉じた後、走り出した。藤方は止まらずと超音波を発している

『道』は藤方へと伸びているので、下関は通過した後止まって攻撃しようと考えた

通過し、止まろうと足の歩幅を縮める

が、その行為は目に飛び込んできた光景を見て止めざるを得なかった。何故なら、下関の前方の壁や床は、全体が今までと比べ物にならない破壊が起きていたのだ。歩幅を縮めて進んだまま、首を後ろに向けた

本体とは逆の方向に向いた『スイートハット』が、超音波を発していた。それを見て、藤方の取った策の全容を理解する。気付いたのだと、『ターン・アラウンド』の能力の弱点を気付かれたのだと『ターン・アラウンド』の道は、一度「立ち止まらないと道から出る事は出来ない」。立ち止まらずに端まで到達した場合、進む事も一方通行故に戻る事も出来ず、ただその場足踏みをするだけとなってしまう

更に、『入ったら如何なる物も絶対干渉出来ない』という能力の特

性上、『空気が入ってこない為呼吸する事が出来ない』。だから長期間道に居る事を想定出来る場合、息を大きく吸う必要があるのだ。そして今回は道で通過出来る位置にいて、早急に通過して直後に攻撃する事を前提にしていた為、深呼吸はしていない

(つまり、私の選択肢は二つ……)

一番、超音波をやり過ぎす為とその場足踏みを繰り返し、窒息する
二番、立ち止まって超音波を直撃する。どっちを選んでも、待っているのは敗北だ

(いや、待て……超音波ならまだ一時的なら耐えられる筈だ……ならば選択肢は二番だ。一番なら敗北は確実だが、二番なら微かながらも勝機はある！)

立ち止まり、その瞬間から全身を襲う超音波に耐え、振り返ろうとする

同時、顔面に途方もない衝撃が走り、吹き飛ぶ。薄れる視界には、こっちを向く藤方と、その横には拳を振るいきった『スウィートハット』が立っていた

そうか……自分がこっち出る事も想定済みだったのか

そう察したと同時に気を失い、『退場』した。決着のついた事を確

認すると、口を思いつ切り開いた

「ぶはぁ！ぁー今回もヤバい思たわ……」

息を整えた後、足を動かす

リン、ゴーン、ガーン、ゴーン

エリア全体に、教会のチャペルが鳴ったかのような音が響いた

突然の音に、藤方は肩を上げた

「今度は何や？」

『えー、ただ今、マイクのテスト中、この後に何かギャグを言いたかったのですが、思い付かなかったので断念します。お楽しみにしていた方々には真に申し訳ありません』

音が止んだ直後、喜好の声がスピーカー越しに響いた

八階エリア、九階

「今度は何だろう?」

「さあな……分からないが一つ言える事がある」

「言える事?」

「あの気の抜けるアホみたいなギャグを思い浮かばなかったから聞かなくて済んだという事だ」

「あー……」

苦笑いを浮かべながら相槌を打った宝来

参加者を粗方潰した俺（瀬上除夜）と宝来は、途中から一緒に行動する事にした。数が減るという事は遭遇する確率の減少に直結する。俺達と一緒に行動する事を決定した時、このエリアに振り分けられた参加者はもう殆どが脱落したらしく、エリア全体を回って三人しか遭遇しなかった

もう終わりかと思った時にオーナーからの放送。果たしてどんな内容なのだろうか

『駐車場と一階、そして五階エリアの三つのエリアで、それぞれ残り人数が三名となりました。つまり、今述べた三つのエリアは、ルールに基づき戦闘の終了を宣言します』

「瀬上君これって……」

「間違い無く事実だろ。あいつ等は頑張ってくれたみたいだな……」

『では、残る二階、八階エリアの計21名の参加者の皆様、このイベントも遂に終盤へと入りましたが、最後の最後までお楽しみ下さい。ではー!』

「今向こう側から『シュピツ』て擬音が聞こえた気がした……」

「いや、そんなのどうでもいいよ……」

宝来の言う通りだ。今自分が思った事は、本当にどうだっていい事だ問題はこの下らないイベントは終わりかけという事だ。漸くここまで来たという気持ちはある。だが、不安はある

別に今回は死ぬ事は無いからやられても問題は無いが、あのオーナーの企画したこのイベントをクリアしてボコボコにした方が、確かな敗北感というか、そう言ったものを植え付ける事が出来そうだ

それにここまで来たんだから、せつかくだし勝ち残りたいたいという気持ちが無いと言えは嘘になる……うん、結構楽しんでるね俺……

「宝来、勝ち残るぞ」

「うん!」

『ギヤアアアアアアアアアア……』

下の階から、複数の叫び声が聞こえた

T o B e C o n t i n u e d . . .

ターン・アラウンド？（後書き）

下関の能力の落とし穴。『絶対』というのが必ずしも益だけではないという事ですね。どう倒すかは何度も考え直しました

イベントも終盤、今度は除夜と宝来です。これでホテル黒兎編も終わらせたいと思います

では、これからも宜しくお願いします

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？（前書き）

八階エリアに響く叫び声……待ち受けるのは？

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？

八階エリア

絶叫が聞こえた俺と宝来は、大急ぎで下の階へと続く階段を駆け下りた

この間にも聞こえてくる、絶叫

音量の違いからそれにかき消されてしまいそうながらも、『絶え間ない銃声』は確かに聞こえた。熱気も肌で感じる

「何……これ……」

階段を後十数歩で降りきる俺達の目に飛び込んできた光景を見て、俺も宝来と同じ台詞を言いたくなった

壁や天井、床には細かい穴が無数に空いており、床は燃え盛っていた

「瀬上君これって……」

「まず間違いない、『スタンド使い』の仕業だな……？」

階段を降りきった時、呻き声が聞こえた気がした。右からだ

宝来が肩に指でトントンと叩いた。どうやら宝来にも聞こえたらしい

俺は宝来に三秒経ったら右を向くよう合図をした。宝来は頷いた

一、二の、三で向く

男が仰向けになって倒れていた。位置は階段を降りきった場所の壁沿い。だから降りている時は死角となっていて気付かなかった

俺達と同じか、それより少し上の年代のその男は、足を撃ち抜かれている。一発ではなく、壁や天井に空いている複数の細かい穴と同じ物だ

「おい、あんたここで何があった？」

男の耳に口を寄せ、一応警戒の為に『プラネット・ルビー』の腕を発現させる。妙な動きをしたら即座に叩き込めるように、だ

この男がこの惨状を作ったスタンド使いで、油断させる為に自分を攻撃した可能性も考えられる以上、特に間違った判断ではない筈だ

「あん……たは？」

「参加者だ。いや、身分はどうでもいい。ここであつた事を大体でいいから話してくれないか？」

男は話し始めた

あのオーナーの中間報告から少し経った後、突然『模型より二回り程のサイズの戦闘機と軍用ヘリ』が飛び回ってきて自分を含めた参加者達を攻撃してきた事を

「つまり、その二機が敵の能力って訳か……」

「ああ……だが、一番気をつけないといけないのはヘリの方だ……」

「あの……それどん」

宝来の質問は、突然した二種類の音によって遮られた

音のする方向を見ると、迷彩色の爆撃機と、同じく迷彩色の軍用ヘリが飛んできた。爆撃機は機関銃とミサイルを両翼に搭載されており、ヘリはミサイルを四発搭載されていた

サイズは模型より二回り程大きい程度。ついさっきまでここで暴れていたスタンドに間違い無い

「何だ……人数が増えているなあ……」

奥から、少し低めの女の声が聞こえた

濃いめの赤い髪を額が隠れ、眉にかかるまでに伸ばし、眉間の部分を上げてプロペラを模したヘアピンを留めた、右肩を出したアサガオの花がプリントされた黒いシャツに青い短パンという恰好をした、恐らく二十代辺りの年齢の女だった

女性にしては背の高い方で顔立ちはどこらかと男っぽいので首から下を見ないと性別を勘違いしそうな容姿をしている

その女の姿を見ると、俺は負傷している男を『退場』させ、『プラネット・ルビー』を出す。宝来も『インフェミー』を発現した

女は俺の姿を見た途端、俺の事をじろじろと見始めた

「……………何だ？俺、誰かに似てるのか？」

「いや、「誰かに似てる」んじゃないよ、『張本人』だろ？瀬上除夜君」

「そうだけど……………」

優太の奴が派手な売名行為をやってくれたお陰で春日部限定で知る人は知る有名人になっちまったみたいだな本当

「自己紹介をするのが流儀だよ……………名前は揖宿代奈、東京の大学に籍を置いている。因みに三年……………二ヶ月ちよつと前に沢登優太という少年に『矢』に射られこの能力を手に入れた……………」

爆撃機は俺達の正面に、へりは揖宿の後ろへと飛んだ

「能力は『フォーリング？フロム・ザ・スカイ』と名付けた……」

爆撃機は俺達に向けて機関銃を向ける

「能力は見ての通り……サイズは小さいけどこの被害で分かるように破壊力は本物だから気をつけてね……」

機関銃から、弾丸が発射される。『プラネット・ルビー』で弾き、攻撃に移る

機体を傾ける事で回避され、反撃した。対応しようとするが間に合わず、左腕に命中した

「インフェミーACT1！」

ACT1の凝固液が、爆撃機に向けて飛ぶ

爆撃機は搭載されているミサイルを一発放つ。ミサイルは凝固液を浴び、凝固液がカチコチに固まった所で爆発。固まった凝固液が爆

風によって碎ける

爆撃機はすかさずインフエミーに向かって機関銃を放つ。俺はプラネット・ルビーでインフエミーを蹴り飛ばし、宝来を吹っ飛ばした。宝来は壁に背中を打ち、俺は右足に沢山の細かい穴が空いた

「うおえええ……入った……確実に入った」

「悪い、慌ててたんで力加減とかそう言ったの考慮してなかった……」

軽く謝った後、爆撃機と向き合う。この時既にミサイルを一発放っていた

十分な距離まで近付けさせ、それを『軸』として瞬間移動。爆撃機の前まで一気に接近した

「近付けてくれて、ありがとう」

爆撃機に向けて、拳を振るった

振るわれた拳が的中するかしないかの距離にまで接近すると、常識では起こり得ない現象が起こった

『左翼が機体から離れた』。拳の当たる場所は、左翼と機体の付け

根であった為、機体には掠っただけだった

分離した左翼はその間にも動き、機関銃の銃口を俺に向けて発砲した

「くっ」

足に力を込め、後ろに跳ぶ。お陰で手の甲に幾つかの穴が空くだけで済んだ

離れていた左翼は機体と再度合体する。同時に俺に向かってミサイルをぶっ放してきた

同じ手は通じないと考え、ミサイルを横から殴って破壊する

「危ない瀬上君！後ろ！」

宝来の声がして、後ろを向くと、『ミサイルが後方からこちらに向けて飛んできた』。先程と同様に叩き落とした

直後、一発のミサイルが頭上をすり抜ける

ミサイルは、暫く真っ直ぐに進んだ後、緩やかな曲線を描き『ウターン』した。成程、先程後ろからミサイルが飛んできたのはこの為か……

「機関銃に誘導ミサイル……洒落にならねえ」

ミサイルを破壊する為に接近する事を決める。足に力を込めた直後に、プロペラのローター音が「大きくなっていく」のを耳にした

飛んでくるミサイルを『軸』としてミサイルの後方に瞬間移動し、振り返る

揖宿の後ろに飛んでいたヘリが、前方に飛んでいた。それを確認すると、ミサイルがリターンする

ミサイルを破壊すると同時、ヘリの方が搭載されたミサイルを放った。爆撃機は機関銃を放つ

立ち上がった宝来の手を引っ張って背中を見せずに後ろに下がる。ミサイルは追ってくる様子はない。ただ俺が発射される時にいた場所に向かって飛んでいる

爆撃機とヘリでは、搭載されているミサイルは異なるようだ。だからこそ……

だからこそ、直感で感じ取った恐怖は尋常ではなかった。そしてその直感的の中した

先端が床に当たると、炎がミサイルの中から炸裂した

炎は一気に広まり、凄い熱気が、全身に感じた

「へりに搭載されているミサイルは『ナパーム弾』……炸裂したら近くの物を燃やし尽くす……鉄やセメントも直撃すればただじゃ済まない……」

この建物のこの部分が原型を留めているのはあのオーナーの能力が関係しているからだろうねと、笑って続けた

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？（後書き）

スタンド名はボブ・ディランの楽曲から

最初は別案の戦闘機のスタンドか、全く別のスタンドにしようかと考えてましたが、このスタンドをチョイスしました。爆撃機はA-10、ヘリはAH-1Wスーパーコブラをイメージして下さい

翼が外れたりするには、実は『理由』があります。

では、これからも宜しくお願いします。

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？（前書き）

破壊力の高い二機の軍用機のスタンド『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』に、二人はどう出る？

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？

「成程……爆撃機の細かい攻撃で倒れてくれればそれでよし、それだけで倒せなくとも相手にする事でダメージを負っている、意識が爆撃機に向いている、その両方の相手にへりで強力なのをお見舞いするってのか」

フロア全体を熱気が支配する

根元である火を消す為に消火器を用いるが、スタンドから放たれた爆弾から直接出た火の為、消す事が出来なかった。取り付けられているスプリングクラーも、作動する気配がしない

「瀬上君ハンカチ持つてるんならそれを呼吸器に当ててしゃがんで。煙は上の方にたまるから……」

「しゃがむ必要はない。いや、そうしたら危険だからしない……」

ハンカチを口元に押さえる宝来の忠告の内、一つ目は聞いて二つ目は蹴った

火事で一番ヤバイのは煙を吸う事だから、宝来の言った事は間違っていない。だがしゃがんでしまうと必然的に動きが制限されて恰好の的になってしまう

「急いで倒して上のフロア行くか……」

「勝算はあるの?」

「二台いっぺんに潰そうだなんて思ってない。確実に『一台ずつ』、俺が粉碎する』。つー訳で宝来は引っ込んでな」

「うん」

宝来は大人しくここから去った

足音とローター音が大きくなっていく。眼前の火はそれに伴い小さくなっていく

攻撃の対応が出来るように、『プラネット?ルビー』を出す

「まだ戦闘を続けるつもりか?」

「一応……」

何時でも戦闘に移れるようスタンドを待機させ、二機のスタンドを睨み付ける俺

じっと見ていると、おかしい事に気がついた

へりのナパーム弾の数が、「三つのまま」だ

おかしいと感じられたのは、爆撃機の方はミサイルを発射する度に新しいのが追加されていたのに、こっちはたった今放った一発がそのまま追加されていない

ああそうか。威力が凄いい分ミサイルや機関銃と違って弾数に制限があるのか

爆撃機とヘリが道を塞ぐように並列し、爆撃機は俺へ機関銃をぶっ放してきた。『プラネット？ルビー』で易々と防ぐ

「やっぱりこれは防ぐのは簡単か……でも、これは読めた？」

爆撃機から放たれる弾丸を弾いている内に、ヘリは俺の後ろに回り込み、プロペラを接近させ右肩を切り裂こうとした

右肘で肘鉄を繰り出す。必然的に防御がこの瞬間手薄となり、弾丸を何発も食らった。ヘリの方は、正面のガラスが砕け散った程度で動きに変化は無く、本体にダメージは無さそうだった

右肩はざっくりと切ったが右腕全体を動かす事はまだ出来る。当然さつきより動作は鈍くなっているが、振るう事も防ぐ事もまだ出来る

「これじゃさつきみたいな対応は出来ないな……仕方無い。『奥の手』を使わせて貰うぜ！」

「させるか！」

機関銃で俺の足元を撃ちながら、駆け足でバツクし始めた

これで俺の足止めを計るのが目的だとしたら無駄だ。何故なら俺の『奥の手』は、「前」でなく『後ろ』が重要なものだからな

俺は自分の後ろに飛ぶへりを『軸』としてへりの後ろへ瞬間移動。
そして――

そのまま踵を返し、すたこらと走る

「オイ待て！何処に行くんだ？」

「見て分かんねーのか！『逃げてる』んだよ！」

逃げるのも戦術の内だ、文句あつか！

見逃してくれる筈もなく、当然追ってくる二機のスタンド。内爆撃機は、俺の足に向けて機関銃をぶっ放してきた。それは左右にジグザグに動いて出来るだけ避ける

弾丸が足に掠ったりしたが、このダメージは無視だ

この調子で体力が尽きるまで逃げてやる。持久走には自信があるんだ

爆発音が左側の下から聞こえ、左に向かう際に軸にしていた左足から凄まじい「痛み」を感じた

軸にしていた左足の膝の辺りが、爆発した。ミサイルを放たれた

千切れていなかったが、爆発の際に生じた爆風によりバランスを崩し、転倒した

二機のスタンドの本体はそんな俺を見て、ほくそ笑みながら見下ろしている

「何で……そんな笑ってるんだ？」

「もうロクに動けは出来まい？ いや、君には『瞬間移動』という逃げ道があるか……」

揖宿は俺の腹の上を、思いつ切り踏みつけた。踏みつけた足にはかなり強く力を込めていて、苦しい

「確か自分に直接くつついている物は『軸』には出来ないんだよね？」

揖宿のその言葉は、俺の頭から後ろ斜め上にある音によって殆どかき消されていて、あまり耳に入らなかった

視線をそちらに向けると、機関銃を俺に向けた爆撃機が飛んでいた

「チエックメイト……かな？」

「そ……その……根拠は？」

無理に発言すると、腹部の圧迫感が更に強くなった

何故そんな簡単な事も分からないと言いたげな顔に冷たい視線で、俺を見下ろす

「君は大ダメージを負っている、君は今瞬間移動出来ない、スタン
ドで退ける事は出来ないだろ？腹部は私によって圧迫されているし、
何より左足はミサイルの着弾によってポロポロ……」

よく聞き取れず、唇の動きからどうにか何を言っているのかを読み
取る

頭の中で思い浮かんだ文章を口にしようとしたが、息を上手く吐き
出す事が出来ず、結果口のみを動かしているだけの、所謂口パクと
なった

それを察してくれたようで、踏みつけている足の力を、ほんの少し
だけ弱めてくれた

だから俺は口を開いて一気に肺の中に蓄えて頭の中の文章を口に出
した

「確かに……俺はこの時点で負け確定だ……このまま無抵抗に機関

銃なりミサイルなりナパーム弾なり喰らって俺は終わりだろうよ」

「分かってるじゃないか」

「ああ……自分なりに分かっているつもりだよ。分かってないのはあんたの方だ……よく思い出してみろよ。『俺だけだったか』？」

置かれている足を退かす勢いで思いつ切り息を吸い、肺を膨らませた
そして、先程より大きな声で、もう一度言った

「『よく思い出してみろよ。俺だけだったか』？」

一拍置いて、続ける

「ここにいたのはよ」

俺が顎を上げて向けていた先に飛んでいた爆撃機は、横から飛んできた『液体』をモロに浴びた

爆撃機の浴びた『液体』は固まり、爆撃機は身動きが出来なくなった

「遅いんだよ宝来……お陰で俺左足にこんな大怪我負っちゃったよ」

「仕方無いじゃない。貴方達がちょこまか動き回るから……」

『液体』の飛んできた方向には、宝来が立ちながら俺を見下ろしており、そのスタンド、『インフェミアCT1』が宝来の足元にいた爆撃機の動きが封じられて焦ったのか、俺の腹を踏みつけている足の力が更に落ちた。これならどう動けばいいか判断するだけの余裕はある！

「ゴラア！」

スタンドの拳を、揖宿の臍に命中させた

それにより俺の腹から足が退かされ、俺は両手と右足を使って立ち上がり、片足ケンケンで凝固液により身動きが取れなくなった爆撃機へと向かう

途中でいきなり、俺の体は宝来により引っ張られ、離された

その時、俺がこの目で見たのは

もう一機のヘリから放たれたナパーム弾が、爆撃機に命中したという、予想外の光景だった

ナパーム弾が炸裂した瞬間、半端じゃない熱気が、辺りに放たれた

「何やってんだ？お前……」

「信じられない』……そう言いたげだな」

俺は、火傷を負ってボロボロとなった揖宿を凝視していた。表情は、揖宿の言った通りの表情だろう。確認していないが、宝来も間違い無く俺と同じ表情をしているのだろう

ナパーム弾によって固まった凝固液から解放された爆撃機は、そのナパーム弾からのエネルギーにより本体同様ボロボロとなっていた爆撃機はかなり不安定な飛行をしながらも、ヘリの下に飛んだ

「何故こんな事をしたか？勝つ為だ……」

「『？』」

俺と宝来は、言っている事が分からなかった

幾ら解放する為とは言え、あれだけの破壊力を持つ攻撃を自分のスタンドに放ったのなら、こうなるのは目に見えていた筈なのに……

「私のスタンド『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』は……『一能力』だ……他のスタンドの例に漏れずな……」

「いや、それは俺達もだけど……！」

そつだ……何でこいつは『異なる二体のスタンドを一人で操っているんだ』？

まさか……！

「気付いたみたいだね……さあ『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』よ！その真の姿を見せろ！」

「宝来！ACT3……」

「遅い！」

ヘリのプロペラと爆撃機の翼、そして両方の装備が外れ、爆撃機の乗り込み口が開いてそこにヘリの本体が乗り、その横に翼が付いて二倍近くに伸び、その翼に左右対象になるように外れた装備が搭載された

プロペラは剥がしたシールのように二枚に分かれ、それが翼の両端に機体と水平にくっ付いた

「これが私のスタンドの本来の姿……変わったのは姿形だけじゃない……」

搭載されている機関銃が、俺達の一番近くの部屋の扉に向けて放たれた

今までは穴を空けるくらいだったが、ほんの数発で扉が粉々となった

「この通り……分かったと思うが、直撃するのはお勧めしないぞ……」

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？（後書き）

何というか、一言で言うなら『合体変形』のスタンドです。スーパー戦隊の巨大ロボみたいに。デザインは正直微妙だけど……

これからも宜しくお願いします

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？（前書き）

合体しパワーアップを遂げた『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？

『力を二分にして二機に分けたスタンド』を一機に纏め、『別々に操作する為のエネルギーを攻撃に回した』から今まで以上の破壊を生み出す攻撃が可能となった……という解釈でいいな

そう考える俺に向かって合体変形した『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』は両翼の誘導ミサイルを一発ずつ放った

「『プラネット・ルビー』！」

自分達に向かってくるミサイルの腹を叩き、失速させて軌道をずらした

少し進んだ後ミサイルは俺達に向けて弧を描き

「『インフェミーACT1』！」

インフェミーの凝固液により、その動きを止められる

今度はインフェミーにミサイルが放たれた。パワーが低い奴を狙うってか。野生動物の狩りでも当たり前前的手段だ

「ゴラア」

ミサイルの腹を爪先で蹴り上げ、軌道を変えた。ミサイルは天井へと飛び、炸裂させる。それにより生じた強風が全身へと当たる

今まで支えとしていた足で蹴り上げた為、俺の体は思いつ切り横転する

危ない危ない。威力から察するにさつきみたいに手足に当たれば当たった所から先が確実に千切れるな

『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』はスピードを上げて俺に接近し、左翼の端のプロペラを俺に近付ける

プロペラが俺に接触する前に、俺は合体スタンドの後ろに瞬間移動し、拳を叩き込んだ

拳を引つ込めると同時、俺の右肩を何かが貫いたかのような音と痛覚がした

右肩へと視線を向けると、『一枚のプロペラの羽根』が、刺さっていて肉はおろか骨をも貫いていた。確認すると、左翼のプロペラの羽根の内一枚が、無くなっている

フォーリング・フロム・ザ・スカイの機体は、拳を叩き込まれたダメージからまだふらついていて覚束ない

今なら叩ける。そう考え更に拳を叩き込もうと

「攻撃しちゃ駄目！忘れたの？」

宝来の制止の声により、叩き込む為に振り上げていた腕を止めた

そのほんの直前、両翼が機体から分離し、一方が真正面から俺に向けてプロペラを向けて飛んできた

軸としてその後ろへと回った

背後から、今回の戦いで嫌になる程聞き慣れた、堅い物を突貫する音が響いた。あのスタンドの機関銃の銃声だ

掠りながらもどうにか宝来のもとに来る。途中手足に掠ったが、先程と違い、肉が抉れており、箇所によっては骨も露出している

「悪い宝来……肩貸してくれないか？もう一方も見ての通り深いダメージを負ってさ……射程距離内に『軸』になりそうなのが幾つもあるから瞬間移動するのもさせるのも出来るけど……流石に二本の足で体を支える事出来そうになくてさ……」

ふらついていた俺の体を支え、無言で肩を貸してくれた

「……合図したら離してくれ。避けるから」

「了解」

両翼が再度機体にくっついたフォーリング・フロム・ザ・スカイが、俺達に向けて機関銃を放つ。直前に俺は宝来に『合図』をした

宝来が俺を突き飛ばすと、当たる前に固まった凝固液を軸にして移動。した瞬間に宝来を俺の横に移動させる

「休まずに持続できるスピードで動き回ってくれ！」

「アイアイサー」

肩に回した腕をしっかりと掴み、宝来は動きをよく見た上で動き回る俺も肩を借りっぱなしという訳にもいかない為、通常なら避けられない弾丸をスタンドで地面を蹴って回避するくらいのアシストは行っ

このやり取りは、すぐに終わりを迎えた

俺を支えていた宝来の体が、いきなり倒れた。支えを失った為、俺の体も必然的に倒れる

宝来の左膝には、俺の右肩同様一枚のプロペラの羽根が突き刺さっていた。これでは俺を背負って動き回る事は出来ない

宝来をしっかりと腕に抱いて、『プラネット・ルビー』を自分と凝固液の塔の中間辺りに発現させ、俺達を引っ張った

刹那、ミサイルが飛んできて俺達が先程いた地点に着弾した。後少
し判断が遅かったらと思うと、ぞっとする

尚も俺達への攻撃は止む気配は無い。俺は自分のスタンドに体を引
つ張って貰うという、少々情けない恰好で攻撃から逃れている。勿
論宝来も一緒だ

情けない恰好と言ったが、これは結構凄い画だと思う

「違う違う違う違う違う違う違う違う」

今そんな事を考えている場合じゃない。このままじゃ負ける

「……………あれ？」

「どうした宝来？」

「いや、あれ……………」

宝来は『ある物』に指を差す

そのある物、それは

先程機関銃の直撃をモロに受けたにも関わらず、見た所破損らしい

破損をしていない『固まった凝固液』だった

「お前のスタンドの凝固液ってかなり頑丈なんだな……」

「丈夫なのは知ってたけど……知らなかった、まさかここまでだとは……」

「事前に分かっていたらドアとかに吹き付けて即席の盾とか……あ

「どうしたの？」

「いい事思い付いた……宝来、耳を貸せ」

「？」

「随分と素早い……だがこれ……で？」

宝来は『ACT3』を発現させ、何か災害を連想させる程膨大な量の凝固液を吐き出した

「『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』！」

直後、その膨大な量の凝固液が蒸発し、水蒸気がフロア全体に広がり、その熱気で一瞬でサウナのような熱さとなり、湯気でどうにか一メートルも離れていない存在の影が視認出来る程だった

「残ってたナパーム弾の内の一発を使いやがったか……宝来、俺の影を目で確認出来るか？」

隣にある中学からの付き合いの女友達の影に尋ねる

「確認出来るよ、多分瀬上君と同じくらい」

「それじゃさっき言った通り頼む」

湯煙が薄れてきて、まだうっすらとではあるが廊下の端はこの目で見る事が出来る

だから、相手の位置を確認する事など容易に出来る

だから俺は、揖宿に走って近付き、思いつ切り殴り飛ばした

「が……」

「効いたみたいだな」

「何なんだ……その『奇抜な恰好』は……」

まあ、この疑問に思うのは当たり前だよな

今の俺、両腕両脚、そして腹部と胸部に『インフェミアCT1の凝固液を纏っている状態』だから

「企業秘密って事で……まあそこまでオーバーなもんじゃないけど」

ただ吹きかけて貰っただけなんだし

これで傷は防いだし駄目になった足をもう少し使う事が出来るようになった。勿論その場しのぎの策でしかないけど

ガタが来るのはせめてコイツを倒してから来てくれよ俺の足……

後ろから何かを複数飛ばす音が聞こえた。俺はターンして飛ばされたプロペラの残りの羽根を弾いた。多少ひねてはいるが『スタンド能力を纏った状態』の為、スタンドに触る事は出来ている。それにこの強度は確認済みだ。あのナパーム弾を受けない限りは一撃で破壊されたりはしないだろう

「これで俺はスタンドを発現させなくともスタンドに攻撃出来る！だから遠慮なくスタンドに攻撃させて貰うぜ！」

「すれば？」

かなり冷淡にそう言い放つ

拳を振り上げるも、『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』は機体を傾け、拳の迫っている左翼を分離させてそれを避けた

「その鎧みたいなの……見た限り衝撃には強いみたいだな……だから、それごと焼き尽くしてやる」

機体に引っ付いている右翼に搭載された、最後のナパーム弾が発射された
この事態に対し俺は

今の自分の顔を鏡で見たらどんな感想を抱くのだろう

そう思わずえられない程笑ったのを、心底から自覚した

ナパーム弾が右翼から離れた直後、ACT1の凝固液が機体に浴びせられた

「これで逃げようにも逃げられない……ね」

「ああ……」

「まさか最初から……」

「まあね！これを溶かせる手段は文字通り俺の手中にある。撃ち尽くしたからもう発射する事は出来ない。分離させた左翼で攻撃する

にしてもこれを使って避ける事が出来る……」

『プラネット・ルビー』を発現し、ナパーム弾の胴体を掴み

「ボコボコに殴ってやっても構わないが、自分の能力を直に喰らわせてやるよ!」

それを『フォーリング・フロム・ザ・スカイ』に叩き付けた!

フォーリング・フロム・ザ・スカイ？（後書き）

凝固液を身に纏って・・・というのはこの戦いの構成考えている間に
思い付きました。即席装甲……ですね

次回でこのホテル黒兎編終わらせたいと思ってます

次回も宜しくお願いします

経営者の夢の痕（前書き）

今回でホテル黒兔編終結！ギャグは多めです

経営者の夢の痕

「えつと瀬上君……」

「あ？」

「終わったの？」

「事実を言えばあいつを倒す事は出来た」

俺達の傷が無くなっているのが何よりの証拠と言った

俺は揖宿のスタンドにナパーム弾を自爆覚悟で叩き込んだ。が、それが炸裂する直前に宝来が物凄い近くにいてる事を思い出し、こいつが出来ただけダメージを受けないように宝来を『軸』にして移動、その逆を繰り返して離れられるだけ離れた

揖宿の姿は無い。0距離からあんなとんでもない威力を食らったんだ。フィードバックによるダメージで即座に意識を失った瞬間『退場』したんだろう

ボーン……ボーン……ボーン……ボーン……ボーン……ボーン……ボーン……

「今度は柱時計？」

「統一しろよ」

『只今、マイクのテスト中、忠正とマイクは模擬テストを受けている途中』

「……ネタ、思い付いたんだな」

「気の抜けるのは変わってないけどね」

『あれ？何か一瞬私の繊細なガラス細工の横に置いてある桐で出来たタンスの上に置いてある遺影の横の……』

最後まで聞くのがアホらしくなって無視して宝来とたわいのない会話をした

多分あれが終わるまで一時間近くかかったと思う。よく途中でバテなかったなアンタ

『まあ私のこの様に脆く、繊細で、傷つきやすい心などどうでもいい。本題に入ります』

本題に入るまで一時間近くもかけるな

『残る二階エリアと八階エリアですが……皆様のご活躍、ご健闘により、他のエリア同様、人数が三名となりました！よって、第零回、ホテル黒兎、バトルロイヤル大会の終幕を、宣言します！』

「やっと終わったか……」

『では、生き残った参加者の皆様は、これより現実空間のホテル一階のロビーに転移されます。そこで、私が用意した賞品をお選び下さい。尚、残念ながら力及ばずリタイアした参加者の皆様は、先に現実空間のホテルの部屋に戻っております。勿論無傷で……故に心配はいりません』

放送が終わると同時、視界が変わった。他のエリアの生き残った参加者が、用意されていたジュースや菓子類を摘んでいた

「除夜君に宝来さん、君達も残れたんですね」

「ほっほーい、除夜のお兄さん」

「たーやー」

「まあどうにかな」

ここにいる面子の中で顔見知りは、ひろしさんを除く野原一家に琢磨、藤方、本荘、咲良、鵜……ひろしさんに稲庭、庚はいないみたいだが……リタイアしたのか

『言っておくがひろしは敵との対戦中みさえと喧嘩して殴られて退場したぞ』

勝手に出て来た『ハリケーン』が、頼んでもいないのに俺にひろしさんがいない理由を説明してくれた

それを聞いた俺は呆れかえった。戦闘中に夫婦喧嘩を始めたのかよ

『その夫婦喧嘩の火種を作ったのはしんのすけだ』

「へーそー」

『反応、かなり淡泊だな』

「いや、これは想定範囲内だったから」

故意にせよ事故にせよやりかねんからなこいつの場合

そんな無駄話をしていると、拍手の音がした為音源へと顔を向けると、そこにはこのホテルのオーナーでこのふざけたイベントの主催者の喜好正午がいた。彼の横には、白い布を被せた景品らしき物を沢山乗せた台車がある

拍手を止め、マイクを持つ

『生き残った15名の参加者の皆様、おめでとーございます。このイベントの主催者として私も貴方方のご健闘を称賛致します。只今より、第零回、ホテル黒兎、バトルロイヤル大会の閉幕式を行います』

す！』

「さっきまでやってたようなボケはやらないんですね。少し残念だ」

『やってあげても良かったのですが閉幕式はスムーズに終わらせの方が宜しいかと思ひまして……皆様疲弊して今にもお休みになりたい方もいらっしやるであらうと……』』

変な所気配りが出来てるな。いや、客相手の商いをしているから客に対しての気遣いが出来て何らおかしくないか

『では、次に賞品を贈呈致します。この台車の上に、様々な賞品が乗っておりますので、好きな物を一つずつ取って下さい』

「これって贈呈？」

「違つと思つ……」

「遂に賞品が……何があるんだろう？」

みさえさんは目を輝かせ、台車を見ている。子供のような純粋な目を台車に向ける母を見て、しんのすけ達は溜息をつく

被されている布の端っこを掴み、引っ張った

用意されていた賞品の数々を見て、俺は唾然とした。台車の上に乗せられた物、それは――

布団に圧力鍋、ダイエット器具等、自宅や友達の家で一度は見た事のあるようなのばかりだった

「おーっこれ全部オランチにあるのばかりだ。母ちゃん買ったはいいけどあんまし使わずに物置に行くんだよね」

「衝動買いは失敗のもとやで」

「悪かったわねこれでも自重してるわよ」

「すみません質問があるのですが宜しいでしょうか？」

琢磨が手を挙げる

『何でしょうか？』

「いや、貴方が用意されたこの賞品の数々ですが……これ、通販力タログで一度見た事がある物ばかりなのは何故でしょうか？」

『鋭いですね。いえ、私このホテルを継ぐ前に通販にハマっていた時期があります……ホテル継いだ後経営が忙しくなって止めましたが……その時購入したのがこれらです』

「成程、つまり賞品の授与とは名ばかりでこのイベント自体客にいらなくなつた所有物を押し付ける為の……」

『それは間違ってます。イベントの賞品を何にしようかと考えている最中にそう思い立ちました』

「それは申し訳ありませんでした」

琢磨は頭を下げる

俺は琢磨を押し分け、喜好の前に立った

「すいません、俺のアンタに対しての本音、聞いてくれませんか？時間は取りませんから」

『な……何でしょう？』

表情を強ばらせて後退りする。すかさず俺は手を伸ばして左腕を強く掴む

「逃げないで下さいよ……すぐに済みますから」

『は……はい』

「俺、このイベント終わったらですね……『ある事』を心の中で決めていたんですよ……」

『その前に手を離してくれない？このままじゃ左腕が折れちゃいそ

うなんだけど……』

「それはね……『アンタをボコボコにする事』なんだよ……まあ手加減はしてやるから堪えて下さいねオーナー……」

『えっ……ちよっ……無視？いや、君の後ろの……うあああああ』

「ゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラ」

ホテル黒兎 - - オーナーの突然の入院により二週間あまり休みになる。ロコミやインターネットの書き込み等により主にバトルロイヤル大会の参加目当てに県内外から予約が殺到とは言えずともかなり来るようになり、結果的に喜好の初期の目論見は成功したと言える。除夜は何故人気があるのか不思議がっていたが、琢磨曰く『どんな人でも同じ条件で戦えて命や後遺症の危険がない事に魅力を感じている』らしい。実体験しない限り、または実体験した後でも現実味のない話だからか、スタンド能力の効果に関してはそこまで言及されてはいない

瀬上除夜 - - 布団を貰った後部屋に戻り熟睡。翌朝、松任に謝罪し、再会した古賀と話し込んだ

招待客達 - - 翌朝、家に帰った

TO BE CONTINUED…

経営者の夢の痕（後書き）

除夜は目的を達成しました（笑）

次回から何時ものような話に戻ります。では、次回も宜しくお願
い
します

謎を追い求める者(前書き)

ホテル黒兎でのイベント終了……

謎を追い求める者

「つまり今この春日部には……その『スタンド』って超能力を持つ奴等がうようよいるって事だな……」

「はい」

午前中に『ホテル黒鬼』から出た俺達は、しんのすけの家でひろしさんとみさえさん、そしてイベントで戦ったスタンド使い達に、俺達が関わっている事と俺達が今やっている事を説明した。当然、優太の事も『弓と矢』の事も

スタンド使い達は言わずもがな、ひろしさんとみさえさんも、あんな事が起きたのもあってすぐに信じてくれた

「そしてしんちゃんもひまもその『スタンド使い』になった……あなたの親友があなたを殺す為に……」

「はい……」

みさえさんの言葉に、俺は心に罪悪感に似た感情が沸き上がったのを実感し、拳を強く握った

そんな俺に対して宝来が後ろから肩を叩いた

「瀬上君のせいじゃないよ」

「ありがとう……」

「ごめんなさい、不快な思いをさせてしまったみたいね……」

「いえ、構いません……」

「僕達は何をすればいいんだ？何か出来る事、もしくはやってほしい事とかあるか？」

松任先輩が尋ねる

「あの……先輩？」

「どうしたの古賀さん？」

「シヨックじゃ無いんですか？あたしは稲庭さんからある程度聞いてましたけど……」

「シヨックを受けたけど彼がやっていた事も彼の死も済んでしまった事だ。それでああだこうだ言った所で始まらない。そうだろ？」

「そうですね。間違ってますよ先輩」

「君の目標は『沢登君の後始末』……だったね？それ、僕も乗らせて貰うから。どれだけ力になれるか分からないけど」

先輩は俺に向けて左手を差し伸べた

「『面白い事』とは限りませんよ？」

「じゃあ君は……君が僕と同じ立場で巻き込まれて内情を知ってしまつて、その上で黙っているのは面白い事になるのかい？」

「面白くないですよ」

最も、そう思えるようになったのは、貴方達のお陰ですけどね

俺は同様に左手を伸ばし、手をしっかりと掴む。先輩はそれに返してくれた

「で、古賀はどうする？乗るか？」

じっと見ていた本荘は、横でやや困惑しながら草加煎餅を食べている古賀にこころ尋ねる

急いで口に入れて茶を飲み、本荘を睨んだ

「瑪瑙ちゃんは勿論本荘君も……既に乗っているんだよね？」

「後勝海もな。まああいつは瀬上にべつたりだから、能力がなくて

も力になるうとするだろうけど」

古賀は立ち上がり、俺の左手の上に自分の左手を乗せた

「あたしも乗る、あたしも瀬上君の友達だから。それに、あたしだつて春日部の町が大好きだから！」

「古賀……」

「俺だつてそうだよ！」

テーブルに叩きつける音がする。ひろしさんが、両手をテーブルの上に置いて腰を上げていた

「そうだ、俺だつて春日部の町が、春日部のみんなが大好きなんだ！危ない奴がこの町にいて、俺達より年下な君達が、俺の大切な子供達がそいつ等と戦つていて、俺達が何もなくていい道理がある訳ないだろ！」

「無力でも、敵わなくても、やれる事がないとは思えないし言わせないわ！」

「そうだぞ！」

「お前は今はこつちじゃないだろ！」

野原夫妻は息を合わせて二人の間にいるしんのすけに向けて怒鳴った

「えーケチー」

「えっと……で、貴方達はどうしますか？」

庚が他のスタンド使い（木戸、櫻庭、東郷、鳥取、下関、揖宿）に訊ねる。彼等はすぐに答えを返した

「俺も無関係とは言えないからな」

「頑張るよー！」

「しゃーない……手を貸せばいいんだろ？」

「オーケー」

「私はこの春日部にまだそこまでの愛着は無いが今はこの地が私の住む場所だ。手伝う理由付けをするのならこれ以上もこれ以外もない」

「私でよければ喜んで手伝う……私にも春日部（こ）には守りたい人達がいるからな」

みんなの言葉を聞き、俺は涙腺が若干緩んだ

そつだ……理由は俺とは違つかも知れないが、その根っこは同じなんだ……。だったら共に頑張る事が出来るんだ！

「よっしゃー！みんな、俺を大将だと思って俺に付いて来い！俺と
いうリーダーの元、共にこの春日部を守ろう！」

……あれ？」

「何調子乗ってるの？」

「何か不快指数が急上昇したんだけど」

「キャラクターに合わない事するなよ瀬上君、面白くも何ともないから」

「あらひまうんちしてる」

「あー、ここにあるクッキー食べていいですか？」

「そろそろお湯沸かさんとあかな。少のうなってきた」

しんのすけや先輩達は俺に冷たい言葉を投げつけ、稲庭や藤方達は俺の事を無視している

……うん、もうくたばっちゃえばいいのに。うんと苦しい死に方で

両肩に、琢磨と宝来が無言で手をポンと乗せた。ありがとう、君達。愛してるぜ

「絶対に納得いかない……」

築十年も経っていないと思われる、鉄筋のアパートの一室で、一人の女性が机の上に置いた数枚の書類とにらめっこしていた。その書類には、除夜やしんのすけの顔写真が一枚ずつ貼られてあった

にらめっこしているのは、茶髪の混じった黒髪につり上がった目尻、スレンダーな体つきをしたこの女性、内地祐佳ないち ゆうかの職業は、刑事である今年度より本庁からタウン署に転属となったばかりの彼女は、すぐに最近春日部で起こっている怪事件の数々に目をつけた

どの事件も全てが迷宮入りをやむなくしている

理由は簡単。その全てがどう考えても『人間には出来ない』『不可能』という結論に達し、容疑者を絞り込む事は出来てもそこで行き詰まってしまうからだ。そう結論が出してしまった以上、たとえ逮捕したとしても証拠不十分ですぐに釈放がオチ、最悪冤罪でこっちが問題になってしまう

だから怪事件に関しては、殆ど野放し状態にならざるを得ないというが実状だった

だが、そこに現れたのがこの資料の顔写真にある青少年達。彼等は先々で怪事件に巻き込まれている。未確認情報ではあるが、放火魔の宮嶋や最近脱獄した13人の凶悪犯の内の四人の逮捕には、彼等の暗躍が大きく貢献しているという

何等かの形で関わっているのは間違いないのだ。事情聴取すれば、進展があるに違いないのだ

「違う……違う……じゃないんだけど……」
『どうやって調書を取るのか』
が一番の問題なんだよね……」

そう、それが最大の壁である

怪事件が起きてその時彼等がその場にいたとすれば事情聴取は可能だが深くは聞き出す事は出来ない。過去をあら探しすれば何か出て来るかも知れないが、それは別件逮捕だ

だから一番いいのは「怪事件の根本に関わっている」という言い逃れの出来ない状況を自分自身が目撃する事。これが理想的だ

「となれば尾行だわね。上の連中に説明しても許可なんか下りそうもないから当然非番とか勤務外時間にやるとして……動く可能性の高い日にやるのがいいか」

新聞やニュースの情報で怪事件の可能性のある内容が流れたら彼等は確実に動くだろう

何時になるか分からないが、夕方から早朝にかけてのニュースを見て、尾行は夕方辺りだ。土日祝日は兎も角、平日は授業がある。真面目な学生なら病気とかでなければ余程でない限りはサボりはしない筈だ

非番じゃなかったら有給休暇を取ればいい

「尾けるのに一番都合がいいのは……こいつね」

除夜の写真が貼られてある紙を持ち上げる

「部活動とか委員会とか、そう言ったのに無所属って聞いてるし、用事が終わったらすぐに帰るみたいだし……」

ふわーっと伸びをした後、ニュースの録画予約をして布団の中に入った

T O B e C O N T I N U E D …

謎を追い求める者（後書き）

今回は今まで蚊帳の外だったひろしとみさえが今春日部で起こっている事を知りました

後半出て来た新キャラは……何ていえばいいのかな？（笑）まあ登場させた以上は活躍させますが。次回から

これからも宜しくお願いします！

内地祐佳の尾行？（前書き）

何時も通りの一日。それは決して毎日が平穩に終わるとは限らない
……

内地祐佳の尾行？

「うわー……今日は何時も以上に遅くなっちゃったよ……」

時刻は午後九時半

一人の男子高校生が、必死で自転車を漕いで街灯を照らす道を通って走っていた

彼の名は（覚えて貰う必要はないが）堀越隆一^{ほりこしゆついち}、隣町の私立校の弓道部に所属している、除夜達とは一学年上の少年である

Q・その少年が何故この時間帯に必死に自転車を漕いでいるのか？

A・帰宅する為だ

Q・当然この時間帯はとっくに放課後は過ぎている。それなのにどうしてこの時間に下校しているのか？

A・所属している弓道部の大会が近く、その為通常以上に長引くが今日は特に長引いてしまったからだ

「全く……こんな長引いたら口々に勉強出来ないってのに……」

堀越は部長の顔を思い出し、軽く舌打ちをした

彼の所属する弓道部の部長は、部活に対する姿勢は真剣そのものだが、たまにそれが行き過ぎる場合もある。今回のようなギリギリまで部活動を行うというのはまだいい方で、平日に泊まり込みをしたり、テスト期間中にも関わらず部活動を行ったりも時折やらかす辞めたいと思った事も幾度とあった。それでも彼が部活を続けているのは、弓道が心底好きなのとそんな部長の姿勢に尊敬しているからである

勘弁してほしいと思った事はあるが……

自転車を漕いでいる途中、廃屋となったビルの門から、人影がぴよんと出て来た

「なっやば……」

このまま進めば轢いてしまう

急いでブレーキをかけ、ハンドルを切るも間に合わず、ぶつかってしまった。堀越の体は自転車から投げ出され、アスファルトの舗装に背中を打ち付けた

「痛ててて……いや、痛がっている場合じゃない！すみません、大丈夫です……か？」

ぶつかった人物を見た時、堀越は疑問符を浮かべた

全力で漕いだ自転車にぶつかったのだ。自分は怪我を負ったが、相手だって怪我を負っていないとおかしい

それなのに、その人物は怪我を負った様子は無い。それどころか、『ぶつかった地点からそれで体が動いてすらいなかった』

その人物は体の正面を堀越へと向け、足を進めていった

その人物の『異常性』を、その人物の『異質さ』を感じ取り、震えながらも、声を出す

「け……怪我は……してないんですか？」

「してないよ？かすり傷一つね……それより君は大丈夫？立てる？」

一歩一歩距離を縮めながら心配そうに声をかけてくるその、声からして男から感じる強い恐怖感

その恐怖感に耐えきれず堀越は

「うわあああああああああ」

喉の奥から、心の底から、叫び声を挙げ、自転車を立てて跨り、ペダルに足を置き

足に力を込めると同時、自転車に凄まじい衝撃が走り、横の塀に何がぶつかる音がする

それが自転車の後輪が吹っ飛んだという事象によるものだという事を、サドルから伝わった衝撃により理解した

吹っ飛んだタイヤを見ると、まるで『中心に強い打撃を叩き込まれた』かのように変形していた

この男が何かした事は間違い無い。だが、『何をしたのだろうか？

もしかしたら殴ったのだろうか？いや、そんな事は有り得ない。何故なら自分と男との距離は「二メートル程離れている」。拳が届く訳がない

どうなっているんだ？一体何なんだ？

男は腰の抜けていて立つ事の出来ない堀越の前に立ち、見下ろす

「髪の毛はいらないけど、耳はいい……他には……うん決めた……君の場合耳と、背骨と、後両手の小指だ」

「な……何のこ……」

突然ガムテープで口を塞がれる

「悪いね……これ以上騒がれたら色々と面倒な物でね……誰が相手

だろうが恐くはないけどね……」

震える足に力を込め、立ち上がる

すると、頭を押さえられ、地面に押し付けられた。必死で抵抗するが凄まじい力で押さえつけられている為、身動きが取れない

それだけじゃない。自分を押さえつけている相手に『触る事が出来ない』。更に『見えない』。相手は透明人間なのだろうか

「なあに大丈夫だ……君の『部品』は我が『コレクション』となつて永遠に残るのだから……」

翌朝

「寝過ぎしたー！」

「うわっ何除夜君こんな大声上げて……」

「義母さん何で起こしてくれなかったんだよ！」

「だって今日君朝食当番じゃないし……」

何時もは当番じゃなくとも自分が退屈なら無理矢理起こす癖に……

「大体さ、今六時半にもなってないよ。何時もそれより遅く出るじゃない」

「今日日直があるんだよ。昼はパン買って食べるから、朝飯何か用意してくれ。簡単なもんでいい」

「分かった。納豆ご飯とサバの味噌煮とほうれん草のおひたしを…
…今から作る」

「急いでいるのが分からのか！頼むから突っ込ませないでくれ、急いでるのマジなんだから！」

「はい、コーンフレークにアップルパイ。コーンフレークに冷たい牛乳かける？」

「いや、いい……」

急いでコーンフレークとアップルパイを口に入れ、胃の中に入れた後番茶を飲んだ

「行つてきます！」

「行つてらっしゃい」

除夜を見送った後、番茶を啜りアップルパイをお茶請けにしながら
ニュースを見た

『次のニュースです。春日部市で高校生が遺体で発見されました。死亡していたのは、春日部市に住む堀越隆一さん16歳で、今朝未明、公園で犬の散歩をしていた主婦が発見しました。尚、遺体からは両耳と両手の小指が切り落とされ、そして背骨と腎臓二つが抜き取られており、この事から警察は・・・』

怪訝な顔をしながらテレビの電源を切った

「こういうニュースを朝っぱらから流すっていうのは少しいただけないな……」

教室について窓を乾拭きしている途中、視界がいきなり遮られた

「だーれだ？」

「……稲庭だろ？」

「正解です」

このクラスの委員長が、窓ガラスの乾拭きを再開した俺の顔を覗き

込んだ

「?どうしたの瀬上君、あたしの顔をまじまじと見て」

「いや、お前……」

「ほえ？」

「たこ焼きか焼きそばか……お好み焼き食べた？」

「よく分かったね」

「今の自分の顔を鏡で見てみる！」

今の稲庭の口の周りには、ソースがべったりとついており、青海苔も付着していた

こいつはこれで家を出たのかよ

呆れながら俺はハンカチを取り出して力を込めてゴシゴシと拭き取る

「痛いよ瀬上君、もっと優しくしてよ」

「やかましい！メシ食い終わったら顔くらい洗え！」

「……何してるの瀬上君」

「宝来か……このバカ顔にソースや青海苔をべつとりつけて学校来てやがったんだよ！」

「瀬上君、今朝のニュース見た？」

「寝過ごしたからニュースも新聞も目を通してないがそれが？」

「拭き終わったら、話聞いてくれる？そのニュースで気になるのの一つあったんだけど……」

「暴れるなこら！」

「痛いよー！」

「……もう少しわかりそうだな」

「という内容なの」

「成程……」

H R 明けの休み時間

俺は宝来から朝に流れたという結構ショッキングな内容のニュースを聞いた

「で、警察はどう言ってるんだ？まさか……」

「そう、そのまさか……脱獄した13人の凶悪犯の一人の仕業だと見ているんだ」

「そいつは何をやって捕まったんだ？」

「分からない……」

「じゃあその死体が見つかった公園を教えてくれないか？少し調べる必要があるな……宝来、お前放課後暇か？」

「ごめん、今日クラス委員長の集まりがあつて……それで生徒会も……」

「そうか、それじゃ仕方無いな……」

「じゃあ稲庭や吉祥寺、それと会長も無理か」

「昼休みに琢磨とかにメール打つところ」

「さて……メールは打つといたし、一人でも来てくれればいいが……あれ？」

放課後、校門から出た俺は、何か妙な視線を感じた気がした

「まあいいか」

すぐに感じなくなっ
たし、気のせいとい
う事にして足を進
めた

内地祐佳の尾行？（後書き）

最初の方は非スタンド使い、つまり普通の人の視点でやってみました
五人目の凶悪犯です。行った犯罪がどういったものかは次回辺りに
スタンド関連の事件を追う内地祐佳が真相を知る為、除夜の尾行を
始めました。果たして彼女はどのようなのか？

次回もお楽しみ下さい！

内地祐佳の尾行？（前書き）

調査を始める除夜達と彼等に目を付ける内地、果たして……？

内地祐佳の尾行？

『アドベンチャー』と書かれた看板が立て掛けてある喫茶店。この店は県立星陵高校から大体300メートル程離れた所に建っている。値段は少し張るがコーヒーが美味しいというのが同級生からの評だが、俺はコーヒーは苦手で喫茶店ではココアかレモン、またはアップルティーしか注文しないのでよく分からない

今回、俺が集合場所に指定した場所だ。割合繁盛しているみたいで、殆どのテーブルにお客さんが座っていた

「この辺は評通りみたいだな……」

「あっ除夜君」

「早かったね、あたし達こっちだよー」

窓際の出入口から三番目のテーブルの席に、琢磨と古賀が向かい合う形で座っていた。どうやら来てくれたのはこの二人だけのようだ

俺は琢磨の隣に座り、ウェイターを呼んで飲み物を注文する

「すみません、レモンティー一つとチョコチップクッキー一皿」

「瀬上君コーヒー注文しなよ、ここのコーヒー美味しいのに」

「俺はコーヒー苦手だしメニューに載ってるもんなら何を注文しようが文句を言われる筋合いはねえぞ」

「繰り返します。レモンティー一つにチョコチップクッキー一皿で」

「はい、宜しいから持ってきて下さい」

ウェイターが立ち去っていくのを確認して、俺は二人に耳を近付けるように言って今回招集をかけた理由を説明した。メールではここに集まって欲しいとしか連絡していなかった為だ

もつとも、二人共大体の察しはついており、ほんの少しのやり取りで済んだ。終わった直後に俺の注文した物が届いた

「纏めると、今日俺達がやるのはこの事件が本当に『スタンド使い』の仕業であるのかの確認と探索、そして上手くいけばそいつの撃破、分かった？」

「はい」

「うん」

「じゃあ行くこうか、すみません、勘定頼みます」

「勘定頼みます」

俺の後ろのテーブルから、俺よりちょっと遅いタイミングで俺と椅子越しに背中合わせに座っていた年上の女の人がウェイターを呼んだ隣のテーブルの人がほぼ同時に勘定を頼むなんて珍しいなと思ったが、別段有り得ない事でもない為気に止めなかった

女の人は伝票を受け取ると「尿意を催してきた」と言って早足でトイレに向かい

俺はその女性とぶつかってしまった

女の人の下敷きとなる形で、俺の体は床に倒れ、背中を打ち付けてしまう

「あつすみません、大丈夫ですか？」

女性は俺の上に乗ったまま、顔を覗き込む

「平気ですよ。そつちこそ怪我はありませんか？」

「こつちも大丈夫です。それじゃ、本当にすみませんでした！」

俺の腹に手を乗せて立ち上がると、その女の方は急いでトイレへと駆け込んでいった

『随分とせつかちな人』だと思った

「瀬上君何してるの？瀬上君がいないと誰がお金払うの？」

「俺が全額払うの？」

話し合いの末、一番妥当に三人で割り勘という事となった

本荘がいてくれたらこんな話し合いは無かったろうなどと、金を財布から出した時思った

トイレの中

そのこの部屋の内の一つで、内地祐佳が液晶テレビみたいな機械の画面に映し出されたマップを見ていた

マップはここら一帯の物で、この喫茶店を出てすぐの所に緑色の反応が映し出されていた。この反応は少しずつ喫茶店から遠ざかっていく

「これでオーケー」

機械を内ポケットに入れ、トイレから出る

学校から出た除夜を尾行していた彼女は、除夜がこの店に入ったのを確認し、三分程置いて店に入り、席に座った。因みにそのテープルには既に学生のグループがいた為割り込んだのだが、それに関するの詳細はどうでもいいので割愛しておく

兎も角あまり聞き取れなかったにせよ背中越しに除夜達の会話を聞いていて、彼等が店から出ようとした時、見失ったりした場合に備えて用意しておいた発信機（防水加工）を取り付ける為、なるだけ自然な形で除夜に接触するようにした。結果、除夜の制服の裏側に発信機を取り付ける事に成功した

怪しまれるのではないかと思っただが、珍しい偶然か何かだとしか考えなかつたのか、それともこれから行う事で頭が一杯でそんなに気にとめる事じゃないと思っただのか、はたまたその両方か。理由は定かではないが、大して気にしなかつたようである

「それにしても……私って結構行動力とかある方なんだな……バレたらタダじゃすまないってのに……」

勤務外時間に、被疑者でもない人間を、勝手な判断で尾行しているのだ。バレたら告訴されたとしても文句は言えない

だが中断する事はもう出来ない。ここまでいった以上は最後までやってやる。どう転ぼうが責任は自分で取ってやる

そう意気込んで、伝票を掴んでトイレから出た

「遺体の発見場所はここ……なあ琢磨、本当に『そいつ』が一番可能性が高いんだよな？」

「ええ……いたやまこと板山丹の犯行が一番高いです」

「その人何やって逮捕されたの？」

「えつと……殺人に死体損壊……後傷害罪でしたね……経歴は、元々は正規の外科医でしたが……ある日から人間の健康な内臓とか目とかを嘘の診察で取り出してホルマリンに漬け込んで『保存』していたんです」

「殺人と死体損壊は？」

「患者に空気や煙草とかそういった身近な物から抽出した毒とかを注入して殺害した後、内臓や骨とかを取り出していたらしいです。殺人は明らかになっただけで最低18人……その中にはまだ小学校にも行っていない幼児も含まれているんです」

「何で脱獄させた奴はそんなんばつかなんだよ。もうちょっとまともなのいねーのかよ」

「まあ遺体発見現場からそんなに離れているとは考え辛い……風漬しに辺りを探せば手掛かりの一つや二つは見つかるだろ」

「何で？もう遠くに逃げてるって可能性は？」

「あんな。人間の体を分割するって結構手間と労力が要るんだぞ？あんなピンポイントの部分が無いなんてチエーンソーとかを用いてだと出来ない。被害者は無事な姿を昨夜まで確認されてる。つまり、殺されたのは昨夜になる。大体纏まって脱獄してからそんなに日は経ってないんだぞ。見つかる可能性の高い車とか電車とかを使うなんて考えられない。そんな間抜けなら脱獄してすぐに捕まってる。だから遺体発見現場から今もそんな離れてはいない筈なんだ」

「僕も同感ですね」

「そして犯行は夜行われているから未然に防ぐという意味合いも兼ねて遅くまで活動しよう。俺は適当な理由付けて遅くなる事を義母さんに伝えているがお前等は大丈夫か？」

「僕は一人暮らしですし、明日はバイト全部休みですから大丈夫です」

「あたしも予めちゃんと連絡入れておけば親そんなに厳しくないし」

「その連絡入れたか？」

「今入れる」

「事前に入れとけよ」

「もしもお母さん？」

「全く……」

「取り敢えず夜までいるみたいね……」

角に隠れて聞き耳をしていた内地は、三人の会話から三人のこれからの動きを大体理解した

自分のやる事は、三人を尾行する事と犯罪を未然に防ぎ、犯人を逮捕する事の二点だというのを改めて認識する。勿論優先させるのは後者の方だ

「警察手帳だけじゃなく銃も持ってくるべきだったかな？」

時刻は八時過ぎ

俺達三人は探索をするも、『らしい手掛かり』は一向に掴めなかった

「流石に連日に犯行を犯そうとする程バカでもないみたいだ……それとも既に俺達が動いていると見て……」

「兎に角今日はもう遅いし、帰りましょう。明日は宝来さん達も来れるようだから、続きは明日にしましょう」

「そうだね」

「それではまた明日同じ時間に『アドベンチャー』で……」

「その前にちょっと言いたい事がある」

帰ろうとする二人を引き留めた

「何か？」

「いや、今日学校出たら俺時々誰かに見られてるみたいなんだよ」

「ちょ……ちょっと待って！それってもしかして敵じゃ……」

「そうかも知れないしそうじゃないかも知れない……仮に敵なら俺が一人になる機会なんざ幾らでもあった訳なんだからその時に攻撃すればいいんだし……うん。まあ気を付けた方がいいってのは確かなんだ。お前等も注意した方がいい。それだけだ」

「どうやら今日の調査はこれで中断か……」

明日もここに来るのが分かった以上、ここに待機している方がいい。何も後をつけ回す事だけが尾行じゃない

「じゃああたしも帰るとしますか……確か明日は……」

「お姉さんお姉さん……」

上から声をかけられ、顔を上げた

清潔感の漂わせる黒髪、紅い口紅を塗った唇。そして裾に深い切れ込みを入れた白衣の上に灰色の肩掛けを羽織った男が、塀の上に座っていた

「板山……丹……」

「目は綺麗だし、歯並びも良さそうだ……手もスラッと伸びてる……決まった。君の『部品』で、我が『コレクション』に加える部分……後は中だが……それはじっくり見て決める事にしよう」

板山は塀から飛び降り、内地に向かい接近してきた

内地はとっさに落ちていた空き缶を拾い上げ、投げつけた

身動きは一切していないにも関わらず、当たる前に弾かれてしまった

「これは中々……だが残念だな……『今の』俺は空き缶や石はおるか弾丸すら効かないよ？」

余裕の笑みを浮かべ、ジリジリと近寄ってきた

内地祐佳の尾行？（後書き）

内地さんはいきなりピンチです。丸腰に近い状況でどうするのか？

次回も宜しくお願いします

内地祐佳の尾行？（前書き）

板山に目をつけられ、絶体絶命？の危機に陥る内地……

内地祐佳の尾行？

迫ってくる板山を前にして、内地は自分の頬を叩いた

さつき起きた謎の現象にパニックとなり、「何をすればいいのか」。それを考える事を怠ってしまった

そんな自分を恥じつつ、上着の内ポケットに入れておいた警察手帳を突き付けた

「動くな、警察だ！あんたを脱獄と殺人容疑で逮捕する！」

「何だお巡りか……じゃあ仕方無い……」

両手を挙げる

すると、内地は、自分の首に強い圧迫感を感じた

「うが……あ……」

「見えない腕」が、自分の首を掴んでいる。その腕力は、常人のそれとは思えない程だ

まるでプロレスラーが、力強く掴んでいるかのような、いや、もしかしたらそれ以上の圧迫感。その後、自分の足から、靴底と靴下越

しに感じていた地面の感触が無くなった

確認出来ないがしなくとも分かる。体が少しだが確かに「浮かんでいる」。自分の首を掴んでいる見えない腕が、自分を持ち上げている。さつき空き缶を弾いたのは、これが答えだったのか。振り払おうと首を掴んでいる指を触れようとするが、触る事が出来ない。存在している筈なのに

「さつさと殺した後……取り出すもんを取り出すか……」

ギリギリと更に『見えない指』の力が加わり、内地の瞳孔は、白目を向こうとしていた

「ゴリアー！」

「調査して正解だったな……そしてビンゴだった。この事件は『スタンド使い』による物だった！」

俺はたった今殴り飛ばした口元を拭き取る板山丹を見る。板山は、俺をジッと見ている。スタンドに首を絞められていたあの女の人は、琢磨と古賀が異常がないか確認していた

「随分と酷い真似してくれるな……人が楽しんでる途中に横槍入れちゃ駄目だってお父さんに教わらなかつたのかな君は……」

「残念だったな……俺父親顔すらも知らないんだ……孤児だからな」

「そいつは失礼な事を聞いた……だが……お前は俺の楽しみに横槍を入れた、これは事実！この罪……お前の『部品』と『命』をもつて償って貰うかなあ！」

そう言つて板山はスタンドを発現させる

黄色を基調とした、体や装備のあちこちに赤十字の模様を描いた、首から確認出来る棒に、50センチはありそうな面長の、どす黒い、埴輪のような頭部を嵌め込んだ人型のスタンドだ

俺は『プラネット・ルビー』の拳をスタンドに叩き込む。ガードしようとしていたが、構えるのが間に合わず、命中した

「ぐっ……」

「動作の緩慢さを見る限り……どうやらあんなのスタンド、スピードはそんなにないみたいだな……」

「ギブアップは？」

「認めないに決まつてるだろ……ゴラゴラゴラア」

「う……ふ……はあ……はあ……」

「気付きましたか？」

内地の意識がハッキリとすると、視界に二人の男女が飛び込んできた。両方共今回の尾行の際顔を見ているので知っている。男の方は、瀬上除夜同様に前もって調べてあるので特に

「警察手帳、あなたのですよね？」

落とした警察手帳を渡そうとする古賀。内地は「ありがとう」と言いながら、手帳を受け取る

その際古賀は、内地の顔をじっと見ている

「あ」

何か思い出したかのように、声を上げた

「須藤さん須藤さん、この女の人、「アドベンチャー」で瀬上君にぶつかった女の人だよ」

「あっホントだ……刑事さんだったんですね。やはり事件の調査で

すか？」

「あついや……うん」

少しばかり回答に戸惑ってしまった事に、「あちゃー」とぼやく。これでおかしいと思われなかっただろうか

少なくとも須藤琢磨の方は自分を見る眼差しに若干ながらも懐疑の色が混じった。そして、彼は内地の耳元に口を寄せ、そつと呟いた

「後でじっくりと話をしましょう。今は成り行きを見ていて下さい。言っておきますが、決して手出ししようにしないで下さい。貴女じや除夜君の邪魔になるだけです」

反論しようとしたが、その前に除夜達を見るよう、ジエスチャーさされた

見ると、次々とその身にダメージを負っている板山の姿があった。相対している除夜は何もしている様子はない

「何か……今回は早く片が付きそうだね……あいつ、防御も間に合っていないよ」

(え?)

古賀のその発言に、おかしいと感じる内地。まるで試合を傍観しているかのような口振りだ

頭によぎったのは、あの不可解な現象。もしかしたら瀬上除夜も、同じ事が出来るのではないのか。そして、『それ』には『見える人』と『見えない人』がいるのではないか。そう内地は頭の中で組み立てる

「まだ決まった訳じゃないですよ古賀さん……あいつはまだ、『能力』を使っていない……」

（『能力』？能力って……『超能力』とかの事？）

同じく傍観の出来る琢磨の台詞の中にあつた不可解な単語を耳にし、内地はどういう事か分からなくなった

大分弱った所で、『プラネット・ルビー』は首を狙ってパンチを打ち込んだ

スタンドのパンチは見事に命中した。が

引つ込める前に、板山のスタンドが打ち込んだ右腕の手首を、両手で掴んだ

「全身を一気に『固めて』から気に入つた部分を取り出す事にする

よ

握られた手首の部分から、茶色に変色していく

残りの左手で、急いで指をこじ開けようとするも、触れた指の先端も変色していつている。それにスタンドのパワー自体あっちのが上で、微動だにしない

「『SHUFFLE』！」

俺の変色していつている右腕の少し上の部分までが無くなった

板山は尚も俺に襲い掛かろうとするが、俺は横に瞬間移動し、顔面に拳を叩き込んだ

「痛いな全く……俺戦うの駄目なのによ」

フラフラとしながらも足を動かし、塀にもたれ掛かる

そして両手を塀に着け、楕円の形に色を変え、掌底で押す。すると、変色した部分が『ずれて』、向こう側に落ちた

板山はそこに潜って姿を眩ました

「追い掛けよう！」

「今はそれより……」

「あんた達……」

横から、第三者の声が聞こえた

体を向けると、そこには、喫茶店でのあのそそっかしい女の人が出た

「怪我はないですか？」

「無いわよ。あんた達のお陰で助かったわ……それより……」

「？」

「あんた達、一体何者なの？つい今一体何が起こってたの？答えて。私にはそれを知る権利がある筈よ」

「除夜君、実はこの人刑事さんなんです」

それを聞いて納得した。学校を出てから感じるあの自分を監視しているかのような視線は、この人からのものだったのか

納得すると同時に、ある疑問を持った。何故自分が刑事さんに尾行されなければならぬのだろうか

それを察したのか、目の前の女刑事さんは言った

「積もる話は沢山ありそうね……」

「それはお互い様だと思いますが……」

「そうね……取り敢えず、あんた達はこれからどうするの？それが決まってから、お話ししよう」

女刑事さんは俺にそんな提案をする。俺もそうした方がいいと思った

琢磨も古賀も同じ意見らしく、取り敢えず三人で集まった

「どうするの？あの人に喋るの？」

「喋ってくれるまではたとえ事件を終えたとしても帰らせてくれなさそうだし」

それに、あそこまで見てしまった以上、下手な嘘や言い訳で素直に引き下がったりしないだろう

だったら今全部話した方がいい

「それより、あいつだが……今日中に倒さないと俺が後々面倒な事になりそうだ」

「ほら」と、変色した左手の指の先端を見せる

因みに琢磨が持つていった俺の右腕はまだ戻して貰っていない。どうなるのか分からない以上無闇に戻すよりも、別空間に保管しておいた方が危険が少ないという琢磨の意見からだ

その意見は正しいものだというのが少し調べてみて実感した

「触ってみ。変色している部分」

「うわっ固い」

「だろ？」

「つまり……あいつのスタンド能力は『物体を固くする』能力という事ですか？」

「その解釈で間違っていないと思う。そして射程距離から離れても能力の効果が持続するタイプだ。今あいつが何処にいるのか知らんが近距離パワー型の射程距離はもう越えている筈だ」

「でしようね」

「そして一番ヤバイのは……これだ」

俺は、奴が穴を開けた塀と、立て掛けてあるこっち側に持ってきた

くりぬいた塀の一部を指差す

「この二つをよく見比べてみる。塀はその部分以外は一切色が変わってないぞ」

「本当だ……」

「一部を固めた場合、その境目の結合が脆くなっているという事でしょうね……」

「分かるだろ？さっき俺が言った意味……こんなになってまともに日常生活が送れるか？」

二人共首を横に振った

うん。こんなんじゃ物を持ったり触ったりしたら固まった部分が外れてしまうし、琢磨にずっと持っていたまま家に帰ったり学校に登校したりとかすればどうなるのかは想像を巡らせる必要はない

「という訳で早々にあいつを倒して能力を解除する必要があるという訳だ。そこまでで何か質問は？」

「無いです」

「異論は？」

「ありませんよ」

「よし、こっちの話は終わった。問題は？」

「無いよ」

「という訳で待たせたね女刑事さん。じっくりと話をしようか」

「漸くかい……」

話していたのは数分程度の筈だったのに、一時間以上待っていたかのように感じたわ。と、愚痴を言う

その後、どっちが最初に質問するかをジャンケンで決め、勝った為まずは俺が尋ねた

内地祐佳の尾行？（後書き）

今回は、追撃と本格戦闘を予定しています

それでは、次回も宜しくお願いします

内地祐佳の尾行？（前書き）

内地を加え、追跡を始める除夜達

内地祐佳の尾行？

「以上。納得して頂けましたか？」

俺は内地さんに、すぐに説明する必要のある知識、つまり、俺達と奴に『スタンド能力』がある事と『スタンド能力』の大体の法則を説明し、内地さんは俺に俺を放課後から尾行していた事と何故尾行しようとしたのか、その動機を説明した

「……あんた何でそんな不機嫌そうな顔付きしてるの？」

「それ本気で言ってるならぶん殴りますよ？」

発信機まで付けられたんだから不機嫌くらいにはなると思う

まあ最も、バレたら罰せられるのは勿論、告訴されるのも承知、覚悟の上でやったとハッキリと言いつつ放った為、怒る気は殆ど無くなった。あそこまで正直に言われると、尊敬の念さえ抱かせる程清々しかった

閑話休題

内地さんは何やら深く考えているようだった。そして、口を開く

「あんた等さ……何ふざけた事言ってるの？超能力？スタンド使い

？そんなのある訳ないじゃない！こっちは真剣に聞いているのよ！からかわないで真面目に応えてよ！」

言い切った後、俯けて手を額に当てる

「と言いたい所なんだけどね……」

その体勢のまま、深々と嘆息をした

「さっきのアレ見た後じゃ認めるしかないわね。あんなのトリックじゃ出来ないし……それに、これで「辻褃が合うしね」……「ここ最近春日部で起こっている怪事件の数々にも、何故それらの捜査が途中でどうしても行き詰まりになってしまおうのかも……」

「じゃあ信じるんですね」

「信じるわよ。というより信じるしかないでしょ。こんなふざけた現実上の連中にどう報告すりゃいいのよ……」

「何も変わらないと思いますし、報告しなければいいだけなんじゃないですか？」

頭を掻きながらばやく内地さんに、琢磨は進言する

俺も同意見だ。報告して、信じてくれてそれで何か変わるのか？何

も変わらないだろう。それを一番分かっているのは警察官である彼女だ

「……一から十まで納得出来た訳じゃないけど、そうよね。信じてもらったとしてもそれでどうする事も出来ないし」

深い溜息をつく

「あれ？ちよっとおかしいわよ」

「何が？」

「いや、板山の奴、何でその能力を過去の犯罪で使わなかったの？それ使ってたら少なくとも起訴はされなかった筈よ？それに何であんな等が『そいつに自分達と同じ能力がある事』を知ってるの？」

あー、やっぱ疑問に持つよな。俺達が話したのは『俺達と奴がスタンド使いである事』と『スタンドの原則』だけで『発現経緯』とかは話してないもん

「それに関しては……どうしても長くなるので後で……」

そう琢磨が言った

「ちゃんと聞かせてね……話は変わるけど、あいつを見つけるのは困難だと思う」

「その心は？」

「あいつは脱獄してから昨日事件を起こすまで事を起こさなかった。起こしていたかも知れないけど、少なくとも露見するような真似はしなかった……それまで何をしていたのか。私だったら自分の拠点を決めた後、そこを調べる。逃げ道や隠れ家になりそうな場所とか、そう言ったのを徹底的にね」

その意見に、古賀は感心のあまり拍手した

間違っていないと思う。奴のスタンドは一对一で向かい合って戦うというには向いてない

「となればやっぱり『待ち伏せして奇襲』だよな……」

「ストップ」

先頭を歩いていた琢磨が、立ち止まった

「どっしたの？」

「いや、途中から、『音』が変わった……」

「『音』？」

俺は聞き返す。琢磨はコクリと頷き、足を指差した

足を見下ろすと、必然的に足場が目に入る。それを見て、俺は琢磨が何を言いたいのかを理解した

「僕達が探すまでもなく、あいつは僕達の前に再び姿を現すつもりだったでしょう……勿論僕達を殺す為だね」

「そうだな……」

俺達の足元の地面は、俺の指先同様、茶色に変色していた

『奴が何処にいるか』、これで分かった

「どっしり……」

「どっしりもこっしりも……向こうから招待してくれたんだ。来ない訳にはいかないだろ……琢磨、古賀、気を引き締め直せよ！」

スタンドを発現し、スタンピングする

すると、変色していた部分が下にずれ込み、落ち、そして、盛大な

音と飛沫を立てた

「『下水道』……ね。確かに隠れ家には最適だわね。こんな所好き好んで来る所じゃないし」

「あんまり前が見えないね」

「そりゃそうだろ」

今の時間は夜で、ここは下水道、言っしまえば穴の中。暗いのが当たり前だ

俺達が落ちた事で抜けた穴から届く光もたかが知れている。夜まで活動するのだから懐中電灯くらい持つてくれば良かったと後悔すると同時に、光が灯った

「持つてきておいて正解でしたよ……」

「『持つてきておいた』んじゃないく、『持つてきておいたのを出した』んだろ？」

その手に懐中電灯を持っていた琢磨に、そう返した

「懐中電灯の他に蠟燭とか、ヘッドライトとか、色々用意しておきました」

「お前頼りになるな」

懐中電灯を受け取り、点けると、その先の水面の一部が、『茶色に変色している』のに気がついた

しかも、その部分は徐々に広がっている。いや、水面の波の様子から、『こちらに近付いてきていた』の方が正しい

「水面を固くすれば、足場が出来る。形のある『固体』と違って流動する『液体』なのだから引き剥がす必要はない。固めたのが水面だけなら浮いているのでちょっと力を加えたら容易に動く」

スタンドを背後に出した板山が、手漕ぎボードの半分程の広さの固めた水面の上に乗っていた

その両手には、長い棒が握られている。まるで昔の船頭のようにだ

「お前等がたつた今引つ掛かったような『落とし穴』を別地点で仕掛けている最中に大きな音がしたからもしかしてと思っただが……」

言いながら、近付いて来る

ある程度近付くと、想定外の行為に出た

「ほっと」

何と、板山は水の中に飛び込んだのだ。大きな水音がして、水飛沫がかかる

奴の影は、泡を立てながら俺達が現在足場としている抜けた地面の下へと向かっている

「飛ぶぞ！」

そう合図すると、俺達は横に飛んだ

全員が着地すると、半分が変色し、真っ二つに割れた。水面から奴が手を伸ばし、そして水から顔を出し、変色していない方に乗り込んだ

「この程度は読まれるよね……陸上で接近したらこっちがやられるのはさっきのやり取りで学習しているから……近付かずに攻撃しよう」

スタンドの左手が足場に置かれ、すぐに離すと同時に右手でそこを叩く。そして右手で何かを投げつけた

ガツという音がした。内地さんの右頬の皮は裂け、そこから血が出ていた。彼女の後ろには、『茶色い折り紙程の大きさの薄い円盤』が、舗装された壁に、深々と突き刺さっていた

さっきの動作から見ると、足場の表面を固め、それを剥がした物か……随分と面白い攻撃を仕掛けてくる……

次々と薄い円盤を作り、容赦なく投げってくる。俺はスタンドで防ぐだが、片腕だけの状態では防ぎきれなかった。それどころか防いでいた手の甲も、向こうのが攻撃力が上だという事の証明かのように、ざっくりと切れていた

「接近はさせねえ」

「じゃあ接近出来るようにすればいいだけだよな」

そう笑顔で言う古賀は、『インヴィジブル・キッド』を出して俺の前に出て来た

「さて………始めますか」

「無理すんなよ」

「瀬上君程はしないから」

板山は円盤を投げつけようとするが、それよりも前に『インヴィジブル・キッド』が行動を起こした

『インヴィジブル・キッド』はまず右手を胸まで持っていく、その指を親指と小指以外折った

「あんだ……何をしているの？」

内地が尋ねる。彼女にはスタンドは見えないが、それでも板山が古賀へと目を凝らしているのを見て何かをされているというのは分かった

「グオっ！」

古賀に視線を向けている板山の後ろに、除夜の傍にいた琢磨が出現し、板山の後頭部に向けて『SHUFFLE』の拳を叩き込んだ

『SHUFFLE』は更に攻撃しようとするも、板山は立ち上がってすぐに水中に潜った。琢磨は除夜の隣に戻る

「な……何が……」

「琢磨は距離を持っていく事で瞬間移動が出来る。で、注意を古賀

が能力で引き付けていたんだよ」

「『スタンド』って……結構何でもありなのね……？」

内地が感心していると、水音がしたので顔を向けると、水面から板山の腕が出ていた

腕が伸びきると、すぐに水中へと引っ込んだ。能力を使ったのか、飛沫が飛んだ状態でそこが固まった

その位置から10センチと離れてない所で、また腕が飛び出て、すぐさま引っ込む。能力で飛沫を立てた状態で固定された

その動作を、何度も、何度も、繰り返し返す。その度に『飛沫を立てた状態で固まった水面の一部』がどんどん出来る

数が五十を過ぎた所でその行為は止まり、今度は、水面全体が、茶色く変色していく

(ちょっと待て……これはまさか……)

除夜はこれを見て、『ある物』を連想する。そのある物とは――

「(『スパイク』……) みんな、今すぐに」

指示を出す前に、固まった水面は卓袱台返し¹の要領で引っくり返された。固まった飛沫の面が、除夜達²に迫る

上の部分が壁にぶつかると、板山は裏側に手を当て、勢い良く押した

内地祐佳の尾行？（後書き）

待たせてすみませんでした

次回もお楽しみに

内地祐佳の尾行？（前書き）

板山戦決着です

内地祐佳の尾行？

鋭いスパイクの生えた壁が、俺達に迫る

俺は『プラネット・ルビー』を発現し、止めようとすも、裏側で押している奴の『スタンド』の方がパワーはある。しかも俺は現在片腕が使えない。『プラネット・ルビー』が必死に押し返そうとしても、その気配は全く無く、徐々に徐々に後ろに下がっていつている途中で古賀が『インヴィジブル・キッド』で加勢してくれたが、速度が少し遅くなっただけだった

「せめて両腕が使えるば……」

「ごめん！」

俺の後ろにいた内地さんは、そうやって俺の肩に足を乗せ、壁の縁を掴んで飛び越える

「ガッ！」

壁越しに、奴の悲鳴が聞こえた。どうやら内地さんの攻撃は成功したらしい。その隙を逃さず、俺達は壁を力一杯押し返そうと腕に力を込め

ようとした途端、壁はただの水に戻った。押していた物が突然無くなった事により、俺達は水の中に飛び込んだ

「うえ……服びしょびしょ……」

「さて……水の中に飛び込んでくれてありがとう……」

板山は、スタンドの左手で内地さんの首を持ち上げ、固めた水面の上に立って俺達を見下ろしていた

右手は水面につけており、そこから水面の変色が広がっていつていた

「兎に角上がるぞ古賀」

「させるかよ」

古賀の手を掴み、上がろうとする俺に向かって内地さんを放り投げた。腕一本しかなく、その手が空いていない俺は、飛んでくる内地さんを胴体で受け止める

それでバランスを崩し、転んでしまう。手を掴んでいた古賀も同様だ

底に足をしっかりとつけて肩から上を水面から出すが、遅かった。変色は、既に俺の目と鼻の先まで進んでいたのだ。普通に歩いた所で、上がる前に固まって動けなくなってしまう。俺の能力だとせい

ぜい二人だ

だから俺は琢磨に顔を向けようと首を動かす。その動作を始めると同時、先程も聞いた『堅い物に何か突き刺さる音』が聞こえた。その音が出た方向は、俺が顔を向けようとした方向と一致していた

「いや、除夜君……彼、どうやら僕に何もさせるつもりはないみたいです……」

苦々しく笑う琢磨は脇腹を右手で押さえ、顔や腕に数ヶ所、出血から見て深そうな傷を作っていた。後ろの壁には、『固めた何か』が刺さっている。その内幾つかは血が付着していた

「結構深く裂かれたみたいで……ちょっと今立っているのも辛いんです……気を抜いたら倒れそうで……」

脇腹を押さえている右腕は、肘からポタポタと血が滴り落ちていた。無理して平気そうにしているが、相当ヤバいのは間違い無い

しかも、俺達の周りの水面はとっくに固まっており、動くに動けない状況。スタンドで叩き割ろうとしても罅さえ入る様子はない

「無駄だ。俺の『スタックド・アクターズ』はどんなに強い衝撃でも破壊する事は出来ないし、どんな化学反応にもその性質が変化する事は絶対ない……まさに『人体』のコレクターである俺に相応

しい能力……そう思うだろ？」

「あなたの悪趣味に同意なんかするつもりはないわ！」

内地さんの一喝に、板山はビクつく。それが演技だとは簡単に分かった

「うわっ 怖い怖い……さて……まずは厄介なスタンド使いからだ。大人しくしていれば、すぐに済むよ……」

板山は、歪んだ笑顔で俺に接近する

「悔やんでも悔やみきれない……」

「？」

「あなたの能力……スピードが無いからと、一対一での戦闘に向いてないからと軽く考えていた……かなり甘かったよ」

「懺悔ならあの世でやりな」

「誰が懺悔していると言った？」

「違っのっ？」

声が少し荒くなった。どうやら気に触ったみたいだ

「違うに決まってるだろ……しているのは『反省』だ。この事に対してまだ俺は誰にも許しを請う必要があるのか？まだ誰も死んではいないし……状況が悪いってだけで負けてなんかいないから……」

俺は口で大きく息を吸い、古賀と内地さんに向かって、叫んだ

「古賀！『インヴェジブル・キッド』を水面下で発現させろ！二人共、五秒したらその場で二回ジャンプだ！」

「『スタックド・アクターズ』！」

俺に向けて奴のスタンドが拳を振り下ろした。こんな身動きの取れない状況では、動作の遅いも早いも関係無い

振り下ろされた拳は命中する前に、付け根から『消えた』

「『SHUFFLE』……放った拳を、肩から持っていた……」

「サンキュー琢磨、お前は本当に頼りになる……そして……古賀！内地さん！跳ぶぞ！せーのっ！」

足に力を込め、跳んだ

足場が大きく揺れた事により乗っている板山は転倒しかけるも、手を足場につける事でバランスを取った

が、二回目のジャンプの時、足場が突然ひっくり返った事で、無駄となった。板山は水の中に落っこちた

何故足場がひっくり返ったのか、それは、スタンドが持ち上げたからだ

古賀に水面下にスタンドを出すと言った時、俺も『プラネット・ルビー』を水面下で発現しており、その際俺の考えていた作戦の内容を具体的に説明した

スタンドを用いれば、水中でも会話する事が出来る。内地さんはスタンド使いではないが、俺が何か考えた事は悟ってくれたのか、突然の提案に何も言わなかった

跳んで、二回目のジャンプの際に一体の近距離パワー型のスタンドで、思いつ切り下から押し上げた

「ぶはっほっ」

「咳き込んでる隙があるのか？俺達はお前に現在進行形で近付いているのよ」

「くっ……解除しろ、『スタックド・アクターズ』！」

俺達を固定していた水面がただの水に戻った為、俺達は真下へ落下する

完全に落ちる前に、俺は靴を脱いで奴に投げつけた。奴はスタンドを前に出して弾いた

「甘い……俺のスタンドは動作は鈍いが、人間の力で投げた物を弾くくらいは出来るんだよ」

「甘いのはそつちだ。そんな事は想定内だ。俺が靴を投げたのはお前に攻撃する為じゃない……お前の後ろを取る為だ」

靴を『軸』として瞬間移動。どうにかギリギリ後ろを取れた

奴が振り向く前に俺は奴の後頭部を掴み、持ち上げる。脇の間から古賀が『インヴィジブル・キッド』を発現させたのを確認すると、手離して膝を曲げた。背中を死角にしているので何をやっているのかは分らんが、術中にハマった以上俺に気付く事はない

悠長にもしていられないので、ここで叩く

「死刑になるまで時間はあるから、その間たっぷり懺悔しろ……」

恐らく聞こえてはいないだろう。それは承知だ。ただこれを言わないと俺の気が済まないだけだ

「ゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラゴラアッ！」

「取り敢えず、署と病院に連絡したから……」

「助かります……」

上着を脇腹にしつかりと縛り付けた琢磨が、携帯電話を片手に持った内地さんに礼を言った

板山をボコボコにした俺達はその後、琢磨に止血を施し、手錠を奴にかけてマンホールから下水道を抜け出した。俺達は『内地さんが独自（というより独断）で事の発端である事件の調査をしている時に居合わせた為巻き添えを食った』という形の参考人として署まで同行する事となった。大丈夫かと聞いたが彼女は

『どうせ本当の事喋れる訳ないし、そっちのが都合いいでしょ。上司からの小言かせいぜい始末書書けば済むしこっちとしても都合よ』

と、笑いながら言った

参考人だから聴取は受ける事になるだろうが、適当に話を合わせるかそれが出来なければ白を切り通せ、任意同行なんだからいっそち

よつと質問応えたら帰ればいいと言われた

「まあ確かに内地さんにとっても俺達にとっても好都合だな」

「勢いで犯罪行為おかしているもんね」

「悪かったって言うてるでしょ。もうしないわよ。する意味ないし。はい」

内地さんは俺達にコーンポタージュを渡した

「これは？」

「近くの自販機で買ったコーンポタージュ」

「何で？」

「犯人逮捕の助力をしてくれたささやかなお礼」

「助力というより殆どあたし達でしたよね」

「しゃーないでしょ。私や何も出来ないんだから」

本体・板山丹（スタンド名・スタックド・アクターズ） - 再起不能
再び刑務所に収監

須藤琢磨 - 脇腹に数針縫つた後、数日程入院

To be continued...

内地祐佳の尾行？（後書き）

スタンド名はフー・ファイターズの楽曲から。ぶっちやけスタンド
名考えるの忘れてました（笑）

今回は、奴を出そうかと思えます

では、これからも宜しくお願いします

目黒智則(パンテラ)(?) (前書き)

遂に本格始動する『あいつ』……

目黒智則（パンテラ）？

「へえ……つー事はあんた……表に出るの？」

『ああ……につくき沢登優太や俺の生み出した「スタンド使い」共が忌々しい瀬上除夜を倒してくれるだろうと思ひ、自分から動くのは我慢していたが、今の今まで奴がお天道様の下で歩いている事実からそれは甘い認識だと理解したよ……』

「そうか……それで一つ聞いていいかな？」

『何だ？』

「何で僕の元へと訪ねてきた？」

『何だそんな事……簡単だ。お前の力を借りたいが為だ……』

「その心は？」

『単純な話だ……俺の『サクリファイス・オブ・ヴィクター』はあれから成長を遂げ、力をつけた……だが時の流れは平等、成長したのは奴等も同じな筈。だから……』

「奴等を倒す確率を上げる為に、僕と組む事にしたという事か……」

『そうだ……「誰かと組んで敵に挑む」のはあいつ等の専売特許ではない……向こうが徒党を組んでいるのであればこちらも真似ればいい事だ』

「その考えに対しての異議申し立てはないけど……何で僕を選んだんだ？」

『俺同様沢登優太を恨んでいるから手を貸してくれると思ったからよ……どうだ？手を組まないか？』

「誤解しないでほしいな……確かに僕は沢登優太を恨んでこそはいるが瀬上除夜に対しては何の恨みもない……」

『それならその恨みと憎しみは何処にぶつける？』

「……………」

『俺が沢登優太を始末したお陰でお前はその内なる憎悪を奴にぶつける機会を永遠に失ってしまった……憎悪の念、憎しみの炎と言うのはそう簡単には消えはしない。本人の意思に関わらずな……』

「……………それで？どうするの？」

『？』

「どうやって奴をおびき寄せせるんだ？まさか奴の家に自分の居場所を記した地図を送りつけたりとか？」

『心配するな既に手は打ってある……連中もバカじゃない。近い内にそれに気付く筈だ……』

「思ってた以上に相当とんでもない事態に陥っているのね……今の春日部……」

「うん」

板山丹を倒した翌日の夕刻

焼き鳥デスペラードにて、サイダーを飲みながら、向かい合わせに座っている内地さんに、昨日説明せずにいた『矢』の事を含む重要な部分の説明をした

「それにしても……あんな摩訶不思議な能力を持った奴がここにこんなに集まっているなんてね……」

レバーを食べながら、店を見渡す内地さん。現在この店には、宝来と勝海が俺を挟むように隣の椅子に座っており、お座敷にはしんのすけ、稲庭、藤方、塩屋、本荘、古賀、ロンディネ、吉祥寺がモツ鍋をつつき合っていた

「忙しいから来れないだけでもっと大勢いますよ」

「へーもっと大勢ね……」

宝来の言葉の意味を理解し、彼女は一瞬フリーズした

「もっといるの？」

「もっといるの」

勝海が手羽先をかじりながらオウム返しに言う

「どうなってんのよ本当に……てかこれ本当に現実なの？ドッキリ番組？」

「どんだけ大掛かりな企画なんだよ」

「何の準備も心の用意もなく突然こんなデタラメな現実突き付けられたんだから脳味噌が現実逃避してもそんなおかしい事じゃないでしょ……」

「そう言う時は深呼吸するのが一番だぞ」

お座敷のしんのすけが口を出す

そして藤方が横に並び

「はい吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー、吐いてー、吐いてー、吐いてー……」

「死んでしまっわ！」

内地さんは息を整えながら藤方をぶん殴った

「市民を守るべき警察が民間人に暴力振るってええんか？」

「この場合一番問題あるのは君だと思っよ？」

ガラナを飲みながら冷静に言う勝海。うん、俺も同意見だ

息を整えた内地さんは水を飲んだ後、椅子に座り、再び俺へと視線を向ける

「全く……こっちは普通の刑事さんだつてのに、とんでもない事に巻き込まれちゃったわね」

「すみません」

「謝らなくていいわよ。こっちが熱くなって勝手に首突っ込んだんだし……」

「どっする？今なら忘れる事が出来るけど……」

そう言うと、内地さんは俺の肩を強く叩いた

「あのね、私は『警察』よ。私は警察官である自分に誇りを持っているんだから、忘れるとかそんな事出来る訳が無いでしょうが……出来る事くらいやらせなさい」

「おお、父ちゃんや母ちゃんと同じ事言ってる！」

「『出来る事』？」

「情報収集と提供くらいなら警察でも出来るわよ。何処で何が起ったのかとか、ね。勿論情報を一般人にむやみやたらに教えるのはいけない事だからそれには黙って貰うけど……」

「黙っているだけでいいの？」

「うん。黙ってくれるんなら情報提供くらい安いもんだよ。私じゃスタンド使いをどうする事も出来ないんだから」

涼しい顔をしているが、その表情には、声には悔しさが含んでいた『自分達が何かしないといけない』のに『自分達では何もする事が出来ないから人に頼る』のは、これだけの事なのかと口に出さず思った

「気を取り直して確認するけど、あんた今、例の『矢』を奪った奴を捜しているんだよね？」

「ああ、うん」

「『矢』に刺された犠牲者……各地で発見されているんだけど、その中で特に多く見つかっている『場所』があるの……そこを捜せばもしかしたら……」

翌日、河川敷

内地さんからの情報で、ここが『特に犠牲者が出ている場所』らしいので、放課後に早速調査に向かった

メンバーは俺と宝来の二人。あまり多く連れてきても奴は俺達の情報を得ているだろうし、そうでなくとも大勢で動くのは目立ち過ぎるそれに内地さんも言っていたが、これが俺を誘き出す為の『罠』である可能性だつてある

まあ、その『罠』を逆に利用する為に少人数での行動だ

昨晚、相手になったつもりで自分ならどうするのかを考えてみた

もしおびき寄せて襲い掛かる事を前提にした場合、俺が奴だったとしても少なくとも複数の人間がターゲットと一緒にいた場合何もしない。そんな時に飛びかかってきたら自分から捕まりにいくようなものだ。あいつがそんな考えなしな行動を取るとは思い難い。姿を見せるとしたら一人か二人、せいぜい三人辺りになった時だ

「中々姿を見せねえか……」

既に三時間近く調査を続けているが、奴は姿を見せない。今日はここで活動をしていないのかも知れない

畏張っているんならちゃんと来い……わざわざ出て来ているんだよ

……

「瀬上君」

「何だ？」

「今日はもう帰ろう………続きはまた明日にしようよ。今日疲れ果てるまで捜して明日もその疲れを引き摺って捜している最中に襲われて対応出来ずにやられたら本末転倒だよ」

「………そうだな」

宝来に叱られ、自分の表情が解けた気がした。本当に俺はこいつには弱いんだなあ、こういう時実感する

「なあ、家帰る前にさ、「ジャバウォック」で好み焼き食べてこ」

「えー、家帰ったら晩御飯……」

「じゃあ一枚を半分ずつは？それくらいなら食べられるだろ？代金

も一枚分で済むし」

「まあそれなら……」

「それじゃ「ジャバウォック」に行こうぜ」

俺は「ジャバウォック」へと歩く。少し遅れて宝来も動いた

『お好み焼きなんか食べに行く必要はねーぜ……何故ならお前等はこれから地獄へと行くんだからよお……』

後ろから声が聞こえた

その「声」を聞くのはこれで二度目。だが、はっきりと覚えている。忘れようもない

俺達がそこへ顔を向けると同時、川の水面から何かが飛び出してきた、それによつて盛大な水飛沫が上がった

『久し振りだな……元気そうで何よりだぜ……瀬上除夜……宝来瑪瑙……』

飛び出してきたのは、カメレオンの頭を模したデザインの、目の部分を除いて棘の生えたメット、口の部分を真っ赤に塗ったスッポン

のような仮面、背中から口へと伸びているチューブ、屈強な上半身に巨大な両腕、関節部や背中に取り付けられたロケットのような噴出口……

その姿は間違い無く

「サクリファイス……」 『サクリファイス・オブ・ヴィクター』……」

『覚えていてくれたとは光栄だな……連れてきたのが一人だけという事実を見る限り……「あれ」が畏だと言う事が分かった上でここに来てくれたという事かな?』

「そつだよ……お前に会える確率を上げる為にな」

『お互いに会いたくしてほしいがなかったって訳か……「感動の再会」ってやつかねえ……』

「ゴリア!」

俺はスタンドの拳を奴に叩き込んでやった

(早い……)

「無駄な事喋ってないでとつと来いよ……俺の事優太と同じくらい憎んでんだろ?俺に会いたかったんだろ?」

『ああ……とても会いたかったよ……』

打ち出した腕を掴まれた直後、胸部の装甲が上に開き、そこから直径三十センチメートルはある巨大な噴出口が覗かせた

そして、そこから凄まじいエネルギーの『何か』を噴き出した

目黒智則（パンテラ）？（後書き）

因縁の相手との戦いが始まりました。最初の方に出て来た男は次話
登場予定です

では、次回も宜しくお願いします

目黒智則（パンテラ）？（前書き）

姿を見せた宿敵に除夜達は……？

目黒智則（パンテラ）？

「後一瞬……後一瞬反応が遅れていたら、アウトだったな……」

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』に腕を掴まれ、『ずぶ濡れ』となった俺は、横にした体を再び真正面に向けた

攻撃が繰り出されたと同時に、体をそらして直撃を避けた。そうしなかつたら再起不能だ

「『インフェミアCT1』！」

宝来のスタンドが、奴に向けて凝固液を放つ。狙いは足

『チッ』

奴は俺を放り投げ、足の裏から『何か』を噴き出してそれで浮かび、膝からも噴出口を出してそこからも噴出させ、後ろに飛んだ

川の上まで飛ぶと、噴出は止まる。推進力を失った為、当然奴の体は重力に従い、川の中へと落ちた

「瀬上君！」

「平気だ……それより、あいつの能力が分かった……」

俺はずぶ濡れになった服の裾を摘み上げ、水浸しになった地面を指差す

これは、奴の攻撃の後にこうなったのだ。つまりはこれが答えだ

「そうか、つまりあいつの能力は……」

「そう、『自身の各部に取り付いている噴出口から「水」を噴き出す能力』……それもかなりの圧力をかけてる……ホースを指で摘んで出口縮めるなんてレベルじゃないぞ……」

「あれ当たると結構痛いよね……じゃなくて、じゃああいつが空を飛んでいたのは……高圧をかけた大量の水を一気に放出したから？」

「そうなるな……それより気を付ける……出て来るぞ」

水面から奴が肩まで出て来て、俺に向けて頭を向ける

そして、そのままノック式ボールペンに弾かれたスーパーカー消しゴムのように俺に向かって突っ込んできた

俺は宝来を『軸』とし、彼女の背後に瞬間移動する。奴は背中の一スターを止めた後、右腕を構えて地面に向けて打ち出す。その時肘についた噴出口から水を出し、勢いをつける。その拳は地面に深

くめり込み、それがつつかえ棒となり、運動が止まった

その動作を行っている時の隙を、黙って見過ごすなんてしない。俺と宝来は、走って奴との距離を縮める

突然、宝来の体が吹っ飛んだ

当然俺は『サクリファイス・オブ・ヴィクター』を見やるが、奴はたった今地面に突き刺した腕を引っこ抜いたばかりで何かしたとは思えない。宝来の服は濡れてないし、大体前に吹っ飛んだんだ。こいつの能力で考えればこの現象を起こすにはこいつが俺達の後ろにいないといけないのに、こいつは俺達の前にいる

これから出る結論は単純、『敵はもう一人いる』！

後ろに体を向けると、右肩から裾までの稲妻のようにジグザグしたラインが二本入った学ランの、ボタンを上から三つ外して開き、そこからどす黒い赤の斑点が血痕のように散りばめられた白いワイシヤツが覗いている。ボロボロの制服のスポンに、二重に巻き付けられた革製のベルト。そして草鞋を履き、右目の空いた白い仮面を着けた短い黒髪を下ろした男が、目に入った

「今晚は、初めまして……僕の名前は目黒智則……」
めくろともりのり

その男は腰に手を当てて自己紹介をした

『目黒、お前何をしていた？連絡入れてからもう三十分は経ってるぞ』

「連絡を受けた後すぐにそっちに向かったよ。ただその時僕のいた場所がここに到達するまでその分時間のかかる場所だったんだよ」

単純で当たり前な事を口にする目黒という男。話から推測すると、どうやらこいつ等は分かれて俺達を捜していたみたいだ。片方が発見したらもう片方へそれを伝えるという手筈か

まあ『畏』を張ったのはあっちなんだ。当然と言えば当然の発想だ。だから『それ』は別にいい

俺が一番動揺しているのは――

『不思議に思ったようだな……俺が誰かと組んでいる』という事実に……そうだろ？』

「……お前、人の心読めるのか？」

『読めはしない。だがこいつをそんな顔で見ているらば大体の予想はつくものだ……こいつは俺と同じく沢登優太に酷い目に遭わされて以来奴の事を怨んでいてね……その矛先を失った憎しみをお前にぶつける為に俺と組んだんだよ』

目黒はスタンドを出した。朱色を基調として、顔に豹を模した被り

物を被り、体中には豹のような模様、両肩にレイヨウの上顎を模した肩当てを着けた、人型のスタンドだ

スタンドを出したまま、俺達に接近してくる。という事は『近距離パワー型』という事か

「瀬上君、私が『サクリファイス？オブ？ヴィクター』を見ているから君は目黒の方を見て！」

『貴様は邪魔だ！』

奴は宝来の腕を掴み、そのまま振りかぶって地面に叩き付けた

「宝来！」

「余所見していて……いいのかな？」

目黒が目と鼻の先まで接近していた。その後ろのスタンドは、拳を固めた右腕を振りかぶっており

俺に向けて、振り下ろされた。目黒を『軸』として後ろに瞬間移動し地面に着いていたのが踵の先端だった為、バランスを崩し、盛大に転んでしまった

体を起こすと、何故踵の先端しか着いていなかった理由が分かった。

小さな『クレーター』が、目黒を中心として空いていた。底と地表の差は、階段一段分くらい

目黒のスタンドは、腕を伸ばして掌で体を支えている俺へ拳を振り下ろす。俺はこの体勢のまま両足を地面に着ける

曲げた膝を伸ばそうとするが、その前に迫り来る拳を左腕でガードした。パワーは上だが、ビリビリする程度。こちらも奴に向けて拳を打ち出した

拳が着弾する寸前、左腕の奴の拳の当たった所が『凹み』、腕の骨が折れた

「僕のスタンド、『パンテラ』は殴った物をこの通り『凹ませる』……内部へと圧される訳だから当然中の物は破損、変形する……そして……」

俺は靴を脱いで放り投げ、それを『軸』に瞬間移動し、クレーターから脱出した

「く……」

『ACT1』で応急処置してもらおうと思ひ、宝来の近くまで来たが、気を失っているみたいで横たわったまま動かない

仕方無いのでそのまま『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の方を見る。奴は既に背中のブースターを動かして俺に接近しており、肘の噴出口から水を出して殴りかかってきている

俺は紙一重で避けるように瞬間移動し、拳を振り切った瞬間を狙って右斜め後ろへと瞬間移動。そして、脇に向けて膝蹴りを放った

ヒットする前に、横から『見えない衝撃』が叩き付けられる。それに怯んだ隙に『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は俺に水を噴出する事でスピードを上げた拳をモロに食らい、吹っ飛び、宝来へぶつかった

「悪いな宝来……」

立ち上がって衝撃が叩き込まれた方向に顔を向けると、そこに目黒がおり、彼の前には『パンテラ』が拳を打ち出す姿勢で構えていた

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は俺に猛スピードで突進する。横に瞬間移動し、目黒へと体を向ける

向けた直後、見えない衝撃が顔面に当たる。後ろへよろけるがどうにか持ちこたえ、目黒を見る

『パンテラ』は、右腕を曲げていた。何をやったのかが想像がついた

「人の話ってさ、肝心な所は最後の方にあるものなんだよ……だか

ら人の話は最後まで聞きましようっと小さい頃に教わるんだよ……」

言葉を一旦止める。あいつが水に飛び込んだ音が響いた

「僕の『パンテラ』が凹ませられるのは固体だけじゃないんだ。液体も、気体も凹ませられる……つまり」

「圧された空気や水を『飛ばす』事が出来るという事が……」

「大正解……だよ！」

『パンテラ』は俺に向かって放つ。俺は腰を落としてその体勢のまま走り出した

その後も空気弾を放つも、俺はじつくりと観てそれをかわす

「悪いけど拳から見えない攻撃を出すスタンド使いは一度戦った事があるんでね……」

右拳を握り締め、至近距離まで接近する

『パンテラ』は地面に突きを放つ

拳が地面に当たると同時、俺は『ジャンプ』した。それによって『段差』に足を取られずに済む

滞空している俺へと拳を放つも、俺は『折られた左腕』でガード。その箇所が凹んで骨が折れる音がする

腕を引っ込める前に、俺は奴の顔面へと拳を作った右腕を伸ばした

目黒を見下ろしながら通過する

後ろから衝撃が来て、俺の体はそのまま押し出された。それはさっきのこいつの攻撃と同じ

違いは、その衝撃の元が、『水』だという事だった。高圧で噴き出された水。それによって俺は吹っ飛んだのだった

俺は左に向けて横になるように倒れ込む。則ち左半身に落下のダメージが叩き込まれる事になり、当然左腕にもダメージが来た。ただでさえ複雑骨折していて何の処置もされてない現状で、更に地面とぶつかったダメージが追加された。勿論とんでもない痛みが、患部から強く訴えてきた

腕を切り落としたらこの痛みは無くなるのかなあと本気で思える程だった

が、必死で堪え、二人の敵、仮面の男と水から普通に出て来たスタンドを見据えた

目黒智則（パンテラ）？（後書き）

スタンド名はアメリカのヘヴィメタルバンドから。目黒の格好には『理由』があります

かなりピンチに陥った除夜ですが果たして？

では、次回も宜しくお願いします

目黒智則（パンテラ）？

「正直……さっきのはビビったよ。まさか骨折した腕をガードに使うとは……」

『踏んだ場数なら俺達より遙か上だからな。だからこそお前と組んだんだ……今奴は見ての通りの有り様だ。一気に畳み掛けるぞ』

目黒と『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は並んで俺へと足並みを揃えて近付いてくる

俺は、複雑骨折した左腕から送られてくる痛みを我慢して立ち上がる

目黒は『パンテラ』を出して右腕を突き出す。近付いてきているのだから当然それが直接俺に命中する訳がない。空気弾を放ったんだ。そしてその軌道は――

「ガードしろ！『プラネット・ルビー』！」

スタンドの右腕で、左腕をガードする。何か弾いた音がすると同時に、二の腕の所にその際の衝撃が来た

直後、俺は地面を蹴って駆け出す。目黒は空気弾を、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は圧縮した水を放つが、それを瞬間移動でかわす

そして十分接近したら、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の方
方に体を向け、跳躍。同時に奴の右斜め後ろの位置に移動し、右足
を上げ、奴の右肩を踏みつけた

横から『パンテラ』が殴りかかってくる。それに対し、俺が取った
行動は――

「どりああ!」

奴に押し付けていた右足に力を込め、ジャンプする事だった

『パンテラ』の攻撃は空振りし、俺は川に背中からダイブしてしま
った。左腕を守ったのと、飛び込んだ所が結構な深さだった為、左
腕にダメージは蓄積せずに済んだ

川底に足を着け、水面から顔を出す。その深さは立ち上がった時
俺の胸まで浸かる程の深さだった

(足に力入れ過ぎて目測を誤った……早く出ないと……)

たとえここが温泉であっても、ゆっくりと浸かってはいられない

今の俺は連中にとって、特に『サクリファイス・オブ・ヴィクター』
にとって格好の獲物だ。奴に水中に入られたら、それこそヤバイ

だから早く出ないといけない

水を掻き分けて進んでいる途中、やはり『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は水の中へ飛び込んできた。水飛沫を上げながら、猛スピードでこっちに突っ込んでくる

せめて左腕が使えたら泳いで……いや、俺は直射日光に弱い体質から水泳あんまりやった事がない。だから泳ぎは速くないし、第一あのスピードに追い付かれない程の遊泳速度で泳ぐなんて、現役のオリンピック選手でも不可能だ

案の定俺は奴にぶつかると。奴はそのまま俺を押し出しながら突き進む。後ろには『橋桁』が聳えていた

冗談じゃない。あんなのにこのスピードで激突したら、間違い無く粉々だ。最悪の未来から逃れるべく、俺はこいつの右肩を両手で掴む。左腕が今日一番の悲鳴を上げるが、今はそれに負けたら御陀仏な為、強引に無視する

右へ押し退けるように両手に力を込め、振り切った

「~~~~~」

左腕の痛みに、俺は声にならない悲鳴を上げる

奴の軌道をズラす事に成功し、粉々になる事は免れたが、左腕からくる激痛で俺の頭は一杯になっていた

必死に抑え込んでどうにか川からの脱出を頭に浮かべられた時、胸に空気弾が当たった。それによって足が川底から離れ、再度体全部が水に浸かってしまう。急いで両足を川底へ着け、勢い良く立ち上がった

これで少しだけ余裕が出来た。周りを見る

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は既にUターンしてこっちに向かってきている。で、河原には目黒がスタンバイさせた『パンテラ』を前に出して俺を見下ろしている

突っ込んでくるスタンドを見やる。さっきと同じ対処法なんか出来る訳がない。変な動きをすれば空気弾だ

瞬間移動？目黒はギリギリの所で入ってないし、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』を『軸』にしてちょこまか逃げるにしても、その未来に到達するのが少し先延ばしになるだけだ

「瀬上君！そいつを『軸』にしてそいつの『頭上』へ瞬間移動して
！」

聞き覚えのある声が耳に届く。それが何か考えてる余裕のない俺は、言われた通りにした

「そしてそのままそいつを踏んつけてジャンプ！」

言われるままに動く俺。『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は体の向きを変えようとし、俺の体は足からまたしても水中へと投げ込まれそうになった

『！』

「うっ……」

俺の足に、ゼリーののような感触がした

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は、身動きが取れなくなった

「一つ聞いていい？」

「何か？」

「お前……何時頃起きた？」

「瀬上君が声にならない悲鳴を上げていた時……」

俺の視線の先には、足元に『ACT2』を発現させた宝来がいた

俺はゼリー状になった川の水面を走って本物の地面にその両足を着けた

「これであいつは実質戦闘不能……つまり俺達はいつに集中出来るという事だな……」

眼前の敵、目黒を見据えて、俺はこう言った

「ねえ、抜け出せそう？」

目黒は『ACT2』の能力で身動きを封じられた『サクリファイス・オブ・ヴィクター』へと声をかける

『いや……それは難しいようだ……』

それに難色を示しながら答える

一方俺達は顔を近づけて小声で会話していた

「宝来、ACT1の凝固液を左腕にかけてくれないか？骨折して痛いんだ……」

「……素人目でも痛いじゃ済まないの分かる程の怪我なんだけど」

「そんなのはどうでもいい、早くしてくれ」

「了解」

「それとあの男のスタンド能力だが、あいつは手で触れた物を凹ませる能力なんだ……それを応用して空気弾を撃つ事も出来る」

「そう……終わったよ。言っとくけど左腕、殴られたりしないでね」

「分かってる……」

「それと少し思い付いたんだけどさ……」

「？」

「………ていうのはどうかな？」

「有効そうだなそれ……やってみるか」

それで話を切って俺達に近付いてくる目黒と向き合っ

「接近してくるのね」

「空気弾じゃ不確実だからね」

俺達との距離が二メートルあるかないかという所で、足を止め、己のスタンドを出す。宝来を下がらせ、俺も『プラネット・ルビー』を出した

俺は蹴りを放つ。『パンテラ』はその足を狙って拳を振り下ろす。それを瞬間移動で回避する。俺の蹴りはこいつに命中する

お返しと言わんばかりにこいつは左腕を狙ってフックを打ち出す。俺は右手で奴の肘を掴む事で防いだ

「がら空きだよ」

右足に衝撃が走り、骨が折れる音がする

見下ろすと足が変な方向に曲がっていた

不思議とそんなに痛みは感じない。先程の左腕の猛烈な痛みと比較べたらまだましたと脳が認識したからだろうか？

「瀬上君！」

「まだ平気だ！それより『用意』は出来たか？」

「とっくに！」

『パンテラ』は俺に殴りかかる。俺は宝来を『軸』とし、彼女の左斜め後ろに移動する

目黒は俺を追い掛けてくる

「宝来、『仕掛けたのは』何処だ？」

「それ」

俺の足下の『水たまり』を指差した

目黒は近付いてきて俺の顔面に向けて拳を放つ

俺は宝来が指差した水たまりへと手を伸ばした

「ゴラァ！」

「ぐっ！」

俺は目黒の顔に、一撃を入れる事が出来た

過程を説明すると、水たまりに手を伸ばした俺は、その水たまりを『持ち上げて』両手で端と端を掴んでピンと伸ばし、拳の軌道上へと持ってきた

水たまりを持ち上げる事が出来たのは、宝来の『インフェミアAC T2』の能力でゼリー状にしたからである。左手は無理に動かしたものだから痛くてしょうがなかった

『パンテラ』の拳は張った水たまりに的中し、張力で弾いた。目黒の場合その能力も相俟って強く弾かれた

その隙を狙い、俺は奴に拳を叩き込んだ

腕を振り切った時奴が被っていた仮面が砕け散り、うつ伏せに倒れた

「あたたたた……」

目黒は立ち上がる。顔を上げる際、被っていた仮面が砕けた事により必然的にその顔が俺達の目に晒された

「あーあ……仮面、砕けちゃったか……まあ別にいいけど。そんな思い入れないし……」

俺達はその顔を見て、目を見開く

その顔は

「それより奥歯がグラグラしてるな……抜けなかっただけいいか」

上顎の右半分が爛れていて、他は刃物で縦横無尽にズタズタに切り裂かれたような傷跡が付いていた

「どづしたの？僕の顔がそんなに珍しい？」

悠長に、本当に自然な様子で、尋ねた

目黒智則（パンテラ）？（後書き）

目黒が仮面付けてた理由は……まあこれです

次回で決着をつける予定です。これからも宜しくお願いします

目黒智則（パンテラ）？（前書き）

『パンテラ』戦決着！そして因縁の敵は……？

目黒智則（パンテラ）？

「何でそんな見ているのかな？ 僕人の注目浴びるのは好きだけどその理由が分からないのはイライラするんだよ」

たとえそれが聞いてみたら不愉快になる理由でもね・・・と続ける

「じゃ・・・じゃあ・・・その・・・」

俺は上手く口に出す事が出来なかった

多分あいつは口に出したら素直に答えてくれるだろう。だから躊躇った

回答の内容を、知りたくなかったからだ

あの傷を見て、俺はあの時『あいつ』の言った事を、思い出したから……

「聞いたところで何にもならないでしょ？」

「えーそんなー。確かに「聞いたって何にもならない」けど、なら「教えたって何の問題もない」筈だから聞いてよ」

宝来の言葉を、目黒は柔らかな物腰で突っぱねた

「分かった……『その傷は何だ』？」

「瀬上君！」

「聞いてやったんだから教えろよ……どんな内容だろうが質問した以上はちゃんと聞くから」

『聞きたくない』のが本音だ。頭の中に描かれた『想像』を、必死に消そうと、忘れようとしている自分がいる

だが、その『想像』通りなら、聞かなければならない

目黒は咳払いをした後、喋り出した

「あれはもう四ヶ月位前になるかな……昨日あった事にも思えるし随分昔の出来事のようにも思えるよ」

まあかなり鮮明に覚えているけどね……と言う

「僕はその時受験生だったから帰宅した後は家で受験勉強をするのが日常でね……その日も同じ様に勉強に励んでいた。その最中に沢登優太が現れて……」

ここで一旦区切り、爛れている部分に指を差す

「椅子や文房具を怪物に変えて僕の体を押さえつけた後、ナイフでここを剥ぎ取った……悲鳴を上げる前に布を口に入れられ、ライターで焼かれ、そしてこの傷跡も付けられた……痛みが治まって奴を見据えた時、あいつは僕に『矢』を放った……これがこの傷のエピソードだよ」

話してくれた内容は想像通りだった

あいつは、「優太」は「強いスタンド使いを生み出す為に人を殺した事もある」と言っていた。だからその為の被害者であるだろうとは、想像は容易についた

「その後は病院で治療を受けた後恨みを忘れない為に敢えて傷を残し、与えてくれたこの『能力』で復讐する為に受験勉強の傍ら『能力』の研究をしていたという訳。まあその前にこいつが殺してくれちゃって僕には行き場の無くなった憎悪と復讐心だけが残っちゃった」

身動きの取れない『サクリファイス・オブ・ヴィクター』へと指差す

「成程……その憎悪と復讐心は……優太があんな事をしでかす理由である俺を目の前にしてどうだ？」

「そうだね……君に対しては全く恨んでなかったけど……分らないもんだね。筋違いというのは頭で分かっても、君を見た途端行き場を無くしていた憎悪と復讐心が君に向いたのを感じたよ……多分君の事も、心の何処かですつと怨んでいたんだろうね……」

「そうか……」

「そうだよな……『それ』は当然だ

身勝手な都合で傷付けられた人間が、傷付けた人間に対して、その大元に対して、怒りを、恨みを抱くのは当然だ

そう、たとえそれが相手にそれをするだけの理由があつたとしても……たとえそれが、逆恨みだとしても……

「こいつから協力要請を受けた時は少し乗り気じゃなかったけど……今は乗ってよかったと、心から思えるよ」

「そうか……良かった……」

「良かった？」

「ああ、良かった……俺は優太のやらかした事の『後始末』をするのが目的だったから……だから俺に向けられて本当に良かった……」

「互いに『出会えて良かった』と思っている訳か……それじゃ話はこれまでにして最終ラウンドに行こうか」

ズボンのポケットから玩具のコインを取り出し

それをまたポケットに入れ、『パンテラ』を発現させる。俺も『プラネット・ルビー』を出し

「待たんかい」

宝来が止めた

「何？」

「さっき取り出したコインは何？」

「えっと……」

「製造元とか何処で買ったのかとかは聞いてないからね言っとくけど」

「先手打たれたか」

「言うつもりだったのかよ」

「うん。そしてさっきのコインは……ただのお遊び」

俺達はこの回答に一瞬唖然としたが、気を取り直して改めてスタン
ドを出し、駆け出した

「『パンテラ』！」

俺に向けて空気弾を放つ。『瞬間移動』で回避する

そのまま接近して、顔面に向けて拳を放った。だがその直後、目黒
は俺の腹部へと蹴りを放った

俺はそのままこいつの背後へと移動。放った拳はそのまま奴に当た
るかと思っただ

当たる前に奴はしゃがみこんだ。拳は空振りし、奴はその体勢のま
ま俺に体を向ける

「残念だったね。君の『能力』は恐ろしいものがある。けどかな
り限定されているから元いた地点とか考えればそっちの攻撃が避け
られない事はない……」

目黒は足に力を入れ、立ち上がる

その瞬間、目黒は背中から白い液体を被った

「『インフェミアACT1』……横槍を入れられたと不快に思えたのなら謝るけど……瀬上君の『後始末』……あたしも手伝う事を瀬上君に表明した……だからこの行為は筋が通っているよね？これが『後始末』なら……」

「ああ構わねえよ……お前も卑怯とか、そういうの思わないよな？」

「うん。全然思わない……」

俺の振るった拳は腹部に突き刺さり、目黒の体は後ろへと吹っ飛んだ

「かなり強い敵だっ……ぎいああ……」

左腕と右足から、激痛が走った

当然だ。俺は骨折していてそれで動き回っていたんだ。特に右足は何の処置も行っていない

ついさっきまでは気が張っていたお陰で痛みが鎮静されていたが、倒した気の緩みで一気に来た

「瀬上君！」

「ま……まだだ……」

俺は立ち上がる

まだ倒さないといけない敵はいるんだ。そいつを倒さないと……

「え？」

奴のいる方へ向くと、俺は自分の目を疑った

ゼリー状になった川で拘束された奴がいないといけないのに……

あいつは、橋の向かいにある堰の上に座っていた。あいつが拘束されていた地点はスプーンでほじくり返されたような穴が開いていた

『今の弱ったお前を倒すのは簡単そうだが……こちらも若干弱っていて相棒もやられた以上は下手に手を出したら大火傷をしかねない……だから逃げさせて貰う……お前が生き続けていれば近い内にまた会いに来てやる……俺は何時でもこの春日部でお前を狙っているのだからな……』

堰の向かい側に飛び込んだ

「ゼリー状にした水の上に堰からの水が……何処行くの瀬上君！」

「止めるな！あいつを追うんだよ！早く追わないと見失っちゃう！」

「止めなさい！今回はこれで終わりだよ！水の中じゃあいつの方が速いでしょ……追い掛けたとしても追い付く事は出来ないよ……大体今の自分がどうなってるか分かってるの？そんな状態で何が出来るっていうの？」

「……………」

「逃がしたのは惜しかったけど……今回はもういい……今君は傷を治さないと駄目だよ。今救急車呼んでくるから……大人しくして……」

「分かった……そうだな……やらないといけない事を間違えたら……ダメだもんな……」

自分を必死に言い聞かせ、奴を見送った後、俺は目黒の所まで行って腰を下ろし、宝来は携帯を病院に繋いだ

「君さ……今の気分はどう？」

見上げながら、目黒は俺に声をかけてきた

「ムシヤクシヤしてる」

俺は一言そう返すと、目黒と目を合わせる。その顔は、何か『憑き物』が落ちた感じだった

「聞くまでもないと思うけど……お前の今の気分はどうだ？」

「沢登優太は許すつもりはないけど……憎しみだとか、復讐心だとかそんなのは溶けた……」

「それは何よりだ」

「一つ聞いていい？何で君は、『後始末』しようと思ったの？僕が言うのもなんだけど、君は「理由」っただけで沢登優太に命令した訳でも唆した訳でもない。あいつが勝手にやった事でそれを君は全然知らなかった訳でしょ？そんな事する責任も義務も全然無いのに……」

「俺は俺でしかないから、後始末しかやれる事を思い浮かべる事が出来なかった……それなら、俺にでも出来るからな……」

「ふーん……」

「まあこれは……今救急車呼んでるあいつが叱らなかったらそんな事思いはしなかったらうがな」

携帯をポケットに入れてこっちに来る宝来を見て、微笑んだ

頭が冷えた今考えれば、今回は奴の情報をかなり知り得る事が出来

目黒智則（パンテラ）？（後書き）

今回は逃げられました（笑）後三回か四回今回のようにあいつが『スタンド使い』と組んで……というのをやらせてみたいと思います。戦隊ヒーローの幹部みたいな感じ？

まあ勿論他のスタンド使いも動かしますが……

では、次回も宜しくお願いします！

除夜達の前の険しき路（前書き）

因縁の敵との戦いから二日後、みんなが集まりし場所は……

除夜達の前の険しき路

「はい、梨剥けたよ」

「サンキュー。それと頼んでいたもん」

「はい、ノート」

「お兄さん大怪我してるんだから治るまでゆっくりすればいいのに」

「そうはいかねえよ。学生の本分は勉強。こうしている内にも授業は進むんだから復帰した時に苦労しないようにな」

「感心ですね」

「当たり前だけど本当は授業受けていた方がいいんだが」

「じゃあ写す時分からない所があったら聞いて、教えるから」

「つくづくありがとな。お前と友達になれて良かったと本当に思う」

「もう何言ってるの瀬上君……」

「いや、本心でそう思ってる……だってよ……あれ等がお前と建前でも一緒の理由で来た事を思うと……」

ギプスをはめた左手を、見舞いの品を漁っているしんのすけとそのスタンド『ハリケーン』、藤方、会長、嶽沢に、義母さんが持って

きた漫画を読んでいる御厨先輩、そして同じく義母さんが持つてきたトランプや将棋で遊んでいる本荘、古賀、ロンディネ、松任先輩、逢坂先輩、目黒に向ける

それを見て俺のベッドの横にいる琢磨と宝来、咲良と吉祥寺は苦笑いした。因みに途中声をかけた勝海は俺の横に潜り込んでスナック菓子を食べている

「君達さ……呼んどいてなんだけどここ病院つてもあるから騒ぐんなら見舞いの品持つてつていいから帰ってくんない？」

「ええやん。まだ除夜のお兄さんの来てほしい相手はまだ来てへん。待つとる間暇やし……」

「でも確かに病室で騒ぐのは非常識だな。分かった自重するよ」

笑いながら桂馬を動かす松任先輩のその態度からは、とてもではないが反省しているようには思えなかったが、音量は押さえてはくれた。まあいいか。やかましくはなくなっただし

気を取り直してノートの写しを再開する

「こ……ゼエ……ゼエ……今日……は。待た……せて……
……ゼエん……ね。これでも……ゼエ……走って……」

「取り敢えず息整えてから喋って下さい」

息絶え絶えで汗だくだくの内地さんが、弁当屋の袋片手に病室に足を踏み入れてきた

「はいどうぞ」

「ありがとうございます……」

宝来が自分のハンカチを出して渡す

「何があつたんです？」

琢磨が尋ねる。内地さんは息を整え、宝来から受け取ったハンカチで顔の汗を大体拭き取った後に口を動かした

「いや……昨日夜勤でウチ帰った後そのまま眠って……起きたのが一時間前だったから……」

「つまり寝坊したの？ちょっとしっかりしてよね。オラみたいな子供だってちゃんと時間守ってんのに」

自分の事を棚の上に向けて怒るしんのすけを見て呆れる俺に、咲良が耳打ちしてきた

「……この台詞、みさえさんや風間君とかが聞いたら、どう反応すると思う?」

「俺の頭の中の想像、多分お前と同じもんだと思う」

「集まれる人は全員集まった訳ですし、始めましょうか」

「相変わらずお前の話題転換は早いな……あれ?」

「どうしたの?」

「稲庭は?」

「風邪で熱出してて……二限目まで授業受けてたんだけど……」

「それが限界で早退したのね……」

「ひまは母ちゃんとお出掛け、風間君は塾で実力テスト、マサオ君はボーちゃんと一緒にネネちゃんに無理矢理おままごとさせられる」

「説明ありがとう」

この病室での集まりの事を具体的に説明するには、一昨日の河川敷で目黒と『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の戦いが終わった後まで遡る

あの後病院に搬送され治療を受けた俺は、一ヶ月の入院を宣告された左腕と右足の骨折は勿論、他にも骨や内臓があちこち損傷していた事が検査の結果、明らかになった為だ。まあ俺は回復早いからそれより前に退院出来ると思う。今までもそうだったし

落ち着いた後、河川敷での戦いで判明した事をはじめとして、諸々の事を報せる為に招集をかけた。幸い俺にあてがわれた病室は俺一人で他に誰もいない為、秘密の集まりには打ってつけだった

「『水に圧力をかけて噴出する』……また単純シンプルな分強力な能力ですね……」

話を一通り終えると、琢磨が内地さんが持ってきたカツサンドを片手に奴の能力について感想を述べる

「直に戦ってみてそう思えたよ。能力もただ使うだけじゃない。使の方もちゃんと理解していた……」

「厄介なのは能力だけじゃないわね」

こう言いながら、読み終えた漫画を棚に直し、続刊を取り出す御厨先輩

「どついう事？」

しんのすけが尋ねる。その質問に先輩はブドウを食べている目黒に指を差す

「僕が何か？」

「考えてみなさいよ。そいつは君……えっと名前……」

「目黒智則です。星陵高校一年三組の」

「あーそついやちゃんと紹介すべき……てええええええええ！お前ウチの学校？しかも吉祥寺と同じクラス？」

「まあ僕は良い意味でも悪い意味でも注目を集めるような事はやってないから知らなくて当たり前だよ。君との接点もないし」

手を広げてその傷だらけの顔で笑顔を作る。その時俺はこいつが仮面を着けてない事に気付いた

「お前仮面は？」

「君にぶっ壊されたの以外持ってなかったからね。これからは必然的に素顔のまんま」

改めて買って貰えばいいだろ、と聞くと、

「あーいいよ。好きで着けてた訳じゃないんだし。同級生のみんなも最初は驚いてたけどもう慣れてくれて今まで通り接してくれてる」

と、笑いながら応えた

「話の花を咲かせている所水を差すようですが話が脱線してるので本題に戻って下さい」

「すみません」

「話が戻ったところなんで……何でそいつが厄介なのかというと、一番はその狡猾で慎重な性格ね」

漫画を読みながら御厨先輩は言う

待ち伏せているポイントに誘導するように手を打つてたり、倒せる確率を高める為に誰かと組んだり、その連れがやられ、自身も弱ってしまったら即座に逃げたりしている辺り、確かにそれは見受けられる

「ああ、そしてそれがあんた等と呼んだ理由でもある」

「ほうほう……どゆ事？」

「分かんなら相槌打たんでいい……」

「何が言いたいんや？」

「お前等が狙われるかも知れないから用心しろって言いたいんだよ。さつきも言ったがあいつは慎重な奴だ。そんな奴が馬鹿の一つ覚えみたく同じ手を何度も繰り返すとは思えない。俺を倒す確率を上げる為にお前等を襲う可能性だって充分あるから気を付けると言いたいんだよ」

「何でオラ達が狙われるの？」

「お前等が『俺の身近な人間だから』だよ」

そう、これを俺の口から言いたい為に、この面子に集まって貰った今回の集会は、招集その物は全員にかけたが、この面子の内、塩屋を除いた全員には予め予定を聞いておいて調整が出来る所はして貰った上で来て貰った

何時も一緒に行動するしんのすけや琢磨、宝来達に俺の通う星陵高校の関係者、そして俺の中学時代からの友人……こいつ等が奴に狙われる確率が最も高い人間であると言っても、オーバーでもないだろう

「ちよい待って」

内地さんが拳手する

「私、この事件……てかあんたと関わってまだそんな経ってないわよ」

「内地さんには調べてほしい事があって」

「その為か……確かにその位の手伝いはするって言ったからね。何？」

「優太は強いスタンド使いを見つける為に殺人を含む悪い事をしていたと自分から言ってた……それを聞いた時俺は半信半疑だったから特に調べようとも思わなかったが実際の被害者を目の当たりにして事実だと認識した」

「何で強いスタンド使いを見つける為に犯罪を犯すの？」

「スタンドは『精神』の才能です。強い感情を引き出させる事でスタンド能力を引き出す可能性を高めようとしたのかも知れません。スタンド能力は凶悪な犯罪者程発現する可能性が高いと聞きますが、それは罪人の精神が強いエネルギーを持つからでしょうね……」

「理由云々はおいといて、初めて会った時に言った言葉からあいつもその被害者だと思っただ。どんな目に遭ったのかは分からないけど……優太が射抜いたのは数百から一千以上だが……これなら随分数が絞り込める……やっていたのはほんの一部分だけだろうから」

「確かに、対象一人一人にそんな事やってたら半年で数百人以上を

射抜くなんて出来ませんよね。現に僕達はいきなり射抜かれただけで自身にも周囲にも何もされてませんし……」

「だから内地さんには、『春日部とその近辺の地区で』『去年の十月から今年の四月までの間に』『自身、または周囲に不幸があった』人間を調べ上げて」

「その不幸って？」

「自分が事故に遭ったり病気になったり事件に巻き込まれたり、家族が事故や病気とかで死んでいたり、家が燃えたり……そう言った類の」

「分かった。明日から調べ……待たんかい！」

「何か？」

「『何か』じゃない！そんなん地域や期間を限定した所で調べ上げるまで普通にやっても数が多過ぎて時間が掛かるわ！」

「更に絞り込んで意識がハッキリ……」

「大して変わらない！」

「……ですよね」

「かなり無茶苦茶言ってるね瀬上君……」

「昔から時々無茶な事を平然と頼むからね……」

「ロンディネ、お前のスタンドでスタンド使いとそうでない奴の分別は出来るか？」

「残念だけど無理だよ本荘君、『サード・アイ・ブラインド』で捉える事の出来るのは外に出てるエネルギーだけだから。本体からのエネルギー感知は本体と一体化しているスタンドでない限り出来ないよ」

「成程、お前のスタンドで『本体探し』は出来ないって訳ね……」

「物事が何時でも思うように進むんなら競争なんか成り立たないし徒労なんて言葉も生まれてないよ」

笑いながら言うロンディネ。俺もそう思う。何故なら深く実感しているからだ

「じゃあ今日は解散。集まってくれてありがとな」

「その前に一つ疑問に思ったんだけど……言っただけ？」

吉祥寺が手を挙げた

「何だ？」

「沢登君……何を考えてたの？」

「えつと……その……」

「吉祥寺君、その質問の意図は？」

「いやだつて……しんちゃんや莓花ちゃんみたいな幼稚園児や小学生に人を殺してくれと頼んだつて……僕達みたいに瀬上君と親しい人達、特に勝海君や本荘君達みたいに中学時代の仲のいい友達に友達を殺してくれと頼んだつて突っぱねられるのがオチだつて事……考えなかつたの？」

「……………」

「それに強いスタンド使いを生み出す為に人を傷付けたり殺したりしてたつて……そんなの自分への怨みを抱く復讐者を生産していて且つ能力という凶器を与えているだけでそれ以外の意味があるとは思えない……凶悪犯の解放だつて……」

俺は吉祥寺の右肩に左手を乗せた

「あのな吉祥寺……あいつは肝心な所何も考えずに突つ走る傾向のある奴なんだよ。簡単に考え付くデメリットとか、全く頭に入れずね……」

「ああ……俺達を射抜いたのも単に「友達だから言う事聞いてくれるだろう」という浅過ぎる読みからだろうしな……」

「沢登君ドジだったもんね」

本荘と古賀が俺に同意して言う

「成程、この現状がその結果って訳ね……」

内地さんの言葉の後、全員が深く溜息をついた

これが合図となり、全員病室から出て行く

「それじゃあね」

「そうだ宝来、稲庭の奴にも気を付けるよう伝えといてくれ」

「オーケー」

最後の宝来が出て行った所で、改めてこの病室は俺一人となった

寂しくなったので、漫画を読みながら見舞い品の果物を食べる事にした

棚は空っぽで、籠の中や棚の上にも何もなかった

「……あいつ等、全部持っていきやがった」

あいつ等の辞書には遠慮という文字がないのだろうか

そう思う事で空しさを紛らわせながら、今日は早々と眠りについた

除夜達の前の険しき路（後書き）

今回は奴についてだったのか、結構長くなりました

次回も新しいスタンド使いが出て来ます。除夜君は少しお休みです

（笑）

では、次回も宜しくお願いします

ストーカー行為はダメ！絶対！？（前書き）

シロの散歩中、思わぬ出会いがしんのすけを新たなトラブルへと導く……

ストーカー行為はダメ！絶対！？

病院での集会から二日後の午後三時

春日部の街

そこでしんのすけは、シロを連れて歩いてた

「母ちゃんは何を考えているんだ？今オラが無闇に外に出歩くのは危険なのにシロのお散歩とお遣いを言い付けるなんて。全く、我が母ながらどついう神経しているんだろっ……」

「クーン……」

「なーにシロ何か言いたい事あるの？」

『我が飼い主は一体何を考えて生きているんだろっと言いたげな目つきだな』

「何だとー！シロ、お前、オラの事をそんな……そんな……ブラピみたいに思っていたなんて……」

頬を赤らめ、顔を若干俯けるしんのすけ。シロはずっこけた

「大丈夫かシロ、貧血？所で貧血って何？裁判の結果？」

『それは献血だボケ』

「献血は血の提供、しんのすけ君の言ったのは判決」

突然声を掛けられる

声のした方へ顔を向けると、虎が刺繍された黒の地のTシャツの上に紺色のブレザー服を羽織り、蜥蜴皮の模様のネクタイをした少年がいた

「えっと……えっと……高橋……夏帆……さん？」

自信なさげに尋ねる

「うん。所で何してんの？」

「見れば分かるでしょ？シロのお散歩」

「へえーシロっていうんだこの子……可愛いねえ」

屈んでシロの頭を撫でる

「ビーフジャーキー食べるかい？僕のおやつだけど」

「キャン！」

夏帆から渡されたビーフジャーキーを美味しそうに頬張った

隣の芝は青いと言うが、美味しそうに食べている様を見ると、
食べたくなったのか……

「オラにもオラにも！」

『私にも私にも！』

しんのすけと『ハリケーン』が催促してきた

「悪いけど君達に上げる分はないからね」

「えー、何で〜？」

『ごついうのを「依怙贖」と言うんじゃないのかね！』

「僕が持っていたビーフジャーキーは一本しかない。その一本をこ
の子にあげたからもうないから」

しんのすけは目を見開き、口を大きく開けた。そして、膝に地をつ
け、倒れ込む

「……そんなにショックだったの?」

「うん……」

「……じゃあこれからケーキ屋に寄るからさ、その時シュークリー
ム買ってあげるからそんな落ち込まないで」

「やったー!」

勢い良く立ち上がり、飛び跳ねる

『言っておくが私の分も買えよ』

「一人一個ずつだからね」

「ほほーい。でも夏帆さん。何で男なのにケーキ屋に行くの?」

「男がケーキ屋行っちゃ駄目なのか? まあ差し入れかな? 僕のクラ
スに今訳ありで引きこもってて学校に行っていない女子生徒がいるか
らその人へと」

それを聞いてしんのすけと『ハリケーン』の目の色が変わる

『貴様と同じクラスという事は、女子高生という事か?』

「うん……そうなるね。僕高校生だから」

「その人美人？」

「美少女の部類には入ると思う」

「オラも行きたいオラも行きたい！ねえ、いいでしょ？ねえ！」

爛々と輝く目で夏帆を見上げるしんのすけ

それを見て夏帆は断っても無駄だと悟り、肩を下ろす

「いいよ。但しうるさくしないでね……」

「いえーい！」

(そう言えば、こつこつ子だと言ってたな。瀬上君は……)

しんのすけ達の様子を見て、小さくまた溜息を吐いた

「よし、着いた」

ケーキ屋を出て大凡三十分、しんのすけ達は一軒家の門前に到着した。赤い瓦が目立つ、木造二階建ての家だった

夏帆はチャームを押す。すぐに玄関の扉が開き、やや赤みがかつた髪を迷彩色のリボンで結った、胸元に蛾のブローチを付けた、白いYシャツに黒いロングスカートという格好の、小学生程の少女が出て来た

「夏お兄ちゃん！」

「今日は花実^{はなみ}ちゃん。お姉さんいる？」

「うん、いるよ」

「じゃあ顔見たいからあがっていい？」

「うん！あれ？こちらの方は？」

「友達の野原しんのすけ君と飼い犬のシロ、で、この子は舞浜^{まいはま}花実、僕のクラスメイトで幼馴染みの妹」

「オラ野原しんのすけ五歳、しんちゃんでもいいよ」

「あたし舞浜花実八歳、花ちゃんでもいいよ」

「よし、じゃあ花ちゃんの美人のおねいさんの顔を拝見する為に家に上がるね」

「うんいいよ。でもその前に……」

「？」

「家が上がったらちゃんと手を洗ってうがいしてね」

「そんな注意を受ける程オラ子供じゃないぞ！」

「あ……うん……ごめん……」

「ちゃんとうがいだって手洗いだって……一週間に一回欠かさずしてるもん！」

「外から帰る毎にするもんだろ手洗いもうがいの」

夏帆が呆れ顔をしながら突っ込みを入れるが、しんのすけはそれをスルーして家の中に入った。シロは花実が用意したタオルで自分で足を拭いた後に入る。夏帆は二人と一匹の後に続く

「洗面台は階段の向こう側に……」

「あっちよつと待って！」

花実の案内を遮り、しんのすけは玄関へと逆行した

シロと花実は何が何だか分からず、首を傾げるが夏帆には見当がつかない

「全く何をやってんの『ハリケーン』、外で無闇に出ちゃダメって
言ってるのに！」

『ああ、済まない……今回はちゃんと理由があるんだ……』

「理由？何それ？」

『理由というのは……』

「言っとくけど言葉の意味を言うなんてベタなのはナシだからね」

『チツ……お前には感じなかったのか？』

「何を？」

『この近くに来てからずっと感じる……何か妙な「視線」を……』

「それってもしかして……」

『かも知れんが思い過ごしかも知れん。何せ「悪意」とか「敵意」
とかは感じられんからな……それじゃ私はもう戻るから。じゃ』

しんのすけの中に引っ込んだ後、しんのすけは家の中に再度入った

手洗いうがいをした後、三人は尋ね人の部屋の前に立つ。夏帆は目
の前のドアをノックする

「おい仙波^{せんば}。僕だ、夏帆だ。顔見せに来たんだけど入っていい？」

『夏ちゃん？うんいいよ……』

ノブを握ってドアを開ける。その中に置かれてあるベッドの上に、赤みがかった髪を少し長めにしたショートカットの、緑のジャージに黒いスカーフを首に巻き、バーコードの模様が一周して入っている腹巻きをした美少女が座っていた

胸元は開いており、そこから見える豊かな胸の谷間が覗いている。これに興奮しないしんのすけではなく、既にしんのすけは顔を赤くしていた

「お……おお……中々色っぽいですなあおねいさん……」

「夏ちゃん、誰だいこの子？」

「夏お兄ちゃんの新しい友達でしんちゃんって言うんだって。で、この子はしんちゃんの飼い犬のシロ」

花実は自分が抱きかかえているシロに目をやる。仙波はしんのすけとシロの頭に手を置き、撫でた

「成程、宜しくねしんちゃんにシロ君」

「ほっほーい……所で仙波おねいさん」

「仙ちゃんでいいよ」

「仙ちゃんはさ、夏帆さんから聞いたんだけど、どうして学校に行かずに引きこもっているの？」

「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい」

聞き辛い事をまたストレートに聞くなと思った。が、同時に仕方のない事だと思った

子供とはそういうものだ。大人なら気兼ねしたりして言い辛いような事でも、そういうのがないから思った事を口にしてしまう。『裸の王様』がいい例だ

仙波はクスリと笑った

「どうしたのお姉ちゃん？」

「いや、私にもこんな時代があったなと懐かしく思えてね……いいよ。教えてあげる」

「ちよっ……ちよっと待てよー！」

夏帆がやや躊躇いがちに止める

「夏ちゃん？」

「いいの？そんな簡単に……」

「私の抱える問題は私が当事者。当事者が教えると言って教えるんだから教えても問題は何も生じないよ」

夏帆は言葉に詰まった。その後で色々と問題は生じるだろと思ったが、言っている事は正論だった

「実は……私、今、誰かからストーカー行為を受けているの」

「え？ストーカー？」

「うん……四ヶ月くらい前から下校途中や買い物帰りとかに視線を感じて……それ以上特に何かされたとか、そういう訳じゃないから気にしないようにしていたんだけど……」

机の引き出しを開けて、その中に入っている大量の便箋を出した。差出人の名前は書かれておらず、ただ『舞浜仙波様へ』と、新聞の切り抜きで文章が紡がれていた

「切手貼ってないね」

「直接家に持ってきているみたいなの。中を開けてみて」

しんのすけと夏帆は中に入った手紙を見て、「うわぁ……」と声をあげた

中に入っていたのは、普通の手紙。内容も、差し支えのないごく普通のラブレターだった

違うのは、宛先同様、その文字全てが『新聞の切り抜き』であるという点のみで、それだけの異常性が、この手紙に物凄い恐怖感を抱かせるには十分な要素にしていた

「そのストーカーの人はよっぽど暇な人なんだろうね」

「確かに……これ時間と手間をかけないと出来ないよ……」

「何を考えてこんな手紙出したんだろう？」

「筆跡鑑定されない為じゃないのか？……いや、それならワープロ使った方が手っ取り早いか……」

「ワープロで打ったラブレター……何か味気ないね」

「これが三ヶ月前から二ヶ月前までの一ヶ月間毎日欠かさず届いていた」

「随分と手の込んだ嫌がらせだな」

「そして二ヶ月前から……こんな『手紙』が届くようになった……」

別の引き出しから、同じ様に新聞の切り抜きで宛先が紡がれた封筒を出した

しんのすけと夏帆は「あれ？」と揃えて口にする。何故なら、中の手紙には何も書かれていない、『白紙』だったからだ

「これが毎日届くようになったんだ」

「何でいきなり方向性を変えたんだ？確かにこれが毎日届いたら怖い事は怖いけど……」

「これがただの白紙の手紙じゃないと言ったら？」

「へ？」

「この手紙……一回こっきりなんだけど……開いたらこの脅迫状風ラブレターに書かれてあるのと同じ様な内容を『喋り出すんだ』……」

しんのすけと夏帆は目を見開く

「信じられない？そうだろうね。私だって自分が目の当たりにしなければ誰がそう言っても絶対に相手にしないでしょうね……」

でもこれは事実なの。と言う。しんのすけと夏帆は黙って話に耳を傾けている。二人の様子を見て仙波はまた笑う

「真剣に聞いてくれてありがとう……」

「疑う訳じゃなく……確認として聞いておくれ……」

夏帆が聞く。仙波が何？と聞き返した

「その封筒に何か……例えば、スピーカーとか、そう言ったのが同封されて……」

「チェックしたけどそう言ったのは入ってなかったよ。大体そんなの入ってたら重さで分かるもんでしょ？」

「それもそうだね……一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

「なーに？」

「その手紙今も届く？」

「二ヶ月前から毎日、五時前後に必ず届く」

「じゃあその手紙と二ヶ月前から今まで貰った手紙くれない？」

「別にいいけど……何で？」

「ちょっと……詳しくは教えられない」

「分かった。じゃあ詮索しない」

しんのすけと夏帆は机の上に置かれた目覚まし時計を見る。針は4時55分を差していた

「あたしがポスト確認してくる」

花実が足音を立てながら部屋から出て行った

「相変わらず花実ちゃんは元気だな……」

「それだけが取り柄みたいな物だからね……所で夏ちゃん。一つ気になっていたんだが……」

「？」

「このケーキの箱は？」

「君への差し入れ。君の好物の……」

仙波の行動は早かった

一瞬にして箱を奪い取り、中のケーキ五切れをかなりのスピードで噛んで飲み込んだ後、巻かれてあるセロハンに付着したクリームを舐め取った。所要時間約14秒

「ごちそうさまでした」

「相変わらず早食いだな……」

差し入れのケーキを僅か14秒で腹の中に納めた幼馴染みに、夏帆は呆れた様子でそう言った

花実が封筒を持って部屋に戻ってきたのは、その直後だった

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（後書き）

お待たせしました。ようやくと更新です

今回また結構長くなりました。構成に時間がかかってしまいました

これからも宜しくお願いします

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（前書き）

高橋夏帆の幼馴染み、舞浜仙波へと届けられる謎の『手紙』を受け取り、調査するしんのすけ達

ストーカー行為はダメ！絶対！？

午後八時半、野原家の居間

家族で晩御飯を食べているこの時間のこの場所には、現在四人の間がいた

野原しんのすけ、高橋夏帆、ロンディネ、そして内地裕佳

この四人は、テーブルを囲いながら、テーブルの上に置かれた大量の手紙を見ていた

「これ等が……舞浜さんって人の元に毎日のように届けられる手紙ね」

「『毎日のように』ではなく『毎日』です」

手紙の小山を見て言う内地へ意見する夏帆。彼女はその意見を軽くあしらひ、今日届いた未開封の便箋を持ち上げる

因みに、今回集まった人数が少ないのは、夏帆が『今回の件は自分達とは無関係の人間が深く関わっているから、なるだけ穏便に済ませたい。だから必要最小限のメンバーだけを集めよう』と言って、警官の内地とスタンド使いが関わっているという確実な証明の出来るロンディネの二人に声をかけた。野原家が集合場所なのは、何時もの焼き鳥デスペラードは珍しく満員御礼だったから。それだけである

「じゃあ開けてみようよ。開けたら手紙が喋り出すんでしょ？」

「何でそんなワクワクしてんの。あんた……」

しんのすけの様子に若干呆れながら、内地は便箋を開けて中の手紙を取り出す。ロンディネは『サード・アイ・ブラインド』を発現させる。夏帆も内地も、手紙を凝視する

中に入っていた折り畳まれた手紙を開くと、手紙からメッセージが流れてきた

内容は普通のラブレターのそれと、さして変わらぬそれだった。約一分経つと、語り終え、喋らなくなった

「声からして……誰が喋ってるのか見当もつかないわ。この『手紙』を出してきた奴、多分『録音』に変声機を使ってるんだと思う」

「変に用心深い……ロンディネ君」

「ええ……手紙が喋っている間、強いスタンド力が感知出来た……今も弱いながらも拾う事が出来るけど……という事は……」

「そうだね……仙波のストーカーは『スタンド使い』だというのがこれで本決まりになったという訳だ」

「よし、それが決まったら裕佳おねいさんとケーサツの出番だぞ！」

「……何すればいいの？」

「決まってるじゃん！そのストーカーの逮捕するんだぞ！」

「無理」

即答した

「何で？」

「僕でもそう答えるよしんのすけ君」

「僕も」

夏帆とロンディネも、若干呆れた様子で言い放つ。内地は溜息をついて喋り出した

「あのね。これで判明したのは『ストーカーがスタンド使い』だという事だけで、一番重要な『ストーカーが誰なのか』という点は分からないままじゃない。容疑者が特定出来なきゃ裁判所は逮捕状なんか出さないわよてか出せないわよ」

「それをどうにかするのがおねいさんの役目でしょ！」

「無理言うなバカ。大体、百万歩譲ってこれで逮捕状が出たとして

も、警官だって普通の人間よ？スタンド使いをどう相手しろって言うの？」「

「ぶー。じゃあどうすればいいの？このままストーカー行為がエスカレーターして、仙ちゃんが何かされるまで待てというの？」「

「それを言うならエスカレート。それに誰がそんな事言ったのよ？大体そうならないよう今の内にどうかしたくて今回集まったんでしょ？」「

「じゃあ何であれこれ理屈つけて動いてくれないの？オラ達に尽力するって言ったの嘘だったの？」「

「そう、確かにそう言ったよ」

ズイっと、しんのすけの顔に顔を近付けた

「私がやるのはあくまで『協力』。そしてその協力の約束をしたのは私個人。分かる？あんた達に協力しているのは「私」であって『警察という組織』じゃない。そこを勘違いしないで」

「……………」

しんのすけは押し黙る

「更に言えば、『私』があんた達に協力するのは、力のあるあんた

達が今の春日部をどうにかしたいと想い、頑張っているからと、何より私にどうにか出来る力が無い。だからあんだ達に縋るしかないの」

「……………」

「いい？そのストーカーがスタンド使いである以上、そいつをどうにかするのはあんだ達の役目。そこは間違えないで」

「ほ……ほい」

「じゃあこの手紙貰っていい？」

「食べるの？」

「私や山羊か。違うわよ。手紙には指紋がついて……」

「あ……………」

しんのすけは近所一帯に響き渡る程の大声を上げた。突然の大声に、三人共啞然とした

即座にみさえが入ってきて、しんのすけの頭に拳骨を食らわす。しんのすけの頭に大きなたんこぶが出来た

「今何時だと思ってるの！」

そう言い放った後、居間から出て行った

「ど……どうしたの？」

目をパチクリしたまま、ロンディネが訊ねる。しんのすけは体を震わせながら内地へと指差した

「このおねいさん、オラがあれこれ文句言ったから、その腹立てにオラをストーカーとして紫蘇するつもりなんだ！」

「もしかして『腹いせ』って言いたいの？それに『紫蘇』じゃなくて『起訴』……何でそう思うの？」

「だって、その手紙にオラ達も触ったんだぞ。だからオラの指紋を取って、それを証拠にして……あだっ！」

無言で額に人差し指と中指でデコピンを喰らわせた

「誰がんな恥知らずな真似するか！ちゃんとあんた等と私と被害者家族の指紋を取ってそれを照合するわ！大体指紋取るのは私じゃない！私の同期に鑑識にいる奴いるからそいつに頼むの！」

「え？それ大丈夫なんですか？」

「そいつはこの程度なら何も聞かずに職務時間外に調べてくれる。」

「一回焼肉奢らされるけどね」

「ほうほう、そうしておねいさんは他人の手柄を横取りして自分の点数稼ぎをするのか……」

「どうぞやらあんだとは一度サシで勝負しないといけないみたいね……まあ、という訳で貰っていくから。そんじゃ」

「え？もう帰るの？」

「私明日早いからね」

そう言って手紙を袋に入れた後、ひろしとみさえに軽く挨拶して帰っていった

残された三人は

「もう、画期的なアイデア思い付いたんだから、それをお話するままでいてくれていいじゃない！」

「そう言って呼び止めれば良かったんじゃ……」

「おねいさんが家の敷居を出た時思い付いたのにどうやって呼び止めるの？」

『それじゃあの人はどうやって君がそのアイデアを思い付いた事を知る事が出来るんだよ！』

夏帆とロンディネは突っ込みを入れた

「で……そのアイデアは？」

「待ち伏せ。あいつは毎日決まった時間に手紙を出すよつだから、そこを狙って……」

「それをそいつが考慮に入れてないとは思えないんだけど……」

「勿論、普通に物陰とかに隠れて待ち伏せるんじゃない！絶対に隠れてるとは思えない場所に隠れるんだぞ！」

「『絶対に隠れてるとは思えない場所』？」

「これには『ある人』の協力が必要不可欠だけど……協力してくれるかどうか分からないんだよね」

「おい大丈夫かそれ」

「大丈夫！何とか話をつけるから安心して！それじゃ、明日四時頃ここに集合！以上！」

この一言で、今回の集会は解散となった

翌日、午後四時半過ぎの舞浜家の郵便受けの底――

に貼り付けられている、清水の舞台が写された一枚の写真―の中

「ねえねえ心優ちゃん」

「何？」

「まだ怒ってる？」

「当たり前でしょ！」

自分に話し掛けてくるしんのすけを、土浦心優は目に涙を浮かべながら怒鳴った

つまりこういう訳である。彼女の『アリス・イン・チェインズ』の力で時間まで待ち伏せする。これがしんのすけの考えた作戦だった。何故土浦がこれ程までに不機嫌かというと、しんのすけは彼女を呼び出す際、事情を一切伝えず、彼女が想いを寄せる宝来瑠璃を餌にして、つまり嘘をついて呼び出したのだ

同性愛者とはいえ彼女も普通の恋する女の子だ。期待していただけ嘘だと告げられた時のショックと失望感はかなりのもだったのだろう。直後の暴れようは兎も角しんのすけ達では手をつけられず、シロの犬小屋を壊し、干してあった洗濯物を汚した後にもさえが駆け込むまで盛大に暴れ回った（真相を知り、しんのすけもお仕置きされたのは、また別の話）

因みに清水の舞台の写真が使われているのは、先週土日に彼女の一家は京都の親戚の元へ出掛け、宝来と思い出話をする為に持ってきたからである

まあ、その後何とか宥めて協力して貰っている訳だが……

「何で最初から正直に話してくれなかったの？」

「いや、だって、素直に話しても協力してくれないと思って……」

「あたしそこまで自己中じゃないよ！ちゃんとやってくれれば喜んで協力したよ！」

涙目でその場でじたばたする土浦

因みにロンディネは珍しそうに辺りを見回し、夏帆はテリヤキバーガーを食べながら舞台の下を見下ろしていた。どちらもしんのすけと土浦に関心は無さそうである

「……………」

暫くすると、夏帆は立ち上がってしんのすけと土浦へと足を進める。途中、ロンディネも手招きした

集まった三人に、右手首の腕時計を見せる。その分針は、59分を指していた

全員の表情が強張った

「もう一度作戦を確認したいんだけど……いいかな？」

土浦が尋ねる。三人は返事はしなかった

「この針が12を指すと同時に、みんなを写真の外に出すんだよね？それでいいんだよね？」

三人共何も言わなかった

分針が、12の数字を指した

「え？ちよ……は？」

その男はたった今日の前で起こった光景に、戸惑うしかなかった

五時に想い人への手紙を郵便受けに投函する。その日課を今日も果たそうとしようとした瞬間、突然四人の人間が郵便受けの下から折り重なるように出て来た。その内一人は、まだ園児程の子供である

どうにか落ち着いた脳で思考を巡らす。結論はすぐに出た。どうやってかは知らないが、何処かに隠れて自分を待っていたのだ。郵便受けに投函した後、体を翻して急いでこの場を後にした

「逃がすかあ！」

いち早く立ち上がったしんのすけとロンディネは、逃げた裾の長い黒いコートにフードを深々と被った男を追う

「気をつけて、あいつの足からスタンド力が……」

「分かった！」

『ハリケーン』を身に纏い、先程よりも遥かに速いスピードで追う。あつと言つ間にロンディネを置き去りにし、男との距離を詰める。そして、袋小路まで追い詰めた

「よし、お前はもうフクロウの鼠だぞ！無駄な抵抗は止めて、下校しろ！」

「……フクロウの鼠、か……末路は餌になるだけだな」

ククククと笑いながら言う

「その下校つて何？『投降』と『登校』をかけたシヤレ？随分面白いなお前……」

「いやーそれ程でもお」

「だが……俺は逃げる」

男はスタンドを、『腕だけ』出した。しんのすけはこの形態の必殺技を繰り出す為に後ろに下がる

跳んだ瞬間、男は背後の扉を殴りつけ、そして、その場で跳んで右隣にある三階建ての家の屋根に着地した

『！』

人間を越えた跳躍に、一瞬目を奪われる

そして、しんのすけの必殺キックが先程まで自分が背を着けていた扉にヒットしようとしたその瞬間

「うわっ！」

『ぬおっ!』

塀が粉々になり、飛び散ったその破片をモロに食らう。余波によって体勢が崩れ、地面にバウンドした

男は体を翻して向こう側へ飛び降りた

「しんのすけ君!」

「しんちゃん!」

男が飛び降りたのとはほぼ入れ違いのタイミングで三人が駆け寄った

「大丈夫?あいつは?」

「逃げられた……」

「何処に?というよりこの状況は?」

「追い詰めたと思ったら、あいつがスタンドの腕を出して塀を殴った後……あっちの屋上まで跳んで……そこで……塀が爆発して……」

「ここから……三階の屋根まで?」

「うん……ひとつ飛びだった……」

四人の間に、静寂が訪れる

「と……兎に角、今はここを離れよう。人が集まってくる前に」

ロンドィネがこう切り出す。三人共異存はなかった

出来始めた人ばかりを掻き分けながら、四人は急いでこの場から離れた

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（後書き）

すみませんまた間を空けちゃいました。今回の話は、書き始めたら結構スムーズに進むんだけど、構成が難しくくて……

次回も宜しくお願いします

ストーカー行為はダメ！絶対！？（前書き）

ストーカーを取り逃がしてしまったしんのすけ。次なる対策は？

ストーカー行為はダメ！絶対！？

「つまり、張り込んでいたのはいいけど後一步の所で取り逃がしちやっ たって訳ね……」

「うん」

午後八時、野原家の居間

そこで、本日舞浜家で張り込んでいた四人と内地裕佳が集まっていた

「かなり惜しかったんだけど……」

「まあそんな気を落とす事無いわよ。後一步の所で取り逃がしちやっ たとか、警察でもよくあるから……」

「そうだよ。無事だっただけ良かったじゃん」

「今のオラの心情、分かる？」

「？？」

「スーパーで欲しかったお菓子が最後の一個しか残ってなくて取ろうとした所で別の人にそれを取られた。そんな気分……」

「言わんとする事は分かるな」

「うん」

「あたしも何度か体験してるもんね」

たとえば身近なものもあり、共感を示す未成年者達は、しまいには自分の体験談まで語り出した

終わるまで待つつもりでその様子をイライラしながら見ていた内地だったが、五分経つても未だ語るのを終える気配のない彼等を見て

「どうでもいいんだよそんな事はよお！」

テーブルに思いつ切り手を叩き付け、怒鳴り散らした。当たり前だ

四人は吃驚して内地へと体を向ける。姿勢は自然と正座となっていた。そんな彼等に、内地は説教を始めた

四人は自分達に非があるのは理解している為、頭上からの小言が終えるまでじっとしていた

「で……話は戻すけど、そいつは屋根まで跳んで逃げたんだよね？」

「うん」

「で……ロンディネ君、君の能力ではそいつの『足』にスタンド力が感知したんだよね？」

「ええ」

「多分その跳躍は『それ』で間違い無いな」

夏帆が言う

内地はメモ用紙をテーブルの上に置き、HB鉛筆を右手に持った

「何すんの？」

「今判明している『そいつの出来る事』を箇条書きしておこうと思
つてね……これから『能力』解明のヒントになるかも知れないし…
…」

「ほい、ストーカー行為」

「『普通の人には出来ない』事で頼むわ」

「毎日決まった時間にお手紙を自分で出しに行く事！」

「えーっと……まず『手紙に声を録音する事が出来る』と……」

スルーしてメモ用紙に記入する内地と、「スタンド使いとして出来る事」を次々に言う夏帆達。無視されたしんのすけは、シヨックで固まった

「何かバラバラだね……」

「そうね……ねえ、スタンド能力って、一人の人間が二つ以上有する場合ってあるの？」

「それは有り得ません。スタンド能力は一人につき一つしか持てません」

内地の質問に、イタリア人の少年は答える

「つまり、これらの項目には実は『共通点』があると考えた方が自然だね」

メモ用紙を持ち上げ、夏帆は言った

「そうよね……『インフェミー』のようなスタンドを持つ人がそう何人もいるとは考え辛いし……」

続けて意見する土浦。幾ら考えても時間ばかりが過ぎていき、答えと言える答えに行き着く事は出来なかった

「ねえ、そんな事よりもさ、オラ達には『重大な問題』が一つあるんだけど」

そんな中、復活したしんのすけが切り出した。全員がしんのすけへ顔を向ける

「『重大な問題』？」

「うん。『明日はどうやって張り込むのか』っていう問題。今日の事でオラ達が今回みたいに郵便受けの底とか、そう言った所に隠れるのバレちゃったし……」

確かに。と、納得する

あのやり取りで写真の中に隠れていた事とそれが土浦の能力による物だとまで知られているとは思えないが、それでも一度見られている以上、それに対しての警戒は当然される

ましてや『アリス・イン・チェインズ』で写真の中に入った場合、写真の中は外とは隔離された別空間である為、外の情報を知る事は不可能だ。もし潜んでいる時に写真に何かされたら、どうしようもない

夏帆達は悩む。対し、内地はその悩みを嘲笑うかのように鼻で笑った

「ちよつと！何で鼻で笑うの！」

「ごめんごめん。鼻で笑ったのは謝るわ。でもね、それ、『そんな

に悩む事なの？」

全員の頭に疑問符が浮かぶ。内地は気にせず続ける

「確かにあんたのさっき言った事は間違っていないわ。でもね、そんな問題私がちよつと骨を折れば解決出来るわよ」

「何処の骨を折るの？首の骨？」

「死ぬわ！まあ大船に乗ったつもりで任せなさい。じゃあまた明日の四時に集合、今度は舞浜って人の家に」

「仙波の家知ってるんですか？」

「知らないけど調べれば分かるわよ。明日非番だから時間はたっぷりあるしね」

それじゃ、と言って、立ち上がる

「あつ待って！」

居間の敷居を跨いだと同時に、しんのすけが呼び止めた

「何？」

「手紙から何か分かった？」

「あーうん。そうね。それちゃんと言わないとね」

嘆息をつきながら頭を掻く。夏帆達は一応聞く姿勢をするも、女刑事からの口から出る答えは想像がついていた

「相当無理言って超特急で調べて貰った結果……」

「その結果？」

言う直前、右拳をギュツと握り締めた

「全部の手紙に指紋とか、そういう決定的な物は検出されなかったわ！一切！」

しんのすけ達はコケる。答えの内容にというより、堂々と構えて答えた事が大きかった

「何そんな自信満々に答えているんですかそんな事！」

「事実だからしょうがないじゃない」

お陰で焼肉代丸損よ。と小声で付け加える

「そう言うのってもっとこう……適した言い方があるんじゃないんですか？」

何か何処か間違ってる感の事を言い出す未成年者達を見て、はあ……と溜息をついた

「落ち着いてよ……手紙にも便箋にも指紋は一切付いてないって言ったのよ。そいつそのストーカーの事絶賛してたわ」

「じゃあ別のアプローチで……」

「使われていた便箋も手紙も文房具屋やコンビニ行けば何時でも入手出来る普通の物でそっち方面からの特定は不可能」

「血とか、髪の毛とか……」

「指紋を残さない程徹底してる奴がそんなの残してると思ってんの？」

「ですよね」

「いい？ストーカーが誰なのか、それは特定出来なかった。これが結論。以上」

ここでこの話は終え、内地に続いて夏帆達も帰路についた

『こんな時間に電話してごめんな夏ちゃん』

「そう思うんなら御用件をさつさと述べてくれ。明日も平日で平常通り学校というものがあるんだから」

『……それは引きこもりの私への嫌味かな？』

「今から寝ようとしていた所に電話が掛かってきたら不機嫌にもなるよ……さつさと用件述べてくれ」

『夏ちゃん達は私の引きこもりの原因であるストーカーを捕まえようとしてくれている。それだけで感謝してもし足りない』

「そりゃどーも」

『それと明日家来る時チョコテイラミスとロールケーキを差し入れに持ってきてくれると嬉しいんだけど……駄目かな？』

「……切つていいか？」

『待つてよ。ここからが本題なんだから』

「じゃあその本題を手っ取り早く言つてくれ。早く寝たいんだ」

『悪いな……そのストーカー、捕まえたら最初に私の許に連れてき

てくれないか？言いたい文句は直接言いたいんだ』

「分かったよ。そいじゃお休み」

『ああ、お休み』

「そつちは着いた？」

内地裕佳はトランシーバーであちら側にいる人間に語り掛ける

時刻は午後四時半、あの話し合いから約20時間後の彼女は現在、しんのすけと共に舞浜家の真向かいの家の、仕切である垣根の陰の所に隠れていた

『ええ、どうやら何時でも飛びかかれるみたいですよ』

返答した相手、高橋夏帆は、舞浜仙波のベッドの上に乗り、窓から郵便受けの裏に身を屈めて隠れているロンディネと土浦心優を見下ろしていた

余談だが彼のいる部屋の主である舞浜仙波は、内地が夏帆の頼みで持ってきたチヨコティラミス十個を18秒で食べ終えた後、現在は妹の花実と共に居間で人生ゲームに勤しんでいた

五人がこうしているのは、内地の作戦である

その作戦とは、家の仕切の向かい側まで見渡せる場所、この場合仙波の部屋に見張り役で夏帆、舞浜家の庭にロンディネと土浦、そして向かいの家にしんのすけと内地を配置。ストーカーらしき人物が現れたら見張り役が連絡する。舞浜家の方にロンディネの配置が決定事項なのは、その人物にスタンド力は感知されるか、そしてその感知出来る物を郵便受けに投函するかどうかを『サード・アイ・ブラインド』で堀越して確認する為。そして、それを投函する者が出たらロンディネ達はすぐに玄関から出る。それに反応して逃げ出すより前に、しんのすけ達がストーカーの前へと出て来て挟み撃ちにする。という物である

因みに、ロンディネ以外の配置の理由は、内地が向かいの家の住人に張り込みに使わせて欲しいと頼み込んだ手前（仙波がストーカーに悩まされているのは知っていた為承諾）自分がいないと妙だと思われるから。どちらも上手くいけばだが、しんのすけは力づくで相手を押さえる事が出来る為で、土浦は相手を捕まえる事が出来る為この二人の場合配置はどっちでも良かった為最終的にジャンケンで決まった（向かいの家の住人には、ストーカーの姿を目撃した証人として（強ち嘘ではない）連れてきたと言った）。夏帆が見張り役なのは、能力上特にやれる事が無いから

「ねえおねいさん」

話し掛けてきたしんのすけに、手で小さなxを作った

(小声で耳の近くで話しかけてよ)

(ほい)

(そんで何?)

しんのすけは内地の耳を数秒じーっと見詰めた後

「はむ」

耳朶を軽く噛んだ

途端、内地は力無くぐったりと横たわった

(勘弁してよ……耳、弱いんだから……)

(いやーごめんごめん、そこに耳があったからつい噛みたくなっちゃって……)

(まあいいわ。それより何か聞きたい事でもあるの?)

(えっとさ……ストーカー来るのかなあって思っちゃって……だって結局逃げられたのが昨日だったし、今日昨日と同じ様に見張られてるかも知れないってのは簡単に予測つくだろうし……)

(そこはそんな心配する事無いんじゃないの? 四ヶ月位毎日欠かさ

ず決まった時間に手紙出すなんてマメな奴が昨日一日見張られていたからってその行為を簡単に止めるとは思えないし）

そうは言っているが、しんのすけの心配は的を得ていて、自分の言っている事がちゃんとした根拠がない物だとは理解していた。念の為仙波に確認を取った所、今日の所はまだ例の手紙は来ていないようだ、これが今日今まで通りの時間に手紙が届けられるという事にはならない

（まあ、この子の言うように昨日待ち伏せられて今日も同じ様に手紙を届けに来たとしたら相当バカ正直な奴ね……）

そう考えている時、夏帆から連絡が入った

『昨日のストーカーと同じ格好をした奴が見えましたよ』

（……………）

どうやら相手は、想像を絶するまでにバカ正直な奴みたいだ

兎にも角にも、内地の作戦は開始された

（おねいさん……）

(何?)

(オラ……オラ……おトイレ行きたくなっちゃった……)

(さっさと行っていい!)

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（後書き）

今度の作戦は成功なるか？

それでは、次回もお楽しみに！

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（前書き）

ミッション開始！今度は成功なるか！？

ストーカー行為はダメ！絶対！？

『来たよ』

「合点承知」

夏帆からの指示を聞き、舞浜家に待機していたロンディネは自分のスタンドで堀越しに敵を確認する

(で……どっ?)

隣の土浦が小声で尋ねる。ロンディネは彼女の方へ向いて耳打ちする

1845

(反応はある……奴の両足と奴からして左側、位置は大体腰の辺りに……)

(決まりだね……よしっそれじゃ早く動いて捕まえよ！)

(いや……ちょっとおかしいなと思ったただだよ。未だ手紙の反応がそんな動いてない……何をしているんだろう……?)

(分からないなら確かめてみたら?)

(そうだね)

スタンドの性能を、ただの熱感知の方に变更后改めて確認する。それを目にして、その理由を納得した

(あー成程、そうか、そりゃそうだ)

(成程って何が?)

(郵便受けを徹底して調べてる……)

手紙をまだ出していない。だから反応は来た時から動いていない。考えてみたら単純で当然な事ではなかった

郵便受けを調べている理由は確実に昨日にある。想像を巡らす必要もない。自分が奴の立場だったら自分だってそれを最初に行く

スタンド力の感知に性能を戻し、続行。ずっと動かなかった反応が、打って変わったかのように大きく動く。どうやら手紙を手にとっているようだ

(じゃあ行くよ)

(OK)

投函する音が聞こえる

ストーカーがこの場を去る為に踵を返したのと、ロンディネと土浦が塀を飛び越えてきたのと、五時になったのは、同時だった

何かが着地する音を聞き、ストーカーは思わず立ち止まり、振り返るいたのは、昨日いた四人の内の二人だった

「よつまた会ったね」

「奇遇だね」

何処か気さくに挨拶をする二人に対し、心中で「何が『奇遇だね』だ。『待っていたよ』がこの場合正解だろ」と突っ込みを入れる

同時に、再度後ろに振り返って逃げようとする。途端に、前から舞浜家の向かいの家の垣根から、昨日自分を追っ掛けてきた子供と、昨日はいなかった二十代程の女の二人組が出て来た

つまり今回は『普通に待ち伏せされていた』訳か。昨日のが昨日なだけその考えは及ばなかった

男は『能力』を使って舞浜家の屋根へと跳躍する

「そうだった！あいつはあれが出来たんだ！」

「どつするの？回り込むにしてもここら辺小路が無いから時間が…」

「ならこうする」

内地は拳銃を取り出し、滞空しているストーカーへと向ける。この拳銃はどう見ても日本の警察官の持つそれではなく、日本ではやくざとか、そういう系の人達が持っている拳銃だった

その引き金を引いた

銃声が響き渡る

ストーカーはスタンドを出して弾丸を弾き飛ばすが、そのせいで着地に失敗して舞浜家の庭に落下した。落下の際、着ていたコートが雨樋に引っ掛かって脱げてしまう

「よし、今がチャンスよ」

『何考えてんだお前はアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

同行していた三人と仙波の部屋から始終を見ていた夏帆は、目上の人間に対してあるまじき言葉遣いで内地を怒鳴った

「何でそんな堂々と撃っちゃったの？」

「あいつを逃がさない為。大丈夫よ。あんたの話によるとあいつのスタンドの型って『近距離パワー型』でそれって銃弾を弾く位造作も無いんでしょ？じゃなかったら発砲しないわよ怪我したり死んだりしたら後味悪いし明日の朝刊に私の写真が載る事になるし」

「その拳銃は？」

「押収品を一つパクった」

「まさかそれを使うのも最初から計算の内に……」

「入ってたわよ。あんた達に言わなかったのは五月蠅い事になるのは分かってたから」

「そりゃ言うよ！どう考えてもマトモじゃないもん！」

「スタンド使い相手にまともな手段で挑んでたら命が幾つあっても足りないのは一回立ち合っただけの私でも十分理解出来るわよ。『能力』持つてるあんた達のがそれを分かってるでしょ？」

重い言葉に押し黙るしかなかった

「まあ押収品パクった事も街中で発砲した事も私が始末書書けば済む話。それより今は……」

「おおそうだったそうだった……夏帆さん、あいつどうしてる？」

「二階の高さから落ちてモロに背中を打ったからね。スタンド使用といえども基本的に普通の人間がそれでダメージの無い筈がない。今ようやつと腰を上げたばかりって所だ」

「よし！行くか！仙ちゃんの弔い合戦の最終局面に！」

『死んでねえよ！』

ストーカーを含む全員から突っ込まれた

しんのすけは『ハリケーン』を出し、敵のいる舞浜家の庭へと突入した

「く……痛えなたく……いきなり銃ぶつ放してくるなんてありがよ……」

庭にいたのは、襟首にクリップを付けた、上から二番目のボタンまでを外し、三番目の所で勾玉を模した半透明のボタンをつけ、後はジッパーの学ランに両膝の所に！マークの入った四角い布が縫い付けられたズボンを着た、銀髪にエメラルドグリーンの瞳をした、まだ中学生程の少年だった

その少年は立ち上がってしんのすけと顔を合わせた

「おっ……昨日も会ったが……直接こうして面合わせるのは初めてだな坊主……」

「坊主じゃないぞ！オラ野原しんのすけ！春日部一イケてる幼稚園児だぞ！どれ位イケてるかって？それはね……」

「聞いてねえよ」

「オラの通う幼稚園にもオラの家にも、24時間年中無休で世界中の女が、オラを一目見に……」

『嘘つけ嘘を』

また全員が突っ込みを入れた

「更に……えーっと……オラの……」

「大嘘が思い付かないんならもう止めとけ。俺もそんなん聞きたくもないから……俺も自己紹介をしてやろう。俺の名は五色善留^{ごしきよしる}14歳。まあ、今年の十月で15歳になるがな」

「ほうほう……お前が仙ちゃんにあんな手紙を毎日送り付けていたのか！あんな事今すぐに止める！」

「悪いけどそうする訳にゃいかないね……何故なら俺にはそうしなければならない『理由』があるんだ」

「じゃあその理由教えて」

「お前に教えないといけない理由はねえ」

「だったら力づくで聞き出すか……『ハリケーン』！」

『心得た！』

『ハリケーン』の拳は、真っ直ぐに五色の顔へと放たれる

その拳が当たるか当たらないかの所で五色のスタンドが現れた

赤褐色の体色に腕の付け根が球体関節の間を跨ぐようにコードが数本繋がられ、顔の上半分がプラチナのような光沢と色合いをした仮面に覆われた人型のスタンド。そのスタンドは、飛んでくる『ハリケーン』の拳の軌道上に、広げた左手を置いた。ただ、それだけだった――

「ねえ心優ちゃん。私、スタンドが見えないから聞くね。あいつ、何したの？」

「何って……しんちゃんの『ハリケーン』の拳を……左手で受けた……それだけ」

「それで何で『こんな結果になるの』？」

――その結果、五色の左手は飛ばされず、攻撃をした『ハリケーン』の左手が裂けた。フィードバックでしんのすけも同様の負傷を負う

勿論これはおかしい。同じ近距離パワー型スタンドとは言え、『ハリケーン』は力一杯殴りつけた。対し、五色のスタンドのやった事は掌でそれを受けただけ。同じ近距離パワー型と言え、『普通なら』結果がどうなるか。人間同士がやっても明白だ。つまりー

「『能力』を使ってるな……何等かの能力を用いてこの結果に導いたんだ」

「チツチツチツチツ」

笑顔で指を振る

「これはある意味しんのすけのスタンドが導いた結果だけ。急場の仕込みとは言え俺はさっきので四肢一本を滅茶苦茶に出来るって自信があつたからな」

何処か称えるように五色は言う。勿論しんのすけにとって何の慰めにもなっていない

それに対しロンドンディネはこう言った

「多分君は今まで自分とは別のスタンド使いと戦った事はおるか会った事すら無いでしょ？人間基準だったらスタンド相手じゃずれてて当たり前だよ」

だからそんな気にする事は無い、と続ける。彼のこの台詞は、五色への励ましや慰めとかのつもりで言ったのでなく、ただ思った事を口にただけに過ぎない事をここに明記しておく

しんのすけは今度は『ハリケーン』を刀と盾に変え、接近。五色のスタンドは拳を振り下ろすも、その全てを避けるか盾で防いだりした。そして目と鼻の先まで接近し、ジャンプし、刀を振り下ろす。瞬間

「！」

何の前触れもなく、突然盾が爆発した。飛んでくる破片から目を守る為、しんのすけは反射的に目を瞑る

それにより出来た隙を五色は逃さない。刀を弾き、がら空きになった腹へ拳を打ち出した

型を近距離パワー型に戻した『ハリケーン』がその拳を掴み、そのまま彼を放り投げる。堀に激突しそうになるも、直前にスタンドの腕を堀へと伸ばし、それを防いだ

「ヤベーヤベー……お前のそれ、俺の『トワイライト・ゾーン』と違って自意識持つてるだけじゃなく自分で考え自分で判断して自分で動くのかよ……反則臭え。まあ、そうじゃないと自意識持つてる意味はねえけど」

「お前の能力のが反則臭いぞ」

『そつだそつだ!』

「まあどう思うかは互いの自由か……」

適当な大きさの石を拾い集め、それを宙に放る

その石を、『トワイライト・ゾーン』は各一撃以上食らわせる。それによつては石は動きも砕けもしなかった。落下する石を、落ちる前に全てキャッチする

その石を、しんのすけへと投げた。『ハリケーン』は石を弾き飛ばす

「はいアウト」

パチンと指を鳴らす。弾かれた石は、一斉に砕け散った。細かいつぶてが散弾のように降り注ぐ

「ふふふふ……そんな攻撃が、今のオラに通じるとでも?」

ふふふふとほくそ笑むしんのすけの体は、別人のように筋肉質になつていた

石が砕けた刹那、『ハリケーン』と一体化し筋肉の鎧で身を守つた

のだ

「悪い。さっき言った事、訂正する。飛びつきり変な能力をしてるね」

「飛びつきりだなんて……照れるなあ……」

「意味ちげえよ」

にやけるしんのすけに突っ込みを入れた

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（後書き）

戦闘シーンまで漕ぎ着けられました。スタンド名はアイアン・メイ
デンの楽曲から

次回もお楽しみに！

ストーカー行為はダメ！絶対！？（前書き）

ストーカー、五色とのバトル勃発！

ストーカー行為はダメ！絶対！？」

「夏ちゃん。外……随分騒がしいね」

「そりゃね……それよりお前、今回は終わるまで僕達に話し掛けないんじゃないかった？邪魔したくないとか何とか言ってたさ」

「そのつもりだったんだけど、遊び相手の花実はこの通り気持ち良さそうに眠っちゃって、同じ様に昼寝をする気にも一人でゲームする気にもなれず退屈だから現状暇そうに窓から見下ろしているだけの夏ちゃんに話し掛けてみた」

「暇そうに見える？まあ実際に暇だけど」

「成程、実際に暇だったから暇そうに見えたのか。うん納得」

「何が言いたいんだよ……それより暇なら見るか？お前には何が起こっているのかさっぱりだろうが暇潰し位にはなるだろうし」

「ふっ……それは遠慮しておこう。何が起きてるのか、それが分からないと夏ちゃんにとっては面白おかしい展開が繰り広げられていても私はただ混乱するだけだろうし。それにしんちゃん達が何とかすると言ってくれたんだから私はただ待てばいい。頑張っている所をあれこれ介入するのは『野暮』ってものだろ？」

「一昨日会ったばかりの幼児に随分信頼を寄せているんだな」

「当然だよ。友達だからね。理由はそれだけじゃ駄目？」

「いや、的確だ……じゃあ僕は引き続き見張り役やるから。一応これ
れが今回の作戦の僕の役割でもあるし」

「では、その間私は暇だから一緒に遊ぼう。久し振りに二人で軍人
将棋を一局……」

「人の話聞いてた？」

「食らええええええ！」

左腕を振りかぶり、放つしんのすけ。対策として、五色は右手を打
ち出された拳の軌道に置いた

掌に拳がぶつかる

「！」

右手から、衝撃が伝わった

右手は弾かれ、ボディに拳がめり込む。腕が振り切られると、五色
の体は吹っ飛んだ

舞浜家の壁に勢い良く背をぶつける。家全体が、衝撃で揺れた

「くっ……」

ブルブル震える右手を見る。衝撃で指がまともに動けない。骨は砕けてないみたいだが、暫くは使えない

残った左手と両足を壁や地面に押し付ける。しんのすけはハイキックを放ってきた。右足で跳ぶ事でそれを回避。背後に回った五色は頭部に狙って左足を放つ。振り向く途中だったしんのすけの右頬に、それは命中する

だが、しんのすけに大したダメージを与える事は出来なかった

足を引つ込める最中、しんのすけは拳を打ち出す。体を反らす事でギリギリ避けた。同時に後ろへとジャンプ、後退して距離を取る

そして左手と両足を、再度、そして更に強く壁や地面に押し付ける。勿論追撃を加えるべく接近してくるが、そのままの姿勢で上手い具合に一定の距離を保った

そのあからさまに不審な挙動に、観戦者達は疑問に思った

「随分と器用な真似が出来るものね……」

塀の向こう側で、内地が感心したように言う。隣の土浦とロンディネも、同じ感想だった

「けど……何であいつ……あの姿勢を取り続けてる事にそんなに意味があるの？」

「やっている以上理由はあるだろ」

土浦の疑問に、ロンディネは素っ気なく答える

そう、『意味があるから』あの姿勢を取っている。『理由があるから』やっている。戦闘中に伊達や酔狂であんな真似はしない

もしかしたら自分のスタンドならそれで奴の能力が何なのかという糸口が掴めるかも知れない

そう考え、庭を出る際一度解除した『サード・アイ・ブラインド』を再度発現させ、五色の方を見る

「何か分かった？」

「話し掛けないで今集中してい……！」

ロンディネが『ある事』に気付くと同時、五色は今までとは異なる行動を起こした

地面に着けていた左手を放し、そして、己としんのすけとの間にある、姿勢を取っている間保ってきた距離を、歩いて自分から詰めてきた

しんのすけはそんな彼へ拳を突き出す。五色は突き出された腕を狙って、右足を振り上げる

爪先が手首に当たり、めり込むと、弾かれたかのように腕が蹴り上げられた。もう片方の腕で攻撃を繰り返すも、同じ様に蹴り上げられた

そして、がら空きとなった懐まで接近し、左手で作った拳をしんのすけの顎へと振り上げた

拳は顎にヒットし、しんのすけの体は吹っ飛んだ。気絶した為か、スタンドは解除され、元の姿に戻ってしまった

それを確認して五色は左手を壁に押し付け、足に力を込める。そして、塀の向こう側から観戦していた三人に視線を向ける

「どうする？あんだ達が続きやる？それとも……」

「まだだぞ……まだオラは負けてない……」

しんのすけはゆっくりと立ち上がった

「しんのすけ！」

「しんちゃん！」

「まだ立てたのか……止めといた方が賢明だと思うぞ？俺のスタン

ドは普通に殴ったりする分にしてもパワーは高いしそれに『押し付けた分の負荷』も加わっているんだ。それを顎に食らってー」

「そうか……」

ロンディネが呟く。一斉に全員の視線が彼に向いた

ロンディネはそのまま続ける

「存知の通り僕のスタンドはスタンドエネルギーを『熱』みたいに捉える事が可能……その僕のスタンドが先程捉えたのは、お前が手足を押し付けていた時、そこにエネルギーが増幅していた事……まるで』その際にかかる負荷がそのままエネルギーに変換されたように』……」

「そ……それって、まさか！」

「そう……こいつのスタンドは『物理的な負荷を物体に溜める』能力って事」

その負荷は多分好きな時に解放出来るんだろっ、と続ける

「成程ね……物体に何かしようと思えば必ず相応の負荷を掛けないといけないからね。物を砕く程の負荷をそれに溜めていけば本来ならすぐに起こる結果を後に起こす事だって可能だし、足にかけた負荷を溜めれば一時的に脚力を上げる事だって出来るし、溜め込んだ

負荷を掛かってくる負荷にぶつける事だ……」

「加害者の方が怪我したのはそれでしょう……溜めていた負荷が掛かってくる負荷を上回っていたからその現象が起きたんですよ」

「ちよつと待つてよ！」

土浦が声を上げた

「じゃあ、手紙に声を録音してたのはどんな原理？負荷を溜めるだけじゃ辻褄がー」

「辻褄は合うよ」

ロンディネはそう言って続ける

「音で物を壊す事は出来るんだよ。音は空気の揺らぎだしね。つまり音を出している物にも音の届く範囲にいる物もその分の『物理的な負荷』は掛かっているんだよ」

「そう、そして溜めた物体と溜める負荷との『繋ぎ』を弱くすれば、ちよつとしたきっかけ、例えば折り畳まれていた状態の紙を広げてみただけで他人の手でも負荷を解放させる事が可能だよ」

ロンディネの説明を補足するかのようになり、五色は言う

そしてしんのすけへと、顔を向ける

すると、しんのすけは口を動かし始めた

「オラには難しいお話、よく分からないけど……仙ちゃんと約束した以上、少しピンチだからとか、お前がどんな変な能力を持っているたからとか、それでオラがお前に負ける理由にはならないぞ！だからどうやってもお前を倒して仙ちゃんの許に連れてってやるぞ！」

しんのすけはそう大声で叫ぶと、『ハリケーン』を発現させる

そして駆け出そうとした瞬間――

「待つて」

土浦が制止の声を上げ、しんのすけの前に出た

「どっしたの？心優ちゃん」

「しんちゃん……このまま真正面から戦ったってもつとズタボロにされるだけだよ……」

だからーと言っ

「私が勝たせてあげる」

自信満々に、そう告げた

しんのすけも、ロンディネも、夏帆も、内地も、五色も、この少女がたつた今何を言ったのか理解出来なかった

五色は誰も戦おうとしなかった事からしんのすけ以外のスタンド使いは戦闘関連に向いていない能力者ばかりだと思っていたし、それ以外は土浦の能力を知っているので何故あんな事が言えるのか、疑問だった

「一応言つとくけど……俺は相手が誰だろうが向かってくる以上は容赦しないけど」

「それに関しては何も気にする事はないよ？私は男女差別や同性愛への偏見は大嫌いだから」

「その発言……『自分は同性愛者だ』とも取れなくないぞ？」

実際に同性愛者であるが、彼はその事実を知らなかった

『トワイライト・ゾーン』を発現し、殴りかかる。スタンドの拳は、土浦の腹部に確実に入った

土浦は咯血し、拳が腹部に刺さったまま力無くうなだれる

「全力で殴ったとはいえ、攻撃も直線だから避けられない事もない筈んだけど……そんなんで俺を倒すだなんて……」

「何で……」

口から血を吐きながら、土浦は口を動かした

「何であの文章で『私があんたを倒すと言った』風を取れるの？私
が……私が言ったのは、あくまで『しんちゃんがあんたに勝てるよ
うにしてやる』って言っただけ……の筈んだけど……」

「面白いな……どうやってか教えてよ」

「こつやっただよ……」

服の袖から、二つ折りにされた『写真』を取り出し、広げて五色へ
向ける。それには和室が写されてあった

土浦は腕を伸ばし、五色の体にその写真を押し付ける。五色は写真
に吸い込まれ、その場から消えた

「ちょっと……大丈夫なの心優ちゃん……」

「だ……大丈夫……それより……早く、写真の中に入ってしんちゃん……私の読みが正しければ、今ならあいつに……」

途中で咳き込み、勢い良く血を吐く。治まったら、強い眼差しをしんのすけに向けて、言った

「あいつに、勝てる……！」

「何だ……」

五色は自分の今いるこの場所について考える

ここは所謂『和室』だ。そして彼女が自分に押し付けた手紙には、この部屋が写されてあった。そして写真を押し付けられた後にここに来た

という事はここは『写真の中』で、これが彼女の能力という事になる

（成程……この能力で昨日は待ち伏せしていたって事が……納得）

納得ついでに茶でも飲もう。そう思って机の上に置かれた急須の取

っ手に指を掛けー

「ほうほう和室ですか、中々風流ですな」

ようとしたら、さっきまで聞いていた、呑気そうな声が突然聞こえた。振り向くと、そこにはスタンドと一体化したしんのすけがいた

「よう」

「お前さ……『学習能力』ってもんがねえの？その形態は俺には通じないってその身で理解した筈だよな？」

「それはついさっきまでだぞ！お前はもう逃げられない！」

「狭い空間に閉じ込めたからそれが？お前がここにいる以上は条件は同じだし俺にとつちや寧ろ都合だ。右手もぎこちないまでも動かせるようになったからな……こつやっー？」

右手を壁に押し付けようとして、『異変』に気付いた。それはー

「さ……『触れない』？」

そう、触る事が出来ないのだ。しんのすけは狼狽える五色の額を、思いつ切り殴った

「立てるでしょ？」

「うぐ……あ……」

「オラはお前に今までのお返ししないといけないんだからね！百億
万倍返しで！」

割れた額から血を流しながら、立ち上がる五色へ、こつ啖呵を切った

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（後書き）

このバトルもいよいよ最終局面へ！次回（色んな意味で）決着！

お楽しみに！

ストーカー行為はダメ！絶対！？（前書き）

五色戦決着！

ストーカー行為はダメ！絶対！？

しんのすけが放ったハイキックは、五色への的確に命中する。蹴りがぶち当たった五色の体は吹っ飛び、襖にぶつかった

『トワイライト・ゾーン』で拳を打つ。しんのすけはそれを外した障子戸で防ぎ、その障子戸を力一杯押し付けた

「どっしたの？立たないの」

ポロポロの五色へ手招きして挑発する

これから分かるように、現在、しんのすけが圧倒していた。その理由は、五色の能力がこの空間に入ってから『使えなくなった』からだ

「ぶざけんな……」

ブルブル震えながら、勢い良く立ち上がり、顔を上げる。そのポロポロの体からでは考えられない機敏な動きだった

「どんな『世界』だこは……何でこんなに俺が一方的にやられるんだ……何なんだこの空間は……俺もお前も普通に動けると言うのに、信じられないが、まるで俺に対してー」

「『まるで俺に対してだけ時間が止まっているようだ』……とても言いたいのか?」

弱々しい声が聞こえた

「まあそれは正解なようで不正解ね。だってここ『写真の中』だもん……」

何時の間にか土浦心優がいた

言い切ると、うずくまってお腹を押さえた。先程殴られた事による腹部のダメージは、未だに引いているようである。しんのすけが駆け寄ろうとするが、それを止めた

「私の能力はこの通りのものだけ……一つ『特徴』があつてね……この世界は、『私以外は私が許可した人間以外はどんな干渉も出ない』の……基本的に『時が止まっているからね』……」

「俺への『許可』は当然ながら……」

「取ってないよ……」

「成程、道理で俺はこの部屋のどんな物にも触る事が出来なかつたのか……そして納得したよ。この部屋に送られる前にあんたの言った台詞……確かにこの世界じゃしんのすけが勝つ確率は上がったな。負荷を溜めるって事は物体に負荷を、つまり『干渉』しなくちゃい

けないからな。その『干涉』すら出来なくなる世界に放り込まれたら俺は能力を封じられたも同然だ……俺のスタンドは今のこいつにパワーじゃ敵わない……それは今のボロボロになった俺の姿が物語ってる……」

言いながら五色は両手を合わせ、そして土浦へと体を向ける。しんのすけが土浦の前に立ち、両手を広げる

「させないぞ！」

「何を？」

「とぼけるな！オラだってスタンド能力は本体が死ねば解除される事位知ってるもん！」

「そのつもりは塵程もねえよ。それより、お前、今その体勢を取っている事で顎がから空きだって分かってんのか？」

五色はしんのすけの顎を狙って拳を振り上げる。しんのすけは難なくそれを受け止めた

受け止めた手が弾かれる。その隙にもう片方の腕が振るわれ、胸部に掌底が叩き込まれた

五色はそのまま掌底に力を込める

「俺は『この世界にある物』には干渉出来ないが、俺同様『この世界に送られた存在』には普通に干渉が出来るみたいだな」

「うん」

土浦は普通に肯定した

掌底に更に力を込める。しんのすけは攻撃するも、その攻撃は『トワイライト・ゾーン』により全ていなされる

数分経ち、溜めた『負荷』を解放させた。しんのすけは吹っ飛

「オラの勝ちだ！」

「！」

ぶ前に腕を伸ばして五色の肩をがちりと掴み、仰け反った体を起き上がらせ、そして頭突きを食らわせた

五色は一瞬怯み、その隙を狙って顔面へと拳を叩き込んだ

「オラ……オラ……」

『どつした？』

「オラ……勝ったぞー！」

気絶した五色を見下ろし、しんのすけは歓声を上げた

「さてと……事情聴取させて貰いましょうか……全部話してくれるよね？」

「今回の件に関しての事なら」

向かい側に座る内地に、五色はそう答えた

戦闘が終わって土浦が能力を解除して全員が現実空間に戻った後、まず負傷者の手当てを行った

五色が目を醒ますと、居間を借りて聴取を行う事に決まった。仙波との約束はその後と言う事になった

因みに、現在居間には向かい合う内地と五色の他、少し離れてしんのすけ、夏帆、ロンディネ、土浦が、座り込んで傍観していた

「聞きたい事はそんなに無いけどね……毎日手紙を送り続けてきているのは理由があるって言うだけ……」

「ええありますよ」

「その『理由』を教えてくださいませんか？」

それはしんのすけ達も興味があった

この質問に、五色は一度咳払いをし、顔を少し赤らめ答えた

「だって……本人に直接会って話し掛けるって……恥ずかしくて……
…何で転げるの？」

『転げたくもなるわ!』

一斉に突っ込んだ

それをきっかけとして、傍観していた四人は次々と質問を投げつける

「じゃあ何？お前が毎日毎日あんな手紙を出し続けてきた理由って、
直接対面するのが恥ずかしかったからなの？」

「うん。直接告白する勇氣無かったから。せめて手紙でと思って…
…」

「一ヶ月程出してた新聞の切り抜きの手紙は？」

「自分で手紙を書くことすると……緊張のあまり手が震えて……」

「それでよくあんな手紙作成出来たな……」

「悩んだ末に思い付いたんだけどそれが意外とスムーズに進んで…
…深く考えはしなかったけど、『自分で書く』以外は特に意識しな
いから緊張しないんじゃないかな？」

「ワープロ使えばいいじゃん」

「ウチにワープロは無いんで」

「それなら家族に代筆を頼めば良かったんじゃない？……」

「ラブレターを代わりに書いてくれなんて言えるか？」

（それはごもつともだがだからってあんな手紙を好きな人に出すか
？普通……）

「あの手紙を出した最後の日の帰り、その為に回収していた古新聞
が尽きようとしていて新しく回収しようとして資源ゴミ置き場に向かっ
た時に誰かが放った『矢』に刺されて『トワイライト・ゾーン』の
能力を手に入れて……それで特性を把握して」

「自分の声を録音した手紙を今日まで送り続けたと……」

「うん」

内地は無言で立ち上がってしんのすけ達の元に向かう。五人は顔を
寄せ合い、小声で話し始めた

(何か……この人凄いのか情けないのか分からないね……)

(割合的には情けないの方が大きいと思う……)

(確かに……それだけの根性と行動力を何で告白の方に向けないのか不思議だよ……)

(心優ちゃんは瑪瑙お姉さんを写真の世界に引きずり込んでまで自分をアピールしようとしていたのにな)

(しんのすけ君……それは比較として出すにはちょっと……)

(言わないでよ……私だってあの事は出来れば他人に指摘されたくないのよ……あの時の自分が恥ずかしくて)

「何話しているのかはよく聞き取れないんだけど……」

「話は聞かせて貰いました」

突然窓の下の壁が回転し、そこから仙波が入ってきた

「夏ちゃん、しんちゃん、ありがとね」

「ど……どう致しまして……」

「何処から現れてるんだお前は」

「見ての通りこの扉から」

「そりゃ分かるよ。僕が聞きたいのは、何で、こんな場所からくり扉があるのかという事だ」

「二年前父さんがウチの家をリフォームしたのは知ってるでしょ？ その際業者さんに家にこういう扉を何ヶ所か作ってくれて、両親に内緒で頼んでみたんだ。責任者がノリのいい人で快諾してくれた」

呆然としている夏帆を無視し、仙波は五色の向かい側に座る

「久しぶりだね」

「まあ……そうですね」

顔を赤らめ目を逸らしながら答える。他の五人は、驚いていた

「せ……仙ちゃん。この人と知り合い？」

「まあね。三ヶ月程前この子が雨宿りしている所を買い物の帰り道見つけてね。それで傘を貸してあげたんだ」

「お前……初対面の人に自分の傘を貸したのか？」

「二本あったからね。その二ヶ月前に駅から持っていった置き傘を返す為に」

「二ヶ月経ってから返しに行くな！」

「間違えて置き傘の方を渡しちゃった事に気付いた時は駅についてからだったよ。あの時は焦った焦った」

ははははと軽快に笑う幼馴染みに、夏帆は呆れて何も言えなかった。後ろでは内地が「置き傘なんてまだあったのね……」と、ピントのずれた所で感心していて、しんのすけとロンディネは内地に「置き傘って何？」としきりに聞いていた

「済まなかったね。置き傘を渡して」

「あれは返しておきました」

「ありがとう」

仙波はにっこりと微笑んだ。それを見て五色は顔を顔を更に赤くし、俯けた

「話は変わるけど、本当に私の事好きなの？」

無言で一回首を縦に振った

「そうかそうか……なら私達付き合おうか」

『え』

その発言に、五色は勿論しんのすけ達も驚いた

「おいちよつと待て！いいのか？」

「私の付き合う相手を私が決めちゃ駄目なの？」

「いや、それは別にいいよ！僕が言いたいののは引きこもりの元凶と付き合う事にして本当にいいのかと……」

「私がこの子と付き合ってしまったえばもうこの子はある事をする必要は無くなる訳でしょ？」

「そりゃそうだけど……」

「ちよ……いきなりそんな事言われても……その……」

「嫌？」

「いやいやいやいやいや、嫌じゃないですよ！寧ろ嬉しいですよ！ただ……」

「ただ？」

「いや、『男女七歳にして席を同じうせず』と言って……」

「あんだ何時の時代の人間よ」

呆れた様子で内地はそう言った

「そもそもあの手紙もただ自分の気持ちを知ってほしいと思って出してただけですし……」

「じゃあ名前書けよ」

同じ様に呆れた顔でロンディネが言う。対し、五色はこう返した

「いや、名前は記載しようとするとか恥ずかしくなって……」

もう全員突っ込む気も失せた。仙波は面白そうにクスクス笑っている

「本当に面白いな善留君は……じゃあ友達から始めよう。そしてお互いの事をよく知っていこう。宜しくね」

「は……はあ……こちらこそ、宜しくお願いします……」

仙波の出した右手へと、ゆっくりと手を伸ばす。緊張していて動きが遅く、じれったく思ったのか無理矢理手を握った

「あれ？どつしたの善留君？善留くん？」

揺さぶってみたが、五色は全く反応を返さなかった

夏帆達が寄って確かめた所

「気絶してるね」

「私と手を握った程度で？」

「多分、この子にとってそれは緊張が限界に達するのに十分だった
ようね……」

「これじゃちゃんとした男女交際に行き着くのにどれだけ掛かるん
だろ……」

苦笑いを浮かべながら土浦は言った

「しんのすけ君と足して二で割れば丁度になるかもね」

夏帆はそう言った後、乾いた笑い声を上げた

「もう、ちょっと夏帆さん。それどついう意味？」

「それは自分で考えて」

「意地悪」

「ごめんねどう言えばいいのか分からないってのが実際の本音なもんでね……」

五色善留 数時間後に目を醒ます。その後、改めて仙波やしんのすけ達にお詫びとお礼を言った後、帰宅した

内地裕佳 翌日、押収品を勝手に持ち出した事と街中で発砲した事で始末書を書かされた

高橋夏帆 この後、仙波と軍人将棋をした

T o B e C o n t i n u e d …

ストーリーカー行為はダメ！絶対！？（後書き）

ようやく終わらせました……

この編は書いてて結構楽しかったです。新キャラの五色は僕は結構好きなキャラです。だから機会があれば活躍させたいと思っています

次回も宜しくお願いします

ピアノ・ピツカー？（前書き）

悪い予感が高確率で的中する。それがちゃんとした根拠であるものなら尚更である

ピアノ・ピッカー？

「成程……あたし達、それで沢登君を殺した奴に狙われる可能性がある
あるという訳か……」

「うん、あいつの本当の狙いが瀬上君だからこそ、それは充分有り
得る事だから、普段でも警戒はしとけて……」

「『将を得んためにはまず馬から』か」

「うん……間違っただけで何処かずれてるような気がするん
だよ。その言葉をここで出すのは……」

「それは別にいいとしてさ。確かに、特にあたしや瑪瑙ちゃん、須
藤さんとかは高いよね。うん分かった……所で須藤さん、そんな浮
かない顔してどうしたの？」

「浮かない顔……してましたか？」

「うん」

「私も……瀬上君の話聞いた後からずっと何か変よ貴方……」

「ええ……除夜君の不安は的を得ています。ですが僕は、今回の話
を聞いてそれとは『別の不安』が頭によぎったんです」

「『別の不安』？」

「それを言う前にお二人に一つお訊ねしますが……家で（この場合

自分の家でも友達の家でも構わない。何人かの友達と一緒に遊んでいると、偶々ソース煎餅一袋を発見しました。その存在は自分を含めた全員が今そこで初めて知った為、当然食べていいのかどうかは誰も聞いていません。そして、貴女はそれを食べました。さて、ここからが本題です。『貴女はどうしてそれを食べようと思いついたのですか』？」

「須藤さん。どうしてソース煎餅なの？あだしポップコーンがいい」

「お菓子が何なのかはどうでもいいんですよ。僕が聞きたいのは――」

「私だつたらー」

「因みにポップコーンは薄塩味がバター味で、最低でも五袋以上……」

「稲庭さん稲庭さん」

「はにゃ？吉祥寺君？」

「気持ち良く眠っている最中悪いけど起きて、まだ会議は続いているんだから」

「ふえ？ああごめんごめん……」

自分に寄せられる視線を感じやや頬を赤らめながら、口元から垂れ

る涎を拭き取る稲庭。周りはそんな彼女を見て面白そうに笑っていた

場所は会議室。時間は放課後

ここでこの時間、月に一回ある各クラスの委員長が集まっの会議が行われており、除夜達のクラスの委員長である稲庭も当然出席していた

まあ、彼女は途中から眠りこけてしまい、夢の世界へと旅立っていたのだが……

「稲庭さん、せめて終わるまで寝ないでよ」

「ごめん。一昨日レンタルショップで新作の洋画十本借りてそれを二日連続して徹夜でぶっ通しで見てたから……」

「眠たくなって当たり前だよ……取り敢えず、後少しで終わるからそれまでちゃんと起きてて」

「うん……」

そう答えた直後、瞼を閉じて安らかな寝息を立て、鼻提灯を膨らませた

吉祥寺が呆れながら起こそうと彼女の体を揺さぶろうとした時、『バンッ!』という盛大な音が、彼の背後から聞こえた。稲庭はその音によって鼻提灯を割り、前にある吉祥寺を退かして彼と他の委員長と共にそちらを見る

彼女の向かいに位置する席には、セーラー服の襟の部分を取り除いてスカーフを直に首に巻き付け、制服の袖は黒地でレントゲン写真のように腕の骨が描かれていて、デジタル時計の付いた黄色いブレスレットを左腕に服の上から嵌めた、セミロングにしては少し長めの黒髪を後ろに二つに結った少女がいた。その手は握られて机に置かれている。つまり先程の音は、彼女が机を勢い良く叩いた音だったのだ

彼女はそのまま、稲庭に怒りの込めた視線を向け、怒鳴った

「稲庭さん。『学校』という組織の中で自分のやるべき事に支障を来したりおろそかになるような真似はやめなさい。他人の趣味にあれこれ口を出すつもりはないけど、もう高校生なんだからその分別はしっかりつけられるでしょ？それに貴女は委員長、一クラスの代表じゃない！代表がこんなじゃ同級生に示しがつかないでしょ！」

「はい……」

向かいの少女の説教に、稲庭は申し訳なさそうに返事をする。彼女の言い分は正論で、非はこちらにある以上何も言い返せなかった

「取り敢えず、再開していいかな？会議……」

「すみませんでした」

「どじょう……」

稲庭は病院の入口前のベンチに座り込み、膝に置いた空っぽの箱を見下ろしていた

会議が終わり、家に帰った後、除夜の見舞いの為果物屋でフルーツの盛り合わせを買って病院へ向かったのだがー道中、お腹が空いて全部食べてしまったのだった。そうならない為に行く前に大量の御飯を食べたにも関わらずである

お金にはまだ余裕があるので、Uターンしてもう一度果物屋に行くことと思つたが、その分腹が減ってまた同じ過ちを繰り返す事を彼女は理解している為、病院の売店で買う事にした。勿論自分が飲み食い出来る物は途中で自分が食べてしまう可能性が高いので、それが出来ない物を買った。会計を済ませた後、除夜のいる病室へ足を進めた

「あ」

「あ」

途中、約一時間前会議室で自分を叱りつけた人物に遭遇した。その手には菓子折りの入った紙袋がぶら下がっていた

「あ……今日は。奇遇だね」

「ええ、そうね。今日は稲庭さん」

彼女――越廼沫子こしのあわね、星陵高校一年一組の委員長は、偶々会った稲庭に挨拶を返した

「越廼さんは誰かのお見舞いに来たの？」

「それと付き添いと健康診断以外で健康な人間がわざわざ病院に来る理由はあるの？」

「お医者さんとか看護師さんとか」

「そうね……勤務している人なら病院に来るわね。来なかったら病院成り立たないもんね……」

「後……」

「はいはいもう分かった何も喋らなくていいから」

「何で？」

「興味とかないから」

むーっと、少し頬を膨らます稲庭。言えなかったのが不満なようだ

「稲庭さん」

「なに？」

「稲庭さんもお見舞いに来たの？」

「うん。そうでなかったら一高校生がわざわざ病院に来る筈ないでしょ」

「誰のお見舞い？」

「瀬上君だよ」

「そう言えば同じクラスだったわね」

「越迺さんは？」

「奇遇な事に……私も瀬上君に」

「ほへ？」

稲庭は頭に疑問符を浮かべた。彼女の記憶では、除夜と越迺は親しい関係ではない。せいぜい顔を合わせたら挨拶を交わす程度の仲でしかない筈だ。だから、除夜とはその程度の仲でしかない彼女が除夜を見舞うというのは、少し考え辛かった

稲庭がそれを質問する前に、越迺は応えた

「宝来さんに頼まれたのよ。生徒会の仕事で今日は行けないから、代わりに見舞ってくれて。今日は宿題とかないし、私自身特に用事という用事も無かったから引き受けたの」

「御苦労様です。で、越迺さんは瀬上君の病室知ってるの？」

「受付で前もって聞いたわよ。お見舞いに来てその人の病室が分からずに病院をさ迷うなんてどんな間抜けよ……所で稲庭さん」

「はい？」

「その手に持ってるの……何？」

越迺は稲庭が売店で購入した見舞い品に視線を向ける。彼女が持っているのは、貼られたラベルからして、明らかに酒だった

女子高生が酒を持って病院を闊歩しているのだ。おかしいと思わない方がどうにかしている

対し、稲庭は普通に答えた

「病院の売店で買ったの。お酒をチョイスしたのはあたしが飲み食い出来ないから」

「瀬上君も飲み食い出来ないよ。二十歳になるまで飲酒しちゃいけないんだから」

そもそもどうして店員は女子高生に酒を売ったのかとか、それ以前の疑問はあるが、取り敢えず身近な所に突っ込みを入れた越廼だった

「でさ瀬上君。怪我の具合はどう?」

越廼の持ってきた菓子折りの中身である鳩サブレを食べながら、除夜に話し掛ける稲庭。来て早々、彼女は届けられていた食べ物を食べていいかと除夜に聞き、OKを貰った為次々と口にしていった。それに対して越廼は怒ったが、別段気にしていない除夜がそれを諫めたのは、本当に余談である

病室に来た二人は、除夜にそれぞれ見舞い品を渡し（稲庭の見舞い品は当然突っ返した）、その後稲庭は雑誌を読みながら見舞い品を食べ始め、越廼は軽い挨拶をした後すぐに出て行った。まあ、親しくない相手が代理で来たんならそんなものかと深く考えなかったが

閑話休題

稲庭の質問に、ノートを写している（紙袋の中には授業内容が書かれた紙が入ってあった）除夜は顔を上げて答えた

「ああ、この分だと後四、五日で退院出来るそうだ。担当医も驚いてたぞ」

「そりゃね」

「まあ、思ったより早く治りそうで助かったよ。怪我が長引くと学業に響くからな」

「本当元気そうで何よりだよ。それじゃ粗方食べたし、あたしもそろそろ帰るね」

「ちょっと待て」

立ち上がって出ていこうとした稲庭の肩に手を伸ばし、掴んだ

「何？」

「この後悪いが少しばかり付き合っただけほしいんだが……駄目か？」

「おい……稲庭……」

「何というかさ……あたしが瀬上君に歩調を合わせる日が来るとは思わなかった」

「全然合わせてねーだろ！もう少し歩くペース落とせ！」

松葉杖で体を支えながら、除夜は20メートル以上前で紙パックのフルーツ牛乳を飲みながらテクテク歩く稲庭へと叫ぶ。稲庭は後ろを振り向いた

「だって……瀬上君があまりに遅くて」

「足骨折してて松葉杖使ってたぞ！遅くて当たり前だろ！」

「『能力』使えばいいじゃん」

「それじゃこの散歩の意味がないだろ！」

「うんそうだね。ごめんね」

軽い調子で謝りながら、除夜の元に駆け付ける稲庭。途中、空になった紙パックをゴミ箱に捨てる

「いや本当にごめんね。うっかり何時もの調子で……」

「頼むよマジで」

溜息をつく除夜

二人は現在、病院の駐車場の歩道を歩いていた。除夜が「散歩したい」と言い出し、稲庭にその付添いを頼んだからである

言い出した理由は、「最近外に出てないから、体を動かしたい」からだ。稲庭は即座に了承し、何処までかというのは五時近くと言うのもあり敷地内を少し歩き回るだけで話をついた

「じゃ改めて」

「手は取る必要はない。そして引つ張るなバランスが崩れて倒れたらどうするつもりだ」

「冗談冗談。今度こそ歩調合わせるから、そうポンポン突っ込まないでよ」

「お前がちゃんとしていれば突っ込まずに済むんだよ」

「それは言わないお約束」

「誰とのだよ」

「それも言わないお約束」

えへへと笑う稲庭。除夜はそんな彼女へ文句を言いながらもその顔は微笑んでいた。だが、その二人の笑顔は次の瞬間消え失せる

前方に停まっている一台の軽自動車が、まるで縄を付けられて引き上げられたかのように宙に浮かび、そのまま二人に向かって落ちてきた

除夜は稲庭を引き寄せてその軽自動車を軸にして前方へ瞬間移動する。除夜達のいた地点に、軽自動車は叩き付けられ、横転し、爆発した

「新しい敵か……」

炎上する軽自動車を見て、除夜がそう呟く。稲庭は、数日前の自分と琢磨と宝来との会話を思い出していた

「私だったら……」『誰かが食べてから食べる』……「二番目以降だと自分もやっていいんだ」って『安心感』があるからね」

「僕ですよ……というより、大抵は「そう」です。本当はいけない事やいい事がどうか分からない事は誰も最初にはやりたがらないものなんです。不安とかでね……でも誰かがやったら、そこからスタートだ……そして僕が恐れているのはそこなんですよ」

「何処？」

「やめい」

「今回奴と組んだ目黒君は奴同様沢登君に怨みを抱いていた。そして復讐者として奴と共に除夜君を襲った……」

「つまり……須藤さんが恐れているのは……」

「そうですね宝来さん。それを皮切りにして沢登君に能力発現の為に酷い目に遭わされた連中が除夜君を襲撃して来る……僕はそれに恐怖を抱いているんです……僕達が狙われる事より、ずっとね……」

琢磨の心配事が現実になったのだと、稲庭は燃え盛る軽自動車を見て確信した

集まってくる野次馬の中に、一人の人影が病院内に駆け込んでいったのが、偶々目に入った

ピアノ・ピツカー？（後書き）

琢磨のこの心配事は、もう少し早く出すつもりでしたが、この話で出した方がいいなと思いました

それでは、次回も宜しくお願いします

ピアノ・ピッカー？（前書き）

病院に逃げ込んだ敵を、稲庭は単身で追う！

ピアノ・ピッカー？

稲庭がたつた今日にした、病院内に逃げ込んでいった人影。あれがこれを引き起こした敵であるのは間違い無い

野次馬がどんどん集まってこそ来てるが、今ならまだ十分人が通れる程の隙間はある。追うなら今しかない

(だけど……)

横にいる松葉杖をつく同級生を見やる。今自分が奴へ向かったら、除夜は一人になる

どうすべきか頭を悩ませている途中、左肩に手が置かれ、軽く引つ張られた

「瀬上君……」

「行け」

「へ？」

「敵を見つけたんだろ？ だったらさっさとそっちに行け。早くしないと逃げられるぞ」

「でも今あたしが瀬上君から離れたらー」

「大丈夫、松葉杖は無事だし、この騒ぎだ。警察だつてもうすぐ来るだろうよ。そしたら自力で部屋まで戻れるさ。だから俺の心配は無用だ。さっさと行け！」

「う……うん！」

返事をした後、稲庭は急いで人影が逃げ込んだ出入口へ向かう。自動ドアが開いた直後にサイレンの音が聞こえた

病棟に入った直後、走って違う出入口へと駆け出す。建物の中に逃げ込んだとしたら、別の所から逃げようとする筈、だから見張っていれば必ず発見する事が出来ると考えたからだ

敵が入院患者や職員の可能性もない。今日除夜が外に出る事は除夜が今日言い出した事だ。それが予想出来るとは思えない。それに同じ病棟にいるならもつと別のやり方で始末にかかる筈だ。だから外部の人間で間違い無い

出入口は複数ある。自分が向かえる所は、当然その内の一つだけだ。到着した後、『イザベラ』を発現、分裂させ、他の出入口へと向かわせた

「よし、これで用意は万端！」

稲庭は待ち受け用のソファに、意気揚々と座り込んだ

「もしかして……読み間違えたかな？」

額に冷や汗を垂らしながら、不安げに言う。あれから15分以上経つが、自分が待機しているこの出入口は入る者はいても出て行く者はいなかった

他の所に待機させてある『イザベラ』も、一匹も戻ってこない。『イザベラ』には怪しい挙動をする奴が外に出ようとしたら即座に戻ってくるよう言いつけてある。その『イザベラ』達は、一向に戻ってくる気配はない

やられたかもと考えたが、それならダメージとしてその分自身に戻ってきている筈だ。だから「見落とした」か、「まだ病院内から出していないか」のどちらかという事になる

そして稲庭は、前者の方ではないかと思っていた

「もしかして命令が雑過ぎたかな？『挙動不審な奴が出て行ったらこっちに来い』だもんな。これじゃ敵が普通に出て行ったら見逃して当たり前だし……もう少し観察して特徴を掴んでおくべきだったよー……」

頭を押さえながら嘆く

何の解決にもならない事は承知だが、それでも後悔せずにはいられない

何せ出入口は自分と自分のスタンドが見張っている。15分も経過しているのだ。とつくに病院の敷地から逃げただろう

「もう、病院内に入ったのはこの目で見たから間違い無いのにー！」

悔しさのあまり、顔を上げて頭髪を掻きむしる

「あれ？」

今の自分の言葉に、何か引っ掛かった。そしてそれを思い返してみる

(そうだ……あいつは確かに『ここに入ってきたんだ』……そうか！『そこ』を忘れていた！)

稲庭は立ち上がり、『そこ』に向かった。『イザベラ』達にも召集をかける。四方に散らばっていた『イザベラ』達は、本体へと次々と戻っていった

「よし、ここで待とう」

入口近くの待ち受け用のソファに尻を乗せる

彼女の今いる場所は、『敵を追って入ってきた出入口』近くだ

『まだ敵が中にいるのなら、逃げ出すのはここから』。稲庭はそう思っていた

追跡対象が建物の中に入ったら、意識は自然と別の出入口に向けられ、そこへの意識は薄くなる。それに、騒ぎが起きたのならそのどさくさで逃げ出そうと、自分を追う者は考えるだろう。だから、騒ぎが収まるまでここで待ち、そして自分が入ってきたここから逃げようと考えている。と、稲庭は結論付けた

（まあ…… たった今からでも奴が別の出入口から逃げられたら、あたしはただの間抜けだけどね……）

向かう途中購入したイチゴ牛乳をストローで吸い上げる。半分程飲んだ所で、意外な人物が目の前を通った

「越廼さん？」

除夜に見舞い品を渡して出て行った筈の別のクラスの委員長職に就

いている少女に、声をかける

越迺は、足を止めて稲庭の方へと体を向けた

「稲庭さん……」

「まだ病院にいたの？もうとっくに帰ってるよばかり思ってた」

「ああ、帰ろうとした途端に便秘薬が効いてきて……だから今までトイレにこもってた」

「越迺さん便秘薬服用してたんだ」

「漢方ベースのね。私最近便秘気味だから」

「何で漢方？苦いよ？」

「私現代薬体に合わないのよ」

「越迺さんが便秘気味って事、初めて聞いた」

「私だって女の子よ。それを人前で堂々と言える訳ないでしょ恥ずかしい……稲庭さん、何か騒がしいけど、何があったの？」

「見舞いを終えて帰ろうとした所外でちょっと車の事故が起きちゃって……幸い死傷者は出なかったみたいだけど騒ぎになっちゃったの」

「それは仕方無いと思うな」

「瀬上君、それを目の前で見ててね。事故の様子を見て、早々と病室に戻ったよ」

「これが賢明な判断だと思うよ？車が炎上しているんだから爆発に巻き込まれないよう離れるのが一番よ。というより何もするつもりも無いのに事故現場に集まる事自体が誉められる行為じゃないわ」

「うん。同感……所で越迺さんに聞きたい事が出来ただけだよ」

「？」

「何で車が炎上した事知ってるの？私は『事故が起きた』とは言ったけど、他は何も言っていなかった筈だよ？」

「いや、多分炎上したんじゃないかなーって思って……」

「まあそれは置いてどうか……さっきの言い方……『瀬上君が外に出ていた事』を知っていたように聞こえたよ？」

「え？事故の様子は見てたんでしょ？それに『病室に戻った』って言ってたからそう考えたって……」

「屋内からでも見る事は出来るよ……それに越迺さん、『爆発に巻き込まれないよう離れてるのが一番』と言ったよね……つまり越迺さんは瀬上君が外に出て、しかも事故が起きた時現場近くにいた事を知っていたって事になるよね？何で今までトイレにこもってた筈の越迺さんがそれを知ってるの？納得のいく説明をさせて欲しいんだけど」

越廼は言葉が詰まり、一步後ろに下がる

次の瞬間、口元を歪ませ、右手を上げて指と指との間を開いた

「納得のいく説明？ええしてあげるわよ！但し口でじゃないけどね
！」

人差し指の先端から釣り糸程の細さの『糸』が伸び、直線上にあつた植木鉢に引っ付いた

それを引っ張ると植木鉢は引き寄せられ、宙に浮く。越廼はその植木鉢を、稲庭に向けて投げつけた

飛んでくる植木鉢を、『イザベラ』でキャッチした

「いきなり実力行使ですか……その『糸』が『能力』って訳か……」

「成程……私の能力が見えているのね……そして稲庭さん、貴女も……同じ様な能力を持っているって訳ね……」

「そして……この攻撃が『答え』って訳か」

「納得してくれたようね」

『糸』を引っ張ると、『イザベラ』が掴んでいた植木鉢は強引に奪

われた

植木鉢が『イザベラ』から引ったくられた時、稲庭は、植木鉢から『糸』が少し『出ていた』のを目にした

越迺は再度植木鉢を投げつける。稲庭は伏せてかわす。植木鉢は壁に激突し、木は半分に折れ、破片と土が飛び散った

『糸』を手繰り寄せる最中に、稲庭はスライディングして越迺の股下を潜り、突っ走った

階段に向かおうとすると、降りてきたエレベーターの扉が開く。中には誰も乗っていない。そして隣は上っている最中だ

稲庭は急いで中に入り、屋上までのボタンを押して扉を閉じた。越迺が追い付いたのと同時に完全に閉まり、上へと上っていった

エレベーターの扉が開く。同時にエレベーターを出て、越迺を待つ
一分後、越迺が階段から上ってきた

「来てくれたんだ」

「まあね……稲庭さんには正体がバレてるし、ほっとくと面倒だしね」

右手の人差し指を差し、その先端から『糸』を射出する。糸の先端が触れる前に、『イザベラ』で掴んだ

「初出なら通じたかも知れないけど、一度見ているから防げない事も……！」

『イザベラ』が握っているのは別の糸が飛んできて、それが右手の袖口にくっ付いた。その『糸』は、左手の人差し指から伸びていた

「一本しか出せないって誰も言っていないでしょ？」

「『イザベラ』」

稲庭が行動を起こす前に、袖口にくっ付いた糸を引っ張る。強いパワーに抗えず、稲庭の体は糸の動きに合わせて引き回される

途中で越廼は糸を動かす事を止める。それを機に稲庭は立ち上がるが、同時に左手の袖に飛んできた糸が引っ付いた

そして、それを勢い良く手摺の向こう側に向けて引っ張った

「ここから地面まで結構あるけど……まあ木々が茂ってる所を狙って投げ込んだし、運が良ければ怪我で数針縫う程度で済むと思うわ
「よ」

「誰がその程度の怪我で済むのかな？」

声のした方向へ体を向けると同時に、左頬に衝撃が叩き込まれた
右手を振り切った稲庭が、目の前にいた

「な……何で……」

「答えはこれ」

自分の着ている服を、空いている左手の親指で差す。その袖は付け
根から無くなっていた

「あんたが私を放り投げようとして一瞬私から目を離した隙に破っ
た……」

「くっ」

越廼は横に跳び、距離を取って人差し指を向けて糸を射出しようと
する。が、その前に稲庭は距離を詰めており、拳を振るっていた

拳はボディに命中。越廼は数歩後ろに下がって尚且つ糸を射出しよ
うとするも、その前に詰められ、ぶん殴られた

その後も次々と追撃を加えられ、越廼は為す術も無かった

とどめとばかりに脚を振り上げる。爪先が腹部に突き刺さり、彼女の体は後方へ飛び、手摺にぶつかった

ピアノ・ピツカー？（後書き）

また時間掛かりました

稲庭さん優勢だったけど、まあ彼女も結構戦っていますしね。まあでもこれで終わりではありません。寧ろこれからです

では、次回も宜しく願います

ピアノ・ピッকার？（前書き）

病院屋上でのバトル。優勢なのは稲庭だが……？

ピアノ・ピッカー？

「稲庭さん……貴女こんな強かったんだ……意外も意外だったな……」

「そりゃ瀬上君や瑪瑙ちゃん達と一緒に同じ様な能力持つ奴と何度も戦って、そして生き延びてるから……」

「ふーん……て事は宝来さんも『同じ能力』を持っているのかあ……それはまあ、どうでもいいか……稲庭さんは、瀬上君の仲間なんだよね」

「うー……」

「何で悩むの？」

「いや、まあ、『同級生』だし『友達』だし『戦友』でもあるし……うん、そだね」

「その「仲間」から見てさ……瀬上君は強い？」

「うん。強いよ」

「そうかそうか、強いのか……」

ふふふふと、暗い笑い声をあげながら立ち上がって手摺に背をもたれさせる

笑いを止め、一息つき、

「だから沢登優太は、私から『奪ったのね』」

顔を俯けながら本当に、本当に小さな声で、そう囁いた

そしてそのままジャンプして手摺の上に尻を乗つけた

「危ないよ！落ちちゃうよ！」

「心配は無用よ……だってその為にこうした訳なんだしさ……」

そのまま体を後ろへと倒し、そして越迺の体は、手摺の向かい側に落下していった

稲庭は慌てて見下ろすも、越迺の体は下の舗装された地面へと落下して

いかなかった

二階の所で運動が止まり、越迺はそのまま二本の足を壁につけた

越迺の右腕はピンと延ばされている。右手の人差し指も同様だ。そこから最上階の窓ガラスにかけて伸びているのは、彼女の『スタン

』下

越迺はそのまま走り出す。徐々に縮めていつているのか、少しずつ上っていつていた

三階まで上ると、今度は左手の指から『糸』を投げる。それが手摺にくつつくと右手の『糸』を外し、走る

稲庭は『イザベラ』を発現させ、『糸』を切断する。越迺は落下しそつになるも、自分の真横に向けて『糸』を出す

「お返し」

停まっているワゴン車に向けて『糸』を照射し、それを自分を見下ろす稲庭に向けて投げつける。ワゴン車は手摺を突き破り、屋上に叩き付けられ、爆発する

「さてと……『お目当ての物』を拾つとどうか……」

壁に取り付けた糸を外した直後、壁を蹴る。着地し、『お目当ての物』の所に足を進めた

擦りむいた箇所を『イザベラ』に拭き取らせながら、稲庭は立ち上がる

ワゴン車を放り投げた瞬間、急いで離れたが爆風で吹っ飛んで転んでしまった。飛んできたガラスのせいで、切り傷も拵えてしまった

「でもこの程度で済んでよかった……後二、三秒遅れていたらハンバーグになっていた所だよ……」

「良かったわねそうなくて……私も良かったと心から思ってるわ……だってさっきのはあくまで下で私が何をしているのか見せない為に過ぎないからね……」

前方から、越廼がよじ登ってきた。そして手摺に体を乗り上げる

手摺を乗り越えると、再度屋上に足を着ける。彼女の左手小指からは、『糸』が下に向かって伸びていた

その左手を上げ、突き立てた人差し指から『糸』を放つ。『糸』はタイヤに引っ付く。そして右手人差し指を稲庭に向けてそこから『糸』を出した

稲庭は引っ付く寸前に横に跳んだ。『糸』はそのまま手摺に引っ付く。それを『イザベラ』で切ろうとしたその時、越廼は左手人差し指を振るう。引っ付かせたタイヤが、稲庭目掛けて飛んできた

『イザベラ』は糸を切る寸前で振るった腕の動きを止める。稲庭はそのまま後ろへ跳んだ

着地した瞬間、稲庭は脇腹に衝撃が走った

首を斜め下へと向けると、『タイヤ越しに伸びている糸が引っ付いた車のドア』が、自分の脇腹に叩き込まれていた

吐血しながらうずくまると、同時にドアも落ちる。タイヤは運動を続けようとするも、付属しているドアの方が重い為、ドアを少し引き摺ってそのまま落ちた

『糸』を回収する越迺を、稲庭は顔を上げて見定める

「そういう事が……」

「？」

「いや、さ……屋上^{うき}来る前越迺さんが私に植木鉢で攻撃してきた時……植木鉢から確かに『糸』がちよつとだけ出ていた……つまり、その『糸』は物体を『通す』事が可能なんだよね。針で布を縫うように」

「御名答、この十本の指から出る物を通す『糸』。それが『ピアノ・ピッカー』と名付けた私の能力……因みに通すと言っても抜いた後穴は出来ないわよ」

稲庭は越迺の先程のある言葉を思い出し、未だ糸の伸びている『左手小指』を凝視する

越迺はすぐにそれに気が付き、嘆息をついた

「喋り過ぎたかな……まあ、能力がここまで判明したら大体見当はつくわよね……」

左手小指を折り曲げる。伸びている糸が引つ張られ、それに引つ付いている十数台の『自転車』が引き上げられた

床に叩き付けられた瞬間、『糸』を回収する。そして、親指を除く八本の指から『糸』を出し、一本につき一〜三台取り付けた

それを互いに引つ張ってぶつけ合ってバラバラにする。殆ど原型を留めなくすると、『糸』を取り外し、人差し指以外の『糸』を回収し、残りの人差し指の糸を手近のパーツにくっつけ、その手近のパーツに次々と通していった

「させるか！」

『イザベラ』を発現させて殴りかかる。越廼は左手人差し指から伸びる、パーツをビーズのように通した『糸』を『イザベラ』の脇腹に叩き込む

ダメージを負って間もない箇所にも叩き込まれたのだから堪らない。腹を押さえ、動きを止める

その隙に右手の方も攻撃の為、振るう。狙いは右足

『イザベラ』はそれを蹴り上げる。稲庭はそのまま本体に向けて駆け出し、距離を詰める

越遁は右手人差し指から伸びる『ピアノ・ピッカー』を解除する。そして右手の薬指から糸を伸ばし、一番手近にあったサドルに引っ付けて放る。スタンドは途中解除した為、一直線に稲庭へと飛んでくる

『イザベラ』で簡単に弾き、更に距離を詰めようとする

だが、途中左足が『何か』に引っ張られ、転倒する

立ち上がるうとするが、また左足を『何か』に引っ張られた

左足を見ると、パーツを数珠のように繋いでいる『糸』が、稲庭の靴の踵の方まで伸びていた

「接近して戦うタイプなら、接近させなければいいだけ……違う？」

「『イザベラ』」

「させると？」

糸を切る為に手刀を振り下ろした途端、右手親指から伸びた『糸』のくっ付いたペダルが、稲庭のこめかみにヒットする

間を置かず、今度は左手中指から伸びた糸で自転車のタイヤを投擲した

タイミング悪く稲庭は顔を上げて立ち上がるうとしていた為、顔面に食らってしまった

「随分間が悪いわね」

「うー……」

鼻血をティッシュで拭きながら立ち上がるうとするも、越廼はそれを寸前で妨害する

『イザベラ』を出して自分を引つ張る糸を掴むも、糸が付いたフレームが飛んできて、掴んでいる手を叩かれた。その際の衝撃で掴んでいる糸を手放した

「近付かせるつもりも立ち上がらせるつもりもないよ……あんたは地に這い蹲ったまま、私に徹底的に叩かれる」

「アハハハハ……」

稲庭は笑いながら寝返りして仰向けとなる。顔は越廼を向けていた

「何言ってるの越廼さん。ここは病院の屋上、つまり私は地に這い蹲ってないよ。だって地は地面だもん」

「何その屁理屈……てか何その余裕……」

「そっちこそさ。何で『自分の勝ち』と言った感じになってるの？
何の根拠があつて？」

「何言つてるの？あんたの靴には『ピアノ・ピッカー』が付いてる
……言つておくけど、さっき袖破つたみたいに靴を脱げばそれで解
決……て訳にもいかないよ？何せ『靴と靴下』を何回も縫い合わせ
ているんだから容易く脱ぐ事は出来ないし、脱ごうとしても即座に
引つ張れば邪魔出来るし……」

「あのさ……私がスタンドで糸を掴んだのって……『動きを抑える』
とか、引き千切ろうとか、そういう事じゃないんだ……」

再び寝返りを打ちうつ伏せとなる。顔は越迺に向けたままだ

「どついつ事かピンと来ない？こついつ事」

腕を立てて床を蹴って立ち上がった

越迺は『糸』を引くも、その行為は『糸』を通してある自転車のパ
ーツを引き摺るだけに終わった

「くっ……『ピアノ・ピー』」

「遅い」

空いている指から『糸』を稲庭目掛けて飛ばそうとするも、稲庭は既に振るった拳が届くには十分な距離まで接近していた

そして、放たれた『糸』が服に引っ付くと同時、振るわれた『イザベラ』の拳は、越迺の体にめり込んだ

「私の『イザベラ』は傷や汚れを拭き取るだけでなく、それを別の場所へと移す事も出来る……『糸』にさっき越迺さんが放り投げたきた車の爆発で負った傷を全部移した……まあ、ロクに確認を取らなかった越迺さんの負けだよ」

「負け……？私……負け？」

越迺は体をカタカタ震わせ、顔を俯けてボソボソ呟きだした

「そんな……負けたら……ここで、あんなんかに負けたら……それこそ……本当に……『何の為』だったのか、分からなくなる……」

「な……何言ってるの？」

「稲庭さんには関係ない！」

睨み付け、怒鳴った

その迫力に、稲庭はたじろぐ

「ここで負ける訳にはいかない……」

腕と指を広げ、指から『糸』を出し、散乱する自転車のパーツや自動車のパーツに引っ付かせ、通して、更に纏める為に一度通した物を通す。それを何度も繰り返す事で、人の形をした、二体の人形を作り出した

「『ピアノ・ピッカー』は『糸』……糸は物同士を繋ぎ合わせるだけでなく、物を寄り集めて『形』を作り、動かざる物に『動き』を与える……」

左手の指を動かし、左側に立っている人形を稲庭の前に立たせる

人形は拳を、稲庭に向けて振り上げる。『イザベラ』を前に出してガードするも、容易く破られた

そして、隙だらけとなった腹部に、すかさず右側にいた人形が拳を打ち出した

「ガ……」

腹部に蹴りを食らい、バウンドしながら手摺に正面からぶつかった

血と胃の内容物を吐き出しながら立とうとする稲庭に、
越廼は人形を動かしながら近付いてきた

ピアノ・ピツカー？（後書き）

今回は何時もより少し時間がかかってしまいました……

スタンド名はカーペンターズの楽曲から

次回もお楽しみに！

ピアノ・ピッカー？（前書き）

越廼戦決着！

ピアノ・ピッカー？

「一個一個は落ちてこようが飛んでこようが何ともないただのガラクタでも、一塊にしたらそれなりの破壊力を生む……これが私の『ピアノピッカー』の真骨頂……」

血を吐きながら立ち上がり、スタンドを発現させて越廼へと振り下ろす稲庭。対し越廼は、左側の人形でその攻撃を防ぎ、右側の人形で稲庭に攻撃した稲庭の体は手摺に激突し、その勢いで手摺に乗り上げ、越えてしまった。急いで手を伸ばすが掴み損ねてしまい、そのまま落下

「『イザベラ』！」

射程距離ギリギリな所で手摺の向かい側に自分のスタンドを出し、伸ばしていた自分の右手を掴ませ、引き上げさせた

「どう？稲庭さん……もう貴女のチンケな能力じゃ勝ち目は無いわよ……」

「みたいね……越廼さんに勝つには少なくとも越廼さんが操るこの二体の人形をどうにかしないといけない。でも私の『イザベラ』では人形を破壊するには若干パワーが足りない……その位分かりますよ……」

「ふーん……」

「だから……」

稲庭は握り締めた右手を、越廼に向け、こう宣言した

「今から使うのは、この右手だけ。この右手だけで、あなたの操る人形をどうにかして、あなたを倒す！」

呆れた様な顔付きとなり、溜息をついた

「何それ？その言葉の真意は？」

「裏も何もないよ。言葉通り取って貰って構わないよ？」

「つまりこれから貴女は『右手』しか使わないって事？それでどうするの？」

稲庭はニコリと笑い

「さっき言った通り、私が越廼さんに勝つ」

言った瞬間、稲庭は右手を振り被って床を蹴った射程圏に入ろうと

した所で、左右の人形の拳が稲庭の腹部に突き刺さった

「何も学習してないわね……ただ真っ直ぐに突っ込んできて……」

「隙有り」

口から血と一緒に、『分裂体のイザベラ』を一匹、越迺に吹きかけると同時、また吹っ飛ぶ。そして再度立ち上がり、接近する

「貴女のそのタフネスは尊敬に値するけど、いい加減ウンザリなのよ……」

人形を動かす為、指を動かそうとしたが、指の動きは人形の四肢を僅かに動かしただけで止まった。動かそうとしても、僅かに動かしてそれで止まるそれを何度も繰り返している内に、稲庭は人形と人形との間を抜け、強く握った右拳を振るった

拳には確かな感触がし、越迺の体は吹っ飛んでいた

越迺はそのまま仰向けに倒れ、指から伸びる『ピアノピッカー』は消え、それが縫い付けられその形を作っていた人形は崩壊した

それを確認すると稲庭は『右手首から上のないイザベラ』を発現させる。越迺に引っ付いていた『イザベラ』は右手に戻った

「宣言通り、『右手しか使わず人形をどうにかして勝ちました』……」

目が覚めたら、公園のベンチに横になっていた

体を起こすと、右頬にひんやりとした感触が伝わる。背もたれの向こう側に、両手に缶ジュースを持った見知った少女がいた

「飲む？」

「飲まない。それ炭酸でしょ？私炭酸苦手だから」

「あたしは大好きなんだけど……口の中で炭酸が弾けるような感じが……」

「私がそれが嫌いなのです」

稲庭は越廼の隣に座り込み、蓋を開ける

「瀬上君は？」

「とつくに自分の病室に戻ってたよ？で、経緯を説明して越廼さんを抱えて病院出てここまで来た訳」

「そう……つまりそれは、私は貴女に敗北したという事か」

越迺は顔を俯け、拳をギュツと握った。覗き込んだ顔からは、悔しさが滲み出ていた

「ねえ……どうして越迺さんは……」

「この先は言わなくていいよ。大体見当がつくから……」

ふーっと溜息をつき、稲庭へと顔を向ける

「私の事少しだけ喋るわ。別に隠すような事でも無いし」

「やっぱり……何かあったの？」

「私の家はね、父親がいないの。所謂母子家庭。私が小四の頭辺りに離婚したのよ。離婚の理由はよく覚えてない……で、母は必然的に私達を養う為に忙しく働くようになった……」

「あれ？慰謝料とか貰わなかったの？」

「そういうのは一切貰わなかったし請求もしなかったみたい。で、当時まだ四歳の妹二人の世話をするのは必然的に私の役割になってね。勉学と子育ての両立は大変だった……で、当時親しい人もいなかったし、唯一の友達と言ったら凄く小さい頃両親が作ってくれたお人形位だった……勉学と子育ての合間を縫って愚痴をこぼしたりしていてそれなりに楽しかった……でもね。その友達は唐突に奪わ

れた……沢登優太に……あいつにね！」

座っているベンチに拳を叩き付ける。驚いた稲庭は飲みかけのジュースを手放すも、零れる前にキャッチした

「沢登君が……何したの？」

「あれはもう三ヶ月前になるかな……家に帰って愚痴をこぼしていると突然あいつが窓から入ってきて、友達を奪って踏んづけた上火を点けた……それから先の事は鮮明に覚えている……あいつは私を『矢』で射抜いた後足で押さえつけてこんな事を言ったの……『僕はある目的がある。その目的にはこの『弓と矢』とこれに射られ生き延びた人間がどうしても必要だ』。その目的に協力してくれるかい？』とね……その目的を聞いて私はすぐに断ったけど、そうしたらあいつ何て言ったと思う？」

「さあ……」

「『じゃあ君は友達の犠牲を無駄にしてしまうんだ』。『君の友達は僕の目的の為に犠牲になったんだ。だから僕の目的に協力するのが、君の友達の為に出来る事なんじゃないかな？』」

「うわああ……」

「一見筋が通っているようで実際は支離滅裂……だけど私はその言葉に縋った……友達を失った意味を、どうしても見出したかったから……だからその日から身に付いたこの『能力』を研鑽していた……」

……」

「でも沢登君は……」

「そう、死んだ……死んだと聞いた時殺されたのかと真っ先に思った。私の他にもあんな事やってるのだからかと思ってたからね。で、風の噂で殺されたと耳にした時、ああやっぱりと思った」

「じゃあ瀬上君を襲った理由は……」

「いや、明確な怒りを覚えたのはその後……一週間経った頃あいつが殺されるまでに至った経緯を私なりに調べてみたの……あいつは送り込んだスタンド使いが十人程度返り討ちに遭ったから自分で瀬上君を襲撃して、最終的に和解した事をね……どうして……それが出来る余地があつたのなら、どうしてそれをしようとしなかったんだ！何の為にあんな事をしたんだ！どうして……どうして……」

拳を握り締めて震えている越廼を見て、稲庭は納得した

沢登優太が死ぬ直前の除夜との和解は、彼女にとってあつてはならぬ事だつた。 magari なりにも意味を失う事だから……

それを認めたくなくて、更に力を付けて、そして今日に至った

「越廼さん越廼さん」

「？」

声を掛けられ、振り向く越廼の頬に、稲庭の指が突き刺さった

稲庭はクスクス笑う。越廼は引っ込めようとした指を掴む

「ちよっ……痛いよ越廼さん……」

「何のつもりよ稲庭さん。真剣に話している時にこんな幼稚な悪ふざけをして……」

「やっぱりこっちのがいいな」

「へ？」

怒ろうとするが、稲庭のその発言できよとんとなる。力が緩んだ隙に稲庭は握られた指を引き抜いた

「やっぱり越廼さんはこうして注意したり怒ったりしていた方が似合ってるなあって、さっきまでの越廼さんの姿を見て改めてそう思えたよ」

「貴女……私の事どう思ってるの？」

「毎日のように注意したり怒ったりしている人」

「それは稲庭さんが毎日のようにそうされて仕方の無い事ばかりしているからでしょうが」

「じゃああたしはこれからそれを意図的にしようかな？」

「つまりわざと注意されたり怒られたりするって事？また何で……」

「だってあたし越廼さんのそういう所大好きだからね。越廼さんが
そうでないと何だか張り合いも無いし」

「張り合いって何のよ……」

「自分に近い立場の人が常に目を光らせているからちゃんと頑張ろ
うと思えるんだよ」

「ぷっ」

そう言った後、越廼が吹き出し、そのまま笑い出した。稲庭もそれ
につられて笑う

「何それ？稲庭さんがそれ言う？」

「あたしも『何言ってるの自分』って思っちゃった！」

翌日。三限目の後の休み時間

稲庭は、黄粉パンを頬張りながら廊下を歩いていた

「稲庭さん！」

「ああ越廼さん何か用？」

「休み時間だから何をしようが自由。だけど食べながら動き回らない！食べカスがポロポロ落ちるでしょ！」

「黄粉パンだから普通に食べているだけで黄粉ポロポロ落ちるけどね」

「分かっているんならせめて食べ終わってから動きなさい！」

「それ無理。今からトイレに行くから」

「じゃあ何で黄粉パン食べてるのよ」

「お腹空いたから。やっぱり朝御飯何時もより少ないのがいけないかったみたい。休み時間毎に購買からパン買わないといけないし」

「預かってあげるからさっさとトイレに行ってください」

「ありがとう！所でさ、今日あたし学食を予定してるから、一緒に食べよう」

「いいけど……学食の利用者は私達だけじゃないんだから来て数分で食べ尽くしたってというのはならないでね」

「その辺大丈夫！ちゃんと弁当持ってきてるから学食を食べ尽くすという展開にはならないと思うよ？」

「弁当持ってきて何で学食を？」

「だって朝お新香食べるの忘れてたんだもん」

「何時もより少なめって……もしかしてその分？」

「それが？」

「まあ、貴女のそれは今に始まった事じゃないし、今更疑問に思ったりするのが変よね……」

「あっ！じゃ、また昼休みね！」

「言っておくけど、15品以上注文したら……」

「昼休みにしてよー！」

「ねえ吉祥寺君」

「ああ……やっぱり、宝来さんもそう思う？」

「うん。あの二人、やけに仲良くなってない？」

「昨日何があったんだらうね……」

二人のやり取りを見ていた二人の生徒会役員は、昼休みに昨日の事を聞くまでその事で頭が一杯だった

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
...

ピアノ・ピツカー？（後書き）

途中少し重くなっちゃったっぽいけど何とか大団円？でいいのかな
スタンドも溜まったので次回は久し振りにスタンド紹介をしよう
と思います

これからも宜しくお願いします

スタンド紹介？（前書き）

かなり久々な感じのスタンド紹介！

六回目行きます！

スタンド紹介？

スタンド名 - ドリー・ダガー

本体 - 櫻庭春季

破壊力 - D スピード - D 射程距離 - A

持続力 - A 精密動作性 - D 成長性 - C

能力 - 生物は常に『気』を発する。その『気』には波長があり、それは指紋と同じ様に生物一個体ごとに異なる。ドリー・ダガーは切った生物の波長を記録する事が出来る。ドリー・ダガーはそれに向かつて何処までも追跡する。追跡中はその他の物はすり抜ける

スタンド名 - インヴィジブル・キッド

本体 - 古賀幸

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - E

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - B

能力 - 自身の一つの動きに過剰に注目させる。その効果は、例えば片手の指の動きに注目させた場合、もう片方の手で何をしても終えるまで気付かない程強力である

スタンド名 - ベルリン

本体 - 東郷陶治

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - C

持続力 - C 精密動作性 - C 成長性 - C

能力 - 叩いた物体を壁のように押し上げる。あくまで押し上げるだけであって、戻す事も出来る。この場合、押し上げた痕跡は消え去る

スタンド名 - クラシック・ケース

本体 - 鳥取開

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - B

持続力 - D 精密動作性 - E 成長性 - C
能力 - 鉄クズ等の金属を質量、形状を変えて発射する
？発射される弾丸の形は、グリップに埋め込まれた宝石の色により
変える事が出来る

？上の引き金を引くと上の銃口からペイント弾が発射される。次に
発射される弾丸は、ペイント弾が当たった所に転移される

スタンド名 - ターン・アラウンド

本体 - 下関刀吾郎

破壊力 - B スピード - B 射程距離 - D

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - E

能力 - 拳から自分専用の『道』となる光を出す。その『道』は外部
からは干渉する事が出来ない。足を止める事でのみ、その『道』か
ら出る事が出来る

スタンド名 - フォーリング・フロム・ザ・スカイ

本体 - 揖宿代奈

破壊力 - A スピード - C 射程距離 - B

持続力 - B 精密動作性 - D 成長性 - C

能力 - 機関銃やナパーム弾といった装備で敵を攻撃する。爆撃機と
戦闘ヘリへと分離、合体する事も出来る

スタンド名 - スタックド・アクターズ

本体 - 板山丹

破壊力 - A スピード - C 射程距離 - E

持続力 - A 精密動作性 - C 成長性 - C

能力 - 手に触れた物を固める事が出来る。固めた物は変形、変質は
しない。部分的に固める事も可能で、この場合、固めた部分とそ
うでない部分とを外す事が出来る

スタンド名 - パンテラ

本体 - 目黒智則

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - C

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - A

能力 - 殴った物を凹ませる。気体や液体すらも凹ませる

スタンド名 - トワイライト・ゾーン

本体 - 五色善留

破壊力 - A スピード - A 射程距離 - D

持続力 - B 精密動作性 - C 成長性 - A

能力 - 本体が発生させた『負荷』を溜める事が出来る。『負荷』の開放は基本的に本体である五色の任意だが、繋ぎを弱める事で、紙を開く程度の事でそれを開放させる事も可能

スタンド名 - ピアノ・ピッカー

本体 - 越廼沫子

破壊力 - C スピード - C 射程距離 - B

持続力 - B 精密動作性 - B 成長性 - C

能力 - 指から出る糸は物体を通す。そこから出た糸は、更に別の物体を通す。どんな質量になったとしても、本体である越廼の腕力でそれらを振り回す事が出来る

スタンド紹介？（後書き）

以上、どうにか纏められました

時間が随分掛かってしまいました……

次回からも宜しくお願いします

お菓子のお味は如何ですか？（前書き）

シロのお散歩中に遊ぶ為に寄った公園

そのベンチの上にあったのは……

お菓子のお味は如何ですか？

「しんのすけーっシロのお散歩はー？」

窓越しにみさえの声が聞こえる。それを合図に、シロはストレッチを始めた

「今日は定休日という事でー」

「犬の散歩に定休日なんてありません！バカな事言っていないでさっさと行け！」

「でもさ、週休二日制とかあるじゃん。だから……」

「私は掃除洗濯料理を一年365日やってるわよ！大体そついう台詞は毎日きちんとこなしてから言いなさい！」

「失礼な！それじゃオラがシロのお散歩を毎日きちんとやってないように聞こえるんだけど！」

「実際その通りでしょ！あんたが行かない日はずっとママが行ってるのよー！」

「母ちゃんの毎日はご近所のおばさん達との井戸端会議と昼寝で殆ど潰れちゃうんだから丁度いいじゃん」

「失礼ね毎日じゃないわよ毎日じゃ。兎も角さっさと行きなさい！」

「ほーい」

「言っておくけど、途中で逃げ出したりなんかするんじゃないわよ」

「オラそんなに信用ないの？」

「あんたがシロより遅く帰ってくる事がなかったらこんな事言わないわよ」

「はあ……『ハリケーン』の射程距離が常陸君のスタンドみたいにかなり長かったら、オラもお散歩楽になるのに」

『それはそれで苦勞すると思うぞ。引つ張ろうとしても逆に引き摺られてしまうからな』

「まあいいや。シロ、もうじき公園前を通るから、久し振りに今日はフリスビーやろう」

「アン！」

シロは尻尾を振って嬉しそうに返事した

「よし、それじゃ早く遊びたいし、公園まで走ろうか！」

「アン！」

「とーちやーく」

「あーあーん」

『着いたな……それでは私は水を飲んだらベンチで一眠りするから、帰る時は起こしてくれ』

そう言つて『ハリケーン』は遠隔操作型となつて水飲み場へ直行する

そんな自分のスタンドに構わず、しんのすけはfrisbeeを取り出した

「ほーれ」

しんのすけが投げたfrisbeeを、シロがジャンプして啜える。戻つてきたシロの頭を、しんのすけは撫でた

「よし、じゃあ今度はシロの番ね」

「アンー！」

シロはフリスビーを放り投げる

しんのすけは駆け出してそれを先程のシロ同様に、ジャンプして口に啜えた

しんのすけは頭をシロに合わせて下げる。シロは前足を上げ、しんのすけの頭を撫でる

「よし、それじゃ今度は滑り台ね！」

滑り台の階段を駆け上り、最初はしんのすけが滑る

次にシロが滑る。但し体を丸めた『わたあめ』状態で、どちらかと言えば「転がり落ちる」と言った感じで

着地すると、しんのすけは鼻息を荒げて盛大な拍手を送った

「スゴいぞシロー！」

自分の飼い主であり一番の友達でもあるしんのすけに誉められて嬉しかったらしく、シロは頬を赤らめる

「オラも練習したらやれるようになるかな？」

『危ない真似は止めとけ。怪我のもとだ』

後ろから自分のスタンドが注意してきた

「お前でもオラの事を戦い以外で心配してくれる時があるのか。感心したぞ」

『私は常日頃からお前の身を案じている』

「それはかなり意外だぞ」

『何故ならお前が大怪我でもしたら事実上お前の分身である私もその分のダメージを負ってしまうからな。心配位してもおかしくないだろ。心配する分はタダだし』

「やっぱり、お前はぶりぶりざえもんなんだね……」

『私は「ハリケーン」だ』

「所でさ、何でオラの所に戻ってきたの？お前水を飲んだらベンチで一眠りするんじゃないの？」

「よくぞ聞いてくれた。おかしい物があったのでな」

ほれ、と、『ハリケーン』はベンチへと指を差す。しんのすけはそこに視線を向ける。シロもしんのすけの視線を辿ってベンチを見る

ベンチの上には、中に何かが入った手製と思われる袋が置いてあった

「何だろ？あれ……」

「くーん……」

『さっぱり検討がつかんが、私は『あれ』だと思っ』

「『あれ』？」

『ほら、「ば」で始まって「ん」で終わる四文字のあれだ』

「番犬？」

『いや、それなら鳴き声とかするだろ……そうじゃなくてだな』

「バルサン？」

『殺虫剤でもないわ。もっと別の……』

「じゃバラモン？」

『何故いきなりカースト制度が話に出て来る？違うわアホ、他に思い付かんのか、四文字で「ば」で始まって「ん」で終わる単語を！』

「……何があつたっけ？」

『爆弾だよ爆弾！』

「え？ば……ば……爆弾？」

しんのすけはシロを抱えて一気に遠ざかり、東屋の中に隠れた

「爆弾つて……何でこんな普通の公園にそんな物があるの？」

『私は中身を確認した訳ではないから断言は出来ん。だが可能性はない訳ではない』

「何で中身を確認しないの！怠慢だぞ！」

『バカかお前、ちょっとした衝撃を与えるだけで爆発する爆弾もあるんだぞ。簡単に触れるか』

「爆発したとしても、お前スタンドなんだから爆発の影響は受けずに済むんじゃない？」

『あーそれもそうか』

納得したように手を打った

そして、『ハリケーン』が中身の確認の為東屋から出て、袋へと近寄る。しんのすけとシロは万が一爆弾だった場合爆風の影響をなるべく受けられないよう東屋の中で身を屈めている

『ハリケーン』は恐る恐る袋に手を伸ばし、口を広げ、中を覗いた

「もつ中は見たんでしょ？どうだった？」

東屋から『ハリケーン』に声をかける。勿論身を屈めたままだ

『安心しろ。私が思っていた物ではなかった。出て来ていいぞ』

それを聞いてしんのすけはシロを抱えて東屋から出て、ベンチへと駆け寄っていった

「で、中身は何だったの？」

『ふむ。爆弾とかそう言った人間を殺傷出来るような代物ではなかった……が、ある意味それ等よりも置かれていたら不可解な物だった』

しんのすけは首を傾げる

『実物を見た方が早いな』

そう言って『ハリケーン』は袋から中身を取り出す。中に入っていたのは、三段の重箱だった

そしてその蓋を取って並べると、その中には祝い事等でお馴染み

の洋菓子が詰められていた

「これってもしかして……」

「ああ、正真正銘のケーキだ。本物の」

そう、ケーキ

一段目には定番の苺のショート、二段目にはチョコレートケーキ、三段目にはティラミスが詰まっていた

「確かに、何でここに置いてあったのか分からないね……」

『だろ?』

「それよりさ、このケーキ達、早く食べないと傷んじゃうよね……」

『まあ、生物だしな……』

「じゃあさ、オラ達が食べちゃわない?そのままほったらかしよりずっといいと思う」

『そうだな……無駄にするよりずっといい』

「勿論シロにも分けてあげるぞ」

重箱の蓋にシロへ四つのケーキを入れて地面に置くと、早速しんのすけと『ハリケーン』はケーキを貪り始めた

その様子に遠慮という言葉は無かった。このままほっとかれたら蟻に集られるか傷んで生ゴミとして捨てる羽目になるんだ。それなら自分達が食べた方が無駄にはならないという理論からである

客観視すれば自分勝手な屁理屈以外の何でもないが、しんのすけ達はいい事をしていると思っ込んでいた

あつと言う間にショートケーキ一個を残すだけとなった。しんのすけと『ハリケーン』は睨み合う

『私に譲れ。私はお前の子供同然だぞ』

「オラはお前をお腹を痛めて産んだ覚えはないぞ」

『お前は私を生んだ』

「それとこれとは話が別」

互いに一歩も引く気配はない、膠着状態に陥ってしまう。この状態が数分続いた。そして――

「どつぞシロ」

『さ、食べる』

しんのすけが蓋を持ち上げて『ハリケーン』に渡し、『ハリケーン』がそれにキーキを乗せて地面に置いた

このまま続けても時間ばかりが過ぎていくだけ。それを同時に理解し、同じ一番納得のいく解決法を導き出した

見事なまでに息が合っていた。今この公園には誰もいないが、恐らく他にギャラリイがいたら、拍手喝采が飛んでいただろう

口の周りにクリームをつけながら、美味しそうに頬張るシロを、しんのすけと『ハリケーン』は微笑ましく見ていた

「あー！」

突然の大声に、その和やかな雰囲気は掻き消された

唐突に発された、悲鳴のような声

声の聞こえた公園の入口へと顔を向けると、一人の少女が突っ立っていた

後ろに棚引かせた長い茶髪に、右サイドにはハイビスカスの花を模した髪飾り。下は紺色のロングスカートを着いており、上に羽織ったワイシャツは、襟と袖の部分がギザギザにされている、スタイル

の良い少女

彼女は右手に握った缶コーヒを強く握り締めると、大股でしんのすけ達へと足を進める

距離一メートルの所で立ち止まり、重箱の中身を見る。そして、しんのすけの方へ体を向けて腕を伸ばして肩を掴んだ

「ね……ねえ……」

「な……何ですか？」

「もしかして……この中に入ってたケーキ……みんな食べちゃった？」

体を震わせながら尋ねる

しんのすけは下手に誤魔化そうとせず、首を縦に振った

少女は肩から手を放ち、ガクツとうなだれた

「えっと……ごめんなさい」

少女の様子を見て罪悪感が込み上げてきたしんのすけは、素直に謝罪した

少女は立ち上がって憔悴しきった笑顔を向ける

「いや……いいよ……置きっぱなしにしていたこっちにも非は
はないから……」

「何でベンチの上に置きっぱなしにしたの？」

「いや、道中コーヒーを買おうと思ったんだけど好きな銘柄のが一
番近くの自販機のは売り切れて……それで戻って別ので買う為
に……この先の自販機までかなり距離あるけど、逆の方は走ってだけ
ど往復で十分もないから置いておいたの……」

「このケーキは？」

「昔の後輩が入院したって聞いて……前も入院したみたいだけどそ
の時は時間取れなかったから……で、今日学校一限で終わったから
作って持ってきて……」

それを聞いてしんのすけは目を丸くした

「えっ？あのケーキおねいさんが作ったの？専門店のと味殆ど変わ
らなかったよ？」

「えっ？あ……うん……お世辞でもそう言われると嬉しいなあ……」

「お世辞じゃないぞ！本当に美味しかった！」

これは本心で言っていた

しんのすけのその言葉に、少女は頬を赤くして指で掻いた

「でも……折角のケーキが無くなっちゃった……今から家に帰って作っても面会時間には間に合わないし……」

深い溜息をつく

「じゃあ店で買えば……」

「そんなお金持ってきてないよ……それにあの子には手作りのを食べさせてあげたかったもん……」

「じゃあ、オラランチに来て作れば？」

「え？」

しんのすけのその提案に、少女は声を上げた。しんのすけは構わず続ける

「いや、食べたオラ達にも責任あるし……その位はさせてよ。お菓

子を作る分はウチの台所にもある筈だし」

「……いいの？」

「うん。これ位しか出来なくてごめんね」

「いや、いいよ。ありがとう。じゃあ早速案内してくれる？決まったからには早く行動に移らねば」

「おーっ！あ、所でお名前は？オラ野原しんのすけ。しんちゃんって呼んで」

「僕は清水赤穂^{きよみずあこう}。宜しくねしんちゃん」

「よし、じゃあ帰るかシロ。ついてきて赤穂おねいさん」

「いや、僕……まあいいや後でで」

清水は苦笑いしながら缶コーヒーを重箱を入れた袋の中に入れて、公園の敷地から出たしんのすけ達を急いで追った

お菓子のお味は如何ですか？（後書き）

お待たせしました。どんな話にしようかと迷いましたが、この話に決めました

人の物を勝手に食べて悪気とか感じないのは、31巻にもあったので……まあ、後からの清水の様子を見て悪い事をしたと反省していませんが……

今回登場した清水赤穂は、僕からしたら『やっと登場させる事が出来た』と言った感じですよ

次回も宜しくお願いします。

お菓子のお味は如何ですか？（前書き）

勝手に食べたお詫びとして、しんのすけは野原家に清水を連れて行く……

お菓子のお味は如何ですか？

野原家

しんのすけがチャイムを鳴らそうとすると、玄関の扉が開いて眠っているひまわりを抱えたみさえが出て来た

「ただいまヨネーズの原料はお酢と油と生卵」

「お帰りヴァイアサンは海の魔物」

(仲の良い母子だな)

玄関前でこんなやり取りを交わすしんのすけとみさえを見て、清水はクスリと笑った。みさえはすぐに清水に気付き、顔を向ける

「初めまして、清水赤穂といます」

「あ……はい、どうも……ねえしんちゃん。この人誰？」

「散歩の途中で出会ったの。所で母ちゃん、赤穂おねいさんに台所使わしてあげられない？」

「はあ？」

「いや、そんな顔しないでよ。オラちょっとこのおねいさんに迷惑

足しちゃって」

「それを言うなら『掛けまして』でしょ。で、何したのよあんだ」

「この人の知り合いの人の為のお菓子食べちゃって……家まで遠いからって、オランチの台所使わせてあげると約束して……」

それを聞いてみさえは嘆息をつく

しんのすけはお仕置きを覚悟したが、みさえはそんなリアクションを起こそうとしなかった

「怒らないの？」

「呆れてんのよ……」

「で、使って貰ってもいい？」

「何で次に出て来る言葉がそれなのよ？」

「いやオラ赤穂おねいさんに約束しちゃったし……ハッ！そうか……もしかして昼の食器まだ洗ってないのを外の人に見られたくないから……」

「これがホントの台所事情だね」

「うまいー！」

「失礼ねついさつきちゃんと洗って片付けたわよ!」

「じゃあ赤穂おねいさんに台所使わせてよ」

「……いいわよ」

「おーっ!母ちゃん太股!」

「ありがとうございます」

「いえ、こちらこそウチの息子がご迷惑を……」

「おねいさん早く早く!早くしないと面会時間終わっちゃうよ!」

靴を脱いで家の中に入ったしんのすけが急かす

清水は少し苦笑いした

「どうしたの?」

「いや、しんちゃん。僕、『お姉さん』『じゃなくて』『お兄さん』な
んだけど……」

清水のカミングアウトに、しんのすけは一拍おいて笑い出した

「もーおねいさんも冗談が過ぎるぞ。どう見たらおねいさんを……」

「そりゃよく間違われるけどさ……じゃあこれ見てよ」

清水は無言で一枚の紙を取り出した

みさえはそれを受け取って読む。読み終わると紙を清水へ返してしんのすけに顔を向けた

「しんちゃん。この人ー清水さんの言ってる事は本当よ。この人本当に男性よ」

「嘘だ！この人を近くで見て何でそんな事言えるの？」

「そりゃ私だつて信じられないけど……さっき見せて貰った紙……戸籍のコピーには確かに男だつて……」

「戸籍なんかで人間の何が分かるって言うんだ！」

「分かるもん一杯あるわよ！」

「こりゃ自分の目で納得して貰うしかないな……」

そう呟いた後溜息を吐いた清水は、家の中に入りしんのすけの手を引っ張って廊下を歩いた

「ねえしんちゃん、風呂場何処にあるか教えて」

「え？お風呂？いや……まだオラ達知り合ったばかりでお互いの事よく知らないし……」

「僕は同性愛の気も幼児趣味の気もないから。さっさと風呂場まで案内して」

それだけ答えてテクテクと歩いていく。清水のその様子に圧倒され、しんのすけは押し黙った

しんのすけの案内のもと風呂場に到達した清水は、しんのすけと共に脱衣所に入ってしまった

「のわー！」

しんのすけは悲鳴を上げて走ってみさえの後ろに回る。数分して脱衣所から清水が顔を出した

「どづしたのしんちゃん……」

「お……お股の所に……父ちゃんより大きいのが……」

「これで分かってくれた？」

「分かったけど……どうして男なのにお胸母ちゃんより大きいのか？何で喉の出っ張りとか無いの？」

「詳しい事はよく分からないから説明出来ないけど、ホルモンの関係みたいなんだ……」

「じゃあその服は？」

「趣味」

「もしかしてわざと間違われるようにしてない？何かかなり紛らわしいんだけど」

不実な会話を続ける二人に見かね、みさえは手を叩いた。二人はみさえに視線を向ける

「母ちゃん何？」

「しんのすけ、あんたはそんな話をする為に清水さんをウチに連れてきたの？」

「あ……そうだった。あっさり忘れてた」

「『すっかり』でしょ……全く……家にある物で使える物は使っているから。それじゃ買い物行ってくるわね」

「行ってらっしゃーい」

ひまわりをベビーカーに乗せてみさえは出て行った

台所

「さて……調理器とか小麦粉とか準備出来たし、後は卵とかだな……」

「あつちよつと待ってお兄さん、オランちの冷蔵庫を不用意に開けたら危険だから駄目」

「オーバーだなあ」

しんのすけは慌てて注意するが清水はそれを笑い飛ばし、取っ手に手を取って冷蔵庫の扉を開いてしまった

直後に自分に起こった現象を、清水は理解出来なかった。そして、しんのすけの言った事の意味を身をもって知った

無理矢理詰め込んだ為にある食べ物が雪崩のように流れ込んできて、清水はそれに巻き込まれて埋もれてしまった

「だから言ったのに」

「こんな事態が待ち受けてる事……予測出来ますか？普通……」

食材の中から使える物を出して後は冷蔵庫の中に無理して戻した後、揃えた材料を見る

小麦粉、砂糖、バター、胡桃、アーモンド……

「よし、クッキーとロールケーキ作るか」

目の前の材料を見て、作る物を即座に決めた

「おおクッキーとロールケーキですか。オラも好き」

「言っとくけど分けないよ」

「じゃあ今度作って持ってきてよ」

「それならいいよ。それよりしんちゃん。一つ質問があるんだけど」

「何？」

「何でしんちゃんがここにいるの？」

「オラがオランちにいて何か悪いの？」

「いや、違う部屋で遊んでなよ……」

「いや、オラにも責任があるから手伝わせて貰います」

「いや、別にそこまでしなくても……台所貸してくれただけ十分……」

「いや、手伝う」

「拒否権無し？いや、それじゃ僕小麦粉と砂糖を篩にかけとくから、しんちゃんは卵割っというて」

「ほーい」

しんのすけは、ただ立ち竦んでいた

清水赤穂の調理は実際見事な物で、綺麗で無駄がなく、あつと言つ間にクツキーの生地を作つて型でぬいてオーブンで焼き始める。そこまでの行程でしんのすけがした事と言えば、卵を割つた事だけだった

(母ちゃんとは比べ物にならないぞ……)

「さて、次はスポンジケーキ……じゃあしんちゃん。卵割つて……」

「う……」

しんのすけは腹を押さえ、うずくまった

「ちょ……どうしたの？」

「う……」

「も……もしかして盲腸？ヤバい、早く救急車……」

電話へと駆け出そうとした清水のスカートを、しんのすけは掴む

「ト……」

「ト、何？」

「トイレに……行きたい……」

その発言に、清水はずっこけた

「じゃあ行きなよ……我慢するのは体によくないよ」

「え……でも……」

「大丈夫。君が手伝ってくれなくても僕一人で十分だから」

それは事実である。限界だったのか、次の瞬間しんのすけはトイレ

まで駆け込んでいった

「こつなるまで無理する必要はないのに……」

トイレのドアを勢い良く閉めた音を聞くと、清水は篩の中に小麦粉を入れた

「ふーっすっきりしたー」

『しんのすけ。おいしんのすけ』

手を洗うしんのすけの背後から、『ハリケーン』が声をかける
水を止めて手を拭いて自分のスタンドに体を向けた

「何『ハリケーン』」

『いや……あの男には注意しとけよ』

「あの男って……赤穂お兄さんの事？」

『それ以外に誰がいる？』

「どして？」

『あの男は『スタンド使い』である可能性があるからだ』

「えーつムグッ」

大声をあげるしんのすけの口を『ハリケーン』が塞ぐ

『静かにしろこれじゃ何の為にその事をここで話したのかが分からなくなるだろうが』

「ご……ごめん。でもさ、何の根拠があって赤穂お兄さんを『敵スタンド使いだ』なんて言うの？」

『いや、スタンド使いの可能性があったただで敵かどうかはまだ分からん』

「じゃあスタンド使いかも知れないって思う根拠は？」

『初めて会った時のあいつの発言を思い出してみろ……』

「うーん……別に何かしい事何も言っていなかったけど……」

『悲鳴をあげた後、あいつは『君達が食べちゃったの』と言っていたぞ……「達」は二人以上を差す言葉だ』

「あの時いたのはオラとシロとお前だけで……あ」

しんのすけは『ハリケーン』が言いたい事を理解出来た

重複するがあの時公園にいたのは、しんのすけとシロと『ハリケーン』だけ。人間を差す場合、普通は犬は数に含めない

そして、『ハリケーン』はスタンド。周囲に見える人達が大勢いる為忘れがちだが、通常『スタンド使い以外には見えない存在』である

それに見えていたとしてもこんな異形の存在が視界に入ったら事情を知らない人間なら何かしらのリアクションを起こす筈なのに彼にはそれが無く、しんのすけにも一切言及しなかった。これはどう考えても不自然だ

つまり清水はスタンド使いで自分の能力を自覚して使用しているだけでなく、他にも同じ能力を持つ人間が存在しているのを知っているから何も言わず、何も聞かなかった

『そして今まで何もしなかったのは……お前を油断させて確実に仕留めるつもりだからじゃないのか？』

「面白い話してるね。僕も混ぜてよ」

後ろから声がした

振り返る前に、しんのすけと『ハリケーン』の首に腕が回された

しんのすけに回されたのは生身の腕だが、『ハリケーン』に回され

たのは肌は茶色い、打ち付けられたコルクのような物が手の甲から肘にかけて並べられた、透けて見える腕だった

回された腕はどちらもその力を緩める。後ろにいたのは笑顔の清水だった。だがその目は笑っておらず、寧ろ怒っているのが目にとれた

そしてその後ろには、左腕を『ハリケーン』に回したスタンドがいた赤と緑のビーズみたいな物が茶色い女性的なその体に散りばめられたように埋め込まれている、頭に黒い三角巾を被り目にゴーグルを装着したスタンドだった

「いや、ロールケーキもうオープンに掛けたし、長かったから少し心配で来たんだけど、まさかこんな話をしているとはね……」

「か……鍵は？」

「最初からしてなかったよ……そうだよ。僕はスタンド使いだ。改めて挨拶をさせて貰うね……僕は清水赤穂、スタンド名は『パウンドケーキ』……」

『やはりお前は……』

「そつだよ猪君。君の言う通り……」

清水は自分の左腕を振り上げ、拳を作る。そして――

「君達の敵だ」

そう言って清水は、しんのすけの頭部へとその拳を振り下ろした

お菓子のお味は如何ですか？（後書き）

一応何とかここまで来れました

スタンド名はヴァン・ヘイレンの楽曲から。能力は次回に明らかに
させます

それでは、次回も宜しく願います

お菓子のお味は如何ですか？？（前書き）

清水がやってきた理由とは？

お菓子のお味は如何ですか？

しんのすけの頭上へと落とされる清水の拳

『ハリケーン』は自分の首に回された『パウンドケーキ』の左腕を腕ずくで外してしんのすけへ駆け寄るが、その時既に頭と拳との距離は五センチも無かった

『うおおおおお！』

必死で駆け寄り、手を伸ばす『ハリケーン』。僅差で届かず、清水の拳はしんのすけに接触

しただけだった

「何てね……冗談だよ冗談」

「え……えつと……冗談？」

「うん。冗談」

清水は笑顔で言う。先程の表情だけの笑顔とは打って変わって、朗らかな笑顔だった

『冗談だと？つまりお前は本当の本当に敵じゃないのか？』

「本当の本当の本当に敵じゃないよ。少しからかっただけ」

「じゃあ何で怒ってたの？」

「あんな事陰でヒソヒソ話されているのを聞いたら誰だって不機嫌になるわ。大体さ、僕が君の家に来たのは君が誘ったからで、その理由だって僕が偶々置きっぱなしにしていたケーキを偶々見つけた君達が食べちゃったからだよ。まさかそれを計算でやったと？」

しんのすけ達は首を横に振る

「でしょ？だから僕が君に出会ったのはただの偶然で、僕が君のお誘いを受けて君の家まで来たのは本当にケーキの代わりになるお菓子を作る為だったの」

『そうだったのか……それでは一つ聞くが、あんたは公園で私の姿を見ていた筈だが、それに関して何もリアクションを起こさなかったのは何故だ？』

「勿論見えていたよ……同じ能力を持っている人に会ったのは初めてだけど驚きもしなかったのは僕がこの能力を調べた結果他にもいるのは分かってたし、能力を得た経緯から春日部やその近辺にも何人かいるだろうなと思っていただけから」

「得た……経緯？」

しんのすけはそれで一つの予測を立てる。清水はそれを話し出した

「僕は四ヶ月程前、成人の日に沢登優太って子に『矢』に射られて『パウンドケーキ』の能力を得たんだ……非現実的で色んな意味で信じられない出来事だったからこうして君に話すまで誰にも話していないけど……」

「オラも同じ。オラも『矢』に刺されて『ハリケーン』が生まれたの。こいつ生みの親であるオラの事尊敬せずに毎日お菓子を摘み食いしたりするんだぞ……全く、日頃からオラがどんなに恥ずかしい思いをしているのか……『親知らずは子心』とはよく言ったもんだぞ」

『それを言うなら『親の心子知らず』だアホ。大体お前がスタンド使いと戦えているのは私のお陰だろうが。お前こそ私の事を尊敬しろ』

「何をーっ！このぶりぶりざえもんもどきー！」

『私の事は『ハリケーン』と呼べと何度言ったら分かるんだこのジヤガイモ小僧』

「あははははははは」

目の前で繰り広げられるスタンドとその本体である幼稚園児の口喧嘩を見て、清水はただ笑った

台所の方から電子音が鳴った

「よし、仕上げに参りますか」

焼き上がった生地をオーブンから取り出して蒸らした後、紙の上に引っくり返して切り込みを入れ、砂糖を振り掛けてロール状に巻き込み、切り分けた

二切れ別にして、それをラッピングした。別にした二切れと先に作ったクッキーが乗せてある皿をしんのすけ達に渡した

「食べていいよ」

「いいの？」

「いいの。台所も食材も使わせて貰って感謝してるんだし……あ、心配しなくていいよ。クッキーはもう既にラッピングしてあるから」

「でも……事の木炭はオラ達がケーキ食べちゃったからで……」

「『発端』ね……そのお詫びは充分過ぎて余分が出来る程頂いたからね。だからお礼としてあげる」

「そついう事なら……」

しんのすけはまずクッキーに手を伸ばす

掴む前に、別の手が伸びてその手がクッキーを掴んだ

「お前何してんの？」

クッキーを咀嚼している『ハリケーン』に怒りを込めた視線を送る

『クッキー食べた』

『ハリケーン』は湯呑みに注いだ紅茶を飲みながら答えた

「はいはいまだあるから喧嘩しないの」

『ふー………食った食った』

「ありがとね赤穂お兄さん」

「どうぞ致しまして………それじゃあ見舞い行くから。改めてありがとね」

「あつちよつと待って」

作ったお菓子を持って出ようとした清水を、しんすけは呼び止めた

「な……何？時間無いんだから長くなるんならまた後で……」

「大丈夫、時間は取らせないから」

「？」

「お兄さんのスタンド……『バターケーキ』だっけ？その能力教えてくれない？」

「『パウンドケーキ』ね……いいよ。減るもんじゃないし」

清水は『パウンドケーキ』を発現させ、それにお菓子を食べ終えた皿を触らせた

「じゃあこれをお湯で濡らしたタオルで温めてみて」

「ほーい」

風呂場から洗面器を持ってきてその中にお湯とタオルを入れる。水で少し冷まして絞って水気を取った後、皿をタオルでくるんだ

すると、皿はいきなりしんのすけの身長の四分の一にまで膨らんだ

「のわっ！」

「次はそれを触ってみてよ。安心して。危なくないから」

しんのすけと『ハリケーン』は膨張した皿を指でつつく。スポンジのように柔らかく、それでいてゴムのような弾力があつた

「これが僕的能力。今のように熱を加えたり一定以上の衝撃を与えたりするとケーキみたいに膨む能力。因みに熱で膨らむ場合は僕の平熱である37.5度以上の熱が必要です」

「ポフポフしてて気持ちいい」

「じゃあ戻すからね」

「ねえしんちゃん一つ聞いていいかな？」

「何？」

「何でしんちゃんまでついて来るの？」

「いや、赤穂お兄さんがまた見舞い品置きっぱなしにしないか心配だから」

絶対それだけじゃないと思ったが、敢えて言わない事にした

兎も角二人は病院まで真っ直ぐ足を進め、そして、目的の病室の扉の前に辿り着いた

「あれ？」

「どうしたの？」

「いや、ここ……オラのお友達の部屋なんだけど……」

「奇遇だね。僕の後輩もここにいるの」

「へ？」

「まあ詳しい話は後にして中に入ろうか」

清水はノックをして、返事がしてからドアを開いた

「どーぞ」

ノックの音がしたので返事をすると、最近頻繁に見る顔と懐かしい

顔が部屋に入ってきた

「ほっほーい除夜のお兄さん」

「よっしんのすけ」

「やっ瀬上君久し振り。こんな所で再会するなんて思いも寄らなかったよ」

「俺もですよ。久し振りです清水先輩」

「はいロールケーキにクッキー。手作りだよ」

「どうも」

「ねえ赤穂お兄さん、ちょっと聞いていい？」

「？」

「何だしんのすけ？先輩とはもう知り合いなのか？それに『お兄さん』って呼ぶって事は、先輩が男だって知ってんのか？」

「もしかして、お兄さんの言っていた『入院している後輩』って、除夜のお兄さんの事？」

俺は無視ですかこの野郎！

「うん」

すぐさま肯定する先輩

「世界って狭いんだな」と感心したように呟いた後、すぐに何かに納得したような表情となる

「あーそう言えばあの時『後輩の沢登優太』って言ってたよね？だったら優太のお兄さんと同じ中学校だった除夜のお兄さんや瑪瑙のお姉さん達も後輩になるんだ」

手を打って呟くしんのすけ。いや、そこはすぐに分かれよ

て……あれ？

今のしんのすけの言葉におかしい点がある事に気付いた俺は、清水先輩に視線を向けた

「先輩……もしかして、あいつに……」

「うん……『矢』に射られた……そして瀬上君も、何か知ってるみたいだね……」

「まあ当事者になりますからね……」

「教えてくれない？何で沢登君はあんな事をしたのか、沢登君は一

体何をしていたのかを」

「構いませんよ……」

「という訳です」

「そっか……」

俺が一通り話すと、先輩は何処か寂しげにそう呟いた

「平気そうな顔してたけど……やっぱり寂しかったんだね……」

「そうですね……まあ話は終わりましたし、お菓子食べましょお菓子。折角だししのすけも食べるか？先輩の料理うまいんだぜ」

「うん知ってる。だってオラと赤穂お兄さんはお兄さんの作ったケーキで出会えたようなものだから」

「違うないや」

しのすけと先輩は笑い合う。その時、ドアの向こうから複数の話し声が聞こえてきた。全てよく聞いた声だった

「瀬上君今日は」

「おつす瀬上」

「ヤッホー瀬上君。元気だった？」

「お兄さん今日はー！」

宝来、本荘、古賀、勝海の四人が入ってきた。勝海は俺の姿を見るなり俺の腰に腕を回してすり寄ってくる。そんなこいつの頭を撫でてやると、更に嬉しそうな顔となった

「相変わらず勝海君は瀬上君が大好きみたいだね」

「清水先輩も久し振りです」

「瑪瑙ちゃん達もね。みんな元気そうで何よりだ」

「ねえ瀬上君もしかしてそれ先輩の作ったお菓子？あたしも食べていい？」

「ああいいぞ」

「一気に騒がしくなったね……」

「松任先輩も来てますよ。売店であたり目とかを買っているの見掛けましたし」

「こりゃ随分騒がしくなりそうだね」

笑いながら脳天気な事を言う先輩

その数分後に松任先輩が大量のジュースとおつまみを持って来て、先輩の予想通り更に騒がしくなった。殆ど宴会場と変わらない騒がしさだった

当然その後本日の見舞い客達は、医師によつて全員追い出された

因みに、清水先輩が俺の為に作ってくれた菓子は全て食われてた……

「またかよ……おい……」

午後七時

女子高生のグループが、月明かりが照らす夜道を話しながら歩いていた

話している内容は今日あった嫌な出来事や自分の失敗談等、たわいもない話

そんな話をしている最中、先頭の女の子が足を止める

「どうしたの？」

「あれ……」

先頭の女の子は、指を差す。指を差した方向にいたのは、一体の『ロボット』だった

それはそのグループに顔を向けると、即座にマンホールの蓋を開けて中へ飛び込み、姿を消した

「み……見た？」

「うん……」

「変なロボットみたいなのが……下水道に……」

グループの女子高生達は下水道の中を覗き込んだが、そのロボットはもう見えなかった

T O B E C O N T I N U E D ……

お菓子のお味は如何ですか？（後書き）

今回は戦闘抜きでした

最後の方で出てきたのは勿論アイツです。次はアイツの一派とのバトルを予定してます

では、次回も宜しく願います

捜査は足から調査は噂から（前書き）

琢磨の一日は、本日は朝から……？

捜査は足から調査は噂から

「お忙しい所すみません。一つ御質問があるのですが、宜しければお答え出来ませんか？」

朝の7時半近く

僕（須藤琢磨）はこの近くの中学校の体操着を着ている、部活の朝練で外で走っている中学生の一団に声をかけました

相手の中学生達は怪訝な顔をされました（まあ朝にメモ帳とボールペンを持った男にこんな事いきなり聞かれたら当然の反応でしょうが）。少しして部長らしい人が僕の前に来て質問の内容を申すよう求められました

何故僕が聞き込みの刑事さんの真似事をしているのか、それは昨日の夜まで遡ります

その話を耳にしたのは、夜十時過ぎのレンタルショップでした

そこで週三の深夜帯のシフトを入れている僕は、店に返却された漫画本をそのコーナーの空のケースに収めていた時でした

そのお客さんは20冊以上出ているシリーズ物の本をいっぺんに借りていっぺんに返した為作業に時間は掛かりましたが、僕はその話を耳にした時、そのお客さんに感謝し、「何かお礼をしなければ」

と本気で思いました。その日その時一度に全て返却してくれなかったら、僕はその話を耳に挟む事はまずありませんでしたしね

「えっ？お前、噂のあのロボ見たのかよ」

「三日前から現れる、カメレオンの顔みてえな頭にスッポンみてえな顔した腕のデカイ謎のロボットだろ？見たよ」

「マジでか？あれただの噂じゃなかったんだ……」

「俺も本当にいるとは思わなかったよ。畜生、そんな時親から電話かかってこなければその姿を写せたのによ」

とまあこんな感じで、僕と同じ年頃の若い男の人のグループが、僕の後ろを通り過ぎていきました。話題に上がっているそのロボの特徴は、間違えようもなく『あいつ』のものでした

今すぐ作業を止めて詳細を訊きたかったのですが、仕事だったので堪えました

閉店時間を迎えて一番の先輩が飲み会に誘ってくれたので了承してついでに行き、店でその噂を聞きました。その噂のロボットを直接目撃した人、身近な人が目撃したのをその人から聞いた人が殆どでした

僕は飲み会を一抜けした後、コンビニで地図を購入して目撃された場所を印付けていきました

という経緯から現在、僕は印を付けた場所に家から近い順で単独で自分の足で捜査に出掛け、出会う人に片っ端から噂は知っているか、目撃者がいたなら目撃したのは何処かというのを訊ねる事にしたのです。勿論不審者扱いされたり最悪通報されるのを承知の上で

勿論この経緯について言う必要はないので割愛し、理由は同好会での調査と適当に誤魔化してあくまで『したい質問は何なのか』という事だけを述べました。納得してくれたようで、代表の人は部員達に体を向けて僕の質問をそのまま言つて、当てはまる人は拳手をするよう言いました。五分の三近くの人数が手を挙げました

午前10時半、図書館

最初に印を付けた場所はまだ四ヶ所しか回っていませんが、剩りにも目撃情報が多かったので情報を纏める為に一旦捜査を中断しました

分かった事は出現する時間帯は夕方から深夜、そして朝方という限られた時間に出現している事、そして出現地点は川や水路等、水が近くにある場所から離れててせいぜい50メートル程度だという事

後者の方は前回除夜君達の前に現れたのと同じ理由で間違いはないとして、前者の現れる時間に偏りが見られるのは何故なのでしょうか

「一番合理的な説明はこの時間帯以外の時間は自由に動けない……動いたら不都合が生じる……動く事の出来ない理由がある……」

「あつ須藤さんだ。おーい」

聞き覚えのある声が聞こえて顔をそつちに向けると、数冊の学習漫画を脇に抱えた比留川勝海君が、僕に手を振りながら近付いてきました。僕の向かいに位置する椅子に座って学習漫画を開きました

僕は彼に、彼を見たと同時に思った疑問を訊ねました

「すみません。学校はどうしたんですか？確か今日は平日で今現在普通なら学生は学校で勉強に励んでいる時間帯の筈……まさかサボタージユ……」

「ううん。学校の都合で今日は一限で終わりだったの。だからここにある学習漫画を全部読もうと思って……須藤さんは？」

「最近『あいつ』がこの春日部の至る所で目撃されているという噂を小耳に挟みましてね。その調査を単独で行っているんですが思った以上にあちらこちらに現れているので纏める為に……」

「『あいつ』って、優太君を殺した『サクリフェイス・オブ・ヴィクター』ってスタンドの事？」

「あ……はい」

「僕の同級生も見たっていう人がいるんだよ」

「まあ……目的は見当はつきません。僕達を誘き出すつもりなのでしょう。目撃した人間に何もせずすぐに逃げているのがその根拠で

す

話している間にも僕は地図に印を付けていきました。終わると同時に立ち上がってテーブルから離れました

「何処に行くの？」

「捜査の続きです」

「僕も手伝うよ。学習漫画は借りて家で読めばいいし」

「え？いや、別にいいですよ」

「大勢の人に聞き込みをするのであれば手分けした方が手っとり早いよ？」

「……正直助かります。ありがとうございます」

「お礼は言わなくていいよ」

午後12時半。ファミレス

勝海君は自分の頼んだ牡蛎フライ定食の前で、顔をテーブルにうつ伏せていました

「須藤さん……」

勝海君は顎をテーブルの上に置いて疲れ切った顔を僕に向けました

「どうしたんですか？そんな顔して……」

「あれから二時間、少し移動しては会う人会う人に聞き込み……普通に疲れますって……何で須藤さんは平気なの？」

「バイト三つ掛け持ってますから対応の体力は必然的につきますよ。それに一応鍛えていますしね」

「今日から僕も体鍛えるの始めようかな……硬めのご飯をよく噛んで……」

「顎と歯茎限定ですか……確かに生きていく上で重要ですけど……」

「それ含めて腕力とかも鍛えるよ」

「それはいいとして食べないんですか？冷えますよ。」
「ご飯……」

「食べる……で、食べ終わったら聞き込みまたするの？」

「ええ、主に『アピール』と『時間潰し』の意味合いで聞き込みを続けます」

「『アピール』と『時間潰し』？」

僕は地図を提示して印が特に集中している部分に指差しました

「ここはあいつの目撃情報が最も多い場所、つまり、逆に言うとおいつと遭遇する確率が最も高い場所という事です」

「つまり僕達は午後からこっちに行くって事？」

「はい。あいつが現れるのは一番早い時間で午後4時33分。つまりあいつが姿を現すのを始めるのが4時半からとして、活動を始めるのは4時前後……それまで僕達がここで動いていればあいつが僕達の前にその姿を現す確率は高くなる……それは当然、向こうからやって来るんですからね。だから午後からの聞き込みは僕達がそこにいる事への『アピール』であり現れる時間が来るまでの『時間潰し』……分かりましたか？」

「それで？あいつが現れた後の事は？」

「ノープランです」

期待で目を輝かせている勝海君に、こう即答しました。勝海君は付け合わせのキャベツに顔を突っ込ませました

「一番重要な所何も考えてないの？」

「図書館が言った事を忘れたんですか？誘き出そうとしているのはあいつの方なんですよ？だったらこの考えに至る事位頭に入れてい

る筈なんです」

お絞りでキャベツとマヨネーズ塗れになった顔を拭く勝海君に説明を続けます

「それに僕の最大の懸念は『どんなスタンド使いと組んでいるか』なんです」

「『どんなスタンド使いと組んでいるか』？」

拭いたお絞りを畳んで、まだベトベトしているのか別のお絞りで顔を拭く勝海君は訳の分からなさそうに僕の言った事を復唱しました

「はい。この前あいつが除夜君の前に姿を現した時は目黒君と組んで除夜君と宝来さんと戦いました。今回もあいつは誰かと組んでいる可能性は高い。そして当然僕達は『誰か』がどんな人間でどんな能力を持っているのかなんて知らない。事前の対策なんか立てたって意味がないんですよ」

「納得です……」

「それでは早々に食べ終えてそこに向かしましょう。アピールはする時間が長ければ長い程いいですからね」

午後4時23分

僕達のご飯を食べ終えた後ファミレスを出てその地点に向かい、到着した後すぐに行動に入りました

途中警察から職務質問を受けたりしましたが、この時間まで聞き込みをする事に成功しました。後は水路に沿って歩き回れば、あいつが僕達の前に現れる筈

「でもさ須藤さん。本当にあいつは僕達の前に現れるのかな？」

「「確実に現れる」とは言い切れませんね。何度も言いますが僕がここに来たのはあくまでここが一番目撃情報が多いからであって今日は別の場所にいるかも知れませんし……ここにいるとしてももつと上流か下流かも知れませんし。まあ過度な期待はしない事ですね」

「そうだね」

「何時現れるか分からない奴を警戒していても仕方ありませんよ。何か話しましょう。最近の嬉しい出来事とかで」

「それならあるよ。昨日お兄さんの見舞いに行ったんだけどさ、お兄さん明日退院するんだって」

「それはめでたいですね」

「回復が早いってお医者さん驚いてた」

「そりゃそつでしようね……」

「まあお兄さんの怪我の診察をした人は最初はみんな驚くんだけどね。この調子だと後数日で完治するって」

「それは良かった。明日は祝わないと」

『残念ながらお前等は除夜の退院を祝う事は出来ねえぜ……いや、明日の朝日を拝む事すら出来ねえ……何故ならお前等はここで俺達に殺されるんだからよう！』

突然話に割り込んできた聞き覚えのある声の後、上がった盛大な水飛沫から飛び出してきたのは、一体のロボット

今回の捜査対象であり、僕達の現時点での最大の敵、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』……そいつが、僕達の前に現れました

「随分盛大に撒き餌をしてくれてありがとうございます。お陰様で貴方とこうしてまた出会う事が出来ましたからね」

『あんたこそわざと網に掛かってくれて感謝するぜ……』

「それはどう……!」

水路の向こう側の、『大きな水溜まり』

目に入った当初、僕はこいつが飛び出した時に出来た物だと思いましたが、それは違つとすぐに判断しました。大きさがおかしかったからです

他の水溜まりはせいぜい掌二つ分から三つ分なのに、あの水溜まりは畳一枚分の面積がありますし、それに色だつてよく見たら『半透明』で、しかも気のせいではなく確かに動き出したのです

その『水溜まり』は僕達からして左側にある、僕達に一番近い橋へと向かいました

捜査は足から調査は噂から（後書き）

因縁の宿敵との二度目の戦いが開始です

今回は戦闘激化します。サクリファイス・オブ・ヴィクターが連れてきたスタンド使いの能力も判明します

では、次回も宜しくお願いします

スケルトン・クライスト？（前書き）

サクリフェイス・オブ・ヴィクター第二の仲間。その恐るべき能力が、琢磨と勝海に牙を剥く！

スケルトン・クライスト？

『水溜まり』は橋を渡る過程で、餅のように膨張していきました。しんのすけ君の身長の三分の二程の大きさとなると、今度はその姿を変えていきました

まず頭と腕らしき部分が出て来て、そして少しずつその形がハッキリとしていきました

下半身のない、大事な部分を隠すように一枚の布を纏う、肩までの髪、全体的に裸婦の像を思わせる姿。橋を渡りきる前に変化を完了させ、そして僕達に向かってきました

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』も、行動を起こしました。奴は僕へと、スピードを上げる為に左肘の噴射口から水を噴射させて拳を振るってきました

僕は奴の左腕を『持っています』。奴はすかさず右腕を僕に振るってきました。狙いは頭部

対し僕は着弾箇所を持っていきました。拳は断面に命中する前に開いて断面を覆うように僕の頭部を掴み、そのまま水路へと飛び込もうとしたその瞬間

自販機が奴の体に叩き込まれ、そのまま水路の向かい側へと吹っ飛ばされました。叩き込まれた際の衝撃で、僕はロボットの握力から解放され、能力を解除した直後に僕の体は背中から地面に叩き付けられました

「あたたた……」

「須藤さん早くここから逃げて！」

打った後頭部をさすりながら立ち上がるうとした僕に、飛ばした自販機に乗った勝海君が叫びました

何なのかを考える前に僕は右手とカーブミラーを持っていき、瞬間移動を行おうとしたその時、僕の左足に、水が掛かった時の感触がしました。それがあのスタンドが体当たりしてきた為だと気付いたのは、瞬間移動を行った後でした

「大丈夫須藤さん！何ともない？」

「何ともありません……全然」

「本当の本当に何ともないの？」

「本当の本当に何ともないんですよ……何故かね」

『よくやった』スケルトン・クライスト』！これで奴は能力を大幅に制限されたも同然！』

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は水路を飛び越えて僕の前に着地。間髪入れずに左拳を放ちました

僕は自分の右腕とガードレールの一部を持っていき、瞬間移動を行おうとしました

「うむあー！」

僕の腹部に、奴の拳が突き刺さりました

僕は確かに自分の体の一部とガードレールの一部を持って行って、持っていた僕の右手は確かにガードレールを掴んでいるのに

僕は『瞬間移動が出来なかった』。そしてその理由はすぐに見当がつきました

瞬間移動が出来ないのは、能力者や対象の一部が地面に引っ付いているのが主な原因。僕の場合は自分がそうになっている時に同じ様に地面に引っ付いている物を用いて瞬間移動を行おうとした場合、今のように持っていた部分は戻る事なくその状態が続いたままになります

先程攻撃を食らった時、僕の体は『右足が地面から離れなかった』
為吹っ飛ばなかった。一番単純且つ合理的な結論は、『何かをされたから右足が地面に引っ付いている』という物

そして右足にされた事は、先程あの液状のスタンド『スケルトン・クライスト』が体当たりしてきた事だけ。それで何が起こったのか、あいつの体である液体が付着した。つまり

答えを出す前に『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は攻撃を繰り出してきたので、能力を解除して今度は自分の腕の一部を持って行ってそれでガード。それを確認すると距離を取って胸部の噴射口を僕に向けました

水が放たれた瞬間しゃがみ、そして僕と奴との距離を持っていく事でその攻撃を避けました

「小柄な体格ってこんな時は便利ですね。それに僕が瞬間移動出来なくとも、貴方を瞬間移動させる事は出来ますよ?」

『寧ろ好都合!』

「そこで戻します」

拳を振り下ろした所で元の距離に戻しました。奴の拳は地面に突き刺さりました

腕の運動が止まると、突き刺さったその巨大な腕が音を立てて展開し、そこからラップやアルミホイルの筒程ある銃身が現れ、それを僕へと照準を合わせてきました

そこから出る高圧水流が僕に命中（ギリギリで命中するであろう部分を持っていった為）した途端、浮かんだ軽トラが目に入りました。その軽トラは『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の真上まで来ると、落下しました

奴は僕への攻撃を中断して水路へ飛び込み、地面に叩き付けられる

前に『スケルトン・クライスト』がそこに移動し、軽トラの下敷きになりました

『スケルトン・クライスト』は隙間から抜けて僕達から距離を取ります

「あれ？あの軽トラ……操作出来なくなってる……」

「でしょうね……引っ付かれているのだから……あの『スケルトン・クライスト』というスタンド、『糊』のスタンドです」

「えっと……糊って、あの紙を引っ付ける時に使う、あの？」

「その糊です。しかも体その物が糊という不定形型のスタンド……だから物理的な攻撃は無意味だから金属を動かす勝海君の能力は相性が悪い……僕の能力で持っていたとしても性質上一部は残さざるを得ないからこいつ相手だと実行したとしても現状の変化は大してない……つまり僕達の能力ではあのスタンドの対処は難しい……ここまでは分かりますか？」

「分かるけど……それって敗北宣言にも聞こえるよ」

「気にする事はありませんよ。相性は何にだって存在します。それに僕は『スタンドを何とかしようとするのは無駄』だと言いましたが『勝てない』とは言っていない。別の手段なら倒せます」

「それって……『本体』を倒す事？」

「そう。あいつは間違い無く遠隔操作のスタンドで、動きから見て

本体はそこまで離れていない所から僕達を見ている……そいつを捜し出して叩く。それしか手段はありませんね」

「サクリファイス・オブ・ヴィクターは？」

「当然させじと妨害してくるでしょうね。それに関しては僕が一所懸命頑張りますから気にせず捜して下さい」

「え？つまり須藤さんがアシスト？メインじゃなくて？」

「僕的能力は後方支援向けですし」

「僕的能力も前線出て戦うのに向いてるとは言えないよ！？」

「避けたり逃げたりは僕的能力のが向いています。全力でどうにかしますから気兼ねなく捜して下さい」

勝海君は落下した時に飛んだ軽トラの部品を操作して右足に引っ付いていた舗装を掘り起こしてくれました

同時、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』が水面から飛び出してきました

「たく……さっきの大口は万全な状態で言ってよ！ロクに動けない状態であんな事言われても説得力無いから！」

「それはすみませんでした……」

『スケルトン・クライスト』は足止めする為に勝海君を追いますが、僕は距離を持っていつて前に立つ事でそれを阻み、狙いを僕に変えると今度は距離を戻しました

続いて『サクリファイス・オブ・ヴィクター』が僕に両腕から出した銃口を向け、同時に水を放ちました

対して僕は「糊付け」された軽トラの陰まで瞬間移動しました。かなりの圧力が掛けられた水が一方から絶え間なくぶつかっているにもかかわらず、この軽トラは動きません。『スケルトン・クライスト』の接着力が如何に凄まじい物かを物語っています。まあこれはその特性に助けられたような物ですので若干複雑ですが……

「車の中とかボンネットの上とかすぐ分かる場所にいる訳ないし……」

ぶつぶつ呟きながら、勝海は駐車場に停まっている車一台一台の下を覗いていた

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は、僕が陰に隠れている軽トラに水を放出し続けていました。銃口は動かしていないのでそこは大きく変形しているにもかかわらず微動だにしていないう、
『スケルトン・クライスト』の規格外な接着力に感心しながら、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の行動』に違和感を感じてました

(妙ですね……今自分がやっている事でこの「壁」を突き抜けられないのもう分かっている筈……横は水路なのだから回り込むなりすればいいのに……まさか……)

横を見ると、『スケルトン・クライスト』が、どう動こうが能力を使わなければ回り込まれてしまうまでの距離まで迫ってきていました

水路に飛び込むのは論外。陸路で逃げなければいけません、能力を使わないと『スケルトン・クライスト』に触れてしまいます

『スケルトン・クライスト』との距離を離そうとしても、途端に『サクリファイス・オブ・ヴィクター』が「壁」を飛び越えてくるでしょうし、瞬間移動にしても大まかな所は想定してくるでしょうし

……

「つまり『この手段』しかないという事ですか……」

僕は『スケルトン・クライスト』と向き合い、奴の腰から上を持っていき、走り出して飛び越えました

「壁」から飛び出した僕を、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は水を発射しました。僕は半身を持っていった事でダメージは受けませんが、断面への接触はダメージがないだけなので、その衝撃でノーバウンドで数メートル吹き飛びました

姿を戻して立ち上がると、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は既に姿を消しており、『スケルトン・クライスト』は僕に向かって来ていました

僕は同じ手段で飛び越える為真正面から突っ込むように走りました

『一度成功したからってまた成功させる程俺達が甘い奴だと思っただか？』

奴のほくそ笑むような声の後、背中から凄い衝撃が来て僕の足が地面から離れ、必然的に前に、つまり『スケルトン・クライスト』にぶつかるように押され、『スケルトン・クライスト』はそのまま後ろに下がりました

「こう来ると言うのは僕だって考えなかった訳じゃない……易々と同じ手を通用させてくれると考える程、僕も楽観した考えは抱いていませんよ」

背中から掛けられる力が止まったのを感じると、僕は空中を直進、下降していく自分の体を胸部から下を持っていき、ギリギリ『スケルトン・クライスト』に接触する事なく通過する事が出来ました

通過したと同時に元に戻し、着地して『スケルトン・クライスト』と水面から上半身を出している『サクリファイス・オブ・ヴィクター』と向かい合いました

「残念でした」

『これで勝ったつもりか？』

「そんな馬鹿な。でも僕は時が来るまでひたすら逃げ続けます。止められるのなら止めて下さい。止めたら貴方達の勝ちで、止められなかったら僕達の勝ちというのは、言うまでもありませんがね……」

『随分と自信满满だな……お前にそれが出来ると？』

「殴り合いなら兎も角、逃げる事と避ける事だったら負けませんが」

『いいだろう……その喧嘩買ってやる』

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は水から出て胸部と顔面を展開して殴りかかってきました

スケルトン・クライスト？（後書き）

またかなり間を空けてしまいました

スタンド名はハノイ・ロックスの楽曲から

今回の戦いは今までみたいな能力で戦うというより、如何に上手く逃げ続けられるか、になります

では、これからも宜しくお願いします

スケルトン・クライスト？（前書き）

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』と『スケルトン・クライスト』。この二体のスタンドに、琢磨は逃げ続ける事が出来るのか！
？

スケルトン・クライスト？

広場に生えている木の、太い枝の特に葉が生い茂り人が隠れられそうなスペースはありそうな所に、空き缶が突入する

空き缶は何かには操作されるかのように、その中を動き回る。その時小枝や葉に当たる事でガサガサと音が鳴る

「いないか……」

バイザーを着けた少年は、右手に持つリモコンを操作する。茂みに突入した空き缶が、逆行して飛び抜け、空いている左手に収まった。駐車場の搜索を終えた勝海は、隣のこの広場に向かい、人が隠れそうな空間をこの様にして探りを入れていた

他の場所は既に探りを入れた。せいぜい枝に留まっていた小鳥が飛び出す程度。ここが最後で、結果はこの通り

「ここにもいないのか……」

勝海は視線を自然と駐車場を越えた所に建っている三階建ての建物へと向けていたが、すぐに頭の中に浮かんだその可能性を否定する。確かあの建物は会社で、そんな所に部外者が何の用事もなくずっと居れる訳がない。しかも今はまだ4時で、一般企業はまだ勤務時間

なので尚更だ

ここよりもっと離れた場所にいるとは思えない。当たり前な事だが同じ物を見るとしても、距離とか条件が異なる場合見易くなったり見辛くなったりする。だからこれ以上は現実的ではない

という事は『尋ね人』は何処にいるのか？その答を示すかのように、勝海の視線は『ある方向』に向けられていた

顔面から水を放出し、拳を振るう『サクリファイス・オブ・ヴィクター』相手に、水は当たる箇所を持っていき、拳は奴の腕を持っていく事でやり過ごしました

奴の後ろからは『スケルトン・クライスト』が接近してきており、間の距離を一メートルまで縮めると、後ろに跳び、糊のスタンドを飛び越えました

僕は後退りを始めました。『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は着地すると、今度は接近してきました。普通に歩いているだけです。奴の方が若干速いようで、少しずつその距離を縮めていきま

した
奴が『スケルトン・クライスト』に数センチ前まで近付くと、両者は動きを止めました

次の瞬間、開きっぱなしだった胸部の噴出口から、直線上にいる僕に向けて大量の水を放ってきました

『本当に逃げ回るのは得意だな。自信あったんだぜさっきの攻撃』

奴は広場の垣根の枝を掴んでいるびしょ濡れとなった僕に顔を向けて、そう言いました

水を放出した『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の前にいた『スケルトン・クライスト』は、放たれた大量の水の威力によりバラバラに吹っ飛び、水と一緒に飛び散った糊は僕にあちこち付着していて、そこに触ってしまった葉っぱがくっ付きました

奴の足下に残っていた『スケルトン・クライスト』は、瞬く間に先程と同じ形へと再生し、横に移動し、奴は腕で僕に攻撃してきました
葉っぱを急いで千切っている間に腹部に直撃、痛みを脳が認識すると同時に当たった部分を持っていき、これ以上のダメージを避けました

次に水を噴出している銃口を持っていき、僕の体を元に戻すと同時に移動した時、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』はその能力で僕との距離を一気に詰め、拳を円を描くような動きで振り下ろしてきました

僕は数メートル後方まで距離を持っていく事により自身を移動させてそれを回避。僕のいた地点はそれにより深く抉られました

体を上げると、腕を振りかざして僕に向けて飛びかかってきました。接近して拳を打ち出すと同時に、僕は持っていった距離を元に戻し

ました

その瞬間、先程の奴の攻撃で出来た穴に右足がはまり、バランスを崩しましたが倒れる方向へ左足を前に出して体勢を立て直しました。はまった右足を穴から抜くと、眼前には『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の拳が迫ってきていました。先程同様、数メートル後ろまで距離を持っていった移動させる事で回避。奴は移動した僕に接近してきました

半分まで詰められたのでその時点で能力を解除しようとして

それを止めました。僕の視点は、僕が能力を使う前にいた地点に向けられました

僕の眼前に立った『サクリファイス・オブ・ヴィクター』も、何故能力を解除しなかったのかが不思議なようで攻撃を加えずに僕をじっと観察していました

そして、僕の視線を辿るように首を後ろに向け、一瞥すると首を戻しました

『ほんの数日前に目覚めさせたばかりなのに中々気が利くじゃねえか。お前もそう思うだろ須藤琢磨あー……』

「ええ、同感です」

目一杯皮肉を込めて同意しました

僕が目を向けていた先　僕が先程いた地点には、『スケルトン・クライスト』がいたのです

『どうする須藤琢磨。能力を解除したらその時点でお前は糊付けされて身動きが取れなくなる。能力を解除しなければお前はここで俺にボコボコにされる……』どっちを選んでも結果は変わらないがな』

確かに、距離を持って行って移動した場合、そこから大きく動く事は出来ません。距離と言うのは、いわば地点と地点の『間』。僕はその『間』を、能力で一時的に取り払っているだけに過ぎません

通常の歩きの歩幅で数歩単位なら問題はありませんが、それ以上『移動したその地点から距離を取ってしまう』、つまり更に間を空けてしまうと、自動的に移動する前の地点まで戻されてしまうのです。当然自分と離れている物を繋げての瞬間移動も出来ません

故に奴も言った通り、僕にはこの二つの選択肢しかなく、そしてどっちを選んだとしても結局ボコボコにされるのは変わりない為、選べるのは数メートル離れた程度の二つの場所の内どちらかという事だけとなります

『決めたか？』

「急かさないで下さいよ。今考えているのですから……」

『まさか時間稼ぎか？自分が考えている振りをしている間に比留川勝海が『スケルトン・クライスト』の本体を捜し出してくれると？言っておくがお前に考える気がないのなら俺が決めて……』

「そんなつもりは全くありませんよ。本当に真剣に考えているのですから黙ってて下さい」

これは本当です。現在僕は、かなり真面目に、必死になって考えています

但し『ボコボコにされるならどっちがいいか』ではなく、『如何にして逃げ道を切り開くか』をです。勝海君にあんな見得を切った手前、逃げるのを簡単に諦めたら示しがつきませんからね

能力を解除しなければロクに動く事が出来ない以上、まず最初になんな行動を取るかは言うまでもなく能力を解除する事

しかし、その先には『スケルトン・クライスト』が待ち構えている為、それに対しての対策を考え付かないといけません。何せあの糊の接着力はかなり強力で、一度くっ付いたら人間の力では引っ剥がす事が出来ないからです……

(引っ剥がす事が……出来ない？)

そこに引っ掛かった僕は、一度道路とくっ付き、勝海君の助力で自由となった自分の右足、正確には舗装の一部が糊によって引っ付いた靴底を見下ろしました

そしてそれを見て、幾つもの『身近で当たり前な事』に改めて気付
き、それで逃げる為の策を頭の中で構築しました

それはすぐに終え、顔を上げて『サクリファイス・オブ・ヴィクタ
ー』と目を合わせました

『答えは決まったみたいだな……で、どっちだ？』

「それはですね……」

少し間を空けて、僕はたった今用意した答えを口にしました

「貴方達の用意した選択肢の先にある、僕の用意した逃げ道にです
よ」

宣言して僕は右足を上げて能力を解除しました。僕は移動する前の、
『スケルトン・クライスト』が待ち構えている地点に戻りました。
同時に体を支えている左足に、右足にも感じた感触がしました

僕は即座に行動を起こしました。左足に履いている靴を脱ぎ、その
場でジャンプし、左足も右足同様に上げてガードレールの一部と右
手を持っていつて瞬間移動。直後に右足を勢い良く伸ばして着地し
ました。舗装の凹凸と吸収した太陽熱が直に伝わってきて、この時
靴の有り難みを改めて実感しました

少し時間をおいて左足を地面に乗せました。試しに爪先に力を入れると、踵は上がりました

僕が気付いた事は、本来は疑問に持つ事もない位に、本当にごく当たり前な事です

まず、何故『スケルトン・クライスト』は固まらないのか

通常、糊というのは容器に容れられています。その大きな理由はそのままだと固まってしまふからです。体その物が糊という『スケルトン・クライスト』に容れ物なんてありません。だからその体の一部が『スケルトン・クライスト』から離れる事でそれは糊としての効力を得ると考えました。靴を脱いだのはその確認の為です

他には、『糊は乾くまでに他の物を引っ付けないと意味が無い』。今まですぐにくっ付いていたという事は『スケルトン・クライスト』の糊は即効性がそれに近い物。逆に言えばすぐに乾くからそれまで何も触らないようにする時間が短いという事です

そして、『糊が引っ付いていなければ何に触ろうがそれだけではくっつく事はない』という、一番当たり前な事。この三つに気付いてこの手段を思い立ったという訳です

「お分かり頂けましたか？」

『ああ分かったよ』

そう答えると、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は『スケル

トン・クライスト』に右手を突っ込み、猛スピードで僕に接近し脇腹に掌打を打ち込もうとしてきました

僕はそれを回避すべく、脇腹を持っていきました。しかしそれは失敗でした

その手首までが空洞に入ったと同時に、掌の向きを変えて断面を覆い隠すように僕の体を掴んだのでした。先程僕を掴んでいる右手を『スケルトン・クライスト』に突っ込んだのは、僕の能力を制限させ、僕を逃がさないようにする為だったのです

そのまま右腕を掲げる事で僕の体を持ち上げ、僕が何かしようとする前に水の中に飛び込んだのでした

入ってみて気付きましたが、この水路は水深が結構深く、背の高い成人男性が爪先立ちしてどうにか頭頂部が出るんじゃないかと思える程でした

底までの距離が60センチ近くの所まで潜水すると、それを保ったまま鮪を思わせるスピードで遊泳を始めました。いや、ただの遊泳ではなく、回遊と言っていいでしょう。ある距離まで進んだらUターンし、その方向にもその距離分まで進んだらまたUターンを繰り返しているのですから

指にくっ付いているのは僕自身でなく、僕が着ている上着な為脱ぎ捨てようと思っても指先に力が込められていてそれは出来ません。底の方にある割れた瓶か何かを拾おうとして腕を伸ばしても、届きそうに届きません。これは精神的に結構キツイです

必死に押さえていた肺の中の空気が、一気に吐き出されてしまいま

した。全身から力が抜けていき、感覚も薄らいでいきました

(どうやら……僕はここでリタイヤみたいです……)

死を覚悟して瞼を閉じようとしたその瞬間、僕の体が浮上しているのが、景色の移り変わりから分かりました。それも引きずり込まれているのと同じ速度の為、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』が引つ張り上げているのだと理解するのは簡単でした。無論それは意図的ではなく、僕が引つ付いていて、焦っていた為外していない、必然的な事だと言っるのは分かっていますが、そうせざるを得ない程の事はどういう事なのか、何が起こったのかは見当が付きませんでしたが、僕の視界が水から出た時にすぐに目に入った『空を飛ぶ自販機』を見て、察する事が出来ました

その瞬間、僕の視界が、バケツに入れた水に墨汁を少しずつ垂らしていくように徐々に黒で塗り潰されていきました。限界が達した、という事でしょう。そして意識が無くなるうとした時

(?)

微かに、しかし確かに、胸部から圧迫感を感じました

暫くすると体の中に溜まっていた水が吐き出され、視界に色が戻ってきました

まだ感じる圧迫感は何だったのかと見下ろすと、腕だけ発現した自

分のスタンドが、胸部を圧迫しているのが目に入りました

「有難うございます。お陰で助かりました」

スタンドの腕を引っ込めると、奴に向かって皮肉を目一杯込めて頭を下げながらこう言いました

スケルトン・クライスト？（後書き）

『当たり前な事だからこそ気付きにくい』、『単純故に思い付くのが難しい』、琢磨の『スケルトン・クライスト』への対策は正にそれですね

次回は決着予定！これからも宜しくお願いします！

スケルトン・クライスト？（前書き）

二体のスタンドとの逃亡劇、終幕！

スケルトン・クライスト？

「本気で駄目かと思いました。死も覚悟しましたよ。高校生の頃友人の付き合いで宝くじを買ってそれで百万円当たった事がありますがこれはそれ以上ですよ。自分が強運だと強く思ったのはね……」

実際に強運ですよ

僕のスタンド『SHUFFLE』が死にかけの僕に圧迫して水を吐き出させたのは、生き物にある生存本能がスタンドを動かしたと解釈するとして、その『SHUFFLE』が人型でそこそこパワーが無ければ、僕はこうして息を吹き返していたりはしなかったでしょうしね

『くっ』

水路を渡りきろうとしている勝海君に腕の銃を向けて、水を放出。それは乗っている自販機に直撃し、勝海君は投げ出されて水の中へ落ちてしまいました

そして『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は、勝海君へと突き進んでいきました。糊で上着がその指にくっ付いている僕も、引っぱられて引き摺られます

まあ、そう動くでしょうね。最初からそう動くだろうとは思ってま

した

だから僕は、『くっ付いている上着』を脱いで能力を解除し、大急ぎで僕と勝海君の腕と勝海君が渡ろうとしていた向こう側のガードレールの一部を持っていつてそれを勝海君の手に握らせ自分も握った後、解除。それによつて僕達は向こう側に上陸。僕は水路側でしたので急いで跨ぎました

「大丈夫？」

「ええ……それより勝海君、君がここに向かったという事は……」

「うん、あつちを調べたけど何処にもいなかった。つまりこっちにアレの本体がいる！」

まあ、その結論に達しますよね……

そしてそれは奴のあの慌てぶりからして間違い無いでしょう

「それより勝海君。随分タイミング良く出て来ましたね」

「いやあ……あいつが陸上にいる内は無闇に出てきても攻撃対象がこっちに移るだけだし……だったら奴が水の中に入るまで待とうと思つて……それが須藤さんを水の中に引き摺り込んでというのは想定外だったけど下手に手を出したらかえって危ないと思つて……」

「……………」

後半必死で言い訳をしているようにも取れましたが、僕が彼の立場でもそう思うでしょうし、助かったのは事実なので何も言わない事にしました

遅れて水路から『サクリファイス・オブ・ヴィクター』が這い上がり、『スケルトン・クライスト』が橋を伝ってきました

『お前等……これからどうするつもりだ？』

奴は僕達に分かりきった事を問い掛けてきました。勝海君が返そうとしましたが僕はその口を塞ぎました

さほど気にする様子もなく、奴は言葉を続けました

『お前等が察した通り、確かに『スケルトン・クライスト』の本体はこの近くの何処かに隠れている……だがどう見つけ出す？いや、見つけ出すまでお前等は立っていられるか？』

当然執拗に妨害してくるでしょうね。それもより徹底的に

そしてそれを僕達が振り切れるかといえば、「ノー」でしょう。同じ手段が何度も通用する筈はありません。思い付ける限りの事はやった以上、新しい策が簡単には出て来ませんし、思い付けてもその後……という事になってしまいます

それに『尋ね人』である『スケルトン・クライスト』の本体がこの近くにいる以上逃げる範囲は限られてきますし、第一『捜す』という行程が入る以上、逃げる事に徹する事が出来ない訳ですからね……

「その心配はありませんよ……僕達は捜しませんから」

「え？」

僕の発言に横にいる勝海君が目を丸くして驚愕の声を上げました

「不安が多いのもありますが、第一にその不安は全て僕達が『捜す』という行動に出た場合の不安。つまり捜さなければその不安は抱く必要はありません。だから捜さないと言ったのです」

『言っている事は凄く良く分かる。それで俺からも質問があるんだが……』

「何ですか？」

『何でお前はそんなに余裕そうな顔をしているんだ？』

「やだなあ……捜そうとしないだけで見付けるのを諦めた訳じゃありませんよ。こうすればいいのだから」

僕は横の木の殆どを持っていき、切り株と同じ姿にしました

「かくれんぼが成立するのは、そこに隠れる事が出来るスペースが存在するからです。ですので、それをこうして取り除く事でこのかくれんぼを終わりにします」

僕が歩き出すと、慌てた様子で『スケルトン・クライスト』が僕に接近してきました

「言っておきますが僕のスタンドの射程距離は百メートル……動きを封じられてもその範囲にある物は持つていく事が出来ますよ……まあ射程距離にある物を一気に持つていく事は出来ませんので、君が隠れている所に到達するのに時間はかかるでしょうからそれまでに君達が僕を倒せば確実に、別の方法を用いればもしかしたら逃れられますよ？」

何処に隠れているのか分からない敵に、僕は満天の笑みを向けました

その間にも休まずに持つていく僕に、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は右拳を振るってきました

僕は右拳が当たる部分を持つていってダメージを避けましたが、同時に顔面が展開して間をおかずにそこから水が放たれ、顔面に直撃しました

倒れる僕へと『スケルトン・クライスト』が接近してきているのがブレた視界の中に入りました。瞬間移動をするのは頭に浮かびまし

だが、何を持っていけばいいのかが纏まらない中、右手首が何かに砕けると思える程の強い力で掴まれ、引っ張られました

尻餅をついて視界がはつきりした時に、足が糊付けされた勝海君が目に入ったのと右手首の痕と痛みから彼が身代わりになってくれたのを認識、理解しました

その瞬間、ガサゴソという音が、微かながら耳に入ったので、音源へと体を向けました。そこには他の木よりそこそ高い木が聳え立っており、首を上げると上から下へと下るように葉が動いていました

『サクリファイス・オブ・ヴィクター』は僕に殴りかかってきました。僕はそれを自身の一部を持っていく事で避けて元に戻すと、その木を持っていきました

「ふわっ！」

可愛い声と一緒に、小さな人影が落下してきました

落ちてきたのは、女の子でした

歳は十歳前後辺りの、クリーム色のポリウームのある、ふわふわした感じの長髪に緑色のベレー帽を被り、右肩にクリスタルのイルカのブローチを付けている、黒を基調としたセーラー服とゴスロリ服を合わせたようなデザインの服を着たその少女は、立ち上がるとキョロキョロと首を動かしました

「どつやらあの少女が、『糊のスタンド』の本体らしいですね」

『貴様、まさか……』

「ええ、最初からそのつもりでしたよ。始めの頃にした発言もこの為です。まずゆっくりと取り除いて余裕を徐々に削っていき、粗方取り除いて見つけられなかったら『今隠れている場所から移動させる為に』僕は自分で隙を作るつもりでした。つまり水が顔に当たったのは純粹に反応が遅れたからです」

状況を把握しきったのか、少女は首を動かすのを止めるとここから逃げ出すべく走り出しました

僕が追い掛けようとすると、奴は展開した腕と胸と顔から水を放ちました。当たる前に僕は自分の右手と彼女の背中の襟を持っていて、右手で襟を握った後解除して、彼女の背後に移動しました。襟を掴んでいたのが、彼女の動きは止まりました。僕は彼女の正面に移動しました

「えっと……今の内にスタンドを解除してくれませんか？」

「う……」

「素直に解除してくれたら何もしませんから」

「ほ……本当に？」

「ええ」

体を震わせて涙目で僕を見上げる少女に、笑顔でそう言いました

瞬間、『サクリファイス・オブ・ヴィクター』の怒声が響きました

『何をしている！今がチャンスだろうが！さつさと』スケルトン・クライスト』でこの男の動きを封じ込める！』

その鬼気迫る声に、より大きく震え、女の子はとうとう目尻から涙を浮かばせました

『聞こえなかったのか！さつさとやれって言ったんだよ！』

「あ……………う……………ス……………」スケルトン・クライス……………」

自分のスタンドを動かそうとした瞬間、僕は彼女の首に手刀を当てて気絶させました

本体が気絶した事で『スケルトン・クライスト』は消え、倒れそうな彼女の体に腕を回して横にしました。ついでにもう必要ないので持っていた木等を元に戻しました

『くっ……………』

奴は僕に背中を向け、急いで水路に飛び込んで逃げ出しました

「結局逃げられちゃったね……」

「まあ、あのまま続けていたとしても僕達では勝つ事は出来ませんでしたし……お互い命があった事を良しとしましょう……」

『サクリファイイス・オブ・ヴィクター』が逃げた後、気絶していた女の子を交番に届け、僕達は家に帰る為に若干赤く染まった道を歩いていました

暫く歩くと、コンビニが目に入りました

「アイス食べます？奢りますよ」

「食べるー!!」

笑顔で両手を挙げて嬉しそうに答えました

購入した後一つを勝海君に渡すと、すぐに美味しそうに頬張りだしました

「それにしても勝海君、握力強いんですね。未だに痛みが引いてま

せんよ」

「あーごめん。とっさだったから力の加減が出来なかった」

「いいですよ助かりましたし」

封を開けて食べようとした時、既に自分のアイスを食べ終えた勝海君が物欲しげに僕のアイスを見ていました

「……勝海君？」

「何？」

「まだ食べたいのですか？」

「うん」

即座に迷いなく返事をしました

まあ家に帰ってすぐに夕御飯を食べればいいかと思い、僕は勝海君にアイスを渡しました。勝海君は僕にお礼を言うと、嬉しそうな顔でペロペロと舐めてました

本体：衣笠折絵 きぬがさ おしえ

再起可能

スタンド名：スケルトン・クライスト

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
...

スケルトン・クライスト？（後書き）

まあ、無事勝利しました……

僕は執筆には時間を食う方ですが、今回の話は普通以上に食いました

次回も宜しく願います！

瀬上除夜の退院祝い（前書き）

琢磨と勝海が『サクリファイス・オブ・ヴィクター』を退けた翌日、遂に待ちに待った日が訪れる。

瀬上除夜の退院祝い

俺は今、若干困惑していた……

「どうしたの除夜君。こんな所で突っ立って。久し振りに帰ってきたからって自分の家なんだから何の遠慮もする事ないよ」

「ああうん。確かにこの家は俺が物心ついた時から住んでる孤児院だね。場所も外装も何も変わってない」

「ほんの二週間足らずでそんな変わる筈がないでしょもつ」

「あーそうだよねえ。俺がいなかった期間はほんのそれ位だから、『普通』はそんなに変わる筈がないよねー」

『普通』の部分を強調し、俺は笑う。義母さんも一緒に笑う

「それなら改めて聞くけど義母さん……」

そして、俺は人差し指で前方を差した

「何でここは俺が入院前とこんなに変わっているんだよ！俺がいなかったのってほんの二週間足らずだったよな？」

人差し指の先の部屋

リビングは大きな変貌を遂げていた

壁にリースやら星空のような模様の織物やら伊勢海老の絵が描かれた掛け軸やらが掛けられていて、蛍光灯だった笹の天井の電灯はシヤンテリアに変わっていて、ポトスやサボテン等の鉢植えが長机の上にポツポツと置かれていたり、『除夜君の退院祝いパーティー』とでかでかと書かれた電飾のついた看板やくす玉まで下げられていたり、誰が見ても装飾過多と思える程飾り付けが施されていた

長机の上には、おにぎり、ちらし寿司、焼き鳥、唐揚げ、ローストビーフ、フライドポテト等、様々な料理が載せられた大皿がずらりと並べられている

高校生の息子への祝いにしては、その全てが明らかに度を超えていた

2055

「その僅かな期間で何でもここまで変える事が出来たんだよ！」

「正確に言えば昨日からですよ準備を始めたの」

「じゃあ尚更だよー！」

「いやーつい少し張り切り過ぎちゃって……」

「明らかに目一杯張り切り過ぎてるよ！何が原動力になったんだよー！」

「除夜君が帰ってくる事への嬉しさだけど」

「俺は今回のほんの少し前を含めて過去何度か入院しているがこんな豪勢なのは初めてだぞ！」

「分かってないな。君が帰ってくるのを喜んでいる人間はあたしだけじゃないって事に」

「は？」

「一日でたった一人でこんな飾り付け出来る筈ないでしょ。ウチの子にも少し手伝って貰ったし、他にも手を貸してくれた子もいたしね」

「誰だよそれ……」

『今日はー』

複数の聞き覚えのある声の挨拶の後、玄関の扉を開く音がする。玄関から宝来、本荘、古賀、勝海、琢磨、吉祥寺、目黒、松任先輩、清水先輩が来て、少し間を空けて稲庭が越廼を引っ張って入ってきた。一番最初に入ってきた宝来がジューズの入っている買い物袋を義母さんに渡す。勝海は俺を見ると目を輝かせて飛びついてきたので頭を撫でてやった

「この子達も手伝ってくれたのよ」

「あーそれならこの盛大な飾り付けも納得。誰も途中で止まらなかつたのか以外は」

「言っておくけど私や須藤さん、吉祥寺君や目黒君とかは途中で止めたわよ」

俺の呟きに即座に反論してきた。うん……お前等はそうだろうな

「今日はー、メシ食いに来ましたー」と会長が来訪してきた

「瀬上君退院おめでとう。あ、後これ返すわ。貸してくれてありがとう」と御厨先輩が病室から持っていった漫画本を持ってきて

「瑪瑙さん、一緒にお食事しましょー」と、土浦は来た途端宝来の横に移動し

「除夜のお兄さん退院おめでとう」と、ひまわりと草加煎餅を抱えたしんのすけが見た事のある（内二人はかなり）同年代の少年少女五人と一緒に訪問してきた

「お勤めお疲れさまです」と、ロンディネがシャンパンを持ってやってきた

「おい瀬上何突っ立ってんだよ。主役がそれでどうすんだよ」

紙コップにガラナを注いでいる本荘が俺の気持ちを知ってか知らずか、こんな事を言い出した。反論しようとするがその前に勝海が俺にコーラを注いだコップを渡した。受け取った後改めて反論する為に口を開けたが、

「それでは、除夜君の退院を祝って、かんぱーい！」

『かんぱーい！』

言葉を発する前に義母さんが乾杯の音頭をとり、みんな並べられた食事を取り始めた。反論のタイミングをすっかり失った俺は、コーラと一緒に言葉を飲み込んで琢磨を連れて客間に向かった

「つまり……そいつは何も知らなかったと」

琢磨はコクリと肯く

昨日琢磨と勝海は奴と戦ったと聞いていたので、奴がその時組んでいたスタンド使いの事を含めてその詳細を本人から聞いていた。あの中には無関係な人もいたので、離れた客間で

「彼女には自分に関しての情報は一切与えていなかったみたいです。『矢』で射られた後無理矢理言う事を聞かされていただけと……」

「つまり進展はなかったと……」

「強いて言うなら奴が更に力を付けていた事、でしょうかね」

「ホントもどかしいっいたらないな……仕方無い、飯食い再開しよ。この気分をスカツとさせる」

「そうですね」

話を終え、俺達は騒がしいリビングへと戻った

その後藤方やら内地さんやら塩屋やら庚やら栢下先生やらが来て、より賑やかとなった。中盤辺りに来た校長が持参したワインをしんのすけに注いだり（俺や宝来が止めて未遂で済んだが）、稲庭が大皿ごとローストビーフを取った為越廼が叱りつけて会長がその隙に半分取ったり、松任先輩がカラオケセットを引っ張り出して演歌を何時も通りわざと音程を外して熱唱したり、しんのすけと藤方が清水先輩の作ったプリンを取り合いトオルに仲裁されたり、義母さんと栢下先生がシャンパンで酒盛りしたりと、もう俺そっちのけでどんちゃん騒ぎだった

これを見て、自然と表情が弛むのを実感した

そんな俺の持つコップに、宝来が番茶を注いでくれた。俺の顔を覗き込むその顔は、何処かにやけているように見えた

「どうしたんだよ？」

「いや、瀬上君は今どんなお顔をしているのか拝見しよう……」

「お前……意外と趣味悪いんだな……」

「いや、興味出たんだよ。だって瀬上君中学時代は私達しか友達いなかったし小学校時代に至っては沢登君一人だけだったから自分の為に大勢の人が集まってくれて初めてだろうから……」

「お前はどっと思った？」

「すっごく嬉しそうだと思った」

その顔を本心からの笑顔にして、そう言った

「その通り、すっごく嬉しい。こんなにいいものなんだな」

俺も笑顔でそう返した

「ただ……」

「？」

「あいつ等のあの様子を見ると、バカ騒ぎをする為の口実に使われたとも取れるんだが……」

「それに関しては、コメントは出来ない……」

結局、この俺の退院祝いを称したちゃんちき宴会は深夜まで続いた。

途中、黒服にサングラスを掛けた、如何にもボディーガードな風貌な人がしんのすけが連れてきた一人の少女に帰るよう言っていたが、少女が何か言っていると汗をかきながら打って変わってみんなにお酌をしたりしていたのが非常に印象に残った

騒ぎ疲れて結局みんなウチに泊まった。翌日親御さんにそれを知らせていなかった面々が大目玉を食らった事は、言うまでもなかった

翌日の夕方

「ふー、今日もいい汗かきましたな」

道を歩くしんのすけは全身が汚れていた。何時も通り幼稚園が終わった後、トオル達と共に泥んこになるまで遊んでいたからである

丁字路を右に曲がった途端、事件は起きた

「あ」

女子高生の持つペットボトルの噴き出した中身が、しんのすけは頭上からそれを浴びた

「う……うめんー」

残った中身を飲み込むとその少女は急いでしんのすけに駆け寄り、ハンカチで顔を拭いてあげた

「本当にごめんね。家近いから来て。代わりの服用意するから」

「えっ？別にそこまで……後十分で家に着くし……アクション仮面も……」

「あーもー！子供が一丁前に遠慮なんかする必要は無いつてば！服に染みが出来ちゃうし炭酸って糖分が多いんだからベタベタして気持ち悪いでしょ！テレビだって好きなの観てていいからさっさと来る！」

「ほ……ほい」

気圧されて返事をするしんのすけ。女子高生はしんのすけを引っ張って自分の家へと向かった

「代わりの服脱衣所に置いてくからね」

シャワーを浴びているしんのすけに、女子高生が引き戸越しに声を掛けた

遭遇したT字路から早歩きで三分の所に、彼女の家はあった

築十数年程の1LDKのアパートの二階の非常階段と隣接する部屋。そこが、彼女の住所だった

シャワーを止め、浴室から出てタオルで体を拭いて用意されていたTシャツと短パンを着る。大人用だった為どっちもぶかぶかだった着用すると、上がったら来るようにと言われていた部屋へと向かった部屋のテーブルの上には、温かい紅茶とお茶請けのクッキーが用意されており、テレビのリモコンも置かれてあった。しんのすけは落ち着かない様子で紅茶を飲んだ

「紅茶美味しい？」

「お……おっ……」

「アクション仮面観ないの？」

「そうなんだけど……ここちょっと落ち着かなくて……」

「どうして？」

「言いたいんだけど言ってもいいのかなあって思っちゃって……」

「どうしても気になるんなら口に出せばいいじゃん。言わないでそんな態度を取られているとこっちも気になっちゃうよ」「

「それなら言うけどさ……何でここ、所々にこんなのが飾られているの？」

しんのすけの指差す先　テレビの上には、額縁に納められた『赤いジャージ』が、立て掛けられていた

それだけではない。ここには廊下やら玄関やらに、同じ様に額縁に納められた様々な色やサイズ、メーカーのジャージがあちこちに飾られていた。勿論しんのすけが先程シャワーを浴びていた浴室も例外ではなかった

女子高生はよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに目を輝かせ、勢い良く立ち上がった

「それはね、私はジャージを愛しているからよ」

何の躊躇いもなく、ハッキリとそう言い放った

「私はジャージは人類の生み出した最高の衣服だと信じている。着る者は老若男女選ばず、丈夫で、運動着としても作業服としても寝間着としても普段着としても使えるというその数多の用途。それは最早芸術と呼んで遜色ないレベルの……」

ジャージについて熱弁する女子高生だが、しんのすけは彼女が何を主張しているのか分からなかった。何とか理解出来たのは、この少

女が本気でジャージという衣服をこよなく愛しているという事位だった。それは言葉だけでなく、今彼女が着ている衣服にも表れているのを、今気付いた

彼女の着ているのは、一見普通の制服のように見えるが、よく見ると服の作りが制服というよりジャージのそれっぽいし、ファスナーがついている。ジャージを制服のデザインに仕立てたのだろうか

アクション仮面の内容は、あまり頭に入らなかったので、録画予約してあったから帰って観ようと思った

「あれ？えつと……」

「野原しんのすけ、しんちゃんって呼んでいいぞ」

「私は塔ノ沢紗弥（とうさきやま）。ごめん。自己紹介遅れたね。それで話は戻すけど、しんちゃん帰るの？」

「そだけど？」

「この格好で？」

「紗弥ちゃんが用意したんでしょ」

「ちょっと脱いで」

そう言った途端、しんのすけは後退る。それにより短パンはずり落ち、脱げてしまった

「何する気？」

「いや、服のサイズ測らせて貰おうと思っただけ。考え過ぎ。というか何を考えたの？」

「オラの口から……言わせるつもり？」

「分かった聞かない……じゃあ測らせてよ。的確な情報があった方が準備しやすいしね」

塔ノ沢は巻き尺を取り出し、採寸を測る。それを終えると別室に向かう

すぐに子供サイズのジャージを持って入ってきて、しんのすけにそれを渡した。しんのすけは最初は難色を示したが、他にないというので渋々着た

「それとこれ、汚したりバカにしたりしないでね。絶対に」

それだけだったが、最後の言葉は強調されていた

ジャージについて熱弁していた様子から特に気にせず、しんのすけは塔ノ沢の家を出た

瀬上除夜の退院祝い（後書き）

今回は前半から中盤にかけてはギャグ色を強く、後半も……あんまり変わりませんでした

次回からの話は、バカバカしいようなと思える話を予定しています
では、次回も宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1245/>

クレヨンしんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ綱玉の示す路

2011年10月13日05時49分発行